Untold Myth

?τ α λ?ν τ η α?μ α

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冒険者となった事は果たして不幸の始まりなのか。

その手に握られている武器を誰に向けているのか忘れてはいけない。

目次

ベル・クラネル
#0―00 失われた眷族の物語 ―― 1
ポラン・ブーニディッカ
#1―0A プロローグ ―― 6
#1―0Z エピローグ ―― 8
#1―01 迷宮都市オラリオ ―― 11
#1―02 アイズ・ヴァレンシュタイン ―― 23
#1―03 他人を助ける事に意義はあるか ―― 34
#1―04 リーダー命令です ―― 45
#1―05 今日は厄日だ ―― 66
#1―06 パーティ ―― 87
#1―07 冒険者依頼 ―― 96
#1―08 保存液 ―― 106
#1―09 リヴェリア・リヨス・アールヴ ―― 116
#1―10 面白い発想 ―― 129
#1―11 更新 ―― 139
#1―12 テンペスト ―― 151
#1―13 奇麗なダンジョン ―― 164
#1―14 ランクアップ ―― 187
#1―15 ドレッドノート ―― 227
#1―16 エクセリア・イーター ―― 263
#1―17 シャクティ・ヴァルマ ―― 301
#1―18 障害者 ―― 322
#1―19 襲撃 ―― 341

#1—20 ヴェーラ 357
#1—21 肉塊 378
#1—22 片翼剣姫 400
ユーカリン・ナナツタエ
#2—0A プロローグ 424
#2—0Z エピローグ 427
#2—01 ある少女の死 431
#2—02 ヴァレン何某 461
#2—03 地に堕ちる剣姫 486
#2—04 アルテミス 504
#2—05 オネイロス 521
ヴェルゼッタ・オリンピア
#3—0A プロローグ 537
#3—0Z エピローグ 542
#3—01 ホワイトエルフ 545
ゼゼナ・シャフラー
#4—0A プロローグ 562
#4—0Z エピローグ 572
ゲッテルデメルング
#5—01 ベル・クラネル 593
#5—02 森の妖精の試験 609
#5—03 ファミリア 630
#5—04 エイナ・チュール 644
#5—05 アリーゼ・ローヴェル 662
#5—06 団員として 680

#5―07　伏字の冒険者 ―― 698
#5―08　メジェド ―― 716
#5―09　ライラ ―― 733
#5―10　ネーゼ・ランケット ―― 749
#5―11　アスタ・ノックス ―― 767
#5―12　冒険者の辞め方 ―― 786

ベル・クラネル
#0―00　失われた眷族の物語

これはかつてあった眷族達の物語
白髪で深紅（ルベライト）の瞳の人間（ヒューマン）の男の子が居た。名を『ベル・クラネル』という。
【ヘスティア・ファミリア】唯一の団員として活躍し、冒険者となってから半年足らずでレベル4まで上り詰めた異例の中の異例――
孤独な戦いを続けて今の強さを得たわけではない。様々な【ファミリア】の眷族達と知り合い、それらとパーティを組んで冒険を今も続けている。
特別なスキルのお陰があるとはいえ神ヘスティアをもってしても異例だと言わしめる成長速度は驚嘆に値する。
頼りない少年は数多の苦難に襲われつつ、それでもしっかりと本拠（ホーム）に帰ってきた。
強くなりたい。
少年は自分の意志で願い、勝利を勝ち取ってきた。
人のよさそうな優しい性格。困っている者が居れば見捨てられないところは相変わらず――けれども、それが彼の良さであり弱点だ。
ただ――
彼はダンジョンで素敵な出会いを求めて冒険者になった経緯があり、その影響からか他の冒険者とは明らかに目的が違っていた。
富と名声を求めるのが基本的な冒険者だ。ヘスティアとてそう思っていた。
「……ヴァレン何某（なにがし）のどこがいいんだか」
駆け出し冒険者が良く陥る失敗の数々をベルも体験してきた。例えば――身の丈に合わないモンスターと遭遇して死にそうになる。
無理な背伸びは何も良いことが無い。それなのに学習能力が無いのか、無茶ばかりする。

本当に困った少年である。

本当に――

通常であれば何年もかかる【ランクアップ】をベルは短期間で達成してきた。ただ一途に――

しかし、今になって思う。

そろそろ頃合いではないかと。

本当はレベル3の時点で伝える筈だった。では、なぜ今頃なのかと問われれば、忘れていたからに他ならない。

それと――知らないままでもいいかな、と思ってしまった事も原因である。

余計な禍根はベルの成長に良くない。そう思ってしまった。

彼が現れる数年前まで居た四人の眷族のことを。

一人は真面目で素直な赤毛の女の子。というか四人とも女の子だった、と独り言ちるヘスティア。

彼女は類を見ない発想力の持ち主ではあったが成長速度に難があった。

二人目は素直な部分は一人目に負けず劣らずだが、性格が邪悪。いや、あれはなんと表現すべきか。

物騒。危うい。無鉄砲。そして、命知らず。

育った環境の影響か、今でも彼女の性格が理解できない。

【ヘスティア・ファミリア】の空気には合わないが立派な暗殺者になっていてもおかしくない。それはそれで祝福すべきなのかは――今更だ。

三人目は性格から人格まで突飛な眷族だった。元王女という出自にも驚いたものだ。

いや、見た目もすごかった。ああいうのが厚顔無知というのかな、と。

傲慢で我がままで偉そうでいかにも友達が出来そうにない。じゃあなんで眷族にしたのかと言われれば――彼女には後が無かった。哀れみではない。きっと。多分。

そして、四人目――

彼女の出自は最初から最期まで異様という言葉が良く似合う、としか言えない。

今までが素直で明るい類（たぐい）だっただけに付き合い方が分からなかった。いや、ちゃんと理解しようとしなかった自分（ヘスティア）が悪いのかもしれない。

色んな【ファミリア】を渡り歩き、最後に頼ってくれた眷族をヘスティアは結局のところ見捨てたも同然なのだから。

盟友の主神と【アルテミス・ファミリア】に面目が立たない、とはこのことだ。

†

誰一人として【ランクアップ】せず。

誰一人として生き残っていない。

喪失ばかりの【眷族の物語（ファミリア・ミイス）】などベルに話せるわけがない。

共通する事柄も因縁めいて腹立たしい。

今のベルもその運命に囚われているようでとても不安を覚えたものだ。また失ってしまう、と――

けれども、今まで苦難は多かったけれど生き残ってくれた。レベルも4にまで上がった。

成長速度が早くてとても不安なのだけれど、彼の冒険を神が否定するわけにはいかない。

今では迷宮都市オラリオでも有名な冒険者となったのだから。

だからこそ、もういい頃合いだと思った。

「ベル君。そこに座っておくれよ」

新しい本拠（ホーム）はなんと豪邸だ。ベルが勝ち取ってくれた。

その豪華すぎる執務室の椅子にヘスティアは座り、眷族であるベルに命令する。ただ、彼を慕う他の眷族たちも一緒なのが不満ではあった。しかし、ベルのパーティの一員だから無下に扱うことは出来ない。

なんとなく元眷族の姿と重なるのは――きっと幻だ。彼らと彼女達は見た目も性格も違う。

なにより生きている。

「……君が慕うヴァレン何某と関わり、死んでいった眷族の物語を語ろうと思う」
「……。ええっ!?」
ダンジョンを攻略する冒険者が死ぬのは珍しくない。それと他の【ファミリア】と関わって死ぬことも。
あまりに大袈裟に驚かれると決意が揺らぐ。
ヘスティアとて好きで話したい話題ではない。けれども、これは次の段階に行くために必要な事だと思ったからこそ、だ。
ベル・クラネルの冒険が瑕疵（かし）で頓挫するかどうかの。
「元々あの眷族（ヴァレン何某）とは因縁めいた付き合いがあったのさ。ベル君が来る前に居た……、四人の眷族達とね」
彼には初耳だった。その筈だが、知っていたとか言われると次の言葉が出ない自信がある。
とにかく、改めて驚かれたものの咳払いで冷静さを取り戻す。
「あの眷族（ヴァレン何某）がレベル5になる前の事だ。君の先輩の話をしようと思う。聞いてくれるかい？」
「は、はい」
レベル4になってもベルは新人冒険者の頃のような雰囲気を持っていた。
普通であればもう少し貫禄が付くのだが、半年という短期間では身体共々成長が分かりにくい。
顔つきが凛々しくなった程度だ。

†

話すと言っても今のベルには――彼らには大したことが無い事かもしれない。けれども命を散らせたヘスティアの眷族であったのは変わらない。
自分はどうして――もっと彼女達と向き合わなかったのか、と思うことがある。
「それからヴァレン何某君は何某君で色々と思うところがあったようだ。ボクは多少の恨み言を言うけれど、君達まで一緒に復讐だの物騒なことは言わないでおくれよ」

「はい」
ベルを除けば複雑な表情で黙るパーティメンバー達。
彼らとは直接の接点は無い筈だと思いつつ、一人一人の顔を改めて見つめていく。
今でも思ってしまう。
彼女達が今も生きていれば絶対にもっと有名になれた、と。
なにせ、一人はヴァレン何某を倒したのだから。
（倒した、というか相打ちみたいなものだったそうだけれど）
今のヴァレン何某は更に強くなっている、とのことなので今更挑戦させようとは思っていない。実際、ベルは何度か戦いあっさりと撃退されている。しかし、それでも追いつき追い越そうと努力しいる。
単なる憧れもそろそろ終わり、かもしれないが――
「じゃあ……、邪魔者（来客）が来ないうちに……。君の知らないボクの……、【ヘスティア・ファミリア】の【失われた眷族の物語（アンノウルド・ミィス）】をね」
弱小【ファミリア】の眷族が【剣姫】に関わり散っていった物語。
彼女達は確かにかの冒険者の敵であった。それは間違いのない事実であり、歴史の一部だ。
それぞれに冒険の意味があり、それぞれが手に持つ武器はかの冒険者に向けられた。
それは果たして冒険者としての矜持だったのか、それとも別の理由があったのか――今となっては彼女達の真意を知るすべは失われてしまったわけだが。
――五人目となる彼を前にして女神は静かに語り始めた。己の知る眷族達の――
【●●・●（アイズ）】『ポラン・ブーニディッカ』の【眷属の物語（ファミリア・ミィス）】へ
【無●（ヤ）・●・●・●（イ）手】『ユーカリン・ナナツタエ』の【眷属の物語（ファミリア・ミィス）】へ
【●●妖聖（リュ）】『ヴェルゼッタ・オリンピア』の【眷属の物語（ファミリア・ミィス）】へ
【●●恋一（ラー）●】『ゼゼナ・シャフラー』の【眷属の物語（ファミリア・ミィス）】へ
『終幕』

ポラン・ブーニディッカ
#1―0A　プロローグ

遭遇

その子との出会いは数多（あまた）の選択肢の一つに過ぎない。
偶然と呼ぶべきなのか。それとも必然だったのか。
どちらにしても出会うべくして出会ったわけではなく、神の奇跡の産物だといえば何でも当てはまりそうだ。
それでも偶然は奇跡と同等の価値があり、また同時に残酷な運命が付随するものだ。
だからこそ、それを私は決して喜ばない。
けれども祝福する。
迷宮都市オラリオでの人生は冒険者となった自分にとって僅かな期間であり、まだ駆け出しであり、長い歴史の一端にぶら下がっているだけ。
世界屈指の大都市だとしても自分は多くを知らないままに生きている。
ただひたすら強さを追い求め、神が管理するファミリアに入り、冒険者としてモンスターを倒し続ける毎日。
人形と形容されるほど人としての感情が抜け落ちていた自分も気が付けばレベル3になる頃には人並みの感情を自覚するようになってきた。
時には無茶が過ぎてたくさん怒られる事があったけれど。
それもまた長い人生を歩む上での通過点だ。
――そう。
人生半ばですらない初期の頃――
生き急ぐ自分が気まぐれで立ち止まった一時（ひととき）――
語るべき言葉は多くない。けれども確かに私は出会ったのだ。
最初の敵（友）に――

モンスターをたくさん殺してきたけれど、人間はまだ未経験。
ちゃんと出来（殺せ）るかな。
向こうは準備万端。
であればこちらも迎撃しなければならない。
そうしなければ自分が死ぬ。殺されてしまう。
これは友達（敵）を殺す物語――
負ければ確実に死ぬ。
いや、迷いが生んだ自業自得の結果。
様々な葛藤があったとしても向かってくる敵は倒さなければならない。私は冒険者だから。だからこそ剣を奮う。
私の冒険はいつも血にまみれている。
それにそれが、それこそが冒険者の本質だ。
それでも乗り越えなければ次に進めない。
強くなる為に。
一つ二つの障害で立ち止まっている暇は私には無いのだ。
そう思いたいだけかもしれない。
記憶に強く残る出来事。
――最初の友達。
華やかな夢溢れるものは結局のところ夢幻（ゆめまぼろし）であった。
人形から人へ。そして、殺戮者へと至る中間。
人に漸（ようや）くなれたかな、と思えた頃に剣を握って相対する事になったのは友達というモンスター。
死力を尽くして戦う事になったのもまた数多（あまた）の運命の一つ。
この出会い（殺し合）も冒険の一つであるならば乗り越えなければならない。
私は冒険者。
――否。
【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインだから。
『＃１―０１　迷宮都市オラリオ』へ

#1—0Z　エピローグ

決着

冒険者の人生は一般人よりも短い。

それは凶悪なモンスターと戦う機会と危険が隣り合う仕事が多いのが原因だ。

その危険に見合うだけの収入があるからこそ冒険者になる者は後を絶たない。

引退した者や危険を回避する人生もあるけれど、夢と希望が詰まっているダンジョンに挑むのは必然のような気さえする。

迷宮都市に住む殆どの者が抱く夢。

その中にあって自分は果たして夢を抱いて冒険が出来たのか。

自問自答を何度も繰り返す。

ごく普通の家庭で生まれてごく普通に暮らし、一人で仕事をこなす為に冒険者になろうとした。

もちろん他に取り得がなく、とっかかりでもと考えた結果だ。

軽い気持ちが無かったか、と言われればきっと『ある』と言わずにはいられない。

この地に富と恩恵を与える神様に嘘はつけない。

武器を持つ以上、危険が付きまとう。

最初から安全志向で物事を進めばよかったのか、というと首を傾げる。

何ごとも様々な分野に飛び込んで自分に合う合わないを決めていく。そういうものだと思っていたから。

迷宮都市『オラリオ』に来て、神様に出会い様々な人達と触れ合って、たくさんの冒険、とまでは言わないけれどいくつかの階層にてモンスターと戦ってきました。

要領が悪く、いつも誰かの足を引っ張ることに——

それでも努力すれば日々の生活が改善していくと信じて頑張ってきた。

強くなるため、――というよりは生活の為が大きかった。
だから、――これは罰なのだ。
ダンジョンを甘く見ていた自分に。冒険者の仕事が気楽なものではないという証明。
命を懸けてお金を稼ぐということは危険度の高い物であり、それに挑戦する数多（あまた）の冒険者は死に物狂いであるのは必然だ。
そこに気楽な小娘が入り込めば良い顔はされない。
――半死半生が日常的であるダンジョンにて私は出会った。
それは形容するならば『光』そのもの。
または――魔性のモンスターだ。
死臭渦巻くダンジョンに現われるものがまともであるはずがない。
けれども危機に陥った私にとっては手を取らずにはいられない。
本能が、身体がその時、私を突き動かした。
その希望（光）を決して離すな、と。
結果論から言えば半死半生の人生は継続中。
前より少しはまともになったかな、という程度。
我が暮らしは未だ、楽にならざり。
都合よく人生が劇的に変化するわけがないのだ。
――そう。
都合よく希望（光）が自分の前に現われるわけがない。
――何処かで私は信じていなかったのかもしれない。
――友達だと勝手に思った罰が当たったのかもしれない。
けれども、やはり申し訳ない気持ちでいっぱいだ。
ここより先に『私（友）』は居ない、と思う。その後もきっと覚えていない。
――ああ。
きっとこれが運命ならば今すぐ死にたい気分だ。
だから、早く逃げて、と言えたらいいのだけれど。
もう手遅れだ。絶望的なまでに。
希望（友）を手放した私の運命を貴女に委ねます。
あと、神様（ヘスティア）、ごめんなさい。

今日は帰れそうにありません。
私の分の夕飯を食べていいので、今日のところは――
『終幕』

#1―01　迷宮都市オラリオ

迷宮都市オラリオは広大な敷地面積を持つ円形の大都市である。
中央には天高く聳え立つ『バベル』という白亜の塔があり、それを『蓋』として地下には広大な『ダンジョン』が広がっている。
このダンジョンにはモンスターと呼ばれる化け物が闊歩しており、日々『冒険者』達と戦いを繰り広げていた。
都市は塔を中心として綺麗に八分割されている。
それぞれの区画ごとに商店などが立ち並ぶ。
住人は『人間』だけではなく犬人、猪人、牛人などの亜人種達、様々な種族が街中を縦横無尽に歩き回っていた。
更に冒険者を束ねる超越存在の神々によって設立された【神の眷属】の派閥争いがそこかしこで巻き起こっている。
街中で頻繁に喧嘩が起きているわけではなく、基本的に神々同士の性格の不一致が起こす騒動程度だ。
もちろん時には大きな戦いになったりする。
その神も見た目は人間と大差が無く、元々は天界に住んでいたが退屈を覚えて娯楽を求めて下界に下りてきたという。
下界に降りた神々は自身が持つ万能の力を封印しているので、地上に居る時はほぼ無力な存在である。

†

廃墟同然の教会の地下で滔々と語るのは黒髪の少女。
ツインテールの髪型に青い瞳、十代そこそこの外見であるにも関わらず豊満な胸を持つ。
寝食を共にする場所としては最悪の場所にやむをえない事情により住む事になった。
説明ついでに髪型を己の眷属に整えてもらっているのは超越存在の一人『ヘスティア』という女神だ。
最近下界に下りてきた新人の神様である。
「１０００年前から生きていらっしゃるのですね」

「不変の存在だからね、ボクら神は。だからこそ地上に娯楽を求めてバカ騒ぎするのさ」

先ほどから神の話しを聞いていたのは赤毛でそばかすが僅かに見える程度の人間の少女。

ヘスティアの眷属第一号である。

当初はすぐに眷属が見つかると思っていたが何故か、声をかけた人間（ヒューマン）や亜人種（デミ・ヒューマン）らに断られ続け途方に暮れていた。それを数週間ほど続けて漸（ようや）くにして了承してくれたのが彼女というわけだ。

「ボクらの目的はただ一つ。娯楽さ。冒険者然り。商業に国家運営。とにかくバカ騒ぎしたいだけ。ただそれだけのはた迷惑な存在ってわけさ」

「出来ました」

お気に入りの鈴が付いたリボンを結ばれ、ヘスティアは至極ご満悦である。

「ありがとう」

神は下界の人間達を眷属にする時、彼らに『恩恵』を与える。

神自身の『神の力（アルカナム）』は天界の規則により使用が禁じられている。それゆえに衣食住の殆どを眷属に養ってもらう形となっている。

神はただ眷属の成長を見守り、時には助けつつ楽しみを得る。

言わば共生関係を築く遊戯（ゲーム）だ。

「毎日のように騒げるわけじゃないから、大人しく娯楽を待つことの方が多いし、無理に急かしたりはしないよ。明日までにダンジョンの最下層に行け、とか……」

「……それは困りますね」

碧玉の瞳を持つ赤毛の少女は苦笑しながら冷や汗をかく。

見た目は少女でもヘスティアは神様だ。その神から要望されれば無理難題でも叶えなければ恩恵を失うかもしれない、と思っても不思議は無い。

人間達にとっては奇跡に近い能力でもあるので。

†

眷族に意味も無くしたわけではなく、きちんと説明するのはどの神

も一緒。
　これから寝食を共にするのだから、とヘスティアは手を振りながら少女を宥める。
　年齢で言えばヘスティアが圧倒的に上であるが外見年齢では人間の少女が上に見える。
　十一歳になったばかりだという少女の名は『ポラン・ブーニディッカ』という。
　人生に目的を見出したわけではなく、ヘスティアが困っていたから眷族になった。――その程度の気持ちしか無かった。
「その歳で働くことは別に珍しくないらしいけれど……。こんなボクの眷属になってくれたからには大切にしたいと思っているよ」
「ありがとうございます」
　あどけなさが残る少女ポラン。
　普通の家庭に生まれ、夢も希望も抱いた事が無い。
　迷宮都市（オラリオ）に来たのは名前の元となっている『ダンジョン』で有名だったから。――他にも理由があればいいのだが、ポランにはそれが無かった。
　たくさんの人間達が集まる中で自分の将来を見据えようと思い立って神に声をかけた。
　夢や希望の話しはこれからだ。
「……まず何をしようか、というのが問題なんだよな」
「そうですね」
　ヘスティアが言っていたように子供の内から働くことは下界では珍しい事ではない。
　ポランより小さい小人族（パルゥム）が冒険者として活躍しているくらいだ。
　見た目で判断されることは少ない。
　才能や能力に秀でていれば幼いうちから働くことも出来る。ただし、神や大人の付き添いが必要な場合が大半だが。
「……君の【ステイタス】は見事なまでに白紙同然。オール０にノースキル。おまけに何の特徴も無い。見事すぎて色をつけるのが勿体ないくらいだよ」

【神の眷属（ファミリア）】の一員になると主神から恩恵がもらえる。
神自身は『神の力（アルカナム）』を地上で使う事が禁じられている為に代理として眷属に『神の恩恵（ファルナ）』を与える。
それが【ステイタス】と呼ばれるものだ。
眷属となった者の背中に神にしか解読できない【神聖文字（ヒエログリフ）】を神の血（イコル）を媒介にして刻み込む。
これらは一般には秘匿され、他人の【ステイタス】を見る事を禁じている。
書かれる内容は神自身が現地の共用語（コイネー）に訳して眷属に見せるので完全秘匿のものではない。

†

毎回、背中に大層な図を刻むわけではなく、血を一滴背中に垂らせば自動的に【ステイタス】が浮かび上がる。そしてそれは神の意思で隠せるので、普段は背中を見られても【ステイタス】まで見えたりはしない。
ただ、何ごとも例外があり、隠された【ステイタス】を強制的に浮かび上がらせる方法があったり、神にしか読み解けない【神聖文字（ヒエログリフ）】を解読できるものが居るとか。
それらに対抗する方法も神の世界で長い期間培（つちか）われてきた。
例えば一部のスキルだけ故意に隠蔽するとか。
【経験値（エクセリア）】を積めば、いずれは各種アビリティの数値は増えていくんだろうけれど……」
ポランは駆け出しの冒険者。まだダンジョンに入ったことさえない。
それどころかギルドへの登録もまだだ。
迷宮都市（オラリア）にあるダンジョンに潜るには冒険者ギルドの許可が必要だ。
モンスターを倒して得る資源を持ち帰り、換金する。その資金を生活費に充てたり、武器防具の購入資金となり、ひいては都市に点在する店舗の収入源となる。
「いきなりダンジョンに潜るのは危ないからギルドの説明はちゃんと

聞くんだよ」
「はい」
冒険者に本登録されてすぐにダンジョンに潜れるわけではない。もちろん、付き添いが居れば可能かもしれないが、初心者はまずギルドの講習を受ける。
武器が無い場合は借りることも出来る。
「他にも眷属が居ればチームを組めるんだけど……。今日までに君以外で眷属になってくれた子が現われないからね～。でも、最初の階層で戦い慣れる事も大事だよ」
ポランより幼く見える神ヘスティアは心配で仕方が無い様子だった。
ダンジョンに潜れば命の危険にさらされるし、守ってくれる者もおそらく居ない。
階層を降れば危険度も上がる。
ギルドは冒険者の命に責任は持たない。ただ、忠告だけしか出来ない。
それでも冒険者がダンジョンに挑むのは様々な理由があるが、大方は金。生活費だったり、より良い武具の購入資金だ。
名声は強くなってから。それまでの道のりは決して楽なものではない。
冒険者の本登録自体は難しくなく、担当のアドバイザーがついてダンジョンの心構えや低階層のモンスターの情報と必要になるアイテムの知識などを教えてくれる。
未踏の深層の情報はギルドでも把握していないが一部の探索系【ファミリア】が度々遠征に赴き、情報を持ち帰ってくる。
先達の努力によって後から向かう冒険者は比較的安全に深い階層を目指す事が出来る。
【ヘスティア・ファミリア】の眷属ポラン・ブーニディッカという赤髪の少女は数日に及ぶ研修の後、必要な武具を借りてダンジョンに挑む。
とりあえず、日々の生活費を稼ぐ。

何か目標がある方が張り合いがあるというので決めた目的だ。
名声を得て有名になろうとは思っていない。
【ステイタス】オール０のポランは剣を頼りにモンスターと立ち向かう。
何でも良いから一匹だけ倒すこと。
モンスターに立ち向かうには生半可な気持ちではダメだと強く言われている。
「一階層に良く出るのは……」
迷宮都市（オラリオ）のダンジョンに出てくるモンスターは基本的に迷宮が生み出す。
壁から止め処も無く。
一度倒しきっても時間経過と共に新たなモンスターが生まれる。
これらのモンスターは基本的に上の階層に上らない。例え上がってきても地上に居る冒険者達に駆逐される。
このダンジョンも神によって監視されているので長い歴史において街がモンスターに蹂躙された事は無い。
「……ふ～、は～。あ～、緊張する……」
一層目にやたらと強力なモンスターが現われた記録は無いが油断をすればもちろん命を失う。その確率は決してゼロではない。
死なないまでも結構なケガを負う事がある。
第一階層から第五階層までに現われるモンスターは『ゴブリン』、『コボルト』、『ダンジョン・リザード』で、駆け出しでも多数を相手にしなければ倒せる程度の強さだ。
最初は一匹ずつ。と行きたいがモンスターは冒険者の都合など考えない。そして、不測の事態が起きるのもダンジョンの恐ろしいところだ。
絶対、ということはない。
命を懸けた戦いなのだから。
時には他の冒険者が敵となる場合もある。
新人潰しも長い歴史において繰り返されてきた。
「……本当に壁から出て来た」

安全の為に一階層の出口附近に陣取ってモンスターを待ち変えていると壁に亀裂が走った。
モンスターは体内に『魔石』を持ち、倒すと『ドロップアイテム』として落とす場合がある。
この魔石がモンスターの動力源となっていてそれを失えば黒い霧状になり、霧散していく。
つまりどんなモンスターも魔石を失えば死ぬ。それは下層に現れる『階層主』と呼ばれる強大無比な力を持つ存在であろうとも。
「グアアァァ」
「ギィィ」
様々な鳴き声をあげて威圧してくる小型のモンスター達。
人間の子供くらいの大きさのゴブリンが二匹。
【ステイタス】がまだ増えていない段階ではケガも覚悟の上。
ポランは剣を振り回す。
剣術は多少、練習した程度で様にはまだなっていない。それでも実戦で経験を積むしかないポランは必死に挑む。
斬るより突く。アドバイザーに言われた事を思い出す。
ゴブリンは飛び掛ってきて爪で攻撃する以外はしてこないので動きを見れば対処は容易い。けれども実戦は想像とは違うものだ。
相手だって黙って殺されたりしない。
モンスターは冒険者を本当に殺す気で襲い掛かってくる。
才能もとりえも無いポランには他に選ぶ選択肢が無い。

†

もたもたすれば新たなモンスターが現われる。だからこそ迅速に、正確に。
と思いはすれど身体は素人同然。
モンスターから攻撃を受ければ痛いし、怖い。ケガして血が出れば動きが自然と鈍る。
「……ううっ」
それでも運よく当たった攻撃でまず一匹を仕留めた。
慣れない動きで身体が異常に重く、疲労が大きい。

ダンジョン内の気温はそれ程高くはないのに汗が止まらない。
ただの街娘がいきなり戦士になれるわけがない。
手が痛い。足が痛い。もう帰りたい。
やる事が無い。だから冒険者になります。
そんな軽い気持ちで始めた結果とはいえ、大変な仕事なのは身に染みて理解せざるを得ない。
どの道、大変なのは最初だけ。
そう説明を受けているのだが、その最初からして絶望的だ。
ここを突破できれば次へと進める。無理なら街中をさまよう毎日の続きが始まる。
戦闘を重ねる事で【ステイタス】の何が増えるのかは冒険者自身には窺い知れない。
数値のようなものは背中にある。感覚でも正確には捉えにくい。
何が増えているのかは戦闘を終えて神様に確認してもらわなければならない。
目の前の戦闘が終わらない限り、次には進めないという事だ。
「たぁ！」
声を張り上げて自分を鼓舞する。
そして、最初の戦闘を終えた。
多少のケガを負ったものの無事に生き延びた。
落ちている魔石を拾って、ひとまず帰還する。
ダンジョンに潜って二時間ほどしか経っていない内に戻ってきたポランに担当アドバイザーは呆気にとられた。
初心者とはいえ安全志向で素直に戻ってきたのは悪い事ではない。けれども、もう少し健闘してきたり、言う事を聞かずに下の階を目指したりするものだと思い込んでいた。
生きて戻って来たのだから、まずは誉めなければならない。
「お帰りなさい」
「ただいま帰りました。アイテムの換金をお願いします」
数個の魔石に唖然とするアドバイザー。
すぐに気がついて換金に入る。

「だ、ダンジョンはどうでしたか？」
「怖かったです」
赤毛の冒険者ポランは確かに十一歳の少女だ。モンスターに立ち向かうだけでも凄い事だ。
それなのに喜べないのは別の【ファミリア】に所属しているポランと同年代くらいの女の子が物凄い活躍をしているせいかもしれない。
安全な戦闘は否定しない。けれども物足りないと思うのはきっと不謹慎だ。
もう少し頑張って死んで来いよ、と言っているようなものだ。
他人と比べるのは失礼だし、今後の活躍に期待するのが正しい。
「はい、３０ヴァリスです。余裕があればまた潜っても構いませんよ。目標を十匹にしましょうか。能力の伸び次第では数を増やしたり、下の階層への挑戦も許可します」
「分かりました。……けれど、今日は初冒険なので神様に報告しに帰ります」
素直な性格なのか。
他の金や名声目当ての冒険者とは違う清廉潔白な様子に驚きを禁じえない。
命を大切にしているところは尊敬に値する。それがこれからも続く事を願うばかりだ。

†

初冒険。初収入。
決して額は多くないけれど自分に出来た初めての仕事だ。
ポランは嬉しかった。
取り得が無い、と言われていたので正直に言えば不安だった。
一人でも生きていけるのか。
何も無ければ野垂れ死ぬしかない。そんな会話を聞いて育ったので。
意気揚々と、とまではいかないが改めて自分の身体を観察する。
弱いモンスターと言われているけれど、いくつか攻撃を受けて擦過傷が無数に出来ていた。

回復手段が無いので無理な戦闘は出来ない。
酷いケガをすれば周りに迷惑がかかるのはもちろんのこと、生きてダンジョンから出られなくなる恐れがある。
暗い世界で孤独に死ぬのはポランにとっては嫌だった。
誰にも頼れず、餓死する未来。
両親と早くに死別した場合の事を常日頃から考えている彼女にとって安全志向こそが自分の原動力である。
両親はまだ存命の筈だが離れて暮らす事になった今は確認のしようがない。たぶん、まだ生きている筈だ。
寄り道せずに【ヘスティア・ファミリア】の拠点である廃墟と化した教会に入る。
「ただいま帰りました」
そう言いながら地下へと降りていく。
利用者はポランと神ヘスティアの二人だけ。実に寂しい【ファミリア】である。
「おっ、もう帰ってきたのかい？」
ボロボロのベッドの上で寝転がっていた幼女体型の神ヘスティアが出迎える。
もう少し時間がかかると予想していたが、思いのほか早くて驚いた。
「無理な戦闘を続けてケガが酷くなっては困りますので。ところで……、ステイタスというものはモンスターと戦わないと増えないものですか？」
小さなテーブルの上に今日の稼ぎが入った皮袋を置く。
「『神の恩恵（ファルナ）』を与えた時点から増え始めるはずだよ。どんな冒険者も最初は０からスタートする。それは等しく平等だ」
「今のまま続けていれば……どういう風に強くなるんでしょうか？」
「それは本人の感じ方次第だよ。ボクが言葉として言うより身体を動かす君自身がどう思い、どう感じるかだね。試しに今日の分の【ステイタス】の更新でもしてみようか。どれくらい増えたのか分かると思うから」

ポンポンとベッドを叩いてポランを招くヘスティア。
見た目はボロいが洗濯はちゃんとしている。その上に乗り、服を脱いで神に背中を見せる。

†

最初の冒険があまりにも早く終わったので数値は大して増えていないと予想する。
早速、針で指先を突いて血を出すヘスティア。それをポランの背中につけて軽くなぞる。
するとまっさらだった背中に【ファミリア】特有のエンブレムが浮かび上がる。
図形はそれぞれの神を象徴するものでヘスティアは竈から炎が吹き上がる模様だ。
【ロキ・ファミリア】は道化師（トリックスター）の顔が現われる。
「……う～ん。……見事に平坦。……ロキの胸の如くだ」
基本【ステイタス】は『力、耐久、器用、敏捷、魔力』の５つ。
それらはランク分けされており、０から９９まではＩ。そこから１００増えるごとにＨ、Ｇ、Ｆと英字が繰り上がってＡへ。そして９００からＳとなる。
数値の限界は９９９。
スキルは眷属次第で何が備わるか分からないものだが、【ランクアップ】するごとに追加されることは分かっている。
欲しいスキルを得る事は難しく、意図的に神が与えることも出来ない。
各種【ステイタス】は基本的に減る事がない。
「力、耐久、敏捷が1ずつ」
冒険者を志す者は比較的序盤から数値の増加が顕著だ。それなのに微増過ぎて逆にビックリだ、とヘスティアは苦笑する。
安全な戦闘をしてきたのであれば妥当かもしれないし、生きて帰ってきたのだから文句を言うわけにはいかない。
スキルの方も空白だ。
「耐久を増やすなら攻撃をあえて受ける……、と言われているけれど

……。今の調子では強くなるまでかなり時間がかかりそうだね」
「そうですか……」
「でもまあ、これからだよ、これから。何にしてもモンスターを倒してきたんだろ？　この調子で頑張りたまえ。……でも、運営費を払う為には少しくらいの無茶は覚悟してくれたまえ」
「はい。頑張ります」
うんうん、と頷くヘスティア。しかし、予想外に【ステイタス】が低い。
今の調子では貧乏【ファミリア】から抜け出すのに何十年とかかりそうだ。
（変に期待して無茶な冒険をされても困る。ボクらはボクらの冒険が出来ればいい）
他の神々から色々とバカにされそうだけど、と小さく呟きながらポランの成長を楽しみにする小さな神様（ヘスティア）。
何にしても【眷属の物語（ファミリア・ミィス）】は始まった。

#1―02　アイズ・ヴァレンシュタイン

レベル3になってしばらく経つ【ロキ・ファミリア】所属の『アイズ・ヴァレンシュタイン』は拠点である『黄昏の館』の中庭で剣の素振りを繰り返していた。

腰に掛かるほど真っ直ぐ伸びた金髪に金色の瞳。

白磁にも負けず劣らずの白い肌を持つ人間（ヒューマン）の少女。

実年齢ははっきりしないが【ファミリア】が暫定的に決めた年齢で言えば十一歳になる。

背はまだ小人族（パルゥム）と同じくらい。見た目とは裏腹にかなりの実力者である。

この歳でレベル3に到達した冒険者は居ない。

冒険者ギルドに伝わる記録の中では最年少にして最速の記録。

レベル2になってから付けられる『二つ名』は【剣姫】である。

戦闘狂とも言われている彼女を畏怖をこめて【戦姫】と呼ぶこともある。

見た目は人形めいた無表情に無愛想だったので最初の頃は人間扱いされなかった。

「……」

細身の長剣に軽装鎧。

見た目は華奢だが中層のモンスターは今の彼女にとって難敵とはいえない。

日々の日課として鍛錬は欠かさず、休憩もきちんと取る。

今でこそ大人しいが最初の頃は毎日のようにダンジョンに潜り、とにかくモンスターを殺し続けた。

仲間達と触れ合い、チームプレイも出来るようになってきた。けれどもまだ一人で戦う事が多い。

「もうすぐ朝食だ」

二階の窓から声をかけてきたのは新緑の髪に長い耳を持つ『エルフ』の中の更に高潔の存在『王族（ハイエルフ）』の女性【九魔姫（ナイン・ヘル）】こと『リヴェリ

ア・リヨス・アールヴ』で、【ロキ・ファミリア】に所属している古参のメンバーの一人。
レベル6の冒険者でもある。
「……うん」
表情少なめに返事を返すアイズ。だがこれが彼女の普段の態度だ。
レベルが増える事を【ランクアップ】といい【ステイタス】の数値が一時的にリセットされる。けれども積み重ねた能力が消えたわけではない。

†

朝食を済ませた後は小休止し、他の仲間達と談笑するのだがアイズは早々に街に出かける。
目的はお気に入りの食べ物の購入だ。
無機質な人形のように見える彼女だが自分の好みはちゃんと持っている。
「……ジャガ丸くん抹茶クリーム味」
「あいよっ。いつもご贔屓にしてくれてありがとな」
行きつけの露天にて購入し、落ち着ける場所で堪能する。それが少女アイズの密かな楽しみだった。
芋を潰して丸めたものにパン粉のようなもので衣を付けて油で揚げる食べ物。迷宮都市（オラリオ）の名物だ。
これは【ファミリア】に入ってから食べた中で一番のお気に入りとなっており、常に戦闘を続けている為に太ることなく今に至る。
「……あまり食べ過ぎると怒られるか……」
しかも朝食を済ませたばかりだ。
軽い運動としてダンジョンに潜ろうかと思ったが、勝手に行くとリヴェリアに怒られるので控える事にした。
アイズは【ファミリア】の中では最年少の冒険者。歳の近い友達は皆無。というよりは友達を作ろうとせず、モンスターを倒すことだけを目的としていた。
強くならなければならない。
【ファミリア】に入る前からアイズが持っている目的意識である。

レベル2までは戦闘狂のように戦う毎日だったが、ここしばらくは休息を取るようにし、無理の無い戦闘を心がけている。それでもダンジョンに潜れば剣を取らずにはいられなくなるが。

まだまだ表情が乏しいアイズも小さな少女。

「……」

十代に満たない内に【ランクアップ】を成し遂げた事で冒険者の間では有名人となっている。

道行く同業者に二つ名で呼ばれたり、時には恐れられたりする。

嫌な噂は聞きたくないが応援されると嬉しくなる。それくらいの心の余裕が今のアイズにはあった。

お目当てのジャガ丸くんを食べ終わった後は嫌いな勉強の続きが待っている。拒否すればリヴェリアの拳骨とお小言が襲い掛かってくる。

実戦だけしたい気持ちを押し込めて【ファミリア】の拠点に戻る事にした。

†

遠征以外の【ロキ・ファミリア】は充分な休息と鍛錬、新人の教育が主な仕事だ。

リヴェリアを含めたレベル6が現在三人居る。

重鎮として、教育係として下の者を導く。

探索系と呼ばれる【ロキ・ファミリア】はこのところ入団希望者が多く、他の【ファミリア】から『改宗（コンバージョン）』した者も居る。

所属する眷属が多ければ【ファミリア】としての地位が高くなる。

主神達はそれぞれ派閥を持ち、他の【ファミリア】と敵対関係にあったり、利害関係にあったり、様々な戦いを繰り広げていた。

神々の目的は主に娯楽。この一点に尽きる。

長い時を生きる神々は退屈を嫌う。その過程で地上に降り立ち、眷属を作り、彼らを導く遊びを思いついた。

神が元々持っていた万能の力『神の力（アルカナム）』を封印し、一般人と大差のない状態で眷属と暮らす。

神自ら武器を持って行動することはなく、また規則として禁じてい

る。
　規則を破れば天界に強制送還。もちろん【ファミリア】は解散される。
「……ダンジョンに行っていい？　……上層階だけでも駄目？」
　暇さえあればアイズはモンスターを倒しにダンジョンに潜ろうとする。それは昔から変わらない個性のようなもの。
　言わば『絶対にモンスター殺すマン』だ。
　少し前のアイズはまさに戦う人形だった。今は自分を抑制する技術を身に付けて我がままな部分は見られない。けれどもダンジョンに向かう頻度は大人と変わらない。
「お前が行くと他の冒険者の取り分が減ってしまう。……もう少し自重（じちょう）しろ」
　金を稼ぐだけの冒険者ならアイテムや魔石を渡せば文句は言われない。けれども【ステイタス】アップを目的としている場合は妨害行為になる。
　冒険者とて規則がある。
　他の冒険者を私怨で殺してはいけない。
　暗黙のルールもあり、自分のモンスターを他人に押し付ける行為が該当する。さすがにアイズはそういう事はしないと思うので心配はしていない。
「しばらく遠征は無いし、勉強も大人しく続けている。上層階ならば散歩で済むじゃろ」
　レベル６の【重傑（エルガルム）】という二つ名を持つ古参の冒険者『ガレス・ランドロック』が髭をいじりながら言った。
『ドワーフ』である為、背は子供のアイズより少し高い程度。がっしりとした体格で、手足は一般の人間（ヒューマン）の二倍ほどの太さがある。
「あまり閉じ込めておくのも不健康というものだよ。誰か付き添いでも居ればいいんじゃないかな」
　同じくレベル６の【勇者（ブレイバー）】で短い金髪の小人族（パルゥム）『フィン・ディムナ』は見た目は子供だがアイズの四倍以上の年齢で、この【ファミリア】を取りまとめる団長でもある。

薄く微笑みつつ彼はリヴェリアに言った。
三人の視線にさらされているアイズは臆することなく話しに耳を傾けていた。

†

いくつかの条件を飲むなら、という事でダンジョンに行く事を許されたアイズは早速身支度を整える。
深い階層に行っていた場合は次の探索に参加させない、と言われれば守るしかなくなる。尚且つ約束を違(たが)えるとリヴェリアの拳骨が容赦なく降ってくる。
見た目は小さな少女だが実力は本物だ。単純な戦力としては手放しで見送る事が出来る。しかし、そこに至るまでの道のりは険しかった。――特にアイズの教育において。
今でこそ大人しい振る舞いを見せているが、ついこの間までは鬼神の如き活躍と形相でモンスターどころか他の冒険者達を震え上がらせていた。
ただひたすらにモンスターを倒す。その一点の目的のみ。
どういう理由があって武器を取ることを選んだのか、アイズ本人は語らない。
それぞれの冒険者の過去を探らない、というのが暗黙の了解でもあるのでフィン達も無理に聞きだそうとはしなかった。自分たちも他人に詮索されたくない事情を持っていたためでもある。
用意を整えたアイズは鼻歌交じりにダンジョンに潜る。付き添いはレベル2の冒険者が三名。――それぞれよその【ファミリア】から『改宗(コンバージョン)』した者達だ。
モンスターが居ればどの階層でも構わなかった。【ランクアップ】したては身体の調子が狂うと言われる。なので無理に下層は目指さない。
すれ違う冒険者を一瞥しつつ適当に散策すると壁に亀裂が走った。
出現頻度はまちまちだが秒単位でモンスターが湧き出すことはない。
小さな身体から繰り出される剣技により、地面に降りる前に駆逐さ

れるモンスター達。
魔石はお八つ代として回収しておく。
そうして二層目へ向かう。
下へ降りる場合は階段や天然の通路を通る。
もっと下層では落とし穴のような状態のもある。
誰が作ったのか、階段もある不思議なダンジョン。その全貌は未だに不明。
調査された範囲であれば地図も作られ、後からやってくる冒険者の役に立てられる。
モンスターが出現する時、壁などが壊れてしまうのだがいつの間にか修復される。
誰かが治しているわけではなく、自動修復機能が備わっていると考えられている。そして、それは実際に多くの冒険者が目撃していた。
潜るたびに様相が変わったりはしない。通路自体もそのままだが隠し部屋のようなものがあるようで、その未踏査の部分を見つけるのも仕事の内となっている。

†

二階層を散策していると付き添いの冒険者の一人『狼人（ウェアウルフ）』の男性は威嚇しながら辺りを見回す。
灰色の荒々しい髪型。敵意しか撒き散らしていないような凶暴さを秘めている。それを不満そうに見ている者は双子の女性。
靴も履かずに平然と石ころが散乱する地面を歩き、一人は冷静に辺りを見回し、もう一人は微笑みつつ仲間の様子を窺っていた。
女性ばかりの戦闘民族『アマゾネス』である。
褐色肌で露出の多い服装をまとっている。力は一般の人間（ヒューマン）よりも高い傾向にある。
「雑魚モンスターしか居ない階層だけど……。どこまで降りるの？」
「……十二階層、くらいかな」
そう言うと壁を蹴り出す狼人（ウェアウルフ）。
普段から機嫌が悪いのだが、今日は一段と荒れていた。
それはひとえにアイズ・ヴァレンシュタインのお守りが原因だと思

われる。
　当分は休暇中とはいえ子供のお守りなど出来るか、と激高したのだが団長である『フィン・ディムナ』の命令が降ったので仕方なく了承した。
　実力主義の【ファミリア】において古参の三名に対抗する力は彼らには無かった。だから荒くれの狼人『ベート・ローガ』は弱者の立場で頭を垂れるしかない。
「あんまりダンジョンを壊さないでよ」
「うるせー」
「……今のはベートがうるさい」
　双子の妹分の方が口を尖らせつつ言うとベートと呼ばれた狼人の少年は不服を漏らす。
　年の頃はアイズより上だが大人というにはまだ幼い印象を受ける。それでも実力主義の【ファミリア】に認められ、【ランクアップ】を控えている最中だ。

†

　狼人という亜人だが顔つきは人間に近く、動物的な部分は頭にある尖った獣耳と尻尾くらいだ。
　アマゾネスの姉妹は姉が腰に掛かるほどの黒髪に対し、妹は短く切り揃えられていた。
　見た目には華奢だが素手でモンスターを倒せる実力を持っている。
　この三人は腕に覚えがあるのだが自分たちより年下であるアイズには一歩出遅れていた。
　単なる1レベルの差ではあるのだが、冒険者の強さを示すレベルは数字以上の落差を生んでいた。
　単純にモンスターを倒していれば【ランクアップ】するようなものではなく、次のレベルに至るには条件がある。それを満たせないまま過ごす冒険者はかなりの数に昇る。
　楽して強くなれる道は無い。
　冒険者は『冒険』をして強くなる。
　つまり冒険をしない冒険者はいつまで経っても弱いまま。

もちろんそれは人それぞれの問題で、決して悪い事ではない。
命を粗末にせず、日々の糧を得る仕事として見るならば。
だが、それでも遥か高みを目指す者からすれば実に歯がゆい事態だ。
「……あ？　血の匂いか？」
「……この先にモンスターが居るみたい」
ベートの鼻にかすかな血臭が感じられ、アイズが気配で状況を察する。
種族や【ステイタス】などの恩恵により、一般人より感覚が鋭い彼らはすぐさま行動に表す。
アイズは剣を。ベートは両手をズボンのポケットに入れたままだが表情を戦闘用に切り替える。――そこに先ほどまでの苛立ちは認められない。
「どこぞの弱者（バカ）がヘマをやらかしたか？」
もし、冒険者がケガをしているだけならば見過ごす。
もし、そうではなく――多数のモンスターにより襲撃ならば撃滅しなければならない。
アイズとしては後者が望ましい。

†

ダンジョンには決まったルールが最低限存在している。けれども絶対ではない。
特定の階数に出現するモンスターの情報は一般に共有されている。それでも極たまに例外が発生する。
ダンジョンに冒険者が潜るようになって数十年が経過しているが未だに全貌がつかめない未知の世界。
「あー、居た居た。ゴブリンに襲われているみたい」
「……というより……。倒れている冒険者のそばに居るだけみたいね」
暗い洞窟内でも遠くを見渡せるのは阻害するようなものが無いお陰だ。
ダンジョンの中は基本的に不思議な光が最低限灯っている。それ

は天井やの穴や隙間から覗く妖しい光。
『魔石』の輝きとも言われている。
「こんな所で死ぬ奴は聞いたことねぇぞ」
ベートの苛立ちを察知したモンスターがアイズ達に気づき、威嚇してきた。
身体の大きさはおよそ６０Ｃ（セルチ）。引っかき攻撃くらいしかとりえの無い定番のモンスターと言える存在だ。――それ以外のモンスターの姿は無かった。
襲ってくる者は撃滅する。――ベートはやる気を無くしたのでアイズが瞬く間に討伐した。ほぼ一撃で。
全力を奮うまでもなく、実に呆気ない幕引きだ。
「……で、こいつをどうするかって話しだが……」
倒れているのは血で赤いのか、地毛なのか。とにかく赤い髪の毛の子供。――ベートから見た感想では。
それとモンスターの唸り声のような音が聞こえてきた。しかし、周りからは既にモンスターの気配は感じられない。
「きっとお腹の音だよ。空腹で倒れたところを襲われたって感じだね」
「……でも、背中とか血まみれになってるわよ」
「傷自体は……浅いと思う。……おおっ」
アマゾネスの妹の方が鼻につく異臭に気がつき、ベートも壁を見て鼻をつまむ。
「……これは胃液だな。こいつの……」
吐いてからまだ時間が経っていないせいで匂いが残っていた。
アイズは臭（くさ）いと呟き、我慢しつつ辺りを確認、調査した。
結果として異常は見当たらない。
冒険者が空腹の為なのか、気分を悪くしたのか、嘔吐した。それから目眩でも起こして倒れて――その後なのかは分からないが――モンスターに襲われていた。
そういう状況になったと推測する。
「まだ若い冒険者って感じだけど……。あれだね。貧乏だから？」

あははと笑いながら言う妹の頭を姉が手刀で突っ込みを入れる。
見た感じでは死んでいないようだ。――息があるので。あと、お腹の音が煩い(うるさ)。
目を回している為に起きられないのであれば誰かが地上に運ばなくてはならない。
意識がある冒険者ならいざしらず、洞窟内で倒れて身動きが取れない者は可能な限り救出しなければならない。
時には依頼として出される『冒険者依頼(クエスト)』になる。
「……ギルドに届けてくるわ。その間、三人で先に十二層に向かってちょうだい」
本来ならば回復薬(ポーション)などを使うところだが、仲間でもない他の【ファミリア】の場合は見過ごす事が多い。――特に敵対【ファミリア】の構成員を助ける義理は無い。
【ロキ・ファミリア】として出来る事はダンジョンを管理する『ギルド』に届けることくらいだ。
恩を売る相手は必ず選ぶ。そういう打算的なものを彼らは持っている。
意味も無く人助けをするお人好しは【ロキ・ファミリア】には居ない。

†

冒険者をざっと見て女の子であり、歳の頃はアイズ程と確認した。
それから落し物が無いか確認した後でアマゾネスの姉が赤毛の冒険者を易々と担ぎ上げて地上に向かった。
残された三人は気を取り直して下の階への通路を探す。
「私達が来なかったらあの子……、確実に死んでたかもね」
「……そうだな」
余計な時間を食った、と不機嫌を表すベート。しかし、壁に八つ当たりはしなかった。
「もしベート一人だったらどうする?」
両手を後ろで組んで悪戯っ子の笑みでアマゾネスの妹が荒くれの狼人(ウェアウルフ)に尋ねた。

敵意を振り撒く凶暴さを醸し出している彼に全く恐れを抱かない。それは仲間だからなのか、彼程度の凶暴性は恐れるに値しないと思っているのか。

逆に戦闘部族たるアマゾネスの彼女は天真爛漫とした笑顔を振り撒いている。見た目から戦闘狂の様相は窺い知れない。

「例えばさっきみたいに行き倒れを見つけた場合……」

あ～ん、と不機嫌に唸りつつ彼女の言葉をさっと脳裏に再現する。

もし自分であれば。

それは冒険者として、というよりはあらゆる状況に対して自分がとるべき行動を模索する上で大事な事だと思っているからだ。

自然と状況を構築し、次の行動の糧とする。

「……まあ、見逃したら……メンツが潰れるな」

仮に誰も見ていなければ何をしてもいい。――という部分は暴論である。それは自覚している。

冒険者でなければ見逃す確率は高い。もとより雑魚に構っている暇は自分には無い。

迷宮都市（オラリオ）で名高い【ロキ・ファミリア】に所属している今の自分は他の【ファミリア】に嘗められてはいけない存在だ。それは強さもさることながら模範的な行動も必要とされる。

冒険者は憧れの職業であると同時に都市の防衛を担う存在でもある。

悪い噂を持つ【ファミリア】は当然、誰からの信頼も得られず、また他の【ファミリア】との不和をもたらす原因と見なされる。

「階層次第だが……。俺一人ならある程度は上に連れて行くだろうな。……不本意だが……」

自分と仲間と他人の優先順位というものがある。

自分だけならば自己責任で済む。

仲間の場合は他人を優先する場合がある。

三者の場合、他人が一番重くなりがちだ。

#1―03　他人を助ける事に意義はあるか

結論としては他人であれば行き倒れを見つけた時点で助けに出るのが順当である。

もちろん、条件が色々と加われば仲間や自分を優先する事もありえる。

例えば怪我の度合いだ。

戦闘に支障が無い他人が居たら、時には任せる。またはモンスターを押し付ける。

「今の状況なら……助ける一択か……。全く動けねぇ場合に限るが……」

「ベートが人助けするところを見てみたいな」

朗らかに笑うアマゾネスの妹。それは決して莫迦にしたものではなく、感心からの笑みだ。しかし、狼人（ウェアウルフ）の青年は気に触ったらしく、蹴りをお見舞いしてきた。――本気ではない蹴りなど当たるわけもなく。

「じゃあさ、アイズはどうなの？」

「……血の臭いがしたら……、とりあえず現場に行く。……それから考える」

「そっか……」

「……大きい人の場合は助けを呼ぶ。……だから私も助ける方向……かな？」

自信なさ気にレベル3の『アイズ・ヴァレンシュタイン』は答えた。

腕力で言えば一般の大人に決して負けないだけの力はある。それゆえに先ほどの冒険者程度も抱えられる筈だが、実際に持たないと何とも言えないので、明言を避けた。

「じゃあさ。食べ物が無かったらどうする？　特にベート」

「空腹のままダンジョンに潜った場合か？」

「普通はそんな事しないと思うけれど……。その場合は何が考えられるかな？」

考えるまでもなく、『ベート・ローガ』はダンジョンに潜らないとしか答えられない。

先ほど『貧乏』という言葉が出た通り、仮にそうだと仮定しても無謀にしか思えない。

「適当にゴブリンでも狩ってジャガ丸くんでも食えばいい」

ベートの言葉にアイズも頷いた。

そもそも二階層目で行き倒れる冒険者など存在するのか、と先ほどの事を棚に挙げつつ思った。――実際に居たわけだが。

「下準備なしでダンジョンに潜るのは俺達のような散歩目当てでもない限り、弱ぇ奴は潜るべきじゃねぇな。……そもそも論って奴になるが……」

「そだね。あたしもそう思う」

そう言いつつ質問を真面目に考えて答えてくれた狼人（ウェアウルフ）の青年に感心した。思わず口笛が出るほどだ。

いつも弱者と言っている彼でも根は優しいのかなと思わせる瞬間がある。だが、それを指摘すると蹴りが飛んでくるし、口も聞いてくれなくなるので黙っている事にした。

†

何人かの冒険者とすれ違い、現われるモンスターを片手間で撃退して七階層目まで来た。

深くなれば強いモンスターが現われ、また数も多くなる。

ソロで深い階層を目指すには相応のレベルが必要となる。アイズとて単独踏破は想定していない。ただ、モンスターを多く倒せれば良いので。

「そんなに早足でもないが……。ティオネの奴遅いな」

「のんびりと歩いてるんじゃない？　目的階層は伝えたんだし」

この階層に現われるモンスターは『キラーアント』と『パープルモス』と『ニードルラビット』だ。

特にキラーアントは集団で襲ってくるのと特殊なフェロモンで仲間を呼び寄せる。

単独で潜っている冒険者にとって戦いにくい相手となる。

「雑魚が数で攻めて来ようが蹴散らすだけだ」
「硬いのはベートに任せるね。ほら、あたしは裸足だし」
アマゾネスの素足はひ弱なものではない。けれどもあえて女性として言ってみだけだ。
「だったら靴を履け」
「……ごもっとも」
軽口を叩きつつ現われるモンスターを確実に撃滅していく。
瀕死にすると仲間を呼ぶので倒す時は迅速さが重要だ。
アイズが剣を振るえば瞬く間に通路に魔石が散乱していく。
愛用する武器は細身の剣だが一般的に入手が可能な安物ではない。
ベートは蹴りが主体で金属製の特殊なブーツを装備している。
三人の中で一番の軽装はアマゾネスの少女だ。本来は自身の身体よりも大きな武器を振り回す。けれども今は完全な無手。
必要最低限の回復アイテムしか持っていない。
「雑魚じゃあ物足りねぇな」
「【ランクアップ】が近いお陰もあるけれどね。ちょっと前まで大量のモンスターに臆してたのは誰だったかな？」
「知らねぇな、昔の事は」
会話しつつも攻撃の手は休めない。
他の冒険者の姿も無いので遠慮なく全滅させていく。
モンスターは基本的に他の冒険者の為に残す必要性は無い。現われるものは全て全滅させても良い。早い者勝ちだ。
むしろ低レベルの冒険者が危険にさらされてしまうので駆逐は必須である。

†

次の階層も同じようにモンスターを倒し、目的地である十二階層には一時間かかった。
一匹も逃さずに倒しきるのは今のベート達でも結構な手間であった。
合間に魔石やドロップアイテムも揃っていくので。
「今日は大量だね」

「大物やレアモンスターには出会わなかったがな」
次の十三階層に行く場合は特別なアイテムを持参しなければならない。けれども今回は行かない。――アイズとしては苦渋の決断になった。
灰色の世界が支配する生気の無い様相を持つ階層には枯れ木のようなものがたくさん生えていた。それらはこの階層の現われるモンスター達の武器『天然武器（ネイチャーウエポン）』と呼ばれるもので、事前に破壊したとしても時間経過と共にまた現われる。
見た目は枯れ木だがモンスターが引っこ抜くと棍棒に姿を変える。その原理は不明である。
「……到着したはいいんだけど……。霧が出ているね」
毒は無いが視界が利きにくい。
混乱になると味方の位置が把握し難くなる。
アイズ達は広い空間に降り立つ。
それぞれの階層は単なる狭い洞窟ではなく、高い天井を持ったり、入り組んだ地形などさまざまだ。
入るたびに変形しているわけではないので、地図を作成することも可能だ。――もちろん、危険と隣り合わせなので必然的に高額になりやすい。

†

ベートは適当な木を蹴り倒してモンスターの気配を探る。
狼人（ウェアウルフ）は野外でこそ本領を発揮する種族なので自身の能力を十全に発揮出来ない空間において思うところがあるようだ。
レベル2とはいえ、自分の実力に決して奢らず、上を目指す気持ちは誰にも負けない。
対照的にアマゾネスの少女は常に笑顔で気の抜けた雰囲気を感じさせるが、それでも戦闘民族出身なので闘いなれば気は抜かない。
今は武器を持っていないが素手でも充分に戦果を上げられる実力を持っている。
アイズはレベル3ではあるが常にダンジョンに潜っているので低い階層に現れるモンスターに苦戦する事は殆どない。それどころか

レベル1の時にレアモンスターである『小竜（インファント・ドラゴン）』を十体ほど討伐しても【ランクアップ】しなかったほどの傑物だ。その身に宿す潜在能力は未だ限界知らずだ。

辺りを警戒していたベートが異音を聞き取った。

地面が割れる音。次にそこから何ものかが現れる音が続く。

「来たぜ」

「りょーかい」

アイズは無言で剣を構える。

そこに遠くから声が聞こえてきた。

「おっまたせ～！」

ケガ人をギルド本部に届けたアマゾネスの姉の方だ。

手を振りつつアイズ達に向かって駆け出していた。

「随分時間がかかったな。迷ってたのか？」

「あはは。いやまあ、背中にゲロをぶちまけられてそのまま来られるわけないじゃない」

あたしは女の子なのよ、と言いながら合流する。

「事情説明に彼女の神様からえらく感謝されたりと……。いろいろあったのよ。あと、あの子……。食中（あた）りみたい。あんた達も気をつけなさいよ」

「……栄養失調とかじゃねーんだ」

急に具合が悪くなるなら仕方が無いか、とベートは呟いた。

実力不足によるものでないならば文句を言っても仕方がないと思うことにした。

†

色々あって風呂などで身体を洗ったり、服を乾かしたりしていた事などを告げて戦闘に参加する。

アイズ以外はレベル2だが、何度も来ている階層で討伐経験のあるモンスターに遅れは取らない。

２Ｍ（メドル）ほどの背丈で肥満型。豚の頭を持つ二足歩行するモンスター『オーク』が集団で現われた。

耐久力があり、天然武器（ネイチャーウエポン）で攻撃してくる相手だがベートは蹴りに

よって弾き飛ばす。
蹴り技主体の彼の攻撃方法は力押しだが、腕にガントレットを装備しているので上段への攻撃にも対処できる。
対するアマゾネスの姉妹はほぼ無防備に近く、強固な防具は身に付けていない。
体術のみで相手の攻撃を避ける。――もちろん攻撃を受ければただではすまない。
「どんどん増えてきた～」
「雑魚が数を増やしたところでやる事は変わらねぇ」
そんな彼らとは別次元の動きを見せるアイズ。
無言のまま細身の剣を的確に振りぬいていき、オークを圧倒する。
ほぼ一撃。ただの一刀で黒い塵と化すモンスター。
彼女が通った後には魔石とドロップアイテムが転がるのみだ。
モンスターは冒険者に怯まず、地面から無尽蔵に生まれ続ける。
もし、そのペースで止め処も無く生まれるのであれば階層が埋ってしまうのも時間の問題だ。――だが、実際にはそうはならない。
冒険者に倒されるからではなく、昔から存在する何らかの規則のようなもの。
例えば階層ごとに現われるモンスターはだいたい決まっている。例外が無いほどに。
無限生成であれば高レベル冒険者が延々と狩り続けられる仕組みを構築し、魔石を膨大に取得出来る筈だ。
ただ、さすがに需要と供給の観点から値崩れしない配慮をギルド側が調整してくる筈だ。
数百匹近いモンスターを倒したような気分になってきたが実際はそこまでの数には昇らない。
いくら【剣姫】という『二つ名』を持つアイズとて無限の体力を持ってはいない。
適度に休息を挟みつつドロップアイテムを回収していく。
そうして二時間ほど経過する頃には持ちきれないほどの収穫物が手に入った。

「レアモンスターは出てこなかったね～」
にこやかに笑うアマゾネスの妹。
多少の擦過傷がある程度で体力面ではまだ余裕を見せていた。
対する姉も似たような状態だ。
狼人（ウェアウルフ）のベートは敵意を振り撒き続けていたせいか、必要以上に疲れを見せていた。
大振りな攻撃が多かったことも原因の一つ――。それと攻撃方法が蹴りのみ。
手が使えないわけではなく、一種のこだわりだ。
「静かになったわね」
「インターバルって奴でしょ。あたしらもそろそろ戻らないと……」
「……うん」
それぞれ意見がまとまり、ベート共々地上を目指す事にした。
一定数のモンスターを狩るとしばらく静かになる状態をインターバルという。
基本的にモンスターは冒険者が階層に足を踏み入れた時に現れやすいと言われている。その原因はギルドのみ把握していて、一般の冒険者はただ現れるモンスターを倒すのみだ。

†

他の冒険者と違い、アイズ達の足取りは軽やかだ。
レベル1では下に降りるのも上がるのも苦労するというのに――
現われる雑魚モンスターを蹴散らしつつ前進するのはその実力を如実に表していた。
ギルドに戻り、換金を済ませた後は【ファミリア】に戻って風呂場を利用したり、食事を摂ったりする。
「何か収穫はあったか？」
落ち着いた様子で尋ねてくるリヴェリアにアイズは首を横に振る。
今回はあくまで散歩。低階層にしか行っていないので報告するような異常事態は無かった。
それを言葉少なめに淡々と説明するがリヴェリアは不満を見せずに黙って首肯する。

リヴェリアとしても約束を守ったようで満足していた。――いつもならば勝手に下層を目指し、仲間達に迷惑をかけていたアイズが今は随分と聞き訳が良くなったと感心していた。

「……あ。……そうだ。……今日、行き倒れを見つけた」

「ベート達の報告にもあったな。……食中(あた)りだとか？」

災難というか不運というか。

リヴェリアとしても感想に困る事態だ。

モンスターに襲われた、というのであれば話は別だ。

「……そういう冒険者は助けてよかったのかな？」

「分かってて見殺しにするのは……、良くは無いな。助け合い精神のない冒険者稼業だとしても、だ。……敵対【ファミリア】ならばまた話が変わるが……」

どの道、それらは現場が判断することで拠点に居るリヴェリア達の命令をいちいち窺う必要は無い。そして、アイズ達は既に自己判断の出来る実力を持っている。

少し手放しで彼らの成長を見守らなければ後続が育たない。

「恩を売る相手を選べ、と……。本来は言うべきだが……。信用の積み重ねは大事だ。いざという時、誰からも相手にされなければ誰からも返事は返って来なくなる」

一人で自己解決出来るほど冒険者という人種は完璧ではない。

時に騙され、誰かから貶められる事も実際にあるのだから。

実力者であるアイズも例外ではない。そうリヴェリアは思っている。

†

アイズ達に助けられた赤毛の女の子『ポラン・ブーニディッカ』は首から下を包帯に包まれて廃墟と化している拠点で大人しく過ごし、助けが来なければ命に関わっていた事態にショックを受け、ここ数日は蟄居(ちっきょ)していた。

神『ヘスティア』もどう声をかければいいのか分からず、気まずい雰囲気が支配していた。

背中は傷だらけだが【ステイタス】の更新には何ら問題は無い。

微々たる数値の上昇だが、確実に増えている事は分かっている。
彼女は地道な努力型だ。だから無理な背伸びを望んではいけない。
「ケガは数日で治るとしても……。君が次もダンジョンに挑戦するか、だけど……」
一先ず元気になるかどうかが問題だ。
別に冒険者として働けなくなったとしてもヘスティアは決して彼女の選択を否定しない。命より大事なものなどありはしない。
身体を壊してまで無理をする必要はない。
だが――
唯一の団員を失うことに抵抗を感じていた。今もこっそりと募集はかけているのだが、二人目はまだ現れてくれない。
今のままではポランに負担が押し寄せる。どうにかしなければ、という焦りは感じていた。
冒険者は一人より複数（パーティ）の方が安心だからだ。
【ファミリア】には派閥抗争のようなものがあるが、そんな事に拘るのはもっともっと後だ。
ヘスティアは厚意で貰った食料をポランに渡して団員集めに邁進する。――本来、神が団員の為に仕事をする事はない。絶対ではないけれど――
しかし、仕方が無い。どうしようもない。
地上に降りたヘスティアは楽な生活が出来ていないのだから。

†

傷跡は痛々しく残ってしまったポランは四日ほどで外を散歩できるまでに回復した。
精神的に荒んでずっと引きこもってしまうのではないかと危惧したが、いつもの笑顔を取り戻したようだ。――ただし、傷跡が多くなった事は少なからず気にしていた。
それらのケガも【ステイタス】の恩恵により、いずれはどうにかできる。
冒険者は一般人に比べて様々な能力の恩恵を貰う事が出来る。ただし、それらは【ランクアップ】して身につけるスキルに左右されて

しまうけれど。
それでも耐久力は確実に高くなっているのは間違いない。
「お金を稼いで少し高いポーションを身体に振りかければ傷跡も消えると思うけれど……。それまでが長い道のりなんだよな」
日々の生活も大事だけれど――、とヘスティアは前置きする。
どんな冒険者も無傷でダンジョンを踏破できるほど強くは無い。
――例外が何人か居るという噂はあるけれど。
かの【剣姫】ですら死にかけた事があるという。
「無理な背伸びをしても良い事なんかないんだぜ。君は地道な冒険者で居てくれよ」
「……はい」
「前にも言ったと思うけれど……。【ランクアップ】には条件がある。一定以上の【ステイタス】の数値を満たさなければならない。だから、いきなりレベルが増えたりはしない」
仮にいきなりレベルが増えるような事態があれば誰も彼もが高レベル冒険者になっている。いや、下手をすれば最高水準まで行ってもおかしくはない。
だが、現実はそれを否定している。
そんな方法はありはしない、と――
剣を振る特訓を始めたポランは第一階層に潜る許可を受け、無理をしない堅実な戦いを始めた。
ヘスティアは相変わらず団員募集だが、冒険者として再始動したポランに感動していた。
自分に才能が無いと分かれば諦めてしまうし、大ケガによって心折れることも――
それでも彼女は剣を持つことを選んでくれた。――一時的かもしれないけれど。
「野望を持ってこそ……。そればかりが冒険者ではないけれど。……ボクは黙って君を応援するよ」
と、物陰から見つめる神ヘスティア。
冒険の旅は長くて当然。だからこそ歩む一歩はとても大事にしな

ければならない。

#1―04　リーダー命令です

食中(あた)りから復帰して数日後、歳若い赤毛の人間(ヒューマン)『ポラン・ブーニディッカ』はダンジョンの第一から第三階層を昇り降りしながらモンスターと戦い続けていた。

【ステイタス】の伸びは今ひとつだが増えてはいる。

一匹に対して一。それを百度も繰り返せば百となる。

地道な努力の甲斐もあり、最低限の食料代を確保できるまでになった。それでも装備品を新調するまでには至っていない。

だからといって無理して下層に降りられるほど強くもない。

水を一口含んで戦闘の再開。

それとは別に戦闘技術を身につける方法も模索していた。

下層には手ごわいモンスターが多い。いつまでも単純戦闘では討伐もままならない。かといって誰かに師事するにしても金が掛かる、と話では聞いていた。

様々な要因に集中力が削がれ、余計なケガを負う。

†

ある日、遅めの昼食を神ヘスティアと摂っている時、来客が訪れた。

ヘスティアの友神(ゆうじん)『ミアハ』という長身の男性だ。

優男といっていい温和な性格で、人当たりの良さそうな――悪く言えば騙され易そうな――神という印象を受ける。

【ミアハ・ファミリア】の主神で冒険者の為のアイテムを製作、販売している。

「なんだい、ミアハ。ボクらはお金が無い貧乏【ファミリア】だぜ。何か売りに来ても無駄さ」

「つれないな。どうも、ミアハです」

「……いらっしゃいませ」

ミアハに声をかけられてポランは緊張のあまり声が上擦ってしまった。

他の神は遠くから見るだけで口を聞く事は殆どない。

オラリオに居る神々は殆ど自分の拠点に引きこもっているのでヘスティアのように自分の主神でもないかぎり会う機会には恵まれない。ただし、商業系は顧客が居るので会わないわけにはいかない。

ミアハに提供できるのは水くらいしか無かった。――さすがに知らない神にジャガ丸くんを提供するのは失礼かと思った。

「団員は彼女一人なのかい？」

「大きなお世話だよ。冷やかしなら帰ってくれよ」

口を尖らせるヘスティア。

神が訪れた目的は単なる世間話。それゆえにポランは邪魔してはいけないと気を利かせて退出する事にした。

ミアハもポランが目的ではなかったようで何も言ってこなかった。

†

神と言っても姿形は人間と大差がない。

違う点は能力くらいだ。

下界に降りたひ弱な神とはいえ他の冒険者達は彼らを敬い、決して害そうとはしない。

害したとしても冒険者ギルドからお尋ね者として登録されて追われる日々を送るだけだ。

それと神を処罰するのは基本的に神だけだ。

ポランのような一般人に出来る事はギルドに苦情を申し付けることだけ。それがこのオラリオの規則――

外に出たポランはしばらく暇になりそうだと判断して商店街に出かける事にした。

多少の蓄えがあるとしても武器購入の為の貯金を始めているので、余計な買い物は出来ない。

生活に必要な調味料とか日用品。それとある程度自分にあった武器の見学くらいはしておこうと思った。

それから数時間後、ある程度の情報だけを得て廃墟の教会に戻ればヘスティア一人になっていた。

「お帰り。余計な気を使わせちゃったね」

「いえ」

「午後からまたダンジョンに行くのかい？」

少しでも稼げるうちは挑戦すべきだと思うのでポランは首肯した。

夜が深くなる前に帰るように約束を交わして子供（ポラン）を送り出す。

たった一人の団員の安否をただひたすら待つのは神とて辛いな、とヘスティアは思いつつ――

†

全ての【ステイタス】が平等に増えているわけではなく、戦闘や行動の仕方によってまちまちである。

その中でポランは『耐久』と『器用』がよく伸びていた。

『力』が三番目。

その『力』が五十を越えた辺りで四階層に挑戦する事にした。危険だったり無理だと感じたらすぐに撤退する意向で――

【ステイタス】の伸びが悪いけれどダンジョンに潜る回数ではないのが救いであった。

基本的にモンスター一匹に対して一なので。――倒した数と増えた数字がほぼ一緒だった。

とにかく、ただひたすらにモンスターを倒し続けていけば評価が上がる筈だ。そう信じて武器を振るい続ける。

それを数日繰り返し、ついに『力』が百を超えた頃、『器用』は二百を超えていた。

モンスターの数を数えながら倒してきたわけではないし、絶対に一つの項目だけ伸びる、という保証もない。

ここまで三百体も倒してきたかもしれないし、三百五十体かもしれない。

とにかく、地道な努力で一つの目標は達成できた。――ついでにそれなりの収入も得られた。しかし、上層モンスターの『魔石』の換金率は低い。

神ヘスティアは地道に強くなり、逞（たくま）しくなってきたポランを応援しつつ団員募集を続けた。――今のところ結果は芳しくない。

†

ギルドから支給された武器もそろそろ新調しようかと思っていた

頃、オラリア中央に聳え立つ白亜の塔『摩天楼（バベル）』に向かった。
この塔は地下迷宮（ダンジョン）を塞ぐ形で築かれている。そして、様々な店舗があり、冒険者の為の公共施設、換金所、食堂に治療施設。そして、冒険に必要なアイテムや装備品を販売する店がある。全て商業系【ファミリア】が管理運営している。
鍛冶師が工房を構えていて直接販売が行（おこな）われているところもある。
有名どころである【ヘファイストス・ファミリア】という鍛冶系の【ファミリア】はバベルの四階から八階までを占有するほど。
有名どころの武具はブランド力が強く、必然的に高額になりがちだ。――当然の事ながらポランに手が出せる金額帯は存在しないと言ってもいいくらいだ。
しかしながらバベルは高級品ばかり販売しているわけではない。
八階以降には駆け出しの鍛冶師達が作った武具が格安で売られている。
それらは無名の冒険者達に提供され、その冒険者が有名になれば自分の名前も知られる事になる。そういう打算があるので商売として成り立っている。
名が売れれば顧客も増える。しかし、商品が劣悪であれば当然――だからこそ駆け出しの鍛冶師達は日々研鑽の為に努力する。
ギルドの紹介で訪れたポランは自分にあった武器を散策する。
持ってきた資金は万を超えた程度だ。――大半は貯金と食費。それらを合わせればもっと多いけれど――
「……どの程度が良いのか分からないな」
武器の優劣の知識が無い為に長持ちしそうなものがどれか分からない。
殆どの商品は箱に乱雑に入れられて野ざらしとなっていた。――値札は貼られている。
安物を買ってすぐに壊れては困るし、不当に高いものを買わされるのも困る。

†

防具も確認だけして帰る事にする。

初日に掘り出し物に恵まれる、というよりはまず知識を得るところから始めなければ――

そう思い、ポランは手持ちの武器を大切にしながら装備の為の資金を溜める事にした。

堅実な生活は珍しい事ではない。

全ての冒険者が特別な才能に恵まれ、怒涛の如く名声を得る者ばかりではない。

ヘステイアもそんなポランを無理に焚きつけるようなことはせず、温かい目で見守る事にしていた。

本音としては特別な『スキル』でも手に入れてほしいと願ってはいた。

見事に何も発現しない。神の目でも見えない小さな文字で書かれているのでは、と思いはしたが徒労に終わった。

「……でもまあ、数値は確実に増えているから。このまま各【ステイタス】が順調に増えてくれれば一年くらいで【ランクアップ】の権利を得る事も不可能じゃないぜ」

「そうですか」

神から【ステイタス】が書かれた紙を受け取って相槌を打つ。

難しい理屈は分からないけれど今のまま努力をすればいい、という理解で受け取った。

ここしばらく食材も増やして健康面にも気を使うようになったポランに今のまま強くならなくても、という余計な誘惑が囁いたがすぐに追い出した。

最終的に人生を決めるのは冒険者だ。神はただ彼ら子供たちを導くだけ。

†

数日後、武器が傷みすぎて限界に達してきたので応急措置として購入を決意。

ギルドのアドバイザーに選定を手伝ってもらう事にした。

各冒険者にはそれぞれ専任のアドバイザーが付き、冒険者の手助けをする。

神からも勧められたので活用する事にした。
「五層はまだ怖いと思いますので、そこまででしたら……。この辺りが無難かと思います。不壊属性（デュランダル）の武器はどれも高額ですし、予算の関係としては使い潰しを想定するしかないですね」
「分かりました」
「大きなケガをしない内であれば防具は一先ず諦めて……。堅実な冒険であれば充分かと……」
自分が言うよりも堅実なポランに今更感はあるが、仕事柄一応は言っておく。
歳が若いせいもあって素直な性格は冒険者向きではないけれど、好感は持てた。
他の冒険者を羨まず、地道に能力を伸ばしているし諦めてもいない。
モンスターと戦うのは想像しているよりも過酷で命の危険も付きまとう。それに冒険者ギルドは各冒険者の身の安全は保障できない。
救援を依頼する事は出来るが、ギルド自体が階層に下りて冒険者を救う事は基本的には無いといってもいい。
それだけ危険と隣り合わせの仕事である。
色々と物色した結果、想定より少し高めの剣の購入を決断。防具は後日にして神へスティアに報告する。
たったそれだけの事でもポランにとっては大きな出来事だ。そんな彼女の喜ぶ顔を見てヘスティアも表情が綻ぶ。
武器より防具を買いなよ、とはさすがに言えない。
戦う武器が無ければ何も出来ない。素手でモンスターを倒すのはアマゾネスくらいだ。
「ギルドの目利きなら心配は無いと思うけれど……。硬いモンスターには気をつけるんだよ」
「はい」
素直が服を着て歩いているようなポランの返事はいつ聞いても気持ちが良い。
その人の良さに漬け込まれないことを主神は切に願うばかりだ。

†

新たな武器を持ってモンスターを倒す日々が始まる。しかし、やる事は以前と変わらない。変わったのは武器だけ。

いつも通りだ。

着実に『力』の【ステイタス】は増えている。

戦えば戦うほどにポランは強くなり、多くのモンスターを倒せるようになってきた。だからといって下の階層に出てくる新たなモンスターに通じるとは限らない。

四階層目を目標に防具の資金稼ぎを始めて三日目。

随分とこなれてきた為か、最初の時より呼吸が苦しくない。モンスターの攻撃にも対処できるようになってきた。

食中りを除けば順調であった。

倒し終わったモンスターの『ドロップアイテム』や『魔石』を回収している頃、他の冒険者達の姿を見掛けた。

広いダンジョン内ではあるが上層は比較的人口が多く、すれ違う事はよくある。

それ故にダンジョンに現われるモンスターの数もポランが確認出来ないだけで実際は相当数居ると思われる。

換金率が低いこともあり、ポランのような駆け出しにとっては良い稼ぎになる。

多くの冒険者は早々に中層、下層に降りて活動しているようなので。――いずれポランも彼らと同じ道を歩むのは必然――

そうして十二歳を迎える頃には『力』の【ステイタス】も三百を超えるまでに至る。

アビリティで言えばF。『耐久』と『器用』はD。

更なる下層を目指す資格を得ていた。それと防具も地道な貯金によって揃えられた。

形だけは一人前。実力はまだレベル1の駆け出しに過ぎない。

†

団員一人の零細【ファミリア】は相変わらず。

今日も今日とてポランは堅実にダンジョンに挑戦し続けていた。

五階層にて必要なアイテムを購入する資金稼ぎをしていると複数のパーティが入れ違いに上と下に向かっていく様子を何度も目撃した。

人の出入りが激しいダンジョンは今日も盛況で、見知った顔が見当たらないくらいだ。

「ここも雑魚共が犇(ひしめ)いてんな」

周りに敵意を振り撒くように威嚇しながら降りてきたのは灰色のボサボサした髪の男性冒険者。獣耳と尻尾が覗く狼人(ウェアウルフ)の少年。

見た目とは裏腹に実力はレベル3の第二級冒険者。

「……ベートさん、さっからうるさい」

と、そんな彼を嗜めるのは金髪金眼。冒険に必要なアイテムが詰まった背負い袋(バックパック)の他には僅かな軽装の防具と細身の剣を携えた年若い少女。

年の頃はポランと大差がない。しかし、その実力はレベル以上に謎めいていた。

散歩程度のダンジョン攻略をしていたせいか、【ステイタス】の伸びが今ひとつだと不満を滲ませるのは【ロキ・ファミリア】で頭角を現しつつある冒険者『アイズ・ヴァレンシュタイン』と『ベート・ローガ』であった。

底辺に居るポランには馴染みが無かったのだが、世間一般的にはかなりの有名人たちである。

「けっ」

鼻を鳴らすように壁を蹴り付けて苛立ちを示すベート。

少年にしか見えない彼の蹴りでダンジョンの壁が大きく削り取られた。――それと同時に破壊音に驚く近くに居たポラン。

ダンジョンの壁は軽く蹴った程度で壊れるほど脆くはない。そうでなければ落盤の危険性が指摘されてモンスター討伐など出来はしない。つまりベートの蹴りはそれだけ強い事になる。

それとモンスターが現れる時に砕ける壁は自然と修復される仕組みになっている。――その原理はギルドも把握していないが、だからこそ地下迷宮が今も健在である証拠と言える。

「オラ。出て来いモンスター共」
乱暴な行為に眉根を寄せつつアイズは彼の襟を掴んで引っ張った。
「……他の冒険者の迷惑になるから」
「ああっ？　討伐を手伝っただけだろ」
「……【ランクアップ】したてなんだから。……身体を慣らすなら十二階層でお願いします」
とはいえ、副団長達との約束では十八階層までの攻略だった。それ以降は怒られる。
アイズはダンジョンに潜れるだけで我慢しているのだから余計な騒動はどうしても避けたかった。そうしないとダンジョン攻略禁止令を食らってしまう。それとベートの教育も任されているので責任は教育係が負う事になっていた。

†

小さな身体の少女が大柄な少年を嗜める姿は異常というよりは微笑ましい風景に映っている。
ここでは年齢に関係なく実力がものを言う世界だ。
ベートも強い者には従う。だからこそ文句を呟いてもアイズには逆らわない。
渋々の体(てい)で下層に向かう階段を探す。――その過程で見知った赤い髪の少女に気づく。
前回は意識不明だったその冒険者ポランと目が合う。
「……どうも」
「あっ、はい。こちらこそ……、ご丁寧に」
互いにお辞儀し合い、その後は会話が途切れた。
ベートは鼻を鳴らしつつ相手を睨むように見つめて正体に気づく。
「……あー。あん時のゲロ女か。まだダンジョンに居たのかよ」
変な名称で言われてムっと口を尖らせるポラン。女の子であるので汚らしい言い方は嫌悪感を覚える。
彼とはきっと仲良く出来そうにない。
「こんなところで燻(くすぶ)っている奴等に構っている暇はねぇ。さっさと行こうぜ」

「……ベートさんも最初は……『こんなやつら』の一員だった……と思います。……強くなったからって粋がるのは……、えっと……。……調子に乗りすぎです」

今度はアイズがムっと口を尖らせる仕草で窘める。

教育者として言う時は言う、という意識で頑張って言った。

全てはダンジョンに潜る為――

†

言い争いに発展する前に壁からモンスターが現われる。しかし、完全に姿を現す前にベートが見えている範囲のモンスターを次々と蹴り倒してしまった。

地面には虚しく『魔石』が落ちる。

「……倒すばかりで結局、拾いもしないんだから。……勝手に倒さないで下さい。……他の冒険者への迷惑行為……ですよ」

「うるせぇ。目に付くモンスターは居るだけ邪魔だから別に構わないだろう。雑魚は楽して金でも稼いでいればいいんだからよ」

そんな事を言っている間、ポランは転がっている『魔石』を拾わないのは勿体ないと思い、掻き集めていた。

他の者が見れば他人が討伐した獲物のおこぼれを貰う卑しい行為に等しい。けれどもポランにはプライドが無いので平気だった。――今は、と付くかもしれないが――

「ほら見ろアイズ。奴等にとって『魔石』が手に入れば充分なんだよ」

「……」

弱者に対してベートはとにかく口が悪い。今更ではあるけれど仲間として情けない思いを感じる。

各上の冒険者は下級に対して畏怖の対象でなければならない。尊敬される立場でなければ『深層』と呼ばれる難関に向かう際、道を譲ってもらえなくなる――とリヴェリアから聞いた事があった。

ならば、教育者としてアイズは決断しなければならない。

具体的にどうすればいいのか、はすぐに思いついたりはしない。

自分は頭で考えるよりは身体を動かして一匹でも多くのモンスターを倒す方が楽だからだ。だが――、それでは駄目だ。

後輩（ベート）を導く立場でもあるのだから。
調子に乗るベートを黙らせる方法――
それは単純に彼の嫌がる事をすればいい。――というのはすぐに思いつけた。しかし、方法が出て来ない。
自分より弱い者に対して敵意をむき出しにする彼の嫌がること――

上層でモンスターをひたすら狩り続ける。それはそれでアイズ自身も嫌だ。
モンスター討伐には違いが無いけれど、自身が強くなる事も目的の一つとなっている。だからこそ弱いモンスターでは駄目だ。

†

物思いに耽るアイズをよそにベートから早く行こうぜ、と急かされる。
下に行くよりも今はベートを教育する方が大事だと頭では決まっていた。
普段の彼女であれば頭より身体が先に動く。だが、今回はさすがに身体が止まった。いや、止めた。
そこで、まだ地面に落ちている『魔石』を拾っていたポランに気が付く。
――もし、彼女の許可があれば利用できるのではないかと、靄がかかったままだが何かを思いつけそうな気にはなった。
この階層で活動しているのでレベル1はほぼ確定。弱者の見本といってもいい。――というのは流石に言いすぎかな、とアイズは思った。
自分も強者の仲間入りを果たしているので下の者に対する偏見があるような気がして、僅かばかり良心が痛む。
ベートとは違い、強かろうが弱かろうが冒険者を蔑む気は無い。
「……ベートさんは……入り口で待ってて」
「あん!?　俺一人で先に行っててていいのかよ」
何を聞いても不機嫌な対応になるベートにアイズの眉根は――つい寄ってしまうのだが今は無視する。

彼が側に居ると頭の整理がままならないのでは、と思い早々に現場から追い払った。

十二階層までは先に行かれてもアイズには問題ない。それにベートも一人でそこまで往復できる実力と責任感が備わっている。

それだけの実力を持っていると自負している。

彼の姿が見えなくなる頃、拾い終わったポランに近付くアイズ。――正直に言えば他の【ファミリア】の団員に一人で声をかけるのはレベル3であっても緊張する。

「……あの」

「はい？」

「……その『魔石』は貴女にあげる。……。……その……一つ頼みを聞いてほしい」

アイズとポランはほぼ同年代の背格好。

他の者が見れば小さな女の子が物騒なダンジョンで仲良く話をしているようにしか見えない。――ここが地上ならば違和感は無いのだが――

互いに武器を提げた冒険者――

「あなた方が倒したのだから貰うわけには……」

「……いいの。……お詫び」

中々会話が弾まない。頭では分かっているのだが、自分の考えを伝える難しさに困惑する。

どうすればすんなりと話せるようになるのか。

何度も唸りつつ言葉を探す。

強引な方法は【ファミリア】の印象を悪くする。かといって他の【ファミリア】との交流を積極的に行(おこな)った事が無いので方法が分からない。

自分が知るのは【ロキ・ファミリア】だけ。その中であれば平気なのに、と。

†

アイズから話しかけたものの一向に会話が進まず、ポランをずっと待たせたまま。

殴って気絶、という単語が浮かんだがすぐに追い払った。
「……えっと、団員は……貴女の他に居る？」
通常であれば他の【ファミリア】に構成員や【ステイタス】の情報は開示しないし、答える義務も無い。
【ファミリア】同士が連合を組む事はあるにはあるが、それは特別な場合に限っての話だ。
一般的に【ファミリア】は敵同士。または商売敵だ。――だからといって率先して妨害や殺し合いになる事は非常に稀である。
【ロキ・ファミリア】は大規模ゆえに敵が多い。――大半は主神であるロキと相性が悪い、というだけの理由だったりする。
アイズが敵だと断定している敵対ギルドは今のところ存在しない。
「……私は【ロキ・ファミリア】所属のアイズ……。貴女の【ファミリア】の事は言いたくなければ言わなくていい。……仲間が居るかどうかだけでも」
仲間の有無も敵対【ファミリア】の場合は危険な応答となる、とすぐに気付くアイズ。
色々と悩んでみたものの他の【ファミリア】の協力を個人で解決するのはとても難しい事は理解した。
「は、初めまして。まだ駆け出しの冒険者をしております、ボランと言います」
相手は思いのほか素直にお辞儀しながら応えてくれた。
有名【ファミリア】である筈の【ロキ・ファミリア】の名前にも驚かないのは何故なのか気になったが――
彼女にとって【ロキ・ファミリア】はまだ知らない存在なのかもしれない。――いや、そんな筈はないと思う。
神々の中では悪名が轟いている、と評判だと人づてに聞いた覚えがあった。
団員は知らなくても主神は警戒しろ、とか言うのではないのか、と。
アイズは礼には礼を持って返礼する。
「……ご丁寧にどうも。……それで……その……貴女が良ければ今日だけでもパーティを……組みませんか？　……いえ、組んでくださ

い。……【ロキ・ファミリア】の名に懸けて貴女の身の安全は保障します……」

「パーティ？　……でも私は駆け出しですよ」

「……それでも……、構わない。……報酬は『ドロップアイテム』と『魔石』……です。……私達はモンスターさえ倒せればそれでいいので……」

金で釣るのも良心が痛むがベートの教育の為ならば致し方ないと諦められる。

これは自分の為の試練だと思うことにする。

レベル４への――

†

パーティになって下層を目指し、途中で置き去りにされてはたまったものではない。――かもしれないのではないか、と相手の立場になって考えた。

アイズは彼女の不安を取り除く方法を懸命に考えた。しかし、良い案が浮かばない。

襲ってくるモンスターを倒せばいい、といっても不慮の事故は避け得ない。この場合の対処方法を間違えれば【ロキ・ファミリア】に確実な汚点を残す、だけでは済まない。

それだけの責任を小娘たる自分に負えるのか――

負えなければ逃げればいい、というわけにはいかない。

第二級冒険者ともなればそれなりに名が通ってしまっている。二つ名である【剣姫】は確実に汚名を被る。

汚点は一つだとしても重くのしかかる。しかし、自分ひとりであれば我慢できるのだが、そうもいかない事情がある。

『アイズ・ヴァレンシュタイン』は【ロキ・ファミリア】にとって看板商品と同等――

団長の『フィン・ディムナ』以下、多くの団員に確実に迷惑をかけてしまうだけの存在であった。

「……目的地は中間地点の十八階層『宿場街（リヴェラ）』……。……帰りもちゃんと護衛するから」

駆け出しにいきなり十八階層に行きましょう、と言ってはいそうですか、とはいかない。――拒否されても当然だ。

ポランにとっては興味本位で行けるような場所ではない。――特に駆け出しはまだ実力不足なので、そこまでの階層にいきなりは挑戦できない。

途中に現われる様々なモンスター達の猛攻を掻い潜り、更に地上まで戻るという口約束を信用させるのは並大抵の事ではない。

だが、アイズは他に言いようを知らなかった。分からなかった。

自分のお願いをただ言うだけ。

我がままなのは自覚している。その上でのお願いに対し、ポランはいいですよ、と快く返答した。――ベートの嫌がる事になれれば、と思ったのは内緒にしておく。

†

了承したものの後々ギルドに怒られるのは確実だし、アドバイザーと神ヘスティアにはかなりの動揺と心配をかける事になる。けれども困っているアイズの助けになるのであれば、それは善行ではないか、と。

自分には何の取り柄も『スキル』も無い。地味な女の子だ。

資金稼ぎは大事だが経験を積むことも目的に含めている。――人生経験も冒険の内だぜ、という主神の言葉が蘇る。

「……駆け出しが下層域の『魔石』とか持って行ったら怪しまれますよね」

「……私達と即席のパーティを組んだ報酬ってことにすればいい。……いや、します。……お金が駄目なら私が出せる範囲で武器防具一式か回復薬（ポーション）を進呈する。……それならどう？」

「……それほどまで私の様な者が必要なんですか？」

「……都合がいいから。……言い方は悪いけれど……、あのベートって人を教育するため。……何にでも当り散らすから他の冒険者にいつも嫌われてしまう……」

と、悲しそうな顔をポランに向ける。――もちろん演技だ。

言葉に少しでも真実味を含ませる為にアイズは努力した。それは

もう思いつく限りの事を――

後には引けないし、引くつもりはない。

交渉は成立し、アイズと共に行くことを決めたポラン。――しかし、手放しで喜べる筈がないとは思っている。

下層域にレベル1が挑むには相応しい実力を身につけた後でなければならない、というのがアドバイサーの意見であった。――それを今回は無視するのだから後が怖い。

共に戦うわけではなく、ただ黙って着いて行くだけ。その辺りの細かい方法はアイズが懸命に考えている最中だった。

「……それはそうと……、下層域に行けるだけ強いんですね」

「……うん。……ポランは……あいや、いい」

ポランはこの辺りで活動していたのだからレベルは低い筈だ。それを無理に聞き出しては何かと侮蔑として取られてしまうのでは、と思った。しかし、共に下に行くとなれば嫌がおうにも自分達の強さを見せ付けてしまう。それは隠し様がない。

協力してくれるだけでありがたいと思わなければ。

アイテム類では問題がある、というのならば他に自分が提供できそうなものは何があるのか、とアイズは考える。

†

数分ほど思考してみたが良い案は浮かばない。

自分の武器は渡せない。であれば彼女を鍛えるくらいか、と。

我流である自分に人様に教えられそうな技は持っていない。魔法と言ってもエルフではなく人間（ヒューマン）、または小人族（パルゥム）に伝授出来るものも無い。

とはいえ、報酬については後で改めて考える事にしよう、とアイズは目下の目的を優先する事にした。

とある階層では炎に炙られるおそれがあるので、その対策アイテムである『火精霊の護布（サラマンダー・ウール）』をまずは確認しておく。

軽装のアイズとて攻撃を受ければひとたまりもない。しかし、当たらなければどうということもないし、その厄介なモンスター『ヘルハウンド』は既に自分達にとって脅威とは言えない相手だ。

十三階層から現われる黒い犬型のモンスターで特徴的な事はただ一つ。
炎を吐く。
それもレベル2でも対策しなければあっさりと消し炭に変えるほどの火力を持つ。
別命『放火魔（バスカヴィル）』と呼ばれる。
当然の事ながら今のポランにはどうすることも出来ない。
「……ケガとかはこちらで治すから。……ポランは戦わずに大人しくしてくれるだけでいい」
そう言いながら下の階層に続く階段へと移動する。
見ず知らずの冒険者を引き込み、途中で捨てる事はもう出来ない。
自分は【ファミリア】の名をかけて約束した。
第二級冒険者としての恥ずべき事はしないし、してはいけないと思った。
方法については賛否両論あるのは自覚している。
「……もし、怖かったら言って。……無理して十八階層まで行かないで戻ることも検討するから」
個人的には下まで降りたいところだが、今回はベートの教育という目的を重点的にしたかった。
いつまでも荒くれ者ではダンジョンに潜るのが恥ずかしくなるので。

†

少し強引かと思ってポランに改めて尋ねる事にした。
一方的にお願いを聞いてもらうのだから自分達も妥協しなければならない。
見ず知らずの冒険者の頼みごとはアイズであれば疑うか、不審に思う。――今回はそれを自分でしてしまっている。
「……未知の階層に行くと思うんだけど……、怖くない？　……いや、怖いと思うよね」
いくら戦わないとしても安全である保証は無い。
想定以上のモンスターに襲われれば守りきれないこともありえる。

特に遠距離攻撃を得意とするようなモンスターとか。
「どの階層も怖いですし、今以上というのは……。ちょっと想像できなくて何とも言えません」
「……そうだよね」
自分達は既に何度も挑戦している。ただ、ポランも同じというわけではない。
聞き方が間違っていたとアイズは落胆する。
他の【ファミリア】の団員とパーティを組んだ経験が乏しいし、弱い人は【ロキ・ファミリア】では本拠（ホーム）で待機する事が多い。
だから、話題づくりがとても大変だった。そして、大して話せないままベートが待つ下層への階段にたどり着いてしまった。
「……」
問題はここからだ。
アイズはポランに一度顔を向け、共に本当に来てくれるのか再確認した。
軽い気持ちでついてこられるほどダンジョンは甘くない。――もちろん自分達が全力で守る約束はしたけれど。
――それともポランは自分達の頼みを断ると殺されると思っていて、従順な振りをしているとも考えられた。――ここまで来て、それに気づかなかった。
アイズは立ち止まり、脂汗を流す。
何か自分は大きな間違いを犯している、ような気がしてきた。いや、見ず知らずの冒険者に妙な頼みごとをしている時点で不味いのは明らかだ。
「おい、アイズ。なんでそいつを連れて来たんだ？」
「こんにちは」
不機嫌なベートに対してポランはまず挨拶した。しかし、彼は軽く睨むだけで無視する。
なんで、と言われて貴方（ベートさん）の教育だ、と言えばいいのか。それとも教育者として偉そうな言葉を言うべきか。――リヴェリアみたいに。
「……リーダー命令です」

「ああっ？」

自分よりも歳も背格好も上のベートに少女アイズは無表情で言い放つ。しかし、残念な事にあまり迫力は込められなかったようだ。

全く怯まない同僚は更に不機嫌になった。

身長がもう少しあれば拳骨をお見舞いして黙らせるのに、という考えが過ぎった。

「……十八階層まで彼女を安全に運びなさい。……ケガをさせてはいけません。……脅かしても駄目です」

「何言ってるんだ？　こいつを連れて行けって？」

彼（ベート）の疑問に黙って首肯するアイズ。

一方的な要望のためか、ベートは苛立ちを露（あらわ）にする。しかし、そこは第二級冒険者としての矜持があるのか、いきなり拒否――拒絶はしなかった。ただ、どうしてか理由を教えろと言ってきた。

アイズは事細かに説明するつもりはなく、試練として与えたいので黙っていた。

「……出来れば背負って……。……ベートさんは蹴りだけ出来ればいいでしょ？」

「ふざけんな！」

ベートの怒号はアイズには通用しなかったがポランは萎縮した。

経験豊富な冒険者の言葉は今の彼女には鋭い攻撃に似た痛みが乗っている。だが、アイズはそよ風のように受け流していた。

†

理不尽な要求に対し、ベートは素直に抗議するもリーダー命令に逆らうと団長たちから怒られてしまう。さすがに荒くれ者と言われる彼でも各上の冒険者の命令には――出来る限り――従う。

だが、それでも納得の行く説明がないのは我慢できない。

「なんで俺が……、というより俺達がこいつを下に連れて行かなきゃならないんだ」

「……触れ合い。……ベートさんは少し他人に愛想を振り撒くべきだと思います」

「愛想!?　そんなもん冒険に何の役に立つんだよ」

威嚇する狼人（ウェアウルフ）のベートに対し、アイズは涼しい顔のまま応答する。
ポランであれば凶暴な顔を近づけられるだけで逃げ出しそうになる。――現に少しずつ彼から距離を取り、モンスターの襲撃に神経を尖らせている。
「……怪我人という想定でリヴェラまで行って、無傷のまま地上に帰ればベートさんの冒険者依頼（クエスト）は達成されます」
事務的に。無情に。無慈悲な冒険者依頼（クエスト）の通達。
涼しい顔して何てこと言うんだ、この女。――とベートは戦慄する。
見た目は幼い少女だが、攻撃力は今の彼よりも高く、また戦闘技術も高い。
「……リーダー命令ですよ。……返事は？」
「……嫌だね。だいたい急に冒険者依頼（クエスト）ってどういうこった!?　なんで俺がこいつを背負って降りていかなきゃならねぇんだよ」
「……そう、決めたから」
と、いとも簡単に答える【剣姫】アイズ。
彼が何を抗議しようと決定した事は覆したくない。それと文句も聞きたくないので極力無視する事に決めていた。
パーティとして活動する上で様々な想定をしなければならない、というのは自分達の団長である【勇者（ブレイバー）】『フィン・ディムナ』の言葉でもある。そして今は自分達しか居ない状況だ。他の仲間の助けは無い。だからこそ自分達で様々な事を判断し、実行に移さなければならない。
「……ベートさんが周りに当り散らしていると私はとても恥ずかしくてダンジョンに集中できません。……少しは友好的なところを見せないと【ファミリア】のコケンに関わります」
リヴェリアからいつも聞かされている小言を思い出しつつ、懸命に話すアイズ。――しかし、セリフが棒読み気味になってしまった。
戦闘よりも大変な事態に少しずつ表情が崩れそうになる。だが、それでもベートに対して甘い顔を見せまいと冷静さを装うことに努めていた。――と、本人は少なくとも思っている。

#1―05　今日は厄日だ

【剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』の理不尽極まる冒険者依頼（クエスト）に対して【凶狼（ヴァナルガンド）】『ベート・ローガ』は盛大に不満を募らせた。

一度見かけた程度の弱者を担いで十八階層に行って地上に戻れ、と金髪金眼の女が命令してきた。それを素直に納得出来るわけがない。

しかも、弱者と思しき女『ポラン・ブーニディッカ』は非常に乗り気だった。それはそれで脅威ではある。

「……サっと降りて、……サっと帰るだけの……簡単な冒険者依頼（クエスト）……。……でも、彼女を脅かしてもケガをさせてもいけません」

「……つまり足手まといの責任は全部俺がおっ被るっていうわけか」

ベートの言葉に頷くアイズ。

お荷物を抱えて依頼を達成する。

言葉だけだと非常に簡素ではある。特にレベル３の冒険者にとっては。

しかし、ベート自身はとても嫌だった。なにより足手まといと一緒というところが。

「……彼女はひ弱です。……強いベートさんが……責任を持って背負って下さい」

だろうな、とは思いつつも決定事項になっている事に思わず、強く舌打ちする。

この辺りでモンスターを倒している冒険者が普通に十二階層より下に降りられるほどダンジョンは楽ではない。特にソロ活動している者は尚更だ。

それとは別に棒読み気味に死刑宣告してくるアイズを少し怖いとベートは感じていた。

表情が乏しいし、実力も不明ながら強者に属する。

はっきり言えば何を考えているのかさっぱり分からない。

何も考えていないかもしれないけれど――

それと下の階層がどれだけ過酷かまだ知らない駆け出しを連れ歩

いて平気――というか大丈夫なのか気になって仕方がない。
そこはアイズ自身が責任を負うつもりのようだが。
「おい！　連れて歩くんじゃなくて、こいつを背負えって言ってるのか!?」
「……そうですよ。……何を今更……何度も言ってるじゃないですか」
と棒読みで答えるアイズ・ヴァレンシュタイン。
それに私は非力で小さな人間（ヒューマン）の女の子なんですから、と――
「そうですよ、じゃねーよ。……ほんと怖いことを平然と言うなお前」
「……小さな女の子なんですから。……ちゃんと守ってあげて下さい。……それとモンスターは片っ端から倒して結構です。……『魔石』とかの回収は……私がします」
今回ばかりはモンスターの討伐をベートに譲ってもいい、とさえ思った。
荷物を背負った状態でも危機的状況を打開しなければならない時にきっと役に立つと思って。
それはそれでポランが危機に晒されるが、アイズも手伝うので結構な【経験値（エクセリア）】を期待している。――といっても中層域ではないから目に見える程の大量取得とは行かないけれど。

†

有無を言わさないアイズの強引な押し付けにベートは渋々了承する事にした。自分の責任がそれ程重くないし、後で本気で叱られるのはアイズだけだ。
それにリーダー権限と言ったのだから自分は巻き込まれただけだ、という言い訳が出来る。
小さい人間（ヒューマン）の少女に言いくるめられて恥ずかしくないの、と仲間内から莫迦にされそうだが今は気にならない。
「……一気に走破しないこと。……モンスターはちゃんと倒して行くから」
「面倒臭ぇなおい。……十七階層の『ゴライアス』はどうすんだよ。抱えて倒せっていうのか？」

「……一人で倒せとは言わない。……そこは行ってから考える」
一気に脱力する狼人（ウェアウルフ）。
レベル1の冒険者が回りにたくさん居る中でアイズ達は十七階層の攻略を話している。それは強者としての余裕か、または嫌がらせにも聞こえる。
かといって無理に降りられるほど楽では無い事は何度も挑戦している者ならば諦めもつく。
下へ降りれば降りるほど新手のモンスターが出現する。その中で厄介なモンスターがいくつか居る。レベル1でまず大きな壁として立ちはだかるのは『ミノタウロス』という牛頭人身のモンスターだ。
十五階層以下を縄張りにし、適正はレベル2から。
「……後学の為にモンスターを解説しながら進むから。……ベートさんも彼女に……懇切丁寧に教えて上げて。……出来れば笑顔で……」
「……おい。急に難易度上げんじゃねぇよ」
「……これも【経験値（エクセリア）】取得の為だと思えば……耐えられると思う」
さっきから棒読みのアイズは何か良くないものでも食べたのかと思いそうになる。
前々から表情に乏しく、急に喋ったかと思ったらとんでもない注文の連続。
ベートは何回か彼女の頭を蹴り飛ばしたくなっていた。――だが、簡単に攻撃を受けてくれるほど軟弱ではないのは良く理解している。
座学より戦闘経験の方が遥かに高い。
だからこそ【戦姫】とも呼ばれる。

†

ほぼ強引に進められる試練に対して敵意をアイズのみに向けるベートだが、ただの試練であれば多少は妥協してもいいとさえ思っていた。しかし、内容が少女を背負ってのダンジョン攻略ともなれば不満が募るものだ。
そもそも狼人（ウェアウルフ）である自分が他人を背負うことなど今まであっただろうか、と疑問に思う。
「一応、聞いておくが……。お前、どこの【ファミリア】だ？」

「【ヘスティア・ファミリア】です」
素直に答えるポラン。
聞いた事の無い【ファミリア】だった為に他に何を聞けばいいのか分からなくなった。
二階層で行き倒れるくらいだから脅威とは言えないかもしれない。これ以上の問答をしても無駄なような気もする。
唸りつつもベートは黙ってポランを見つめた。
アイズも【ヘスティア・ファミリア】について詳しくは知らなかったが、雰囲気的には悪い人ではなさそうな印象を受けた。
アマゾネスの姉『ティオネ・ヒリュテ』も特に問題視しなかった。
「……やっぱり背負うのか……」
「……諦めて」
「うるせぇ。勝手に命令してんじゃねぇよ」
と、言い返したもののアイズではなく団長の『フィン・ディムナ』の命令であったら従うのか、と言えば不満を募らせること事態は変わらない。
案外同じように言いそうなので腹が立つ。
珍しく二人だけのダンジョン攻略で静かに降れると思っていたのに、とんだ災難だと地面を蹴りつつ悪態をつく。
ポランに必要な装備を身に付けさせた後、いざ背負う段階に入ったところでベートは壁を思い切り蹴り砕く。

†

静かな時が流れ、アイズは彼に変化が生まれないことを確認してポランに背中から抱きつくように指示した。
為すがままに体勢を低くされ、ポランを背負う事になる狼人（ウェアウルフ）の少年ベート・ローガ。
姿勢が安定したことを確認して満足するアイズ。
「……乱暴に振舞うようだったら首筋に息を吹きかけてもいいよ」
「そんな事をすれば放り出すぞ」
「しっかり掴まっています。……あのベートさん。よろしくお願いします」

「うるせぇ、黙ってろ」
今日は厄日だとベートは悪態をつきつつアイズを睨んで下に行こうとした。
目的地は十八階層。そしてすぐに地上に引き返して終わりだという。
次からはアイズと一緒に降りたくないな、と思いつつ背負うポランを落とさないように気をつける。
ただただ煩くなるのであれば大人しく従った方が静かで楽だと判断した。
「……一日で帰る予定だけど……、お腹が空くようであれば途中で休憩するから」
「はい」
ポランの返事の後で改めてベートの様子を窺う。
普段は荒くれ者の彼が急に親切な少年に見えて笑いそうになる。
それにちゃんと身体を支えているところを見ると根は優しいのだなと思えてくるから不思議だ。
実際、真面目ではあると思う。
無闇に単独行動して他の団員に迷惑をかける事が少ない。
「……では、行こう……」
アイズの言葉にベートは黙っていた。無視とは違うが返事する気力を失ったようだ。
大きく溜息をつきつつ階段を降る。

†

ポランにとって未知の階層に入るわけだが、ベートの背から見える景色は限定的。それとあまり顔を動かせられないので戦闘がよく見えない。
一応、怪我人という役だが立って歩く場合はモンスターの攻撃に晒されるおそれがあるし、迎撃できるほど強くないのも否めない。
「……『キラーアント』はしっかり倒さないと仲間を呼ぶフェロモンを撒き散らします」
無感情なセリフで説明するアイズ。

先ほどから意とも簡単にモンスターを駆逐しているので強いのかどうなのかが分からない。
音で聞く分には一撃で倒している。苦戦しているようにも聞こえない。
「……上から襲ってくる『パープル・モス』の鱗粉には毒があるから注意して」
小型のモンスターが多いが発生する間隔が短く、油断をすれば多くのモンスターに囲まれてしまう。――という事を説明するアイズ。
実際にフェロンを撒き散らしてどうなるのか、実演しようとしていたがベートが唸りながら抗議する。
雑魚がいくら数で攻めてこようが邪魔なだけだ、と。
レベル1では意外と苦戦するモンスターもアイズ達にかかれば寄ってくる子供を蹴散らすように弾き飛ばしていく。合間に『魔石』や『ドロップアイテム』を拾っていくアイズ。
平然とした余裕のある行動は現実とは思えない。
自分にも出来そう、と勘違いしそうなほどだ。
地を這うように素早く襲ってきた『ニードルラビット』もベートが踏み潰してしまった。
「こいつら如きじゃあ、なんの足しにもなりゃしねぇ」
「……ベートさんは彼女の護衛が任務だから、それ以外に注意は払わなくていい」
「段々と俺に対する扱いが酷くなってねぇか？」
「……普段の行い(おこな)に聞いてみて」
涼しい顔でアイズは言った。
本当に後ろから蹴ってやろうかと殺意が少し湧いた。

†

モンスターの説明。討伐。アイテムの回収を続けて九階層まで降りてきた。
ここまでベート達は全く疲労を見せず、またモンスターに苦戦すらしない。
それはそれで凄いなとポランは感激していた。

背負われているが乱暴な動きを取らないおかげで具合も悪くならない。それはベートが本当に気を使ってくれているのでは、と思わないでもなかった。

未知の領域に既に入ってはいるが自分は本当に何もしなくていい、というのは気が引ける。けれども彼らと一緒に戦えるわけではない。それなりの実力を持っているからこそ余裕でいられる。

「……疲れてない？」

「大丈夫です」

汗一つかかないアイズに比べて緊張で脂汗まみれになって落ちそうになってきた。

背負い袋（バックパック）からタオルを出して丁寧に拭いてくれる彼女に感謝しつつ、次の階層へ向かう。

上層は狭さがあったが十階層以降は天井が高くなり、複雑な迷宮としての様相が現れていた。それと広い空間になっているので大型モンスターでも居るのではないかとポランは危惧した。

「ここに現われるモンスターはまだ小型だ。十五階層からミノタウロスやシルバーバック達が出てくるから。あんま喋んな。舌を噛むぞ」

「はい」

降りる度に危険度が増すのでベートも助言が必要だと判断したようだ。

アイズも黙って頷いているところを見ると、いい加減な情報ではないと理解した。

「そういえば、お二人は毎日のようにダンジョンに潜っているのですか？」

疑問に思ったので尋ねてみた。

今の二人が強い理由。それは自分には真似出来ないものかもしれないけれど――

「……たくさん潜っているのは確か。……回数的には他の冒険者より少ない……かも」

「数をこなせばいいってもんじゃねぇ。より深く、より強い奴と戦わなければな」

「……強くなれば頭打ちにぶつかる。……そこからの打破が今の私達の目的って感じ……」

深い場所を目指す冒険者の言葉にポランは感心するものの今の自分にはそこまでの理由が無かった。

強くなろうとか、有名になろうという野望を持っていない。

日々、安定した生活が送れればいい。今はそれくらいしか目標に出来ていない。

だから、というわけではないけれどアイズ達と肩を並べようとか思わない。

†

次に訪れた十階層はまた風景が一変した。

ダンジョンは階層ごとにそれぞれ特色があり、別世界を演出してくる。そして、モンスターの種類も変わってくる。

それなのにアイズ達は平然と襲ってくるモンスターをいとも容易く倒していく。――ここだけは変わらない風景のように見えていた。

近付くモンスターが勝手に塵になる様は滑稽だった。

「この辺りはレベル1から見れば歯ごたえのあるモンスターが多くなる。あんまり顔は出すなよ」

「はい」

アイズではなくベートがポランに積極的に声をかけるようになったので、モンスターの解説をお願いしてみたところ不満をあらわにした。

背負うので手一杯だと拒否してきた。仕方が無いので引き続きアイズが説明とアイテム回収をする事になった。

だが、不満を抱いてもアイズは強かった。

サク、サクという軽快な音ばかり聞こえて苦戦する様子は未だに見せない。

いとも簡単に大型モンスターである筈の『オーク』が一撃の下に倒されていく。

よそ見しても平然と対処する辺り、レベル差はどうしても感じてしまう。

「……ベートさんもやれば出来るじゃないですか」
「何がだよ。お荷物を任せやがって……」
とはいえ、細かい『魔石』などの回収作業はやりたくない、となれば必然的にポランを背負う役は自分しか居ない。――アイズに背負え、と言ってもかなり強硬に拒否しそうなので。
降ろして自分で歩け、と言えばモンスター共に襲われてしまう。そうなるとまた面倒臭い小言を聞かされる羽目になるか、何らかのペナルティを受けるかもしれない。

†

不満を募らせつつ十三階層に向かう。
大きな事故も怪我もなく、アイズとベートは散歩気分で踏破して行った。
襲い掛かるモンスターを意に介さない実力者の戦いはただただ呆気にとられる。同じ事をポランに出来るわけはないのだが、戦闘技術は見惚れるほど美しいと思えた。
乱暴な戦い方が多いベートも確実な重荷を背負っている筈なのに苦も無く対処している。
「そろそろ『ヘルハウンド』共が来る。迂闊に見ようとするんじゃねぇぞ。いくら『火精霊の護布（サラマンダー・ウール）』でも守りきれない部分があるからな」
「はい」
アイズはベートと会話する様子に口出しするのをやめて、モンスターの説明に終始した。今の彼を【ファミリア】の仲間が見たら笑うだろうか、それともリヴェリア辺りは誉めたりするのか、気になった。
その前によその【ファミリア】の団員を勝手に連れまわしたことで怒られそうだ。
しかし、それもこれもベートが全て悪い、という事にして都合の悪い部分を脳裏から懸命に追い出していく。
装備を再点検したり、軽い食事を取ったりした後で行動を開始する。するとすぐにモンスターの姿を発見した。
この階層に出没する黒い犬型『ヘルハウンド』だ。
威嚇しながら冒険者に襲い掛かろうと窺っている。

大きさは今のベートと同等程度。複数で現われる事があり、一斉放火で冒険者を恐怖に陥れる。――火炎攻撃は即効性は無く、必ず『溜め』があり、そこを狙うのが基本だ。

ポランを背負ったベートは自らの『敏捷』によりあっさりとヘルハウンドに近付き、蹴り倒す。

はた目からは簡単そうだが、相手よりも素早く動けるからこそ出来る芸当である。

他の未熟な冒険者であれば近付くだけで大変であり、事前情報の火炎を警戒したりして中々攻め込むまでには至らない事もある。

「……その調子です」

「段々慣れて来たぜ、クソ……」

背中の荷物の重さに苦戦するかとベートは思っていたが、意外と動けるものだと感心する。だが、赤の他人を背負う事はそう何度も経験したくないのは変わらない。

彼女が大人しい分、イラつきも起き難いが――

†

ヘルハウンド以外にもモンスターが存在し、彼らに攻撃を仕掛けようと近寄るのは二足歩行する兎型モンスター『アルミラージ』だ。

近くの岩盤を砕いて『天然武器（ネイチャーウェポン）』の石斧（トマホーク）を作り出し、装備していく。

額から角を生やし、赤い瞳が愛くるしいが集団戦闘を得意とする。

だが――

「やつらは武器を投擲してくる。それと割りと知恵が回るタイプだ。油断してると次々と武器を放ってくるからな」

説明しながらモンスターに肉薄し、飛んで来る武器も意に介さず蹴り飛ばしていく。

足技だけで今のところ打倒するベートの技量は――残念ながら背中に背負われた状態では非常に見づらい。

アイズは無表情のまま飛んで来る石斧（トマホーク）を紙一重で交わしつつ次々と細身の剣による一閃で倒していく。

その後で地面を転がる鎧鼠（アルマジロ）のモンスター『ハード・アーマード』が現われた。だが、それらもアイズは意に介さず、関節部分へ器用に剣

を突き刺して倒した。
彼らの前では強敵足り得ないようだ。
――倒した後は『魔石』などの回収に集中する。
「……レベルアップ後となるとこんなに楽な作業になるとはな……」
ベートは己の技量の高さに改めて感心した。
前回までとは身体の動きが違う。より強く、は当たり前だが、より早く、より相手の動きが見えるようになった。
今まで倒したモンスターは強敵とは言えないが、倒すのにれなりの時間をかけたものだが、今は疲労度合いが格段に下がっているのが分かる。
荷物を降ろせばもっと早く動ける自信がある。
楽な作業になると獲得する【経験値(エクセリア)】は当然、微々たるものになる。
冒険者の能力を引き上げるには苦戦するような強敵との戦闘が一番の早道だと言われている。だから、さっさと下の階層に降りるのが効率的だ。――当然、戦闘が激化し、地上に無事に帰れる保証が低くなる。

†

次の階層に移動し、五匹のヘルハウンドがアイズ達の前に立ちはだかる。今度は一斉放火の為の『溜め』を初手から繰り出してきた。
まずはベートが片側の一匹を弾き飛ばす。
モンスターは密集ではなく、拡散形態。いかにベートでも一瞬で全てを打倒できない。
「おい。しっかり包(くる)まってろ。来るぞ」
「はい」
ベートは前面を覆う形に『火精霊の護布(サラマンダー・ウール)』で身を守る。
「……【目覚めよ(テンペスト)。エアリエル】」
静かな口調でアイズは己が習得している魔法を唱える。それと同時にヘルハウンド達による一斉放火が始まった。
炎に炙られる前に自身の身体に風をまとわせる。
攻撃を補助し、防衛し、速度を上げるアイズの超短文詠唱――
『風』の付与魔法(エンチャント)。

黙って立っていると風に炎が巻き込まれ、その輻射熱によってかえって被害が増大する。

レベル3のアイズの【ステイタス】によればヘルハウンドの炎に炙られた場合、その熱は短時間でなら我慢する事が出来る。

同僚のアマゾネスであれば気合で耐え切る可能性すらある。だがそれでも炙られ続ける事は得策ではないし、その気も無い。

熱に少し眉根を寄せつつアイズは射線をずらすように移動し、ヘルハウンドに接敵する。

本当なら炎が来る前に撃滅していくのだが、ポランの為に敢えて苦行を選んだ。――そういう気分になっただけ。

瞬く間にヘルハウンド達は倒され、地面に『魔石』が転がっていく。それを拾うアイズは今しがたの攻撃など最初から無かったかのように振舞っていた。

†

一頻(ひとしき)りモンスターを倒し終えた後、下の階層に進む。

今のところ襲ってくるモンスターに対して全く意に介していないし、ポランはただ言われる通り大人しくすることで手一杯だった。

ベートが現われるモンスターの説明や対処方法などを言っている姿を見られただけでアイズとしては満足していた。

ここで背中に背負われているポランの様子を窺う。

「……本当にケガ人みたい。……具合は悪くない？」

「大丈夫です」

「……全く、こんな調子で下に行くかよ……。一気に走破すりゃあ、もう現場についている頃だぞ」

それはそうなのだが、それらが出来ないのはベートが荒くれ者だから。そう言いたい気持ちがあったが飲み込んだ。

余計なことを言うと折角の触れ合いが台無しになるような気がしたので。

次の階層から現われるのは牛の頭部を持つ二足歩行の大型モンスター『ミノタウロス』である。

背丈はベートをゆうに超える。およそ3M(メドル)ほど。

レベル1では討伐不可と言われている凶暴なモンスターだが、アイズ達の敵ではなかった。
以前は苦戦していたベートも蹴り技だけで充分に撃破出来るようになっていた。
「ここからはレベル2になりたての奴等にとって、登竜門的な戦闘が始まる。……いざなりゃあ、降ろすからな」
「はい」
先ほどから素直に生返事ばかりを繰り返すポランにベートは少し違和感を覚える。
見知らぬ階層に見知らぬモンスター達の猛攻が続いたとはいえ一向に恐れを抱かないのが不思議だと思った。
背後で目でも瞑っていれば何も見ていない事になる。――そんな筈は無いのだが、それだけの度胸でも備わっているのかもしれない。
変に喚きだすよりマシなので、深く考えるのをやめる。

†

攻略すべき階層も残り少なくなってきた。
ここまで大きな問題も起こらず、ベートとアイズも治癒アイテムを使わずに進んでいた。
背負われているポランからも特に言及は無いが、適時様子をうかがっていた。死角から攻撃を受けている可能性もあるので。――今のところゲカは見当たらない。
「……もう少しで終わりですよ、ベートさん」
「何言ってやがる。往復して地上まで戻らなきゃならねぇんだろ。さっさと行ってさっさと帰るぞ」
それはそうなのだが、ポランに対して優しい言葉をもっとかけて、それと同じくらい自分にも話しかけてほしいと思った。ただすぐに――別に話しかけられたくもなかったな、と考えを改める。
こういう事を繰り返して行けば【ロキ・ファミリア】として他の【ファミリア】から冷たい目で見られなくなるかもしれない。
進路上に立ち塞がるモンスターを解説しつつ打ち倒していくアイズ達。

ここに来てポランは周りへの配慮は出来ていなかった。ただひたすらに身を守ることに終始している。それは身の程を知るからこその行為とも言えるし、未知への興味より脅威を優先した生存本能が求めた行動とも取れる。

アイテム回収を終えて十六階層の終わりの出口にて小休止する事にした。

ヘルハウンドが居ないことを確認してからポランを解放する。ここからは徒歩でも充分――その方がかえって安全だといえたからだ。

「……まだレベル1じゃあここまで来るのも居るのも大変か」

他人の心配が出来るほどにベートは随分と丸くなったようにアイズには見えた。

正直に言えば不安だったけれど、ベートは曲がりなりにも冒険者であって乱暴者や蛮族めいた存在ではないことが証明された、かもしれない。

普段ももっと優しくできれば他の団員と仲良くできるのに、と不満を口にしたい気持ちは飲み込んだ。

甘い考えで踏破できるほどダンジョンは甘くない。それは確かにそうなのだが――

†

ずっと同じ体勢で移動してきた為か、ポランは緊張もあいまってかなり疲労しているようだった。いちいち質問に対して答えられるほどの精神的余裕は見込めないかもしれない。それはそれで好都合だが、なんだか悪い事をしているようで申し訳ない気持ちになってくる。

――実質、悪い事だけど。

「……ベートさんの激しい動きに対応できなかった、とも言えるね」

レベル差で受ける身体への負担というものが少なからず影響している、とすれば仕方がない。だが、それもまた貴重な【経験値（エクセリア）】になっているはず――

モンスターを一匹も倒していない冒険者にも影響を与えられるものなのか、アイズには窺い知れない。

呼吸を整え、軽い運動の後でポランの体調を見ながら次の階層に向かう。

壁際にでも大人しくしていてくれれば問題は無いと判断する。

次の階層は『迷宮の孤王（モンスターレックス）』が現われる場所だ。――特定の階層に必ず一体しか現われない巨大モンスターの呼称である。

十七階層に現われるのは身長７Ｍ（メドル）ほどの巨人型モンスター『ゴライアス』だ。

巨体から繰り出す物理攻撃。高い耐久力を誇る肉体。

ポランが挑んでも満足なダメージは与えられないがアイズ達が連携すれば勝利は確実なものとなる。

「いいか。部屋に入ったら壁際に居ろ。敵が出てきたらアイズの背後を目印に移動しろ。……少なくともそれだけで生存率が上がる」

「はい」

「拳と石とか飛んでくるかも知れねぇから。それらはお前が自分で判断して避けろ。全部を俺達がカバーできると思うな、いいな？」

ベートの乱暴な物言いにアイズは咎めなかった。

次の相手は生易しいモンスターではない。絶対に安全だと保証することが今のアイズ達には出来そうにない、ということを出来るだけ丁寧に教え込んだ。

ベートとしても格下に色々と教える機会があると想像し、予行演習の真似事としてポランに教えていた。そうでなければ自分から率先して説明など――おそらくしなかった。

†

いかにベートとて一人でダンジョンを当は出来るとは思っていない。

自分が認める強き者とならば何の不満も見せたりはしない。ただそれだけのことだ。

弱い者は結局のところ何の役にも立てずに死んでいく。その責任を勝手に負わされたくないだけ。

であるならば最初から突き放したほうがいいに決まっている。

「質問はあるか？」

「いえ、特には……」
「なら、行こうか。……無駄口叩かないだけマシだな。……じゃあさっさとゴライアスを倒してさっさと引き返すぞ」
黙ってアイズは頷いた。
次のモンスターは倒せばしばらくの期間再出現しない。
安全地帯（セーフティポイント）である十八階層で数日滞在しても余裕があるほどだ。
装備と備品を確認してアイズたちは『迷宮の孤王（モンスターレックス）』が現われる次の階層に降りていった。
石壁で出来た広い部屋。
広さは出口まで２００Ｍ（メドル）。天上までの高さは２０Ｍ（メドル）。幅は１００Ｍ（メドル）ある。
高い天井の他には出口があるだけの単純な構造となっている。
見ようによればモンスターとの一騎打ちに相応しい場所とも言える。
「中心まで行けば出てくる。そろそろ壁際に移動していろ」
迷宮の孤王（モンスターレックス）『ゴライアス』は継ぎ目の無い巨大な石壁から現われる。
それと他のモンスターは出て来ない。
ベート達が次ぎの階層に向かおうとすると『嘆きの大壁』と呼ばれる石壁にヒビが入った。――そして、それは時間が経つごとに大きな音を鳴らす。
アイズはポランに先に出口に行くように命令する。この場で彼女は何の役にも立たないので。
ポランが駆け出すと同時にベート達は彼女を背で守るように移動する。
そうして壁を破壊して現われるのは灰褐色の肌の巨人。
「……こいつが現われるって事はここしばらく誰も来なかったのか？」
「……放置は出来ないから倒す。……彼女をここまで運んだ礼として……、トドメを譲ります」
「別に要らねぇよ。ようは冒険者依頼（クエスト）を達成すりゃあ充分だ」
軽く地面をけりつける狼人（ウェアウルフ）。戦闘準備は既に出来ている。

そうして姿を完全に現した『ゴライアス』に襲い掛かる。

†

十八階層へと無事に入る事が出来たポランは明るい日差しに似た光を浴びた。

地下のダンジョンなのに外の空間のような景色は遥か頭上に存在する多くの水晶（クリスタル）が地上へ光を届けているからだ。

緑豊かな階層にポランは少しの間、見惚れた。――後方では激しい戦闘の音が届いていたが、それすらも気にならないほど感動した。

（……綺麗な世界）

事前の説明では十八階層には多くの冒険者達が居て、休憩所としての街が造られている。

その街の名前が『リヴェラ』という。

岩場の壁面。広がる森。水晶の空に囲まれた地下世界は『迷宮の楽園（アンダーリゾート）』とも呼ばれている。

何の苦労も無く到達してしまったポランだが、一人で帰れるわけもなく。

とにかく、見晴らしのいい場所で待機する事にした。

この後、もし帰れなくなったら神へスティアに物凄く迷惑をかけてしまう。

他の冒険者に頼んで地上までいけたら物凄く手間賃とか取られてしまうことになる、と思うと身体が震えてくる。

途中で引き返しましょう、という意見は出てこなかった。ベートにしがみつくだけで手一杯だったから。

まさか本当にここまで来る実力者だとは知らなかったし、ただただ感心した。

自分が同じ実力を得るのは何年先の事になるのやら、と半ば絶望を味わった。しかし、努力を続ければたどり着けないこともない。

最速に拘っているわけではない。人より遅い【ステイタス】の伸びは自覚している。

†

ポランには窺い知れない事だが、レベル1が単独でこの階層までた

どり着いた例は――殆ど――無く、ギルドに報告すれば間違いなく最速での到達者として認められる可能性がある。ただし、アイズ達が運んだ事を考慮すれば即時無効となるのは明らかだが――

何にしてもギルドに報告した後が問題だ。どのような沙汰が下されるのか、それを考えれば更に身体が震えてくる。

それから半時ほど経った頃に討伐を終えたアイズ達がやってきた。

見た目には無傷――

「お疲れ様でした」

「……ありがとう」

「次はさっさと地上に帰るぞ。ついでに帰りはゴライアスの野郎は出て来ねぇから安心しろ」

首を左右に動かしつつ次の行動に移ろうとしていたベートをアイズは窘める。

一旦、小休止を挟んでから、と。

適度な休息は冒険者にとって必須の行動である。そうアイズは言った。

休める時に休まないと深く潜れない。肉体と精神の疲労は何よりの大敵である、という。

街に向かうかと思われたが、そこには行かないという。

その理由は物価が高いから。

ここはギルドの管轄が及ばない冒険者自らが運営している。それゆえに値段も高く設定されている。――それだけ死線を潜ったのだからそれだけの値段にしてもバチは当たらない、という理屈で。

それを知る冒険者パーティは野外にてキャンプを張る。

資金に余裕があるパーティか、緊急を要する場合でもなければ基本的に使用しない。

それとそれゆえに非合法な取り引きにも使われる。だからこそ需要があるといえる。

「……まずは戦利品の整理から。……帰りも出てくるモンスターは倒していくから」

野放しにすれば追って来る。――当たり前だが。

それを他の冒険者に押し付ける行為はマナー違反と言われている。罰則は無いけれど周りの目が痛くなる。

「……ベートさんは後、話し方をなんとかすべき」

「そこまでやんのかよ」

とはいえ、丁寧語や敬語のベートは――なんか気持ち悪い。そうアイズは思ってしまったので、多少、軟らかくする程度で妥協する事にした。

威勢のいいベートも嫌いではない。戦いにおいて威勢のよさは強みでもあるので。

†

高レベルの冒険者が真面目に護衛すればポランのような非力な者でもここまで来られるという証明になった。それは自分達【ロキ・ファミリア】の団員にも適応できるということになる。

一つの経験で様々な対策が講じられるのであれば実に有意義であると言える。

しかし、本拠（ホーム）に戻ればかなりのお小言どころか雷が降って来るのは確定だと思う。それでも、アイズにとってはベートのためと思えば耐えられる。

ベートはアイズに巻き込まれた形なのでどうしようもない。

ポランはどうなるのか。アイズは『ヘスティア』という主神の事は存じ上げていないのでどういう対応になってしまうのか、それはそれで気になる。

「……」

何にしてもここから帰らなければならない。

怒りの表情のリヴェリアを筆頭に気が重くなりそうな連中が待つ【ロキ・ファミリア】へ向かう準備を始めた。

戦利品は当初の予定通り、ポランに進呈する。自分達はより深い階層で稼ぐので別段、困らない。

帰りもベートにポランを背負ってもらい、地上に行け、と命令する。

最初の荒くれ度合いが抜け落ちたように彼は素直に従った。急な変化に気持ち悪さを感じたが、気にしても仕方が無いと思って脳裏か

ら邪念を払拭する。
大きな敵は排除した。しかし――本拠（ホーム）にはもっと強大な敵が待ち構えている。
軽く唸ってから来た道を引き返す。

†

それから数時間後にはちょっとした一騒動が起き、ギルド本部で正座させられるアイズ達の姿が晒し者になった。更には迷宮の孤王（モンスターレックス）も裸足で逃げ出すほどの悪鬼（リヴェリア）の姿に怯える彼らの主（ロキとヘスティア）神たちの姿があった。
ポランの踏破記録は当然のように破棄。
戦利品の半分近くは没収。――これにはアイズが食い下がったが、何らかのペナルティが必要だという事で強引に奪い取られた。
半分だけ残っても結構な額だったが――
ポランから罰金を徴収しようとしたが数十ヴァリスしか手持ちに無かったのでどうしようもない。――事前に武具を買い揃えた為に貯金も殆ど無かった。
「……いやまあ……、無事で良かったよ。エルフ君も仲間の教育の為だと思って……、穏便に、ね？」
ロリ巨乳として有名な『ヘスティア』の言葉に副団長『リヴェリア・リヨス・アールヴ』は目を光らせて睨みつける。――当然、ヘスティアは引きつった顔で引き下がる。
確かに無事だ。理由も理解出来る。だが、それで納得して誉めるわけには行かない。
（ロキんとこの子供は随分と好戦的だね）
（こんなに恐ろしいリヴェリアたん見たのはじめてや。……今日は酒を控えよう）
独特の喋り方をする糸目で絶壁とも称される薄い胸の持ち主『ロキ』は震えつつリヴェリアの様子を窺う。
神同士は互いに旧知の仲――犬猿とも言うが――だが、今日ほど二人が仲良くしている姿を見た者はおそらく居ないのではないかと。
それほど現場が混沌――暗黒に染まりつつあった。

団長である小人族（パルウム）の『フィン・ディムナ』とリヴェリアと同じ副団長でドワーフの『ガレス・ランドロック』も苦笑を浮かべていた。
子供のする事だと言えない事情があるにせよ、ガレスとしては誉めたいところだった。
「ベートの教育はこれくらいじゃないと無理だとアイズが判断したんなら、僕からは何も言う事は無いよ。でも、よその【ファミリア】の団員を連れまわすのは見逃せないからね」
戦う人形だと揶揄されていたアイズとしては良くやったとフィンはむしろガレスのように誉めたい立場だった。
どういう心境の変化があったのか、大いに興味がある。それに同い年のポランとの友情――は無いかもしれないけれど、何かしらの会話はあった筈だ。
剣で脅して連れまわしたけではなさそうだけど、と。
それはそれでもっと事態は深刻になってしまうけれど。

†

自分のした事に恥じ入るところが無いと思っているアイズは始終、口を尖らせていた。しかし、全体から見ればとんでもないことをした自覚もあった。
それでもやはりベートの教育を優先した事に後悔は無い。
その覚悟を知ってか、リヴェリアは黙って三人に拳骨を落としていった。
アイズとベートは痛いと不満を漏らす程度だが、ポランは『耐久』が彼らより低いので一瞬で気絶し、鼻血を吹き、耳からも血が出る酷い状態に陥った。
「ああっ!?　え、エルフ君!?　ちょっと本気でやらなかったかい？」
「……ああ、あかんやつやこれ。早いとこ医務室に運びっ」
平等の力加減だった筈なのに一人だけ重症に陥ってしまった。これでは罰として不平等になってしまう。――なのでアイズとベートには追加でもう一撃拳骨を落とした。

#1―06　パーティ

一度や二度の失敗でめげる【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインではない。

早速、数日後には気を取り直して鍛錬に励む。それと一緒に罰を受けた【ヘスティア・ファミリア】の団員の事を思いつつ。

小柄で少女然とした主神『ヘスティア』は初めて見たけれど、悪い神様ではない印象を受けた。

自分達の主神『ロキ』より好感が持てそうだ。だが、団員は赤毛の少女『ポラン・ブーニディッカ』ただ一人――

募集はかけているらしいが、何故団員が増えないのか疑問に思った。

お近づきになった相手のことを気にかけるのはアイズにとっては好奇心の一つに過ぎない。それでもダンジョン攻略以外で気になったのは『ジャガ丸くん』以来ではないかと。

†

昼食時に本拠（ホーム）『黄昏の館』内の廊下でロキに出会ったので尋ねてみた。

敵対【ファミリア】なのかも気になったので。

「あのドチビとは昔から因縁があるだけで敵対【ファミリア】には数えてへんよ」

独特の喋り方で手を振りつつ答える主神ロキ。

胸が無いので男性的と言われれば納得してしまうが女性の神様だ。

朱色の髪をポニーテールにし、糸目で常に微笑を湛（たた）える表情はどこか胡散臭さを感じさせる。

「ド貧乏な【ファミリア】のようやし、こっちが本腰を入れる価値は無いなぁ」

「……そう」

敵対でなければ触れ合いに関して自分の行動は今以上に厳しくする事もないか、とアイズは思った。

これが敵対【ファミリア】であれば今以上に積極的に警戒しつつ相手の情報を取れるだけ取る必要がある、とロキから言われていた。

脅威でないのであれば次のダンジョン攻略時に出会った時、殺し合いになるような不穏な事態は避けられそうだ。

それとは別にヘスティアはどういう神様なのか、一応尋ねた。

「ロリ巨乳や。それ以外に特筆すべき事は無いけど……。さすがに弱い者いじめは厳禁やで、アイズたん。ああいうのにうちらが構うと品位が落ちる」

ということをそっくりそのままロキに言い返したくなったが、飲み込んだ。

お世辞にもロキに品位を感じた事は無い。ただ神威（しんい）を帯びている超越存在（デウスデア）なだけだ。

†

街へと出かけたアイズはギルド本部にて、受付から説明を受ける赤毛の女の子と遭遇。――というか見掛けただけだ。

罰を受けたにもかかわらず足を運んできたところは精神的な部分が強いのかなと思いつつ、聞き耳を立てる。

連れ回した罪悪感も少し関係するけれど――

「今の【ステイタス】だとまだ五階層はキツイかもしれませんね」

彼女の担当アドバイザーと思われる者が眉間に皺を寄せつつ資料と赤毛の少女ポランを何度も見比べる。

元々【ステイタス】の伸びが悪く、かといって成長しないわけではない彼女は一朝一夕に行動できるほどの余裕はまだ無かった。

――ただ、モンスターを倒せば倒した数だけ伸びるのは分かっている。

単純計算だと『魔力』を除く能力値を最高まで上げるのに約四千匹討伐すればいい。既に四分の一近くは達成している。

数字だけ見れば楽そうに見えるが、一日に討伐できる数は多くない。

理由の一つは他の冒険者もダンジョンに潜っているので自分の分が必然的に少なくなる。

もう一つは低階層に数百匹も出て来ない。せいぜい二十匹も倒せれば充分という感じだ。

その調子では成長に時間がかかって当たり前。それを促進させる方法も無い。ただ、意図的にモンスターの数を増やす方法があったならば――他の冒険者が危機に晒される危険度が高まる。

「安全志向は悪い事ではありません。焦って命を散らすよりはいい」

「はい」

素直な性格は今も変わらずのようでアイズは安心し、その場から去った。

まさか居るとは思わなかった。思わず去ってしまったけれど、一言でも声をかけるべきだったと思っても足は動かない。

お詫びをしようにもただ謝ればいいのか、それとも――

色々と悩んでいるとウロウロする姿を多くの冒険者に目撃されている事に気づいて顔が赤くなる。

（……こんな事では駄目。……少し運動しなければ……）

顔を引き締め、ダンジョンの低階層にてモンスターと対峙する。

考えるより身体を動かすほうが楽なアイズとしては戦闘こそが自分自身に合っていると思われる。

不壊属性（デュランダル）の細身の剣（デスペレート）で壁を突く。それだけで壁は難なく砕ける。

「……」

多少乱暴に扱っても刃こぼれしない武器はとても高額である。

アイズが遠征で潜るのは四十階層以降。そこで手に入る『魔石』は高額で換金できる。それと各種ドロップアイテムも加われば結構な財産となる。

思い悩みつつ壁に穴をあけるアイズ。――それを眺める事になるレベル1の冒険者達。

（【剣姫】が壁に穴を空けているのはどういう意図があるんだ？）

（この間の憂さ晴らしじゃねーか？）

（……それにしても簡単に大穴を空けるよな。あんなに小さい身体で）

近付くと壁のように身体に穴を空けられそうな雰囲気を感じ取っ

たので、そそくさと退散していく。
二十個ほどの穴が出来たところで下の階層に移動するアイズ。
†
その後も三階層、四階層とゆっくり移動しながらモンスターを探していく。
他の冒険者の邪魔にならないように進み続けていると十階層目にたどり着いた。
第二級冒険者ともなれば散歩気分でたどり着ける。しかし、多くの冒険者はアイズと同じような事は出来ない。
今日は仲間も無く、一人で潜っている。一般的には複数人で下に降りていくのが定石だ。それを無視したアイズの強さは羨望と畏怖のどちらかで見られてしまう。
多くは畏怖だ。
各【ファミリア】は敵同士になる事が多い。
（あの子もいずれは敵になるのかな。そうなったら私はちゃんと戦えるだろうか）
敵になるかどうかは主神の気分次第のところがある。
もちろん、敵対【ファミリア】の違法行為などによりギルドから討伐依頼として受けることもあるけれど、普段は滅多に抗争は起きない。
それでもいずれはモンスターではなく対人戦を余儀なくされる事態も――
（神ヘスティアはどう見ても悪い神様のようには見えなかった。……そう信じたいだけかもしれないけれど）
物思いに耽りつつも襲ってくるモンスターはきっちりと倒していく。
はた目から見れば実に奇妙な戦法に映る。
今の【剣姫】に近付くのは危険だと思うほどに。
そして気が付けば十五階層目。炎を吐くヘルハウンド達をどう倒したのか、無意識のままに戦闘を続けてきたアイズは今更になって気付いた。

一度、十階層目まで戻り、アイテムの取りこぼしが無いか確認する。
『魔石』はそのまま放置するのは良くないと怖いエルフから何度も聞かされていたので。
少しの手間をかけて改めて十七階層にたどり着けば何人かの冒険者と遭遇した。
ダンジョンに潜る冒険者のすべてを把握しているわけではないので、誰が味方で誰が敵かは分からない。
自分が敵だと定めた相手は恐らく忘れないと思うけれど。

†

そうして軽く会釈などをして進めば『迷宮の孤王（モンスターレックス）』の居ないガランとした空間を大勢の冒険者達が通過していく風景が見えてくる。
一度討伐すると数週間から数ヶ月は現れないと言われている。このように毎日のように戦闘が行われるわけではない。
出現まで時間がかかることから各迷宮の孤王（モンスターレックス）が落とすドロップアイテムは大変希少で高く取り引きされる。
前に来た時に破壊された壁も既に修復され、ヒビ一つ見当たらない。――それどころかここで戦闘があった痕跡すら無かった。
（今回はここまでにしよう。帰ったらまた鍛錬の続きか……）
十八階層には向かわず、そのまま地上へと戻る事にした。
一度に潜れる階層は約束によって決められている。二十階層目からはパーティを組む事が【ロキ・ファミリア】では義務付けられている。それはいかにレベルが高い『フィン・ディムナ』であっても。
行方不明者を出さない為、と言われているが敵対者の多い【ファミリア】として自衛手段は必須である。
有名になればなるほど行動に制限がかかるもの。しかし、アイズにとって敵対【ファミリア】には興味が無い。というよりは実感が無いといった方が正確か。
ダンジョンに居るモンスターを倒す事が目的であって、敵対【ファミリア】を倒す為ではない。
自分ではそう思っていても【ファミリア】の抗争は昔からあるらしく、一冒険者にはどうすることもできないらしい。

どうでもいいと切り捨てる事も多くの人材を抱える【ファミリア】の中にあっては自分一人の意見は通り難い。

†

壁に当り散らすこと無く二階層目まで戻ると赤毛の女の子ポランを見つけた。

他にも赤毛は居たのだが、この階層で活躍する小さな存在はポランくらいだ。

見知った小人族（パルゥム）の中でも赤毛は今のところ出会った事がない。だから、ついポランだと思い込んでしまった。

少し離れた位置から観察し、動きや攻撃などから当人だと――改めて――推定する。それと買い揃えた武具などからも――

リヴェリアの折檻から復帰しただけでも充分感心に値する。それと自分の都合で巻き込んでしまった事に未だ罪悪感があったので、どう声をかければいいのやらと迷うアイズ。

神同士は知り合いのようだし、二度と会うなと主神ロキから厳命されてもいない。

勝手に下層に連れて行くな、とは言われるかもしれないけれど。

しばらく眺めていると自分（アイズ）が空けた穴に驚く彼女の姿を見て苦笑する。――一部は既に塞がりかけていた。

二階層だけではなく、物思いに耽って空けた階層は他にもあるのだが、無意識下での行動なので全ては覚えていない。

自分と同年代の人間（ヒューマン）の少女――

それなのに随分と離れた実力差。本来はポラン程が普通と言われる。

（……私は最初からある程度の実力を持っていた。けれども、彼女は違う。……違うというか彼女が本来は正しい有様……）

このまま地上に戻っても鍛錬の続きくらいなので少しだけポランの様子を伺う。

今のところ一人で潜っていて仲間の姿は無い。【ファミリア】の団員だけでパーティを組まなければならない規則は無く、資金に余裕があればよそから雇うことも出来る。

【ロキ・ファミリア】も深層攻略に赴く時は他の【ファミリア】の協力を仰いでいる。
（……上層程度なら……彼女と共に居ても怒られないよね。……目標階層は……十二階層くらいを想定して……）
アイズにとって大事なことはダンジョンに潜り、モンスターを倒す事だ。ドロップアイテムなどは二の次である。
強さに関してはよりたくさんのモンスターを倒し、深層域に行くために必要だと思っている。
強ければ強いほど負ける機会が少なくなる。
ポランが三階層目に挑戦する頃にアイズは駆けだした。

†

二階層と三階層の境（さかい）にてポランと合流するアイズ。
つい先日に会ったアイズの事をポランも覚えていて姿勢正しく挨拶した。アイズも釣られて返礼する。
「……リヴェリアに叩かれたところ……、もう平気？」
「……まだ少し痛みますが……。何とか無事です」
ポランは苦笑しながら言った。
相手が怒っていない事を確認したアイズは安心し、胸を撫で下ろす。
もう二度と会いたくない、などと言われると――多少は――覚悟した。それが無いようなので会話は続行できる、と。
「……君に付き合っても……いいかな？　十階層辺りまでで我慢するから」
「そこまでは行きません。装備でお金が無くなってしまったので、四階層辺りで魔石を確保しようかと……」
「……四階層……。そうだよね。……私達とは……違うんだものね」
たどたどしい喋り方でアイズは意気消沈気味に言った。
近い実力者であれば可能な限り深く潜れる。事実、ベートやアマゾネス姉妹であれば二十階層も楽勝だ。
だが、駆け出しにはそこまでの階層攻略は無理であり、ギルドからも止められる。

ポランは現実な人間（ヒューマン）で、アイズは向う見ずな冒険者であった。
差し障りのない会話を交わしつつポランの目的地である四階層に向かった。その前の三階層でアイズは完全に見物人と化し、彼女の同行を大人しく眺めた。
もし、危ない目に遭いそうになったら助けようとは思ったが、危機的状況には至らなかった。
四階層目から新しいモンスターが現れるが今のポランは充分に対応できるだけの力が備わっていた。
戦い方が危なっかしいのは変わらないが、日ごろの努力はちゃんと発揮していた。それと倒したモンスターから魔石を回収することも忘れない。
（……少しずつ強くなっている。……駆け出しは伸びしろがあるから……。……上に行けば行くほど伸びは悪くなるようだけど）
前衛主体のポランは魔法を習得していない。スキルもおそらく無い。
その辺りの詳細な情報を聞き出すわけにはいかないが、見ていてわかることはあった。
優遇された武具を持っているわけでもなく、〇（ゼロ）から登っている冒険者だ。
（……私は最初からある程度の強さがあった。……けれど彼女は違う。……優遇された能力も無しで強くなっている。……それはとても……凄い事の筈……）
小さな努力の積み重ね。アイズは今の自分にそれが出来ているのか、と問うてみた。
〇（ゼロ）ではない出発点の時点で出来ているとは言えない。それでも強くなるという想いには応えられている。
行き急ぐような強さと地道な強さ。アイズはどちらが最良であるのか、迷いつつポランを見据える。

†

探索を続けるポランの事が知りたいわけじゃない。けれども、知りたい気持ちがあるのかもしれない、という相反する気持ちを持つアイ

ズ。
この日を境にポランの後姿を眺めるようにダンジョン攻略の供をするようになった。
本来であれば神ヘスティアとロキの仲が悪いのでパーティは絶望的だ。しかし、戦闘狂であったアイズが人並みに付き合いを始めた事を知ったリヴェリアによって上層のみではあるが臨時のパーティを認める決断をした。
他の幹部――ガレスとフィン――も深い階層に潜らないという条件であれば拒否する理由は無いと――
ただ、この提案に対してロキはおろかヘスティアは難色を示した、が――
ヘスティアはポランが笑顔である限りは無理に拒否するのは止めようと考え、アイズとのパーティを――渋々ではあるが――認める事にした。ロキは最後まで認めなかったが――
「……あの人間（ヒューマン）と共にあると……、本当に歳相応に見えるから不思議だ」
「それが本来は普通の事なんだろうが……。しかし、アイズの方から誘うとは意外だった」
「そうだね。僕も驚いたよ。……ただ、案外アイズなりの小癪な策かもしれないよ」
フィン達は街に繰り出すアイズの後姿を眺めつつそれぞれ思いを巡らせる。
今日はダンジョンに潜らずに商店街をポランと共に回る予定だとか。
【ロキ・ファミリア】の他の団員も小さなアイズが他所の【ファミリア】の者とパーティを組むとは思っておらず、それぞれ心配の様相を呈していた。
監視という意味でベートやヒリュテ姉妹に後を追わせたりしている。
大事な戦力でもあるので最低限の対策だった。

#1―07　冒険者依頼

【ヘスティア・ファミリア】の唯一の団員『ポラン・ブーニディッカ』は期待のルーキーであり【ロキ・ファミリア】の秘蔵の団員『アイズ・ヴァレンシュタイン』と臨時のパーティを組んで数週間が過ぎた。

パーティといってもアイズはポランの戦いを眺めるばかり。彼女が苦境に立たされる時だけ手助けをする程度。

ダンジョン以外では仲睦まじい女友達として過ごしていた。傍目にはそちらがメインのように見えるほど。

「……随分と【ステイタス】が……伸びてきたと思うんだけど、……まだ六階層より下には行けないんだよね？」

「アドバイザーさんからはまだ難しいと……」

ポランはアイズとパーティを組んでいるとしても戦いは殆ど単独（ソロ）である。

下層に現れる大量のモンスターの対処がポランには難しいと判断されていた。

問題となるモンスターの名は『キラーアント』という大きな蟻。討伐に手間取ると仲間呼ぶフェロモンを撒き散らす。

冒険者の間では『新米殺し』と呼ばれている。ポランの手持ち武器では硬い外殻に有効打は与えられず、大変梃子摺（てこず）る事請け合いである。しかし、アイズにかかれば息を吹きかけるだけで散ってしまう儚い存在と化す。

実際には息ではなく風の付与魔法による攻撃だが。

「……もう少し上のランクの武器であれば……ポランでも大丈夫だと……。堅実な戦い方をするのであれば……、やっぱり【ランクアップ】は必要だよ」

「……やっぱり。今のままモンスターを倒してお金を貯める方向でいった方がいいかな？」

「……堅実な戦い方なら。でも、それだと【ランクアップ】は難しいよ。……冒険者ならより強い敵に挑まないと……。堅実なだけでは壁は

越えられない」

無理に【ランクアップ】しなくても資金稼ぎだけなら今のままでもいい。それはそれでポランの冒険だ。アイズが口を出す謂れは無い。

けれども、折角出来た供だ。より高みに至ってほしいという思いがある。だからといって強敵の中に放り込むわけにはいかない。

「……ポランは既に六層の強敵と言われている……『ウォーシャドウ』は倒せているんだよね？」

「うん」

ひ弱そうに見えても確実に強くなっている。

今のポランの【ステイタス】はキラーアントとの戦闘にも差しさわりが無いほど。けれども数の暴力に勝るかと問われればアイズとて首を傾げる。

今日まで培った【ステイタス】は力が七百を超えていて、他が五百に差し掛かるほど。

資金難の為に防御が薄く感じられ、無茶な挑戦が出来ない。

（……上層のモンスターを倒し続けてこの数値……。……それはとても凄い事だとフィンやリヴェリアが言っていた。強いモンスターを倒しているわけじゃない。……この子の強みは……別にある）

数値そのものは大したことが無い。けれどもポランにはアイズには無い才能のようなものがあると思っている。

技術も特別なスキルも発現していない。それでも――

モンスターを倒した分だけ【ステイタス】が上がり続けている。

微々たる数値と侮れないレベルに来ている。

レベルがまだ1であるからこそなのか、それとも永続なのか。アイズには分からなかったけれど。だが、【ランクアップ】してもこの現象が続くのであれば脅威だ。

敵として、ではなく冒険者として非常に興味深い。

†

黙って眺めているのも退屈なのでアイズも戦闘することにした。

元よりモンスターを眺めるだけで帰る気は無かった。

ポランには荷が重い七階層に降り、目に付くモンスターは手当たり

次第に狩っていく。
落ちたドロップアイテムはポランが回収する。もちろん、数を減らした後でモンスター討伐を手伝うことも忘れない。
今は臨時とはいえ背中を預け合うパーティなのだから。
せっせと魔石を拾い集めるポランを眺めつつ新たなモンスターの誕生が無いか警戒する。それは普段から【ロキ・ファミリア】でやってきたことの延長でもあるので、それほど苦痛とは思わなかった。
寧ろ、当たり前のことを当たり前の事として出来ている事に驚きを感じる。
（……近い歳の人と冒険するの……初めてかも。……しかも自分より弱い。他の団員と何が……違うんだろう）
少し間延びした喋り方をするアイズは内なる声も似たような有様だ。だが、高速戦闘時はもう少し早口になれる。
体感時間的な理由でもあるのか、自分でももっとはっきり喋りたいなとは思った。
（……ポランも似たようなものみたいだけど……。ちゃんと聞き取れているのかな？　会話は特に何も指摘されてないけど……）
戦闘に際して文句を聞いた覚えが無い。
リヴェリアからもう少し大きな声で話せ、といつも言われていたが中々それが出来ないので苦労している。
意識すると上手く喋れない。自分は黙って戦闘している方が楽だ。
そうは思ってもやはり格下の相手をいずれは教育する立場になる。その時、相手との会話が出来ないとパーティは成り立たない。
「……全部拾い終わりました」
「……ん。じゃあ……次……。そうじゃないね。……私の声ってちゃんと届いてる？」
「はい」
「……こういう広い空間とか……、いくつもの坑道のある場所だと……声が吸い込まれるものだけど……。声がちゃんと届かないと駄目だよね」
アイズは懸命に声を出した。

ベート達と違って普段から叫ぶ事はしないので自然と今の控えめな声になっている。それが小さな声だと言われているのだが、直した方がいいのか、改善の方向で発声練習をした方がいいのか迷っていた。

戦闘以外の事は全然頭に無かった。料理も手伝ったことが無いから――多分――苦手だと思う、とアイズは思う。

「モンスターが多い場所で大声は不味いかもしれません」

赤毛のポランの言葉に納得するアイズ。

他の冒険者が居るならば助けを呼ぶ時にありがたい事もある。けれど、単身だとモンスターを引き寄せる事になる可能性があるので余程の事が無い限りは無駄話は控えた方がいい、という考えもある。

連携と言う意味では完全な無口では駄目なのだが――

「たくさんモンスターを生み出すダンジョンは限界って無いんでしょうか？」

「ん？　モンスターの限界？」

ふとポランはそう言った。

モンスターは全て倒すと決めているアイズにとっては思いもよらない言葉だった。

そもそもでいえばモンスターが憎い事はダンジョンが難い事と同義である。だが、アイズ個人はダンジョンが憎いという意識は無い。ただただモンスターを殺す。それだけを思って戦ってきた。

「例えば魔石……。これ、いくらでも出てきますよね？　事前に掘り出せばモンスターは出ないのでは？」

「……ああ。いや……、魔石は掘り出せないみたい。……その代わり珍しい鉱石は掘り出せるらしいよ。希少金属とか」

モンスターになる前の魔石そのものを掘り出す。

そんなことは思いもよらなかった。後でリヴェリア達に尋ねてみようと思った。

「魔石を先に取れるとして……。それだと【ステイタス】は増えないと思う。君はモンスターを倒さないと駄目、なんだから」

「……そうでしたね。でも、モンスターを安全に倒すより魔石を効率

的に回収できる方が冒険者としては……。ああ……、下層に居る強いモンスターと戦えなくなりますか……」

「そうだよ」

面白い発想だとアイズは思い、苦笑する。

ダンジョンは単なるアイテム回収をする場所ではない。凶悪なモンスターを倒す目的がある。

下層に行けば行くほど強く、狡賢(ずるがしこ)く、命の危険を犯す。

それらに挑戦するのが命知らずの冒険者だ。

未知のアイテム。名声。アイズのような私怨も含まれる。中には単なる自身の増強というのも――

ポランは建設的な人間(ヒューマン)だ。無理をしない戦い方を良しとする。

臆病という訳でもない。多少の危険は理解した上で挑戦することも良しとしている。そうでなければアイズが下層に行くことを許さない筈だ。そちらは危険だから行くのをやるようと――

†

新たなモンスターの大群に襲われる前に地上に引き返すことをアイズは決定する。

本来はもっと下に行くところだが、ポランの安全を考えれば今の階層が限界である。そして、ポランも同意した。

地上に帰り、回収したアイテム類を換金した後で分け前を配分する。完全にポランに譲渡するより強者の報酬を多くした方が今後の付き合いにおいて面倒が少なくなる、という事をフィンから聞いていたので実践する。

とはいえ、上層の報酬はアイズにとって微々たる額だ。全て渡してしまってもいいくらいに。

「……普通だと私が２５０００ヴァリスで……、ポランが４５００ヴァリスになるけど……」

「それで構いません」

「……うーん。……うー？　……えと、こんなに細かい額で分けるのに……慣れてなくて。１００万ヴァリス以上ならちゃんと分けるけど、これだと……。申し訳ない気持ちになる……」

【ロキ・ファミリア】としての報酬としては低価格帯だ。冒険者依頼（クエスト）でも受けないレベルである。

かといって全部上げるとは言えない。【ファミリア】として最低限度の維持や矜持を持たなければならないので。

「もし、【ランクアップ】したら１５０００ヴァリスになるよ。今のパーティは君との触れ合いみたいなものだから……。装備品を新調したいなら協力は惜しまない」

「堅実な冒険じゃないと神様が心配するので。少しずつ強くなっているとはいえ、私は無理は良くないと考えています」

今ほどポランが眩（まぶ）しく見えたことは無い。ついあまりの神々しさに目元を覆う仕草を見せるアイズ。

荒々しくモンスターを倒してきた自分が惨めに思うほど。

なんて真っすぐで実直な人間（ヒューマン）なんだと驚いた。いや、これは自分も見習うべきか、それとも生意気な奴だとベートのように言い返すべきか。

迷いつつも報酬を当初の予定通りに分け、ドロップアイテムの一部はポランに譲渡する。これはアイズにとって必要なものだと思わなかった部分なので。

分け終わった後は帰宅するか、商店街の見物。武具に関して、当分行く予定は無い。

「……いくつか食料を買い込んでから回復薬（ポーション）の値段の確認をしようかと」

「……じゃあ【ディアンケヒト・ファミリア】？　それとも【ミアハ・ファミリア】？」

冒険者に必要な回復薬（ポーション）などのアイテムは上記の【ファミリア】での購入が一般的だ。前者は値段が高めでアイズのような第二級冒険者達が利用し、後者は貧乏なポラン達のような駆け出しが主に利用する。

商業系もランク分けされおり、名声が高いほど品物も高い。そして、質も同様。

アイズは【ディアンケヒト・ファミリア】をよく利用するお得意様

だ。だからといって他の店に行ってはならない規則は無い。

†

ポランは神ヘスティアとも知己である【ミアハ・ファミリア】の店の向かうことにした。どの道、今の彼女に高い型物は出来ない。

アイズも神ロキに指定された店以外に行ってはならないとは言われていないので同意を示す。

件（くだん）の【ファミリア】が経営する店の名は『青の薬舗』という。

店員は団員一名。

ポラン達が店に入ると棚に陳列された回復薬（ポーション）が目に入った。

多くは試験管のようなもので、色や味によって効能が変わる。これらは様々な素材を調合して作られる。

作るのは団員の仕事で、神ミアハも製作に携わっている。これらのアイテムは神だけが製作できる特権という訳ではない。

「いらっしゃい」

団員兼店員でもある人物は女性。頭に犬耳がある亜人種（デミ・ヒューマン）『犬人（シアンスロープ）』だった。

歳の頃は十代後半。薄茶色の髪の毛に眠そうな表情を見せている。

間延びした喋り方をする彼女の名前は『ナァーザ・エリスイス』という。

「……ああ。【剣姫】……。大手【ファミリア】がうちに来るなんて……、どういう風の吹き回しかな？」

「彼女（ポラン）の……付き添いです」

大手【ファミリア】に対して警戒感を露（あらわ）にされたことでアイズは緊張する。

弱小【ファミリア】は大手によく嫌味や馬鹿にされることが多い。

ナァーザの態度もそれにちなんだものであった。だからといって門前払いする程沸点は低くない。

（ロキからこの【ファミリア】のこと、聞いておけば……良かったかな）

全く事前情報が無かったのでロキとの仲がとれほどのものなのか

眉根を寄せられたが、アイズに対してそれ以上の小言は出てこな

かった。それとポランは店員の態度を無視して商品を物色していた。
お得意様であればアイズとてポランのような態度になる。ただ、初めての店にはいくらか苦手意識があるようだ。
商品である回復薬（ポーション）は体力を回復させるものの他に魔法に必要な精神力（マインド）の回復も出来るものがある。
ナァーザの店にあるものは格安かもしれない。けれども製作が難しい回復薬（ポーション）はそれなりに高額になる。これは別に値段を不当に釣り上げているからではない――一部はそんなこともあるけれど。
素材入手の難易度によって値段はある程度決まり、市場価格帯というものがあって値段が決められていく。
冒険者が購入するアイテムの多くは変動相場制だ。

†

ポランは体力回復の回復薬（ポーション）を二本購入する事にした。値段は一本２０００ヴァリス。今日の稼ぎが無くなるほど。
回復薬（ポーション）の試験管には栓がしてあり、長期保存を可能とする。余程質の悪いものでもないかぎり何年経っても劣化することは無い。ただし、味は保証しない。
「そうだ……。【剣姫】が居るから……。ねえ、冒険者依頼（クエスト）を頼まれてくれない？」
「……冒険者依頼（クエスト）？」
「うちの様な貧乏【ファミリア】で……悪いんだけどさ。今、開発中のアイテムの素材が足りない……、というか手に入らないんだ。地上でも探しているんだけど……、やっぱりダンジョンで探した方が早いかと思って」
店の奥にいったん引き返し、ナァーザは色々と必要な品物が書かれた紙を持ってきた。
店員が冒険者に仕事を依頼することもままある。
正式な依頼は冒険者ギルドに提出するものだが、冒険者と直接契約する場合もある。余程キナ臭いものでもないかぎり、この手の交渉事に罰則は無い。
「色々と情報を集めた結果……。二十階層くらい潜らないと駄目みた

いなんだけど……」
「……私個人は……十七階層までしか潜れない。遠征はしばらく先だから」
思っていたのと違う、とナァーザはがっかりした顔になった。
他の団員に頼むことは出来るかもしれない、と伝えて機嫌を直してもらうことにした。
「単身（ソロ）で中層域に行けなんて……、いくら私でも無茶だと思ってるけど……。はぁー、残念だ。ちなみに報酬はうちの商品。大手に払える程の余裕が無くてね」
ため息を履きつつポランから受け取ったヴァリス金貨を数え始める。
仕事は仕事として割り切っているようで商魂たくましいとアイズは苦笑した。
ナァーザが欲しているのは鉱石とダンジョン内に湧き出る泉や植物類だ。それと数は少ないがレアモンスターのドロップも混じっている。
攻略可能階層のアイテムならば引き受けてもいいと言うとナァーザは抑揚のない表情などで喜びを表した。
アイズにとってはダンジョン攻略が出来るのであれば文句は無い。
「十七階層でも手に入るものであれば持ってきて。期限は特に決まってないけれど……」
「……明日からでよければ」
ナァーザはカウンターの裏で握り拳に力を籠め、少しだけ喜んだ。
相手は知名度が高い【剣姫】である。依頼の達成率も他の冒険者よりも高く、信用もある。そんな人物と知り合えただけでも充分すぎるほどの益だ。喜ばない筈は無い。

†

必要な書類を受け取ったアイズは買い物を済ませたポランと共に店を出る。
臨時とはいえパーティを組むことになったが、ダンジョンに潜れさえすればいいという安直な感想から少しずつ誰かの役に立つ仕事へ

意識が向き始めた。
モンスターを闇雲に倒すだけの日常は忘れてはいけないと思いつつも、冒険者としての仕事もこなさなければならない。
次の日、ポランは主神と共に本拠(ホーム)の掃除や食事に買い物でダンジョン攻略を休む事になった。
暇になったアイズはナァーザの依頼をこなすため、仲間を募る。
「……冒険者依頼(クエスト)か……。しかも二十階層……」
怒られるような案件とは思わなかったので幹部達により深い階層攻略が出来ないか打診していた。
勝手に深い階層に潜らない事を守っていたが依頼となると少し毛色が変わる。
要望された素材のリストを眺めていたリヴェリアは安全度を模索する。
(……大人しくしていると思ったら……。いやしかし……、仲間を募ろうという考えから冷静さを……)
(アイズが冒険者依頼(クエスト)をねー……。ただの戦闘狂というわけじゃないようで安心したよ)
金髪で人間(ヒューマン)の少年と見紛う小人族(パルゥム)の『フィン・ディムナ』は事の成り行きを微笑みながら見据えた。
ここしばらく女の子らしい生活を続けてきたので、話によっては制限を緩くしようかな、と。しかし、それを簡単に許さないのが彼女(アイズ)の教育係を自称する王族(ハイエルフ)『リヴェリア・リヨス・アールヴ』だ。

#1―08　保存液

【ロキ・ファミリア】の看板ともなりつつある【剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』の独断専行はどうしても許せない。しかし、それも時間の問題であることは教育係（リヴェリア）である彼女も自覚し始めている。

次の【ランクアップ】を済ませれば彼女にも下級冒険者の何人かを任せたいと考えていた。

（……かの神ヘスティアの眷族がアイズに様々な影響を与えたようだ。今までの無鉄砲さが希薄となっている）

それと折角受けてきた『冒険者依頼（クエスト）』を無駄にするのも勿体ない。

単独先行する気が無いのであれば何人かでパーティを組んで真面目に取り組んでもらうことも吝（やぶさ）かではない。

「指定階層までなら……、許そう」

年長者であり王族（ハイエルフ）特有の気品ある立ち姿が印象的な彼女も今だけは娘の成長を喜ぶ母親のよう――

彼女の言葉に一番喜んだのは表情の乏しいアイズだ。

子供らしいコロコロ変わる顔は出来ないが内心では精一杯喜びをアピールした。

目的階層に単独で向かう実力があることはリヴェリアも疑わない。けれども、敵の多い【ファミリア】なのでモンスターだけに警戒することは出来ない。

黙っていると勝手にダンジョンに行きそうなアイズを留め、パーティの選定をアイズ自身に決めさせる。

大勢で攻略するのは物々しいので三人程度に留めるように、と。

†

幹部の部屋から退出したアイズは早速行動を開始した。

実際に攻略するのは明日からだが――今のうちに下準備を整えておくことは冒険者のとして当たり前だと教わった。そしてそれを実践する。

単なる素材採取なので荷物持ちを一人。もう一人をポランにしよ

うかと思ったが彼女は今は忙しいので自分達の【ファミリア】から選ぶのだが、自分より強い幹部は参加しない事は既に聞いている。
本当はリヴェリアを誘いたかった。
（あと一人……。誰にしよう）
煩い事を我慢すれば狼人（ウェアウルフ）の『ベート・ローガ』を誘う事も頭に入れておく。
今回はいつもの攻略ではなく、アイテム探索だ。やはりアイテムに詳しい仲間が相応しい。
本拠（ホーム）の中で適任者選びに奔走する少女（アイズ）。いつもと違う戦いが始まった。
アイテム探索を始めて早二日――注文の品物を揃えるために必要なレアモンスターの捜索が難航。これは元々想定内なので仕方がないとはいえ、見つからないとイライラする。
短気な冒険者には向かない仕事だとアイズは思った。
（……二十階層のドロップアイテムとかは回収し終わったけれど、上層にだけ現れるレアモンスターってこんなに数が……少ないものだとは……）
ある程度の事前情報を得ていたとはいえ、滅多に現れず、またドロップアイテムを落とす頻度も低いとなると長期戦を覚悟しなくてはならない。ただ、アイズにとって辛抱強く待つことは意外と苦痛だった。特に精神面が。
（……狙った獲物を効率的に仕留められれば苦労は無い。……ただ、楽が出来ると冒険者は……きっと【ランクアップ】出来ない）
強さにこだわらない冒険者であれば効率化はありがたい事だ。反面、下層の強敵と戦えなくなる。それは――何となく理解できた。
【ロキ・ファミリア】だから、というわけではないがアイズとて強くなりたい願望がある。生活の為に冒険者になったのではない。
モンスターに対する憎しみ。
彼女が冒険者になった理由の一つだ。だからこそモンスターさえ倒せればいい。より強力な倒すべき敵、というものが居るならば強くならなければならない、と思っている。

生活のための冒険は久しく見過ごしてきた概念のようなもの。
仲間達の顔を見つつアイズは自分以外の存在に今まで気を配れていなかった事を改めて知った。
「……このまま現れなければ一旦……撤退します」
「了解しました」
中層域まで行ける仲間を募ったけれど誰も大きなケガもなく任務をこなせている。
足手まといとは言わない。彼らもたくさんの戦闘を経験し、それなりの場数は踏んでいる。
さすがに駆け出しは気が引けたので連れてこなかったが、彼らには彼らなりの訓練方法がある。
「今回採取したドロップアイテムでどんなアイテムが出来るんでしょうか？」
仲間のふとした疑問に対し、知識を持っていないアイズは首を傾げた。
通常、依頼内容は聞いてもその後の詳細まで尋ねる事はしない。だから、自分達が採取したものの使い道は当然、知らない。
制作系【ファミリア】であれば団員共々それなりの知識を有していると思われるけれど、探索系であるアイズ達には窺い知れない。ただ、年長者であれば色々と知っている事もある。
「種類が多いから……。でも、そういう詮索はしない方がいいと思う」
「すみません」
何を創ろうとしているのか親切な依頼人であれば教えてくれる。けれども見ず知らずの冒険者が全員善人とは限らない。
性善説に基づくとはいえ、その辺りの駆け引きぐらいは――『青の薬舗』の店員である『ナァーザ・エリスイス』――出来るはずだ。

†

入手困難なドロップ品を諦め、中層域分だけを先行で引き渡すことにした。
無理をしない冒険もまた立派な仕事である、と。
一先ずアイテムを届け終わり、僅かばかりの物品を渡された。零細

【ファミリア】だから充分な報酬は出来ないと言われていたが、アイズ以外からは不満が漏れた。
　これでは釣り合わないと。
「うちは貧乏だから。【ディアンケヒト・ファミリア】のように大手のお得意様が居ないんだ」
　間延びしつつも真剣な表情で言ったナァーザ。
　利益を出さなければ報酬はどうしても払えない。更に【ミアハ・ファミリア】には多額の借金がある。だから許せ、と。
　元々アイズ一人が請け負った仕事だ。他が文句を言うのは筋違い、ではあるのだが――
「……それから、研究しているアイテムは……儲けが出るほど売れる物とも言えない。それでも聞きたい？」
「聞いても分からないと思う」
　アイズの仲間達は不満げだが理由が判明した以上は今以上に責めても仕方が無いと判断し、諦める事にした。
　代わりにどうしてこの依頼を受けたのか、問い詰めた気持ちが湧いた。
　二十階層でレアアイテム集めに奔走して得られた魔石は相当数に上るので、実際の損失は殆どない。けれども報酬は別物と考えていたからついつい文句が出る。
「……簡単に言えば『保存液』……。冒険者はケガをする。だけれど全員が満足な回復手段を持たない。……私のように……」
　長袖に包まれた右腕をさすりつつナァーザは言った。
　彼女の説明によれば欠損した身体の部位を保存する溶液の作成。資金が溜まれば強力な回復手段にて再生の可能性が高まる。
　もし、ダンジョン内でモンスターに骨まで食べられるような事態に陥れば魔法や回復薬（ポーション）類では決して再生できなくなる。
「……だから頑張って持って帰った部位を入れて少しでも時間的余裕を作る方法が必要になる。……でも、切り落とされた自分の腕とか気持ち悪いよね」
「……」

アイズは冒険者となってからたくさんケガをしてきた。けれども切断に至るケガの経験は無い。モンスターの腕や首はよく切り飛ばしてきたが――

そういう事態を想定していなかった。だから、急に恐怖が湧いてくる。

今まで考えないようにしてきた。けれどもあり得ないことは無い。強ければケガもしない、というのは単なる言い訳だ。もし、そういう事態に陥れば――

自分はそれでもまだ冒険者で居られるのか。

アイズはナァーザの顔をじっと凝視する。対する彼女は少したじろいだ。

小さな少女が敵意を向けているように――感じられたので。

「ちゃんと保存されているかどうかって分かるものなのですか？」

アイズの仲間の一人が訪ねた。あまり実感が湧かないのか、それとも単なる興味本位か。

平然とした態度にアイズが少し驚きを示す。

「……ミアハ様が判断してくれる。神様は大体の事は分かるらしいから。……自分でもどうしてわかるのか分かってないみたいだけど……」

苦笑しながらナァーザは言った。

超越存在（デウスデア）である神達の能力はオラリオに住む一般の者達には窺い知れないものだ。尚且つ、その力も全て公開されているわけではない。

そういうことができるから神様だ、という単純な認識程度しか持っていない。

「腐り難くすれば……、なんて考えていたけれど……。ダンジョンに持っていくとなると重量が嵩（かさ）むから意味が無いかもしれない。けれども何らかの役に立つ可能性もなくはない」

ナァーザの中では完成形が出来ている。その運用方法も。

後は作るだけ。

ただし、それによる利益は自分が想定しているよりも低い筈だと――

―

大抵の冒険者は手足を失った時点で諦める。その実例が自分だ、と言わんばかりだった。

†

まだ実験段階なので詳細な情報が出せないし、同業にも知られたくないとのことなので秘密を約束させられた。

その同業【ディアンケヒト・ファミリア】には特に秘密にするようにと強く言われてしまった。

「……ケガをしないように……。なんて言えないよね」

アイズが今まで以上に深刻に受け止めたらしいと感じ取った団員達は言葉を失った。

確かに五体満足であれば何も問題は無い。更に高レベルの冒険者は滅多に大きなケガをしないほど身体的にも強くなる。

もし、耐久などの【ステイタス】に頼りっぱなしのまま酷いケガをすれば混乱するのは必定――

想定していなかった事態が一番怖い事だ。

「……悪いけど依頼（クエスト）を続行する。レアモンスターの情報……なんとか集めてほしい」

アイズは仲間達に頭を下げた。

危機意識を持ったがゆえの行動だが、仲間達は大いに驚き、そして

――

「わ、分かりました」

「そうすると次の攻略は日をまたぐ形になりますよね？」

それぞれ意見を出してきたので可能性の高い方法をまとめてから再攻略となった。

――そんな状況を本拠（ホーム）に居る幹部にも説明するアイズ。

つたない言葉ではあったがフィンやリヴェリアは黙って聞いていた。

保存液の価値は今の段階では分からないけれど、アイズが必要だと判断したのであれば無下にするわけにはいかない。

それが失敗に終わるかもしれなくとも――

「……遠征には向かないかもしれないがアイテム探索には何かと便利かもしれないな」
「だが、回復手段が限られてくる。部位の再生は高度な技術だ。まして一般の冒険者では……」
「だからこそ長期保存で余裕を持たせるんだろう？　その為には仲間が必要だ。もし、単独（ソロ）であれば尋常ではない努力が必要になるね」
「……ああ」
三人の幹部の内ドワーフの『ガレス・ランドロック』は難しい話には参加せず、ただ聞き耳を立てていた。
彼の場合は自身の身体を強化すればいい、という考えがあるのかもしれない。事実、彼の肉体は相当に強化されており、深層域のモンスターでもはじき返すのではないかと思われるほど。
「……ああ、あとこの話は秘密……という事になってる」
「秘密？」
「まだ実験段階だから、じゃないかな。同業には秘密ってことだよね？」
フィンの言葉に何度も頷くアイズ。
説明が下手なのは自覚しているがちゃんと伝わると頬を赤くするほど嬉しくなる。
それだけ見れば年相応の少女だ。
「楽しみというのは不謹慎だが……。冒険者にとって必要になる可能性は秘めている。折角増強した冒険者達が不意の事故で簡単に居なくなっては【ファミリア】運営もままならない」
「都合よく良い人材に恵まれる保証もない」
可能性の段階ではあるがアイズの依頼は応援する価値があるとフィン達は認めた。
だが、大手のアイテム制作系【ファミリア】がこの手の情報を持っていないのは未知の概念だからか、と疑問に思う。
確かに神にしか理解できない事柄というのはたくさんあり、おそらく神ロキであれば有効な知恵を出してもらえる。
問題なのは神ロキが秘匿性を重要視しているか、だ。

何にせよ形がまだできていない問題なのでアイテムの詳細は幹部達の中で処理することにした。それと聞いた限り保存液という名称は幹部を除けばアイズと件の少女ポランが聞いたのみ。

違う【ファミリア】なので箝口令は敷けない。

方針が決まった後はアイズの判断に委ねる事にし、話題は打ち切られた。

一人の少女が少しずつ、確実に成長する様を見てリヴェリアも安堵の表情を見せた。

†

報告を終えたアイズは仲間と共にダンジョンアタック（攻略）に向かう予定だが闇雲な探索が出来ない以上、情報収集に重点を置くことになる。

それと念のために行きつけの【ディアンケヒト・ファミリア】に顔を出していく。

変な噂を立てられて勘繰られては困る、というフィンの提案を飲んだ。

もし冒険者依頼（クエスト）をこちらでも受けられるのであれば『借り』を作ることができる。もちろん、階層指定は忘れず――

（……問題があるとすれば主神が……ちょっとアレな神（ヒト）というくらい）

件（くだん）の【ディアンケヒト・ファミリア】の主神ディアンケヒトは同業【ファミリア】の主神ミアハと仲が悪い。というかいつも貧乏人と蔑（さげす）んでいる。あと、笑い声が鼻につき、大きな声にも――

団員はとても人当たりの良い人間（ヒューマン）だが、主神のせいで気苦労が絶えない模様。

アイズも会いたいとは思わない、そんな神様であった。

――案の定、店に行ったら大きな笑い声が聞こえてきた。とても不快で長く居たいと思わせない程に。

「ガハハハ！」

一度開けた扉をつい反射的に閉めてしまうほど。

数秒程深呼吸した後で治療院の扉を開ける。

神ディアンケヒトは豪快な老神である。声も大きしお金にがめつい。その影響か、品物の値段もそれ相応に高い。けれども効果は折り紙付き。信用もあるのだから驚きである。

対照的な神ミアハは困っている人が居れば自分の製品を――平然と――無償で提供してしまう。そのせいで団員のナァーザはいつも苦労していた。

「おお、【剣姫】ではないか」

いつも店の奥に居て滅多に姿を見せない主神だが、顔見知りではあった。

大量注文だと思ったのか、近づいてくる。

（……どうしよう。買い物という訳じゃないのに……）

小さな子供のアイズにとって豪快な人物は幹部のガレスであれば平気だが、神ともなると委縮しそうになる。

大人は怖い、という印象が少なからずあるので。――よく叱られているから仕方が無いのだが。

「……商品の様子と、冒険者依頼（クエスト）でもあれば……と」

「なぁにぃ！」

いちいち厳めしい顔と大きな声で言うので話しかけるのが苦手になってくる。

カウンターに居る団員の『アミッド・テアサナーレ』に助けを求めたいところだが、身体も大きい主神によって姿が見えない。

はっきりいって邪魔だった。

「お主が冒険者依頼（クエスト）を要望とは……。随分と成長したのだな。殊勝な心掛けよ」

「ディアンケヒト様。そんなに近くで大声を出すと彼女が怖がってしまいませんか？」

「ふん。冒険者で『二つ名』を持つ者のクセに神を畏（おそ）れるか。【剣姫】であれば言い返す程度……造作もないであろう」

「……普通に委縮しているように見えますが。話は私が聞きますので」

（……ありがとう、アミッド）

年齢で言えばアミッドは五つ以上も年上の女性だが顔見知りとなって以降、砕けた言い方で接している。
冒険者という事もあり、アミッドの方からも敬語で話せとは言ってこない。
自分の主神を何とか脇に追いやり、アミッドはアイズに話しかけた。
厄介な客相手においてディアンケヒトは頼りがいのある神だが、いつもの調子で近づく性格が災いして他の客が寄り付かない事態がたまに起きる。あと、貧乏人に対して大柄な態度で馬鹿にする。それらが眷族にとっては頭の痛い問題となっている。

#1―09　リヴェリア・リヨス・アールヴ

ダンジョン攻略から冒険者依頼（クエスト）に重点を置いた生活を始めて数日後、久方ぶりに【ヘスティア・ファミリア】唯一の団員『ポラン・ブーニディッカ』と出会った。

丁度食料の買い出しに出ていたところだった。

お互い約束を取り交わしたわけではないので一先ず軽い挨拶から。

「……どうも」

「こちらこそ……」

赤髪の少女ポランは以前の食中りから体調を気にしつつ健全なダンジョン攻略を続けていて、積極的な行動は控えていた。

対して金髪金眼の少女アイズ・ヴァレンシュタインもここしばらくはモンスターよりアイテム素材に力を入れている。

年齢だけで言えば二人とも同い年の少女。だが、双方には埋めがたい実力差があった。

アイズはレベル４への道を。

ポランはレベル２の【ランクアップ】までもう少し、というところまで来ていた。

「……団員は増えそうにないんだね」

【ヘスティア・ファミリア】はポラン一人だけ。パーティを組むには他の【ファミリア】の協力が必要不可欠となっている。

単独（ソロ）攻略はとにかく非効率的だ。稼ぎにはあまり向かない。

またアイズと組んだとしても分け前の差が大きく、利益率が低くなる。それでも構わないと本人だけが思っても生活があるので早めの改善が求められる。

冒険以外の話しであれば仲の良い女の子友達にしか見えない。けれども片方は大手【ファミリア】の期待のルーキー【剣姫】である。

「私は冒険に必要なアイテムの備蓄と並行して装備品の調達かな。日用品も大事たけど……」

彼女（ポラン）が先ほど購入したのは塩などの調味料だ。

廃墟同然の本拠（ホーム）に住んでいるポランにとって火器は使えないし、調理場もまともなものが無い。

商店にお願いして器具を使わせてもらっている。

「神様も『あるばいと』先で色々と融通してもらっているので……。生活はそんなに悪くないです」

アイズの本拠（ホーム）は大勢の団員を抱えられる大きな建物で風呂場も大きい。生活するには不自由など無いと自信を持って言える程だ。しかし、弱小には弱小なりの魅力があるとアイズもポランも思っている。だから、二人とも互いを妬んだりはしなかった。

アイズはダンジョン探索を誘ってみた。【ミアハ・ファミリア】の依頼は済んでいたので。

「毎日は無理ですが……。私で良ければ」

いつもの素直な笑顔がそこにはあった。

アイズはそ（ポランの笑顔）れを嬉しく思った。

†

また二人だけで探索するのもいいのだが、ポランの【ランクアップ】の邪魔になってはいけない。そう考えるとアイズに出来る最良とは何なのか、だが――

未知なる発見や冒険は深く潜るごとに多くなる。しかし、ポランはまたそれらとは違う発見をもたらしてくれそうな気配を感じた。

――なので、パーティメンバーを増やす試みに挑戦する。

簡単なのは【ロキ・ファミリア】だ。当たり前かもしれないが。

「……その為には十階層以上……潜れる体制が望ましいです」

ポランは堅実な冒険者だ。いくらモンスターを倒すごとに【ステイタス】が増えるタイプだとしても。

技術自体は特別なものではない。武具も恵まれてはいない。それと単独で階層主を倒せる実力も無い、というのは流石に無茶ではあるが。

「……私は初期の頃からパーティを組めました。……逆に単独で活動することが少ない。……年齢の事も関係するかもしれないけれど」

「うちの【ファミリア】は……神様が頑張っていらっしゃるようです

が、新しい団員は未だに……。無名だからでしょうか？」
ポランはアイズから見ても目立った行動をしていない。
それはダンジョン攻略をしていない、のではなくアイズのような派手さが無いだけ。
赤毛でアイズと共にダンジョンに潜る、だけでは知名度は増えない。それは既に証明済みである。
ではどうすればいいのか。流石にアイズとてよそ様の【ファミリア】を有名にする方法は思いつかない。
「……悪い事をするわけにはいかないしね」
「……それはちょっと。神様が言うには『ケンゼン』な【ファミリア】を目指しているとか」
「……それは単に地味な【ファミリア】って意味だと思う」
アイズがお世話になっている【ファミリア】の主神ロキとヘスティアは互いに仲が悪い。それだけでも充分に知名度がありそうなものだ。それなのに【ファミリア】自体は存在していないかの如く、噂話にも出てこないほど。
親しい別の【ファミリア】は【ミアハ・ファミリア】くらい。この【ファミリア】の存在も最近になってから知った。
迷宮都市オラリオに存在する【ファミリア】はアイズが思っている以上に多く存在し、その全貌は未だに把握できていない。
新しい神が何年かに一度、訪れて【ファミリア】を作ったりするらしく数は常に変動しているとか。

†

ポランに言ったところでどうにもならない問題のように感じたので【ファミリア】の知名度の話を一旦中断する。
少女二人だけでは何も進展は望めないと判断した。
アイズはポランと共にオラリオの中央広場（セントラルパーク）に移動する。
多くの冒険者や住んでいる住民たちが行き交う中心地。ダンジョンに蓋をするように天まで聳（そび）えている摩天楼（バベル）施設を中央に配し、東西南北斜めに真っすぐな通路が開けて見えている。中央広場（セントラルパーク）は摩天楼（バベル）施設のすぐ傍にある。

何日かに一回は何らかの催(もよお)しが開かれる。
「……そういえばアイズさんはいつもジャガ丸くんを食べているんですか？」
「……外に出た時はだいたい食べているよ」
「栄養面とか気にしていないかと……」
「……本拠(ホーム)ではちゃんと食事を済ませているから。ジャガ丸くんだけしか食べないわけじゃないよ」
そう言うとポランは安心したようだった。
充分な設備のある【ファミリア】だから栄養面を気にしない事もあるかな、と思う程度。しかし、ポランはアイズ達と違って切迫した事情があった。
まずお金を稼がないとまともな食事が出来ない。栄養面も不十分である。
神は不変な存在なので空腹を感じたとしても餓死するかどうか不明。しかし、団員はそういう都合の良い能力を持っていないので食事は大事である。
「……ポランは回復薬(ポーション)一本買うのも大変そうだよね」
「そうですね。深い階層に挑戦するために備蓄しているところですが……。なかなかいざという時、使えるのかが……」
高価なアイテムを消費するのは零細【ファミリア】や冒険者には胃が痛くなる問題である。
アイズ達は大手で、深層域に挑戦できる。必然的にアイテム購入に関して気にしなくていいほど潤沢に揃えられる。絶対ではないけれど。
それからポランが困っているからといってアイテムを簡単に譲渡することは出来ない。ギルドの規約によって制限されているわけではないけれど【ファミリア】同士は基本的に敵、というか競い合う間柄(派閥)だ。時には協力関係を築く事があるが――
神同士の仲が悪ければ団員もそれに倣わなければならない。
無償の友情は【ロキ・ファミリア】には――基本的に――無い。だから、ポランと仲良くする事は――本来であれば――あってはならな

い事だ。しかし、アイズの成長に何らかの役に立つのでは、と考えた幹部達の進言によって黙認されているのが現状であった。

同性ということもあり、神口キもうるさく咎めてこない。――いや、単にリヴェリアの機嫌を気にしているから何も言えない、ということも――

†

ポランという友達を得たアイズに関して幹部達は大いに安心していた。

ただの殺戮人形だった少女が血の通った人間（ヒューマン）と遜色なく過ごしているのだから。なにより依然の無感情だった表情と今とでは――雲泥の差とは言わないが――かなり違って見えている。

もちろん、よその【ファミリア】の団員という事も気にしなければならないが、今は彼女（アイズ）の成長に良い影響を与えているのは事実だった。

彼女（ポラン）や彼女が所属している【ファミリア】の裏取りも済ませてある。

フィン達が警戒する本当の敵【ファミリア】とは無関係である事を――

そんな保護者達の気苦労を理解していない若き冒険者アイズがまたポランとパーティを組んでいいか、と尋ねられた。もちろん断る理由は無い。

ここしばらく素直に約束事を守っているし、極端にモンスターを殺戮しまくる事態も起きていない。二人だけではなく他の団員も引率するようになってきている。

「……出来ればリヴェリア達とも一緒がいい」

お願いとしては可愛い。しかし、目的は深い階層攻略だ。

まだ十二歳でレベル3の少女の頼み事としては物騒極まりない。

しようがないな、いいよ。とは決して言ってはならない状況なのだが――

「……お姫様は僕らを何だと思っているんだろうか……」

フィンは苦笑する。

低年齢であるために表現が拙いのであれば仕方がない。けれども

目的は至極物騒であることを忘れてはいけない。
「……彼女は面白い発想を持っている。……だからリヴェリアならある程度は、と……」
「ほう。お前も他人の言葉を気にするようになったんだな」
「……話を聞かない人に聞こえる」
口を尖らせて不満の意思を見せる【剣姫】アイズ。
歳相応の子供の顔をする未来の幹部の姿に気をよくしたリヴェリアは同行に同意した。
流石にフィンやガレスも一緒という事は出来ない。彼らとも一緒だと物々しい遠征と大差が無く、また周りが騒然となって混乱が広がる。
ただ――フィンも同行の意思はあった。ずっと机で事務作業ばかりしていたので身体が鈍(なま)ってきたと感じていたところだ。
次辺りには――そう考えて今回はリヴェリアに譲る。
「……問題があるとすれば……、彼女の報酬が減ること……」
「……それは大事だな。よき働きをすればそれに見合った追加報酬を与えればいい。というか彼女は……その……戦えるのか？」
ポランの戦い方を知るのはアイズだけ。
随分と熱心だからさぞ戦闘も上達しているのだろうとリヴェリアは思っていたが――アイズの表情は急に曇る。
パーティメンバーとしてある程度の――【ステイタス】など――情報は聞いているがリヴェリアに今話す事かと疑問に思った。
確かにパーティを組む約束は取り付けた。けれどもまだダンジョンに潜っていない。急に心変わりされては彼女(ポラン)に迷惑がかかる。
しかし、それは杞憂に終わる。
言いにくそうにしている相手から無理に聞き出そうとは思っていなかったようで、雰囲気を察したリヴェリアは会話を打ち切った。

†

ポランはアイズと違って健全な探索をするため、攻略日時が決められている。これは体調管理の為の必要措置である。
アイズ達も上層から中層域まで行けるとはいえ下準備も無しに突

貫することは無い。
その辺りのすり合わせもアイズはちゃんとするようにしていた。
戦闘一辺倒だった頃に比べて幾分か成長している彼女の様子に保護者であるリヴェリアは安心した。
(年上ばかりの【ファミリア】では絶望的だったが……。やはり歳が近いと何かと都合がいいようだな)
リヴェリアにとってもポランは知らない存在ではない。
どのような戦いをするのかは知らないが、精神面では役に立ちそうだと感じた。
神ヘスティアも仲が悪いと言われている神ロキの眷族に対して付き合いを禁止しているわけではない。
(……しかし、神ヘスティアは普段は何をしているんだ？　本拠(ホーム)が廃墟だというのは聞いていたが……)
アイズや他の眷族達の証言によれば露店商や摩天楼(バベル)にある飲食店で働いているらしい。
神ロキはその辺りに関心がないようで、尋ねても何も知らないと言っていた。
闇派閥(イヴィルス)でないのであれば問題は無い。
普段は本拠(ホーム)でのんびりと読書をしている王族(ハイエルフ)の『リヴェリア・リヨス・アールヴ』は単身、外に出て情報にあった店を探す。
他のエルフ達は彼女(リヴェリア)の姿を見かけるだけで歓喜の声を上げる。騒動の元だと自覚しているので普段は外出を控えていた。
(……同じ冒険者である筈なのに……)
私用である為、手を握ってください、などの要望は断っている。
レベル6でもあるから人気があるのは仕方がないと思うのだが、リヴェリアは更に希少な王族(ハイエルフ)であるためとても目立つ。
高貴な存在が道を歩いている。それだけで同族たちから畏敬の念を抱かれている。それが当人(リヴェリア)にとっては頗(すこぶ)る煩(わずら)わしい。
そんなことを脳裏に置きつつ情報にあった店を発見。そして、すぐに頭を押さえる。
目的の神物(じんぶつ)『ヘスティア』が店の制服を着て『ジャガ丸くん』を売

るために声を張り上げているところだった。
「出来立てで美味しいジャガ丸くんだよ～。ノーマルから奇抜な味まで揃っているよ～」
（……アイズのお気に入りなのは知っていたが……。随分と種類があるものだ）
ノーマルは塩のみ。甘いもの。辛いもの。変な色のものまで。
多くの味付けに対応できる万能食のようだ。
「お～っとそこのエルフ君。一つどうだい？　って君はロキんとこのエルフ君じゃないか」
「ご無沙汰しています、神ヘスティア。……つかぬ事を尋ねますが……、普段からここで働いているのですか？」
軽く一礼した後でリヴェリアは尋ねた。神に対する態度は王族（ハイエルフ）とはいえ他の冒険者と同じだ。それゆえに自分だけが偉いと思わなくて助かっている。
神達は彼女が知る限り、庶民的で偉ぶらない。それでいて掴みどころのない存在でもあった。
「あてがわれた本拠（ホーム）がボロくてね。それとうちの眷族（こ）が内臓の弱い子で……。それでも頑張って稼いできてはいるんだよ。健気で素直なあの子にもっと頑張れ、なんて言える筈がないじゃないか」
（だからこそ神も働かねばならない……、ということ、なのか？　団員が一名しかいない事も原因か……）
「……団員の募集はどうなのですか？」
「してるよー。でも、何故かいつも逃げられてしまう。……あの眷族（こ）一人に負担を強いているのが辛（つら）いよ、全く……」
制作系の【ファミリア】であれば商品を作って売ればいい。しかし、ヘスティアは――聞いた限りでは――探索系だ。眷族が頑張らなければ収入は無い。
知名度が上がれば団員希望者が増えるはずだが、それすら出来ていない状況というのは見ていて理解した。
地上に降りた神にも色々な神（ひと）が居るのだな、と。

†

双方の都合がついた日、アイズとリヴェリア、その他数名がポランの到着を待った。

持ち物の点検など済ませて軽い談笑を交わしていると赤毛の少女が冒険者用のバッグを背負って現れる。

普段より多くなった事に驚きを見せるがすぐに気を取り直す。

「おはようございます」

「ああ、よろしく頼む」

代表してリヴェリアが返礼する。

今回の探索は上層でモンスターを倒すだけ。【ロキ・ファミリア】からすれば散歩程度のダンジョンアタックである。

アイズはともかく荷物運びに選ばれた他の団員は少々戸惑っていた。

「……目標階層は十五。たぶん報酬は少なくなるけど、ドロップアイテムは君に渡すことになっている」

「そ、そうですか。ということは火を吹くモンスターを相手にするんですね」

「……そう。君は後ろに隠れていていいから。……私達の戦い方を見て今後の攻略に役立てて」

アイズが率先して会話を交わす様子にリヴェリアは感心と驚きが入り混じる。

十二歳の少女が年上を教育する事を気にしていたが、同年代の参加は色々と都合がいいと思い、黙って見ている事にした。もちろん、必要な助言は出す予定である。

リヴェリアの知らないアイズの姿――

果たしてそれはどのようなものなのか、保護者としては大いに興味がある。

まず最初はポランが潜れる限界階層まで彼女（ポラン）の方法論で進むことになった。

よその【ファミリア】のしかも零細で弱小と付くような相手に命令されることに他の団員から文句が出るかもしれない、と危惧したがアイズが黙らせる形で静まる。

元より今回はアイズとポランが主役だ。脇役は黙って従った方がいい。リヴェリアも脇役として過ごす予定だった。

普段のアイズは狼人（ウェアウルフ）の『ベート・ローガ』とアマゾネス姉妹である『ティオネ・ヒリュテ』と『ティオナ・ヒリュテ』の四人で中層域を攻略することが多い。

しかし今回は――特にベート――彼らの参加をアイズ自身が認めなかった。理由は単純で煩（うるさ）いから。あと、弱者とは馴れ合わない、と言うに決まっているので。

アマゾネス姉妹は次の遠征のための買い出しや情報集めで別行動中だった。

早速ダンジョンに向かおうとしていたアイズだが、ポランがまずはギルドに申請してから、と言い出した。

大手である【ロキ・ファミリア】と行動を共にする上で正式な手続きの方が何かと問題が起きにくいと考えたからだ。それにリヴェリアは感心した。

「強制力はないが……、やらないよりはマシだな」

「……む」

アイズが口を尖らせつつ不満を見せる。

その後、リヴェリアが代表してポランと共に手続きを行うのだがギルド職員は王族（ハイエルフ）自ら他の【ファミリア】とのパーティ参加にひどく驚いていた。

特に同郷（エルフ）の者やハーフエルフの職員達が――

「そんなに驚く事か？　それではまるで……、一人で手続きが出来ない子供ではないか」

「そ、そそ、そんなつもりは!?」

子供扱いしたことはあるが、レベル6で子供扱いされたことには驚きと憤りを感じる。

それだけ周りが騒然となってしまったからだ。

長く冒険者家業をしているリヴェリアとて羞恥心はある。せめてギルド職員は泰然としてくれないと困る、と小声で忠告しておく。

†

多少の騒動があったもののパーティ申請は済んだ。リヴェリアとていつまでも引きずりたい案件だと思いたくないのでダンジョン入口へと向かう。

既に多くの冒険者が地の底へと続く階段を下りていく。

「……多少人数が多いがモンスターへの対処は怠るな」

「はい！」

元気よく【ロキ・ファミリア】の団員は返事をし、ポランは横で驚いていた。

単独（ソロ）は黙って潜るので。

最初こそ驚いたもののダンジョンに降りれば静かになる。基本的にお喋りしながら楽しく攻略するような場所ではない。

モンスターとの殺し合いをするところなのだから。

降りて早々壁からモンスターが生まれる。ポランも今では苦も無く倒せるまでに成長していた。

アイズが剣の手ほどきをしたから、ということはなく培（つちか）った戦闘経験が彼女を強くした。

長剣と小盾と申し訳程度の防具。小柄な体型だがドワーフと違い重武装に耐えられない事もあり、更にレベル1の駆け出しだ。

貧相という言葉しか出てこないような様相だった。

（話によれば食料の備蓄をしながら武具の調達をしているんだったな。駆け出しで単独（ソロ）だとこの程度が関の山か……）

もし、何年もダンジョンにこもった上でならば文句の一つも出る。しかし、ポランはまだ本当に駆け出しだ。経験も他のレベル1よりも少ない。

なによりまだアイズと同じ十二歳の少女である。寧（むし）ろ、こちらの方が正しい有様とさえ思うほどだ。

（能力の差か……。どうしてここまで差がつくのか。……というのは彼女（ポラン）に失礼だな）

嘆息しつつポランの様子を伺うリヴェリア。

三階層までは黙ってポランの様子を見ていた。それが他の団員からは何か特別なものでも感じたのか、と勘繰られリヴェリア同様にポ

ランを凝視する。
当人は至って真面目に戦闘していたが流石に無視はできなかった。
ポランの後姿を王族（ハイエルフ）がずっと見つめているのだから。何かあるのではと思っても仕方がない。
荷物持ち担当の団員がいくら見つめようと戦闘自体は普通だから、特別変わったものは四階層に向かうまで発見することは出来なかった。

†

戦闘は普通だがアイズと違って荒々しさは無く、戦闘後に魔石やドロップアイテムを回収する姿がいじらしく見える程度――
淡々とした作業だが新たなモンスターに気を付けつつ回収漏れが無いかまで確認するところは感心した。
（……いや、当たり前のことを当たり前の事としてやっているだけだ。アイズは討伐一辺倒だからな。他の団員が居なかったらこうまで丁寧に出来まい）
回収作業を終えた後、四階層に降りるのだが階段の途中でポランは所持品の点検を軽く行う（おこな）。その様子をアイズとリヴェリアがなんとはなしに見物する。
本来はアイズとポランの二人をメインとしたダンジョン探索だ。それなのに自然と【ロキ・ファミリア】の後を付けるポランの行動を気にする図になってしまっていた。
彼ら以外に探索している冒険者から見れば大手【ファミリア】の取りこぼしを狙う貧乏冒険者にしか見えない。
（あいつずっとおこぼれを貰うつもりか？）
（というより【九魔姫（ナイン・ヘル）】や【剣姫】はどうして何も言わない？）
赤毛の人間（ヒューマン）であるポランが【ロキ・ファミリア】の団員ではない事はある程度の冒険者には周知されていた。
多くはアイズと同年代で赤毛の冒険者が単独（ソロ）で潜っている、というものだ。
それと他の団員からもよその【ファミリア】であることは聞かされている。

「……アイズ。我々は物凄く目立っているようだが……。お前達は気にしないのか？」

「……？　そんなに目立つ？」

無邪気な子供らしい反応に吹き出しそうになりながらもリヴェリアは大人として構えた。

少人数とはいえ大手【ファミリア】の後についてくるのがポランだけだから目立たない筈が無い。いや、より正確には別の問題があった。

リヴェリアという一番目立つ存在が居るから。

滅多に上層でお目にかからない王族（ハイエルフ）にして【ロキ・ファミリア】の幹部だ。そんな彼女の視線を受けているポランが他の【ファミリア】というだけで邪魔者に見えても仕方がない。

（……黙って見ているだけでパーティとして扱っていないのが原因か……）

今のところ活動に関して言うことが無い。仕事は丁寧だし、ベート達のように賑やかでもない。

ポラン側からも注意とか気になった事とか出てこないので。

今回の探索の第一目標は七階層目。次が十階層となっている。それ以降になるとポランは何もできない、という話なので到達してから色々と話を聞くことになる。

まずは淡々と現れるモンスターを狩っていく。それと階層に現れるレアモンスターの捜索も忘れずに。

そうして難なく第一目標である七階層目に到達する。

ポラン一人であれば二倍から三倍以上の時間がかかるところだ。

#1―10　面白い発想

下層に行けば行くほど危険度が増し、安全志向の冒険者と十八階層に用のある冒険者などに分かれていくため、滞在者の人数は目に見えて減っていく。

それと駆け出しでは討伐困難な『ミノタウロス』が現れるのも原因の一つである。

迷宮都市オラリオに冒険者として登録している多くの駆け出しはかのモンスター（ミノタウロス）を倒せるかどうかで今後の人生が分かれる傾向にあった。もちろん、その前に出現する『キラーアント』や『ヘルハウンド』も難敵ではあるが――

楽して深く潜れる場所ではない事は周知の事実だ。

そう――

【ランクアップ】した冒険者でもない限り。

大きな混乱もケガ人も出さずに七階層目に到達したアイズ達は軽い小休止に入る。

普段の【ロキ・ファミリア】であれば上層で休む事は殆どない。大抵は十八階層の『迷宮の楽園（アンダーリゾート）』――

「……ろくな会話も無しに来たが……。お前達はいつもこんな調子か？」

アイズの保護者を自認する王族（ハイエルフ）『リヴェリア・リヨス・アールヴ』が尋ねてきた。

碧玉の宝石のような瞳。それと同じ色合いの長い髪の毛の手入れをしつつ。

「……お喋りしながらダンジョン攻略はしないよ？」

「そういう意味ではないのだが……」

楽しく子供らしい会話を交わしながら――とは流石にリヴェリアも思っていない。

あまりにも不謹慎だ。

「モンスターの出現が一段落した後は好きな食べ物とか必要なアイテ

ムの事とか話ます」
と、赤毛の駆け出し冒険者『ポラン・ブーニディッカ』は言った。
こういう答えを期待していた、と言わんばかりに満足する王族（ハイエルフ）。

†

ポランを休ませ、新たなモンスターの出現については荷物持ちのメンバーに任せた。彼らにもモンスター討伐を経験させる目的があったからだ。
荷物持ちとはいえ戦えないわけではない。
彼らが戦っている間、リヴェリアとアイズは慣れた様子で軽い食事の用意を整える。
傍目から見れば危機意識の薄いパーティだ。しかし、中身は熟練しているので異常事態（イレギュラー）でも起こらない限り手を貸す予定は無い。
「……しかし。以前の説教の後、君はよく冒険者を続けられたな」
少し強く叩いた事を気にしていたリヴェリア。
もう少し強ければ脳挫傷になっていたと治療を担当した者に言われて慌てた事を思い出す。
それと直接は見ていないがポランの背中は傷だらけで【ステイタス】を見るのに困難な状態だとか。――これは【神聖文字（ヒエログリフ）】を読む神にとってはあまり関係が無い――
「……生活しなければなりませんから」
「……そう言われると言葉も無い」
冒険者は様々な理由でダンジョンに潜る。
アイズのようにモンスターに憎しみを持つ者や名声を得たい者。
単なる強さを追い求める者。ダンジョンでしか手に入らないアイテムなど。
その中に生活の為である者も居ないわけではない。
「前回はアイズに唆（そそのか）されたようだが、今も上層で頑張っていると聞いて正直……安心した」
「ありがとうございます」
ポランは世間一般の知識を持っていないのか、リヴェリアに話しかけられることがどれほどの事なのか分かっていない様子だった。

待機しているメンバーが慌てていたが、それらはリヴェリアが制して黙らせている。

気兼ねなく話せる相手と言うのは彼女（リヴェリア）にとっても貴重な存在だ。本拠（ホーム）ではアイズ達四人の他には幹部達と神ロキくらいだ。

神々しい存在のように思われず、対等な冒険者として触れ合えることに気を良くする。

「【ランクアップ】を控えているのだったな」

通常はよその【ファミリア】に情報を教えないのが冒険者の暗黙の規則（ルール）となっている。しかし、アイズから聞いてしまったものだから尋ねないわけにはいかない。

それにしてもアイズは平然と相手の事を尋ねているようで困った娘だ、と内心では呆れていた。

素直に教えるポランにも問題があるのかもしれないが、嫌いではないと今は思う。

「そのようです」

「ダンジョン攻略において君は……何か目的でもあるのか？　それとも生活の為に潜り続けるのか？」

「今は生活の為ですね。深い階層は今のところ考えていません」

モンスターをしっかり倒すためには【ステイタス】を伸ばすしか方法が無い。それ以外での増強は神の知識には無いらしい。あったとしても非合法にあたる筈だから正攻法しか冒険者には道が無い。

他人を貶める行為などが該当するのだが、それは今は関係が無いので――リヴェリアは――黙っている事にした。

†

発生したモンスターを討伐し終えたメンバーがアイズ達の元にやってきて小休止に入る。

聞けば聞くほど普通の女の子にしか感じないとリヴェリアは判断した。それでもアイズと共に冒険を続けているのは何か理由でもあるのか、それとも単にアイズの方が彼女を振り回しているのか。

後者の可能性が高いと感じた。

ただ、利用しつつ逆に利用されているようにも思われる。事実、こ

こしばらくアイズは大人しい。それも良い方向に。
ただ単にモンスターを倒したいだけで深い階層を攻略する事しか考えてこなかった娘が、だ。
（彼女の素直さが影響していると見ていいのか。そうであれば良いが……）
ここで変に深読みしたり忠告するのは悪手だとリヴェリアは判断した。
話題を変えてアイズの言っていた『面白い発想』について聞こうかと思った。
「そういえば、以前アイズが聞いたという君の発想について聞かせてくれるか？」
「発想……ですか？　どんな事でしたっけ？」
ポランはアイズ顔を向ける。
自分としては面白いという感覚は無く、普通に思った事を言っただけだったので。
どんなことが相手の興味をひかせたのか分からなかった。
「えっと……。ダンジョンから出てくるモンスターに限界は無いのか……だったと思う」
アイズの言葉にリヴェリアは顎に手を当てる。
ここは黙って次を促す。
「それが面白いかどうかは分かりませんが……。資金稼ぎが目的の冒険者であればモンスターを倒さなくても魔石だけ掘り出せばいい。そんな感じだったと思います」
「……通常はモンスターを倒さなければ……。なるほど、効率的なものか」
発想としては面白い。リヴェリアとてそう思う。しかし、通説においてそれが可能であるとは誰も言えないし、証明もされていない。
ギルドも――おそらく――そんな方法は不可能だと言う筈だ。
だが、ポランのような駆け出しからすれば『何故、不可能なのか』が理解できない。
リヴェリアとて不可能だと言い切れないところがあるので一概に

否定できない。
（……鉱石が掘り出せるのは分かっている。であれば魔石も、となってもおかしくない）
「……いや、誰かが試して出てこなかった。代わりに出てくるのがモンスターだったから否定された」
効率を考えない冒険者は居ない。
全ての冒険者が健全ではないのと一緒で、悪事を働く者は必ずと言っていいほどに居るものだ。
破壊されたダンジョンの構造物が一定時間で元に戻る様子は様々な情報筋からの目撃情報によってもたらされている。
「だが、何故無いのか、という理由は解明されていない。それこそがダンジョンの意思とでもいうように……」
階層ごとに決まったモンスターが出るのも分かってはいるが『何故』という部分は不明だ。――もしくは分かっていて秘匿されているか、だ。
ギルドが冒険者に言えない事の一つや二つあることをリヴェリアは知っている。
ポランは先ほど自分が回収した魔石を地面に――いくつか――並べた。
紫色の武骨な宝石の欠片。
倒したモンスターの身体から採取したり、零れ落ちたりする。
彼ら（モンスター）の肉体から離したり、破壊すると肉体は黒い霧となって霧散し、残るのは灰だけ。
たまに一部の部位がドロップアイテムとて落ちる。

†

ダンジョンがモンスターを生むのであればポランが地面に置いた魔石を取り込んで再生産するはずだ。だが、そんな現象は今まで一度も確認されていない。
大部分において放置された魔石のその後は誰も気にも留めていないので確認を怠っている、ともいえる。
「ダンジョンが生き物なら魔石を取り返すはずです。そうでなければ

何処かに無限に生産する仕組みのようなものが……」

「……仮にあるとしてもレア度を測るギルドの目は欺けまい。そもそもギルドにそんな小手先が通じるとは思えないが……。発想は面白い」

そう言いつつ発言を続けさせた。

大人が上から押さえつけるように言論を封じると何も発見が無くなってしまう。そう考えた上での行動だ。

自分でも地面に落ちた魔石をどうして取り込まないのか疑問に思ったのは本当だったから。

「……そうか。だから上層で……。いや、たまたまか」

周りに危険が及ばないように安全地帯のような場所で休んだのは自分の考えを実証する為か、と。

そうでなければ一階層で休む方がより安全だ。そこはどういう理由があるのか、と疑問に思うが――

ある程度深いところでなければならない理由があると予想したから、だと推測する。

「それから……、無限と言いましたが本当にそうなのか疑問です」

命に限りがあるならばダンジョンもまたどこかで制限がかかる筈だ。

その意見に対し、納得はすぐに出来ても否定する材料がすぐに見つからない。

荒唐無稽とあざ笑うことも出来る。だが、リヴェリアは拳に力を込めたまま言葉を失う。

ずっと昔から冒険者はモンスターを倒して魔石を手に入れてきた。

その既成概念を歳若い小柄な少女が疑問を抱いている。長く生きるエルフでもないただの人間（ヒューマン）が。

もちろん、危険な思想であるとも感じられる。根本的にダンジョンを否定するようなことに匹敵するので。だが、それでも好奇心は殺せない。

「……もし、私がギルド職員であれば……お前を今すぐ殺しておくべきだと判断してもおかしくはないな」

少女に対して物騒な言葉を吐く王族（ハイエルフ）。すぐさまアイズが剣の柄（つか）に手をかける。

真っすぐに碧玉の瞳を若き冒険者に向ける。それに対してポランは状況を理解していないのか、微笑みで返してきた。

無知は時には大きな力を持つ、と――

無垢な微笑みを見せられたリヴェリアは薄く苦笑する。

「失礼。……だが、既得権益を手放すほどギルドは包容力を持っていない。そこは忘れてくれるな」

「？」

難しい話に対し、首を傾げるポラン。

理解してもらおうと思っていないので――リヴェリアは――詳しくは説明しなかった。

「その……なんだ。ダンジョンから効率的に魔石だけを取り出せたらいいという話にしたいのか？」

「出来れば……。そうすれば安全に仕事が出来ると……」

「甘いな。……それなら冒険者に頼らず自分達で独占する。それが出来ないから危険な仕事を我々冒険者にやらせているんだ」

利益を独占する権利を有しているのがギルドという組織だ。それを態々（わざわざ）手放しているのは何のためか。

安全を得るためだ、自分達の。

そう言われたポランは納得して黙った。ただ、言葉による封殺までは考えていなかったので、リヴェリアはすぐに謝罪する。

安全を考えているところは素直に評価すべきだと判断したから。

†

自由な発想は時には強みになる。大人はそれを尊重し、良い方向へ舵取りをすればいい。

突飛な話だったのでつい説教臭くなってしまったが、と断りを入れるリヴェリア。

このような発想する眷族は【ロキ・ファミリア】にはまだ存在しない。だからこそ勿体ないと思った。

「魔石はその発想でいいとしてドロップアイテムは流石にどうするこ

とも出来ないだろう?」
モンスターを倒さなければ出せないアイテムであり、魔石とは違いモンスターの部位でもある。
部位だけダンジョンに埋まっている事はあり得ない。
「人工物で代用すればいいのでは?」
そう言われてリヴェリアは絶句する。
加工品は別にモンスターのドロップアイテムに頼らなければ作れないわけではない。
素直な意見は時には鋭い武器にもなる、と感じた。
「換金品が無いと私達は生活できません。それはどうしても避けられない。他に才能があるわけでもなし……」
「……そうだな。冒険者の仕事があるからこそオラリオは活気づいている。……それだけってことはないけれど」
オラリオの外でも活動している【ファミリア】があり、他の国に交易品を輸入することで利益を得ている。けれどもダンジョンより稼ぎの良い場所は無い。
危険と隣り合わせであるという事を除けば無くすになくせない仕事ともいえる。
――そのような発想をリヴェリアは随分と久しくしていなかった。
強さや野望にかまけてたくさんの時を失ってしまったと感傷に浸る。ただし、それはほんの一瞬だ。
気を取り直した後、地面に置いた魔石に顔を向ける。
今もダンジョンに取り込まれずに転がっていた。
「発想の助けになるかは分からないが……。モンスターから零(こぼ)れ落ちた魔石はいくら待ってもモンスターにはならない」
「はい」
素直な返事にリヴェリアは満足したのか、笑顔で頷いた。
魔石は様々な用途に使われる。だからこそ再モンスター化などが起きてはオラリオが危機に立たされてしまうし、それを隠匿するメリットは無い。
夜中に街中を照らす灯りも魔石を用いたものだ。それとダンジョ

ン内が明るいのも魔石の力によるものだと言われている。
判明している情報としてモンスターは冒険者を感知した時に現れ、それ以外は何も生まない状態らしい。

†

休憩を終えた後、十階層まで降りたポランは戦闘を中止し、荷物運びの手伝いを始めた。
元々そういう約束だった。
残りはアイズ達による理不尽な戦力の行使に始終した。
魔法メインのリヴェリアも杖による物理攻撃だけで厄介なヘルハウンド達を討伐していく。
第一級冒険者ともなると通常戦闘の常識が通用しなくなる。
リヴェリアにとってアイズが気にする人間（ヒューマン）の人となりを知ることが出来たので不満は無かった。今後の成長を楽しみにさせてもらおうとさえ思った程だ。
戦闘をあらかた終えて地上に戻った後、【ロキ・ファミリア】と仲良くするポランが別の冒険者たちに狙われないか心配になってきた。
少なくともアイズの教育に必要な人材であるので無くすには惜しいと――
【ランクアップ】するまでは多少の支援も予定に入れようと考えた。
（危険度は高いが……、確かに発想は面白い。安全ではないからこそ冒険者が必要なのだがな……。いや、命を大事にするのは当たり前だ）
冒険者には色々な人種が居ると感心し、彼女が無事に本拠（ホーム）に戻るのを見送った後で自分達も帰宅の途に就いた。
それから数日後――アイズはポランの様子だけを確認し、次の冒険者依頼（クエスト）を受注した。次なる目的は『毒妖蛆（ポイズン・ウェルミス）』のドロップアイテムだ。
下層域に生息するモンスターという情報だけで正確さに欠けているが目撃例は多い。
毒性の強い毒液を吐くがドロップアイテムとしては魅力的なもので、専門店に持ち込めば高値がつく。討伐には入念な下準備が必要で

アイズといえどいつもの軽装は許可されなかった。

#1―11　更新

必要な素材集めに集中してから数週間後、アイズは『青の薬舗』にて神ミアハ立ち合いの下、実験結果を見物することになった。

いつもの回復アイテムではないので飲んだりすることは耐異常アビリティ持ちでも危険だと注意を受けた。

件（くだん）の試験薬品名は『保存液』そのままに決定された。

「……問題はちゃんと効能が発揮されて、長期間保存できるかだけど……。こればっかりはミアハ様にお願いするしかない」

危機意識の欠如したような間延びした声で説明するのは【ミアハ・ファミリア】唯一の団員にして団長の女性『ナァーザ・エリスイス』という犬人（シアンスロープ）だ。

表情の変化は乏しいが待望のアイテムが一先ず出来上がったことに喜んでいるようだった。ただし、それが売れるかは未知数――

通常の回復アイテムとは違うから需要の問題が気になるところ。けれども今はそんな事を棚に上げて結果を待つ。

試験管に保存する生物の肉片を入れて神ミアハに確認してもらうだけ。

神の力（アルカナム）は無くとも神々は固有の能力を持っている。例えば嘘をついているかどうかが分かる、というもの。

ミアハの場合は薬品関係であれば、それがどんな効能があるかなんとなく分かる、らしい。

同業者である神ディアンケヒトも似たような感じだとか。

「うむ。効能に問題は無い。長期保存については……結果の程度を見るのに今しばらく時間が必要だが……、向こう一か月は持つはずだ。ただし、食品に使ってはならぬぞ」

「……ということは成功？」

「今のところは、と付くがな。よくやったナァーザよ」

一先ずでも主神からお墨付きを貰えたのでナァーザの顔は輝くような笑顔になり、短い尻尾が激しく動いていた。

製品として売るにはまだ実験は不可欠で、このまますぐに販売できない事をアイズに告げる。

第一段階を終えた後、ナァーザは腐りやすい魚を入れた保存液入りの瓶をアイズに渡す。

これを陽の光りが浴びられて温かい場所に置くよう打診する。

「匂いがきつくなったら持ってきて。出来れば経過日数が分かるようなメモとかもしてもらえるとありがたい。あと、絶対に栓を抜かないように」

そう言いながら報酬として店の商品のいくつかを進呈する。

現金については借金返済のため、払えない事は通知してあった。

†

アイズは自室の比較的匂いが発生しても大丈夫そうな場所に試作品の保存液の瓶を置いた。

効能としては食品を長期保存するものではなく、腐敗を防ぐのみに特化した液体。使われている材料によって飲料に適さないが改良によって安全性を高められる余地あり、と。

単なる長期保存の方法には乾燥させたり、氷室（ひむろ）などを使うのが一般的だ。ただ、人体に関するものは魔法による完全凍結以外の方法は確立されていない。しかも、使用者が限られてくるし、解凍時の安全性も未知数である。

保存液の安全性についても今後の研究次第なので一概に優れているとは言い難いが――

（もし、この魚が腐らずに何か月も生温かい処にありつづければ……。どうなるの？　……食品には向かないからどの道、無駄なんじゃ……）

無駄かもしれないが何かの役には立つはずだ、というナァーザの言葉を思い出す。

彼女とて最初から万能な試液を作れるとは思っていない。もし、それを可能にできれば誰も苦労はしない。

試しに頭が良そうな事で評判の【ロキ・ファミリア】団長の小人族（パルゥム）『フィン・ディムナ』に尋ねてみた。

折角の人材を使わないのは勿体ないと判断した結果だ。
「……確かに頭は使わないと衰えるっていうけれど……」
金髪碧眼の男性は苦笑する。
ダンジョン攻略にいつも頭を使っていただけに別方向からの質問には少し参ったようだ。
「うん。一般論だけど……、人体はモンスターに骨まで食べられてしまうと魔法でも万能薬（エリクサー）でも再生させることが出来ないと言われている」
「……うん」
話を聞くために対面に椅子を置いて大人しく聞き耳を立てる金髪金眼の少女『アイズ・ヴァレンシュタイン』――
好奇心旺盛なお姫様の要望は団長と言えど安易に断れなかった。
「可能性の話になってしまうけれど……。ダンジョンの奥でもし……、運よく手足が転がる……。君にこんな話はどうかと思うんだけど……、大丈夫かい？」
「……がんばる」
普段からモンスターを八つ裂きにしてきたアイズだ。生々しい残酷表現も――多少は――免疫がある筈だ。自分の予感（フィン）でも特に警告は感じなかったので続けることに決めた。
（……情操教育としては正しくないんだけど……。今更ではある）
「簡単に言えば治療の為に地上まで無事に残しておきたい、などの場合には役立つかもしれない。長期保存については……、おそらくだけど資金稼ぎが長期化した場合を想定しているんだろう。そして、それでも諦める場合は……捨てるしかなくなるよね」
少なくとも最初から『捨てる』選択しかなかった状況に『捨てない』という選択を――新たに――与えるのだから。それはとても凄い事だとフィンは思う。
誰かが助かるのであれば発明品は少なくとも無駄ではない。万民全てに適応できないのは状況が物語っている。
神とて出来ない事が存在する。
【ロキ・ファミリア】にとって保存液の有用性はまだ証明できない

が、最初から無駄だと切り捨てるには惜しい、としか言いようがない。
今後の戦いにおいて何かの役に立つものはいくらでもある。少しでも可能性を広げられるのであれば利用しない手はない。
神立ち合いで作られている薬品でもあるし、非合法ではない点が評価に値する。
もし、仮にアイズの独断で開発した――または開発された――得体の知れない液体であればフィンでも抵抗を覚える。それに――いきなり渡されたら速攻で断る自信がある。
満面の笑みで謎の瓶を渡そうとするアイズを幻視したが同じく速攻で――
「作られた量から言って全身分は無理そうだね。というか重量が凄い事になりそうだ」
試験管の回復薬（ポーション）は持ち運びには便利だが何かの拍子で破損しやすい弱点がある。
丈夫な瓶を作ればいいと思われるが、そうすると更に割高になる。
予想では三割増し。
持っていくより本拠（ホーム）に置いた方が何倍も安全だ。
（小型で持ち歩く場合は『指』かな。もう少し大きめで『腕』と『脚』……。その規模で元通りになる可能性が高まるなら未来あるアイテムになりうる）
義手義足は今でも高額だ。それを創れる【ファミリア】はフィンの知る限り【ディアンケヒト・ファミリア】だけ。
長い借金生活を強いられるため大手【ファミリア】の団員でもない限り、かの【ファミリア】に頼るしかなくなる。
だが、魔法や回復薬（ポーション）類、治療院の世話での再生ならば負担はぐっと減る筈だ。才能次第では単独でも――
実を言えばオラリオの優秀な治療師（ヒーラー）の数はとても少ない。最高と目されている『アミッド・テアサナーレ』でレベル2だ。
「現時点での可能性は微々たるものだ。だが……、将来的にもっと優れた回復薬（ポーション）が創られれば……。もっと強い回復魔法を覚える冒険者が現れれば……。色々と開ける事もあるだろうね」

ただ、個人の才能だけに頼ると現れるのにどれだけの歳月が必要になる事か。

現実的なのは新しい回復薬（ポーション）類の開発だ。特に大きなケガに対して有効な万能薬（エリクサー）の効能は計り知れない。

一本五十万ヴァリスから。高いけれど作れない代物ではない。ある程度の冒険者なら借金してでも手に入れられるし、完済率も高い。

件（くだん）の『青の薬舗』では万能薬（エリクサー）は作れないようだが、希望は作れた。

試液の段階だが、値段は数万ヴァリス。量産化が出来れば少し安くなる予定だとか。

「……そうそう。もし持って行ったら間違って飲みそうだね。どんな風になるのか知りたくないけど、本拠（ホーム）に置いていた方が安全そうだ」

持ち運ぶときは最善の注意が必要だと判断する。

思いつくのは木箱に入れること。

ただ、最初から大怪我を想定するのは不謹慎だと思いつつ――

（レベルの高い冒険者は簡単には大きなケガはしない。それは神に感謝すべきだと思う。……常人であったら五体満足で済むような冒険など出来ない筈だ。特に深層攻略は僕でも不可能と言う自信がある）

想像はフィンでもしたくないと思う。けれども絶対に無事というのは夢物語に過ぎない。だから、楽観視しない。

この手のケガは冒険者生命を一気に奪っていく。例えばアイズが利き手を失う事態に陥れば自害するんじゃないかと――

それくらい冒険者というのは身体が生きた財産だ。損失は軽くない。

少女に話すには物騒過ぎる予感がしたので可能性の話を切り上げた。

もう少し大きくなってから、というのは遅いかもしれないと感じつつフィンはアイズを下がらせた。

今は可能性の話しか出来ない。安易な夢を見せて現実が違っている事も充分にありえるので。

†

保存液の経過日数をメモしつつドロップアイテムの依頼（クエスト）を中心に

ダンジョン攻略をして早一週間が過ぎた。
しばらく忘れていたが自身の【ステイタス】の事を思い出す。
強くなるために戦っていた時は頻繁に気にしていたのに今は強さを忘れるほど他人の為に努力するようになっていた。
「……ロキ。【ステイタス】の更新……お願いできる？」
「おお、アイズたんから無視されて忘れられとったかと思ったで。……でも、ここしばらくの働きぶりに余計な事言わんで正解やったな」
幹部の一人である碧玉の長い髪と瞳の王族（ハイエルフ）『リヴェリア・リヨス・アールヴ』も【ステイタス】の事を忘れていた。
冒険者の【ステイタス】は基本的に自身が強敵と思われる敵と戦わないと増えにくい。
今のアイズが上層でいくらモンスターを倒したところで微増が良い程度だ。当然、【ランクアップ】は絶望的。
下層から深層での戦闘無くしてアイズの成長は望めない。
「その前にや。……ここしばらく冒険者依頼（クエスト）中心に頑張ってみてどうだった？」
「情報を集めが……大変だった」
「せやな。それはアイズたんだけちゃうで」
依頼の失敗による多額の賠償の話は聞かないけれど、リヴェリアが承知していない筈が無いので成功確率の高い冒険者依頼（クエスト）だったのかもしれない。それが悪いとは言わない。
報酬目的ではない、という事ならロキにも色々と納得できそうな気がする。しかし、放任過ぎて物足りないと感じていた。
ただ、今のアイズにロキが思う冒険を期待すると幹部達が激怒するので黙っていた。
その後、アイズは身体を清めロキの自室にて【ステイタス】の更新に臨む。結果としては予想通りだった。
数値は全て微増。【ランクアップ】するほど激しい動きは無し。それは本人も自覚していたようなので想定内だ。
ただ、一つの仕事をやり切った充足感はあったようだ。

「でも、アイズたんがモンスター以外に熱心になるのは意外やったな」
「……そうなの？」
「単なる破壊者やのうて冒険者らしいっちゅうか……。温か味があるっちゅうか」
娯楽を求める神からすれば物足りない。そう言うべきだが、殺戮人形に仕立てたい気持ちは無い。
眷族の無事を祈る心はロキにもある。いつも飄々とした見た目からは信じられないけれど。
悔しいと思いつつもヘスティアの眷族のお陰であることは認めるところだ。
戦闘に特化した【ステイタス】の伸びがいまいちかもしれない。問題はアイズ自身がそれを後悔しているかどうかだ。
背中を露出させたアイズにロキはいつもの手慣れた調子で神の血（イコル）を垂らし、彼女の【ステイタス】を詳（つまび）らかにする。
レベル４への【ランクアップ】は停滞しているが数値の伸びは可もなく不可もなく、という程度。これは上層に長く居たから仕方がない。
余計なスキルやアビリティの発現も無い。
「せや。例のドチビ（ヘスティア）んとの眷族（こ）やけど、【ステイタス】について何か言ってたか？」
「……詳しくは聞いてないけど。【ランクアップ】まで間近というのは聞いた」
「結構モンスターを倒しているんやろ？　限界値に達したものとかはまだなんか？」
「……ああ。一つだけ伸びるわけじゃなくてその日の調子によって伸びる……ものが違うらしいの。本人もなんでか力じゃなくて耐久が増えたり疑問に思ってた」
他の【ファミリア】の眷族は迂闊に情報を教えないのが暗黙の規則（ルール）となっている。しかし、それを破ることも神の間では『駆け引き』と称して行（おこな）っている。
ロキの場合は脅迫まがいの事を行（おこな）ってはいないが知りたい欲求は

かなりある。隙あらば聞いてこい、と命令ではないが頼むことは良くある。

「評価Sはまだなんかな。一度は拝みたいもんや」

「……レベル1の評価Sはそんなに珍しいの？」

「レベル3以降からは滅多に拝めんから。中には制限突破してる奴もおるかもしれへん。珍しい現象はそれだけで価値があるんや。流石にスキルは教えへんと思うけど」

「スキルは……まだ無いって」

普通に教えているところは駆け出しだからか、ロキは呆れつつ苦笑するのみだ。

アイズの背中に浮かび上がった【ステイタス】は【神聖文字（ヒエログリフ）】で書かれているので共通語（コイネー）に翻訳し直して眷族に渡す。ただ、アイズは【神聖文字（ヒエログリフ）】をある程度読める。

†

【ステイタス】の更新を終えたアイズは次の仕事に向かおうか、ダンジョン攻略の準備に入ろうか悩む。

迷う場合は外に出て買い物するのが一番だとリヴェリアから言われていた。

一人で出ると何かと狙われやすい【ファミリア】だという自覚があるので仲間を募ってから出かけようと思った。そこで選ばれるのは狼人（ウェアウルフ）の少年『ベート・ローガ』と女戦士（アマゾネス）のヒリュテ姉妹だ。

「……買い物というか……次のダンジョン攻略に必要そうなのが無いか」

「買い物なら付き合ってあげてもいいわよ」

「あたしもー」

ヒリュテ姉妹は即決してきた。

判断力の速さは時には有効だが、何も考えていないと思われる時がある。

姉の方は色々と考えるタイプなので心配はしていない。

「いいぜ。回復薬（ポーション）とか『魔剣』が無いか見てみたいしな」

ボサボサの灰色の髪の毛を掻きつつ了承してくれた。普段であれ

ば不機嫌な顔と大きな声で断ってくるのだが――
しばらく別行動していた間に何かあったのかな、と。しかし、大して興味は覚えなかったのですぐに脳裏から追い出した。
四人行動となって向かう場所は露店が立ち並ぶような場所ではなく、中央に聳える摩天楼（バベル）の上層である。
武具を選ぶなら摩天楼（バベル）から。それから必要なアイテムを探索していく。これも冒険者にとって大事な仕事である。
向かう途中で神ヘスティアの露店を発見し、ポランの事を聞かず真っすぐにアイズはジャガ丸くんを注文した。
外出する時はよく頼むが本拠（ホーム）に居る時は仲間に買いに行かせることは無い。
それが今ではゲン担ぎの様な感じになってきている。本人はそういう意識を持っていないようだが――
「ロキんとこの眷族（こ）じゃないか。定番から奇抜なものまで取り揃えているぜ」
「……摩天楼（バベル）で買い物を……。……新しい味はどんなものですか？」
神に視線を合わさずアイズの視点は真っすぐ商品に釘付けだ。
シンプルな食品でありながら豊富な味付けを楽しめる万能食のようなジャガ丸くんはオラリオの名物の名を恣（ほしいまま）にしている。
余程のキワモノのでもない限り、何にでも合うのが人気の秘密だ。
ただし、真っ黒い物には気を付けろ、という噂があるとかないとか。
ヘスティアが捌（さば）く商品にそんな怪しいものは無い。

†

アイズ達がのんびりと買い物を楽しんでいる間、保存液の改良を進めていた『青の薬舗』では重大な事実に頭を悩ませていた。
神立ち合いの下で試行錯誤はされているが解決策が浮かばない。
元より初めて作ったものだから対策はこれからだった。
「……うーん。売り物にするのはまだまだ時間がかかりそうだのう、ナァーザ」
「保存は出来ても……この溶液そのものを無毒化しないと……。解毒薬はうちでは作れそうにないし。人体全てを保存できるほどの広さ

も用意できない」
　大きさについては個々の部位で妥協するしかない。けれども解毒薬の調達は更なる負担につながる。
　完成させた保存液はそれ単体では優秀な効能があることは確認された。問題はその後だ。
　肉体に浸透した薬液はそのままでは有毒なまま。無理に接合を試みると本体の機能を著(いちじる)しく損なう恐れがある。なにせ使われているのが『毒妖蛆(ポイズン・ウェルミス)』の体液だ。安全である筈がない。
　あくまで腐敗菌の抑制に成功しているだけで人体に無害である、というわけではない。
　これの無毒化をしなければ理想の形にはならない。
「いっそ諦める選択もありだけど……。形を失わないからこそ人体再生には価値がある」
　ナァーザは身をもって知っている。
　人体の部位を失うことがどれほどの苦痛かを。
　骨だけでも残さなければ多額の借金生活を強いられる。その苦難に少しでも耐えられれば希望がある。だが、多くは挫折していくことも同時に理解している。
　冒険者の多くはダンジョンに潜って魔石やドロップアイテムを入手することで収入を得る。それが出来ないだけで人生の殆どを台無しにしてしまうほど。
　制作系のアビリティのお陰でナァーザは辛うじて希望を持って生活が出来ている。
「頼みは万能薬(エリクサー)か」
「資金的負担で言えば……。でも、それは大手が良く買い占めてしまうから。それにあのクソジジィ(ディアンケヒト)は貧乏人の足元ばかり見る。あんな奴のところで買い物するのは死んでもごめんだ」
　間延びした言い方だがナァーザはかの神が大嫌いであった。
　その鬱憤やるかたない気持ちが団員であるアミッドに飛び火してしまうが謝るつもりは微塵もない。
　対抗しようにも効果が高い回復薬(ポーション)類の制作はナァーザをもってし

ても難しい。ただ、完成できたとしても値段はやはり高くなってしまうのはどうしようもない。

そうなのだが、団員の苦労をミアハはよく台無しにする。

「情報集めの冒険者依頼（クエスト）を出したくてもあの【ファミリア】が同じことをすれば弱小では太刀打ちできなくなる」

「張り合っていては完成するものも完成しないぞ」

と言ったものの、そんなことはナァーザとて百も承知。

今回は運よく【ロキ・ファミリア】のお陰で先行して商品の試薬が完成した。次も同じように出来るとは思っていない。

いっそ矜持（プライド）をかなぐり捨てる事も方法の一つにしなければならないと覚悟する。

†

二週間後、アイズは確認の為に【ミアハ・ファミリア】を訪れた。

部屋に置いていた試液の経過報告のためだ。

「……溶液の毒性に負けている。濃過ぎたか……」

中に入れていた魚は身がボロボロになっていたが骨は無事だった。

本当は肉の部分も保ってくれれば、と考えていた。

（骨だけでも残れば成功と言えるけど……。いや、完全に失敗だ。これじゃあ客が怖がってしまう。濃度と解毒が課題だ）

せっかく来てくれたアイズに更なる依頼が出来ないか頼んでみる。利用できるものはなんでもやる、という意思で。

報酬が少ないから大手はあまり受けてくれないのが玉に瑕。

（せっかく作った回復薬（ポーション）もミアハ様はすぐ無償提供しちゃうから。材料の調達が思うようにいかない。依頼（クエスト）を出しても報酬が払えなければ意味がないのに）

いっそ回復薬（ポーション）を全部渡して商品棚を奇麗にすればミアハも思い知るのではないか、と思うものの客が来なくなってしまっては借金返済が出来なくなる。

返済が滞れば本拠（ホーム）から追い出される。

簡単に金になる商品が出来たら誰も苦労はしない。

「依頼（クエスト）……、また受けてくれると助かる。報酬はあまり出来ないんだ

けど……」
「……そんなに経営が厳しいんですか？」
「そうだね。もう少しアイテムの種類を増やしたいんだけど……。簡単には出来ないからね」
売り物を勝手に他の冒険者に渡す神（ひと）が居なければいいのに、と小さく呟く。
カウンターに回復薬（ポーション）の試験管を四本置いた。それと依頼を受けてもらえるなら、と事前に用意した必要なアイテム類を書き留めた用紙を何枚か。
大量注文したいところだが支払える報酬そのものが無いのが頭痛の種となっていた。
かといって無料奉仕をお願いするわけにはいかない。仕事には対価が必要であるのは商売の基本だ。そして、それは信用に繋がる。
「付け焼刃だけど今の回復薬（ポーション）の効能を上げて、少しでも付加価値を付けないと報酬が払えない。それでも受けてくれるとありがたい」
「……分かりました。……団員教育のついでに採集してきます」
「でもこれ……。二十階層以降の採取依頼（クエスト）だよ」
「……レベル2を何人か連れて行くので問題はありません」
何でもない事のように言う少女。実に頼もしい。
今は藁にも縋る思いだったのでナァーザは相手がアイズでも構わないと腹をくくる。
交渉が成立し、アイズと固く握手を交わす。

#1―12　テンペスト

ナァーザ・エリスイスによる『保存液』の濃度調整とアイズ・ヴァレンシュタインの『冒険者依頼（クエスト）』が続けられている頃、【ヘスティア・ファミリア】の唯一の団員であるポラン・ブーニディッカは【ステイタス】の一つが評価（S）９００の大台に乗った事を知る。

地道な討伐の繰り返しなので肉体的な実感は無いが、一つの目標を達成した事を嬉しく思う。

「問題は数字だけ達成しても【ランクアップ】した事にはならない。僕も詳しくは知らないから知り合いに聞いてみるつもりだよ」

眷族に共通語（コイネー）に訳した【ステイタス】を渡しながら神ヘスティアは言った。

毎回傷だらけの背中を見る事になるが意外にもヘスティアは慣れた様子で眷族に触れる。

程度の低い回復薬（ポーション）では完全に治癒されない弊害ともいえる。

ここまでの冒険において最初の頃に比べ、ポランも逞しくなったのかなと改めて様子を伺うが性格的な変化は分からなかった。

いつも素直で真っすぐな赤毛の女の子。

あまり変わってほしくないと思うのは我がままだろうか、と嘆息するヘスティア。

ここしばらくポランの冒険は調度品の備蓄に終始していた。

小汚い本拠（ホーム）そのものを改善することは難しいが必要な小物を用意したり、掃除を繰り返し、幾分かは寝泊りするのに楽になってきた程度。

たまに大雨が降って雨漏りするのはまだ改善されていないが――

（眷族（子供）が頑張っているというのに新しい団員が増えない。……全くどういうわけだい。たまたまなのかい？）

仕事の合間に声掛けしてもそれぞれどこかしらに加入している事が多い。

時期が悪いのか――

知り合いの友神達にも相談するようになったヘスティア。
「塩と砂糖は……まだ大丈夫。胡椒も……」
【ステイタス】の更新が終わった途端に点検するポラン。
食育に夢中のようだ。
彼女は街中を歩く冒険者達とは違い、冒険者らしくない。しいて例えを上げれば露店商の店員がダンジョンに潜って食材を調達するようなもの。
名声や強さには全く関心を持っていない。
（そりゃあ命は大事だよ。そうなんだけど……いまいち迫力というものが……。ロキんとこと比べるのは酷だけど……。屈強な眷族が欲しくなるじゃないか全く……）
ヘスティアが地上に降臨してから実は一年も経っていない。
神ではあるが迷宮都市オラリオの事は未だに分からない事が多く、ダンジョンや【ファミリア】経営についても知らない事が多い。
新人の神様であった。

†

非番の日に友神が経営している『青の薬舗』に向かい愚痴を垂れる。
ヘスティアが懇意にしている神は意外と多い。これは天界に居た時の付き合いが関係する。
地上以外の事ならば他の神にも負けない。最大派閥と言われる【フレイヤ・ファミリア】の主神とも知り合いだ。
「なんかこう強敵に立ち向かうのが冒険者だと思ってた。もちろん、食中りが原因なのは分かってるけど……」
「ははは。ヘスティアよ。多くの冒険者が無謀な輩と思うでない」
穏やかな微笑みを見せる男神ミアハ。零細【ファミリア】でありながら女性冒険者には絶大の人気を誇る。
人当たりの良い甘いマスクと形容される微笑。それでいて裏のない自然な言葉使い。
ただし、団員であるナァーザにとっては頭痛の種だ。
「ボクが言いたいのは神としてあの眷族に何かしてあげられることは無いかなって事なんだ。武器を買って上げたくても金が無い。いや、

あるにはあるんだ。値段がね……」

回復薬（ポーション）一本だけでも結構な出費だ。その上、良い武器と防具を揃えるとなると更に資金を稼がなくてはならなくなる。

安全志向のポランでは数か月がかりで一つの武器を購入できるかどうか。

せっかくアイズ達とパーティを組んでも報酬面で大幅に削り取られてしまう。それが少し悔しいが契約に記載されており、尚且つギルドの規則にも書かれているから不満をぶつける事が出来ない。

ただ、いくつかのドロップアイテムを融通してくれるので、それを換金して資金源の糧としている。

零細ではあるが貯金は既に二十万ヴァリスに到達している。しばらく食生活は安泰である。

「ポランは一日に二十体まで、とか規則を独自に作って健全なダンジョンアタックをするようになってるから。……なんだか地味なんだよね」

「健康に気を遣う良い眷族（子供）で何が悪い。おそらく長期的な生活を視野に入れておるのだろう。短期間での名声は意外と冒険者生命を脅かす」

ミアハの眷族であるナァーザはモンスターに酷い目に遭い、恐怖心が拭えずダンジョンに潜ることが出来なくなった元冒険者だ。

それを思えばヘスティアの悩みは実に贅沢だと言わざるを得ない。

神達の話を横で聞いている犬人（シアンスロープ）のナァーザはいつもの愚痴だと判断し、研究に没頭していた。

濃度差による『保存液』の効能と新薬の出来栄えをメモしたり、試薬を小分けにして管理状況を書き留めたり――

客が来なくても仕事は山積していた。

†

ヘスティアが本拠（ホーム）を留守にしている間、ギルドの待合室の椅子に座っていたポランは少し過去を思い出していた。

評価Ｓの到達。それは少なからず嬉しかった。

路地裏で嘔吐していた時は何か危ない病気にかかったのではない

かと本気で恐怖したものだ。それから【ステイタス】が３００を超える頃、身体の不調は起こりにくく、けれども心配なので無理のない攻略に移った。

何か才能でもあればレベル1から何かしらのスキルが発現するらしいが、そんなものは未だに現れない。

【ランクアップ】しても何も起きない確率はあるし、無理な希望を抱くことは早々にやめた。

元より自分には何もない。その日を精一杯生きること以外は――

オラリオで冒険になってもうすぐ半年。長いようで短かったような気がする。

「いやがった」

今は友人と呼べそうな人達と出会えて不安を覚えていた。なにせ自分よりも強い人たちだから。

いや、灰色のボサボサ髪の狼人（ウェアウルフ）の少年の存在が怖い。

会うたびに睨まれているし、すぐ壁を蹴りつける乱暴者なので。

「……ベートさん。……ポランを脅かさないでください。そんなことするから……彼女強くなれないんです、恐怖で……。特にベートさんのせいで」

「ああっ!?　うるせえな。それはこいつ自身の問題だろうがよ」

隣に居る金髪金目の少女アイズとは同い年。元より攻略経験が違うので強さの差についてはどうしようもない。

頑張って追いかけていけばいい。

ただ、数字だけ増えても【ランクアップ】した事にはならないのがいまいち分からなかった。

「……いつも思いますが、うるさいのはベートさん、です」

今日はアイズとベートの三人でダンジョン攻略をする約束を交わしていた。

ポラン以外は単なる散歩程度。目的は十三階層辺りでの探索になっている。

ただし、ポランの【ランクアップ】は目的としていない。よその【ファミリア】の団員にそこまでする義理はそもそも無いので。

そういう区別をちゃんとするのがパーティを組む条件でもある。
「早速パーティ申請をしてきます」
「……了解」
いつもの調子でギルドの受付に向かうポラン。
事務手続きがこなれている為、アイズは彼女に任せていた。逆にアイズは戦闘以外は――食べる事を除けば――不器用この上ない。ベートはそもそも自分から細々とした作業をしない。
努力はしている。アイズとて格下の教育をしなければならない立場になっているので。
レベル3ともなれば大手では教育係が必然的に各上に委ねられる。人数が多いので一人が担当できる数は限られてくる。大雑把な事をすれば誰か彼か目の届かない者が現れ、後々何かしらの騒動を振りまく。
フィン達はそういう者を出さないように各上になった者に色々と教育を施す。だからこそ事務作業の労力がダンジョン攻略より多くなり、椅子に座る時間が必然的に長くなってしまう。
「しっかし、毎回あいつとつるんでて楽しいのかよ」
「……戦闘以外で様々な発見を得る事はユウイギだ、ってリヴェリアが……」
「あのババァ（リヴェリア）も何考えてやがんだか」
アイズと同い年という事もあり、ポランはどういう訳かリヴェリアに気に入られてしまった。代わりにフィンとガレスはあまり接する機会が無かった為にリヴェリア程の興味は持たなかったようだ。
ガレスは特に会う機会に恵まれず、フィンは専ら（もっぱら）『保存液』の有用性について独自に資料をまとめ始めた。これは団員を易々と減らさない為の予防策として――
申請を終えて戻ってきたポランと共に三人でダンジョンを下りていく。その後姿を眺めるのは碧玉の長い髪と瞳を持つ耳の長いエルフだった。たまたま別件で来ていただけで声もかけずにすぐに立ち去った。あと、自分の事を侮辱する気配を感じて眉根を寄せていた。
†

レベル3が二人。レベル1が一人のパーティとはいえ、今ではすっかり上層域の攻略も慣れてきた。ただ、ポランはキラーアントの集団にだけは気を付けるようにしている。

戦闘は基本的に単独（ソロ）であるため。

アイズ達はあくまで自分の興味でパーティを組んでいるだけでポランの育成には興味を持たない。特にベートは顕著である。

理由は単純。

よその【ファミリア】の団員だから。

他の【ファミリア】でも同様に扱うのでアイズもポランの味方をするより自分の【ファミリア】を優先する。だから、ベートの態度を半分は黙認している。もう半分は威嚇部分だ。

「……本当なら荷物持ち……の『サポーター』を同伴したいけれど……。みんな忙しくて呼べなかった」

単なる興味でダンジョンに潜ると言ってしまったのだから、そんなアイズ達と一緒に向かうほど【ロキ・ファミリア】は暇ではない。

それぞれ【ステイタス】を上げたり、ダンジョンについての講義を受けている。

それと深層域の『遠征』に耐えうる人材育成こそが本来の目的だ。

アイズ達が許されているのは精神面での『余裕』を持たせるため。息抜きはどうしても必要である。

攻略を終えればアイズ達も自身の鍛錬に長い時間を取られる。

（……今日はポランに『技』を教える日……。……えーと、互いにケンサンを積んで強さを競い合う方がいいんだっけ？　……確か）

倒す相手がモンスターばかりだったので、強いモンスターだけ倒していればいい、という認識を持っていた。

本当なら同レベル冒険者と訓練をするのが効率的だが、都合よく居るとは限らない、という発想の元でポランとの訓練に臨む。ここにベートは含めない。

今日のアイズは二振りの剣を携えている。一本は愛剣『デスペレート』だ。

もう一本は特別に用意してもらった不壊属性（デュランダル）の小剣。

†

攻略と言っても現れるモンスターを倒して目的の階層に向かうだけ。丁寧な対策は今回はしない事に決めていた。

キラーアントが出てくる階層からアイズ達が率先して蹴散らし、灰色の風景が広がる十階層目に一時間ほどで到着する。

広い空間の出現にのんびりとせず、どんどん降りていく。合間に倒したモンスターの魔石やドロップアイテムの回収はポランに任せた。

無駄に荷物が嵩張ると帰りが大変になるので出来るだけ少なくすることを心がけた。

ポランの実力では充分に十六階層のモンスターと渡り合える。だが、無難な攻略を心がけているので率先して戦おうとはしない。

冒険者であるならば戦えよ、とベートは言いそうだが全ての冒険者が血気盛んな存在ばかりではない。リヴェリアも無理に戦闘を勧めないし、強制も許さなかった。

あまりに行き急ぎ過ぎては身体が持たないと判断したからだ。これは同い年のアイズには適応しない。

それぞれに戦う理由があり、アイズとポランは同じではないからだ。

【ランクアップ】するにはミノタウロスを倒すくらいやってもらわねえとな」

「一匹なら……」

渡り合えることと倒せることは違う。

装備の観点からも今のポランに討伐出来るモンスターは――十階層より下の――意外と少ない。それゆえに今回、アイズ自ら戦い方をいくつか伝授しようと考えていた。

スキルやアビリティ、魔法を持たないので大したことは出来ないけれど、【ランクアップ】時に何らかの能力が開花する可能性があるかもしれない。

さすがに何が向いているのかは誰にも予想できない。それは神さえも。

一般的に欲しい能力は強く願うほど発現しやすいと言われる。そ

れを実際に実践しているのは鍛冶師（スミス）に多い。
「……戦闘に特化した戦い方をしないポランじゃあ危ないから、今回は戦いません」
いくら力が９００を超えていても身体の動きが早いわけではない。強烈な一撃を腕に受ければ骨折もありえる。
それ以前に彼女を【ランクアップ】させるために同行しているわけではない。
ベートの言葉を受け流しつつ目的階層に到着し、目に付くモンスターを素早く駆逐する。その後でポランによる回収任務――
彼女（ポラン）は彼女である一つの目的を模索していた。

†

場にあらかたモンスターが居なくなったところで小休止に入る。
冒険者と言えども休息は必要である。それはレベル３のアイズとベートも同様に。
魔法をほぼ使わなかったので精神力（マインド）の損失は無い。
荷物は壁から少し離れた位置にまとめる。これはモンスターの出現時に潰されることを防ぐためだ。
アイズは用意した剣の一振りをポランに渡す。
「……じゃあ、構えて。本当は木の棒とかがいいのかもしれないけど、私が扱うとすぐ割れるから……」
「よろしくお願いします」
ベートは訓練に参加はしないが後から来る冒険者の見張りやモンスターへの警戒のため、待機する。
暇にはなるがダンジョンでは何が起きるか分からない。だから、気は抜かない。
キン。カッ、と甲高い金属音が広い空間内に響き渡る。
体勢を低くし的確に攻めるポランに対し、自然体で迎え撃つアイズ。
強さの差はかなり離れているのでポランの動き自体はよく見えていた。
長くダンジョンに潜っているお陰か、初期の食中りさえなければ

もっと積極性が高くなっていたかもしれない、と予想する。それと、堅実性の観点から今の戦法も決して悪いとは言えない。

我流であるアイズの剣技は確実にモンスターを倒すすべに長(た)けている。ゆえに長く打ち合うことは本来はしないが、今はわざと打ち合っている。

「……うん。私の動きは……見えているようだね」

余裕のある発言を裏付けるようにアイズは一歩も動いていない。

攻め込まれる攻撃に対し、圧力を全く受けていないからだ。

対するポランはアイズの防具を執拗に狙っているが、未だ一つも当たらない。

同年代とは思えない腕力の差。いや、剣捌きが見せる妙――

三十分続けて十分の休憩。合間に現れるモンスターはベートが討伐する。それを四度ほど続けた。

アイズとて生きているので多少の汗をかく。さすがに一滴もかかないのは最初だけだ。

ダンジョンの内部温度が高ければベートも服を脱ぎたくなるほど。

ポランは無駄な動きが多いせいで既に汗まみれ。尚且つ息が上がっている。

「……戦闘続きで疲れたでしょう」

「は、はい……」

もし、単独(ソロ)で長期戦に持ち込まれれば今のポランはとても危険な状態になる。

汗が目に入るだけで生存確率はガクンと減る。それでも続けるのは深い階層に挑戦するために必要な事だからだ。

健全(健全)な攻略を悪いとは言わない。けれども、ずっとそうである事などありえない。

用意したタオルと冷たい水筒をポランに渡す。それとベートには遠くに移動してもらい、汗にまみれた服を着替えてもらう。これは事前にリヴェリアに用意してもらったものだ多くはアイズの為にロキが用意した衣服である。。

残念ながら女戦士(アマゾネス)は期待できなかったので。

長期間ダンジョンに潜る上で衣服は基本的に着替えない。ただ、歳若い女性が異臭を振りまくのは哀れであると判断した上での措置だ。

†

水場が無いので乾拭(からぶ)きだが、露(あらわ)になったポランの背中は傷だらけ。対するアイズは彼女には見せる気は無い――【ステイタス】は隠蔽されているけれど――が傷一つない奇麗で色白の素肌である。

神(ヘスティア)が眷族の【ステイタス】の扱いをろくに知らないのか模様が浮かんでいる。

通常であれば【神聖文字(ヒエログリフ)】が読める者にとってはポランの【ステイタス】を読むのは造作もない。しかし、傷のせいでアイズでも読み解くのが難しいありさまだった。

指摘しても眷族にはどうすることも出来ないので知らないフリをする。代わりに背中を拭いてあげた。

他人のお尻を見て、小さくて可愛いとか感想を抱きつつ――

「ありがとうございます」

「……どういたしまして」

汗に濡れた服や下着類は近くの岩に張り付けて水気を取る。

そこでモンスターが現れるようであれば諦めるしかない。

ポランにとってダンジョン内で素っ裸になるとは予想していなかった。冒険者ではあるが女の子なので羞恥は感じている。だが、アイズは平気なのかと疑問に思う。

聞いてみると匂いを我慢するから普通は脱がない、と回答。

「……本拠(ホーム)のお風呂場は個室になってないから皆に見られるのは変わらないよ？」

「……冒険者って大変ですね」

「……そうだね。ダンジョン内でトイレに行きたくなったりすると……、もう大変」

我慢し過ぎるのは良くない、とリヴェリア達から言われているが実際に体験するのは嫌なものだと感慨深げにアイズは語る。

レベル3にもなると食中りは起きにくく、『耐異常』のアビリティを貫通するような『猛毒』の方が冒険者には怖いと言われている。

新しい下着と服に着替えたポランの次の特訓は新技であった。
――と言ってもアイズの動きを真似するだけだ。
「……私の技は一つだけ。……風の付与魔法（エンチャント）を利用する」
そう言いつつ剣を垂直に構えるアイズ。
ポランは巻き込まれないように距離を置いた場所で待機。
「……【目覚め（テンペスト）よ】」
静かに超短文詠唱を発動。
アイズの全身から風のオーラが噴出し、自身の身体を包み込む。
――本来なら次に魔法名を唱えて攻撃に移るが、今回は途中で解除する。
魔法を不用意に暴走させることはとても危険だ。アイズもその辺りを充分に考えて行使している。
「……ふぅ。……じゃあポラン。やってみて」
「魔法を？」
「……魔法じゃなくて私が取った姿勢とか態勢とか。……風を出せとは言わないよ？」
魔法を使えない相手に魔法を出せ、と言われて出せたら苦労はしない。
ポランは剣を握ってアイズの指導の下、演技に集中する。
「『テンペスト』」
瞼を思いきり開いてはっきりとした声で言った。
しかし当然、何も起きない。
「……それでも何も知らない相手は驚く。……大事なのは駆け引き。……相手はポランの技を知らないし、それを逆手に取った戦法もいずれは役に立つかもしれない」
「……でも、これってアイズさんの技ですよね？」
「私が教える内容はフィン達にはちゃんと伝えてある。……下位のメンバーが新たに加入すると混乱するかも、だけど……」
それでもアイズ公認の技に文句は言わせない。そう強い眼差しをポランに向ける。しかし、言葉にして発していないので伝わったかどうかは不明。

その後、アイズは技の詳しい内容を伝えて演技指導をしていく。

†

【ランクアップ】前の【ステイタス】の数値は高いし、運が良ければアイズと同じ能力が授かるかもしれない。それはそれで色々と問題があるかもしれないとアイズは思いつつも折角出来た友達に技を教えるのは嫌いではなかった。

もし、同様の力が授かるのであれば――

敵として相対することになれば自分の糧にすることも出来る。

冒険者は結局のところ最大敵は自分自身である、とガレスなどが言っていた。もし、その仮説のようなものが真実なら強い自分が居ないと不可能な事が出来てしまう。

【ステイタス】の数値を伸ばす良い方法は強い敵と戦うことだ。それは世間一般的に言われている法則のようなもの。しかし、そんな敵と簡単に戦える筈もなく、負ければ死が待っている。

死にたいわけじゃない。

強くなりたい。その為には死なないで強くならなければならない。

それを叶える方法に近道は無い。

（……自分で自分の敵を作ることは愚かな事だけれど……。それでも相手が居る事は大事だと思う）

大手【ファミリア】に所属し、制限のあるダンジョン探索では思うように強くなれない。

であれば知恵を働かせるしかない。

それにポランもいずれは【ステイタス】の頭打ちにぶつかる筈だ。他の冒険者たちも壁にぶつかった経験を持つ。おそらく例外は無い。

だからこそ楽観視してはいけないのだが――

現時点でもアイズより強い冒険者はたくさん居るわけだし、焦ることは無い。

これこそがアイズの健全な冒険である、と言ってもいいくらいだ。

（……私もレベル４への【ランクアップ】を控えている。……偉業の達成は結局のところ自分では不可能だと思うことへの挑戦……。今から諦めていたら何もできない）

【ランクアップ】の条件はアイズの言う通り、不可能への挑戦だ。しかしそれは冒険者の数だけ千差万別でもある。

どれが正しい方法かなど誰にも分からない。

分かるのは冒険者自身の前に現れる壁だけだ。

「……さ、練習の続き」

「はい」

まずは構えから。次いで発声。内容を加味して動きを矯正していく。

それから剣技に移る。こちらはポランに合わせて改良する。全く同じである必要は無いが、形くらいは真似てもいいのでは、と。

『目覚め（テンペスト）よ』」

「……そうそう。最初より形になってきた」

アイズの知る魔法は長文詠唱が多い。さすがにそれを教えるだけで頭が痛くなりそうなので短文詠唱で妥協している。

本当は色々と教えたいところだった。仕方なく諦めた次第だ。

（……吹雪け、三度の厳冬……とか。我が名はアールヴ。……でも、これってエルフの人達じゃないと意味ないよね）

演技は真に迫っているほど効果が上がる。それは例え何も出てこなくとも――

彼女が【ランクアップ】したり新たな魔法を習得したらどのようになるのか、それはそれで楽しみではある。

この特訓は次の月まで続けられた。もちろん、ポランが新たな能力に目覚めることは無かったけれど。

#1―13　奇麗なダンジョン

【ロキ・ファミリア】の深層域への『遠征』が迫り、彼らの本拠（ホーム）『黄昏の館』では冒険に必要なアイテムの整理や買い出し、武具の整理などで大忙しだった。

それらは主にレベル2以下のメンバーが担当している。

今回の探索目標階層は四十五階層より下。

【ランクアップ】を控えているアイズ達を含むメンバーの実力の底上げが主（おも）だ。

全員が一気に駆け降りると他の【ファミリア】の迷惑になるので中層域まではいくつかのパーティに別れて行動する。

それらの作業の合間に時間が出来たアイズは『青の薬舗』に顔を出していた。

研究していた『保存液』の経過を知るためだ。

「……売り物にするなら……十五万ヴァリス。これは最初の段階のもの。今は随分と改良が進んで安価になってきた。……それでもまだ七万八千ヴァリス」

濃度調整によって腐敗菌の活動を停止させる事になんとか成功したものの、実用性は未知である。

取り出した後の薬液の除去方法がまだ解決していなかった。

単に洗い流せばいいのか、それとも新たに無毒化する薬液の開発をしなければならないのか。

どちらにせよ。形さえ残っていれば再生自体は可能となる。

「最終的には五万ヴァリスが限界かなと……。もちろん、小さな瓶一つで。腕くらいになると十万はどうしても超えてしまう。……ちなみにジジィの店ならこの十倍は吹っ掛けられると思うよ。いや、三十倍くらいいくかも」

高額な万能薬（エリクサー）で五十万ヴァリス。今は遠征の為、割高にされている筈だが――

かの【ファミリア】で購入するとなると百万ヴァリスを越えても驚

かない。
「毒妖蛆（ポイズン・ウェルミス）の解毒薬さえ作れれば無毒化は可能。ただ、それはジジィの【ファミリア】の団員が得意としているから……。同じ商品を創ったら難癖付けられるかも」
先ほどから危機感の欠如した様な間延びした口調で説明するのは犬人（シアンスロープ）の女性店員『ナァーザ・エリスイス』だ。
カウンターに濃度別の試液を置いてアイズ達に講義しているところだった。

†

アイズと同伴しているのは王族（ハイエルフ）の『リヴェリア・リヨス・アールヴ』である。時間的余裕が出来たので、かのアイテムを製作している店員から話を聞こうと足を運んだ。
いつも冒険者が無秩序に使い捨てにするアイテムを健気に作ってくれる者達を労（ねぎら）おうと。
ただ、いつも懇意にしている【ファミリア】ではないので少しだけ戸惑っていた。
どうしてこの店にアイズが来ることになったのか、それは単純明快

ポラン・ブーニディッカがお得意様だから。
だからといって【ロキ・ファミリア】全体で鞍替えする気は無い。
向こう（ティアンケヒト・ファミリア）で品薄だった場合、こちら（ミアハ・ファミリア）でも融通が利くか知るのに都合が良かっただけだ。
「保存液の量はこちらで最初から決めてしまう。だから、解毒に必要な量も勝手にする必要は無い、ようにする予定……です」
「対象はどのくらい期間が開くと駄目になるのかは分かるか？」
「出来れば……その日の内がいい。三日過ぎたら……危険。と予想してい……ます」
高貴なエルフからの問い掛けに思わずどもるナァーザ。
雰囲気がすでに並みのエルフと違う。
理由は分からないが、ちゃんと説明しておけば大丈夫だと本能が警告を発していた。

もし、ナァーザがエルフであればもっと混乱状態に陥り、まともに会話ができるかどうか――

「ほぼ密閉状態だから……。本拠（ホーム）に一ヶ月くらい置いても大丈夫。間違っても溶液が減ったからといって水を足したり、取り換えようとしない事。これは回復薬（ポーション）以上に保存できる、筈だから。……効能の問題で一ヶ月くらいかな、と思っただけです。異臭がするようなら効果が切れた、と思っていい。消臭効果も加えているけれど……」

「了解した」

「形だけ残すのであれば一年は放置しても……おそらく大丈夫。完全に骨になっちゃうけど……。ミアハ様が言うには部位……、骨までモンスターに消化されないかぎりは再生の可能性があるそうです。……だから私の腕はもう戻らない」

ナァーザは自身の右腕を撫でた。

経験者の意見にリヴェリアも真実味を感じた。

「……容器は出来るだけ密閉した方がいい。これはあくまで形を残すためのものだから。骨でも平気なら単なる水につけておけばいい。後は自己責任で」

ただの水だと腐敗菌は増殖するばかりか異臭が立ち込める。最悪、骨まで影響を及ぼす可能性もある。

そうなれば効果の高い万能薬（エリクサー）とてどうしようもなくなる。それば かりか接合の際に本体に多大な悪影響も考えられる。

「それでは保存の意味が無いな」

「まだ用途に関して未知だから。理想は完全に腐らないままがいいんだけど」

そこでアイズが手を挙げた。

今はどんな意見でも有意義だと判断したナァーザが指名する。

「……肉まで完全に保存すると……どんな良いことがあるの？」

「安価な回復薬（ポーション）で接合できる、かもしれない。そこまではさすがに理想過ぎるけれど……。肉体としての機能を生かしたまま保存し、万能薬（エリクサー）だけで再生できれば高度な魔法を使える人を探すより希望が大きい」

「……なるほど」
リヴェリアは感心したがアイズ首を傾げた。
「……ところで溶液には溶解能力はどのくらいあるんだ?」
「調合の過程でほぼ解消済み。腐敗菌のみ殺す以上は溶けない。だから容器も溶けない。ミアハ様の見立てでは……。肉の部分が溶けているように見えるのは腐敗菌の強さに負けているのと溶液が強すぎる、という二つが考えられる。各個人によって調整を変えられればいいんだけど、それはそれで割高になるし、とても難しいこと」
そうか、と一つリヴェリアは頷く。
聞いている限り、色々と考えて作られている事が分かった。もちろん、万能な薬品が出来れば苦労はしない。その為の試験段階を何重にも踏むのだから。

†

話を聞き終えたリヴェリアはカウンターに置いてある籠に気が付いた。
そこには丸い透明な瓶がいくつか入っていた。ただ、中身は食べかけの魚の頭部や動物の腐りかけの死体だ。
それを見た王族(ハイエルフ)はあからさまに顔を顰(しか)める。
「……なんだこれは」
「贈答用の小物。完全密封した保存液の試供品。こうなりますよ、というのを分かりやすく伝えるためのもの。一個三千ヴァリス」
「……なっ!?」
気持ち悪いアイテムで驚いたのか、値段に驚いたのか。
リヴェリアの眉根は更に険しく寄せられた。
「溶解能力があれば一週間くらいで骨も残さず溶け切る。それを個人的に確かめるには打って付け。……研究資金が欲しいので割高はご愛敬」
「……なるほど。商魂たくましいな。寧(むし)ろ、尊敬に値する」
「あ、もちろん小さなお子さんの口に入れてはいけない。これは食べられません」
大事な事なので、とナァーザは最後に締めくくる。

横では小さなアイズが『ママ、これ欲しい』とか言いそうな顔で見つめていた。絶対に買いたくない、と無言の意思表示を試みる。

ただ、個人的に資料として購入するのであれば吝(やぶさ)かではない。

「……制作に問題が無いわけじゃない。特に容器……。大きくて漏れない容器の調達が大変。新規で作ってもらおうとするとどうしても高くつく。かといって木製や金属の樽では……」

「衝撃にも弱いだろうな。……それと中身が見えなくなる……」

リヴェリアの指摘に頷くナァーザ。

風呂場に使われている『ホーロー』の技術を借りようか検討はしている。

そうなると必然的に持ち運びが困難になってしまう。適当な容器の内側に耐水性の被膜か何かを張り付けられれば、など色々と模索しているが決定には至っていない。

何をするにも素材が必要で入手には多額の資金が必要となる。

「当面は小型のガラス容器。そうすると腕とか長い部位は細切れにするしかなくなる」

「……それであの値段か……。予想するに相当……勉強した結果……なのだろうな」

その言葉に対してナァーザは口を噤(つぐ)んだ。

開発は失敗の連続。そして、多額の投資が必要不可欠。

毎日の研鑽こそが新しい道への扉である。

「最後に……。この溶液の後始末だけど。無毒化した後なら下水に流しても大丈夫。そこはギルドと相談済み」

当初は解毒の魔法などをかけてもらいながら同時進行で解毒薬の制作を始めた。

最悪、野ざらしにして蒸発させない限り安易に捨てる事が出来ない。

蒸発した気体は松明の炎に炙らせて止(とど)めを刺す。

後日、狼人(ウェアウルフ)の少年ベート・ローガを伴いリヴェリアは最新の『保存液』を一定量買い求めた。今のところ買い手のつかないアイテムなので品切れの恐れは無かった。

それと同時に注意事項の書類の束を渡される。
あの後、頑張って書き留めたらしい。口頭での説明も大変なので、少しでも労力を割く上では同情すら覚える。
「モノを入れてから劣化が始まるので注意してください。……多少、手についても大丈夫だけど……。あと……」
「……注意事項が多いな」
それだけ繊細なアイテムだということ。
人体の再生には余計な雑味が加わると上手くいかない場合がある。酷い似合うのは自分達だからだ。
零細【ファミリア】とて商品に自信を持って制作している。借金返済に走り回っているナァーザとて適当にすることが出来ない事は理解していた。
大手【ファミリア】が購入したからとて大量に在庫を抱えているわけではない。
製作が難しく、扱いも大変。大量の素材を消費する。安く済むのは水くらいだ。
商売の関係上、不良在庫を抱えるわけにはいかない。

†

更に後日、お金を貯めてきた赤毛の少女ポランが『青の薬舗』に訪れた。
定期的に回復薬（ポーション）を買い求めてくるが今回の目的は『保存液』であった。
何かしらの不安を抱え、備蓄の一つとして狙っていたものでもある。
「より深い階層に挑戦する上で……、何が起きるか分からないので」
「……君の年齢だと相当な覚悟要るよね？　私が言えた義理じゃないけど……、お金の無駄だよ」
十二歳で駆け出しの冒険者が激闘に備える。普通に考えれば異常事態だ。
その心境に追い込むのがダンジョンの恐ろしさかもしれない。
ポランとて日々を楽しく過ごせれば文句はない。けれどもモンス

ターが止め処も無く湧くダンジョンに挑戦していれば自ずと理解してくる。

今のままでは命が危ないと。

特にミノタウロスとはいずれ戦わなくてはならない。本当ならパーティを組んで堅実的な戦い方で挑むところ――

しかし、団員は自分一人だけ。ずっと他の【ファミリア】を頼りにすることは出来ないし、何よりアイズ以外の知り合いが出来なかった。

ギルドのアドバイザーの協力を以(も)ってしても未だに――

「……でも、今日は駄目。充分な量が確保できないから。前金で払ってくれたら【ヘスティア・ファミリア】の本拠(ホーム)に届けてあげる。場所も知ってるし」

「分かりました。いくらですか？」

「……持っている分だけでいい。……もちろん、仕事はちゃんとやるよ。それから……」

カウタンーに重そうなヴァリス金貨が詰まった革袋が置かれている間、ナァーザは商品の棚から何本かの回復薬(ポーション)と状態異常に効くアイテムを取り出した。

大手【ファミリア】とのパイプを繋いでくれた礼を少し込めて――ただ、念のために金貨の枚数は数えておく。

「毎度あり。良い冒険を」

「ありがとうございます」

金貨を受け取って何も渡さない、ということはナァーザとてしない。

機嫌が良い日は特に。そして、仕事を開始する。

ポランは一気に軽くなったサイフ事情を潤すため、ダンジョンに向かう。

上層での稼ぎは少ない。武具の調達もそろそろ始めなければならなかった。

不壊属性(デュランダル)ではない武器は定期的に取り換えなければならない消耗品と同様である。

下に降りる度に硬い敵が現れやすい。
整備もタダではない。
「『目覚めよ（テンペスト）』」
誰も居ない時にアイズから教わった剣術を披露する。
切れ味が良くなるわけではないが、戦闘意欲は体感的に良くなった気がする。
自分は今モンスターと相対しているんだ、という心構えのようなものが。

†

資金稼ぎをしていたら二つ目の【ステイタス】が評価Ｓ（９００）に到達した。
だが、やはり実感が無い。
分かるのは戦闘が楽になってきたことくらいだ。
「う～ん。無理して評価をＳにしなくても【ランクアップ】の条件はとっくに満たしているわけだし。このままでもいいんじゃないかな」
「そうですか？」
「……問題は【ステイタス】じゃなくて君の仲間だよ。全く集まらない。どいつもこいつも……」
そもそも実績が無い。
新規の【ファミリア】が名を上げるには相当の努力が必要だ。それには神自身の努力も関係する。
今まで様々な事にズボラだった弊害が今になって襲ってきている。
しかし、それもあとわずか。ポランが【ランクアップ】すれば『二つ名』を貰える。そうすれば他の神達にも知れ渡るようになるので知名度も一緒に上がる。
出来れば変な『二つ名』は付けられたくないが、有名税はいつも高くつくものだ。
冒険者の『二つ名』は『神会（デナトウス）』によって決められる。
三ヶ月に一度、神達による会合で【ランクアップ】した眷族が現れるとほぼ強制参加の資格を得る事が出来る。神ヘスティアの眷族（ポラン）はまだ【ランクアップ】していないので参加資格の通知は出ていない。
元より出たくない、とヘスティアは思っていた。

「ボクは君一人を独占したいわけじゃない。多くて困るとも思っていないさ」

眷族の負担を軽減させるには団員を増やすしかない。

【ステイタス】が限界地に達しようとレベルは1のまま。【ランクアップ】した冒険者とは開きがある。

（堅実と言っても変わり映えのしない生活だけをしているわけにはいかない。……それはもう冒険とは呼べない）

生活する為なのは理解している。

それを悪いとも言えないし、思ってはいけない。けれども――

それは可能性の放棄ではないか。そう思うヘスティアだった。

†

深層域への遠征時期が二ヶ月後に決定した【ロキ・ファミリア】では事前に情報集めと各階層主の討伐メンバーの選定などを会議で決めていく。

期間を設けておく事で【ファミリア】間での緊張を高め、戦闘に集中してもらうためだ。

これは彼らに武器やアイテムを提供する【ファミリア】にも伝播し、オラリオ全体が活気づく結果となる。

鍛冶系の【ファミリア】では団員総出で武器を整備、または新造する。

そんな中でも多少の息抜きは必要で、アイズ達は街に赴きダンジョンに備える。そんな彼らが利用する飲食店の一つに『豊穣の女主人』という名の酒場がある。

大柄な女店主が切り盛りする店で荒くれ者も一喝で黙らせる。

身長は2M（メドル）ほどはあろうかという偉丈夫でドワーフの『ミア・グランド』は夜の開店の下準備に大忙しだった。

普段、日中は店を閉めているので――ポランは知り合い（アイズ）の伝（つて）で紹介してもらった――一部の調理器具などを借りていた。それと余裕がある時は皿洗いぐらいしか出来ないが、手伝いも。

小さなポランの申し出に対し、他の冒険者なら恐れ慄（おのの）くミアは快く承諾した。

素直であれば誰でも優しい面を見せるのだが普段の素行のお陰で怖がられる事が多い。
「今日からいくつかの【ファミリア】に貸し切りが決まってる。あんまり遅くまで居るんじゃないよ」
「はい」
素直な返事にミアはニコリと微笑む。その横では恐怖に震える猫人（キャットピープル）の従業員が居た。
栗色の髪と猫耳に先端が白い太めの尻尾を覗かせる。
「……ポランは本当に怖いもの知らずだニャ」
「将来大物になるかもしれませんね」
洗い場の他の従業員が相槌を打つ。
今日は床掃除の日と決まっていたので早速仕事を始める。
給金は自給。それと店の食器や火器関係を使わせてもらえる。もちろん、客が来ない間だけ。
健康的な暮らしを模索していたポランにとって飲食店は格好の仕事場だった。もし、何らかの事情で冒険者家業が出来なくなった時の為に――
「稼ぎが良くなったらうち酒場で飲み食いしてほしいけど……。少なくとも酒が飲めるくらいには成長してもらわないとね」
いくらミアでも十二歳の少女に酒は勧めない。が、迂闊に飲ませて店内を荒らした事件は忘れていない。

†

夕方に差し掛かり、給金を与えた後、ポランに軽くはない食事を振舞うミア。
地元で採れた野菜と身体に必要なタンパク源たっぷりの料理である。
小さなポランでも無理なく食べきれる量がドンと置かれた。もちろん、食中りを防止するために火を通した物が――
「聞いたよ。【ステイタス】が９００を超えたってね。……全く口の軽い連中は噂好きでいけない」
「数字ではそうなってますけど……」

ポラン自身は【ステイタス】を自慢げに話したことは無い。しかし、うっかり喋った【ファミリア】が何処なのかは分かっている。

酔った勢いであればどうしようもないけれど。

「話は変わるけど、色々と備蓄しているようだね。次はどんなものを買う予定だい？」

「万能薬（エリクサー）です。それで準備が一先ず終わる予定です」

「……それは例の保存液と一緒の奴かい？」

「大きな戦いを控えている場合、それ相応の準備が必要です。……まして私は単独（ソロ）ですから」

少女の言葉とは思えない大人びた発言にミアは鼻を鳴らす。

冒険者は多少の勢いがなければ続けられないものだ。威勢が良くて結構、と。

「ミノタウロスを倒すんならミャーが一緒に行ってやろうかニャ？」

「アンタが一緒じゃあ【ランクアップ】の邪魔にしかならないよ。……でも、強敵に挑むんなら、アタシが骨くらいは拾ってやるから安心して行ってきな」

「ありがとうございます」

そうなると、と呟きつつミアは店の奥に引っ込んだ。

店主の姿が見えなくなった途端にダラケ始める店員たち。全員女性である。

共通のエプロンを身に着けているが彼女達は並みの冒険者より強いと評判であった。

「下層域はいつごろ挑戦するニャ？」

「装備品の新調もしないといけないので……。【ロキ・ファミリア】の遠征が終わる頃になるかと……」

悠長に構えているのニャ、と呟きつつ栗色の髪の猫人（キャットピープル）『アーニャ・フローメル』はポランの隣に座った。

本格的に忙しくなるのはもう少し日が暮れてから、その僅かな間だけ話し相手になろうと考えた。

「おミャーが冒険者になってどれくらい経つニャ？」

「半年は越えたでしょうか？」

「それで評価Sは凄いニャ。何かしらのスキルとかないと無理ニャ、普通なら」
「でも、スキルは何も発現していないという話です。そんなにおかしいですか？」
「レベル1でも易々と数字は増えないものニャ。【ランクアップ】出来ずに終わる冒険者だって珍しくないニャ。その中でもおミャーは……ミャーが見ても特別な何かを感じるニャ」
特にモンスターを倒した分だけ数字が増える、という部分が。
微々たる数字の増加だという話だが、そんな機械的な事があり得るのか疑問だった。
一般的にはそんな単純な事で【ステイタス】の数字は増えない。だからこそ冒険者はいつも苦労している。それは【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインも同様に。
「そのままモンスターを倒し続けたら評価の値がぶっ壊れたりするかもニャ。……そんなの見たことも聞いたことも無いけれど……。何か珍しいスキルでも発現していたら……、きっと大騒ぎになるニャ」
そもそもボランは健全な冒険を心がけている。素直さが【ステイタス】に反映されているのであれば多くの冒険者は心が汚いから無理、という事になる。
そういう条件がある場合は納得するしかない。
ありえない話かもしれないがボランならばあるいは、という予感はあった。
この日はそれだけで話は終わり、アーニャは仕事に戻った。
皆が応援してくれる事にボランは内心でとても嬉しく思っていた。
しっかりと料理を食べきって――食器を洗い――本拠（ホーム）へと帰っていった。

†

装備品を新調し、次なる目標は『万能薬（エリクサー）の購入費用』の調達。そして、いつもと変わらぬ日常が始まる。
ギルド本部に赴き、アドバイザーへの挨拶を済ませているとアイズとベートに出くわした。

事前に約束を交わしたわけではないが、こうして会う事がしばしばあった。
「……ご無沙汰」
「おはようございます」
アイズは挨拶を交わすがベートはまともに声をかけてこない。
こういう人だと思って諦めているが、いつも不機嫌そうな顔なので気になっていた。
「……いよいよ大物を購入することにしました」
「……そうすると魔力、以外が評価Sになるんだよね？」
「順調にいけば……。それは特に目的ではありませんが……。期間は三ヶ月ほど。その後で【ランクアップ】に挑戦しようと考えています」
勢いに乗る血気盛んな冒険者であれば今すぐにでも下層へ赴くところだ。だが、ポランは安全に安全を重ね、充分な下準備を整えてから突入する。
ベートからすれば弱者なりの戦い方に見える。そして、それを悪いだの甘いだの言う気は無かった。
モンスターへの挑戦を今も続けているから。
「……そう。随分、頑張ったね」
「頑張りました。地道に」
アイズが微笑み、ポランも微笑む。
双方それほど激しい感情の起伏は見せないが似た者同士のようにベートには見えていた。もちろん、地上に居る時の事で戦闘では全く対照的と言っていいくらいの違いが現れる。
そもそも――ポランはアイズの本気を知らない。いや、本省と言ってもいいくらいの激しい感情を。
彼（ベート）がそんなことを考えているとアイズがパーティ申請しようか、と誘い始めた。
一瞬驚いたベートではあったが、いつもの事として気持ちを処理し、黙って眺めた。
「……今回は十三階層にしようか？」
「ミノタウロスの一つ前がいいですね」

「……ん。分かった」

一般常識として十二歳の少女が交わす内容ではない。

これから彼女達はモンスターと本当の意味で殺し合うのだから。

本当ならば大人として誰か止めなければならない。だが、この迷宮都市オラリオにそんな存在は――例え神でも――居ない。

いつものように――当たり前のように申請が滞りなく済んだアイズ達は楽し気にダンジョンに向かう。そして、それをおかしいと――異常だと思う大人は誰も居ない。

いや、居たとしても初めて冒険者登録を済ませた者くらいだ。

どうして子供が危険なダンジョンに降りていくんだ。何故、誰も止めない。

これがオラリオの常識であり、それを否定する者こそ非常識であるからだ。

しかし、それは本当にそうだろうか。

誰もが思っていて黙認しているだけではないのか。

一人のギルド職員は姿が見えなくなった少女達の安否を思う。

（無事に帰ってきますように）

（……【剣姫】達はもうすぐ遠征か……。そうするとまた記録が生まれるかも）

（でも……十二歳なんだよな）

見た目で言えば小人族（パルゥム）と変わらない背丈だ。

人間（ヒューマン）だと思って心配する者は少ないかもしれない。だからこそ――

――

ギルドの規則に年齢制限は設けられていない。しかし、さすがに赤子の登録は未だかつて無いのが救いか。

†

遠征前とはいえ運動や鍛錬は続けられる。その延長線上でダンジョン攻略もある程度は許されていた。

無駄な資材を消費することを押さえるためある程度の階層主は事前に討伐しておくのが基本である。

それらはアイズ達の仕事ではなく、他の同盟ギルドや十八階層で暮

らしている冒険者に委ねられていた。
健全な攻略を進めるために。
アイズとベートは最低限の荷物で来たのに対し、ポランはがっしりとした格好になっていた。
いくら【ステイタス】が充分に増えているとはいえ、駆け出しには変わりない。
「……今日はいつも以上に大荷物だね」
「目標階層で色々と実験でも……と思って」
最初に出会ったひ弱なポランはもう居ない。
見た目こそあまり変わらないが雰囲気はしっかりとした冒険者の佇(たたず)まい。
「……十三階層にはヘルハウンドが出るけど」
「数が少なければ大丈夫だと思います」
「……なら、行こっか」
やる気があればそれだけで充分だとアイズは判断する。
何かあっても自分が守る。今は一人だけの戦いはしていない。それはもっと大事な時にすべきだと思ったから。
一緒に居るベートは見張り役。元よりアイズ単独で潜らせるつもりは無く、不測の事態が起きた時は情報だけでも迅速に届けるように言われている。
大手は何かと狙われやすい。だからこそ保険はいくつもかけられている。
「十層辺りに出るという大型モンスターをお願いします」
「……了解」
「んっ？　てめえは戦わないのか？」
「荷物の関係で無理は出来ないので。……折角アイズさん達が居るから頼らせていただきたいと……」
強(したた)かなポランの言葉。
もし、アイズ達が来なければ戦闘か逃走を選ぶ。彼女とて【ランクアップ】を控えているのだから逃亡一択だけとは考えにくい。

魔石やドロップアイテム目当てとも限らないところがベートの思考を狂わせる。

そうして極力戦闘を避けつつ七階層に到着。すぐにモンスターが生まれるもアイズが持ち前の剣技で一掃していく。

のんびりと待機する予定はなく、すばやく魔石を回収しつつ次の階層に降りていく。

戦闘しないと言ってもポランも充分、熟練した冒険者だ。無駄な事をしないだけ感心する。

敏捷の数値が高いお陰で足手まといという気がしない。何よりモンスターにビビっていない。

「……」

（……今はまだ青臭せえガキだが……。【ランクアップ】したらどうなるのか……。他人を気にするのは俺には似合わないか）

みっともなく泣き喚かないだけマシだと思い、黙って移動を続けるベート。と、普段以上に大人しい彼の事を不気味に思うアイズ。

†

攻略は順調でモンスターに異常は見られない。ただ、たまに予想外の出来事が起きるのでダンジョンでは気が抜けない。

例えば唐突に落盤したり、珍しいモンスターが現れたり、普段以上の数が生まれたりする。

ごく稀（まれ）に異常に強いモンスターが発生する場合がある。それらをまとめて『異常事態（イレギュラー）』と呼ぶ。

「……次で目標階層だけど……、私達でモンスターを倒してもいいんだよね？」

「はい。遠慮なく倒してください。私も近くに居る分は頑張ります」

お互いの了承を得たところで十三階層に降り立つ。

火を拭く黒い犬型魔獣『ヘルハウンド』が早速走り寄ってきた。それらはアイズが瞬く間に撃滅する。

相手に攻撃させる余裕すら与えず。

「ベートさんは左を」

「おう」

短いやり取りだけで十数匹うろついていたヘルハウンドは一分も経たない内に姿を消した。

鮮やかな手並みにポランはつい感動した。その後、アイズ達は警戒態勢に入り、ポランはドロップアイテムの回収を始める。

落ちた魔石の半分はアイズ達に。

合間に出てくる額から角を生やした――体長は五十C（セルチ）ほど――兎型モンスター『アルミラージ』はポランが相手をした。ヘルハウンドのような高火力の攻撃でなければこの階層でも充分に戦えている。

それからしばらく現れるモンスターを狩りつくし、次の発生まで余裕が出来たのは二十分後。これがポラン一人であれば一時間以上はかかっていた。

「……この階層で何か実験でもするって話だっけ？」

座れそうな石に腰を下ろしたアイズが魔石を拾っているポランに尋ねた。

この階層は天井まで高く、広い。狭い通路然とした今までのものとは違う。

十階層も相当広い空間だったが――下に行くほど広く、十八階層以降となると立体感のある複雑さを見せる。

「まずは一休みしてから」

「……分かった」

息を整え、瞑想するように静まるポランとそれに倣うアイズ。

ベートは警戒任務の為、少しだけ離れた位置に居た。

たっぷり五分間。何も喋らない。これはアイズがポランに教えたものだ。

どんなに苦境に立たされようと決して取り乱してはいけない、というリヴェリアの教えから。

（……どんなに深刻でも五分間無理矢理にでも休め。……出来なければ作れ）

王族（ハイエルフ）にしては随分と乱暴だなと思ったものだ。

だが、今になって思い返せば、その五分を凌ぎ切れば起死回生出来るのが冒険者の強みであるという。

本当に起死回生出来た、という経験は無いけれど。
（……時間はさておき、感覚は驚くほど研ぎ澄まされる……気分になる。そこかしこから音も拾える）
ダンジョンの内部全てを見通せるわけではないが聴覚が許す限りの範囲は――なんとなくだが――把握できる。もちろん完璧ではないけれど。
五分。それはとても長い時間。
危険なモンスターがいつ発生するか分からない。その恐怖が判断を狂わせる。
そして、既定の時間になり、瞼を開ける。
「……じゃあ、早めの昼食にしようか」
「はい」
身軽なアイズ達は小型の携帯食は持ってきていた。
ポランは荷物が多いのでたくさん何を入れているか疑問に思っていた。食べ物だったらいいな、と薄っすらとは思った。
「アイズさん達と会うとは思ってなかったので」
食料とは別に金槌や鋼鉄製の杭のようなものを取り出す。それからお弁当が出てきた。
水筒もあったが長丁場を想定していたのか、いくつも出てきた。
「良かったらどうぞ」
「……いいの？」
「序盤が早めに終わりましたので。特に十階層以降は助かりました」
ポランは十一階層から現れるレアモンスター『小竜（インファントドラゴン）』に警戒していた。
体長四M（メドル）ほどもある大型モンスターで上層の階層主とも呼ばれている。
その後、ベートにも水筒を渡すのだが、威嚇されることはなかった。
匂いに敏感な彼は薄っすらと探りを入れたものの異常が無いと分かると水筒を口にした。
今日が初めてではないし、彼だけ離れた場所で食事を強要されているわけでもない。

†

戦闘が頼りないのは今更だからポランに対して無碍な扱いはしなくなった。

アイズと同様に何か戦い方でも教えてくれるのではと期待したもののベートの肉弾戦はポランの戦法には合いそうになかった。しかし、彼もまた我流であり、他人に教えるほどの方法論のようなものが無かった。

「いつも見張りありがとうございます。塩は如何ですか？」

「あっ？　大して疲れてねえから要らねえ」

塩分補給に僅かな塩を舐める。それも様々な冒険者の話や噂から実践していた。

持ち込める分量がだいたい決まっているので必要最低限の荷物は自ずと決まってくる。

アイズから見てポランは『優しい』というか『良い子』であった。神ヘスティアの言葉からも素直で良い子だと聞いていた。

そんな子が血生臭い冒険者をやっている。何か事情でも、と思って尋ねても帰ってくるのは生活の為ばかり。

実際そうなのだろうとは思う。ポランだけ特別な気がする、という事は無い。

逆に質問された場合、モンスターが憎いからと答えられるのか――

「……」

それぞれに事情がある。だから、ポランは無理にアイズの事を聞こうとしない。ベートに対しては怖がってはいるが逃げ出すことは無い。

おそらく仲良くなりたい気持ちがあるんだとアイズは思った。

パーティを組んでいるから。

そもそもよその【ファミリア】の団員だ。知らない事が多くて当たり前である。

毎回、彼女が何をしようとしているのか興味を持つのは自分らしくない気がする。

（……そう。特に金槌と杭がとても気になる）

色んな発想をするのは若さの特権だとフィンやリヴェリアは言う。
アイズは戦い以外に興味を持つことが無かった。せいぜいジャガ丸くんくらいだ。
「……それは何に使うの？」
「これですか？　ダンジョンの壁とか……、ああいう石の塊などを砕くのに使います」
「？」
「火薬類は怖いので……。それと落盤の関係で……」
「ちょ、ちょっと待って……。今日は……それが目的？」
「はい」
【ランクアップ】の為の下層域における資金稼ぎだと思っていた。
実験とは聞いた覚えがあるが、と少し忘れかけていた言葉を懸命に思い出すアイズ。
彼女（ボラン）にはいつも驚かされる、と金色の瞳を輝かせながら話に耳を傾ける。

†

実験内容は至極単純なものである。
まず適当な壁を破壊。出来れば小さな穴程度が望ましい。大きく破壊する必要は無い。
一般の冒険者は率先してダンジョンの壁を破壊したりしない。それゆえに内部がどうなっているのか知らない者が多いし、興味も持たれてこなかった。
モンスターが出現する時、様々な色の光を放っているのは確認した。ただ、戦闘に集中するのでその後の経過は意外と見る事が無い。おそらく光源が消えている為に気づかないのだと予想している。
ダンジョンからモンスターは生まれる。それは誰もが持つ共通認識だ。
「先程モンスターが生まれた場所……。そこに穴を開けてみます」
十三階層のモンスターは地面からも這い出てくる。
何もない中空から突如現れるケースは知らないが、そんなことが起きれば脅威だと思っていた。

いくらポランでも階層主の部屋ではさすがに実験はしない。けれども一番分かりやすそうな気はした。

「そして、その壁の修復速度を見ます。下層域程早い傾向にあるようですから」

「……一部の壁は修復が早いところがあるって聞いた。……ここだと……、もう少し向こうの奥まった場所じゃないかな。……通常よりも早い修復が起きる場所はだいたい未発見領域って言われる」

ポランよりも詳しい情報を告げるが上層だからこそ言っている。今のアイズでも公開していいものと駄目なものの区別はある程度できる。

いくら親しくなったとはいえ――

「いかにも怪しい場所は避けます。……大型モンスターが出る罠だと怖いので」

「……そうだね。……じゃあ、私が穴を開けようか？　破壊し切るわけじゃ……ないんだよね？」

「はい。ヘルハウンドの頭くらいの大きさで。それと修復される場所じゃないといけません」

「分かった」

アイズは剣で開けようかと思ったが、武器が痛みそうだったので杭を借りる。

力ではポランを上回っており、同年齢だとしても歴然の差を見せつける事が出来る。

水で印（しるし）を付けた場所に杭を打ち込むのだが、比較的大きくて深くと注文が入った。

少女の腕力だけで壁が削られていく。――途中、金槌で自分の手を打たないようにと優しい声が聞こえてきた。

削るたびに長めの杭を渡される。

指定された形は一辺二十Ｃ（セルチ）の正方形。奥行きも同等程、と行きたいところだが専門家ではないので四角錐に近い形になってしまう。

理想的な立方体は相当熟練した職人にしか出来そうにないのである程度のところで妥協する。

（……どうしてこういう発想をしたのか。モンスター討伐しか考えてこなかった私が言える事じゃないけど）

安全に資金稼ぎしていると思っていたら想像外の言葉が続く。

ポランが見ている景色は自分とは違う。それは当たり前ではあるが今この時はとても不思議に思えた。

†

言われた通りに四角く開けた穴は五つ。そこから修復が始まったのは二つほど。

無機物である岩石がどのようにして元に戻るのか――

それは穴の奥から砂が湧き出るように――いや、モンスターを倒した時に出る灰の様なものが塞いでいく。

大抵モンスターが湧き出ると足元に瓦礫や小石が散乱する。それらが自然と浮き上がって穴を塞ぐ、という状況もあった。

そもそもダンジョンの内部はいやに小奇麗である。誰かが掃除しているわけでもないのに。

たくさんの冒険者が訪れ、たくさんのモンスターを倒しているのであれば足の踏み場もない有様になっていないとおかしい。特にモンスターが死んだ後に発生する灰は確実に呼吸器系を痛める。それが無いということは何処かに吸収されているか、時間経過とともに消滅していないと安心して通路を歩けない。

（……奇麗なダンジョン。いくら下層は空間的に広いと言っても……奇麗過ぎる）

ギルド職員がこっそりと出入り出来るような隠し扉などあるわけがない。であれば誰が毎日のように清掃しているのか。

ダンジョンが清潔を保っているのはダンジョンそのものが自浄作用を持っているから。

それ以外に考えられない。

ダンジョンはモンスターを生むので生き物と言われている。確かにその意見にポランも賛成であり、疑う材料が無いと思った。しかし、本当に生き物ならダンジョンそのものが冒険者に牙を剥く事態がある筈だ。

それこそがモンスターの発生原理ではないのか。
（制限なくモンスターが現れるようなダンジョン。どうして冒険者に魔石を与えているのか。その辺りは分からないけれど……）
それとも――
いや、とポランは思考を留める。自分の予感がそれ以上を予測することは危険だと伝えてきた。
（……それとは別に疑問なのは階層ごとに現れるモンスターがある程度決まっているという点……。魔石は同じなのに）
自分達は何か見落としているのではないか、と。
闇雲にモンスターを倒し続けているとダンジョンが更に怒り狂う――そんな事態が果たして無いと言えるのか。
それと――ダンジョンを徹底的に破壊し尽くすと摩天楼（バベル）が落下。
これはあくまで可能性であり、予感だ。
これは神ヘスティアに疑問を投げかけたところ、神が蓋として設置したんだから大丈夫さ、とにこやかに自信を持って答えた。
潰されるのは眷族ですよ、と何度も詰め寄って尋ねたものの『大丈夫』の一言で切り捨てられる。
（……ヘスティア様は新人の神様……。知らない事がたくさんあるかもしれない。やはりここは冒険者自ら確認しなければ……）
自分達が潜るダンジョンが今後も安全であるのか。いや、危険なのは変わらないが少しくらい謎を解き明かしたい気持ちがあった。
命を懸けている冒険者たちが少しでも長生きできるように。

#1―14　ランクアップ

【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインによって開けられた壁の穴の様子を伺いつつ駆け出しの冒険者ポラン・ブーニディッカはメモを取る。

今後の役に立てるため。または単なる知的好奇心を満たすため。

自分達が潜っているダンジョンという存在を理解するため。

理由は様々だが何も知らないよりはマシだと赤毛の少女は考えていた。精一杯知恵を働かせて。

（……モンスターが抜けた分はどうしているのでしょうか。魔石をたくさん取られても平気ってことは無い筈……なんですけどね）

それと何を栄養源としているのか。

その根本となるものが無ければ魔石は――魔石とは一体何なのか。

冒険者がいくら考えたところで魔石の事に一番詳しいのはギルドである。おそらく――そこまで考えたところで少し不毛さを感じた。

冒険者は黙って仕事をしていればいい、というぶっきらぼうな言葉が浮かぶ。

様々な冒険者が居るように様々なアドバイザーが居る。その手の言葉も自然と耳に入るものだ。

「……不思議だね」

「……はい」

背中にかかるほどの長さの金髪に金色の瞳の少女が呟き、赤毛の少女が相槌を打つ。

自然修復される壁をじっくりと眺めたことが無かったので、アイズは神秘的な現象として受け取った。それはポランも同様であった。

生き物のように自身のケガを癒すダンジョン。

「……それで、これで終わり？」

「いえ。これからです。それとこういう現象中に腕とか挟まれたら……怖いですよね」

「……そうだね。普通はのんびりとは……待っていたりしないから、

そういう事故は聞いたことが無い」
冒険者がダンジョンに食べられる。
修復速度や今までの噂話からもこの手の事故は話題に上ったことが無い。
それは普通に冒険していて遭遇するような事故ではないから――
もし、敵意を見せるダンジョンなら容赦なく壁を動かして潰しに来る。しかし、落とし穴のような事故はあっても密室に閉じ込めて圧殺するような事件は聞かない。
もしそんなことがあれば立ち入り禁止にしそうなものだ。
「……私達の遠征でもそういう事故は聞かないな……。基本的に冒険者を閉じ込めたりしない。……だけれど隠し部屋の様な場所があることは確認されている」
逆にモンスターを圧殺するダンジョンというのも見たことも聞いたことも無い。
あればあったで脅威だとアイズとて思う。

†

以前アイズは希少な鉱石もダンジョンの壁から出ると言った。
モンスターではなく、魔石でもない。
こうして話している間、別の壁や地面から現れるモンスターは灰色の髪の狼人（ウェアウルフ）の少年ベート・ローガが討伐していく。
ポランは事前に――モンスターの種類別に――魔石を小分けにまとめており、それらを入れた革袋を取り出す。
どの魔石も見た目は同じ。アイズが知る深層のモンスターにも差はない。
「階層ごとに違うモンスターが出るなら、違う魔石を投入するとどうなるのか」
「……どうなるんだろう」
危険度の低いモンスターの魔石を選び、開けた穴に投入する。
一つ目にはレアモンスターの『ブルー・パピリオ』だ。ドロップアイテムを落とさなかったけれど、と。
次は『ニードルラビット』の魔石を大量に投入。零（こぼ）れ落ちない程度

だが。
　最後の穴には全部、というのはさすがに怖いので『ウォーシャドウ』にした。
「上層で深層の魔石は……私も怖いと思うので無難そうなもので……」
「……階層主は確かに怖いよね。……あと大量に出るのも」
　穏やかな階層に大量発生しそうなモンスターが居たら他の冒険者に迷惑だ。
　それと現在の階層より下に居るミノタウロスも上に連れてくるわけにはいかない。ただ、滅多に階層を移動しないと言われるが絶対はない。
　不穏な予感を払拭しつつ魔石共々修復される壁を眺めるポランとアイズ。
　魔石は回収して換金するもの。だから、こういう使い方をする冒険者はほぼ居ない。
　もし他の冒険者が居れば勿体ないと呟かれているところだ。
（……魔石を飲み込んだらそのモンスターが出るのかな。……そうなると延々とモンスターを倒せたりする……。でも、それだとなんか……）
　仮定の想像だが魔石を持つモンスターを倒す行為が虚しくなる予感がした。
　凶暴で冒険者に襲い掛かってくる。そんな程度の認識しかなく、それでも憎いと思っていたモンスターが。
　アイズは自分の認識外の事に戸惑いを見せる。
（……ポランの言っていた効率的に魔石を取り出すのと……そんなに変わらない。私はただ……、モンスターを倒せればいい。でも、延々と出てくるモンスターを憎み続けるのは大変……）
　憎しみを持つ、と自分では思っているアイズだが、普段は淡々と仕事として処理している。
　深層域の強敵と戦うことを熱望し、強いモンスターなどには確かに憎しみのようなものを感じる。ただ、それは根本的な憎悪とは違う気

もしていた。

†

アイズが苦悩している間に壁は修復現象を起こし、魔石ごと飲み込んでいく。

上層でアイズやベートが行った破壊行為でも壁の奥は生物的な様相を見せなかった。それと開けた穴からモンスターが出てくることも無かった。

「……あ」

「？」

（……魔石って砕けたらモンスターが死ぬから。壁に入れても無駄なんじゃ……）

修復の際に砕け散る事まで考えが及ばなかったことに今更気づいて落胆するポラン。

そうと分かれば別の方法を取るしかないが無機物の中に放り込んだ以上、それらを潰さずに済ませる方法は浮かばない。

土壁ならまだ可能性はあるかもしれない。しかし、この実験は出来る限り上層で、しかも適度に広い方が望ましい。冒険者の数も少なければ尚――

そう考えて十三階層というギリギリ条件に合う場を選んだ。

「……無駄な事をしたかも」

「……君もがっかりすることがあるんだね」

「ありますよ。……ああ、でも勿体なかったな。換金分は別に取っておいているからいいけど……」

「……そこは……たくましいよね」

薄く笑うアイズ。

ポランと共にダンジョンに潜るようになって彼女は幾分か笑うようになった。それを【ファミリア】の団員に指摘されたこともあるが本人は首を傾げるのみ。

アイズ本人は人並みには感情があると思っている。だから、心外だと口を尖らせることがしばしば。

そして、穴が完全に塞がり静けさが襲う。

この階層のモンスターはそれほど頻繁に生まれることは無く、キラーアント並みの脅威も無い。
ヘルハウンドの火力だけが強みである。
十三階層はレベル1にとって最後の到達階層とも言われる。次の階層にはミノタウロスが居る。【ランクアップ】する場合は十一階層からが基本だ。
レベル2になると潜れる階層は一気に増える。そもそもパーティを組んでいる事が前提になっているが。
「……」
アイズは自然と――腰に下げた剣に手を伸ばす。
それから一歩、壁より後退する。
防衛本能が刺激されたのか、とても嫌な予感がした。
（……今、振動が……。階層全体から感じたような……）
すぐさまベートに顔を向けるも新たに現れたモンスターを倒しているところだった。
気の迷いと思わず、ポランに荷物をまとめるように命令する。
大型階層主が現れそうな壁は無いとしても何かが起きようとしている事は感じた。
「……普段と違う気配……。気を付けて」
「分かりました」
手慣れた様子で荷物をまとめ、武具を装備するポラン。
いつも後方での仕事に努めていたので手際がいい。それと多くのモンスターを倒してきたことで臆することなく行動できている。
余計な混乱を起こさない分、戦闘に意識が割けるのでありがたい存在だとアイズは思う。
（……上層には無く、ゴライアスとも違う。大きくはないけど嫌な気配……）
自分の記憶にあるモンスター達で近い物は深層域くらいにあるかどうか。しかし、深層域よりは凶暴性が感じられない。
少しずつ壁から遠ざかりつつベートの元にゆっくりと向かう。だが――

ビキリ、と不協和音が木霊（こだま）した。それ自体は聞きなれたものだが気配がまるで違う。

†

魔石を放り込んだ壁が全体的にひび割れる。それはこの階層ではありえない現象である。

ヘルハウンド達ですら全体を破壊する程の現象ではなかった。

通常はモンスターの身体に合わせた局所的な崩壊のみだ。それ以上と言うのは相当大型でもない限りは――

「撤退っ！」

アイズは短く叫ぶ。

それは遠くに居る冒険者にも伝える為にわざと大声で叫ぶ。例え誰も居なくても。

声を聞いたベートは目に付くモンスターを倒しきり、拾えるだけの魔石を回収しつつアイズの元に近寄る。そして、彼女の動きに合わせて移動する。

「厄介なモンスターか？」

「分からない。けれど……、大型に警戒」

「了解」

上層に現れるモンスターであれば希少種（レア）でもおそらく問題無いと自負する。しかし、それでも未知のモンスターに対して油断が禁物であることは理解している。

アイズは上層への出口の確保をベートに命令する。

ポランは彼らとの間でギリギリまで様子見。実験を行（おこな）った責任として。

そうしてそれぞれに穴をあけた壁――正確には高さ十Ｍ（メドル）程の巨石の一部――が崩壊していく。

通常であればすぐにモンスターの姿が見える。大型なら特に。

（……何も無い？　でも、気配は……）

大型が現れると思い込んでいたが巨石が壊れただけでモンスターの姿が無い。だが、気配は未だに消えていない。

土砂による砂塵が舞うもある程度離れているアイズ達には影響は

ない。
「……階層全体が壊れるかと思った」
「……そうだね。でも、気を付けて」
ポランが選んだ場所は落盤の恐れが無い巨石だ。安全な実験を心がける彼女とて全体崩落は望んでいない。
しかし、モンスターが生まれずに壁だけ壊れるとはアイズも思っていなかった。
（……分かる気配は……三つ……。良かった、大群じゃなくて）
安心したのも束の間、風を切るような音が耳に届くと同時に尋常ではない悪寒が襲う。すぐさまアイズは感覚だけで飛び退る。
大きくはない。中型か、それ以下――
（何今の？）
ポランとベートに意識を向けている余裕が無い。そう感じつつ戦闘に意識を向けるアイズ。既に剣は引き抜いている。
姿が見えないが確かに気配はある。物凄い速度というわけでもない。
主に下から――
アイズが感覚を頼りに標的を補足しようとする。しかし、なかなか見つからない。
透明なモンスターかとも思ったが、僅かに見えた感じではそうではなかった。
見えたと言っても黒い靄（もや）のようなもの。それは決して『ウォーシャドウ』ではない。
分かる事は標的はかなり小さい。それなのに尋常ではない邪悪な気配をまとっている。
†
レベル1のポランが恐れるのは理解できる。けれど、レベル3であるアイズもまた驚いていた。
気配から正確な事は読み取れないが嫌な予感がするという事は自分と同等か、それ以上である可能性があるということ。
深層域のモンスターに似てはいるが、それよりも邪悪であった。

悪寒が酷い。上層では滅多に汗をかかないアイズの顔は汗に濡れ始めた。

近くに居るベートもアイズほどではないが、似たような気配を感じ取って警戒態勢に移っていた。それと彼の尻尾が珍しく逆立っている。

（……なんだこのヤベー気配は……。この階層に俺達を驚かせるモンスターなんか……）

同じくレベル3であるベートも自分達の幹部より怖い存在が居る筈は無いと思いつつも感じる気配が幻ではない事を体感的に察していた。

確実に近くに危険なモンスターが居る。それも飛び切りの殺意を持つ凶悪な何かが。いや、殺意というよりは純粋な攻撃衝動といったような――

（……ここで逃げるより倒さなきゃ。他の冒険者が危ない）

それと――【ランクアップ】への道が広がるかもしれない、という思いがアイズにはあったがベートには無かった。

彼の場合は強さこそアイズ並みにこだわりを持つもののモンスターへの警戒の方が強かった。

「……ベートさん。……ここで倒します。……協力してください」

「言われなくても分かってる。……これが『ケガの功名』って奴か」

「……ごめんなさい。……二人とも」

ポランが頭を下げるもののモンスターの警戒度はベート並み。すぐに武器を構える。

相手の強さは分からないが二人より三人で対処した方がいいとそれぞれ判断を下した。

「お前はいざとなったら助けを呼んで来い。……いや、最悪、警告しながらギルドに向かえ」

「はい」

即座の返答にベートは満足する。

足手まといは無理に責任を感じて残ろうとするものだ。だから、判断の早いポランは嫌いではない。

実験については何か起きるか分からない事はベートでも分かる。だから責める事はしない。結果がどうあれ後始末をすればいいだけだ。

（三つの気配はそれぞれ別々に動いている。四つ目は……無い。……この動きは……）

不規則だが流れるように移動している。

空中には居ない。が、飛び上がらないとは限らない。

（……見晴らしがいいけれど広さが逆に怖い……。標的が小さいのも探索を困難にする……）

特にベートにとっては相性が悪そうだと判断する。

細身の剣を扱うアイズにとっても小さな標的は倒しにくいけれど

それぞれ対策を練りつつ敵の姿を探す。

「……ん。そこ」

と、気配を頼りに剣をふるう。するとガキッと硬い金属音が響いた。

防がれた、と驚愕しつつ相手の姿を確認する。

それは黒い虫型モンスターだった。

（き、キラーアント……じゃない。亜種!?　でも、形が……）

レベル3の斬撃を――小さな身体で――小さな前足のような部分で受け止めていた。

硬質的なところから外皮の硬い昆虫系か、それに類するものと断定。それを素早くベートに伝える。

咄嗟の事とは言え破砕できなかったところから小さくても手強いモンスターだと判断する。

†

アイズの剣を受けても平然としている小さな虫型モンスターは器用に跳ね飛びながら後退する。

そのまま逃げるわけではなく、再突撃を敢行してきた。

明らかに冒険者を狙っている。

「オラッ！」

ベートの雄叫びの後、硬質的な打撃音が聞こえてきた。そのすぐ後で彼の驚愕が続く。

力を乗せた蹴りに相手が耐え切った為だ。

一撃で粉砕できなかった事にベートもまた驚いた。

「……やろう。小せえクセに……」

飛んできたからこそ横蹴りが出来た。地を這ったままではベートの攻撃は踏み潰ししか出来ない。

意外と取れる戦法が無いのは既に理解していた。

地面ごと蹴り飛ばせばいい。そうは思っても身体に多大な負荷をかける。最悪、足を自分の力で痛めてしまうのは確実だ。

（凹凸の少ない現場じゃあ取れる戦法が少ねえな。ここは平坦過ぎる）

（……見えないほど素早くはない。……身体が小さいから捉えにくいだけ）

大きな身体であれば同等の速度のモンスターを見失うことは無い。けれども小さな虫となると意外と捉えにくい事に警戒度が上がる。

気配だけが頼りだが、やはり標的が小さいことが戦いにくい原因となっていた。

（二体は分かった。もう一体は動きが鈍いけど……壁の上の方に移動している。逃げる気……なの？）

他の二体は今もアイズ達を狙っている。それは気配でそう思っただけだが。

姿は三体とも共通と見て間違いない。

キラーアントの亜種のようなモンスターは体長二十Ｃ（セルチ）ほど。色は黒。甲殻類の虫型。蟻のようで蜘蛛にも見える。それ以外に気になる部分は見当たらない。

何より小さくて形状が把握しにくい。

「……おいおい、小せえ虫に【ロキ・ファミリア】がやられるのかよ。ふざけるな！」

「……目標……レベル３相当と認識……」

「不本意だが……了解だぜ」

気合を入れ直したベートは突貫する。
標的はあまりにも小さい。それゆえに小回りでこそがモンスターの強みである。
視界も自然と地面に向けられることから戦いにくいことこの上ない。
通常の小型モンスター以上に腰にかかる負担が大きくなるからだ。
特にベートは長身であるから更に不利が予想される。
「【目覚めよ(テンペスト)】」
剣を構え、魔法を唱える。
相手がどんなモンスターであれ、倒す事に変わりはない。
速度を上げて自分に一番近いモンスターに切迫する。
「【エアリエル】」
正確無比の刺突攻撃を小さな標的めがけて繰り出す。するとガキっと受け止める虫型モンスター。
身体の動きが一瞬止まる不快感を覚える。
地面を砕いて埋まるでもなく、力のみで押し留められたことに。
(……そんな。……これはレベル４相当!?)
アイズはレベル４への【ランクアップ】間近の【ステイタス】を持っている。その上でモンスターに攻撃を止められるとは思いもよらなかった。
良く見ると前足によって剣が挟まれるように止められていた。風の付与魔法(エンチャント)がかかっているというのに。まるで魔法をものともしていない。
外皮に阻まれているわけではない。どう見ても単なる腕力で止めている。
驚きも一瞬。すぐに次の攻撃に移る。
(おいおいおいっ！　アイズの魔法を止めたってのかよ。想定以上かよ。……面白え……)
強敵相手ならば多少のケガは安いものだと判断し、攻撃に神経を研ぎ澄ませる。
小さい身体を除けば特殊な攻撃はしていない。隠し玉があるのか

もしれないけれど、それはその時に考える。

†

その後、数度の激突が起きた。ただ、アイズの斬撃は初手から止められるので連続技に移行できない。ベートの方は叩きつける瞬間、前足による防御によって耐えられてしまった。

このモンスターは少なくとも知恵があり、相手の攻撃を避けるよりは受け止めにかかっている。

つまり自身の防御に絶対の自信を持っている。不敵極まりない。

（……やろう。随分となめた真似を……。しかし、どうする。こちらの攻撃はほぼ見切られていると見ていい）

（……技を見切られている？　速度も同等以上？）

二人はそれぞれ分析しつつ攻略の糸口を探っていた。

ただ、地上に残されたポランは二人の動きについていけず、見守る事しか出来ないが巻き添えを避けるために避難だけはしていた。

残る三匹目のモンスターはアイズの知る限り、動いていない。というか安全な場所で戦いを見守っているようだった。それと仲間を呼ぶ気配もなく、新手は確認できないのが救いか。

「そろそろ……、ぶっ飛べや～！」

【リル・ラファーガ】！」

ベートの渾身の蹴りを受けたモンスターは地面に激突。

アイズの渾身の突進攻撃も――やはり――受け止められつつ地面に打ち付けられた。しかし――

「……なっ!?」

「……えっ!?」

打撃の手ごたえはあった。けれども地面への激突の際、いやに衝撃が小さかった。

アイズの方は激突させたかと思ったが地面を抉っただけでモンスターの姿が掻き消えていた。

そう。激突だと思っていたのはそれぞれの攻撃によって発生した衝撃波だ。モンスターを打ち付けた跡ではない。

途中で脱出したのは感覚で理解した。一体どうやって、と疑問に思

う間もなく敵意がすぐ側まで来ていた。
剣で応酬するも今度は軽くいなされる。明らかに戦闘技術が高い。いや、高くなっていると見て間違いない。
(学習するモンスター!?)
それが事実なら充分にアイズ達の動きを読んだモンスター達が反撃に出る時、恐ろしい事態が起きる。
それはもう予感ではない。確定事項だ。
短時間で決着を付けたいところだが三匹目が安全圏に居るのが憎たらしい。二匹を打倒した——出来たとしてもただでは済まないかもしれない。
こんなモンスターはアイズやベートの記憶に無い。深層域の恐ろしいモンスター達並み——またはそれ以上——に厄介だ。
「アイズ。勝てそうか?」
「……正直に言って……難しい。こんな相手は初めてだから」
「そうかよ。全く……、面白くなってきたじゃねえか」
言葉とは裏腹にベートは笑っていない。
ここでモンスター達を撃滅しなければ弱者と蔑んできた多くの冒険者が危機にさらされる。
もし、戦闘に打ち勝てば【ランクアップ】出来るかもしれないが——まともな勝利が確信をもって描けない。
元より勝てる確信があっては【ランクアップ】など出来はしない。しかし、今は勝てなければ駄目だと身体に警告が来ている。
この戦いから逃げることは出来ない。勝利一択だ。

†

二人が苦戦しているほどのモンスターにポランが参加する事など出来はしない。単なる足手まといにしかならない。と、頭では思っている。
それでも勝てなければ危険であることは二人と同じくらい感じていた。
元々は自分の実験により生まれた『異常事態(イレギュラー)』だ。無責任に撤退などしていい筈が無い。だが、対抗策が浮かばないのも事実。

【ステイタス】が評価Sだとしても駆け出しだ。何が出来るというのか。

武器はアイズ達に比べれば安物。他には壁を破砕する為に持ってきた道具くらいだ。

確かに何かしらのモンスターが出ると予想はしていた。だが、想定以上の強敵とは流石に思っていなかった。しかもアイズ達の知らないモンスターともなると焦りや罪悪感で身体が震えてくる。

正直、おしっこもちびりそうだ。

そんな中でも二人の為に必勝法を模索していた。

先程から――見えている範囲で――彼らの攻撃を真正面で受け止めている。少なくともそう見えた。

前面の攻撃に強い。

硬いモンスターが存在するのは分かっている。それらの殆ども弱点があったり強引に力押しで倒したりする。

効率を目指すなら弱点を狙うのが基本だ。例えば関節部分とか。

アイズの必殺技を受け止めた腕の状態から、関節でも強そうに思える。恐ろしく柔軟な肉体を隠し持つのか、それとも――

モンスターであるならば弱点となる魔石を体内に持つ筈だ。そこさえ破壊できればいいわけだ。しかし、そう簡単に弱点を露出する者ではない場合は長期戦を強いられる。

下層に現れるミノタウロスは肉体が強靭で刀剣類では決定打にならないと言われている。それに似たような部類か。

魔石といっても小さい身体に胴体部分はかなり細く見える。剣で突くよりベートのように力で叩き潰すしか方法が無さそうだ。

攻撃を受けて止めているところから捕まえる事も出来そうにない。

それよりも――

彼ら(アイズ達)の攻撃を受ける一方だ。

モンスターは身体の小ささを利用して翻弄こそしているが攻勢には転じていない。それがアイズとベートには恐ろしく感じられた。

たかが虫と侮れない何かがあるのだと――

充分に学習した後での攻勢に対抗できるのか。

ベートがポランの近くに移動してきた。その時、ポランはバッグから色々と道具を取り出した。
「……ベートさん。……もう一度、あいつを地面に叩きつけ……られますか？」
「……ああ？　まあ、やってやるよ」
突然の声掛けにも関わらず、ベートは疑問を差し挟まなかった。
出来るのか、ではなくやるしかないことを本能で理解していたから。

†

すばやく判断を下したベートは土煙をあげつつ小さな標的に向かって飛び上がった。そこで『やはり』とベートは確信する。
モンスターも跳んだからだ。確実に攻撃を受け止める気でいる。
それはつまりお前（ベート）の攻撃など通用しない事を思い知らせてやる、という意志表示として受け取る。
学習するモンスターだ。そろそろ人並みに調子に乗ってくるはずだと踏んでの攻勢だ。少し腹は立つが致し方ないとベートは表情には出さないが諦めた。
「今度こそあの世へ送ってやるぜっ！」
空中で二回転ほどして遠心力を付けた渾身の蹴りをお見舞いする。
攻撃を受ける気満々なのでむしろ狙わなくても相手側が合わせてくれる。そして、それは証明された。
先程よりも硬質的な激突。身体が硬くなったわけではない筈だが、重いと感じた。それもベート側が。
「それが……どうしたぁ！」
受け止めるのであればそのままで構わない。寧ろ遠慮なく力を発揮できるので都合がいい。
更なる力を込めて地面に叩きつけようとした。
ベートが装備している白銀のメタルブーツは【ヘファイストス・ファミリア】製。第二等級特殊武装（スペルオルズ）『フロスヴィルト』で魔力伝導率の高い『ミスリル』という金属で作られている。
魔法を付与することができ、それを打撃力に上乗せする攻撃を可能

とする。
強固な前足を持つ小さなモンスターに対しても破損の兆候は見られない。だから、遠慮なくぶつけた。
渾身の一撃にすら耐え切るモンスターに驚きつつも構わず力を込めて押し込む。
何の魔法も付与されていないけれど脚力のみで圧倒する。いや、圧倒しようとした。
（……身体が小さいから抵抗が少ないのか？　クソ）
想像よりも決定打が弱く感じた。
おそらくそれほどダメージは受けていない筈だが――要望には応えられた。
地面に真っすぐ落下する小さなモンスターは大した衝撃も受けずに地面に降り立つ。
傲慢になりつつあるモンスターはその特性を恨むべきだった。
落下地点を注意深く観察していたレベル1のひ弱な冒険者を無視していた為に接近に対して何の対策も取らなかった。取る気が無かった、が正確か。
ひ弱と言えど力は評価Sである。他の駆け出しよりも実は強い。
そんなポランの敏捷もまた評価Sである。他の冒険者よりも――
ズガン、と振り抜くようにモンスターの身体を打ち付けたのは単なる金槌である。音は僅かに大きく聞こえた程度で、一瞬で静まった。
油断大敵という言葉がその時ほど適切に機能したことはないのではないかと。
「……」
ポランは単に叩きつけたわけではない。
前面が硬いことは把握していた。だから、前面を避けて背中と思われる部分を狙った。
それだけでモンスターは呆気なく潰れて肢体を飛び散らせた。
黒い染みはモンスターの体液のようだが疑問に思った。
（……灰に……ならない。……魔石が見当たらないから？　それとも砂粒くらいの大きさ？　いや、潰したから倒した、でいい筈……）

ベートは拍子抜けしていた。
あれほど強固な存在だと思われていたモンスターが単なる打撃で死んだ。それは気配を読んでいたアイズも察知していた。
敵性モンスターの気配が一つ消えたことに。
討伐は成功したとみて間違いない。
(飛び散った手足は……ドロップアイテムとして見ていいのかな。でも、調査用として持ち帰らないと……)
すぐに判断を下したポランは出来るだけ冷静に。しかし、身体は震えていた。
ベート達が苦戦するモンスターだったのだから怖くないわけがない。
水筒の一つをすぐに空にして地面の土砂ごとモンスターの残骸を詰め込む。そして、すぐに次の行動に移る。
ベートが走り寄り、小さく『よくやった』と誉めた。だが、すぐに表情をアイズ達に向ける。
戦いはまだ続いているから。
(……奴らにも弱点はあるわけだ。……単独(ソロ)じゃあ討伐は無理そうだな。しかし、機転の利く女だ。だが、悪くねえ)
敵が一匹減った。アイズは見張り役のモンスターの動きに意識を傾ける。だが、未だに動きは無い。
一匹倒されたことに動揺している、ともいえる。見た目では分からないけれど。
「……なら、私も頑張らないとね」
連続で斬撃を叩き込みたいところだが最初の一撃を止められると次が出せない。
アイズが相手にしているモンスターは斬撃に対してかなり有利な戦法を取ってくる。
もし、不壊属性(デュランダル)でなければ武器を壊されていてもおかしくない。それほど剣に尋常ならざる力が加えられていた。
確実に剣を壊そうと試みている。
絶対に壊れない武器を腕力で破壊しようとする。それだけ自分の

力に絶対の自信を持っているといえる。
（不壊属性（デュランダル）だと理解していない？　ただ丈夫な剣だからって事も……）
冒険者の武器を破壊すれば脅威は無くなる。
どのような思考をしているのか分からないが、こんなに戦いにくい相手は久方ぶりだった。
出来れば単独撃破したいところだが嫌な予感が続いているし、ポランが不安そうにしている。
それでも、と突っ込むべきか迷う所。

†

その一瞬の気の迷いをモンスターは見逃さなかった。意識の間隙を狙って虫のモンスターは剣（デスペレート）を足がかりにして回転するようにアイズに向かって登って行く。
振り払おうにも腕部は尋常ならざる力を持つ。簡単にはいかない。かといって剣を捨てることも出来ない。
そのこだわりが勝敗を分けた。
「ギャッ！」
片手剣の持ち手を狙われたアイズは想像以上の痛みによって――普段なら手放さない『デスペレート』を――取り落としてしまった。
いや――正確には握っていられなかったのだ。
武器が不壊属性（デュランダル）でも素手はそうではない。
地面に落下したのは剣だけではなかった。剣に追随するように利き手の指が二本。
三本目は半ばまで切り込まれた。
「……くっ。こ、この……」
残った左手を拳にして殴りつけようとしたのは痛みによる興奮状態だったのと冷静さを欠いた失策と言える。しかし、それを責める事は今は出来ない。
十二歳の少女が受けるにしてはあまりにも大きなケガだったからだ。
単なる拳の打撃が通用する程モンスターは甘くなかった。

「うわっ！」
無造作に振るわれたモンスターの前足はアイズの指を容赦なく切り飛ばす。
中指と薬指が落ち、人差し指も浅く切り込まれる。
激しい痛みに耐えて、ギッと血が出るほど唇を噛みしめてモンスターを睨みつけるのは闘争本能が消えていない証拠。
それはアイズの公開されていないスキルによるものか。
モンスター憎しで戦う少女はその感情が昂れば昂るほど戦意が上昇する。
普通の少女であれば痛みで泣き叫ぶところだ。
――だが、アイズは『普通の少女』ではない。
第二級冒険者【剣姫】の二つ名を持つアイズ・ヴァレンシュタインだ。
彼女（アイズ）がケガをしたことはベートも確認している。
剣を握れない今の彼女は無力極まりない。分が悪くなった事だし、無理に戦闘行為も――普通ならば――出来ない。だが、撤退は出来ない。
この危険な虫のモンスターは今ここで倒さなければならないからだ。
「ポラン。あいつの指を拾っておけ。……出来るか？」
同じ少女とてポランにとっては気持ち悪い部位ではないのか、と思いつつも余計な杞憂である。
モンスターを解体するすべを一緒にやってきたパーティメンバーだ。
出来ないわけがない、とベートは思い込んでいた。
声をかけられたポランは今にも泣きそう――いや、既に泣いていた。身体も震えていた。
あまりにも酷い惨状に平然としていられるほど彼女の心は強くなかった。
「道具を寄こせ」
「……ふぁ、い……」

震えている様子からまともに動くことも難しいかと判断したベートは勝手に持ち物から必要な道具を探し出す。
今回ポランが持ってきた荷物は実に多彩であった。これらは単独（ソロ）で活動する上で、色々と必要なものが取り揃えられていた。

†

敵に警戒しつつ散らばった指を拾い、空の革袋に無造作に放り込む。いちいち奇麗に並べている暇が無かった。
それから接合の為のアイテムも持ち合わせていない。
自分達が次にすべきは迅速に残り二匹のモンスターを撃滅する事だけ。
「……二人でやんぞ。お前（アイズ）は魔法で牽制しろ」
「……ぐっ。……分かった」
「よく頑張ったな。……さっさと駆除するぞ」
一つ頷いてアイズは魔法の準備を始める。だが、予想以上の痛みに集中力を欠き、魔法がうまく発現しない。
両手からダラダラと垂れる血の感触が今はとても気持ち悪かった。
利き手はまだ武器が握れる。ただし、持てるだけで攻撃は難しい。
左手は完全に力が入らない。
「……あ、ああ……。ううっ……て……【目覚め（テンペスト）よ】……えあ……【エアリエル】……」
今まで体験した事のない痛みで頭の中が焼け付くように熱くて痛い。
愛剣『デスペレート』を拾おうとするだけで結構な重労働と化している。
「……うう」
身体の一部のように扱ってきた剣が今はとても冷たく、そして重く感じられた。
握り込むだけで手首が破裂しそうだった。こんなに強く握れないのはいついらいだろうか、と。
（……初めてダンジョンに挑んだ時よりも痛い……。モンスターを倒さなきゃならないのに）

決意と現実は同一ではない。冒険者となって初めて味わう敗北感。
強くなろうとしたのは身体か、心か。
気持ちだけは一人前だとしてもなにも出来なければ一般人と大差が無い。
（……痛い、痛い……。感覚が……揃わない）
五体満足だったアイズも覚えのない苦痛。
それは喪失感と呼ばれるもの。
見た感じと実体験の差はあまりにも大きかった。
特に利き手は力がかかる指の一本が千切れかかっている。変に残っている分負担も大きい。だが、邪魔だとして取り払うことも出来ない。
要らないからと言って手足を簡単に切り捨てられる冒険者はまず居ない。
それはオラリオ最強と謳われている冒険者にも簡単には出来ない所業だ。――ただ、親愛なる主神の命令があればどうなるかは――

†

剣を不揃いの利き手で掴み上げる。その腕は激しく震えていた。
気が付けば止め処も無く涙があふれている。それは悔しさからか、痛みの激しさかは分からない。
歳相応の反応であるならば誰にも責められる謂れは無いのだが――今、この時だけはベートが叱咤する。
剣を握って戦え、と。
てめえは何のために今まで武器をふるってモンスター倒してきた。
そう無言で激励する狼人（ウェアウルフ）が側に居る。
常識ある者なら大怪我を負っている健気な少女に戦えとは言わない。言えるわけがない。
悪意ある者なら【剣姫】なんだろ、と揶揄するかもしれないが――
「……うあああ」
風の魔法を身にまとい懸命に敵を見据えるアイズ。
まともに武器はふるえない。それでも行かなければならない。
ここに至って強くなろうとは思わない。

ただ、モンスターを倒しきる。それだけだ。
「俺が先行する。お前は背後を狙え。無様でもいい。二人でやんぞ」
「……りょ……うかい」
今まで以上に精神が研ぎ澄まされたベート達にとって小さなモンスターであろうと逃がす気は無い。
確実に狙い撃ちにする覚悟を決めた。そして、それはポランにも――

まずベートが気配を頼りに突貫する。
敵モンスターは先ほどよりも邪悪さの気配を強くしていたので目を瞑っていても何処にいるか分かるほど。
防衛から攻勢へと変じた為にベートの蹴りを避けて、前足による斬撃を敢行してきた。
通り抜けるように切り裂かれる脇腹。その鋭さはアイズの斬撃を参考にしたような感じだった。
迷いが無い。
確実に相手を倒そうとする意志が大きな塊となって見た目以上に姿を大きく見せていた。
（……あいつも成長したってのかよ。……推定レベル4に認定って奴か）
もっと上かもしれない。そんな予感がした。だが、だからといって怖気づくことは出来ない。
速度に変化はないが対象が小さいので狙いが付けにくい。
更に攻撃が重い。それは打ち合って初めて感じるものだ。
アイズはただ剣を持つだけで何もできないような状態だ。だが、的でもいいから立っていてくれればそれでよかった。
端から戦力として期待していない。
自分は彼女に的になれと命令した。彼女もそれを承諾したのだ。
前面さえベートが担当すればアイズとてこのモンスターは倒せる。
その絶好の機会を作れれば勝機はある。ただ、相手側はまだもう一匹存在する。もし、知性の高いモンスターであるならば三匹目はもっと手強くなるはずだ。

（数を減らすごとに強くなるってことか？　冗談じゃねえぞ、全く……）

ただ、救いなのは三匹より増えていない事だ。

仲間を呼ぶタイプであればもはやお手上げ。駆逐されるのはモンスターから冒険者に変わるだけ。

そんなことを認めるわけにはいかないが最大戦力が役に立たない状態にされた。そして、一人では勝てない事も理解した。してしまった、と言うべきか。

†

二度三度と交戦を交わして理解する。

虫型モンスターは戦闘狂だと。所謂、戦いに酔いしれる悪質な類だ。

明らかに冒険者を殺そうという意思が感じられない。――最初はそう思っていた。

（……少しずつだが動きが良くなっている。それと嗤っている気配がさっきから強くなってやがる。ふざけやがって。……いや、それは俺達も同類か。……あいつらはレベルが上がって浮かれている）

高レベル冒険者は周りを見下す事が多々ある。かくいうベートも弱者はいらねえ、と憚る事を知らず吹聴しまくっている。

自分も調子に乗る事はある程度自覚しているが、虫に嗤われるのは我慢がならねえ、と。

「虫けらの分際でいい度胸だ！」

体長が小さな敵に対して大声で威嚇するのも――僅かばかり――恥ずかしいが、今はそんなことは小さな悩みでしかない。

それと戦闘を楽しむのであれば、それはそれで好都合でもある。

ベートの攻撃にきちんと反応してくれるのだから。

保身に走るモンスターであれば既に取り逃しているところだ。

蹴り技主体のベートも苦戦こそすれど上を目指す冒険者だ。諦めが悪い。

防御から攻撃に移った事で身体のあちこちを切られている。が、致命傷には至らない。

多少、服が血で汚れて匂いによる索敵が不自由しているけれど気配だけはアイズ並みに探れるから問題は無かった。

少し興奮状態である彼の執念はどんどん燃え上がっていた。

（突進力に斬撃の攻撃力はかなりのもんだが……。こちらの攻撃が全く通用しないってわけじゃねえ。上層で退屈していたから身体が鈍っていたようだ。……全く俺としたことが）

冒険を忘れているなんて恥ずかしい。そうベートは独り言ちる。

未知なる強者に挑める機会はそうは無い。例え虫型だとしても見逃すわけにはいかない。なにより、存在が気に食わない。

大物ぶるなら身体も大きくしてこい、と。

「いっくぜぇ！」

何度渾身の蹴りを放った事か。その悉くを受け止められていた。

しかし、身体の大きさゆえに結局は吹き飛ばされる。

膂力に限界があるようだ。

（確信したぜ。こいつらは別に急激に強くなっているわけじゃねえ。相手の動きを学び、最適解を導き出しているだけだ）

その予測が正しければ推定レベルに変化は無い。

元々持っていた実力を隠していただけに過ぎない。それをアイズ達は過大評価してしまった。

姑息ではあるが逆の立場なら――自分なら頭くらいは使う、と。

まるで冒険者のようだ。

各階層に出現するモンスターは基本的に基礎的な能力しか出さない。出せないともいえる。

成長するモンスターには覚えが無いが、極稀に通常のモンスターより強い個体が居る事は前々から知られていた。

それらは通常『強化種』と呼称される。

（……だが、こいつらは何の『強化種』なのかさっぱりだ。キラーアントに似てるのは下半身……。上半身は……どう見ても蜘蛛だよな。良く見えねえが……、複眼があるのか？）

蜘蛛系だとしても糸は出していない。それに攻撃はほぼ前足によるものだ。

それともあえて出し惜しみをしている、という事もあり得る。
その仮説が事実ならベートの身体は既にバラバラに散らばっていてもおかしくない。あえてしないのか、余裕ぶっているのかは分からない。
（……その時はその時だ。俺だっていつ死ぬか分からねえしな。だが、お前は確実に殺す！）
五度目の蹴りを放ち、今度はアイズ方面へ吹き飛ばすことに成功する。
後は彼女の行動次第だ。運が良ければ、だが。
地上に落下してきた虫型モンスターを迎撃しようとするものの剣での攻撃は既に出来なくなっていた。
ただ剣を持っているだけの張りぼての様な【剣姫】は悔しさでいっぱいだった。だが、それでも出来る事はある。
魔法を身にまとった彼女は一気に標的に駆け出した。
おそらくモンスターはアイズの状態を理解している。だから、いやに無防備でいる。
それはお前には何もできない、と侮られている。だが、そんなことは百も承知であった。
急加速したアイズは地面に一度着地したモンスターの態勢が整うことを許さない。

†

普段、突進する時は前傾姿勢になる。しかし、この時のアイズは前転するように回転力を付けた。
これは剣での攻撃を諦めたからだ。
後は至極断純なものである。
即ち（すなわ）――
力いっぱいに踏みつけるだけ。
一般的に『踵落とし（かかと）』と呼ばれる攻撃方法だ。もちろん狙いを外すような真似はしない。正確無比といわれる繊細な攻撃を気が遠くなるほど続けてきたのだから。
強固な外皮を持つモンスターに有効かと言われれば――それは実

に有効な攻撃である、と答える。
アイズはポランよりも力が強い。地面を砕くほどに。
役立たずだと認めた今の彼女は脚一本犠牲にすることも厭わない。
ズガン、と大きな音を立てて地面を砕く。と、同時に叩きつけた反動で激痛が襲ってきた。しかし、両手の痛みよりは軽微なので我慢は出来た。
「……やったか……」
ベートの問いに少しの間、答えが無かった。
しくじったか、と思うものの気配を察知できる事を思い出した彼は確信する。
「……二匹目討伐……完了です」
「よし。最後だな」
アイズの答えに納得し、すぐに次へ移行する。
今まで全く動かなかった三匹目は遥か上に陣取っていた。おそらく二匹以上に手強い筈だと――
地面から足を引き抜くと黒い体液が靴に付着していた。
それを見たポランはモンスターが灰にならなかったことを確信する。それと同時にその体液はとてもよくないものであると感じて、すぐに彼女の元に向かい、洗い流しにかかる。
無言で作業を行うポランの顔は酷いものだった。自分の責任が招いた結果に酷く後悔しているように。
薄汚れた死人の様なありさまだった。
「……」
使ったタオルや地面を掘り起こしてモンスターの残骸を集める姿をアイズは黙って見つめる。
今行っている作業はポランなりの戦いだ。それを邪魔してはいけないと思った。
「……後一匹。それを倒したら帰ろう」
アイズの優しい言葉を受けてポランは頷き、作業を続けた。それと同時にアイズは疑問に思う。
あれほど強かったモンスターが単なる踏み付けで倒せたのだから、

どうしてもおかしいと。
強いのか弱いのかが分からない。
（……身体の強度は強くはない。……攻撃態勢にだけ注意すれば討伐出来ない相手じゃない。……やはり推定はレベル３か……。でも……、まだ）
痛みに耐えつつモンスターを懸命に分析しようと試みるが有効な情報が出てこない。
出し惜しみしているのか、それともこれがモンスターの本気なのか。
もし、今以上に厄介な攻撃を出されては全滅する恐れがある。何の能力を隠し持っていようが引き出している余裕は無い。

†

気配を頼っているとはいえ小さな身体のモンスターが離れた場所に居るだけで視認が難しい。
このまま何処かに逃げられるのはとても厄介だ。かといって追跡する方法が浮かばない。
残念ながら射撃武器はポランの荷物には入っていないし、射撃する魔法も無い。
攻撃が来ない間、ベートが使っていないタオルでアイズの両手を覆う。利き手は剣を握らせたまま。
踏み潰した時に痛めた足はモンスターの攻撃は受けておらず、単なる自爆なので問題は無い。立って歩けるだけ幸運だと思うことにした。
そうしている合間に新たなモンスターがそこかしこから生まれ出る。それらの中に虫型モンスターは居なかった。
この階層特有の希少種であれば他にも居る筈だが今までそのような情報は聞いたことが無い。
今回限りの特別なモンスターであれば新発見として讃えられるか、大目玉。
（……ま、普通に考えて後者だな）
（……ポランは未知の発見に寄与しただけ。……こういう事態を予測

できなかった。……だけれど、彼女は……ある程度の予想はしていた。……ギルドはどう判断するの？）

出てくるモンスターが小型の虫なのは仕方がない。何が出てくるかまで予想は出来なかった。

想像以上の強敵とは思ってなかった。そもそも十三階層はレベル3にとっては攻略するのに造作もない。そんな自分達が苦戦を強いられるとは――それも【ロキ・ファミリア】の幹部候補と目されている二人が――誰が想像できるのか。

使用した魔石は上層階のモンスターばかり。精々強化種程度と思っていた。

（……強さ的には間違っていない。……予想された範囲内。……予想外は……私達だ）

たかが虫三匹に重傷を負わされている。それも同レベル帯と推定されるモンスターによって、だ。

深層域を攻略する自分達がこうも苦戦するとは――

「……全く、情けないよね」

「ああ、そうだな。俺もそう思う。……それよりアイズ。お前の方は……大丈夫なのか？」

両手を封じられた――剣も扱えない。

今まで味わったことのないケガを負った事に、と。

「……大丈夫……とはいえないけれど……。骨折くらい私もするよ……。……こういうケガも……覚悟はしてた」

「……そうか」

「……でも、とても痛い。……感覚が無いのが……怖い。もう戦えないのが……」

もっと怖い、と小さく呟く少女（アイズ）。

ここまでズタボロになった【剣姫】を彼は見たことが無い。まして剣を握れないアイズ・ヴァレンシュタインなど。

二つ名が瓦解した今はただのか弱い少女だ。誰もが羨望の眼差しを向ける【剣姫】はもう居ない。

本当なら負け犬と侮辱しているところだ。だが、相手が悪いことは

自分も理解した。だから、そんな事は言わない。
時と場合が違えば今のアイズはもう一人の自分でもあるのだから。
両足を切り飛ばされ、前足だけで這いつくばる哀れな狼人（ウェアウルフ）と嗤われるのはベート自身だ。
（ひゃっははは。おい見ろよ。狼人（ウェアウルフ）らしい惨めな生き物が居んぞ）
内なる心で再生するも顔は笑っていない。
明日は我が身。それを理解しているからこそ負けられない。
弱いからそうなる。確かにそうだ。
「……悪（わり）いが撤退は無しだ」
「……うん」
「てめえも……、いつまでもメソメソしてんじゃねえ。そこらのモンスターくらいは倒せんだろ。ちょっと殺ってこい」
「……そこは優しく。今のポラン（ポラン）には危険……。武器も握れない……」
「は、い……。やって……きます……」
震える身体で武器を探し出し、たどたどしい足取りでヘルハウンドやアルミラージの集団に向かっていった。
涙で現在、ポランはまともに前が見えないのでは、と危惧したアイズは彼に彼女（ベート）の顔（ポラン）を拭くよう、少し強めに命令する。それにベートは――普段なら不服を申し立てるところだが、今回は黙って――従ってくれた。
ついでに走り寄ってきたヘルハウンドを蹴り飛ばす。

†

戦闘は継続している。最終目標は三匹目の虫型モンスターの討伐。
これは既に決定事項だ。
本当なら一目散に逃げだしてギルドに駆け込み討伐隊を組むか緊急依頼（クエスト）を発令してもらう。だが、このまま見逃すのは危険だとアイズ達が判断し、独断専行ではあるがやむを得ない事情の為の措置として罰則覚悟で臨むと決めた。
もちろん【ランクアップ】が目当てではない。
互いにこのモンスターから逃げる事は今以上に危険であると認識

したからだ。
「……動いた」
アイズの言葉にベートが身構える。
最後のモンスターは壁から跳躍し、現れたヘルハウンドの頭に着地。
身体が軽いからか音もなく、また落下による衝撃も起きなかった。
寧ろ頭に虫が止まったとすらヘルハウンドが気づいていない様子だ。
（……軽量？　打撃に対して強固な外皮を持つはずなのに？）
確かに地面に叩きつけようとしてもあまり有効打にならなかった。
このモンスターは一体何なのか、余計に謎が深まる。
今ほど神達の意見が欲しいと思った事はあまり無い。
「ウ？」
頭に虫を乗せたヘルハウンド（ヘルハウンド）がアイズ達の視線を受けて戸惑ったようだ。しかし、次の瞬間、虫型はかのモンスターの頭部を容赦なく切り裂いた、ように見えた。
身体が小さいので何をしたのか、視認するのが難しい。
斬撃は縦と横、の筈である。
（……まるでアイズの乱撃にそっくりだ）
ベートの感想そのままに切り刻まれたモンスターは頭部だけ微塵切りにされて絶命する。
頭蓋骨とか関係なしの攻撃。切れ味は想像以上に鋭いことが判明。
蟻や蜘蛛の前足が刃物である筈が無い。キラーアントは強靭な顎で冒険者に襲い掛かる。蜘蛛型モンスターも似たようなものだ。
（蟷螂（マンティス）系か？　……そうじゃねえな。あれは……）
近いモンスターを探していたが、そもそもが間違いだったとベートは漸（ようや）くにして気づいた。
自分達が相手にしているのは正しく新種。全く未知のモンスターであると認識した。
キラーアントでもない。蜘蛛（スパイダー）でも蟷螂（マンティス）でもない。
唯一かは別として新たな系統を持つ可能性があるモンスターだ、と。

（あの調子だとミノタウロスも容易に倒しそうだな。……推定がレベル3なら当然か……）

分析している間にも虫型は次々とモンスターを撃破している。

見た目が奇異で分かりにくいが知能が高く、学習する。その上、的確に冒険者と渡り合う。更には他のモンスターを仲間と思わず倒していく。

自身の強さを鼓舞するのは冒険者も似たようなものだ。

安全な場所で大人しくしていたのも冒険者にとっては様子を窺う事と一緒だ。

強かに攻略方法を分析していたのであれば脅威だ。長期戦は望めない。迅速撃破のみ。

ベートはすぐに反応するもののまだ湧き出るモンスターが邪魔で一足飛びとはいかなかった。ましてアイズは戦えない。

（……あいつ、逃げながら他のモンスター共を……）

ベートの姿に気づいたのか、虫型は現場から離脱し別のモンスターに襲い掛かる。

自分で倒さない分には手間が省けるが、それはそれで不安を呼び起こす。

何を考えているのか分からない。当たり前かもしれないが、とベートは苛立つ。

（いや違う。あいつの狙いは！）

気づいた時にはもう遅い。

次々とモンスターを討伐しつつ跳躍する先に居るのはポランである。

小型のアルミラージをなんとか倒しているのが見えた。彼女の視界を良くしたのが不味かった、と思う間もなく――

接敵してきた虫型モンスターの速度はアイズ並みか、それ以上。

ポランに対抗するすべなど、と思っていると剣を振りかぶりギリギリのところで受け止める姿が見えた。

†

良くやったと思ったのも束の間、あのモンスターは武器を破壊しよ

うとする。
ポランの武器は不壊属性（デュランダル）ではない。
応援に駆け付けるには距離が離れすぎている。更に別方向からヘルハウンドによる火炎攻撃が放たれていた。
それをポランは剣を滑らせつつ、更には火炎から飛び退（すさ）る。
敏捷は高い。避けるだけなら一人前だ。もちろん、虫型も別方向へ跳躍する。
（何なんだよ、この状況は）
割と熟練した冒険者が居る。
過度の心配をせずとも独自の判断を行（おこな）える者がベートの想像よりも二つほど多かった。
だが、目的は変えられない。
動けるならば命令する。
「ポラン。可能ならそいつを倒せ」
「了解」
乾いた声がポランから発せられた。
どういうわけか喉（か）が嗄れていたらしい。声が出るだけ深い詮索は時間の無駄だと判断する。
食中りで倒れていたポランは半年前のもの。この場に居る彼女はベートの知る弱者よりは少し強くなっていた。
その誤差が今になって噛み合ってきた。
（……俺はいつからあいつを名前で呼ぶようになった？）
（……良かった。ポランはまだ……戦える）
頼りなさそうに見えるが虫型を既に一匹討伐している。結果を出している。
ベートのせいで冒険者としては弱い方と思い込んでしまっていたのかもしれない。
性格と【ステイタス】に大きな開きがあるだけだ。
荒々しさだけは一人前のレベル2はごまんと居る。
（……推定レベル3って決めちゃったけど、ポランはそれを倒しているんだよね？　……これってすごい気がする。……えっ？　……そ

れだと私……弱いって事？）

ポランのような駆け出しに倒せるモンスターに重傷を負わされているアイズ。

この場合はどういう評価になるのか。

口を尖らせつつ不満を示すも、それらは戦いに勝ってから改めて考える事にする、と。

もし、この場にフィンかリヴェリアが居れば『無謀』と『堅実』の差だと教えてくれる筈だ。

ポランは日頃から安全志向で冒険を続けてきた。極力無理をせず、けれども冒険心は無くさずに。

アイズはただモンスターを倒せればそれで満足していた。堅実に分析するなどせず、人任せ。

最初の戦闘でもそれが謙虚に表れていた。しかし、それは結果論だ。

無謀なアイズが居たからこそ冷静に分析できたと思えばポラン一人だけの勝利とは言えない。

ベートにしてもパーティを組んでいるという意識に気づいたからこそ二匹目を倒せた。

ここに個人の強さは関係ない。

それぞれが最適な解を懸命に導いた結果だ。部外者が後から別の解答を示したところで、それが本当に最善であるとは限らない。

†

アイズはモンスターに対する評価を修正する。

一人での討伐はレベル3では無理。不可能かは今は考えない。

二人以上のパーティが望ましいと付け加えた。おそらくベートも文句は言わない筈だ。

レベル4以上が一人で倒す可能性もあるかもしれないし、オラリオ最強の冒険者からすれば一人で充分と言い切るかもしれない。しかし今はその可能性を無視する。

戦っているのは自分達だから。自分達の判断を信じる。

（……案外。魔法で簡単に倒せちゃったりしたら……かっこ悪いな）

その可能性も〇（ゼロ）ではない。しかし、パーティに遠距離魔法詠唱者は居ない。

アイズの【エアリアル】は無効化されたようだが、他の魔法までは分からない。

――本当に無効化されたのかもよく分かっていないけれど。

再度、虫型モンスターがポランに襲い掛かる。その後ろを狙ってベートが襲い掛かるも、やはり小さすぎる為に狙いが付けにくい。

他のモンスター共々乱戦に突入しているがポランはしっかりと戦えていた。

勝てそうにないことを理解しているのか、可能な限りの戦闘を避けている。しかし、それを見越しているかのように虫型は執拗に追いかけていく。

（……クソ。意外と狙いが付けられねえ）

ポランやアイズはまだ身体が小さいから適応出来たのかもしれない。

おそらく団長の『フィン・ディムナ』ならば、もっと効率的に勝利をもぎ取れる筈だ。

体格の差で不満を漏らしている余裕は無い。なんとか機会を得るしかない、と判断。

「オオラァ！」

雄叫びを上げつつ虫型モンスターにメタルブーツの一撃が当たった。しかし、虫型は彼の攻撃を素早く身体を反転させて防御態勢で凌いで見せた。

粉砕は免れたものの天井まで吹き飛ばされる。

「チッ」

（いい反応だ。伊達に観察はしてねえな）

危機回避能力の高さに驚きつつも次の攻撃の間まで生き残っているモンスターを蹴散らす。

乱戦では狙いが付けられないので。

ポランはアイズの側に駆け寄り、様子を窺う。

「……そういえば回復薬（ポーション）が……」

説明もそこそこに試験管を取り出して栓を抜き、それをアイズに飲ませる。それとケガをしている足には膝上まであるブーツを一旦脱がして振りかける。

部位の再生は出来ないけれど痛みの軽減くらいは出来ると判断した。そして、それは顕著に効果を示す。

手の痛みは取れないが足の痛みは薄れた。

「……ごめん、なさい……」

「……うん」

ケガをするたびに謝っているとキリが無い。だからアイズも必要以上に責めようとは思わなかった。何より虫だと侮って大怪我したのは自分の責任だ。

自身の能力を信じた結果だ。

ポランも安易に逃げ出さず、一匹を討伐した。そこはやはり冒険者だと感心するところ。

ダンジョンで実験することが悪いと言えばアイテム採集などすべきではない、と言い出すことにつながりかねない。更には危険だと分かっているダンジョンに潜るな、という事に発展することも。

†

再度落下してくる虫型に対し、正攻法が通じないベートは苛立ちを覚える。

力でねじ伏せる戦略が取れないのは彼にとっては痛手でもある。

更に金槌、踏みつけで討伐できるという事からも納得のいかない事に不満を募らせる。

(強いんだか弱いんだかはっきりしねえモンスターだな)

前面が無敵のモンスター。そんな馬鹿な事があってたまるか、と。

しかし、今は時間をかけられない。

こうしている間にも新手のモンスターが生まれてきてしまうので。

攻撃も間抜け度合いとは裏腹に強力である。

(正面からの打撃に強いといっても衝撃まで伝わる筈だろ。……どうしてそのまま潰れない?)

このモンスターの不可解な強さの謎が未だに理解できない。

直に弱点を狙うとあっさりと死ぬ。それ以外では打倒できないというところが。

そういう条件があるモンスターだと認識を改めねばならないのかもしれない。

それが事実だとすれば実に戦いにくい。

可能性は――やはり――【ランクアップ】しかない。しかし、小手先も有効である。

なんでも力任せでは今後の戦いに無駄な負担がかかってしまう。

「お前ら、次が来るぞ」

「……はい」

「……分かった」

声は頼りないが動けるポランは有用だ。五体が無事なうちは働いてもらう。

それとこの階層のモンスターはだいたい討伐できるので少なくとも雑魚モンスターは任せられる。

ベートが虫型に突進するも今度は受け止める事をやめ、ヒラリと躱(かわ)した。

そもそも身体が小さいので小回り良く行動すればベートの攻撃が当たる事は無い。

学習するモンスターはとても手強いものだ。

「……生意気に避けやがって」

だが、逃がす気は無いと素早く態勢を整えたベートが追いすがる。

運が良ければそのまま踏み潰せばいい。

――そう簡単に潰されたくないと思ったのか、虫型は戦闘不能のアイズに向かって跳躍した。

声をかける間もなく――ブーツを履く余裕を与えないように――彼女に接敵する。

「……くっ」

取り落とさないように縛り付けられた『デスペレート』で迎撃しようとする。だが、右手を振り上げようとするだけで手首が発火したように痛み出した。

だが、それを我慢しつつ防衛体制に移る。
いつも以上に鈍い動きだった。敵は容易に腕を掻い潜り、彼女の顔を大きく切り裂いていく。
袈裟掛けに――鼻は深く切り込まれた。しかし、それで終わりではない。
身軽な身体を持つモンスターは彼女の肩に前足を軽くひっかけて舞い戻る。今度は逆方向に切り裂こうとするものの顔を背けられ、同じように深くは傷を作れなかった。
ただ、瞼を浅く切られてしまい視界が一つ潰された。
ポランが慌てて回復薬（ポーション）をアイズの顔にぶちまける。
「馬鹿野郎！」
咄嗟にベートが怒声を上げるもののアイズは小さく大丈夫と告げる。
気配を読めばなんでもない、と。
彼が叫んだのは液体をかけたら完全に視界が塞がってしまう。それを咎めた。
顔から血が噴き出た事に動転したポランの失策ではあるが、治癒させようと行動したことは――アイズは――お礼が言いたかった。
これは中々できる事ではない。
（……動けない私を狙ってきた。なら……囮になるのが最善……）
切り傷であれば後でも治癒できる。今は戦えるベートとポランに戦闘に集中してもらう方がいい、と判断する。
それを見越したのかは分からないが、戦意を消失させたアイズから慌てているポランへ標的を変更する虫型。
再度アイズを狙うものと危惧していた彼女はまさかの軌道変更――急襲――に驚き、武器を取り落としてしまう。
動転している今が絶好の的である。
振り払おうとするポランの腕を容易く払いのけ――いや、斬撃によりアイズ同様に指を散らしつつ顔を狙う。
虫型は冒険者の弱点――人型として最も弱そうな部位――を狙ってくる。

腕の様な大きなものより指先を狙うのは実に嫌らしい戦法である。
それによって武器を封じる事が出来る。
だが、それで終わりではなかった。
勢いのついた突進によってポランの右目に突き刺さる。
「ぎゃっ！」
目の奥に異物が混入。それも動き回る事で不快感が増大する。
身体ごとポランの右目に突っ込んだ虫型モンスターはゆっくりと這い出てきた。
払い除けたいが両手が激しく痛い。
「あー！　うぁあー！」
喉が嗄れた状態で更なる絶叫を繰り返すポラン。しかし、モンスターはそんな彼女に慈悲は与えない。
徐(おもむろ)に飛び出てきたモンスターは何を思ったのか、彼女の耳を無造作に切り落とす。
それはまるで弱者をいたぶる加虐趣味の権化であった。
そのあと、ポランの顔をゆっくりと切り裂いて傷を増やしていった。
（……野郎っ！）
ベートは激高するも対抗策が浮かばない。蹴りを繰り出せばポランの頭を吹き飛ばすことになるだけだ。
唸る狼人(ウェアウルフ)とは裏腹に冷静に惨状を見ていたアイズは心の中で謝罪する。
（……ごめん、ポラン）
痛む手に力を籠め、愛剣『デスペレート』をポランの右目に向かって突き入れた。
対象のモンスターが眼球に埋まったままだったのが勝敗の分かれ目だった。
不意の攻撃に油断していたのか、弱者をいたぶるのに忙しかったのか。
あっさりと上半身と下半身に分断される虫型モンスター。それと更に剣が深く刺さった事で想定以上の激痛にのた打回るポラン。

落ちた上半身は気が付いたベートが思い切り踏み潰す。
形が残らないように何度も。

†

邪悪な虫型モンスターの気配が消えたのはすぐだった。
戦闘には勝利したが様々なものが失われた。
そして――
それで終わったとアイズとベートは思っていたが、そうではなかった。
ポランの右目にはまだ虫型モンスターの下半身が残っている。
「ぎやあぁぁ」
分断されたことで黒い体液がポランを穢す。
体内に浸透した事により、不可解な痛みが襲っていた。そうしてなすすべもなくポランは意識を失う。
ベートは申し訳ないと思いつつも虫型モンスターの残りを引っ張り出した。
潰れた眼球の残骸が付いてきたがまとめて引っこ抜く。
血まみれの顔。黒い体液によって不気味に浮かぶ血管が不安を呼び起こす。
「……何とも厄介なモンスターだ。……死んでも……。まあいい」
最後の下半身だけになったものも丁寧に踏み潰しておく。変に形を残すと復活しそうな予感がしたのでやむを得ず――アイズも止めなかった。
代わりに土砂と混ぜたものは持ち帰ることにした。
ベートは念のために実験に使った岩壁を調査する。それはすぐに見つかった。
完全に粉々の瓦礫となっていて修復されたとしても同じモンスターが出るとは思えない。
一応、細かい瓦礫をどかして怪しい物が無いか確認はした。
調査を終えた後はポランの指を集めたり、アイズ達に包帯を巻いたりと忙しく働く。というか細かい作業が出来るのがベートしか居なかった。

意識を失ったポランはアイズが背負うことになった。――単に女の子同士だから、という意味以外に他意は無い。その代わりとしてベートには荷物を全て持ってもらう。

前代未聞のモンスターとの戦闘は終わりを告げた。心身ともにボロボロになったアイズは自身の弱さを嘆く。いや、弱いだけで勝てないと言えるのか、と自問する。

冷静に分析すればレベル1の駆け出しだったポランにさえ勝てた相手だ。

ただ強ければいいだけでは――

今一度強さとは何かを考え直す段階にきているのかもしれない、と思いつつ帰路に就く。

#1―15　ドレッドノート

満身創痍の【ロキ・ファミリア】の団員アイズ・ヴァレンシュタインとベート・ローガ。いや、彼はそれほどケガは負っていない。その彼に背負われている駆け出しの冒険者ポラン・ブーニディッカの流血による有様が印象的だっただけだ。

会話も無く、ただただ大急ぎで上層を走破し、ギルド本部に出た彼らは現場に居る多くの冒険者、ギルド職員を驚愕させた。中には悲鳴を上げる者さえ――

まず、ポランは意識不明の重体。

【剣姫】は両手の指が欠損。顔は回復薬（ポーション）によって傷は目立たないが、それ以外の傷が実は多かった。といっても切り傷程度だが。

灰色の髪の狼人（ウェアウルフ）は上半身を血まみれにしていたが、ポランの流血であって傷は多少の切り傷程度しか負っていない。

「……これは一体……」

「こいつを治療してくれ。それと……色々とあったんだが……。えーと、なんだ、こういう場合はどうすりゃいいんだ？」

普段の討伐とは毛色が違う。

上層階で半殺しに遭ったなど、普通に考えれば恥ずかしくて言えない事だ。だが、相手は紛うことなき強敵だった。でなければアイズがズタボロになる筈が無い。

あまりの事に思考を放棄したくなる。ベートは何気なく天井を見上げる。

本拠（ホーム）に帰った後はどう説明すればいいのか、それを考えるとさすがの彼も逃走を選びたくなった。

†

ポランが採取した土砂の内、二つをギルドに。もう一つは懇意にしている【ディアンケヒト・ファミリア】に調査を依頼。

それと散らばった指や耳などはすぐにでも再生させるべきなのだが、アイズは何を思ったのか『保存液』に入れるように指示する。こ

れは別のギルド職員に依頼した。
それとすぐ後に駆け付けてきた【ロキ・ファミリア】の団員達は変わり果てたアイズに驚愕したり、悲鳴を上げた。
ほぼ連行される形で本拠（ホーム）に向かうのだが、ベート同様アイズも邪悪な建物として入りたくない気持ちを強めた。
気のせいか、背景に稲光（いなびかり）が起こったような――
無言の帰宅を果たしたアイズは包帯を――簡単にだが――巻かれた状態で幹部達の居る部屋に通された。
案の定、彼女の姿を見たフィンは険しい顔に。
リヴェリアは今にも殴り掛かってきそうな雰囲気を醸し出すが、踏み止まった。
ベートは軽く身体を洗って着替えが終わってから連れてこられる予定になっている。
この場に神ロキの姿は無い。まずはフィン達の要件を済ませてから、と判断したようだ。
「……僕の立場として……」
まず代表として小人族（パルゥム）フィン・ディムナが口火を切る。
【ファミリア】を取りまとめる団長として。
言いたいことがたくさんあるけれど、と。
「……」
対するアイズは黙ってフィンを見つめる。何も悪いことはしていないし、約束も反故（ほご）にしていない。何も疚（やま）しい気持ちは欠片も無い。
そんな意思表示で睨むように佇んでいた。
「何故……僕の命令を聞かなかった。何故、約束を破った。何故、遠征が近いのにそんな無茶をした。何故、君は反抗的な態度で睨む」
棒読み気味にフィンは言い続けた。それに対し、アイズは黙っていた。
反論すべき事など何もない、と言わんばかりだ。
それにフィンが今言ったことは――おかしい。
「……これで満足かい？」
そうフィンが問おうたのは近くに居る碧玉の瞳を持ち、その色と同

等の腰まで長い髪の王族リヴェリア・リヨス・アールヴ（ハイエルフ）だった。
横に長いエルフ特有の耳で黙って聞いていた彼女だったが、片目だけ開けてフィンを見返す。
その後、アイズに顔を向ける。
その表情は怒りでも歓喜でもなく――何かを見定めるような真剣なもののみ。
「……一体、何と戦った？」
その問い掛けに一瞬、ビクリと身体を震わせるアイズ。しかし、恫喝ではなく単なる質問だ。だが、それでも今の状況ではお叱りに匹敵する言葉の強みを感じた。
リヴェリアにとって今すぐケガを治せ、とかよく無事で戻ってきた、などと言いたい気持ちも少なからずあったのだが――
彼女（リヴェリア）もまたどう声をかければいいのか悩んでいた。あまりに酷い姿はついぞ見たことが無かったので。
「……小さな……虫の様なモンスター」
「お前をそこまで追いつめるような強敵だというのか？」
追い詰められた、というよりは油断したが正解かもしれない。
相手の強さは未知数。事前情報も無く、駆け引きも失敗した。
「……油断……して……。ベートさんや……ポランが居なかったら……死んでた……」
今になって思う。
悔しいと。
あれは想定よりも弱かった。けれども想定以上に手強かった。
後悔と挫折が襲い掛かる。

†

アイズが静かに泣き始めた。ドワーフのガレス・ランドロックはいまいち状況が理解できなかったが、アイズをズタボロにする小さな虫とはどんな奴なのか想像するも何も浮かばない。
フィンとて初めて聞くので困惑していた。
リヴェリアはアイズの為に椅子を用意し、そこに座るように言った。命令ではなく――

その後でベートが訪れ、状況の説明が始まるがまるで真実味が無い。

だからこそ恐ろしい、とフィン達は感じた。

「金槌で……。一体どんなモンスターだったのか、ますます気になるね」

「お前らなら余裕で倒せるかもな。だが、実際問題、本当に倒せるかは俺にも分からねえ」

自信に満ちていたベートが意気消沈する程のモンスターが小さな虫と言うのだから信じられない。しかも、簡単に倒せる敵であることは確定している。なのにアイズが命からがら勝ちを得た。

何が何だか分からない。

「例のポランという少女……。彼女が先に勝利したんだね？」

「結果的には、な。……そうだ。あいつが居なければ力押しで……全滅していただろうな」

「力押しで全滅じゃと？　お主、何を言っとる」

「事実を言っているだけだ。奴らは正面からの攻撃に強え。アイズの魔法すら受け切った」

「……で、金槌で叩いたら勝てたと……」

聞いただけだと実に間抜けなモンスターだ。そんなモンスターに勝てないベート達はもっと間抜けじゃないか、と。

普通なら苦笑して終わりだ。

（……僕の予感には何も反応しなかった。対象が小さいから？　そんなわけがない）

ベートが嘘をついている、とは思えない。アイズに口止めされている、という雰囲気も感じない。

神ほどではないがベートは嘘をつくような器用な男ではない事は分かっている。

「……だが、虫か……」

ダンジョンには虫系モンスターが色々と居る。今まで勝てなかったモンスターには覚えが無いが、深層域にでも行かなければ出会わない筈だ。

ベート達が居たのは上層だという。
嘘を言っていると仮定すれば納得するのか。
では、真実であれば――それはいかなるモンスターだというのか。

†

事情を聴いても納得など出来るはずがない。しかし、話を聞いていても現物を見ていないので不毛な対話に始終してしまう。
では、保留にしたとして罰則をどうするかで頭を痛める。
謹慎で済ませるべきか。
「保護者としての意見が聞きたいな」
「……私に丸投げするな」
「ふむ。しかし、生きて戻ったのだからもうええじゃろう。ギルドの見解も聞かねばならんし」
「……なら、早速願いを叶えてやろう。アイズはしばらくその状態で居ろ。例の保存液を有効利用しようじゃないか」
まるで、この事を予期したように用意されたアイテムのようで嫌な予感がするけれど、と。
しかし、使わない手はない。他に言い訳も浮かばなかったので。
「……うん」
「……ベートは……説明役に少し働いてもらおうか。無事なのは君だけのようだから」
面倒くさいのはフィンとて嫌だが、今は情報が必要だ。
今以上に責め立てても不毛なので神ロキの意見を聞くことにする。
それからアイズの身支度はリヴェリアに依頼した。
厳罰で事が済む話なら分かりやすくて助かる。けれども今回は様子がおかしい。
以前のように勝手に他の【ファミリア】の団員を危機に晒したわけではない。更に実験と称していたとはいえ安全対策の用意は整えていたことも聞いている。それを不備だと責められはしない。
完全に『異常事態（イレギュラー）』の案件だ。
用意を整えてギルドに向かおうと考えているとポランがお世話になっている主神へステイアが怒鳴り込んできた。

門番を務める団員達は戸惑いつつ神ヘスティアを宥めにかかる。
「ロキは居ないのかい？」
「居るには居ますけど……」
ドチビと会話したくない、と駄々をこねているので団長に連絡を向かわせた。
合間に女戦士（アマゾネス）のヒリュテ姉妹が訪れた。
「神ヘスティア。団長が相手をするそうです」
「こっちも色々とごちゃごちゃしててさー。これからギルドに行くところなんだってー」
妹のティオナの話し方は今更なのでヘスティアも指摘してこないけれど、礼儀として姉のティオネは謝罪する。
唯一の団員が今も昏睡状態であるというので原因となったアイズ達に会いに来ることは想定内だ。
いくら神同士が仲が悪くともポランとアイズはそれほど悪い仲ではない事は理解している。だが、それでもケジメとして来なければ泣き寝入りと変わらない。そうヘスティアは判断した。

†

執務室に通されたヘスティアは開口一番、文句を言おうかと思った。しかし、それは意気消沈するアイズの姿を見て絶句する形で収まった。
今まで見たことも無い酷い姿の【剣姫】に言葉を失う。
「……おいおいおい。どど、どうしたんだい、ヴァレン何某（なにがし）君……。まるでとんでもないモンスターにやられたみたいな格好して……」
「……言葉通りですよ、神ヘスティア。まあ、お座りください」
と、温かく出迎えるのは団長のフィンだ。
出かける準備をしている最中だったがギルドとの約束は取り付けていない。
「……ん？　君、……一体何と戦った？」
匂いを嗅ぐようにアイズに詰め寄るヘスティア。
何かを感じ取ったのか、怪訝な表情で尋ねてきた。それに対してフィン達にしたように答えるアイズ。

「虫？　小さな虫？　……それが君をこんなにコテンパンにしたのかい？　ポランも……」
「……はい」
「それは上層のことかい？」
「……はい」
同じ調子で答える。もちろん、嘘をついていない事は理解した。
頭から足元まで眺めた後、アイズに身体を清めるように言いつける。
「……ボクの勘だけどね。君、相当悪いモンスターと戦ったようだね。……多分、君以上にポランは酷いんだろうね」
「……ごめんなさい。……力及ばず……」
頻繁に会うわけではない。それでもポランは彼らとパーティを組んでダンジョン攻略をした後、楽しそうに語っていた。
本当は許したくないけれど、彼女の笑顔に負けたから許した。
そして、今回は――
「【ファミリア】の主神としてボクは君を許すわけにはいかないし、ロキも同様の事を言うはずだ。……だけれど、君たちが判断したことにボクらは口しか出せない」
「……はい」
ヘスティアは諦めたようにアイズを見据える。
下界の眷族たちは本当に――愛おしいと思わせる。
それはアイズとて例外ではない。
尋常ならざる敵に勝勘挑むように仕向けているのは――元々は神の恩恵のせいだ。
彼らは神々の娯楽に付き合わされている。それを後から文句を言うのは筋違いである。
（……ボク（神）らにしか見えてないのか。彼女の身体にまとわりつく邪悪な気配は早く除去しなければ……）
ヘスティアはリヴェリアを手招きする。そして、早々に風呂に入れるよう打診する。
生きているならいつでも話は聞ける。だから、今すぐに、と強調し

た。
もう一人意気消沈して部屋に佇むベートは特に何も感じない。だが、こちらも普段よりもしおらしいので珍しい光景だなと思った。

†

今以上の情報を【ロキ・ファミリア】では得られないと知ったヘスティアはフィンと共にギルドに行くことを決意する。
少しでも情報が欲しかったからなのと眷族（ボラン）の容態を見るためだ。
「……話だけだと信憑性は薄そうだけれど……、事と次第によっては情報封鎖もありえるかもね」
「それは経験からですか？」
「単なる勘さ。……ボクの見立てをあまり期待しないでおくれよ。その……虫のモンスター……想像以上にヤバイかもしれない」
神が危惧する程なのだから何かあるのだろうと思いつつギルドへと向かう面々。
途中、ティオネが供をしたいと言ってきたがヘスティアが許した。
「余計な噂を広げない事が条件だよ」
「は、はい。了解しました」
ヘスティアの言葉に恐縮するティオネ。
神ロキであればもう少し気楽な態度になるが、よその神となるとまだ慣れないようだ。
道中はわりと目立った。なにしろ【ロキ・ファミリア】の幹部と神ヘスティアが生真面目な顔で行進しているのだから。
何かあると勘繰るのは自明の理である。
何よりアイズが重傷を負ったという噂はかなり広まっていた。それだけ彼女は迷宮都市オラリオでも噂になりやすい冒険者として充分に目立つ存在と言える。
フィンも隠し通せるとは思っていなかったので成り行きを自然に任せる事にしていた。
物々しい一団がギルド本部にたどり着き、ギルドを取りまとめる責任者への面会を求める。今回は事前の予約を入れていない突然の訪問だ。

これに対し、職員たちに緊張が走る。
「……済まないが迷惑をかける」
「も、もうしばらくお待ちくださいませ」
【ロキ・ファミリア】とて悠長にギルドからの報告を待っているつもりは毛頭ない。何しろ自慢の看板娘が大怪我を負ったのだから。
慌ただしい一幕はあったもののフィン達はただ辛抱強く待つ。これには周りへの警告も含まれる。
自分達の団員に手を出せばどうなるか、という。しかしながら、側に神ヘスティアが居るので余計事態が複雑化している。
「君たちが来るだけでいつも混乱するのかい？」
「……あはは。たぶん、たまたまですよ」
「……ボクなんて団員募集の為にしょっちゅう来ているけど、ここまで騒ぎになったことないよ」
神なのに、と。
しかし、もし神フレイヤであれば騒然となる。知名度がものを言うようだ。

†

アイズ達がダンジョンから生還してまだ一日も経っていない。事情も本格的に調査されるのはもう少し後の筈だとフィンは予想していた。それでもこんな大騒ぎを起こすような真似をしたのはポランに非難が向かないように、という彼（フィン）なりの配慮があった。
ヘスティアを伴っているのも――
ダンジョン内で命を落とす事は良くあることだ。だから、実験をするにしても周りに配慮していれば問題は無い。ただし、異常事態（イレギュラー）はいつ何時（なんどき）発生するか分からないし、それを予測することは実質不可能である。
物々しい雰囲気をまとわせる【ロキ・ファミリア】の元に現ギルド長である『ロイマン・マルディール』が脂汗を流しつつ頼りない足取りで現れた。
彼は容姿端麗と名高いエルフの中でも醜いと揶揄された肥満体で、今も全力疾走してきたにもかかわらず移動速度が遅い為に時間がか

かった。
同族（エルフ達）からも豚呼ばわりされる始末。
重役の任に就いて贅沢の限りを尽くしていると専らの噂である。
「おっ、お待たせいたしました」
「……私が言うのもなんだが……。貴様はもう少し痩せた方がいい」
残念な生き物を見るような目で王族（ハイエルフ）のリヴェリアは言った。しかし、そんな苦言は既に何度も聞いている筈だが、それでも体重が増えるのは摩訶不思議な事である。
「強引に面会を頼んだ僕らも悪いが……。早速だが分かっている情報だけでもいい。聞かせてくれるかい？　それと神ヘスティアの眷族の容態も一緒に」
「わ、分かりました。……しかし、こちらも事態の把握に努めている最中でして……」
そんなことは百も承知で乗り込んでいる。
これは言わば他の冒険者への警告の意味も含まれている。
何らかの事態が起きて【ロキ・ファミリア】は何かをしようとしている。
ダンジョンに異常事態が発生した。だから、気を付けろ、と。
それに気づこうが気づくまいが冒険者を止める権利はフィン達には無いけれど、察しの良い冒険者ならばより警戒して攻略に臨むはずだ。
「じゃあ、場所を変えようか。落ち着いて話せる部屋に案内してくれ」
「そちらの都合を無視する形だ。……しかし、ことは深刻であると我々は判断した。お互いの情報を共有したいと思っている」
「悪いね、ギルド長。……ついでにボクの眷族（子供）の様子を見せてもらえると助かるよ」
それぞれの主張に対し、汗を拭きつつ何度も頭を下げるギルド長。
お役所仕事は辛いと身体で体現しているようにそれぞれ見えた。
†
あまり観客が居るのは好ましくないとフィンは判断し、厳重な防音施設のある部屋での会議を希望する。

それと【ロキ・ファミリア】が来たのは情報の共有であり、ギルドに報復とか厄介な事件を起こす気は無いと告げておく。それと神ロキが来ないのは嫌味を言うに決まっているので本拠（ホーム）に置いてきた、と。

詳しいことはフィンにも分からない。けれど、ヘスティアの様子から不用意に広めて良い案件とも思えなくなった。

物々しい会議室に案内された後、ギルド職員たちによる飲み物やら食べ物が運ばれ、追いついた話し合いの場が設けられた。その後はごく限られたメンバーだけ残し、静かな時間が流れ始める。

「さて、始めようか。と言っても当事者を置いてきたから噛み合わない事も多いと思う」

今回連れてきたのは口の堅そうなメンバーばかり、の筈だがベートは説明がおそらく下手だと認識している。それでも現時点でまとな精神を持つメンバーであることは疑いようがない。

「まず、分かる範囲で説明してくれ」

ベートにアイズ達とどんな攻略をしてきたのか、説明させた。出来る限り詳細に、という注文だったが実のところ彼は多くを見ていない。

ダンジョンの壁を壊して何かをしているのは気配で察した、と。

「……それが十三階層……。ヘルハウンドが出る階層だね」

「最初にあらかたモンスターを片付けて、それから壁を壊した。といっても小さな穴程度だが……」

「……ロイマン。ここまでで異常は認められるか？　正直、特にこれと言って問題があるようには思えない」

「は、はい。私も同様であります」

ロイマンはフィンに恐縮しているというよりはリヴェリアの厳しい視線が気になるようだ。しかし、彼女はギルド長に文句を言いに来たわけではない。

ただ単に真面目に話を聞いているだけだった。

それに対して神ヘスティアなど空気のような扱いだ。認識しているのかさえ怪しい。

「アイズは端的にしかものを言わない。……ここはやはり神ヘスティアの眷族から事情を聴くのが早いのだが……」
「残念ながら昏睡状態のままであります。特に頭部の損傷が激しいようでして……。目覚めるかも……」
ヘスティアはアイズにしたようにギルド長にポランの身体を清めるように通達する。そこで初めてヘスティアの存在を認識したようでかなり驚いていた。
単なる野次馬とでも思っていたらしい。

†

次にモンスターの特徴を説明させる。どの道、どのような条件で現れたのか、ベートは良く見ていなかったので説明できなかった。
専用の黒板を運び込み、大体の様子を描かせる。
詳細な姿は戦闘中だったため曖昧な部分が多い。というより時間が経つに連れて像がぼやけて途中で描けなくなった。
それでも端的な情報は伝えた。
「小さな虫である。仲間は呼ばない。学習する……か」
「前方の防御に絶対の自信を持つ。……なんだそれは」
「脅威レベル3に認定……。だけれど駆け出しでも倒せる……。それはつまり弱いモンスターってことじゃないのかい？」
そう言われる事は覚悟していた。
実際に戦えばフィンとて考えを改めるかもしれない。ベートをして、理解不能の領域だ。安易に強い弱いと断定できるのか、今も迷っている。
それ以前にアイズをボロボロにしたことを忘れてはいけない。
「待て。アイズの剣技はそうそう破れない筈だ。それも上層域に出るモンスターに……」
リヴェリアが慌てた調子で言った。
出現した階層で侮りそうだが、実際は階層で物を見てはいけないのかもしれない。フィンはそう判断した。
そのモンスターは実験の過程で現れた。であれば下層域にも出現する可能性がある。

「そこの女戦士（アマゾネス）だったら……。足は無くしている。俺は『フロスヴィルト』を装備していたから助かった、とも言える」

ベートの例えに出されたティオネは口を尖らせたが口は出さなかった。

武闘派で知られるベートの意見は貴重だ。その感覚はおそらく正しいのだと幹部達は判断した。

だが、ロイマンは疑問に思っていた。たかが小さな虫のモンスターにそれほどの脅威があるのか、と。

そして、大事なことは駆け出しにも容易に倒せる点だ。どうしてベートはその程度のモンスターを恐れるのか、と。

アイズがボロボロにされた、と言っても彼女の姿を彼は見ていない。駆け出しがボロボロになるのはいつもの事だ。だから大事（だいじ）だとは思えなかった。

「……ふん。ベートの意見を聞いてもいまいち分かりづらい。それは確かに認めるところだ。だが……前方の防御が硬い。攻撃も同等……なんだったね？」

「ああ。同階層のヘルハウンドを鮮やかな斬撃で細切れにしやがった。ありゃ、ミノタウロスでも簡単に倒すだろうさ」

「バカな！」

ミノタウロスは確かに強い。討伐推奨レベル2のモンスターである。

駆け出しが単独で相手にしていい存在ではない、と認知されている。

ヘルハウンドは駆け出しがなんとか倒せる中では強いのだが、それとミノタウロスが同等のわけがない。

「確かにバカみてぇだが……。一つ言っておくぞ。あいつはアイズの魔法を……。必殺の攻撃を真っ向から防ぎ切った。攻撃に使う前足だけで、だ」

アイズの必殺技の中で良く使われる『エアリエル』は雑魚を一掃する突進技。

『リル・ラファーガ』はロキに唆（そそのか）されて使うようになった必殺技だ

が、エアリエルの上位というわけではない。使い方が違うだけだ。
「攻撃も相当ある筈だが……。奴はまだ本気じゃねえと俺は思う。……というかその前に倒したから実際の強さは……もっと上に行くかもな」
「ミノタウロスを容易に倒せるだけの強さはあるけれど、それを発揮することはなかったわけだね。そして……駆け出しで倒せた理由は……。後方の防御力が無いに等しい」
フィンの推測に『おそらくな』と小さく返答するベート。
だが、本当にそうなのかは今でも疑問に思っている。
「魔法攻撃に関しては分からない。防いだのがたまたま風属性だけだったからな」
聞けば聞くほど不可解なモンスターとしか言えない。
強いのか弱いのかはっきりしないところだ。
「よく分からないんだが……。あいつらは俺達が力任せに地面に叩きつけようとしたのにどうやってか威力を消しやがる。それと衝撃は確かに加えたのに防御が薄い筈の下半身は無事だった。……これ、理屈は分かるか？」
頑張って説明しているベートの言葉をヘスティアは全く理解できなかった。そもそも戦闘に詳しくない。
とにかく頑張って倒したことは理解できた。
「それよりも……。狼人（ウェアウルフ）君は……どうしてピンピンしているんだい？　かなり苦戦したんだろう？　回復薬（ポーション）のお陰かい？」
「単に攻撃を受けなかっただけだ」
「全員平等でなければならない、という理由は無いからね。無傷で終わる事もあるだろう。だからこそ、説明が出来ている」
毎回ズタボロにならない限り本拠（ホーム）に帰ってきてはいけない、という規則は無い。
無傷でも無事に戻れば主神は安心する。神ロキとてそう思っている。
アイズがボロボロになったのは少なからずロキも気にしているようで、今頃自棄酒を呷（あお）っている頃だと予想する。

†

フィンは拙い説明から色々と推測していく。しかし、それでも推測は推測だ。

どれほど強かったかを説明されても実感が伴わなければ信じるに値しない。けれど、アイズ達が苦戦したことは確かだ。

戦闘が未熟だったかもしれない。

駆け出しに容易に倒される程度に苦戦する、という事はベート達に油断があった。

色々と反省すべき点はあるが、それがもし――

自分達の身に降りかかった場合、同じことが言えるのか。

そう思っていると執務室の扉がノックされた。

緊急会議である事を知った上での面会だが、特別な場合を除いて許可は出されている。

「……神ウラノスがお呼びです」

「……ん？　ダンジョンで祈りをささげているだけの神がかい？」

「え、はい……。それから、神ヘスティア様。眷族の面会はそのあとにしてほしいとも……」

あからさまに不機嫌になるヘスティア。しかし、職員は伝言を持ってきただけであり、文句を言う相手は別に居る。

神ウラノスが会いたいというなら、内容は既に察しがついている。

「……なにやら大事になってきたようだね」

「……既になっている」

他人事のように苦笑して言うフィンに対し、リヴェリアは呆れつつ言った。

眷族の好奇心が意外な展開を生み、ヘスティアは自分に降りかかるであろう罰則などが脳裏に浮かんで膝が悲鳴を上げ始めた。

ポランが原因かもしれないけれど、怒られるのは嫌だ、と。

その辺りは【ロキ・ファミリア】を道連れにすればいい。問題は今後の活動だ。

強制送還だけは勘弁してほしいと自分以外の神に祈る。主に知神のミアハやヘファイストスだ。絶対にロキは含まれない。

部屋を出ても物々しさに変化はなく、次に向かうところは最重要施設である。

迷宮都市オラリオはダンジョンからモンスターが湧き出ないように天まで聳える『摩天楼（バベル）』という塔で蓋をしている。しかし、それだけでは完璧とは言えない。

ギルドにも主神が存在し、それがウラノスである。

普段は人知れず特別な部屋でダンジョンの荒ぶる特性を抑え込む祈りを捧げている。

モンスター達には地上への進出という悲願があり、太古の昔から現地の者達と戦いを繰り広げていた。

その手助け――とは思えないが――神々たちが地上に降臨し、この地に安寧をもたらした。

神々にとっては『遊びに来た』程度の事だったようだが――

†

ギルド長ロイマンの案内で神ウラノスが居る神聖な場所に移動する。もちろん普段は関係者以外立ち入り禁止の場所である。それは例え神であっても許可が居る。

今回はウラノス自身が招集を願い出たので案内が出来るが、ロイマンからは前代未聞の出来事だと思われ、脂汗を拭く作業をずっと繰り返していた。

リヴェリアから見ればそれで少しでも痩せれば御の字だ、と。

ギルド本部の奥底で一人佇む神ウラノスの部屋に訪れるフィン達。ロイマン達ギルド職員は案内だけで室内には入らない。

「やあ、ウラノス。天界以来かな？」

まず気さくな挨拶をしたのは神ヘスティア。

地上では出会いは殆どないが天界では大抵の神と顔なじみである。

「そなたも息災のようだな。怠惰が辛うじて衣服を身に着けてる女神が……」

「怠惰は余計だよ」

口を尖らせるヘスティア。

ウラノスは祭壇に設置された玉座に座って祈祷を続けている。身

長は2Mほどある老神である。
　ヘスティア以外はかの神の威光でも感じ取ったのか、それぞれ片膝をついたり、畏敬の念を表していた。それは王族のリヴェリアも同様に。
「【ロキ・ファミリア】の者達もよく来てくれた。……神ロキは息災かな？」
「はい」
「お前達を呼んだのはダンジョンでの事だ。余計な詮索は無しにしよう。……しかし、私とて教えられる事は少ない」
　ウラノスはダンジョンの――ほぼ全ての階層の――気配を知ることができる。けれども、完璧ではない。
　ダンジョン内で暗躍する者達の動向まで捉えているわけではない。
　例えば同じ神によって探索を妨害されたり――
「それより先に聞かせておくれよ。今回の事件でボクの……ポランはどういう処分になるんだい？　そりゃあただで済むとは思っちゃいないけれど……」
「行動自体は……咎めるものではない。ただ、運が悪かった。……それについてはもう少し考慮する時間が欲しい」
「……運が悪いと……」
　フィン達にとっては運が悪かったで済むとは思えない。大事な眷族が大怪我をしたのだから。
　通常であれば【ファミリア】同士の抗争に発展してもおかしくない。ただ、それは気持ち的な問題であり、アイズ自身が求めなければ何もできない。いや、何もしない事もありえる。
「冒険者の問題は【ファミリア】同士で解決するもので、私が介入する事ではない」
「……確かに」
「問題は現れたモンスターの方だ。……ヘスティアはどう思う？　いや、どう感じたか、だ」
　荘厳な雰囲気をその身にまとわせた老神は下界のものを睥睨するように威厳ある言葉で投げかけてくる。

同じ神であるヘスティアはいちいち芝居がかって疲れないかい、と言いたいところだった。

自分の役割を全うしているので文句は言えないのだが。

「直接は見ていないけれど……。おそらく危険な部類だね。ちょっと見た感じだけど……、呪いに近いのかな？　洗えば落ちる程度というのが……」

「その意見には賛成だが……。そうなるとそなたの眷族はその最もたる影響を受けてしまったとみていい。あれをそのまま帰すのは危険だと判断する」

「……そうなのかい？」

気楽そうに言ってみたもののケガの状況から尋常ではない事は察しがついている。

神の恩恵（ファルナ）を与えた眷族のだいたいの様子は離れていても感じられる。その感覚で言えば重篤ではあるがポランはまだ生きている、という事だけしか分からない。

そして、危険だから返せない。そうか、じゃあ仕方ないね、と諦められるわけがない。

「けれど返してもらわないとボクとしても困るんだ。神（おや）としてもね」

腰に手を当て、真っすぐにウラノスを見据えるヘスティア。けれども、どこかで思っている。

ポランがそのまま帰ってくるのは危険だと。

能力を制限された神の元に戻せば更にる混乱が広がる。しかし、自分にはそれを解決するすべがない。

†

しばし見つめ合うヘスティアとウラノス。

それに割って入るのはフィンであった。別にヘスティアの肩を持とうと思ったわけではない。単に話が急に止まってしまったからだ。

「神ヘスティアの眷族は……具体的にはどう危険か教えてもらえませんか？」

「それが……はっきりしない。当初は邪悪と言うか……殺戮衝動……。または純粋な邪（よこしま）なる塊であった。……それが今は幾分と薄

まっておる」
だが、時間経過で呪いが無くなる保証は無い。そうウラノスは暗に告げている。
根本原因が分からないものを素直に返せない、と。
「つい数年前だ。……似たような事件があった」
「……ダンジョンでは様々な事件があるのは僕も承知しているよ。多くは深層域で起きたものと記憶している」
【ロキ・ファミリア】がまだ無名であった頃から居たフィンはギルドが箝口令を敷いた事件のいくつかを知っている。当事者であったことも何件かある。
そのどれか一つだ、と言われても困るほどに。
「今から話す事は他言無用に願う」
ウラノスはヘスティアを見据えていった。それはまるでヘスティアが狂いの軽い女神だと言わんばかりだ。
零細【ファミリア】で信用が無いのは自覚している。しかし、秘密を安易にばらすほど口が軽いか、と言われると――
酔った勢いで言ってしまう自信はあった。
その事に思い至った女神は脂汗をたくさん流して黙った。それは側に居たフィン達にも察しがついた。
（守れそうにないんですね）
（……そもそも神ヘスティア様の事を我々はあまり知らんな。ドチビとロリ……しかロキから聞いてない）
ロクな情報をロキから聞いていない為にフィン達は苦笑するしかなかった。
眷族たるボランは実際に会って色々と話も聞いているのである程度の事は分かるけれど。
その彼女からヘスティアの事を聞いたことがあったかといえば思い出せないくらいに無い。
（……ジャガ丸くんを売っている所しか浮かばない）
（……ジャガ丸くん。あとは……）
（そういえば私、ジャガ丸くんを売っているヘスティア様を見掛け

たっけ）

思い返せばポランはしっかり者だ。よその【ファミリア】だと認識して情報を流さなかったのかもしれない。自分の事は二の次と考えれば意外と強(したた)かな女の子だとも言える。

単なる素直な女の子が地道に【ステイタス】の評価をSにまで上げられるものか、と。

「……なんだか、ボクに対する評価が君たちの中でダダ下がりした気がする」

「自覚があるのでしたら、もう少し団員募集に力を入れてください」

「うむ。五万ヴァリスほどの冒険者依頼(クエスト)を定期的に出すとか」

「……急に手厳しくなったね、君達」

それだけポランは日頃から真面目に働いていたという事だ。

健康に気を使い、本拠(ホーム)を住みよいところに改装しようとし、アイテムの備蓄をこまめに行(おこな)っていた。

これほど良い眷族(こ)が居るところならパーティ申請くらいあってもおかしくない。尚且つ【ロキ・ファミリア】のアイズと懇意にしている。割と優良物件である筈だ。

ポランがパーティに恵まれないのは年齢や名声、経験不足によるもの。もし、小人族(パルゥム)であればサポーター要因として勧誘される可能性はあったかもしれないが――

†

大手【ファミリア】の厳しい視線を受けて更に居心地が悪くなるヘスティア。

彼女は彼女で努力はしていると言いたいところだろうけれど、実際のところ露店の仕事以外はサボり気味だった。更にダンジョン経営についてはズブの素人でギルド申請すらまともに勉強していない。もちろん今も分かっていない。

可愛い女神が居るならそれだけで勝手に来るものと――自信を持って――思い込んでいる程だ。

巨乳だけで団員が増えるなら【ロキ・ファミリア】が大手である理由は何なのか。

「……話を続けていいか？」
急に無視された事に戸惑いを覚えるウラノス。
彼もヘスティアの事をそれほど知っているわけではないし、下界での暮らしについても同様だ。雰囲気からあまり信用が無いのは感じ取った。
「あー、はい。すみません」
ウラノスに謝罪し、話を促す。
老神が語るのは数年前――ごく最近に起きた事件だ。深層域の『遠征』において噂程度でしか知らない程だったが確かに大きな事件があった。
それは一人の神が天界へ送還されるほど――
「……【アストレア・ファミリア】の壊滅事件……ですか」
「うむ」
新進気鋭の武闘派【ファミリア】の一つで団員が全て女性。これは三大処女神と言われる【アルテミス・ファミリア】と双璧を成す女性主体の【ファミリア】であった。
正義を執行する彼女達は闇派閥（イヴィリス）の壊滅に奮闘していた。
それがある日、団員がほぼ全滅し、主神は生き残りの団員の願いによってオラリオから去ってしまった。
「かの【ファミリア】を壊滅に追い込んだのは闇派閥（イヴィリス）ではない。間接的には関わっているが……。本命はある一匹のモンスターだ」
本来ならば秘匿されるべき情報だが、アイズ達が遭遇した謎の新種が似たような気配を漂わせていた。
もし、かのモンスターであればいかに【剣姫】といえど生きて戻る事などありえない。
そのモンスターはギルドの極秘資料にこう記されている。
ジャガーノート。
ダンジョンが自らの脅威と感じた時に生み出す破壊者であり、その階層に居る冒険者を鏖殺する為だけに遣わされた『抹殺の使徒』――
目撃者は【アストレア・ファミリア】の生き残り、または生存者。それと現場に居合わせていた闇派閥（イヴィリス）が流した噂などを調査した結果。

それとダンジョンの管理を携わる神ウラノス。
だが、今回このモンスターの事はフィン達には告げなかった。無駄に混乱するのを避けるためだ。
「……そちらが見たというモンスターの詳細と同じであれば秘匿を解除しよう」
「そうだね。他にもいた場合、対処しなければならないからね」
拙い説明だっが、聞いた範囲でフィンとリヴェリアはウラノスにアイズ達が戦ったモンスターの情報を告げた。それに対してウラノスは僅かに眉を寄せる。
自分の知るモンスターと特徴が一致しない。だが、気配は似ている。
似て非なるモンスターか、それとも亜種か。
どちらにせよ、危険であることは変わらない。
「……その……冒険者……、どれほどの破壊行為をしたのだ？　当時の事件では一階層を丸々爆砕したほどと記録されている」
「……あの子に階層を破壊するほどのすべはないと思うよ」
ウラノスの説明ではとんでもない爆弾を持ち歩いている危険人物になってしまう。
少なくともアイズ達とパーティを組んでいて大量の火薬を持ち歩いたり、購入したという事実はない。少なくともフィンやリヴェリアの知る範囲では。
「ベートも一緒だったし、荷物も見ている筈だ。神ウラノス。アイズを連れてきてもいいかな？」
「うむ。しかし、【剣姫】は満身創痍なのだろう？　歩けるのか？」
ウラノスはダンジョン以外の情報は耳に入っていないようだ。
直下の制御に全能力を割いているからと言える。

†

ティオネを向かわせている間、今も目覚めないポランについてヘスティアは尋ねようとした。今のところ緊急事態の報告が無いので安静にしていると思われる。
もし、異常があればすぐにでも駆けつける所存だ。何もできなくて

も自分の眷族だから。
「ベート。もう一度僕らに説明したモンスターの様子をウラノスに伝えるんだ」
フィンに促されてモンスターの姿形、戦い方などを説明する。
戦闘一辺倒の彼の説明は大雑把ではあったが正確性はその際問題ではない。
体験した内容を素直に伝えるだけで充分だ。元よりそれ以上に言いようがない。
「……小さな虫か……。それはかのモンスターと違いすぎるな」
「【アストレア・ファミリア】を壊滅させたモンスターは一体だけでとんでもないモンスターという事だね？」
「……そうなるな」
どれほどの脅威度があるのかは想像でしかないが、その手のモンスターは大抵数が少ない。というよりは一体が基本だと言える。
群体系であれば封鎖しなければならないし、深層域へ遠征に向かう【ロキ・ファミリア】にとっては避けては通れない通路がたくさんある。それら全てを封鎖することはギルドには出来ない。
「新種のモンスターと断定した方がいいかな。それとも同一個体で大きさだけが違うとか？」
「……差異はあるが情報は伝えよう。かのモンスターは大型。虫ではなく竜の化石ような姿だという。それと……魔法を反射する能力を持っている」
「アイズの魔法を受けていた時は反射しているような雰囲気は無かったぜ」
お互いの情報には大きな隔たりがある事はウラノスもフィンも理解した。
つまりベート達が相手をしたのは新種であると――
その後、ティオネに背負われたアイズが姿を見せる。ただ、ベート以上に説明が下手なのでフィンは先に謝罪した。
「んー、しっかり清浄されたようだね。嫌な気配が無くなってる」
にこやかにヘスティアはアイズに言った。

後から再復活する場合も考えられたので。
「……ありがとうございます」
「モンスターの事は聞いた。やはり虫で間違いないのか？　それも複数現れた事も」
「……はい。三匹……出てきました」
「では、質問を変えよう。……それらはどうやって出現させた？　突然出てきた訳ではない筈だ」
偶然で現れる場合もあるにはある。しかし、かの壊滅した【ファミリア】が遭遇したのは偶然の産物ではあるが、人為的に引き起こされたものでもある。
その条件はウラノスとて正確には把握していないけれど情報はある程度知っている。
「……壁に穴を開けて……。自動で直る様子を眺めていたら……」
フィンとリヴェリアは苦笑する。
ダンジョンの壁は確かにモンスターが現れる時に壊れる。そして、時間経過とともに修復する。それを人為的に起こしていたのか、と。
ただ、それだけでは驚異的なモンスターは現れない。
話だけでは単なる希少種のモンスターが現れたに過ぎないからだ。
「……いくら上層の希少種（レア）モンスターだとしても……。君、レベル３だった筈だ」
「……はい」
上層はレベル１の駆け出しが多く潜る階層である。いくら希少種でもレベル３が苦戦するようなモンスターが現れるはずがない。一般的な常識ではそうなっている。
各階層には決まった強さが設定されていて、下層に行けば行くほど強いモンスターが出るのは歴史が証明している。それを覆す事象があるものなのか、と。
「……お前と共に居た冒険者は……どれほどの破壊行為を行（おこな）った？　いや……どのように壁を壊した？」
「金槌と杭」
「……何？　そ、それだけか？」

「……うん」

ウラノスが驚愕している事はフィン達も理解した。しかし、聞いているだけだと何もおかしなことは無い。

金槌がとんでもないアイテムだとか、ではない筈だ。

少なくとも驚くような事をアイズが言っていないのは確かだ。

「……剣だと派手に壊してしまうから。ポランは丁寧に仕事をする。……小さな四角形になるように私も手伝った。……全部で五つ。そのうち二つは修復現象を眺めただけ」

子供が興味を持ちそうな実験だ、とフィンは素直な感想を抱く。

想像すると楽し気な雰囲気が脳内に再現された。それが邪悪な儀式である様子は微塵も感じられない。

自分達も深層域ではもっと大々的に破壊活動を行う――やむを得ない事情で――ので、そちらの方が問題だと思うほど。

「……あの子らしい発想が原因か……。アイズ、ただ穴を開けただけで終わったわけではあるまい。その眷族は何をした？　火薬を放り込まなかったか？」

「……それは危ないから持ってきてないって」

（……安全志向）

（まあ、そうなるな。あの子は堅実な冒険者だ。おそらく実験も安全にしようと心がけたのだろう）

幹部二人が苦笑しながら頷いた。

話からも微笑ましい様子しか感じられない。

†

ウラノスの心配とフィン達の苦笑でヘスティアはどう判断すればいいのか困惑してきた。

どうにも話が噛み合っていない。

（ウラノスはポランがダンジョンでとんでもない破壊活動をしたと見ているのか？　言っちゃあなんだけど、あの眷族にそんなことができる力も道具も無い。……それともボクの知らない一面があって、火薬とかゴロゴロ出てきたらどうしよう）

色々と備蓄している事は知っている。基本的に購入したものはポ

ランがきちんと管理しているし、貯金もしている。神へスティアの食事代も別に取っておいているほど。

仮に裏の顔があるとしても神を騙せるものかな、と。

「……開けた穴に魔石を入れ、ました」

「何!?　そ、その後は?」

と聞いたがすぐに理解する。

魔石を入れて修復されたらどうなるか、その結果を見ようとした。

正に実験そのもの。そして、大規模な破壊活動とは到底思えない。

「ちなみにどういう場所かまで決めていたのかい?」

「……そうみたい。大きな一枚岩みたいなところは避けてた」

(……きっと落盤を避けたんだな)

(用意周到。いや、安全に作業するにはきちんと下調べをするのは基本だ)

うんうんと納得していくフィンとリヴェリア。それを見ていたティオネもなんだかおかしな空気になってきて戸惑った。

フィンとリヴェリアは件(くだん)の駆け出し冒険者ポランと会話をしたことがある。その時の雰囲気で言えばどこもおかしな事が無く、寧(むし)ろ納得出来る事が多くて助かった。

ある意味、ベートやアイズの説明よりも分かりやすい。

「……魔石は上層で倒したモンスターを中心に。……下層域だと怖いからって」

(……しっかりしている)

(うちに欲しいくらいだ)

「大型モンスターが出たら怖いって言ってた」

「……そうか。モンスターの再生産だ」

「なんだと?」

リヴェリアの言葉にウラノスが怪訝な顔で言った。

今のでフィンはウラノスがポランという冒険者をよく知らない、という事を確信した。

自分達も話を聞いていなければ目的を理解することは出来なかった。しかし、こうも簡単に理由が判明すると現場で何が起きたのか、

様子に想像がつくのが――不謹慎ではあるが――面白い。本当は面白がってはいけないんだが。

「ウラノス。ダンジョンに穴を開けて魔石を入れたら……どういう風になるんだ？」

「修復時に潰れるだろうな」

「じゃあ、潰れない場合は？　それがあり得たら？」

「……そんなことは誰もやったことが無いから記録にも無い筈だ」

「……だろうね。魔石は壊せるからね」

効率的に魔石を取り出すには、まずダンジョンの事を知る必要がある。

限界知らずのダンジョンにもし、魔石を戻してあげたとすれば――モンスターとして生み出すダンジョンはどう判断するのか。

「つまりどういうことなんだい？　あの子は魔石を戻してモンスターを生み出そうとしたのかい？」

「聞く限りでは危険行為ですが、ドロップアイテム目的だと納得できます。それを落とすまでモンスターを倒し続ければいい。特に希少種（レア）モンスターは発見するだけで手間ですから」

「なるほど。頭いいね、それを考えた眷族（こ）は」

（それがまさに神へスティアの眷族なんですけど）

フィンは苦笑した。リヴェリアも同様に。

二人は同じ考えに至った。

実に面白い眷族だと。

†

ポランが行（おこな）った実験は普通であれば見向きもされないものだ。その理由は単純だ。

基本的に――アイテムや資金稼ぎに入る以前に――冒険者は強くなるためにダンジョンに挑戦する。効率化はその延長線上に存在する。

無欲な冒険者は実は少ない。だからこそ、ともいえる。

安全に冒険者が資金稼ぎなどを出来るように。しかし、これはリヴェリアが否定してしまった。

次のアイテムはフィンに対して否定した。だが、その続きが存在したとは思いもよらなかった。

（たぶんポランは……）

（……おそらくあの子（ポラン）は）

ヘスティア以上に理解できてしまったフィンとリヴェリアは同じ結論に至った。

赤毛の小さな冒険者の目的を。

そうとしか考えられない。

誰よりも優しい冒険者だ、と。

モンスターを倒すから荒くれ者と断ずることは出来ない。冒険者であるからには強くなることもポランは受け入れている。

完全に無欲というわけではない。

好奇心旺盛で皆が幸せになれる方法を模索していた。いや、いつも他人の事を考えていたのかもしれない。

「二つは見物用として。残り三つの穴に魔石を投入か……。それぞれどんな魔石か覚えているかい？」

「……うん。一つはブルー・パピリオ。次はウォーシャドウ。……もう一つは……たくさん出るキラーアントは避けた筈……。あれ、何だったかな」

「ああ、確か……アルミラージ……じゃねえな。あれは同階層だ」

ベートの言葉でアイズは最後の魔石を思い出せた。

上層のモンスターの情報は深層攻略を思とするアイズ達にとって記憶に残りにくいものだった。それだけ敵とも思っていなかった、と。

「そうそう。ニードルラビットの魔石をたくさん入れてた」

「それで……どうなった？　あえて聞くが……」

「……うん。魔石を入れた岩が壊れた。三つとも。その時、確かにダンジョンの雰囲気が変わった。振動も感じた」

「だが、今の話だと……。ありえない現象とは思えない。下層域に行けば取りこぼしの魔石が放置されることは良くあるはずだ」

それについてはリヴェリアに覚えがある。

地面に置いた魔石をダンジョンが取り込むことは無いし、放置してもモンスター化はしない。そう自分が言った。ただし、例外がある。

「それぞれ違う魔石を入れたのに現れたのは同じモンスターだったと」

フィンの言葉にアイズは頷いた。

ここまでの話の中で子供の実験に対し、何か罰則を下さなければならないのか、という問題について考えなければならない。

偶然の産物によって生まれた脅威。確かに想像もつかない事故、または事件だ。

しかし、それは【ファミリア】を壊滅させる悪意があればフィン達も黙っているわけにはいかない。かの【アストレア・ファミリア】は悪意との戦いの中で散った。今回のはそれとはまるで違う。

アイズ達はレベル3だ。ちょっと強い『強化種』が現れても対処できると踏んだ筈だ。それが見込み違いを起こしてしまった。

「危険な実験であれば僕も黙っていることは出来ない。しかし……、これはギルドの規則にあったかな？　ダンジョン内で危険な実験はしてはならない、のは当たり前として……」

安全対策を充分に取った上での事故だ。せいぜい保護者同伴が義務です、とでも言うつもりか、と言いそうなほど。

駆け出しの警護にレベル3が二名。充分な戦力だ。しかも上層階。無難なモンスターの魔石を使用。尚且つ火薬は危ないと認識すらしている。使用したアイテムは金槌と杭。これがどういう風に危険なアイテムなのか説明する方法を逆に教えてほしいくらいだ。

「大規模な破壊活動でもないし、今まで事故が起きなかったのも運がいいというか……。ポランの発想勝ちというか……。あの子、とんでもないスキルを持っているんじゃないのか？　その辺りはどうなんですか、神ヘスティア」

「……あー、ごめん。難しい話でよく理解できなかったよ。あの眷族のスキルは……何も発現していないよ。それは間違いない。ごく最近の更新にだって出ていない」

「ほ、本当ですか？」

「疑うのも無理は無いけれど……。ボクも伸びがおかしいところは疑問に思ってたさ。でも、事実だ。……ただ、【ランクアップ】時に現れる可能性もあるけどね。どういうスキルとかアビリティが出るのか。秘かに楽しみにしているんだ」

【ステイタス】の数字の伸びは倒したモンスターの数より多かった試しは無い。これは自己申告だから信憑性は低いけれど、嘘は言っていない。それは理解している。

ただ、今まで倒したモンスターの種類に区別なく、数字は残酷に結果を表していた。

分け隔てなく増えるのは一つずつということ。おそらく階層主を倒しても一つしか数字は増えない、筈だと。

†

ウラノスはアイズの話を聞いておかしいと思った。

かのモンスターはダンジョンの大破壊によって生まれたと記載されている。生まれ出るモンスターの詳細な情報まで把握することは出来ないが、全く新しい側面からの誕生は素直に驚いた。

であればそれは確かに新種といえるかもしれない。

「……犠牲になったのはお前達だけか？」

「……はい」

（冒険者がたくさんいる場所でやろうとは思わない筈だ）

（闇派閥（イヴィルス）であれば巻き添えを狙う。だからこそ危惧する気持ちは理解できる）

アイズが結構な大怪我に対し、ベートは脇腹を切り込まれた程度で済んでいる。

単なる力量不足ともいえるが――

「ならば一応、類似の事故……事件が起こらないようにせねばなるまい。だが……」

「それだとアイテム採取の冒険者依頼（クエスト）に支障が出ますね」

フィンの言葉にウラノスは頷く。

希少なアイテムを掘り起こす場合にもダンジョンを破壊するような行為を行（おこな）う。それまで規制することになってしまうからだ。

最終的にはダンジョンの壁や――そもそもダンジョン自体に触れるな、となってしまいかねない。

「規制なんかしなくても倒せるようになればいいだけだろ」

ベートの意見にフィン達は顔を輝かせる。

対象のモンスターは少なくともアイズ達が知恵を出せば倒せることは実証された。倒し方さえ共有すれば恐れる程のことは無い。

初見殺しのモンスターは色々と居る。大事なことは無敵ではなく倒せるモンスターだということ。

しかも運がいいことに駆け出しでも倒せた。

「ただ……、そいつらは学習する。どれほどまでかは分からねえが」

「短期決戦が必要ってわけか。……君たちの説明よりは実際に僕が確認したいところだよ」

より詳細な情報を得るために。

問題は確実性だ。

ボランだから出来たという事もある。

「……推論ではあるが似て非なるモンスターか、系統を同じくする下位種族と見た方がいいな」

ウラノスも話を聞いている内に想像と違っていたので戸惑った。

調査は継続して続けられているが報告が来るのはまだ先だ。それまですり合わせた情報を総合すれば単騎での討伐はレベル3ほど。それ以上ともいえる。

念のために呼び名を決めなければならない。形状は不定形という訳ではなく同じ個体という事なので。

小さな身体にも関わらず、レベル3冒険者を敵に回して健闘したところから暫定的に『ドレッドノート』という呼称に決定する。

†

今回は報告のみということでウラノスから【アストレア・ファミリア】の情報は打ち切られた。

発生条件だけで充分と判断したからだ。

罰則等については検討次第沙汰を下すことにして、フィン達を退出させる。

それと帰り際にポランの面会を許した。
さっそくヘスティアは駆けだそうとしたが嫌な雰囲気の事を思い出したので、リヴェリアに護衛を依頼する。
「……正直に言って会うのが怖いよ。……全く何なんだい、現れたモンスターというのは……」
「ベート達の説明では要領を得ないからな」
フィンはティオネとベートを連れて本拠（ホーム）に帰る事にした。聞くべき情報は少ないが、今以上の発展が無いと理解したので。
思っていたより大事に至らず、けれども小さくない犠牲は忘れていない。
たかが子供の実験――けれども充分に対処した結果を思えばあまり強く言えない。
（……機転の利く眷族（子供）だ。……もし、単独（ソロ）であったら……。案外、倒してしまいそうだね。アイズ達の力が通用しなかったことに動揺しなければ被害はもっと少なかった事も……）
それを実証することは出来ない。けれども、アイズ達が何らかのタイミングで遭遇していたら、今よりもっと酷い結果になっていたのは確実だ。
少なくとも生きて帰って来ることは難しい。
そんなことを思いながらギルドを後にする。
『摩天楼（バベル）』内にある医療施設に向かったヘスティアとリヴェリアはポランが居る病室に訪れた。
急に起き上がったり、叫んだりするようなことは無く静かに眠っているとのこと。しかし、不穏な気配だけはダダ洩れしているようでヘスティアの顔色がどんどん悪くなっていた。
「それほど酷いのですか？」
「……ああ。黒い靄のように……。でも、すぐ消えていくから時間の問題かもしれないね」
神にしか知覚できない謎の黒いオーラ。リヴェリアに至っては王族（ハイエルフ）の存在ですら感知できなかった。
代表して病室に入る。そこには顔や両腕を包帯に包んだ少女が

眠っていた。
赤毛は相変わらず。それ以外は――肌の色など――特におかしな点は見当たらない。
ヘスティアの指示により、身体を清めるように依頼する。勇気を出して覗き込んだ主神は眷族の痛々しい姿に絶句する。それと不穏な気配の元凶が右目辺りから噴出しているのが分かった。
身体の靄はその後の処置であっさりと霧散したものの頭――特に顔――のところだけはどうしようもなかった。
（なんなんだい、これは。全身……には行き渡っていないようだけど……。その『ドレッドノート』とかいうモンスターの影響なのかい？）
どのような呪いなのかは分からないけれど、不穏な気配は今も変わらず。
変わり果てた姿にヘスティアは号泣する。それは悲しさからか、悔しさか。
滂沱の涙は何を意味しているのか、自分でも分からない。
†
ポランは衰弱はしているが命に別状はなく、けれども目覚める気配はない。
担ぎ込まれて日が浅いから何とも言えないけれど、と担当医が言った。
激しい戦闘の跡か、生傷が痛々しい。これは彼女の背中に匹敵するほどだ。
「……ポランは勇敢、でした」
アイズの言葉に一瞬だけ睨むような目つきをしたヘスティア。しかし、それは単なるやっかみである事を理解しているので、すぐに顔を逸らした。
惨めな【ファミリア】の主神らしく、大手を妬むように。だが、それでもやはり心から憎むことは出来ない。
「き、君だって勇敢さ。逃げずに倒したんだろう？　そんな大怪我をしたにも関わらず……」
自分だったら痛みで転げまわったり泣き叫んで惨めに這いつく

ばっている自信がある、とヘスティアは改めてアイズの頭から足元まで見据える。

歳若い冒険者とはいえ、軽くないケガだ。物が持てない冒険者というのは失業と変わらない。

ポランも似たような状態ではあるが起きぬけに怒鳴り散らしたり、小言を言うのはやめようと誓う。

少なくともまだ生きているのだから。

現行の医療設備では何とも言えない状態だが、ヘスティアは残って看病するか、本拠（ホーム）に戻るかしなければならない。

廃墟とはいえポランが齎（もたら）した備蓄やら貯金が置いたままだ。決して少なくない金額を黙って持ち去られるのは我慢できそうにない。

主神は奇跡を行使できない。しかし、それが下界で活動する神々の制約だ。それを破ることは出来ないし、破れば天界への送還に繋がってしまう。

（ボクは君がどのようになったとしても待っているよ）

素直で優しい眷族に背を向ける。今の自分には何もできない。

惨めな気持ちになりつつも気を引き締めて本拠（ホーム）に戻る事を決意する。後は現場の者達に任せて――

それから数日後、アイズ達と分かれたヘスティアはアルバイトと並行してお見舞いに訪れるも眷族の意識は未だに戻らず。けれども悪い事ばかりではない。

最初こそ衰弱していたが今以上の悪化は起こらず、現場も落ち着きを取り戻していた。

アイズはポランの元に数日の一度は顔を見せに行き、空いた時間の殆どを鍛錬に費やしていた。

自由な時間を生かして次なる戦術を得るために。

†

指が揃っていないだけで物を持つのも辛い。いつもは気にしたことが無いくらい当たり前のように握れた剣が今は全く異質な存在として感じられた。

両手に力が入らない。ただ持っているだけ。いや、持てるだけまだ

マシかもしれない。
剣を扱えない【剣姫】という二つ名が今ほど滑稽なものとして聞こえる。
（……指二本だけなのに剣がここまで重く感じるなんて）
軽量で細身の剣なのに、と。
いや、これこそが武器の重みなのだと思い知る。
最初は一度振っただけで取り落とした。それだけで気持ち的にも愕然とした。
便利なアイテムや魔法によって元に戻るとしても今より過酷な状況の現場であれば再生など望むべくもない。
今の自分でも戦わなければならない場合、敵に対して悠長に構えていられるのか。
（足技だけでも倒せない事も無いけれど……。それでも上層のモンスターで手一杯だと……思う）
女戦士（アマゾネス）のような肉体そのものを武器とする種族ではないし、そういう戦い方をしてきたこともない。
慣れない戦術を身に着けるのはアイズとて時間がかかる。
武器以外にも食事などの日常生活も激変し、着替えや食事、風呂に排泄。今までの常識の殆どが通用しない状態に陥ていた。
それでも諦めずに一人で努力を続ける。【ファミリア】に迷惑をかけている自覚はあるものの半分近くは鍛錬の一環と思っていた。
歳若いゆえの柔軟な発想のお陰か。もし、もう少し年齢の高い冒険者であれば諦めを見せたり、全てを投げ出すことも充分にありえた。
幼いアイズの努力にフィンを含む幹部達も陰ながら応援していた。
しかし、今度の遠征に彼女を外すかどうかの苦渋の決断を迫られていた。通常であれば――そんな事態に陥れば彼女は食って掛かるところだが、今回ばかりは足手まといを自覚した為に大人しい。
【ロキ・ファミリア】にとって大きな戦力の喪失は攻略の要を失うことと同義である。彼女は既に【ファミリア】にとって無くてはならない存在だった。
自身の【ランクアップ】の事を忘れて鍛錬に打ち込むアイズ。強さ

への熱望を保留にした生活は新鮮なものであった。もちろん、それが良い事とは思っていない。

「……強く握らずに剣を持つ……」

無理なら使い方を変えればいい。ここは様々な発想の転換が必要だと判断する。

もし、女戦士（アマゾネス）であれば足で持つ、という離れ技に挑戦するかもしれない。けれども、見た目が格好悪いので今は保留にする。

出来ればベートのような足技の方がいい。

仲間に頼んで庭先に木の杭を用意してもらい、蹴りつけてみるもすぐに痛みでダウンする。

慣れない攻撃は身体に多大な負担を掛けるようだ。

「……何やってんだ」

鍛錬の様子を見物しに来たベートが呆れ顔で言った。

目の前には無様に転げまわる【剣姫】の姿がある。しかし、それを笑おうとは思わなかった。

黙って強くなるわけがない。鍛錬は必要だから。それをベートはちゃんと分かっている。

「ひ弱な人間（ヒューマン）が付け焼刃でそんなことしても足を痛めるだけだ。硬いブーツを用意しろ」

ベートのブーツは彼専用なので貸せない。

他の仲間に頼んで鋼鉄製のブーツを取り寄せてもらう。しかし、アイズに合う小さなブーツは見つからず。仕方が無いので専用に作ってもらうしかないと諦める。

そんなやり取りを窓辺から見つめる王族（ハイエルフ）のリヴェリアはアイズの快復を陰ながら祈っていた。

#1―16　エクセリア・イーター

【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインが不自由な身体で戦い方を模索しているころ、神々の間では様々な噂が飛び交っていた。

多くは剣を持てないのに【剣姫】とか如何なものか、と揶揄する内容だ。

実力が大幅に下がってしまったとしても【ロキ・ファミリア】にとっては外すに外せない。本人も努力している最中である。それを邪魔されるのは神ロキにとって普段以上にイライラさせられる。

パーティを組んだらしい眷族の主神ヘスティアは会合に出席する権利を持っていないとはいえ、名前が出ないわけではない。

露店で働くロリ巨乳はそれなりに知名度が高かった。

（アイズたん。うちは頑張って耐えとるからなー）

厄介なモンスターにやられたとはいえ戦意は失っておらず、余計な気を回すよりは放任がいいと判断したが――

不思議といつもと変わらないのは神でも疑問であった。

大抵の冒険者は大怪我をすると引きこもりがちになる。あるいは絶望して姿を消すこともある。

例の眷族との交流がアイズの心象を変化させたと言えるのかもしれない。しかし、それが良い事なのか、ロキには判断できないし、してはならない気もした。

†

足技を中心に戦い方を変えてみたとはいえ武器が握れない事が一番の悩みだった。

力の入れ方がまるで変ってしまった。痛みは既に消えているとはいえ、多少の恐怖心が残っている。

戦えない、という――

「……アイズー。ずっと鍛錬ばっかだねー」

「何かに打ち込んでないと駄目なのよ、きっと」

少し離れたところで見守る女戦士（アマゾネス）姉妹。それ以外にも【剣姫】を心

配する団員は数多くいた。
アイズをズタボロにする原因を作った【ヘスティア・ファミリア】への報復は神ロキが禁止を言い渡している。もとより弱小を相手にするのは品位に関わる、という意味も込めた。しかし、幹部達は一応の体裁を取るのが良い、ということでロキに働いてもらった。
黙っているよりははっきりとした指針を提示する。それだけでも団員達の心境にも区切りが出来る。
「しかし、我らの姫君は意外というか……。メンタルが強くて助かっているよ」
窓辺からアイズの鍛錬風景を眺めていた団長フィン・ディムナは苦笑した。
幼い子供が負うには大きすぎるケガにもかかわらず、今も闘志は燃えている。
件（くだん）の【ミアハ・ファミリア】には定期的に『保存液』の改良などを支援しつつアイズ復活のための準備を進めていた。
「そういえば……。愛剣以外はすぐに使い潰す武器がこのところ無事だとか」
「財政的には助かっているけれど……。それを喜んではいけないんだろうね」
「五体満足でなければ冒険できんでは困る。今のアイズはようやくにして冒険者としての苦境を味わっておる。ここからの脱却はきっと良い結果につながるはずじゃ」
「……アイズはまだ子供だ。大人としては……家で大人しく絵本でも読んでいてくれた方がいいのだろうな」
遠征に間に合わないかもしれない。けれども、それでもいいのかもしれないと幹部達の中では思い始めていた。元より無茶だったのだ、と声に出して言いたかった。
他人の気苦労も当人（アイズ）に伝わっているのか怪しいが、雑念無しで鍛錬する彼女に今は余計な気遣いは無用だと判断する。
幹部以外の【ファミリア】の眷族たちは無理をしているように見えたり、買い物などに誘おうか悩んだりしていた。寧ろ、そちらの方が

気掛かりであった。

†

十三歳とレベル４を控えているアイズとは裏腹に未だ昏睡から目覚めない赤い髪の少女ポラン・ブーニディッカ。

手当を担当する者。一緒に治療を受けているケガ人たちに異常はなく、けれども神々から見れば異常そのものが現場に満ちていた。

神の視点ではポランの頭部は黒い靄に包まれている。だが、それは濡れタオルで拭くと剥がれ落ち、離れた部分は霧散していく。

それなのに嫌な気配は感じる。実に摩訶不思議な現象である。しかも、それによって何か異常事態でも起きるのではと危惧していたのだが、一向に何も起きない。

それはそれで結構な事なのだが――

「神々に嫌悪を抱かせる黒い靄……。けれども人体に影響は未だ現れず……」

様子を見に来た神ミアハから見ても不思議としか言いようがない。

原因となる右目から止め処目も無く溢れ出る黒い靄は神にしか見えていない。

一般に見えているのは顔に浮き上がった黒っぽい血管の跡だ。採血してみると赤い血液になっている。

謎のモンスターの体液が浸透して眷族の身体に変化をもたらしている。そうとしかいえないが、だからといって誰かに迷惑をかけたわけでもない。

ポランはただ眠っているだけだ。危険だと分かっていても手が出せない。いや、そう思っているのが神だけなのが問題だ。

数か月もの時を要するかと思われたが、ミアハの見舞いから二日ほどで意識を取り戻した。彼自身はただ見舞いに来ただけで何もしていない。

意識を取り戻したとはいえ長く食を断っていたため、身動きはまだ出来ない。

黒い靄に注意しつつ離乳食で栄養を得る。

「記憶障害は無さそうだね」

厳重に厚い手袋やマスクなどで防備したナァーザ・エリスイスが看病を担当した。
他の治療師（ヒーラー）はポラン一人に構っている余裕が無く、世話しなく働いていた。
「痛みは……あったとしても鎮痛剤が効いているから……」
淡々とナァーザはポランに説明する。どの道、自分で理解することになるから。
こういう役割は好きではないが大事な事だと理解していた。元より自分自身がそうだから、と。
冒険者に己の身体の状況を伝えられるのは人によっては狂乱する。
両手の指が欠けているのだから不安が増大してもおかしくない。
それはアイズとて同様だが、向こうは既に割り切っていた。そこはナァーザも驚きであった。
「耳も無いけど、聴覚自体は無事の筈……。顔の傷は深く……」
「……」
聞いているのかいないのか分からないが説明は続けた。
現実をありのままに受け入れてすぐに納得できる冒険者であれば大したものだが、ポランはまだ十二歳の少女だ。
いくら冒険者だとしても未来ある若者が酷いケガをして平然としていられるわけがない。もし、それがありえるなら、その冒険者は何らかの異常を抱えている事になる。
健全な冒険者であることを望むナァーザからすれば泣き叫んでくれた方が気が楽だった。

†

受け答えについては日に日によくなってきている。ケガの程度はモンスターにやられた目の辺りが一番ひどい。頭痛が定期的に起きるので睡眠もおぼつかない。
治療法が無いまま過ごしているわけだが、本人は早く冒険をしたいと熱望していた。
生活がかかっているのでずっと休んでいるわけにはいかない、という気持ちがあった。

気持ちではそうでも武器を持てないし、戦えない今の状況ではギルドのアドバイザーも探索を許可しない。

我がままではないけれど現実を突きつけられるポランは確かに意気消沈した。

「君が持ち帰ったモンスターの死骸とかは調査中だから。場合によれば報奨が出るかもしれない」

罰則の方が強い気もするが、誰もが予想できない新種のモンスターともなればさすがに叱りつけるだけでは体裁が悪くなる。

せめて治療費くらいは軽減させてやらないとやられ損だ、とナァーザは思う。

保存液の品質改善の為に【ロキ・ファミリア】が全面協力してくれている。このアイテムは性質上、大量生産には向かない。しかし、将来的には役に立つはずだと――

理想はサポーター用のアイテムだ。

切断面に塗るだけで済むのが理想だが、そこまで行くにはたくさんの試作品を作らなければならない。

「……声はまだ出しにくい？」

「……なん、とか……」

声帯が潰れてしわがれた声しか出せない。これは魔法や薬品でも治せなかった。

潰された右目からは数時間おきに血が垂れてくる。痛みは無いらしいが完治は未だに出来ていない。

痛いのはずっと奥で、今は左目も開けにくい。

日中は顔にタオルを巻いて過ごしている。失明していない左目は負担を軽減する為に見えなくてもいいように休ませていた。

頭部を除けば歩けないことはないポランだが、ここしばらくは安静にしていた。

歩くと頭に響くから、という理由もあったが――迂闊に動いて悪化させたくない気持ちが強かった。

更に三日後、痛みもだいぶ引いた頃合いに街中を歩く訓練を始めた。味覚は失っていないので食事療法も無理の無い範囲で続けてい

る。そんな中、鍛錬の為に走り込みをしていた金髪金目のアイズと出会った。

両手は何重にも巻かれた包帯で丸くなっていたが、それ以外は特に異常は見当たらない。

対するポランは顔の傷が深くていかにも重傷者然とした姿だった。

「……ん。久しぶり」

「……ご、ご無沙汰してます」

声は未だに嗄れたまま。小声のアイズよりも聞き取りにくい。

それでもアイズはポランの言葉を聞き取った。

一週間を少し超えた程度の間出会わなかったが、半年ほども開いたような気持だった。

散歩のポランに対し、鍛錬のアイズ。共に話せる話題は少ないがケガの程度の情報は交換した。

広場にある椅子のような構造物に座り、日々の出来事を話す様は歳相応の女の子の会話風景そのままであった。

†

アイズは不慣れな状態のまま剣を取ったり、足技を鍛えている事を伝える。対するポランはようやく外に出て散歩をするまでに回復した事を伝えた。

モンスターにやられた右目は良く分からないが一日の多くは暗闇の中で生活している、と。

「……何も見えない生活は……怖いです。特に頭痛が酷かった。今は……幾分か軽くなってきたけれど……。何にしてもこれからってところです」

「……そう。……私もそんな感じかな。深い階層に挑戦する為にはどんな状態でも戦えなくちゃね」

「……本当にごめんなさい。……遠征に行けなくなるかもしれない」

「それはいいの。……早くからこんな事態になるって想定してたから……。でも、好きで重体になんかなりたくないよね」

鍛錬の為だけに手首を切り落とせるか、と言われれば無理だ。アイズとてやりたくないし、体験もしたくない。

大怪我は確かに想定しなければならない問題なのだが、想定と現実は違う。

アイズには戦う理由がある。ポランはアイズとは違う。その辺りはそれぞれ思うことがあるようであえて話題に出さない。

互いの手は包帯やらタオルで包まれて、まるでジャガ丸くんのよう、とアイズは小声で呟く。するとポランは小さく苦笑した。

「……剣を握れない事が怖くて……、それを克服する為に頑張ってる。……私は何のために剣を握り……、それが出来ない私の価値はどの程度なのか……」

今だからこそ思うことがある。

今までの無敵ぶりが嘘のように無くなった【剣姫】はそれほど強くなく、ここから強くなろうとしても怖くて前に進めない。

それでも強くなりたいと今でも言えるのか、と。

「……ポ」

ランと続けようとしたところ『ブチ』またはバチっという音が聞こえた。

咄嗟に目を瞑るアイズは己の本能のまま飛び退る。

ほんの一瞬までなかった気配が生まれたためだ。

（……なっ。たった今まで……何も感じなかったのに）

完治したとはいえ顔に痛みが走る。それは幻ではあるが同時に目を開けるのが今はとても怖い。

つい先日に感じた邪悪な気配は未だに身体が覚えていた。

迫る気配はなく、恐る恐る瞼を開けてみれば顔を血に染めているポランの姿があった。

右目に当たるタオルは既に赤い。左目の方は気絶の為に白目状態。けれども出血しているわけではなかった。

「ポラン」

呼びかけるも応答は無い。

グラリと傾き、背後に倒れるところで周りを行き交う通行人たちが気づき始める。

アイズはすぐに応援を頼む。

「治療院の人かギルドを。それと【ロキ・ファミリア】に応援をお願いします」

何人かに頼みつつポランから目を離さない。

それはこの場から去る事はとても危険だと判断したからだ。

（まさか目に卵でも植え付けられた!?　じゃあポランは……どうなるの？）

通常、ダンジョンに現れるモンスターは生殖行為をしない。卵を産むのは外の世界に既に進出したモンスターだけだと言われている。

その辺りの知識はアイズも持っていたが、冒険者に寄生するモンスターについては覚えが無い。

かなり長い期間彼女の身体は調べられていた筈だ。それなのにこういう事態が起きるのは想定外も甚だしい。

「ちょ～っと待ったぁぁ！」

大きな声を上げつつ迫る存在にアイズは驚く。

声の主は一抱えもある容器を携えつつ走るヘスティアだった。

予想外の神に呆気にとられる。しかし、すぐにポランに近づかないように警戒体制に移行する。

「おう、ヴァレン何某君。君だったか。だが、そこを退くんだ」

「……えっ？　神様の方が危ないと、思います」

「そうかい？　だけど、今回は君が退く番だ。さっさと言う事を聞いて」

切羽詰まった迫力で迫るヘスティアに負ける形でアイズは警戒しつつ数歩引き下がる。それを見計らったヘスティアが容器の中身をポランにぶちまける。

撒いたのは先ほど来る途中で汲んだ噴水の水だ。

†

血まみれの顔を洗う為ではない。

ヘスティアにしか見えない黒い靄を払うためだ。

「ちっ。根源までは無理か。よし、ヴァレン何某君。……君は大丈夫そうだね。とにかく、逃げるよ」

「駄目。……ポランを見捨てるわけには……」

「よその【ファミリア】なのに心配性だね。でも、嫌いじゃあないぜ。なら、少し離れようか」

ポランから距離を取ろうとするのだが、当の彼女は気絶しているにもかかわらず動きを止めない。

だいたいの予想は出来ているが信じたくない気持ちが強かった。しかし、それも一瞬だ。

アイズは腰に提げている剣に手を伸ばす。力はまだ十全に入れられないが持つことは出来る。

「……こんな時だからこそ言うけれど……。ポランを救ってくれ。これは……君にしか出来ない仕事かもしれない」

「……はい」

ヘスティアはアイズから離れてみた。それで顔が自分に向くようであれば神に敵対する者と認定する。

しかしながら、ポランは意識が無いとはいえ顔はアイズに向かっている。

(標的は彼女ってわけかい。謎のモンスター君。……いつものヴァレン何某君なら造作もないんだろうけれど……)

今のアイズは手負いだ。戦えるかも怪しい。

ヘスティアに出来る事は共に逃げる事だけ。しかし、当のアイズはそれを望まないし、無理な戦闘は——おそらく——しない。その辺りの判断力は歴戦の冒険者が勝(まさ)っている。

神は危機的状況でも役に立てないのが悔しい。けれども地上に進出する時に交わした約束事でもある。

(ああ、ポランの顔が酷い事に……。鼻血が出過ぎじゃないか)

(さっきのは血管が破れた音？　だとしたら早く治療しなければ……。でも、気絶している筈の彼女をどう倒す？)

頭では敵だと思っていても——やはり身体はポランだ。アイズとてすぐに剣を振るう事が出来ない。

友に冒険した誼(よしみ)もある。それに敵対する意思がとても弱い。

まるで今にも死にそうな——

命の灯が消えそうになっている相手に止めを刺すのはモンスター

でもない限り、したことがない。
（彼女の主神の前で倒せる？　……無理。無理というか……私が私でなくなるような……。じゃあどうするの……。どうすればいいの）
迷う【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン。
幽鬼のようにゆらゆらと揺れながら迫るポラン。
右目と鼻から血が流れているが左目は今のところ無事だ。
（動きが鈍いのはどうして？　肉体に慣れていないから？）
武器を構えてみたもののポランは無手だ。形状変化でもしようものならもはや手遅れとしか言いようがない。
出来れば穏便に事を収めたい。その方法が今のアイズには浮かばない。
ポランはアイズを前にして両手を前に突き出す。その仕草は猫人（キャットピープル）が通行人を招く様によく似ていた。
モンスターで例えると蟷螂（マンティス）の威嚇する構えだ。
「……」
体勢を低くし、敵であるアイズを迎え撃とうとする。
人間（ヒューマン）がどういう構えを取ろうと迎撃する自信はある。しかし、どうにもやりにくい。
武器による攻撃は決定打にはならないが、どうしたらいいのか。
モンスターを数多（あまた）屠ってきたアイズをして初めて戸惑いを見せる。

†

ポランは意識を失っている。右目はおそらくモンスターだ。そう見当をつけてみたものの奇妙な風景であることに変わらない。
神を狙わず、武器を持つアイズを標的にする。
モンスターの時の脅威は感じないが、倒し方が全く浮かばない。
（……本体は倒した筈……。四匹目は確かにいなかった。黒い体液のせい？）
そうだとしても邪悪な気配は今まさに発生したばかりだ。
神ヘスティアからすれば兆候はあったのかもしれないけれど。
（彼女の中に魔石があって……。その影響が……）
迎撃態勢は取るものの一向に攻めてこない。好戦的な時と違って

今度は慎重に行動することにしたのか、と。
学習する能力があるのならば今のモンスターは更に賢い筈だ。
攻撃力は幾分か落ちている。それが勝機への道かもしれない。
一歩前に踏み出すとポランは驚いたように引き下がる。警戒していると見て間違いない。
(……敗北したモンスターが私に警戒？　新しく生まれ変わったわけではないの？)
前足のつもりだとしてもポランの両手は戦いには不向きだ。
それ以前に戦闘にはならない。
かといってのんびりと分析している暇は無い。それは今も顔から血が流れているから。
早く治療を受けさせなければ命に係わる。
(……それともここで倒しきる？　出来るの、それが私に)
「ぽ、ポラン君？　しっかりするんだ。モンスターなんかに負けるんじゃない」
遠くからヘスティアが呼びかける。それによって緊張が幾分か和らぐ。
モンスターポランもヘスティアの声に驚いてさらに一歩下がった。
「君はまだ……冒険者だろ？　きっとなんとかなる。地道な努力こそ君の長所だ」
鼻水と涙を流しながら応援する神ヘスティア。
どうにもならないことを分かった上での応援か。
希望がまだあると思っているのか、と言えばアイズにも分からない。けれども、神が諦めないのであれば自分もそれに倣うのみ。
問題は包帯で見えないポランの右目だ。
あれは狼人(ウェアウルフ)のベート・ローガによって引っこ抜かれて空虚な穴だけしかないと聞いている。それなのにどうやってアイズの動きを見ているのか。
独自に再生させたのか。
(だとしても目を狙ってみたところで動きは止まるの？　液体として浸透していたら頭そのものを吹き飛ばさないと……)

そうなればもうポランを殺すしかなくなる。
そんなことが果たして出来るのか。

†

モンスターに身体を乗っ取られたからとて放置するわけにはいかない。生け捕りにするのか、このまま倒しきるのか選ばなければどんな被害が生まれるか分からない。
しかし、それでもアイズは攻め込めなかった。
「お前が出来ねえんなら、引っ込んでいろ」
そう大きな声が聞こえた。
怒鳴るような、優しい応援の様な。その言葉の後に疾走してきたのは灰色の狼。
レベル3の冒険者ベート・ローガだ。
「……殺してはダメです。……神ヘスティアはまだ……諦めていない」
「まあ、適度に痛めつけてから判断する」
彼にしては珍しく優しさが込められた言葉だった。元より彼とて不本意なのだろう、と。
けれども地上に進出したモンスターを野放しには出来ない。
「急いできたものの……。全く厄介なことになっているようだね」
アイズの側にフィン達幹部三人が到着する。そのあとで女戦士（アマゾネス）のヒリュテ姉妹もやってきた。
頼もしい仲間だが、敵はか弱い女の子一人。過剰戦力も甚だしい。
「被害状況は？」
「……ポラン一人だけ。他は何も起きてない」
「……分かった。ティオナ達は避難誘導を。見世物にするわけには……、無理そうだが一応は、ね？　あと、何か起きたら困る」
「了解です、団長」
「……そうだよね。あたしたちがよってたかって殴ったり蹴ったりするのは……、ちょっと嫌だなー」
それぞれ役割を与えられ、行動を開始する。
泣いているヘスティアはリヴェリアが介抱する。

迅速な対応で周りの喧騒は止むが、敵性体ポランは未だに戸惑ったまま。

急速に近づくベートの蹴りを防御しようとするも身体が思うように動かず、逃げようにも足が遅い。

「なんだこいつ。動きがトロいじゃねえか」

「学べるモンスターだからのんびりしていたらやられる」

「分かってる。……分かってるが……やりにくい」

ある意味、これはこれで強敵である。

容赦のない攻撃であれば迎撃にも手心は加えなくていい。しかし、今は完全に弱い者苛めだ。それはベートの理念に反する。

†

ゆっくりとベートはポランに近づき威嚇する。するとポランも手を出して威嚇し返す。しかし、声は無かった。行動のみだ。

軽く腕を蹴ると飛び掛かってくるが、彼が一歩下がっただけで追撃は止まる。

距離感が掴めていないのでは、とアイズ達は予想する。であれば学んだ後は一気に来る可能性がある。

頭では戦い方が固まってくるのに攻め込めない。

「モンスターだった頃の威勢はどうした。ああん？」

「……」

顔を大きく逸らすポラン。

ベートを無視するような仕草に見えたが、離れていたアイズにはそうは思わなかった。

敵は言葉を聞いている。そうとしか思えない。その証拠にポランの耳をベートに向けている。

乗っ取った身体の機能をモンスターも学んでいると見て間違いない。

（……まさか。攻め込めないのをいいことに……）

そう危惧した途端にアイズに悪寒が走る。

モンスターは戦い方以外も学べるのではないか、という仮説だ。

「あまり余計なことは言わないで。そのモンスターは……学べるか

ら」
「ああ？　そりゃあどういうこった」
「アイズが言いたいのは我々の言葉を学ぼうとしているってことだよ。まさかとは思うけれど……」
槍を携えた【勇者（ブレイバー）】フィン・ディムナが苦笑しながら戦闘に参加する。
彼もまたか弱い冒険者と戦うことに抵抗を感じていた。しかし、そこは大手【ファミリア】を率いる団長である。余計な雑念はアイズ達以上に払える。
だが、それでも命を奪うまでには至らない。
「確か……前面の攻撃には無敵なんだったかな。今の君はその能力はどこまであるのか……」
挑発するようにフィンが言うとポランは一歩後ずさる。
声は聞こえている。小さな虫型モンスターから随分と大きくなったものだと苦笑を覚える。しかし、一冒険者の肉体を乗っ取るとは思わなかった。直接見ても信じられない。
摩天楼（バベル）が建設されてから今まで地上に這い出たモンスターは居ない。全て多くの冒険者達が討伐してきたからだ。
神々の恩恵（ファルナ）を授かった眷族達を相手に勝ち残っ者は未だに居ない。けれども、目の前のモンスターは初の勝者かもしれない。
だからと言って祝福を与える気はフィンには無い。
「やり難いな。……ある意味、アイズ達が梃子摺（てこず）るのも理解できるというもの」
なにせ、か弱い冒険者を人質にしてるいようなものだから。
いくらフィンとて敵が目の前に居るのに仲間ごと殺すような冷酷さは無い。時には必要かもしれないと思うだけで。
「とりあえず、……彼女（ポラン）を叩き起こせるかどうかやってみようか」
もし、アイズ達が話していた脅威があれば容赦はしない。そうでなければ実力を確かめてみるのも悪くない。
なにより、神ヘスティアの眷族だ。主神が見ている前での殺戮は目覚めが悪くなる。

軽い足取りで迫るフィンに対し、ポランの構えた両手で頭の包帯を取ろうとした。

手は何重にも包帯とタオルが巻かれているので細かい作業は出来そうにない。それでも無理矢理な行動はフィンを充分に驚かせる。

左目は完全に白目をむいた状態なのにどうやって位置を把握しているのか。

それはきっと音だ、と予想する。

（聴覚が優れているのか、彼女の身体を掌握した結果なのか）

薄暗いダンジョンのモンスターは何をしでかしてくるのか分からないから恐ろしい。

槍を無造作に突き出すと迎撃してきた。その正確さは確かに驚きに値する。

肉体は人間（ヒューマン）のものなので強固さは無いけれど。

「……しかし、おかしい」

フィンは疑問に思う。

先程からギリギリまで近づけるのに密着までには至れない。

既に本気を出している。

静かな歩調で耳に頼るとしても捉えるのは簡単ではない筈だ。

（戦闘の学習能力は既に高いのか。しまったな。まだ序の口だと思ってた）

レベル6の第一級冒険者であるフィンの【ステイタス】をもってしても驚愕を覚える。

確かにアイズ達が警戒するのも納得する。しかし、だからといって互角とは思っていない。

低いレベル帯でも【ステイタス】によってはフィンを圧倒する者は何人かいる。そうでなければ【ランクアップ】が不可能になってしまう。

「てえい！」

槍で牽制しつつ速度を上げて接敵し、掛け声とともにがら空きになっていた腹部を思いきり殴りつけた。

それと同時に、しまった、とフィンは思った。

つい調子に乗って力を込めてしまった。そのせいで、拳に嫌な感触が届く。

肋骨や胸骨の砕ける様。口からは勢いのついた血が噴き出る。

うめき声が出なかったのが精神的に助かったと言える。しかし、普通であれば今ので充分致命傷となる。

ポランはまだレベル1の駆け出しだ。レベル6が本気で殴れば最悪死ぬ。

前面の攻撃に対して無敵のはずがあっさりと攻撃が通り、血を撒き散らしながら吹き飛んでいく。

これで終わりかと思うもののフィンは安心しない。

ポランは倒せてもモンスターにダメージがあった、という確証が無い。最悪、無意味に彼女を撲殺して終わりになるかもしれない。

それでは単なる殺人だ。

自分達の目的はあくまでモンスターの討伐だ。生意気な冒険者を殺す事ではない。

「ぎゃあぁぁぁ」

案の定、後方で見守っていたヘスティアが絶叫した。

眷族を素直に撲殺されて平気な神は余程豪胆な性格の持ち主だ。

少なくともヘスティアは優しい神様であるから、その悲しみや辛さは人並みに備わっている。

「ぶっ、【勇者(ブレイバー)】君っ！　いい、今、お腹を貫通しなかったかいっ！」

「……したようなしなかったような……。生きていたら回復は任せてください。今は戦闘中なので」

貫通はしなかったが、背骨を砕くところまではいったかもしれない。

そうなれば通常の冒険どころか日常生活もままならない。そんな状態にして平気だと思えるわけはないが、やり過ぎたことは素直に認める。

「アイズ、ベート。ここは僕に譲ってもらうけれど。済まないが下準備だけは整えてくれ」

「……分かった」

「了解だ」
「……ポランはいい子。……だから」
「善処する。今のは確かに……僕が悪かった」
誰かを心配するアイズの言葉だ。それを無下にする事などフィンには出来ない。
漸く人としての温かみを覚えたお姫様の頼みだ。二つ名に恥じないように戦わなければならないと肝に銘じる。
と、思ってはいるのだが――
どうにも勝手が分からない。
（何だかいいように遊ばれているような……。それともこれがモンスターの手なのか？）
攻撃。動作共に脅威とも思えない。けれどもやる気だけは一人前。
今も立ち上がろうと必死になっている。
出血量からみて身体の方はもう限界の筈だ。それとも攻撃する場所が違うのか、と疑問に思う。

†

槍を後方に投げ捨て、蹲るポランに近づく。
情報によれば彼女は魔法を覚えていない。実直な戦い方しかしない。だからといって油断はしないが、周りの目も一応気にしなければならない。
ほぼ一方的に痛めつけているから。
（行動不能にするにも。モンスターそのものが何処に居るのか……。どうすれば勝利なのか。……ほんと、誰か教えてほしいよ）
攻撃の意思があろうとポランの身体はもう限界だ。治療しなければ死んでしまう。
それでも腕だけは今も動かしている。
包帯を解き終わり、現れた顔は酷いものだった。
右目付近は血まみれ。大きく腫れ上がっているわけではないが、赤黒く染まった眼球の無い顔がそこにはあった。
フィンにはそう見えた。
酷い顔だなと思っていると流れ出ていた血が集まり、一つの塊を形

成していく。その速度はフィンが気が付くほんの一瞬の出来事だった。

本能で危険を悟り、一歩引く。追撃は無い。

（自己再生？　それとも何かの意図が？）

何にしても異常だ、と判断。しかし、槍を拾うべきか迷う。

相手はもう動く事すらままならない。いや、それは本当にそうなのか、と疑問を抱かせる。

未知の能力を隠し持っているのは確かだ。確証が無いのが恐ろしい。

（全てが手探り。確かに強敵だ）

だが、自身の親指は今も何も警告を発しない。

それともこのモンスターには適応されない未知の危機があるのか、と勘繰る。

その予想が果たして――

（んっ？　なんだ？　彼女の背中から煙？）

フィンの判断が正しかったのか、それとも間違っていたのか。それは誰にも分からない。しかし、確実に何かが起ころうとしていたことは誰の目にも明らかだった。

もし、この場にアイズや他の冒険者が居たとしても幼い少女を殺すことができる真っ当な冒険者は――きっと――居なかったに違いない。

「【勇者（ブレイバー）】君っ！　気を付けるんだ！　とても嫌な気配がする！」

凄惨な現場にもかかわらず。尚且つ眷族が血まみれで瀕死の重傷にもなっているのにヘスティアはフィンに注意を促す。

確かに嫌な気配がするのは理解できる。だが、感じる程度が神と冒険者とでは違うようだ。

「まさか、この期に及んでパワーアップかい？」

「……そんなんじゃ……。いや、そうかも。だけど……きっと何かしてくる。……神の恩恵（ファルナ）を食らっているようだからね」

「……なんだって？」

聞き捨てならない単語が聞こえたが、それを確かめるすべはない。

先程から訳の分からない状況が続いている。ここらで誰かに説明してもらいたいものだと胸の内で愚痴を言うフィン。

神の言葉を素直に受け取るのであれば顔の再生もその一環と見て間違いない。しかし、それで攻める材料になるかと言えば――

（恩恵を……ねえ。つまり……あのモンスターは【経験値（エクセリア）】を食べるって……、ええっ!?　そんな馬鹿な!?）

驚愕に彩られるフィンに見守っていたアイズ達のほか、リヴェリア達幹部も驚く。

普段は冷静沈着な【勇者（ブレイバー）】が激しく動揺したのだから。ただ事ではない。

何を知ったと言うのか、すぐに問い質（ただ）したい。

†

フィンは僅かな時の中で分析する。虫型モンスターの謎を。

単なる攻撃に優れたモンスターでは無い事は予想していたが能力まではどうしても分からなかった。これは仕方がない。暢気に分析するわけにはいかないものだから。

多くのモンスターは実際に戦って学んでいく。まさに目の前のモンスターのように。

だから、大半のモンスターにはまだまだ隠された部分があるのかもしれない。未だ未発見の情報――

（名付けるなら『経験値喰らい（エクセリア・イーター）』か。虫型といい、凶暴性といい、性質といい……。冒険者を狙うところからも、本命はそこなのか……）

自分で考えた事とはいえ、いやにピッタリと似合う名称にフィンも参った。何度も驚かされる事に。

性質は冒険者と同じく学習型。もしかすると【ランクアップ】も出来る可能性がある。信じたくはないが――

（ただ、それには己の【経験値（エクセリア）】を貯めなきゃいけない。食べるのであれば消費一辺倒だ。……確証は無いけれど、強化種に至るようでは厄介極まりない）

見つけ次第速やかに討伐しなければならない事は理解した。しかし、冒険者の身体に寄生されてしまうと打つ手が無くなる。この辺り

は今後の課題とする。
攻撃を受けたアイズは神の目から見ても異常は無いらしい。であれば本体の侵入さえ防げれば希望はあるということだ。
それを簡単にできないから困ってしまうのだが。
「……全く。うちのお姫様の友人に酷な事を……」
それは自分か、モンスターの事か。きっと両方だ、とフィンは苦笑する。
ポラン自体はきっと素直で優しいのは変わらない。憎むべきは――何なのか。
未知の発見に挑む事か。弱い事か。
そんなことじゃない筈だ、と強く言いたかった。出来ない理由は単純明快だ。
今の状況を見て誰が【勇者（ブレイバー）】に賛同してくれるというのだ。他ならない自分が一番理解している。
お前（勇者）のしている事はただの見せしめだ。
アイズの身代わりと言うのも些か（いささ）身勝手だが。
多くの団員を率いる立場の者としてはやり切れない役回りである。
丸い穴となっていた空洞に血だまりが収まる。それは不気味に蠢き一つの形を成した。
黒目に赤い瞳孔を持つ異質な眼球。その周りに黒い血管が無数に浮き出ていた。ただ、反対側の目は今も白目のまま。
（彼女の意識は未だ戻らず……。これだけのケガだ。ずっと気絶していてくれた方がいいかもしれない）
切り落とされて無くなった右耳から、鼻から、口から、右目から今も流れ出る血。殆ど動いているのが奇跡の様な有様だ。足元の血溜まりは少しずつ範囲を広げている。
内臓は壊滅状態。
それでも活動するのは――出来るのは理解不能である。
「どうすれば勝てるのかね、あれに」
残る手段は徹底的な粉砕だけだ。しかし、モンスターと違って魔石を持たない人間（ヒューマン）をいくら痛めつけても灰にはならない。

いや、そんなことをしていいのかさえ怪しい。
根源と思われる眼球を引き抜いて終われるなら、そうしている。しかし、黒い液体状で浸食している場合は頭部そのものを叩き潰さない限り動き続けそうだ。
それとも――もうポランは死んだものとして諦めるか。
「……冒険者である僕が諦める？」
それはもう冒険者ではない。ただの人殺しだ。
一つを諦めれば次もきっと諦めてしまう。冒険者はしぶとく足掻いて希望にすがるのが相応しい。
アイズやベート、ヒリュテ姉妹だってそう思うはずだ。

†

しかし、守るものが多くなった今、フィンは一人で希望を求めようとは思っていない。
もはや自分一人の冒険は出来ない。
（……全く、歳は取りたくないものだ）
見た目は人間（ヒューマン）の子供ほど。しかし、これでもアイズの何倍も長生きしている小人族（パルゥム）だ。
苦笑するフィンにガレスやリヴェリアが状況を察する。だが、アイズ達は手間取るフィンに驚いていた。
先程から攻めあぐねていたので。何かを警戒していると思っていた。
「酷な事を問おう。……アイズ。君はあの冒険者と共にまたダンジョンに行きたいか？」
ポランを見据えたままフィンは言った。
これは最後通牒だ。ヘスティアにすら文句は言わせない。そういう気持ちで尋ねた。
「無理に二人で……、とは考えてない。でも……」
「助けたいか？」
フィンの問いに小さく頷くアイズ。
共に研鑽を積む相手。そういう認識を持っていた。けれども、今は討伐すべき敵である。迷惑をかけたくない気持ちもある。

だからこそ、自分の【ファミリア】に迷惑がかかるくらいなら切り捨てる覚悟は――持たなければならないと思った。

「ベート。君はどうだい？」

「俺はそこまで思い入れはねえよ。敵はぶちのめす。それだけだ」

だが、多少は気にしている気持ちがあるのは認めるところだ。しかし、それでもやはり助けたい、というところまでには至らない。

寧ろ自分の手で倒したい気持ちが強い。

「なんだよ、それっ！」

大声を出すのはヘスティアだ。

当然とばかりにフィンは嘆息する。いや、そうでなくては困る。

主神だけは眷族を守り、信じ抜いてもらわなければ。だからこそ、安心した。

「ヴァレン何某君っ！　どうにかならないのかい！」

「……申し訳ないが……、アイズを責めるのはやめていただきたい。戦っているのは僕だ」

「わ、分かってるよ、そんなことは」

（……ヘスティア様もそろそろ限界だな。ああいう風に気持ちを発散してくれる方が僕には好ましいけれど……。それにしてもうちの主神は何をしているんだか。傍観を決め込むつもりなのかな）

それはそれで責任を押し付けられたようで腹立たしいが。

神の考えはよく分からない。それは今も昔も――

†

選択は成った。

大勢の為に一人が犠牲になる。それが最適解だ。

顔を前に向けたまま後退し、槍を拾う。

（出来る事なら……、ダンジョンで戦いたかった）

フィンが槍を構えるとポランは内股気味になって地面に座り込む。

両手は相変わらず猫人が客を招くような仕草。見ようによれば命乞いだ。それから空に顔を向ける。

天気は良好。雨の降る気配はない。

「ニャー！　【勇者】がか弱い女の子を惨殺してるニャ！」

広場に轟く悲鳴に似た叫びは『豊穣の女主人』の店員のものであった。

買い出しに来ていた猫人（キャットピープル）が現場の惨状に思わず声を上げた。それに対してフィンは反論しようとしたが言葉が出てこなかった。

どう言い繕っても見たままの感想で間違っていないのだから。

「ニャニャ。しかも、相手は……ポランニャ。どど、どういうことニャ!?」

「折角気持ちが固まりかけていたのに……。深い事情があるんだ。いくら君でも邪魔はしてくれないでほしいな」

普段の調子でフィンは言った。

慌てふためく様子など頂点を目指す【勇者（ブレイバー）】には似合わない。けれども、時と場所が今回は悪すぎた。

悪目立ちした今の自分はどこからどうみても【勇者（ブレイバー）】とは言えない。

重そうな買い物袋を持ったまま口を出してきた猫人（キャットピープル）はアーニャ・フローメルであった。

朝方は各店員たちは午後の開店の為に店の掃除や買い出しで走り回っている。店主のミア・グランドも同様に。

そして――

「へー、邪魔をするなってのかい？」

人ごみの奥から姿を見せるのは偉丈夫ミアその人だ。

冒険者も大概背が高い者が居るが、彼女の場合は存在感も相まって見た目以上に姿を大きく見せている。よって、迫力で自然と人の壁が割れていった。

買い物の時は意外と騒ぎにならない。

「確かに惨殺死体みたいな有様だね。おや、神様も居るのかい？　こりゃあ、本当に機会が悪かったとしか言いようがないねえ」

暢気そうな声ではあったが、ポランの姿を一瞥しただけで惨状は大体理解できた。だが、フィンほどの冒険者がどういうわけで少女に武器を向けるのか。

噂自体は既に耳に入っている。それでも納得は出来ない。いや、正

直な気持ちとしては納得したくなかった。
（なんだいこの有様は。これじゃあ……、あの子を殺さない限り何も終われないじゃないか。……【勇者（ブレイバー）】も損な役回りでご苦労な事だよ。っていうかアタシでも場を治める自信が無いけど）
助けに行こうにも事情を理解してしまったので行くに行けない。それはミアであってもそう思うほど。
これだけの騒ぎにもかかわらず肝心のギルド職員の姿が見当たらない。おそらくフィンに責任を押し付ける算段では、と。
大手【ファミリア】は何かとギルドの手足として動かされて気の毒だなと思った。

†

ミアはアーニャに荷物の運搬といくつかの言付を託す。
そのあと戦闘が始まらない広場に乗り込んでいく。本来なら邪魔するな、と言われてもおかしくないが彼女を止められる者は【ロキ・ファミリア】の幹部を除けば【フレイア・ファミリア】しか居ない。
「この喧嘩、アタシが買おうじゃないか」
「ははは。そうきたか。……だけど、そんなことがまかり通るとでも？」
武器こそ構えなかったがフィンとて引き下がるわけにはいかない。尋常ならざるモンスターを目の前にして見逃すことは出来ないし、してはならないことだから。
単なる喧嘩で片付ける事も同様に。
だが――
（まさか、そんな手で来る気かい？　ここまで頑張った僕の面目が丸潰れになるんだけど）
苦笑しつつフィンが想像するミアの取りそうな一手――予想ではあるけれど――は現状をひっくり返すだけの力がある。そう断言できるのは手段に覚えがあるからだ。しかし、正しかろうともそれは暴論である。周りが認めるだろうか。
いや、周りではない。件（くだん）の組織が見て見ぬふりをするとも思えない。

「はっきり言ってやろうか？」
「……やめてくれ、ミア。それ以上は僕の評判がガタ落ちだ。それに……、お姫様（アイズ）の期待を背負っている」
（いくら道化を演じろと……、と続けることになるに決まっている。……ロキ、助けてくれないか。少しは神の威光を発揮してくれ）
いつになく弱気のフィン。ミアが相手だから、ではない。
状況をよく理解したからこその弱気だ。
それからポランはケガが酷い為か、攻めてこなかった。ただ、ミアに顔を向けて大人しくしているのが不思議に思えた。
戦闘は何故か止まっている。見物人達も固唾をのんで見守っていたのだが、一向に進展しない事に疑問を感じている。
それからしばらくして先ほど立ち去ったアーニャが大荷物を携えて戻ってきた。
所謂（いわゆる）『猫車』と呼ばれる運搬用の一輪車にいくつもの革袋を詰め込んで。
「か、かき集めてきたニャ」
「約束通り報酬だ。残りはギルドの口封じ……まあ、そんなもんだ。とにかく、こんな茶番は終わりにしなきゃならない。文句は受け付けないよ」
「……金で買収かい？　ミアらしくない。だけど、彼女はそれで救われるわけじゃないよ。どうする気だい？」
「どうしようかねえ。こんなに珍しい人種はうちで面倒を見た方がいいんじゃないか。それともなにかい、他に仲間でも居るのかい？」
ミアがどうしてポランを気に入ったのかフィンには窺い知れない。だが、問題解決は一人ではできない事を知っている。
正直なところ、買収に応じる気は無い。それとまだモンスターの危険性を把握していない。
一人の冒険者がフィンの手ではなくモンスターによって殺されようとしている。それを金で見逃すことが出来ると思うのか、と。

†

結果論から言えばフィンの手でポランの人生は終わる。であれば

ミアの提案は僥倖である。
自分の名声にも傷がつかない。しかし、納得は出来ない。
それに――主神であるヘスティアを無視していい問題とも思えなかった。
「あ、えと……。ミア母ちゃん。……本当に使っていいのかニャ？」
「早くおし。のんびりしてたら死んじまうよ。……全く手加減ってものが出来ないのかね」
アーニャは事前に購入してきた『万能薬（エリクサー）』を数本、取り出してポランに使おうとした。
その時、突き出していた手をアーニャに向けるも疲労困憊なのか、座ったまま動かなかった。
乗っ取った冒険者の身体が自由に動かない為だと思われる。
黒い瞳だけが不気味にアーニャを見据えるものの、殺気はどんどん消えていく。
飲ませようとすると襲い掛かってくるかもしれないので、高い位置から万能薬（エリクサー）を振りかける。
じゅう、と何かが焼けるような音が鳴ったが、すぐに治まりビチャビチャという液体の音だけになった。
重傷者すら短時間で癒す万能薬（エリクサー）といえど一本だけでは完治には至らない。だから、何本も使う必要がある。
二本目を使おうとした時、ポランは二本の腕だけでアーニャの腕に飛び掛かる。
「ニャ!?　あ、慌てるニャ。ちゃんと使うから。お、おお、落ち着くニャ」
「身体が人間（ヒューマン）のままなら大丈夫だろうさ。何かあれば逃げるんだよ」
不自由な手ではアイテムを奪えないと判断したのか、口を開けて飲ませろとアピールする。その光景に苦笑しながらアーニャは従うことにした。
学習するモンスターを遠くから眺めていたアイズも心配になってきた。
回復方法を知ったモンスターが次にすることは何なのか、を。当

然、そのアイテムを奪うのではないか。
二本目を飲み終えた後、三本目を狙うと思われたが動きは無かった。ただ、黙ってアーニャとミアを見比べる。その後、軽く血を吐いて転げまわったが、すぐに治まった。
（よ、よく分からニャいけど……。これでいいニャか？　……いいのかニャ？　めっちゃ血尿を吹き出しているけど……）
内臓を潰された事による弊害ではあるが、勢い良く噴き出る様は驚きに値する。
大衆の面前での痴態。しかしそれは激しい攻撃を受けた為によるもの。それを我慢しろ、というのは酷である。
アイズとて思わず顔を背けたくなる。

†

数本の万能薬（エリクサー）によって瞬く間に回復するポラン型のモンスター。
痴態が終わった後、ゆっくりと立ち上がる。
黒目は未だに健在。左目は未だ白い。もう意識が戻らないかもしれないと思う者も少なくない。
ポランは両手を前に突き出したまま倒れ込む。誰もが肉体の限界を迎えたと思った。けれどもそうではなかった。
両手を地面に一度だけ打ち付けて体勢を整える。あたかも四足獣のように。
そして、駆け出す。慣性の法則に身を任せるように両手を後ろに靡かせながら――
向かう先は【勇者（ブレイバー）】フィン・ディムナ。
思わぬ事態に槍を構え直すフィン。アイズも手に力を籠めるも痛みで顔を顰めた。
「君はまだ戦う意思を持っているのか。大したものだ。……ならば、その挑戦に応じよう」
地面を砕くような走法ではないがしっかりとした足取りはアーニャをして驚かせるものであった。
いや、違うと思ったのはアイズだ。
ここに来てモンスターの目的が理解できた。

（フィンが武器を構えているから……。違う……。あのモンスターは攻撃の意思を持つ者に反応しているんだ。それが強ければ強いほど……）

ドレッドノートは冒険者の強敵となりうるに相応しい特性を持っている。

おそらく、この予想は正しい、と。

であれば――武器を持たぬ者に襲い掛からない。その仮説は証明されていないがアーニャやミアに対する反応に殺気が無かったのは不思議と納得できた。

神が恐れるのはモンスターであるという特性ゆえ。敵愾心が無くても警戒されるのは仕方がない。

しかし、当初見せた残酷性は何なのか。それを考えている余裕は今は無いけれど。

（ずっと僕の親指（警戒）に反応が無い。それでも向かってくるのだから迎撃しなきゃいけない。……ほんと、損な役回りだ）

体制を低くし、ポランに備えるフィン。しかし、何処を責めればいいのか、未だに分からない。

この堂々巡りのような戦闘はもう二度とやりたくない、と。

「フィン。そのモンスターは武器に反応する。だから、捨てて」

「なに!?」

アイズからの言葉に身体が硬直するも、何とか脇に槍を放ってみた。するとポランは捨てられた槍に向かって進行を変えようとした。しかし、途中で強引に身体を引き戻してフィンに向かう。

フィンは捨てるのが遅かったと後悔した。そしてすぐに拳で迎撃する用意を整える。

（……なるほど。警戒していたのは僕らじゃなくて武器……。攻撃性に反応するのか……。全てが逆だったというわけか）

そして、漸（ようや）くにして親指から警告が届いた。

今度は紛れもない危険信号だ。

†

ダンジョンにおいてモンスターと対峙する時、武器を捨てる者は居

ない。魔法詠唱者でもない限り。
その見方でいえばドレッドノートから逃走するのは意外と難しい。武器を持たずにダンジョンを走破するのは自殺行為に等しいから。どうしても武器は必要だ。
（特に攻撃性を持って武器を構えたら、後は自動的に向かってくる）
学習能力が高いなら、持っている相手も認識してしまえば逃走も難しくなる。
それに冒険者は基本的に現れるモンスターを皆殺しにする。それが今回、逆の立場に立たされただけだ。文句を言う筋合いは無い。
それはそうなのだが――
いや、それでいい。分かりやすい構図の方が気が楽だ、そうフィンは苦笑しながら迫りくるポランを見据えた。
「んっ？」
最初こそ勢いがあったのだが、途中から腰砕けになり地面に倒れ込む。
度重なるケガのせいで体力が限界を迎えた。主にポラン側が。
いくら万能薬（エリクサー）を使ったとはいえ無限に行動できるわけがない。精神的な疲労などは蓄積したままだ。
まして、強烈な攻撃を受け過ぎた。すぐに動ける筈がそもそもなかった。
モンスター側が強靭な存在だとしても身体はレベル1のまま。
（……挑発が過ぎたか。だけど、このまま野放しにもできない。その身体は若き冒険者のものだ。返してもらわないと。……ん。また背中から黒い煙が）
ポランの背中はどうなっているのか、フィンもそうだがヘスティアも心配だった。
恩恵が奪われているのは感覚で察している。それがどの程度なのか知りたくはないが、かなり、としか分からない。
今まで努力して集めた【経験値（エクセリア）】が無駄に消費されている。それがとても悔しくて悲しかった。
（悲しい生き物だ。敵がいる限り向かわなければならないなんて。だ

けど、そのまま見逃すことも出来ない。……やはり右目を狙うしかないのか）

一度は手放した槍を拾い、構えるフィン。

回復したとはいえ体力的にも限界を迎えつつあるポラン。

双方の戦いの決着は簡単には終わらない。これは勝負ではなくモンスター討伐だ。そうであるならば片方の死は確定事項である。

（ミアも邪魔をしないようだし。やるだけ頑張るけれど……。神へスティアにもお姫様にも恨まれたくないな）

深くため息をつく。そして、意識を敵に向ける。

もう引き延ばしは無しだ、と決意する。

（さようなら、若き冒険者よ。未知なるモンスターよ）

最初の一歩目で地面を砕き、次の動きで全ては終わる。それに反応するようにモンスター側が急激に体勢を変え、迎撃に移る。

自然な仕草で起き上がり、両手は祈りのポーズに似たものとなる。

何度も見せていたが、相手の首を狩ろうとする蟷螂（マンティス）に似ているそれ動きを黙ってやらせるわけにはいかない。

狙いは黒い瞳ただ一点。渾身の一撃を繰り出す。もはや誰にも止められない。

†

フィンの攻撃が始まり、槍は猛烈な速度を伴ってポランに向かう。

普通であれば心臓を狙うものだが、今回は顔だ。魔石の存在が不明なモンスターといえど一番目立つ部分を潰されれば一時（いっとき）くらいは止まる筈。

それで駄目ならミアに託す。問題は攻撃が通用しなかった場合だが――

それはこの際考えない事にする。

はっきり言って手の打ちようがない。

無心に繰り出した槍は狙い違（たが）わず。しかし、その時、敵は逃げるでもなく攻撃に視点を合わせていた。

そして――

目覚（テンペスト）めよ。

聞きなれた魔法の詠唱がフィンの耳に届いた。
たったそれだけで全身の筋肉が戸惑いの為に硬直する。
ありえない、と頭では分かっている。しかし、それはあまりにも聞きなれた言葉だ。
（な、に……？　それは……いや……喋った、のか？）
フィンとて歴戦の冒険者。レベル６である。そんな彼でも油断する事はある。
慣れ親しんだ戦闘だからこそ不慣れな現象に身体が驚いてしまう。
それはフィンだけではない。誰にとっても起こりうる。
全くの未知の攻撃に強い冒険者など存在しないように。
フィンは確かに見た。
見慣れ過ぎた冒険者の姿を。目の前に幻視した。してしまった。
存在するはずのない、剣を構える【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインが今まさに魔法を唱えようとしているところを。
普段であれば仲間と敵を見間違える筈が無い。しかし、それがありえてしまった。
刹那の一瞬の事ではあるが、そこに確かに彼女（アイズ）が居た。
油断は一瞬で充分だった。
噛み合わない幻が別々の行動を取り、フィンに襲い掛かってくる。
どちらを迎撃すればいいのか、既に動いていたフィンに避ける手立ては本能のみ。
警戒を感じさせないモンスターの攻撃だ。どうやって避けるというのか。
魔法を唱えたアイズであれば体勢が低くなる。しかし、ポランは真逆。
飛び上がるように腰を使って空中で回転する。その遠心力を利用してフィンのこめかみに強烈な回し蹴りを食らわせる。
「ぶっ!?」
首の骨が軋んだ。しかし、折れるほどではない。
自身の『耐久』の高さに救われた。しかし、それだけで体勢を崩され、渾身の一撃は不発に終わった。

地面に無様に転がる事は無かったものの攻撃を防がれたことにフィンはもちろん、周りの見物人も驚いていた。

真っ向勝負において【勇者（ブレイバー）】が打ち負けたのだ。たった一回だけとはいえ、負けは負け。

それもレベル1の駆け出しによって、だ。

態勢を整えるために一歩後退するフィン。無理に攻め込むのを諦めた。

周りからは更に驚かれた。戦略家のフィンを諦めさせた、と。

†

追撃は無かった。ただ、一人の女の子が直立不動のまま立ち尽くしているだけ。

まるで勝者のように。

「……それはアイズの……。……って、しまった。欺瞞（ブラフ）か……」

（普段からアイズと一緒だから僕も油断してたのかな。……しかし、まさか魔法まで学んでいたなんて……）

魔法と言っても言葉だけ。効果は全く発揮していない。

仲間の魔法を疑うことは少ない。まして、一番頼りにしているものだ。フィンとて手許が狂っても仕方がない、と思うほど。

しかし、それ以前に――

モンスターが喋った。それは本当にありうるのか。

途中からポランが意識を取り戻して喋った、の間違いではないかと。

改めて立ち尽くすポランを見ても左目は白いまま。いや、その状態で覚醒しているのか、と。

（動きは無い。やはり意識はまだ……）

そう思った次の瞬間、ポランは自身の腕を動かした。攻撃ではなく意味のなさそうな適当なもの。

前方に繰り出すも、すぐに諦めたように戻して、だらりと下げる。

身体の把握は済んだようだが、本調子ではないと理解したのか、口をきつく結んだまま動かない。

フィンが試しに槍を構えると一度は気が付いて顔を向ける。だが、

すぐに興味を失ったように横を向く。
（なんだ、このモンスター……。何か言いたいことでもあるのか。まさか、言語や発声能力まで学習したというのか）
フィンの知る限り、言語を操るモンスターに出くわしたことはない。
しかし、確かに言葉を操ったのは認めるほかない。とすれば想定以上の高い知能を有するモンスターという事になる。
このままいけば冒険者との区別が出来なくなるおそれもある。
「……フィン。少しいい？」
今まで見物していたアイズが近づいてくる。もちろん、ポランを警戒しながら。
当の彼女はアイズに顔を向けているものの襲い掛かってくる気配は無い。それはおそらく、剣（デスペレート）を鞘に納めているからだ。
（……ドレッドノート。まだ色々と謎がありそうだ）
殺戮を好むと思っていたが、そうではない。そう思っていたのは自分達側だが――
考察は後にしてアイズを迎える。
「手痛い一撃をもらった僕にお小言かい？」
「そうじゃないけど……。ごめんなさい。……ポランに技を教えたせいで……」
アイズの真似をしたわけではなく、ポランの記憶を読んだのか。それとも――身体の記憶の方か、と。
言葉の通じないモンスター、だと思っていたが今は自分達の言葉を理解し始めている。それを暢気に眺めているのは危険ではないか、とは思った。しかし、戦闘を終えた今は不思議とどうでもいいと思えていて戦う気が起きない。
「それはいいけど。このままだとあのモンスターは君の友人を掌握してしまう。そうなればもう彼女は戻ってこない」
「……そうかもしれない。だから……。あのモンスターは私が倒す。……これ以上はフィンの迷惑にしかならない」
確かにアイズの言うとおりだった。このまま戦闘を続けていると

どんどん評判が落ちてしまう。
レベル6が下級冒険者を苛めている。モンスター退治に見えるのは現場を知る者だけだ。
そして、大事なことは――これはギルドの冒険者依頼（クエスト）ではない。ただの私闘という点だ。
既にミアがギルドを買収しに店員を向かわせているし、これ以上長引かせる意味はもう無くなったも同然だ。
「しかし、どうするつもりだい？　あれは殺す以外の選択が取れない」
「……その必要は無いかもしれない。……なんとなくだけど」
根拠のない言葉。それは冒険者としての勘か。しかし、時にはそれが有効に働くことがある。
特にアイズは鋭い感覚の持ち主だ。

†

彼女を殺す以外に方法が見当たらないフィンとしてはアイズに譲るのが最適な選択かもしれない。しかし、それでもボランの身体が気になる。
モンスターに乗っ取られた彼女の今後とかを。
リヴェリア達に顔を向けると黙って頷いていた。それはアイズを支持するという意味のようだ。であれば多数決でフィンは引き下がるを得ない事になる。
「……分かった。……ギルドからも正式な依頼（クエスト）を受けたわけではない。でも、どうする気だい？　何があっても応援したい気持ちはあるけれど……」
「戦うことしか、私には出来ない。私もボランも共に手負い。それに……モンスターもその事を理解していると思う。周りへの被害は多分……無い」
（だから、その根拠が何なのか僕は知りたいんだけどね。感覚に頼る冒険者は……、どうして大雑把なんだろう。……僕が細かすぎるのかい？）
フィンはボランに顔を向ける。
敵意を霧散してみればなるほど、と。

もうモンスターは別の標的に顔を向け始めた。つまり新たな敵に。
どちらがモンスターなんだか、と呆れてしまうが理解してしまえば何のことは無い。
（武器を持っているから襲ってくると思ってたけど、それは違った）
ドレッドノートは武器ではなく『敵意』に反応する。冒険者は武器を持ってモンスターと相対する場合、少なからず敵意を持つ。
鍛錬であれば何のことは無いが、ダンジョン内ではそうはいかない。
周りは敵だ。モンスターは殺すべき敵である。
（『恐れ知らず（ドレッドノート）』……。レベル6の僕を相手に一歩も引かない。低階層で生まれたにしては随分と生意気に育ったものだ。……いや、それこそが『勇敢なる者（ドレッドノート）』なのかな）
フィンは引き下がり、アイズは剣を構える。
今のドレッドノートには武器が無い。自慢の前足は人間（ヒューマン）の腕――前面に対する無敵装甲も無い。あるのは前に進む勇気だけ。
（構えない？　フィンとの戦いで疲れた？）
疲れたというよりは憑衣先の肉体が限界だと判断したのかもしれない。いくら勇敢なモンスターとて自ら死ぬと分かってて突っ込んでくるものか。
いや、モンスターであるば尚の事だ。
（……ポランが死ぬから来れない？　何故？　なんでそう思うの。モンスターなのに）
アイズは髪の毛が逆立つほどに怒りを覚える。
モンスターのクセに冒険者を気遣うな、と。
しかし、その怒りも武器を持つ手の痛みによって霧散する。今の【剣姫】はただ武器を持っている事しか出来ない小娘である。
戦えない【剣姫】だ。そして、それはお互い様でもある。

†

膠着状態が長く続くと思いきや、現場に大声が木霊する。この主はミア・グランド。
喧嘩は終わりだと高らかに宣言した。

「この喧嘩はアタシが買ったんだ。文句は言わせないよ」
フィンは納得したくなかったが敵側が動けないし、ポランをどうすることも出来ない。
アイズも今は満足に戦えない。
（モンスターを野放しにするのは不本意だけど、どの道眷族殺しを見世物にしてはいけない。なんとも面倒な事をしてくれたよ、ドレッドノートは）
「再戦を希望するならアタシが叶えてやるよ、【剣姫】。今日のところは帰んな」
「……うん。あっ……」
ミアの言葉の後でポランを見ると黒目だった部分がいつの間にか白くなっていた。
立ったまま気を失っているかのように静かに佇む。
既に満身創痍だった彼女からは何の気配も感じない。
（抉り取られた筈の目があるってことは……。力尽きただけ？　いったい何を目的としてたの？）
動かないポランを改めて見ると全身血まみれ。足元は今も流れ出る血によってどす黒い水たまりが出来つつあった。そして――しばしの時間が流れた。
修復に向かうはずだった内臓がフィンとの戦いによって痛んだのではないかと診察に当たった治療院の者が言った。
とにかく、騒動は収まり、平穏が訪れる――筈だった。
現場の喧騒は【ロキ・ファミリア】が治め、ギルドは対応を迫られる。そして、ポランは摩天楼の治療院へ送られた。
神ヘスティアは改めてポランのお見舞いに向かうのだが、予想通りというか念のために調べた眷族の【ステイタス】は減っていた。それも百単位で。
通常、冒険者の【経験値】によって増えた【ステイタス】の数値は減らない。上がる一方なのが通説となっている。
事実を突きつけられたヘスティアはただただ悲しみに暮れた。何が悔しいって、素直で優しい眷族の努力が良く分からないモンスター

のせいで簡単に無にされた事だ。
　気丈な精神によって『仕方ないな、これも運命だ』なんて言える筈が無い。
　ヘスティアとて人並みの感情を持っている。
「……ヘスティア様……、大丈夫、ですか？」
「うるさい。うるさい……。君に心配されたって……僕は何にも嬉しくもなんともないやい」
　だいたいよその【ファミリア】じゃないか、と言葉には出さなかったが嫉妬心によって思った事は事実だ。もちろん、その後でみっともない自分に後悔を覚える事になる。
　もし、言葉に出していればもっと後悔していた。けれども言おうが言うまいが惨めなのは変わらない。
　折角眷族（ボラン）を心配して見舞いに来てくれたアイズに対し、戦いを収めてくれてありがとうと言えなかった。
　それが心残りではあったが、眷族の事で頭の中は混乱していた。
「……君は自分の心配をしなよ。冒険者はモンスターを倒すのが仕事なんだろ？　この子だって同じようなケガをしたのにダンジョン探索の事ばかり考えてたんだぜ。君とまたパーティを組んでもいいように。ははっ、すっかり仲間の一員気どりだ。……一人で探索しようとせず、仲間との連携を考える。……たぶん、新しい団員が来てもいいようにって意味なんだ」
　顔は眠っているポランに向けられたまま。愚痴るように。誇るようにヘスティアは言い続けた。
　見舞いに来ているアイズは黙って聞き届ける。
　大声で説教を受けてもいい覚悟で来たのに、予想外の言葉が続く。いや、実際、ヘスティアはアイズの事が嫌いなんだと思う。
　アイズというか【ロキ・ファミリア】全体が。
　周りを取り囲んで確実な死を賜（たまわ）ろうとしたから。そんな現場を見る事になってしまったから。唯一の眷族を大手が潰そうとしたから。
「ボクは悔しいんだ」
「……はい」

涙ながらに吐露されるヘスティアの気持ち。
捉えどころのない神の中にも色んな神種（じんしゅ）が居るのだとアイズは感じた。
神ヘスティアは今まで出会った神達の中でも自分達に程近い存在である、と。
「せっかくだ。戦いに詳しくないボクに教えておくれよ」
「はい？　……分かる範囲であれば」
「ドレッドノートとかいうモンスター……。そいつを倒したら……ポランは……どうなると思う？」
どうなるのか。たぶん、というか十中八九ポランは死ぬ。それを言葉に出そうとしたが出てこなかった。
どうしてか言えなかった。言ってもいい気がしたのに。
（……ポランは死ぬ。モンスターだけ死ぬわけじゃないって……私は……）
「……」
モンスターを倒すにはポランの頭を吹き飛ばす必要がある。いや、もう全員に体液が浸透していると思うから、確実に心臓も潰さなければならない。
魔石の位置が特定できない。そもそも無いのかもしれないし、黒い体液そのものかもしれない。
そうなればポランを救う方法は限られてくる。
「……でも、たぶん大丈夫だと、思います」
「どういう意味だい？」
「上手く、説明できません。でも、そうなるには……、時間がたくさんほしいです」
すぐに解決することは出来ない。性急であれば、どうしても相手を殺さなければならなくなってしまうから。しかし、アイズの予感によれば時間をかければ解決への糸口が見える、気がしていた。
おそらくドレッドノートというモンスターは――

#1―17　シャクティ・ヴァルマ

【ヘスティア・ファミリア】唯一の団員が【ロキ・ファミリア】の幹部達と争った、という噂は瞬く間に広まった。それ自体は当事者であるフィン・ディムナ及び説明を受けた冒険者ギルドの職員たちにも止めることは出来なかった。

フィンは団員達に箝口令こそ敷かなかったものの自身の名声が下がらなかった事に安心した。

みみっちいと言われるかもしれないが『小人族（パルゥム）』の再興を目指す彼にとっては死活問題であった。

本拠（ホーム）の執務室にて難しい顔をしつつ、意識不明重体の団員ポラン・ブーニディッカの容態を逐一報告するよう下位の団員達に命令する。

報復する意図は無く、痛めつけたお詫びが含まれている。それゆえに神ヘスティアが来ても快く出迎えるように通達していた。ただ、神ロキは嫌な顔をしていた。

姿を見せなかったロキとて遊んでいた訳では無い事は承知している。

「……対処に困るモンスターというのは僕もいくらか知っているんだけどね」

「お前でなくとも対処に苦慮していただろう」

長い緑色の髪の毛の手入れをしていた王族（ハイエルフ）のリヴェリア・リヨス・アールヴは言った。

直接戦いはしなかったがフィンと同様に戸惑っている自信があった。対する――どっしりと構えている――ドワーフのガレス・ランドロックであれば気にせず捕まえて締め落としにかかっている。

彼の様な力――戦法ともいうが――が他の二人に無いから梃子摺（てこず）った。

仮に力があったとしても見栄えが悪い。フィンやリヴェリアが野蛮な戦法を取るのは他人の目が無いダンジョン内でなければならない。

有名な冒険者程素行を気にしなければならなくなる。これは宿命のようなものだ。

「倒されはしないけど……。評判が落ちるのは好ましくない。あくまで僕は正当な理由を背負って戦わなければならない」

「うむ。その意見には賛成だ」

「なんとも七面倒くさい事態になったのう」

もし、逆の立場であれば同じことが出来たのか。そう問われればフィン達は躊躇いは見せないと答える。

今回は大事なお姫様（アイズ）の要望で手を抜いたようなものだ。そうでなければ遠慮などするものか、と。

「肝心のお姫様はお見舞いか」

「数でねじ伏せるなら容易いと思うが……。私も未来ある若者を手にかけるのは……」

「老兵なら良かったんじゃが。アイズと同い年の駆け出しというのが、な」

三人共に良いお歳の冒険者である。

その後、経過報告に何人か訪れるも異常は今のところ無し。

†

ポランは意識を回復しないまま数日が経過した。その間、モンスターが勝手に起き出すことはなかった。

日に日に【ステイタス】の数値が下がるのでは、と危惧したものの変化は止まったまま。

背中から煙が出た時が危険信号だと予想する。

「よー、ドチビ。生きてるかー」

【ロキ・ファミリア】の主神ロキが狼人（ウェアウルフ）の青年ベート・ローガと女戦士（アマゾネス）姉妹の姉ティオネ・ヒリュテの二人を伴って摩天楼（バベル）の中にある治療院に訪れた。

「……冷やかしに来たのか？　今、ボクは君と言い争っている元気がなくてねー。賠償とかは勘弁してほしいんだけど……」

「……うわっ、ほんま黒い煙出とる。……賠償？　払えんクセになに言うとるん。ちゃうちゃう。うちも件（くだん）のモンスターを見に来ただけ

や。ほら、敵対行動に出んかったらええんやろ？」
朱色の髪に糸目の女神ロキが何もしなくともベート達の警戒心で飛び起きる可能性はある。
一応、警戒しつつ近づかないように事前に伝えてはいる。
「その前に……。ヘスティア様」
「なんだい？」
「その子……。小人族（パルゥム）ではないですよね？」
ティオネの質問に首を傾げるヘスティア。
そう言われるとポランの背格好は小人族（パルゥム）と言われてもおかしくない。だが、本人も述べているように人間（ヒューマン）で十二歳の少女だ。あと半年も経てば十三歳になる。
【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインより少しだけ年下だ。
「人間（ヒューマン）だと聞いているよ」
そう言うとティオネは安心したように胸を撫でおろす。
仮に嘘だったとしたらヘスティアが見抜けない筈がない。
ティオネからすれば団長のフィンと死闘を繰り広げた事で多少の敵愾心が芽生えた。愛する団長がレベル1の駆け出しに負けるわけが無い。しかし――油断が生んだとはいえ――一撃を受けたので腹が立ったことは間違いない。
「なんや。フィンが駆け出しにお熱になるわけないやろ」
「万が一ということがありますっ！」
フィンとて男性である。伴侶を求める事はおかしなことではない。
大声を出したティオネに口に人差し指を当てて静かにするようヘスティアは小声で言った。

†

ティオネ達の騒動も眠っているポランは知ることも出来ない。
意識がほぼ無の状態だったポランが目を覚ましたのは更に二週間ほど経ってから。
アイズは不自由な身体のまま鍛錬に勤（いそ）しみ、合間にお見舞いに来る。遠征は今回は辞退した。
ダンジョン探索の準備よりもポランを優先させた。それは友を救

う為か、それとも人智を超えるモンスターを倒したいがためか。
目が覚めたとはいえ、飲食を殆どを摂れなかった彼女の身体は十二歳の少女というよりは骸骨モンスターのようにガリガリに痩せていた。
神ヘスティアは変化を見てきたのでそれほど驚きは無かったが、ポラン当人は自分の腕の細さに驚いた。
声はまだ出せないし、身体は痛いし、頭痛は目覚めと共に強くなり、起きているのが辛かった。
「……」
痛みと共に何もかもを失ったような気がして、涙が零れる。
常日頃から堅実で健康的な冒険を心がけてきたポランにとって今の自分の状態は到底容認できるものではない。
ヘスティアすらどうすることもできない事態だった。過去形で伝えたところで気休めにしかならないけれど。
「よく……無事で戻ってきてくれたね。ボクはそけだけで嬉しいよ」
返事ができなくなった眷族。
前のような声をいつか聞きたい、などと言うのはやめる。とにかく、自由に歩けるまでは応援しようと――
彼女の目覚めからまず基本的な食事療法とアイズを交えた身体の鍛錬が始まった。
剣を握れないポランに戦い方を教えるのではなく、普通の日常で行う様々な事柄。本当にごく普通の日常生活を送らせるためのものを。
他の団員にも協力を要請。これにはフィン達幹部も了承した。
『青の薬舗』から見舞いに来た犬人の女性店員ナァーザ・エリスイスも回復薬を持ち寄って体調の経過を図る。
様々な助力を得るポランをはた目から見ていたヘスティアは羨ましいと思いつつ、いつの間にかたくさんの人たちに支えられている事に気づく。
(……ポランはたった一人で冒険をしていたんじゃないんだね)
誰にも助けを求めず、一人で成り上がろうと考える冒険者が何処かには居る筈だ。そちらの方が勇猛果敢で強そうな印象を受ける。け

れども実際はそんなことはありえない。
休める場所もアイテムも無く、武器は全て手製。助言も無くダンジョンを踏破するような、正しく英雄譚に出てきそうな化け物冒険者はあくまで理想像。
でも、どこかには居そう、と思わせるから多くの冒険者は無謀な道を進んでしまい命を落とす。
（……ボクはこんな子を切り捨てようと思ったのか。例え本意じゃなくとも、最後まで信じてあげなきゃ……。それなのに……）
どうして胸が苦しいんだ、と。
幸せそうな風景を見ていると尚更強く感じる悲痛な思い。
いや、これはきっと眷族（ポラン）の気持ちが伝わっているからだ、なんて――都合のいい言い訳をするつもりか、と自分を叱咤する。
これは紛れもない――
ヘスティア自身が感じている心の痛みだ。
神が定命の人間（ヒューマン）に対してそんな思いを抱くことは――本来ならば無い。
確かに地上の命全てに対して愛おしさを感じる事は間違っていない。けれども、特定の人物に対しての独占欲などというものは幻想であり、娯楽の一部だ。
ロキもフレイヤもタケミカヅチもミアハも。
神は全てに対して平等に愛を振りまく存在だ。
（……弱音を吐くなんてボクらしくないかもね。……ああ、そうだ。アルテミスは今頃どうしているだろうか。オラリオの外で活動しているんだったか？　今のこんなボクを見たら……『何を言っておる、この軟弱神（もの）っ』って怒鳴られそうだ）
笑った顔をついぞ見たことが無いくらい生真面目な処女神の顔が浮かんだ。
透き通るような繊細さで夜空の輝きのような蒼くて長い髪。神なのに滅法強い力を持つ猛々しい女神。
眷族なんか要らないんじゃないか、という噂が届いたほど。
今ほど彼女に会いたいと思った事は無い。

†

見守ってばかりいるとお腹が空くものだ。ましてヘスティアは働き手を失っている。黙っていると食費だけで貯蓄が減る続ける。

やむを得ない事情により見舞いはナァーザやアイズに任せる事にして『あるばいと』に向かうことにした主神ヘスティア。

いくら餓死はしないとしても眷族が気にしてしまう。今のポランには心の負担も背負わせられない。

一念発起して働きに出かける。

合間に休憩を挟むことは忘れずに。

そんな生活を何日か続けているとアイズが朝方ジャガ丸くんを買いに来た。

「……君はボクの店のお得様になりたいのかい？　他にも店はあるだろうに」

ジャガ丸くんを販売している露店は無数にある。その上でアイズとの遭遇は滅多にない筈なのだが、ヘスティアの知る限り彼女の来店頻度はかなり高かった。

確かに、ジャガ丸くんは名物である。独自に作る事も可能で一部の酒場にレシピも提供している程。

「……ギルドに向かう通り道にあるのがこの店だから」

「ギルドは八本の大通りの中心地の筈なんだけどね。それともロキの本拠（ホーム）の位置関係がたまたまだったってことか。……ちっ」

舌打ちしつつも気に入らないからといって客を追い帰したりはしない。

アイズが好む味は抹茶クリーム味。これしか食べないわけではなく、一通りは制覇している。

「そういえば……。そのケガした手は元に戻るんだろうね？　ボクはあまり詳しくないんだけど……」

「……大丈夫です。しっかり助言は聞いていますから」

今のアイズは特製の皮手袋を着用し、物を持っている。とても指が欠損しているとは思えない。

見舞いがてら日常生活を送るための手法を色々と相談して作って

もらっているとか。
　当然のことのようにポランにも皮手袋の事は打診していた。
「……そういえば、ずっと気になっていたことがあります」
「なんだい？　ボクに答えられる事であればいいんだけど……」
「……ん。どうして、ポランには『君付け』じゃないんですか？」
「んっ？　ああ、ヴァレン何某君とかのことかい？　特に意味は無いよ。……ボクも大抵は君付けにしているつもりだったけど……。あの子だと呼びにくいんだろうね。別に絶対君付けにしてるわけじゃないよ。ロキは呼び捨てだし、君にだって……。たまに忘れる事がある。気分だよ、その日の気分」
　口を尖らせつつも苦笑しながら答える。それを見たアイズは不思議と安心した。
　悪い神様じゃない、ということに。けれど、どうしてロキと仲が悪いのか疑問だったけれど、それはどうしてか尋ねなかった。
　自分もロキの事は大部分では嫌いではないけれど、どうしてか好きにもなれなかった。特に【ステイタス】更新時とか着替えとかお風呂上りとか、色々と――

†

　ポランが体力回復に努める頃、当初の予定通り【ロキ・ファミリア】は遠征へと向かう。だが、そこに【剣姫】の姿は無かった。
　日常生活に支障がないとはいえ戦闘には差し支える。そして、本人も苦渋の決断の下、冒険を諦めた。
　戦力外を通知される事は今後の活動にも大きく響く。けれども、それでもアイズは残る事を選んだ。自分の意志で。
　ポランとの再戦を果たすために。いや、打倒ドレッドノートの為に。
　フィン達が深層域に行っている間、【ロキ・ファミリア】は完全に人気が無くなるわけではない。最低でも主神ロキは滞在している。彼女の世話をする団員も数名常駐している。よって物取りなどによって荒らされる恐れは殆ど無い。
「……ポランが来た場合は出来る限り無防備で居る事。それと念のた

めに武器は隠す様に」
アイズは残っている団員達に対処法を教えていた。
ドレッドノートはポランただ一人。中身はモンスターではあるが戦うすべを持たない少女でもある。おそらく叩かれる程度で済む。
それでも念のために戦わないで済むようにアイズも色々と考えた。
それは打倒とは別に身を守る事に特化した戦術であった。
十二歳の若き冒険者の命令に【ロキ・ファミリア】の団員達は姿勢を正して聞き耳を立てた。
「もちろん、低階層を攻略する班分けも行(おこな)います。基本は三人体制。……では、名前を呼ばれた人は……」
フィン達から与えられた命令所に従って指令を下していく。
単独(ソロ)戦闘の多いアイズにとって苦手分野でもある。慣れるまでは指令書付きだ。
彼女の指令に異を唱える勇敢な冒険者は今のところ居ない。それぞれ【剣姫】に憧れを持ち、尊敬している。
ベートのような反骨精神にあふれた者が居た方がいいのか、といえば扱いが困る。
（……みんな、私の命令を聞いてくれるけど、不満、とか無いのかな？）
ほぼ全員がアイズより年上の若者ばかりだ。
程度の差こそあれ年上で年期も上の冒険者が圧倒気に多い。経験においてすらも。
そんな彼らを若き少女が上に立っている。
（……そういえば、こんなに長く彼らの顔を見たのは初めてかも）
身支度を整えて整列していく【ロキ・ファミリア】の団員達を見て思った。
自分は随分前から彼らの事をろくに見ていなかった、と。
こんなにたくさんの団員が居た事すら今日初めて知ったような気持ちに情けなさを感じた。
大半の団員は既にダンジョンに向かった。それでも尚、数十人の集団がここに居る。
これからもっと増えるかもしれない。

深層域の探索は過酷を極め、全員が生きて帰ってこられる保証は無い。それゆえにロキも新たな団員を増やすことに余念がない。

百人居るから遊んで良し、とは思っていない神は意外と強(したた)かな存在である。

†

アイズが新人教育をしている間、ポランの襲撃は無かった。

油断はしないとしても緊張が解けたわけではない。そして、更に日にちは過ぎていく。

事態が急展開する程オラリオは暇ではない、とでもいうように。

空いた時間に見舞いに行けば食事療法に励んでいる赤い髪の少女が居た。それだけで心が休まる思いだ。

金髪金目の【剣姫】は巷(ちまた)で噂されるような冒険譚を封印し、一指導者として仕事をしている事を伝えた。

彼女とてずっとダンジョン探索を出来るような身分ではないので。

「……一応、次期幹部候補、ってことになってる。……ベートさんもティオナ達もそう」

「……」

掠れて聞き取れないがポランは返事をした。

反応自体は依然と変わらない。喜怒哀楽も。しかし、記憶障害についてはさすがに分かってない。どこまでの事を覚えていて、忘れているのか。

分かっている範囲では身近な人物達の事は覚えているということ。

(……やっぱり戦闘時は完全に意識が無かったんだ。……もし起きてたら大変だっただろうな。痛い記憶とか思い出したくないよね)

特にフィンの一撃は強烈だった。それは忘れていいよ、と言いたかった。

逆に彼に回し蹴りしたことは覚えててくれたら良かったのに、という思いもある。

思わず『よし』と思った事は内緒だ。

ポランはアイズと違い、戦闘は――不得意とは言わないが――不得手である。しかし、技術はある程度備えている。半分くらいはアイズ

が教えた。
急激に上達するタイプではなく、地道に強くなる長期間型、ともいうべきもの。それゆえに短期間で強くなるようなタイプから見れば実にもどかしい戦闘スタイルだ。
（だけれど、確実に強くなっていく。最初見た時の印象との差が出るのはかなり後になるから）
低階層で手間取っていた冒険者と侮り、気が付けばヘルハウンドをものともしない。
誰も指摘していないがポランは十二階層から必須と言われる『火精霊の護布（サラマンダー・ウール）』を使わずに攻略する技術を身に着けている。それがどれほど凄い事か、自慢したくてたまらないことがある。
この事実を知るのはベートと女戦士（アマゾネス）の――妹の方――ティオナだけ。姉のティオネは気づいていない様子だった。というか、ほぼ団長（フィン）にしか興味が無いともいえる。
ヘルハウンドは初見では確かに脅威のモンスターだ。しかし、攻撃は直線的。
『敏捷』が高ければ避ける事自体は難しくない。ガレスあたりはまともに食らってしまうが――どうせ耐え切るだろうし、心配はしていない。
（……そういえば【ステイタス】が減ったんだっけ……。それでもモンスターを倒したらちゃんとまた増えるものかな？　私だったら……きっと焦ってる。取り戻そうと足掻いてしまう）
今まで数値が減る、なんてことは考えたことも思った事も無い。どうしてそれがありえないと思ったのか――
静かな戦慄が目の前に居る。
もし――自分だったら。様々な条件でドレッドノートと遭遇し、敗北していたなら――
自分の冒険を無為にされたら――
きっとまともな精神ではいられなくなる。
ポランはまだ駆け出しだから平気なところがあるのかもしれない。
しかし、それはあくまでアイズから見た印象だ。彼女も人並みに落胆

を覚えていてもおかしくない。
かける言葉は無いが、復帰の応援は出来るだけ続けようと――思ったのも束の間。
（……復帰……なんて出来るの？　無理だよ。……私が止めを刺すから。……予感はあくまで……希望的観測……。あてになるわけがない）
自分はポランを殺すために下準備をしている。それが分かっていながら彼女の見舞いをするのは――ドレッドノートを監視する為、ではない。
初めて他人に生きていてほしいと強く思ったからだ。
ダンジョン探索にしか興味を持てなかった自分に様々な興味を教えてくれた。もちろん、仲間の教育という観点から全く他人に興味が無かったわけではない。
仲間以外の存在に、という意味だ。

†

自分から話を振るようになったのはいつからだろうか、と【剣姫】は自分の人生を振り返ってみた。
モンスターとの戦い以外にはほぼ無関心だった。だからか、あまり思い出せない。
「……」
ポランが話しかけてきた。けれども、聞き取れない。
友人であるアミッドからは『失語症』ではないかと。
冒険者には珍しく精神的な要因で声を失う病気だとか。
「……」
ポランが何かに気づいたように包帯で覆われた手を叩く。痛み自体は既に引いていて物に触れたり、持ったりすることに支障は無いらしい。それと歩行も出来る。
持ち込んだ荷物から紙と羽ペンとインク壺を取り出した。それにサラサラと文字を書く。
識字率の低い世界とは言え、ポランは受付で登録する上で文字は学んでいた。さすがに神聖文字（ヒエログリフ）は理解できない。

「……冒険は……順調かって？　指揮に忙しいからこの頃は潜ってないよ」
「……」
文字によるやり取りなら、という事はポランはアイズに自分の言葉が届いていない事を知っている事になる。
気を遣わせたことに驚き、申し訳なさが襲う。
ベートは滅多に他人の事を話さないが、その彼がポランは機転の利く冒険者だと言っていた。
こうしてみるとこの言葉が間違っていない事が良く理解できた。
（……ポランを助けたい。けれども、私には乱暴な方法しか選べない。……この笑顔を私は……守る事が出来ない）
せめて今この時のポランを覚えていようと。
肩を震わせる【剣姫】にポランはただ苦笑する。
更にポランは文字を書く。退院したら剣の扱い方や戦い方を教えて、と。
そして、いつか【剣姫】に負けないくらい有名になる。
「……それはもう叶っている気がするけど」
「……ん……」
口を尖らせて不満を表すポラン。
有名になる方法が違う、と言いだけだ。
「……今はお互い手負いの身……。君がもし冒険を続けて追いついてくるようだったら……。その時は戦おっか……。君を好敵手と認めて……。当然、手加減はしないよ。健全だの堅実な冒険ばかりしている限り、私は君を……共に歩む者と……認めない」
アイズの強い言葉にポランは微笑みながら頷いた。しかし、当の本人はどうしてこんなことを言ったのか、戸惑った。顔が次第に赤くなる。
思っていた以上に恥ずかしい言葉だったから。
（あれ？　なんで私こんなこと言っちゃったの!?　……言葉にすると恥ずかしい……）
この場にロキが居れば――いや、他の神々が居れば長く茶化される

こと請け合いの風景だ。

【剣姫】が恥ずかしいセリフを言った、と。

しばらく顔を覆う【剣姫】を独り占めにできたのはポランだけ。これは【ロキ・ファミリア】の団員にも出来ない偉業ではないか。

もし、充分な【経験値（エクセリア）】があればおそらく【ランクアップ】として認められる事もありえた――かもしれない。

確かに現状の【ステイタス】でも条件はほぼ揃っている。けれども、間違いなく主神ヘスティアは認めないし、ロキも認めない。認められるわけがない。

†

アイズから受けた言葉はポランの中に残り、明日への希望とする。しかし、それが楽な道では無い事は理解していた。いや、永久に叶わないとも――この時既に知っていたのかもしれない。

無駄と知りつつ努力を欠かさないポラン。それをあざ笑うものは居ない。

居るとすれば自分自身だ。

（アイズさんに追い付け追い越せ。というのは安易かな。……んー、何かいい目標とかあった方がいいのかな）

頭部以外は実は調子が良い。それを利用して鍛錬を続け、食事も無理なく食べる。

一番の懸念は欠損した指での作業だ。おそらくこれが一番大変だと予想していた。そして、それはアイズ側にも言える。

（……力の掛け方が上手くいかない。この辺りは……アイズさんと相談すべきか？）

普段の生活において頭部に巣くうと目されるモンスターの影響は感じない。ただ、ヘスティアからは定期的に黒い靄が出ているという。

憑依されているポランの視界には靄は確認できない。それと特別誰かが憎いだとか殺したいだとか物騒な考えは現れない。

武器を持つ冒険者を見ても特に何も感じない。普段通りだ。ただ

――

（……本当に目が黒い）

鏡で確認した自分の顔の酷さに元気を失う。

衰弱による尚早も酷かったけれど、白目が黒いのは気持ち悪かった。虹彩は血のように赤いし――

「視力に問題は無い、と……。気持ち的にも特に変化も無い……」

治療に当たってくれた治療師（ヒーラー）『アミッド・テアサナーレ』といつもお世話になっている『青の薬舗』の店員『ナァーザ・エリスイス』による診断を受ける。

この二人は普段はとても仲が悪い。それはポランも知っている。

しかし、今日は主神が居ない為か、言い争う姿はまだ見ていない。

「身体を操られていた筈なのに何もないっていうのが……変だよね」

「頭部だけで身体を掌握するモンスターだと仮定すれば……、案外首より下は異常が無いのかもしれません。神ヘスティア様と神ミアハ様の見立てでも目の周り以外は嫌な気配は無いとおっしゃっていましたし」

二人は何枚もの資料を見て相談事をしていた。それだけ見ると実はとても仲が良いように見えてしまう。しかし、そこは真面目に仕事をしているからであり、それが途切れれば睨み合う事になる。

「モンスターに声をかけても反応なし。これは無視されている、と見ていいのでしょうか？」

「眼球は動いているよね？　ねえ？　なんで無視するの？　それとも……、何か条件でもあるのかな？」

声をかけたり、資料を見たりと忙しい犬人（シアンスロープ）。

彼女達の普段の仕事ぶりはポランもほとんど見たことが無い。こんなに真面目なナァーザは尊敬に値する。

アミッドの方はあまり面識が無いのでどういう人物なのか、これから知る事になる。

「その目は普段は自分で動かせるの？」

筆談にて返答するポラン。

今のところ視点移動は自分の意志で出来るし、視界も良好。特に変わった景色が見えたりはしない。

武器を持つ人。攻撃性の強い人を見ても特に自分自身の気持ちに変化は生まれない。

何も感じないわけではないけれど、普段通りとしか言いようがない。

例えば怒りっぽくなったり、泣き喚いたり、性格的に変わったようには思えないし、見舞いに来る人もポランの様子がおかしいとは言ってこない。

†

不安を抱えたまま退院する日が――気が付けば――来ていた。

声はまだうまく出せないが会話に支障が無いまでには回復した。

「……あり……う……、……ました」

自分でも他人の声のように聞こえる。

掠れ過ぎてちゃんと相手に届いたのかも自身が無い。

礼を述べた後、真っすぐギルド本部に向かい担当アドバイザーに挨拶をしに行く。すると黒服を着た職員に囲まれた。

それぞれ何らかのアイテムをポランに向けたまま警戒している。

「……？」

どういう事か聞こうにも上手く喋れない。出来るだけ相手の近くに行かなければならないから。

知り合いが居てくれればまだ状況は変わったのかもしれない。

（……ああ。意識が無い間に色々と……。でも、どうしよう。何もせずに帰れって事かな……）

それとも黒い目に警戒しているのか。

が痛いとか細々としたものは本拠（ホーム）に戻ってから考える予定だった。

着替えも薄着のまま。正直、少し恥ずかしい。

周りの目がとても気になる。

「おい！　何もするな！」

「……っ、……い」

怯える黒服の一人が叫んだので驚いた。

手を前に出すのは無抵抗を表す行為ではなかったのか、と。

あまりに怖い顔をしているせいか、右目が痛み出した。

ギルドから出て行けと受け取り、ポランは引き返す。
「いったい何の騒ぎだ、これは」
出口付近から声が聞こえた。
両手に武骨なガントレットを装備した人間（ヒューマン）の女性冒険者。ただ、ポランには見覚えのない人物だった。
首下で切り揃えられた藍色の髪に凛々しい顔つき。背は百七〇C（セルチ）と高く、肩をいからせる歩き方も堂に入っていてカッコいいと思った。
「あ、【象神の杖（アンクーシャ）】っ！　その者は危険です。お下がりください」
「……どう見ても危険なのはお前達だ」
二つ名で呼ばれた麗人の冒険者は呆れたように言った。
この二つ名もまたポランにとって聞き覚えの無いものだった。
彼女は迷宮都市オラリオの治安を守る第二級冒険者（レベル4）で名を『シャクティ・ヴァルマ』という。
所属は【ガネーシャ・ファミリア】だ。
戦闘形態（スタイル）は肉弾戦を得意とし、今日も警備の為に拳（メタルフィスト）　装と金属靴（メタルブーツ）を装備していた。
「ようやく事後処理が終わると思っていたのに……。何なんだ、この状況は？　そこの……冒険者か？」
「……い。……じ……して」
「……あー。声が出しにくいのか。すまんな、気が利かなくて。ほらほら、誰か紙とペンを持ってこい。というか字は書けるか？」
頭を掻きつつシャクティが尋ねるとポランは無言で頷いた。
これで字が書けないようであれば打つ手がない。
見た目にも薄着の少女を大勢の冒険者が行き交うギルドの中に晒し者のようにしておくわけにはいかない。シャクティの仕事柄でもそれは許されない。
（見たところ特に問題がありそうには見えない。というか薄着だしな）
ただ、右目が黒いのが気になった。詳細な情報を持っていないので、それが原因なのかは予想でしかないが、それでも印象としては異

常は感じられない。
　歴戦の冒険者としてオラリオの治安を守ってきたシャクティの経験からも――

†

　警戒は解かれないもののシャクティの要望で用意された紙による筆談により、簡単な情報が手に入る。ただ、手渡そうとするポランをいちいち警戒するギルド職員が――そろそろ――煩わしく感じた。
　それほどの危険人物がいるなら自分の下にも情報が上がる筈だ。知らないという事はギルド側が隠蔽していないとおかしい事になる。
　そう思ったシャクティは何やら面倒ごとに自分は巻き込まれている気がした。
（……えーと、所属は【ヘスティア・ファミリア】。名前はポラン。女性で人間（ヒューマン）。レベル1……。おいおい、駆け出しに警戒しているのか）
　ため息をつきつつ職員たちに責任者を呼べと命令する。
　下っ端職員が居る限り絶対に物騒な事態しか起きない。そう思った。それは確信ともいえる。
　それから五分ほど経過した頃、奥からギルド長『ロイマン・マルディール』が息を切らせつつ走り寄ってきた。
「こ、これはいったい何の騒ぎだ」
　肥満体型の男性エルフであり、多くのエルフ達から蔑まされている人物だ。
　現場の喧騒に驚きつつもシャクティの姿を認めると嫌な予感を感じたようだ。
「事情を聴きたいのはこちらの方だ、ギルド長。薄着の冒険者を取り囲むように命令したのは貴様か？　明日から非番だと思って楽しみにしていた私の仕事を増やすとはいい度胸だ」
「あいや、これは……。何かの誤解だ。お前達……って、あいつは……。お、おい。武器を向けるんじゃあない。すぐに引っ込めろ」
「しかし、奴は第一級冒険者を退（しりぞ）けた化け物ですよ」
「バカ者。その話は保留になったのだ。これは神ウラノスも承知している事だ」

そうロイマンが言うと職員たちが大慌てでポランから離れていく。
しかし、武器は構えたまま。
恐怖心が彼らから武器を手放す意思を削いでいるようだ。
ポランからある程度職員を下がらせた後、ロイマンは額の汗をぬぐう。
余計な運動で拭いても追いつかない有様だ。僅かな距離を走った程度で。
「その姿、という事は退院したのか。それで……何しに来た？」
ポランは太ったエルフのギルド長の為に紙に文字を書く。
意外と落ち着いている事にシャクティはいつもの事なのかな、と。
書きあがった紙を渡そうとするがロイマンは怖がって受け取ろうとしない。その様子を見ていたシャクティは面倒を早く済ませるために紙を奪う様にひったくる。いや、完全に奪い取った、が正しいか。
（退院したのでアドバイザーに挨拶に来ました……。普通じゃないか！）
ロイマンに渡す前に紙を丸めて後方に捨てた。それに対してポランは驚く。
何事か喋ったようだが、正確な文言は聞き取れなかった。ただ、印象としてはゴミを捨てないでください、みたいな――
その予想は実際に捨てられた紙を拾う姿を見て確信する。
自分のしたことを後悔するシャクティ。
「つい、な。おい、この子はアドバイザーに挨拶がしたいそうだ。退院したからって。……で、それがどうして警戒態勢に繋がるんだ？　というか詳細を教えろ。いい加減私も我慢の限界が近いんだが……」
拳同士を打ち付けてイライラを募らせる。
ロイマンはすぐに側に居た職員に尋ねまわった。本来は冒険者が受付に行けばいいのに、と思う者の。その受付がポランを警戒し、職員も警戒したために不可能になった。

†

第三者目線でポランとアドバイザーのやり取りを見ていたシャクティはギルドの警戒態勢について、理解はやはり出来なかった。

赤い髪の少女は本拠（ホーム）に戻って鍛錬と食事療法を重ねてからダンジョン探索に赴きたい、という事だった。

（私の感覚がおかしいのか？　外の警備に行っている間に何が起きたんだ、一体……）

口を尖らせて不満を募らせるシャクティはギルド職員が製作した報告書に目を通す。すると目の色が変わる。

ここ最近起きた騒動の中で目を引くのは先ほども聞いた【ロキ・ファミリア】との戦闘だ。

嘘を書いていないとすれば気弱そうなポランがフィン・ディムナと一騎打ちしたことになる。

（全く想像できん。何なんだ、この報告書は？　……元凶が黒い目のモンスター……）

正しくはポランなる冒険者にとりついた目玉モンスター、ということになる。

それにしては物腰が丁寧で人のよさそうなモンスターだ。しかもゴミ捨てを咎めてくる。

（武器を持つ相手に向かう習性がある、と……。それにしては私の武器に反応しなかったのは……、武器だと思わなかったのか）

何にしても外を回った感じでは建物が倒壊したり、死人を出したという報告はギルドに来るまで聞いていない。

これほどの騒ぎを起こしておいて主神（ガネーシャ）が知らない、という事はありえるのか。いや、団員か、と。

待合室に通された事で見えなくなったポランが捕縛されるかもしれない。それを自分には止める権利は無いとしても関わった以上は――出来るだけ――情報を知りたいと思った。

様々な疑問を浮かべている間、要件を済ませたポランがシャクティの側にやってきて一礼してきた。ついつられて返礼する。

どう見ても脅威とは思えないし、いくらか伏せられた情報があるのかもしれないが、緊急依頼（クエスト）でもないかぎりシャクティが直接捕縛する事は出来ない。

特に問題も無く去っていくポランを見届けた後、盛大な溜息を吐く

職員たちと首を傾げるシャクティが残った。
「……おい。これは何の茶番だ？」
憤慨するも開示できる情報以上のものはギルドは提示しなかった。
とにかくポランという冒険者は要注意人物である、としか一般職員は聞かされていない。
それにシャクティは満足するはずはないが、今以上に追求する理由が無かった為に諦めざるを得ない。

†

アドバイザーへの挨拶を済ませたポランは懐かしき本拠（ホーム）へと帰る道すがら、取り囲まれたことを思い出す。
自分に非は無くとも――とは思わない。ダンジョンにて行（おこな）った実験によって発生したモンスターが原因なのは理解しているから。
ただ、地上で面枠をかける事になるとは想定していなかった。せいぜい地下世界での責任だけだと。
（……どのような事であれ、独自に調査をしなければなりませんね）
とはいえ、十二歳の小娘に出来る事は限られている。
まずモンスターを御せなければならない。その為には体力をつける必要がある。今はまだ痩せ型でひ弱な冒険者だ。
それと必要量の【経験値（エクセリア）】を貯めなければならない。
レベル3でも苦戦したのだから。
（数年単位になりますか……。それまでモンスター側が待ってくれるかどうか。……そのうち自然消滅でもしてくれれば御の字ですが……、そう簡単に行くとも思えない）
ひ弱な冒険者に憑依された事は運がいい。そうポランは本気で思った。
命は大事だが他人に迷惑をかけてまで生き延びようとは思わない。
しかし、安易に死にたくもない。
その辺りは一人で考えても仕方が無いようにも思う。
こういう時は誰かに相談するのが良いものだ、と。
（……それに……消えるのが私になったら神様やアイズさん達が悲しむかな。それとも……迷惑をかけてしまうのかな）

神様を困らせたくは無いし、アイズ達に迷惑をかけたくない。けれども打つ手は無い。

そんな状況の中で自分に出来る事は情報を残すことだ。多くの冒険者達の為に。

その為には少しでも長く足掻き続けなければならない。

痛みを知って安易に死ぬ事など出来ないと知った。それは更なる苦痛以外の何物でもない。

方針が固まりかけたところで廃墟の協会が見えてきた。

「……よし」

軽く気合を入れてから新たな目標を掲げ、一歩を踏み出す。

何事も進まなければ始まらない。

#1―18　障害者

モンスターの能力上昇によるものかは分からないけれど下げられた【ステイタス】を上げるため、ダンジョン探索に向かう準備を始める赤い髪の少女ポラン・ブーニディッカ。

重症の為、戦えなくなった金髪金目の少女【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン。

二人に共通するのは僅かしかなく、実力も雲泥の差がある。

ここで一つの騒ぎが起きた。ギルドがポランのダンジョン探索を阻止しようと動いたのだ。

受付まではいつも通りだった。それ以上は進めない。

「お引き取りを」

いつも親身になって相談してくれたアドバイザーからの冷徹な対応。そこに悲しみは無く、あるのは恐れ。

大抵の事は自分の責任として受け取るポランも心に痛みを感じた。

生活が懸かっている冒険者であれば抵抗するところをポランは優しい性格の為か、苦笑しつつも素直に引き下がる。

外に出た後、ギルドの近くにある中央広場（セントラルパーク）に設置されている椅子に座って黄昏（たそがれ）ていると【ミアハ・ファミリア】の主神ミアハが近寄ってきた。

ここしばらく資金を稼げていないので買い物もままならない。それでも世間話をしてくれる数少ない神様である。

「……ギルドから追い出されたのか」

「……い」

筆談用の紙は事前に購入できたが、それが尽きれば喉の回復まで誰にも意思疎通が出来なくなる。

最悪、地面に木の枝でも使って伝えるしかないけれど――

ポランの懸念はいくつかあるが、資金が稼げないと指が欠損したまま。より深い階層にも挑戦することが出来ない。というよりダンジョン探索そのものを禁止されている。

『あるばいと』なるものをしようにも頼れるところは『豊穣の女主人』だけ。だが、料理が作れない。皿洗いと掃除しか出来ない。それでは給金が少ないまま。

「……金を借りる、という選択はダメなのだろうな」

一時的には助かるも返済が出来ない。その手段が無いに等しい。

幼いポランに出来る仕事は意外に少ない。なにより大事な声が出せない。

（こんなに弱気な彼女は見たことが無い。ナァーザよ。私はダメかもしれない）

悩みを打ち明けられたとしても解決策が浮かばない。

そなたの頑張り次第だ、と言える雰囲気でもない。仕事ならたくさんあるであろう、とも――

様々な条件に制約がかかっているポランに余計な助言はかえって重しが増えるだけ。

それが何となく理解できてしまったミアハはただただ慰めるための言葉しか出てこなかった。

†

眷族の苦悩にヘスティアも頭を悩ませていた。

こういう時は神友（しんゆう）に頼るのが一番なのだが、役に立ちそうな友達に覚えが無い。天界からの腐れ縁であるロキは論外。

まず頼ったのは【ヘファイストス・ファミリア】の主神ヘファイストス。

赤い髪に右目を眼帯で覆った女神だ。久しぶりに会う事になり、ポランみたいだと思った。

鍛冶を司る神で多くの武具を製作している。

「金の無心かと思ったけど、眷族（子供）の面倒を見てほしいだなんて……。聞きようによっては狂気の沙汰よ、全く……」

恥も外聞も捨てられる希少な友神（ゆうじん）にヘスティアは頼った。そして、即座に他の友神（ゆうじん）である【タケミカヅチ・ファミリア】の主神タケミカヅチから伝授された伝家の宝刀『土下座』にて頼み込んだ。

「私よりガネーシャに相談したら？　……悪いけど、うちは鍛冶系

【ファミリア】だし、ギルドの口利きも出来ないわよ。いくらアンタの頼みでも仕事の斡旋は……アンタで手一杯なんだから」

天界でも自堕落で有名だったヘスティアが露店で働いているのはヘファイストスのお陰であった。ついでに摩天楼（バベル）内の飲食店でも働いている。

稼ぎは少ないけれど当初はそれで飢えを凌いでいた。今はポランの貯蓄を切り崩している。

その貯蓄とて無限ではない。

「だいたいロキに真っ向からケンカを売った【ファミリア】の眷族を雇う店なんかオラリオにあると思う？　あったとしても黒いわよ、そういうの」

「売ってない！　それはやむを得ない事情があるからで……。それに本当に抗争事ならロキの眷族（子供）達にとっくに本拠（ホーム）を壊滅させられている」

「……確かにねー」

貧乏零細【ファミリア】で眷族が一人しかいない。そんな状態で大手にケンカを売るのは無謀以外の何物でもない。

その辺りはヘファイストスも承知している。

（でもねー、ギルドにも目を付けられる眷族（子供）っていうのがねー。一体何をやらかせばそうなるのかしら）

昔なじみのよしみから、と言いたいところだが――ギルドを敵に回すのは得策ではない。

今は騙せても後々査察が入れば言い逃れが出来なくなる。もちろん、ヘスティアが眷族にした冒険者が本当に危険な存在だとは信じていない。

そうでなければこんな痴態を晒しに来てまで助けを乞（こ）うはずがない。

「とにかく、私のところは無理。ガネーシャのところで無理ならどこでも無理だからね。まあ、当たって砕けてきなさいよ」

「ううっ。薄情ものー」

涙ぐむヘスティアの頭をペシンとヘファイストスは叩く。

今まで自堕落だったクセに、と言いたい気持ちがあったが飲み込んだ。

（……ホントにもー。どうしてこんな神（やつ）を見捨てられないのかしら、私は……）

ため息をつきつつも最後には助けてしまう自分が情けないと眼帯を触りながら思う鍛冶を司る女神。

彼女（ヘスティア）の為に紹介状のようなものを認（したた）める。ただし、金銭は与えない。

†

迷宮都市オラリオで大手は何処かと尋ねれば探索系では【ロキ・ファミリア】だ。

眷族も多く、有名人も――

強さでは【フレイヤ・ファミリア】に一歩及ばない。これはオラリオに存在する中で唯一レベル7の冒険者が居るからだ。

【ロキ・ファミリア】が量なら【フレイヤ・ファミリア】は質で勝っている。

だが、眷族多さで一番と言えば圧倒的に【ガネーシャ・ファミリア】の名前が挙がる。

古くからオラリオの治安を守り、人々の絶大な支持を集める神ガネーシャは良くも悪くもいい名物となっていた。

質で言えば良い神だ。性格を抜きにすれば悪い噂は聞かれない程。

「はっはっはー！　俺がガネーシャだ！」

常に大声でそう叫ぶ男神は何処に居ても声が届くような気さえ覚えさせる。ある意味では洗脳に近い。

抱える眷族の多くはモンスターを調教する調教師（テイマー）だ。これは人々にモンスターがいかなる存在かを見せるためでもあり、過度の不安を抱かせない目的があるらしいが――

当の男神は常日頃からモンスターと戯れ、死闘を演じていた。本神（ほんにん）は仲良くなりたい気持ちで触れ合おうとしているが、モンスター側は敵意をむき出しにしている。いくら調教（テイム）したモンスターであっても制御は完璧ではない。

何度も食われそうになる男神（バカ）に眷族たちはいつもハラハラさせられっぱなしだ。

「……入る前からガネーシャの声が聞こえるとは……。彼は相変わらず声量が半端ないな。声とか嗄れないのかい？」

神ヘスティアは【ガネーシャ・ファミリア】の本拠（ホーム）『アイアム・ガネーシャ』の門番にそう言った。

中央広場（セントラルパーク）を中心にオラリオを奇麗に八等分した中――南西に位置している広大な敷地が彼らの本拠（ホーム）となっている。

巨大な象頭の座像の股座が入り口になっている。

主神は像の仮面をかぶる浅黒く精悍な肉体の持ち主。なにより声がデカイ。

性格は豪放磊落。誰彼構わず人当たりの良い民衆にとっても人気のある神だ。

【ロキ・ファミリア】とは違い、敵意を剥き出しにされる事も無く、中に案内される。元よりヘスティアにとっては暑苦しい男神という印象はあっても嫌ってはいない。

（ただ、相変わらずデカイ像の中に入るのが……、ちょっとな……）

なにせ出入口が股間だ。正気沙汰を疑う。それは眷族たちも気にしている事だった。

これらを踏まえて中を突破すれば牧草地帯の平原が見える。といってもオラリオの中なので範囲は限定的だが。

主にダンジョン内で捉えたモンスターを調教する為の場所で、そこかしこに首輪の繋がれたモンスターの姿が見える。

ギルドに飼育を許された唯一の【ファミリア】でもある。

そして、凶暴なモンスターを相手にしているせいかは分からないが、眷族たちは皆――熱い。主神は更に暑苦しいが。それに負けない暑さ（熱さ）を持っている。

（……これだけのモンスターを調教しようとしてるんだから気弱な眷族には務まらないだろうね）

ヘスティアはモンスターが目的ではないので無視して進むがあちこちから上がる叫び声に正直怯んでいる。

血気盛んな彼らはそれなりの実力者揃い。それに加えてオラリオの治安も守っている自警団も兼任している。

†

主神のガネーシャは事務作業やロキのように根回しと言った細々とした事はしない。

オラリオの興行に携わってもいるけれどほぼ団員任せだ。

神として行(おこな)っているのは眷族たちの無事を祈ったり、信じたり――

――

人々に笑顔を振りまくために明るいイメージを心がけていた。それが定番の名乗りに繋がっている。

神の言葉で言う『えんたーていなー』こそが彼の持ち味だ。素行に些(いささ)かの不安を感じるものの嫌っている者は殆どいないのではないか、と。

「おお、ヘスティアよ！　よく来た！」

大声で出迎える象頭の男神(おがみ)。

近くに居るのに大声を出すので耳に痛い。

「ガネーシャ。そんなに大声じゃなくても聞こえるよ。というかいつもそんな声量なのかい？　耳がおかしくなりそうだ」

「あっはっは。それは済まなかった。それで何用か」

「……実は頼みにくいことがあるんだ。ボクの眷族の事さ」

「ヘスティアの眷族？　それは……【ロキ・ファミリア】と抗争したという……」

「抗争はしていない。第一一人しかいないんだ。ボクだって無謀な事はやらせないよ」

本来なら執務室で話すことだが、二人はモンスターに囲まれた牧草地帯の一角に居た。もちろん周りはガネーシャの眷族が見張りをしている。

青空を頭上に抱き会談するには些か、場違い感があるが。ガネーシャを前にするとそんなことは些事だと思えてくる。

まずヘスティアは眷族のポランの人となりを伝える。

ギルドから伏せられている情報についても言えるだけは説明した。

「真面目で優しい。結構じゃないか。つい先日シャクティがその眷族に会ったというが……。それで……俺に頼みとは？」

「簡単に言えば仕事が欲しい。ダンジョン探索を止められている彼女は何もすることが……、というか何が出来るのか分からない。探してはいるんだけど……。急に生活を変えなきゃならなくなったから、物凄く悩んだりしないか心配でね。それと……ロキんとこの騒動で狙われたりしないかも……」

こうしている間にもポランに余計なちょっかいをかける輩が居ないとも限らない。しかもヘスティアには止める手立てがない。相談したくともギルドは役に立たない。

という事で天界の伝でここに至る。

「仕事の斡旋か。それは……」

大変なのは分かっている。それを簡単に言葉に出していいものか。シャクティから聞いた内容では特に問題がありそうには見えなかったという。

【ファミリア】として件の冒険者に出来る事は殆どない。それが結論である。

モンスターの調教などは出来そうにないし、ダンジョン探索は禁止状態。であれば露店などの仕事だが、こちらは狙われやすい、という観点からお勧めではない気がした。

かといって街の警備に取り込めるかというと、これは団員達の許可が居る。命令として与えられなくはないが、ガネーシャとしては眷族の自主性に任せているところがあるので、口出しはしたくなかった。（ガネーシャ、超ピンチ。いくら友神の頼みとはいえ、はいそうですか、と出来ないのだ）

――だが、主神の悩みとは裏腹に件の団長シャクティ・ヴァルマを呼び寄せてヘスティアの話を聞かせた。

すると――

「構わんぞ」

「へっ？」

ヘスティアのみならずガネーシャも驚いた。ほぼ即決。

何の悩み事も無い、という風にシャクティは言い放った。
「金の話はおいといて仕事であれば別に面倒を見る事に支障はない」
「【ロキ・ファミリア】と問題を起こしたというのにか？」
「それはモンスターの話だろう？　彼女自身は大丈夫のはずだ」
背の高い人間（ヒューマン）の麗人シャクティは迷いなく言った。
完全に迷わないわけではない。ただ、見掛けた印象としては問題がありそうに感じなかっただけだ。
「あのフィンに一泡吹かせたという冒険者には興味がある。使えるかは別として……、他人の噂だけでは計れまい」
主神より頼りになる眷族にヘスティアは驚き、そして、感謝した。
明日にでも連れてきたいところだが、ポランに何も言わないで来てしまったので予定が出来たらどうしよう、と悩むことになったのは本拠（ホーム）に戻ってからだった。

†

突然、収入源を断たれたポランは必死に頭を働かせた。その矢先に帰宅した神の言葉に驚き、そして喜んだ。
一条の光は正に僥倖、という風に。しかし、それでもまだ不安が拭えたわけではない。
面接に落ちればまた路頭に迷う。
「君がダンジョン探索じゃないと嫌だ、と言うのなら……」
声が出せないポランは紙に『いいえ。今はとにかく収入を確保しなければなりません』と力強い文字で書いた。
少しインクを使いすぎて慌てる彼女（ポラン）を見てヘスティアは苦笑する。
ダンジョン探索は禁止されたが、買い物は通常通りだ。ここまで禁止されたら餓死するしかない。
「そうかい？　行ってほしいのは【ガネーシャ・ファミリア】さ。君も知っているかもしれないけれど、そこの主神は見た目と声に……驚くかもしれないけれど、いい奴だよ。ボクが保証する」
素直なポランは神の言いつけ通りに教えられた場所に向かう。
出てすぐに気が付いていたが象頭の巨人像にこれから向かう事に緊張が走る。

普段とは違う道は新鮮であり、何が出てくるか分からない怖さがあった。

ダンジョンの探索と同様で初めて歩く場所は何処でも怖い。知らない人と触れ合うことも。

目印となっている巨人象の足下まで来たものの上ばかり見ていたせいか、首が痛い。

どうしても頭の方を見てしまう。

(近くで見ると更に大きい。……これが本拠(ホーム)ってことは凄いたくさんの眷族が居るってことだよね)

【ロキ・ファミリア】の本拠(ホーム)『黄昏の館』もお城のような立派な外観だったが、こちらこちらで凄まじいの一言に尽きる。

ダンジョン以外で探索する事が殆どなかったのは治安が悪いと聞いていたからだ。だから、自然とオラリオで知らない所には行かなくなった。そんなことを思いつつ入り口を探す。

ヘスティアの言葉が正しければ門番が居る筈だ。

オラリオ最大の眷族を擁する【ガネーシャ・ファミリア】――

有名人は殆ど知らないけれど【ファミリア】としての活動は街の治安維持とモンスターの調教、年中開催される行事である。

(……像の足下が入り口……)

首を押さえつつ目線を下に移動。

右目は今のところ通常の機能で痛みは無い。当初酷かった頭痛も嘘のように解消されていた。

黒目の謎は解消されていないが――視界には異常が認められない。

広大な敷地を高く白い塀に囲まれた【ガネーシャ・ファミリア】の本拠(ホーム)『アイアム・ガネーシャ』に向けて歩き出す。

†

門番を担当する人物達を発見し、ポランは面会の為の書状を渡す。

最初、彼らはポランの黒目に驚いたが一礼してきた赤い髪の少女につい警戒が緩む。しかし、その直後、彼らの背後から例の雄叫びが轟く。

「俺がガネーシャだっ!」

「!?」

突然の事だったのでポランは体勢を低くして警戒態勢に移った。

オラリオに来てからポランは殆ど地下のダンジョン探索に向かっていたので、この雄叫びを聞くのが今日が初めてであった。

さすがにガネーシャの声は地下世界にまで届くことは無かった。

「今のはモンスターを前にした時の声だ」

「驚かせて悪かったな」

門番はいつもの事として処理し、笑顔でポランを迎えた。

毎日のように声を張り上げているガネーシャだが大声の回数自体は少ない。

警戒を解いた後、門番達の案内により本拠（ホーム）に入る事になった。

（目が……少し反応した様な……。神様に迷惑をかけないでくださいね）

既に自分の右目はモンスターだと割り切って、事あるごとに大丈夫だとか落ち着いて、と思うことにしている。

学習する未知のモンスター『ドレッドノート』にもし自分の気持ちが伝わったらどうなるのか。肯定か否定かは分からないけれど、挑戦してみない事には始まらない。

討伐一辺倒の存在である筈のモンスターと意思疎通が出来たら――

（今までの恨みつらみとか言われそう。それはそれで怖いな）

生活の為にモンスターを倒してきた自分としては謝れと言われて済むような気がしない。

この場合、どういう方法が良い結果に繋がるのか。

（……もし、この思いが伝っているのなら……）

色々と教えてみて何らかの反応が返るのであれば挑戦しない手はない。

――出来れば仲良くしたい。自分の身体なので。自衛手段は残さなければ。

（どうかな？　ドレッドノート。君の名前らしいけど……）

いきなり問いかけてすぐに返ってくるとは思わないが、一歩は必要

だと判断した。
ただ、意識が散漫になる気がしたので今日はこの辺りで中止する。
門番の指定した場所は中庭ではなく執務室。そこには主神のガネーシャではなく団長が居る。
団員の一人に案内されつつ【ガネーシャ・ファミリア】団長は主神とは違い、叫ばない落ち着いた雰囲気の冒険者と説明を受けた。全員が主神のようであれば奇人変人の【ファミリア】だ、と愚痴を言っていた。とにかく、主神に振り回されて毎日が苦労の連続だとか日頃の鬱憤がかなり溜まっている様子。
ただただ相槌しか打てないポラン。しかし、とても賑やかで楽しそうな【ファミリア】なのは理解した。
【ヘスティア・ファミリア】は貧乏零細に加え団員が一名。しかも、その団員は問題児と来ている。そういう自覚を覚えつつも新たな団員を募集しなければならない。
曲がりなりにも探索系【ファミリア】なのでどうしてもパーティを組まざるを得ない。

†

歩きつつも外から主神の声が定期的に届いていたのだが、その度に右目が勝手に動き出す。軽い動揺か、興味でも覚えたのか。何にしても感触が気持ち悪い。
自分の意志ではない、というところが。ただ、視覚は自分のもののようなのが不思議だ。
勝手に動く時は景色が揺れる。今は平気だが、いずれ吐き気を覚えそうだ。
「ここが執務室だ。では、失礼する」
ポランは頭を下げて返礼する。
そして、大きな扉をノックしてから開けた。
自分のところがあまりにも酷い本拠（ホーム）のせいか、どの部屋を見ても豪華に見えてしまう。
それなりに掃除はした。それでも生活するには不安が残る。今は天気がいいが雨季の場合はジメジメとし、夏は蒸し暑く、冬になった

ら凍死しそうな雰囲気がある。その為に薪(まき)を事前に用意したかったが、そこまでにはまだ至っていない。

部屋に入ってすぐ一礼する。声が出せないのが痛い。

「よく来た。歓迎する」

そう言ったのは見覚えのある人物だった。つい先日出会ったばかりなので覚えていた。

【ガネーシャ・ファミリア】団長にして二つ名【象神の杖(アンクーシャ)】と呼ばれた偉丈夫の麗人。

首元で切り揃えられた藍色の髪の毛の冒険者。

「声が出ないんだったな」

「……い」

「私はこの【ファミリア】の団長……『シャクティ・ヴァルマ』だ。先日は世話になった。世話というか色々と教えてもらって恐縮だが……。早速だが仕事についての話をしようか。椅子を持ってきて、そこに座り給(たま)え」

無駄な社交辞令は抜きだ、と言わんばかりのはっきりとした迫力で物言いするシャクティ。

先日会った時、シャクティは武装していたが、今は――当たり前のようだが――普段着のような格好になっていた。代わりにポラン側はしっかりとした身なりとなっていて見違えた。

黒い目は先日見たままだが、一度気にするとなかなか無視できない事に苦笑を覚える。

「手先については聞いている。手袋を着用していれば簡単な作業は出来るんだな？」

重い物。武器を握ること以外であれば日常生活を送る上で出来ない事は少ないと言ってもいい。

手袋が無い状態だと仕事はほぼ出来ないのではないか、と。

それらを懸命に伝えるポラン。

「再生の為の資金を稼ぎたいところをギルドに止められてしまった……。全く何を考えているんだか。しかし、やはり気になるな、その黒い目は」

今のところ人体を乗っ取られることは無い、らしい。
フィンとの戦闘時は完全に意識が無かったので。今わかる範囲では自分の意思とは関係なく動くことがあり、多少気持ち悪い程度。
シャクティは恐れずに淡々とポランの話を聞いた。多くは筆談だが。
「眼帯でもしておくか？　体面的にも問題が起きにくい」
シャクティの提案にポランは頷いた。
何人かの団員にまず面通しを行い、それからポランを参加させることにした。
現行、ダンジョン攻略を禁止されているポランも日銭を稼がなければならない事情がある。
物乞いをしろ、とはシャクティも言えない。

†

【ガネーシャ・ファミリア】はダンジョン内で見つけたモンスターの捕獲と調教の他にオラリオの治安維持と興行を司っている。仕事は多い。
その中でポランできそうなことは少ない。出来ればレベル2になっている方が都合がいいのだが、と。
信頼できる眷族と共に行動してもらう。
「初日は道具類の整理から。この散らばった汚い部屋を掃除してもらおうか」
「……はい」
「では、役割を決めて作業に当たってくれ」
作業はポラン一人ではなく複数人が担当する。
団員の数は膨大なのでポラン一人に任せる事はしない。必ず、何人かで行動させている。
物が無くなっては困るので。
他の眷族と違い、作業の遅いポランは出来る限りの努力をした。それでも力が通常よりも弱い。
皮手袋の恩恵があっても欠損した部分はやはり難儀する事になる。
（重い物は無理そう。でも、冷たい水には平気……。でも、絞れない。

……なんだろう）

慢性的に痺れた状態が続いているようで上手くいかない。

試行錯誤しながら作業を進めていく。

荷物整理の後はゴミ拾い。こちらはわりと楽にできた。

（他の人より多くの量が扱えない）

大きな石は足でも使わないと駄目。こちらは許可を得て作業に当たるが見栄えが悪い。

全身の使える所は何でも使わないといけない。それが今のポランに出来る事。

そして、一日二日と経過していく。

三日目はモンスターの餌運びだった。中庭にいくつかの檻が運ばれ、調教師（テイマー）達が仕事をしていた。その彼らの手助けがこの日の仕事だった。

「……うぞ」

「ありがとう」

大量の餌が入った箱を運ぶ。これには滑車が取り付けられているのでポランにも扱える。ただし、方向転換が難しい。

多少下がったとはいえ【ステイタス】的には造作もない範囲だった。

（ダンジョンに居るモンスターを地上に運べるのは【ガネーシャ・ファミリア】だけ）

ここに居るのは十階層より下のモンスターばかりだ。彼らの手に余るようなものは当然、連れてこれない。

中にはポランの知らないモンスターも居た。

ダンジョンから生まれたモンスターとてお腹が空く。そんな彼らの食事は地元でとれた野菜や肉に魚。だいたい雑食傾向が強い。

†

昼間は【ガネーシャ・ファミリア】。朝方の余裕（時間や体力）がある日は『豊穣の女主人』に向かい、お手伝いで日銭を稼ぐのが日課となってきた。

ダンジョン攻略はほぼ諦めた。無理に向かうよりは確実なところを優先する。ただ、ヘスティアはそんな彼女の為に何かできないか、悩んでいた。

新しい団員は未だ現れず。ギルドの厳しい目にたじろぐ始末。
露店での仕事中に集中力を欠いて、火傷をしてしまった。当然のごとくポランは慌てた。
自分のケガよりも重く受け止めてしまった。
「だ、大丈夫だよ。ちょっとだけだから」
「……うですか？　気を付け……い」
自分のケガより他人を心配する。それはそれでこそばゆいものだが、神側からすれば痛々しい姿のポランが気になって仕方がない。
睡眠と食事はきちんと取っている。一緒に食べているから断食のような事をしていないのは確認済みだ。
このところ吐く姿も見ていない。最初の頃より食事に気を付けているお陰だ。
（……神様を一人にする事態を何とかしたいけれど。それには団員を増やさなければならない。声の出ない私には呼び込みは出来そうにないし……。困ったな）
ダンジョンで使う予定だった回復薬（ポーション）もヘスティアの為に使う。
今はあるものを何でも有効的に使用しようと。
そんなある日、夕方から入った『豊穣の女主人』の店先で喧嘩をする現場に遭遇した。
他の店で酔った客が言い争いを始めた。呂律が回っていないくらい泥酔しているので何を言っているのか全く分からない。
「うちの客じゃニャいんなら出て行ってくれニャいかな？　他の客の迷惑ニャ」
「うぁ？　ぶぼげがぁうぁ？」
ポランにも解読不能の言語だった。
女性店員のアーニャ・フローメルは慣れた様子で喧嘩をしている冒険者と思しき者達に水をひっかけた。
ひ弱そうな外見だがアーニャは相当の実力者である。そこらの酔っぱらいに負けることは無い、というのは主人ミア・グランドの言（げん）だった。
荒くれ者の多い客の大半が冒険者。レベル2からが多い為、駆け出

しには当たりが強い。
自分は偉業を成して【ランクアップ】した、という自負が強く出ているためだ。しかし、そんな彼らよりも店員が強い事は意外と知られていない。
ポランが慌てている間に手慣れた様子で酔った客を店から放り出すアーニャ。
「おとと い来やがれニャ」
「……店を荒らすだけで片付けもしやしない」
片づけはポラン達店員の仕事だ。客はただ飲み食いして帰るだけ。
酔った客が出てくるのは酒場なので仕方がない反面、命を懸けた冒険の後で調子に乗って助かった命を無駄に無くさないように誰かが心配している。
地面に落ちた食器や散らばった食べ物を片付けながら、勿体ないなとポランは思いつつ仕事をする。
細かい部分は彼女の担当でミアもアーニャも特に言及しない。客はどんどん入れ替わっていく。それらの対応に次第と追いつかなくなる。

†

翌朝、店の余りものにて食事を済ませたポランは『青の薬舗』に向かう。
冒険者ギルドでは警戒されていたが、懇意にしていた店の一部は今でも利用に問題は無い。
ここでは主に身体の様子と包帯の替えをしてもらう。ついでに神様用の小物も。
「経過は良好？」
「……声以外は……」
潰れた声帯は回復薬（ポーション）でも治らず、半ば諦めている。
手先の方は資金稼ぎが出来ない為、こちらも絶望的であった。それはそれで諦める選択もポランにはあった。
有名になりたいわけではない。日々の生活こそが何より優先される。

「黒い眼から煙が出ているそうだけど、身体の調子が悪いとかは……ある？」

喉以外は特に問題なし。その黒い煙もミアハの見立てではすぐに消えている、とのこと。診察を担当するナァーザ・エリスイスには接近し過ぎない事を厳命している。

無謀な事をするつもりが無いとはいえ、興味は無くせない。

「寝ている間に動き出す……、という時は……分かるわけもないか……」

フィンとの激闘の記憶は無く、モンスターに意識を乗っ取られている間の出来事は何も残らないようだ。

普段の生活ではモンスターらしい異常行動というのは特になく、ナァーザの知る限りでは目立った噂は耳に入っていない。

黒い瞳と化しているモンスターが大人しくしているだけ、とも思われるが今のところは何もできない状態だ。これは聖水などで清めようとしても意味がない事は確認済みだ。

「仮面やフードを被ってダンジョンに潜る方法もあるけれど……。そういうのは……」

真面目なポランからすれば取りたくない方法だ。それとサポーターの背負い袋に入る、という手段も浮かんだ。

ただ、それらを成すには協力者が必要不可欠。ナァーザの知り合いに――都合の良い――友好的な存在は浮かばなかった。

（……謎のモンスターの死骸を調査しているギルド側から何の発表もない。隠蔽するつもりみたいだけど……。アミッドのところはどうなんだろう。あいつも情報統制で隠す気かな）

自分で調べようにもダンジョンに潜る事が出来ないナァーザにはどうしようもない。

だが、ポランを優先的に調べられるので悔しくはない。

†

地上に戻って様々な騒動に遭ったものの気が付けば結構な日数が過ぎていた。

冒険者になって半年を越え、気が付けば自警団や飲食店の店員に――

―

様々な経験が出来る今は不幸かといえば、そういうこともなく。比較的充実しているといってもいい。

懸念はただ一つ。

他人に迷惑をかけていること。

「……」

「どうしたんだい、ポラン……君」

アイズに指摘されたせいで呼び方がおかしい。やはり呼び捨てがしやすい名前である、とヘスティアは感じた。

ダンジョンに行けなくなってから目に見えてがっかりしている。食欲はあるようだから元気がないわけではない、筈なのだが――

一か月の食費を数えている眷族の姿がどうしてか痛々しい。完全に収入が無くなったわけではない。その点は恵まれていると言える。

「……ままで……かと……」

目からあふれる黒い靄を避け、聞き耳を立てる。

このままでいいのかと、と言ったようだ。

声帯が潰れ、人との挨拶が不自由になったポランはこの先、一人で生きていくのは難しい。いくら読み書きができるとしても。

初対面の相手に書面でのやりとりは迷惑だと思われる。ヘスティア自身も紙で出されたら不審がる。

（……このままだと冒険者としてやっていけない。神は困っている眷族に出来る事と言えば信じる事と応援くらいだ）

【ガネーシャ・ファミリア】とてよその【ファミリア】をいつまでも雇い入れてくれる筈はない。あくまで一時的な処置だ。

滅多に弱音を吐かないポランが泣いていた。それに気づいた時は驚いたものだが、やはり歳相応の女の子だったか、と。

（一番の問題は働くのに多くの障害を抱えてしまったこと。それを解決するためには金がどうしても必要だ、ということ……。圧倒的に資金不足なんだうな）

だからこそ数か月もかかる下準備をしてきた。

こういう事を想定して。そして、今だからこそヘスティアは理解し

た。
　ポランはただ優しいだけじゃない。堅実さと危機意識を持つしっかりした眷族である、と。
「……バカだな。そんなに焦らなくてもいいのに……」
（そうさ。貧乏で零細【ファミリア】のままだっていいじゃないか。ボクは廃墟暮らしでも君と一緒なら平気なんだ。君を失うくらいなら毎日ジャガ丸くんだけでも平気だぜ）
　神は不変なんだ、簡単に餓死はしない、と思う。
　ヘスティアは言葉に出して言おうとしたが出来なかった。
　焦らなくていい。そんな心にも無い言葉で誤魔化しても駄目だという事は理解していた。
　ポランは堅実な冒険者だ。何度でも思う。
　堅実だからこそ方法を失う恐怖を知っている。
（……ポランはもう冒険者じゃない。ギルドが奪ってしまったから。ここに居るのはただの赤い髪の障害者だ。ただの一般人ですらない）
　未来が閉ざされた人というのは弱い。貧民街で生活している者達の姿をヘスティアは知っている。
　彼らは未来に希望を持っていない。そんな中にポランも入ろうとしている。止めたくても出来そうにない。
　翌日には昨日の事など嘘のように仕事に向かう眷族ポラン。
　仕事がある限り、彼女はこれからも進み続ける。そして、それらが無くなった時、それを考える事がヘスティアには一番つらい時だと感じた。

#1―19　襲撃

朝は飲食店でのお手伝い。昼からは【ガネーシャ・ファミリア】で雑用の仕事。夕方以降は身体検査の為に摩天楼（バベル）に赴く。

その循環（サイクル）の途中で【ロキ・ファミリア】の眷族アイズ・ヴァレンシュタインと僅かな交流を持つ赤い髪の少女ポラン・ブーニディッカ。

通常であれば何もおかしなことはないが、神々の視点で見るとポランの黒く染まった右目から定期的に黒い靄が立ち上っているという。それはポラン自身には触れられず、神以外の存在の目にも映らない。

彼女の主神ヘスティアも見守る事しか出来ない事を嘆いていた。

右目は働きに出かける時は眼帯を付けているが靄は関係なく立ち上る。

「……装備を新調してみた。これならポランでも扱えるんじゃ、ないかな？」

そう言いながらアイズは自身が身に着けている装備を見せに来る。

お互い同じケガの度合いなので何かの役に立てば、という思いで接してくる。ポランはよく気遣ってくれるアイズに何かお礼がしたいのだが、金銭的な理由で諦めざるを得ない状況だった。

言葉も今は出ないので。意志疎通がどんどん難しくなっている気がして気持ちが焦ってくる。

「長剣は握りが甘いと、危ないけれど……」

「……す。……も、……ご……せ……」

喋りながら紙に字を書く。

少しでも発生の練習をしなければどんどん声が出せなくなっていく気がした。

完全に再生不能になってもいいように。覚悟だけは持とうと――

それでも諦めたくない気持ちがある。

「……諦めるつもり？　ようやく掴みかけた希望、だと思うのに……」

冒険者ギルドから危険分子と認定されたポランにとって他人に迷惑をかける事は気持ち的にも認められない。

いつも話しかけてくれるのはありがたいが、戦闘に関しては諦めようと思っている。
魅力的な装備である事は認める。けれども、それを使う機会は――おそらく無い。
強くなるのは自衛のためでモンスターを倒したいためではない。
「……」
それでも戦いを強要するのであればポランとて腹を立てる。
生活に必要のない殺戮は好まない。あくまで仕事として冒険者家業に務めたいだけだ。
それでも尚、一縷の望みをかけて復活を望むのであれば――何年も先になる。今すぐには出来ない。
気持ちはとてもありがたいけれど、ごめんなさい、と何度も謝るポラン。
折角の申し出だが、苦渋の決断は既に下していた。
対するアイズは心の中では意気地なしと言いたいところだった。けれども、彼女は自分とは違う。ポランには彼女なりの戦い方がある。
そうだと分かってはいるが諦めたくない。現にアイズは今も鍛錬を続けている。彼女と共に復活する為に。
ケガは出来れば一緒に治したかった。それが叶わないのは本当に残念な事だ。

†

よその団員にこだわりを見せるのは自分らしくない。
アイズはがっかりしたまま本拠（ホーム）に戻り、洗面台の自分を見た時、そう思った。
いつもの【剣姫】ならば何よりもダンジョンに潜り、モンスターを多く倒す事が大切だと思っている。それなのに一緒のパーティを組もうと考えているのはどうしてか。
ポランは脱落した。ギルドも禁止令を発令した。どうしようもない。
「……うあぁ！」

不意に怒りが沸き立ち、思わず拳で鏡を叩き割る。
十二歳の少女とはいえレベル3の冒険者の一撃だ。壁を粉砕するほどの威力が出る。
たたでさえケガを治していない拳だ。無事であるわけがない。
骨折こそしなかったが擦過傷と普段から力が入らない状態の指に余計な力が加えられたため、脱臼していた。
粉砕音に気づいて慌てた団員が駆けつけ、治療に当たる。そして、思った以上に軽症であることに驚いたが念のために包帯を巻く。
保護者を自認する幹部の一人リヴェリア・リヨス・アールヴはアイズの様子を見て、ため息をつく。
深層攻略に一段落を付け、地上に戻ってきていた。明日にはまた地下に潜る予定だ。
王族（ハイエルフ）とはいえ、アイズの前では優しい母親の様な佇まいを見せる。
「何か嫌な事でもあったのか？　お前が感情を見せる事は滅多にないから他の団員達が驚いていたぞ」
「……ごめんなさい。急に……、こう、怒りみたいなのが出て……」
戦う人形とまで言われた娘にも怒りの感情があり、その事に対して後悔の念も抱けることに安心した。
おそらくいつも会うポランの事だと推測する。
それ以外には――ジャガ丸くん――感心を持たない娘だ。ここ最近は団員達の教育に熱心に取り組んでいたと思っていた。
洗面所の壁に穴が開いたくらいで感情が収まったのであれば安いものだ。もし、トイレであれば少し困るのだが。
「お前が怒ろうが無理強いは駄目だ。それぞれに冒険の形がある」
「……分かってる。だけど……、何もできない無力な自分が許せない」
そう言わしめるポランは確かに傑物かもしれない。リヴェリアは感心した。
何の変哲ものない冒険者だった筈なのに。やはり目をかけてランクアップを待ち、現れるスキルが何なのか確かめてみたかった。もちろん、それは興味本位である。
無理に覗かなくとも冒険者ギルドで公開される最低限の情報とし

て閲覧する機会が、あるかもしれない。
もし、スキルが現れるとしたらどんなものなのか。

†

次の日の昼頃、モンスター達の餌を運んでいる最中、調教中のモンスターが暴れ出して通りかかったポランは吹き飛ばされた。
大きなケガは無かったものの相手はかつてポランが倒した事のある十層域に出現するモンスターだった。
『耐久』のお陰で大事には至らなかったが、痛みはあった。
「だ、大丈夫か!?」
「……い」
ダンジョン攻略を中止して久方ぶりの攻撃だったので驚いた。
大きなモンスターの一撃は駆け出しでも危険だが運が良かったと安心する。
やはり防具は身に着けておいた方がいいと思った。
その後は威嚇される事はあっても仕事には支障が無く、この日は無事に乗り越えられた。
団長のシャクティ・ヴァルマとは会えないが、よその【ファミリア】である自分を受け入れた事に感謝の念を抱く。
夕方、打撲と診断された以外は特に変化はなく、そのまま本拠（ホーム）へと帰宅する。
ヘスティアは午前の仕事が終われば退屈な本拠（ホーム）で寝ている事が多い。
たまに神専用の浴場に向かう事もあるらしいが、退屈させていないか心配になる。
季節的はまだ温かい。いずれ冷てくる。その場合、この部屋だとかなり冷える恐れがある。今のうちに暖房設備を整える準備を計画することにした。
今の給金で大幅な改善は難しいが、住みよい場所は心の平穏を齎（もたら）す。
（……そういえば、ドレッドノート。君、私を守ってくれなかったよね？　あれはどういう意味なのかな？）

合間に声かけをするも返答はない。特に決まった時間は設けていないが思い出した時は尋ねようと心がけている。
もし、何らかの返答があれば驚くのか、それとも嬉しくなるのか。
モンスターではあるが新しい発見は好きだった。
そして――
ふと気づけば地面に押さえつけられている。
「……？」
「よ～し、捕まえた。……全く手間を駆けさせやがって」
急な場面の転換。ポランはしばらく呆けていた。
というより何故、知らない声が聞こえるのか。それも大勢。
様々な音が耳に届く。右耳は奇麗に無くなっているが聴覚は無事だ。
「う、動くなっ！」
強く押し付けられ、苦しさが襲う。
ここは何処だと首を回そうにも自分よりも強い力で押さえつけられているので動けない。
「俺がガネーシャだ。……で、賊は捕まえたのか？」
「はっ。こいつです。先日入ってきた新人の……」
「なんとポーラか」
「……ポランです」
「そうか。……はっ？　待て待て。ガネーシャ、超困惑。賊がチャランだと!?　どういうことだ？」
今の言葉に他の団員は付き合わなかった。その事に気づいた象の仮面を付ける主神ガネーシャは軽く咳ばらいをし、言い直す。
ここは【ガネーシャ・ファミリア】の本拠（ホーム）にある中庭であった。
「おい、アラン。……っと黒い煙がガネーシャの行く手を遮っている。確か水を駆ければ払えるんだったか？」
「俺達には見えないんですが、振りかけるように撒けばいいんですか？」
「やってみろ。それより、何故、こんなことをした？」
そう問いかけてポランが何も言えない状態であることに気づくの

に数分を擁した。
挨拶以外顔を合わせる機会が無かったので。
ガネーシャは紙とペンを持ってこさせようとしたが、がっちりと固められているので字が書けない。尚且つ事態が事態なので解けない。

†

桶に入れた水を柄杓（ひしゃく）の様なもので散水する。黒い煙は神の目にしか見えないので団員達は手探りで行（おこな）った。
煙の元凶はポランの右目なので完全には消せない。
「本当にこんなことで払えるとは……。摩訶不思議。それで、ウラン……。いや、ポランよ。どうしてこんなことをした？　事情によれば許してやらない事も無い」
「……ガネーシャ。声が出せない相手に何を言っても無駄だとそろそろ気づいたらどうですか？」
それはそうなんだが、と思いつつ迂闊に開放も出来ないのでどうしようか悩むところだ。
ポランを拘束してしばらくすると団長のシャクティが武装した姿で現れた。
現場の惨状に顔を顰めつつ周りの眷族たちに指示を飛ばす。ポランの耳には何らかの破壊工作が起き、その後始末に右往左往している。そして、その犯人が自分である、と。
なにがどうなってそういうことに至るのか。
「お前達、そう押し付けていれば何もできないのは当たり前だろう。もう少し工夫しろ」
シャクティの言葉にポランを拘束している団員は緊急時の為に、と言い訳をする。
ガネーシャには一旦離れてもらい、ポランを見据える。
「……もしかして……、何も覚えていないのか？　もしそうだとすれば……。おい、一旦介抱してみろ」
「……しかし。こいつを捕まえるのに……」
「いいから。私が責任を取る。それとケガ人をさっさと運べ」
的確に指示を飛ばしつつ、解放されたポランの首を掴むシャク

テイ。その感触からも先ほどまで大暴れした不審者とは到底思えなかった。それに顔はとても落ち着いていて現状を理解していないように感じる。

「……声は聞こえるな？」

「……い」

「どうしてここに居るのか……、知らないんだな？」

シャクティの言葉に頷くポラン。その後で盛大にため息をつく団長は首から手を離した。

自分の推測はあながち間違っていなかった、と。

返答に苦慮するポランに事情を説明する。

中庭に居たモンスターを突如ポランが現れて肉弾戦で打倒した。それに慌てた団員が取り押さえようとして何人か吹き飛ばされた。その後はレベル3以上の冒険者によって拘束され今に至る。

「？　……え？」

事情を説明されても理解が及ばないポランに自分の身体を見てみろと告げる。

すると手が真っ赤に染まっていた。というより、左腕が折れていた。痛みはそれを確認した時、襲ってきた。

おそらくポランを取り押さえた団員がへし折ったものだ。

「……事情は理解した。そして、お前は自らを危険な存在へと変貌しようとしている。……といっても自覚は無いだろうがな。……こういう場合はどうすれば正解なのか……」

回復アイテムを持ってくるように命令するシャクティ。抵抗があるのは理解しているが団長命令によって実行に移させた。

ポランは何も知らないし、何も悪くない。けれども、現状はそれを許さない。

尤も（もっと）、単身のポランに襲撃されて大慌ての【ファミリア】に少なからず失望している。

相手は確かにうちに仕事に来ているよその【ファミリア】の眷族だ。だからといって襲撃を簡単に許しては沽券にかかわる。

†

ケガの手当てを受けた後、しばらくあまりの事に放心していたポラン。

予想だにしない事態に思考が働かない。

複数人の監視の下、事務室に連れていかれた後で今日の事を紙に書かされた。

「冬場の用意をしようとしていたところまでは覚えているのか」

それ以降が何故か思い出せない。

唐突な変化だった、と思うと紙に書く。

シャクティにしてみれば急に襲撃に来る理由が浮かばない。団員達が意図的に情報を隠蔽でもしているのであれば。しかし、それとて神の前では無意味だ。

「……右目に宿るモンスターが勝手にやらかした、と考えるのが自然だな。しかし、武器も持たずに素手でシルバーバックを倒すとはな。それはそれで感心するぞ」

「団長……」

もし、剣でも持っていればもっと事態は深刻になっていた筈だ。打撲程度であれば運がいいと思える。それにポラン自身は評判が良い事を知っている。

つい先日、たまたま出会ったリヴェリアから話を聞いていた。とても良い眷族だと褒めていたのが印象に残っている。

「それで、目玉のモンスターとは意思疎通が出来るのか？」

この質問に首を横に振る。何度か問いかけたことはあるが未だ返答は無い、と。

それが今回はどういうわけが急に顕現したらしい。

どういう理由でそうなったのか、全く分からないから困っている。

（もし、仮に興味本位だとして私がポランを殴り飛ばしたら、後で復讐しに来る、という可能性はあるのか？　こう、いきなり殴ったり……、なんてことをしてはダメだろうな）

シャクティは件（くだん）のモンスターに少し興味があった。

もし、自分の推測通りに現れたとして現場が混乱する事は変わらない。当然、ポランもただでは済まない。

それに――

「……もういい、離してやれ。今は元に戻っている」

シャクティの言葉に戸惑いつつもポランを解放した。

地面に倒れ伏していた彼女はしばらく起き上がらない。それは他人に迷惑をかけてしまったから、という気持ちが強く表れているから。

迂闊な行動は出来ない。それをよく知っているがゆえ。

（己の立場を理解できる眷族……。歳若いのに大したものだ。私の妹が居たら……）

素直で優しい冒険者に優しくしてしまうのは立場的には不味いのだが、それでもやはり怒れない。

ポランの頭を撫でるシャクティに小声で指示を出すガネーシャ。

黒い煙に触らないように、という配慮だ。

†

無罪放免とはいかないが、ポラン本人に罪は無い。彼女は野生児ではなく、憑衣したモンスターの仕業なのは明白だ。

もしそれらが演技だとするならばヘスティアが虚偽報告している事になる。

神の前で嘘を付ける冒険者に覚えが無いし、ガネーシャ達もそんな存在は知りえない。

「モンスターの仕業だとして、彼女から引き離すことは出来ないものか」

「目玉を引っこ抜いてみるか？　私はヘスティア様に恨まれたくないのだが……」

聞いた話しでは液体状のモンスターだから浸透した部分がある限り復活する恐れがある。

駆除する方法はポランを殺すこと以外に無いと言われている。だからこそシャクティは躊躇っている。

それとうつ伏せになっているポランにガネーシャは戸惑っていた。

神に対して不快感を与える黒い煙。これがあるかぎり近づけない。

無理を通せば可能だが、嫌な予感が全身を駆け巡る。

（攻撃対象が分かれば後は対処方法を敷くだけだ。けれど、彼女の気持ちは……混乱していそうだな）

もし、このまま迷宮都市オラリオから追放という事になれば更なる被害が別の場所で起きる、可能性がある。かといって謹慎や監禁はポランの人格を壊す。

総合的に考えて被害はモンスター一匹分と巻き添えでケガをした数名。モンスターを除いた死者が居なかった事は幸運だとしても、どういう沙汰を下せば納得するのか。

意思疎通に難があるとはいえ、懸命に努力を重ねてきた事は報告で知っている。

（追い出した後は物乞いになるか、そのまま何者かに襲われて人知れず死ぬか……。私個人としては不幸な目に遭ってほしいとは思わない）

なにより幼い少女だ。懸命に頑張る姿を見れば誰もが保護欲を掻き立てられる。

それは他の眷族にも言えるが。

（モンスターとの対話……。それに望みを託すしかないか。しかし、そんなことが果たして可能なのか、ではなくやるしかないんじゃないか？）

丁度、熟練の調教師がたくさんいる。ただ、見た目が悪い。印象も悪くなる。

ため息をつくシャクティ。自分が思いついたとはいえ、何とも酷い案だと軽蔑しそうになる。

「罰を……受ける気はあるか？　まことに不本意な事だが……」

シャクティの提案にうつ伏せのポランは頷いた。

潔いところがまた良心を攻撃する。

早速他の団員から調教に使う首輪を持ってこさせ、ポランに身に着けさせた。

（モンスターとしての特性があるなら何らかの反応がある筈だ。……最初からこうすれば、なんて出来るか）

冒険者としてのポランには何の意味も無い物だが魔石を持つモン

スターならば制御出来るはずである。
被害を抑制するためにも心を鬼にする。

†

見栄えがとても悪いし、ガネーシャがとても心配しだした。
そもそも人間（ヒューマン）の少女に首輪を付けるのだから神々の会合に――もし――情報が洩れたらいいように遊ばれる。
シャクティとしては主神に涙を飲んでもらうしかない。一緒に話しの種にされる覚悟は決めた。
（後はモンスターの特性が現れた時に発動させるだけだが……。一発殴るか？）
罰という事なら拳骨一発はありえるけれど、少し抵抗を感じる。
腕を骨折しているという事だから、後々勝手に表れるかもしれない。だが、念押ししておく意味でも、と。
苦渋の選択の末、シャクティはポランのこめかみに拳を見舞った。
ついうっかり。思考の中では子供を叱る程度の一発にする予定だった。それがどういうわけかモンスターを倒す癖（くせ）が働き、遠くに吹き飛ばした。
「うあっ！」
レベル４の少し本気の一撃だ。顔面の一部が粉砕骨折していてもおかしくない。なによりシャクティの力は相当に強い。
らしくない、と思いつつポランに駆け寄るも彼女は口や左目、無事な左耳から血が出ていた。
（うわぁぁ！　私は何て愚かなんだ。ああ、アーディ……。幻なのにえらく怖い顔にならないでくれ……）
かつて存在した大切な人物の顔を幻視したが、それがまた深層域のモンスターも逃げ出すような憤怒の形相だった。
か弱い女の子に容赦のない顔面攻撃（パンチ）。怒るなという方が無理だ。
「むっ!?　シャクティ、気を付けろ。気配が強まった」
「そ、そうか」
冒険者だけではいつ襲い掛かってくるか分からないが、黒い靄を見る事の出来る神が側に居た事を思い出し、納得する。

自分達側も警戒してみたものの気配は掴めない。
無言のまま団員達に離れるように合図を送る。その後ろ側では何体かのモンスターが騒ぎ出した。
暴れ出した、というよりは神と同様に嫌な気配でも感じたようだ。
それに彼ら(モンスター)は決して調教師(テイマー)を傷つけなかった。
左が白目を向いたポランはゆっくりと上半身を起こす。
何度かせき込みながら猫人(キャットピープル)のような腕使いで殴られた顔や口から出た血などを眼帯で確認する。
それからすぐに唸りだした。その様子を見たガネーシャの視界では黒い靄がたくさん吹き出し、怒りを表しているようだった。
他の団員達に守られた神をよそにシャクティは迎撃の構えを取る。
肉弾戦を得意としているが相手は先ほどまで大人しかった少女だ。気持ち的には抵抗がある。
(……あいつ。攻撃されたら恨みを抱くのか……。それで仕返しに……。モンスター相手でも構わないとなると……、厄介ではあるな)
そう思索している内に物凄い足さばきで接敵してきた。思わず驚いてしまったが、気持ちをすぐに切り替えて迎撃態勢を取る。
長身のシャクティに対し、小柄なポランは大人相手には厄介な存在であった。事実、懐に飛び込まれたシャクティは迎撃の困難さを知る。
「……調教師(テイマー)。スキルを使え」
「は、はい」
複数人による『スキル』の使用により、直ちに首輪が発動する。
基本的にモンスターに痛みを覚えさせる、というよりは屈服させ主従の誓いをさせるのが目的だ。あまり力技を好まない主神の命令で普段であれば長い時間をかけて信頼関係を築く。
今回は緊急時の為、多少痛めつける事も視野に入れていた。
「……はぁ?」
急に身体の動きが止められ、ポランは辺りを見回す。といっても黒い眼帯だが。
上手く『スキル』が効果を現したようだ。

様子を見ようと顔を近づけてきたシャクティの顔を殴ろうと威嚇しながら右手を繰り出す。

「威勢がいいな。……今のは私が悪かった。痛かったろう。……回復薬（ポーション）を持ってこい」

「いいん、ですか？」

「ガネーシャが許す。団長の指示に従ってくれ」

心の広い主神で本当に良かったとシャクティは思った。

分け隔てなく生き物を愛そうという心を持つガネーシャ。それゆえに人望が厚い。団員数もオラリオで一番と言われている由縁である。

†

拘束されたポランはシャクティの手によって顔に回復薬（ポーション）を塗られると先ほどまでの憎悪の炎を消沈させた。もちろん、ガネーシャの見解だ。

唸り声は続いているが落ち着きを取り戻しつつあるのは分かった。

実際に目にして驚く変化にシャクティも言葉を失うほどだ。

（女戦士（アマゾネス）の狂化に似ていなくもないが……。これが憑衣か……。本当に厄介だな）

安心したのも束の間、脛を蹴られた。

駆け出しの力とは言え、結構響き、思わず体勢が崩れる。それを見計らったように身体を回転させて後ろ向きからの一撃を加えてきた。

知る者が見ればその攻撃をこう呼ぶ。

裏拳。

意表を突かれる形で打ち込まれた一撃にさしもの【象神の杖（アンクーシャ）】も今度こそ地面に倒れ伏す。

痛み自体は大したことは無い。けれども衝撃は大きかった。特に気持ち的な部分が。

「だ、団長っ!?」

「……だ、大丈夫。大事は無い……。驚いただけだ」

脚の攻撃からの連携に驚いた。そして――

こんなに簡単に地に伏せるとは思わなかった。

（……おいおい、なかなかやるじゃないか。こんな攻撃で倒されたのはいつ以来だ？）

追撃があるかと思ったが無かった。

転がりつつ距離を取って確かめると腰に手を当ててシャクティを見据えている姿が見えた。実にふてぶてしい態度で。

レベル４の冒険者をものともしないモンスターは深層域くらいだと思っていたが、と自然と湧き上がる闘争心にシャクティは思わず嗤った。

はたから見れば邪悪な笑みだ。一部の団員達は嫌な予感を感じたり悪寒を感じたりしている。

（あ、いや。駄目だ。攻撃してはダメだ。落ち着け私……。モンスターに見えるがポランだ。か弱い少女だ。駆け出し、駆け出し……）

本気で戦うとなったら確実に殺してしまう。少なくとも身体はポランのものだ。彼女の意思とは関係ないところで攻撃を繰り出したモンスターに責任がある。

見た目には凛々しい麗人のシャクティも年下には弱かった。もちろん、誰でもいいわけではない。

その後、落ち着いて拘束するように言いおいて団員達がポランの手を取り、静かに組み伏せていく。ここで大事なことは焦らないこと。それと攻撃の意思を見せない事だ。

その結果、大人しく地に伏せる事になる。

†

何も情報を得ていなければポランを地面に押さえつけるだけで何人か吹き飛ばされていた筈だ。それが情報一つ貰っただけで被害が無くなる。

取り扱いが難しい眷族は初めてで思わず苦笑が漏れる。

「……対応策を敷くだけでここまで容易になるとは……。全く不思議な生き物と化したな……」

「ガネーシャもびっくりだ。伝え聞いた話では背中から煙が出たら気を付けろと言われた。それは眷族にも見えるらしい」

「私も聞いたが、今のやり取りでは確認できなかった」

複数の団員達に抑え込まれたポランに声をかけるガネーシャ。自分達は怖くない。友達になろう、と。

しかし、当のポランは唸るだけだ。それと左目が白いので気絶状態だと気づいた。

「しかし、これで益々安易に追い出せなくなったな。この場合はどうすればいいのだ、ガネーシャ？」

安易に殺すわけにもいかないし、もう一度殴ってモンスターの方を上手く気絶させる。

そんな器用な事を出来る自信が無かった。

ならば、餌付けしかない。幸い、回復薬（ポーション）の恩恵は理解しているようだ。それと無尽蔵に欲しがらない。

凶暴性は増すが肉体変化は確認できなかった。気絶した相手を起こすには、と考え顔に冷水をかけてみる事にする。

すると意識を取り戻したポランが何事かと慌て始める。

（……もしかして、このモンスター……。水が弱点なのか？　黒い靄は聖水か何かで簡単に洗い流せると聞いた気がするし。もしそうならとっくに右目の黒い部分が解消しているか……）

シャクティはポランに顔を見ずに鎮める事を頼んだ。もちろん、窒息しないように気を付けると約束して。

モンスター乗っ取られて暴れるのは本意ではなかった彼女は快く承諾した。

早速、水桶に水を並々と入れたものを運ばせ、それに右目を沈めるように顔を付けさせた。

ほぼずっと発生していた黒い靄はガネーシャが見たところ、水中に消えていっているという。ただ、黒目だけは解消できない。

眼球を抉ってもう一度、顔を沈めるかという考えが浮かんだが残酷性によって良心が痛んだ。特に幻で出てきたシャクティの妹の形相が一段と怖かったので。

（ごめん、ごめん、ごめん）

幻の妹に叩かれるシャクティ。今回は仕方ないので諦めるが危機に陥ったら妹が止めてもオラリオを守るために眼球は抉ると誓う。

多くの団員とたくさんの住民の安全こそが優先される。
ここに個人の感情は持ち込めない。だからこそ心を鬼にする。

#1―20　ヴェーラ

結論から言えばポラン・ブーニディッカの右目を浄化する事は出来なかった。水で消えるのは靄だけ。

おそらくモンスターの体液がポランの肉体に馴染んでしまったため、半ば共生の様な関係が出来てしまった。つまり――

彼女を殺さない限りモンスターを真に倒した事にはならない。

現時点ではそう結論付ける事になる。シャクティ・ヴァルマとしては納得したくないが様々な実験を行(おこな)った結果であるので致し方ない。

それに学習する能力は本物のようで仲良くなる努力を重ねれば――人にもよると思われるが――唐突な攻撃しなくなった。それと神に敵意を剥き出しにする事は当初から無かったが、黒い靄(もや)による嫌悪感の正体は相変わらず不明であった。

「おそらく神に嫌悪感を抱かせるもの、という意味しか無いのかもしれない」

どういう原理かまでは神にも分からない。

神が分からない者を下界の住民や冒険者が理解できるのか、という問題が浮上するが脳筋気味の者達は早期に考える事をやめた。シャクティも無理に考えたくないタイプであった為、敵か味方かの判断だけしたかった。

数日から一週間ほど実験をしながらポランの素行を見ていたが冒険者である彼女自体は何の問題も無い。寧(むし)ろ仕事熱心な良い眷族という評価だ。

モンスター化した場合、随分と言う事を聞くようになった今は可愛いやんちゃ坊主といった印象を受ける。

強さ的にはレベル2の上位。元々の身体を失った事を考慮して――弱体化している事も加味して――認定した。

伝え聞いたことが本当であるならばもっと強いモンスターだったのだろうと思われる。その証拠に格闘技術はとても高い。シャク

テイをして苦戦するのでは、と思わせるほどだ。
「【剣姫】をズタボロにしたモンスターは本当に強かったのだろう。肉弾戦であればそれほどでもない、としても……」
主神ガネーシャに団長として報告する。
象の面を被った筋骨隆々の男神はうんうんと頷きながら聞き入っていた。難しいことは理解できなくとも敵対関係のところはしっかりと頭に叩き込む。
他の団員が殺害されるような事態も無く、多少の暴力行為を除けば平和そのものだ。――当初に比べれば。
あわよくば、という欲さえ出さなければポランはおそらく安全に管理できる。団長は少なくとも自信を持っていた。

†

【ガネーシャ・ファミリア】に出向してしばらく経ち、神ヘスティアは不安な報告を受けずにいる事を幸せだと感じていた。ポランの声は相変わらず聞き取れないが、それは半ば諦めている。――神としては諦めてはいけないのだが、治す方法が浮かばない。
治療費を稼ぎたくてもダンジョンに潜れない。この手の回復アイテムは高額なので店での給金では何年もかかってしまう。かといって貯えを使うと今後の食費が危うくなる。
神はいいとしてもポランはいつまでも仕事が出来るとは限らない事を感じているので。
(ギルドに眷族募集をかけているけど、未だに参入者は現れない。新しい人材が今の時期は来ていないのかな?)
唸りつつ募集要項の見直しを考えている横でポランは身支度を整えていた。
神が自堕落な生活をしていても毎日変わらず、備蓄の管理や掃除、調度品の片づけなど、とにかく忙(せわ)しなく動いていた。
仕事の時間まで肉体的な鍛練も欠かさず、動ける間は様々な場所に向かっていた。
その甲斐もあり、資金的に困窮する事態は起きていない。
「おー、ポラン君。ガネーシャのところは慣れたかい? 随分と長く

通っているけれど……」
「……い」
「当初ほどの暴力沙汰が無いだけでボクは嬉しいよ。夜間の手伝いはどうたい？　あそこの女主人は怖いって聞くけど」
報告は主に筆談だ。
冬場の支度も既に済んでいる。多くは【ガネーシャ・ファミリア】の厚意によって早めに用意できた。
もうすぐ一年の終わりが近づく。
（……早いものですね）
迷宮都市オラリオは四季のある都市だ。冬になれば雪が降る。そうなると普段は半裸な女戦士（アマゾネス）達も多少は着こむ。
【ステイタス】の恩恵である程度は我慢できるそうだが、やはり寒い時は寒いらしい。

†

雪が降り始める頃、団長のシャクティと共にポランは【ロキ・ファミリア】に向かった。
時間をかけて調査した結果を【剣姫】に伝えるために。
既にモンスターの脅威度は下がった。後は対処方法を伝えれば恐れるに足らず。そうシャクティが自分の責任で判断した。
結局のところポランからモンスター『ドレッドノート』を引きはがすことは不可能。であれば付き合い方を模索するしかない。
なにより、このモンスターは普通じゃない。
【ロキ・ファミリア】の眷族に警戒されながら応接室に大人しく座る事になったポランは居心地悪そうに待機し、話し続けるシャクティを見守る。
【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインとは度々会う機会はあったが戦闘に発展するような物騒な事態は無く、軽く挨拶する程度。ベートも威嚇はしなかった。しかし、それ以外の眷族――特に下級――の対応は未だに険悪だ。
「最近は言葉を発するようになった。片言だが……」
「……俄（にわ）かには信じがたいな」

そう言ったのは副団長のハイ・エルフ『リヴェリア・リヨス・アールヴ』だ。

椅子に座す彼女は眉間にしわを寄せつつ訝しむ。

学習する事は聞いていた。言葉については幻聴ではないかと思われていたが――そうではなかった。

ポランの声を奪っているとも見られるが真実はまだ不明だ。

「モンスター化しているかと言えばそういう気配はないらしい。見た目に変化があったかと聞かれれば……、特に変わった印象は受けない」

「そちらの眷族の被害はもう殆ど無いのだな？」

「ああ。適切な対処をすれば恐れるに足らず。元々の身体であれば危険であっただろうが……。伝え聞いた危険性は確認できない」

今のところ平和的に話しているがあまり事情を知らない眷族からは『何故、【ヘスティア・ファミリア】でしないのか？』と疑問を抱く。

そもそもポランの事情を伝える必要性が理解できない。しかし、これにはリヴェリアと団長のフィン・ディムナが経過報告を希望したためだ。

特に団長はモンスターの方に興味があった。

未知の強敵であり、自身の名声を高める為ならばどんな方法だろうと問わない姿勢を持っている。

「……それよりこいつはいつダンジョンに潜れるんだ？　まだギルドがウダウダ言ってんのかよ」

「そのようだな。ガネーシャを通しても許可は下りなかった。というより何を気にしているのか……。脅威度から言えば単身でなければ既に対処方法が確立しつつあるはずなのだが……」

謹慎も追放も出来ず、かといって危険なほど強いかと言えば今に至るまで平和だ。

主神が怖がることを除けば、だが。

今のままでは何もできずにいずれは餓死する。それを防ぐために外での仕事は許可されている。これはミア・グランドが睨みを利かせている為だと思われる。

シャクティとしては学習するまま放置するより、ダンジョンに放り込んで好きにさせる方が健康的ではないかと思う。何かあれば第一級冒険者が相手をする。特に【剣姫】はやる充分だ。それに――

ポラン自身もある程度の覚悟を決めている。

†

彼女の主神は放任を決め込んだ。どうあがいてもどうすることも出来ない。意見は言えるけれど、それだけだ、と。

今後の経過を――今のところは【ガネーシャ・ファミリア】に任せている。もちろん、何があっても恨まないと約束していた。

シャクティから見てヘスティアはとても優しい神様だった。ガネーシャからも話しは聞いているが裏のありそうな悪の匂いは無かった。

「うちのお姫様が準備を終えたらギルドに大量のヴァリスを叩きつけるよ。僕としても一向に情報を出さない彼ら(ギルド)に苛々してきたところさ」

人当たりの良い笑顔だが、団長のフィンとて今のままでいいとは思っていない。

特にかのモンスターの情報はどうしても欲しかった。ベートの話しによれば一つは【ディアンケヒト・ファミリア】にあるのが分かっている。ただ、アミッド・テアサナーレをもってしても調査が難航しているというのは聞いていた。

魔石が無い為か、外殻が今も消滅せずに残っている。しかも、それは物凄く硬い。

残念な点は小さくて武具に使えないこと。体液も同様にほんの僅かしか調べられないので新たな薬品の開発に使う事は出来ない、と。

成分分析も難航していた。いずれ、ポランの許可を得て右目の摘出も視野に入れるとかいないとか。

「新人冒険者に様々な伝が出来る事は喜ばしい。彼女も喉さえ治ってくれればもう少し良い仕事に励めるのだが……。こちらは絶望的なようだ」

モンスターの影響か、心意的なものか。

シャクティの見立てでは治っている筈だ。機能の大半をモンスターが奪っている為に出しにくくなっている、と予想している。

報告している間、ポランは実に大人しい。声が出せないとしても。

モンスターの脅威があるとは到底見えない。武器の携帯は禁止しているので仮にいきなり変貌しても第一級冒険者が数人も待機している。大事は無いと思われる。

ここにはモンスターを畏れる軟弱者は下級冒険者だけだ。

「経緯はどうあれあのモンスターとは一度しっかり戦ってみてぇ」

狼人（ウェアウルフ）であるベート・ローガはドレッドノートに勝ったことは無い。それが少し悔しかった。

現時点で真っ向勝負しても勝てる気がしない。そんな思いをさせたモンスターは深層域にでも行かなければ出会えないと思っていた。しかし、今回のモンスターは浅い階に出現した。

キラーアントのように大量に出てしまうと危ういが、数匹程度ならまた戦いたいと思った。例え足をもがれる結果になろうとも。だから、チラチラとポランを見てしまう。

モンスターとしての武装の無いドレッドノートは話しにならないほど弱い。もし、仲間を呼ぶ能力があるのならば呼べ、と強く願っていた。――その為にはダンジョンに潜ってもらわないといけない。自分達ではかのモンスターを出現させられる自信が無いので。

†

報告を終えた後、シャクティは自分の【ファミリア】へ戻り、ポランは手伝いの為に『豊穣の女主人』へと向かった。

夕方以降から混む店なので早めに行き、出来る事をこなす。

店員達はポランの事情を知っても毛嫌いせず、色々と仕事を教えてくれる。その中で猫人（キャットピープル）のアーニャ・フローメルは仕事をさぼる為にポランに仕事を押し付けようとする。

給金が増えるのでポランは構わないのだが主人であるミア・グランドはよく怒っていた。

「あんたには金がかかってるとはいえ……、こいつの仕事を肩代わりなんかするんじゃないよ。それと無理に酔っぱらいの居る時間帯に

居なくていいからね」
　多額の資金を投じて【ロキ・ファミリア】から守ってくれたはずなのに優しいミアに申し訳なさを感じていた。
　本当ならダンジョンに潜り、もっと稼いで礼がしたかった。それが出来ないのでお手伝いで頑張っている。ただ、それだと返礼に当たらない気がしていた。
（無理にでもダンジョンに潜るべきか。サポーター要因では駄目なのかな）
　仕事の合間に考え事が多くなり、ちょくちょく手が止まる。そういう時にアーニャから指摘される。普段はそこまで細かい指導はしないのに。
　彼女の他にも担当給仕がおり、それぞれ何らかの事情を抱えているらしい。
　今日の分の仕事を終えたら本拠（ホーム）に戻るだけ。明日も明後日も。
　冒険者になった筈なのに店の手伝いばかりする事になるとは――
　ポランは将来設計の見直しに迫られていた。
　あくる日、店に訪れると何者かの襲撃にでもあったかのように荒れ果てた店内に驚いたが、アーニャ以下の店員達はごく普通に片付け始めている。
　荒くれ者の冒険者が夜中に騒ぐことは良くあることだと教えてもらった。もし、その時間帯にポランが居ればひとたまりも無かった、とも。
「ポーラが居たら報復の連鎖ニャ」
　ここ最近はポランではなくポーラという名前で働くことになった。偽名程度は冒険者界隈では普通の事で、余程の悪人でもない限り大事にはならないとか。
　ポランの場合はミアの気分でそう呼ぶ事に決定した。
（私が気絶すると報復の連鎖が起きるって意味か……。それは怖い）
「例え暴れてもミャーが止めるけれど……。新規の客は……ヤバイニャね。……相手側にとっては」
　ニャハハと笑いながらアーニャは言った。

普段はお気楽な雰囲気を醸し出すが荒くれ者の多い冒険者相手でも決して引けを取らない実力を持ち、何度か彼女に止められているという。その時の記憶が無いのでポランにとってアーニャがどれくらい強いのかは未だに分からない。

アーニャ以外の給仕も並みの冒険者より強いのだとか。一番はミア。絶対服従並みの存在感がある、と多くの給仕が恐れている。

†

冬の始まりを告げる雪がオラリオに降り始める頃、本拠（ホーム）の中はとても冷える。普段から薄着だったヘスティアも厚着する。

神とは言え人並みの感覚を持ち、ガネーシャでさえ寒がる。

そんな中、女戦士（アマゾネス）達は持ち前の【ステイタス】の恩恵で普段と変わらない格好が多い。半ばやせ我慢にも見える。いや、寒いと思う者も居る。

服装について女戦士（アマゾネス）は絶対に薄着でなければならない規則は無く、靴を履くのも自由であった。

「うー、寒い。冷えて来たねー」

寝床の調整を見守りながらヘスティアは室内で白い吐息を吐いた。

満足な暖房が無いので何もしなければ小声死にそうな程温度が下がってきた。

ポランは神の為に布団を多めに仕入れていた。暖炉も別室にあるにはある。使うのは今日が初めてなので火事対策は万全にした。

（……早めに煙突掃除しといて良かった）

廃墟同然の教会もかつては人が住んでいた。その名残は今もあり、人並みの生活を送れる様々な調度品があった。今はボロいけれど――

石造りなので延焼はしないはずだが煙が充満するか、これから確認する。

「煙りに燻（いぶ）されて天界に送還された話しは聞かないけれど、ボクが最初になったらいい笑いものだ。こういう時、鍛冶師（スミス）達のところは温かいんだろうな」

「……すね」

年中熱気に包まれた場所だ。確かに温かそう。
冬場も彼らは仕事を続けている。だからといって暮らしやすいかと言うとそうでもない筈だ。ずっと高温に晒されている。水分や塩分補給は欠かせない。
仕事が終われば竈(かまど)の日は消される。
「手を怪我しているのに力仕事ばかりさせて悪いね」
神の目からポランの右目から黒い煙が立ち上っているのは見えている。近づけば嫌悪感を抱くことも相変わらず。それでも眷族の側に居て見守る事が自分(ヘスティア)の仕事だ、と。
そんな生活をいつまで続けられるのか。
下界の住民と神は刹那的な出会いだ。そう思わないのは短命な下界住民くらい。代わりにポラン達は神の存在を身近に感じられる事を喜びとしている。それは第一級冒険者であっても。
(この煙りはボクら神に対する憎悪そのもの。ダンジョンに封じられた悪意ってところか。それにしては以上に強く感じるんだよね。でも、冒険者達は平気……。まあ、それは日常的にモンスターを倒しているから、だと思うんだけど)
触れたら【ステイタス】が下がるような呪いではなく、神に対する不快感だけ。だからこそ被害が広がらない。
もし、そうでなければとても恐ろしい事になる。
(……ボクの予感だと単なる嫌悪感だけとも思えないんだよね。まだ分かっていない特性があるような……)
通常の出現ではないモンスターだ。何が起こっても不思議は無い。
更に言葉まで覚えたというし、益々脅威度が高まってくる。このドレッドノートというモンスター。
神として出来る事は少ない。
「ボクは君の味方だ。他の【ファミリア】から嫌われても構うもんか」
うちのポランはいい子なんだ。誰にもやるもんか、と自分に言い聞かせる。
一緒に寝る時、顔を近づけると尋常ではない不快感に脂汗が流れる。それなのにポランは平然としている。見えないから平気なのか、

自覚が無いのか。それがとても不思議でたまらない。
不快感を感じるのはヘスティアが知る限り神だけ。モンスターの死骸を調査する事になったディアンケヒトも近づかない程。
今のところ平気だ、という神は聞いたことが無い。おそらく最強の【ファミリア】と謳われる神フレイアも表情を歪めそうだ。

†

ポランとは対照的にアイズは鍛錬を続けていた。彼女とケガの度合いは同じだが、こちらは万全の態勢が整える【ロキ・ファミリア】のお陰で冬場の寒さも凌げる。更に大きな浴場が完備されていた。
顔の傷は目立たないが深く切り込まれた感覚をたまに思い出しては殺意を抱く。
急に機嫌が悪くなる【剣姫】に下級冒険者は戦々恐々としていた。
「アイズの機嫌はかのモンスターに向けてのもの。眷族に向いているわけではない」
保護者のリヴェリアは報告に上がる度にため息をつく。
そこまで恐れさせるとは思っていなかった。
普段は感情の無い人形のようだ、と揶揄しているクセに、と思わないでもない。
(怒りを露(あらわ)にする機会が増えた、ということはアイズの中で決戦の日取りが迫っているのか)
自身を傷つけた――いや、恐れさせたモンスターが許せない。
勝利を掴んだ筈の彼女の激情は留まるところを知らない。それがいつ仲間に向かうのか怖い反面、それは無いと信じたい気持ちがある。
壁に八つ当たりしたので何かのきっかけで仲間に行くのはそう時間はかからない。
溜まった負の感情は発散しなければ不健康だからだ。
「……全く、手間のかかる娘だ」
呆れるかと思えば口元は笑に歪んでいた。
それを見たガレス・ランドロックが茶化すが王族(ハイエルフ)は軽く受け流した。

穏やかな時間が流れたかな、と執務に集中していたフィンの耳に甲高い叫び声が聞こえた。それはアイズの絶叫。

ここまで声を張り上げる事は今までに無い。

（でも、少し不味いな。【ファミリア】に入団したての凶暴さに戻りつつある）

「いい仕上がりになってきている、と思っていいのか、あれは」

「そうだといいけど……。僕としては蛮人（バーバリアン）にはなってほしくないな」

「じゃが、ダンジョンに潜らせろとは言ってきておらんじゃろ？」

「敵が地上に居るからな」

「その敵の方はしおらしくなってきている。このままだとアイズが殺戮して終わりになる可能性が……」

モンスターとしての存在感は消せない。けれども人付き合いを学び、問題行動もここしばらくなりを潜めている。

【ガネーシャ・ファミリア】が監視している中での報告だが――

本体は既に打倒した。その上でアイズは何を倒そうと言うのか。ベートであれば同じ個体を探し出して倒す。そういうものであれば理解できる。

全く未知の情報に対して考える事が多くて疲れる、とフィンはため息をつく。

†

鍛練を続けるアイズと日夜仕事に邁進するポランが過ごして二ヶ月ほど過ぎた。その間、驚くほどお互い何も起きなかった。

変わった事があるとすればドレッドノートが片言で会話を始めた事くらい。

以前の様な暴力的な行動は取らず、シャクティの言う事をよく聞くようになった。代わりに使役モンスターは警戒を強めているらしく、ポランが近くに居る時だけ凶暴になる。

この日、雪深い景色の中でポランは雪除けの仕事をし、それが終わるとギルドに向かい、貯金の為に給金を収める。ダンジョンに潜る案件の時は冷たいがそれ以外は平時と同様の対応であった。

（随分と積もりましたね。晴れた日のオラリオはまた奇麗だ）

猛吹雪の日は外に出られないけれど、晴れた日の町並みは格別だった。

雪に足を取られる為、住民や冒険者総出で雪除けをする。そこに争いごとは見当たらない――筈だったが雪捨て場の都合で喧嘩をする光景が目立つようになった。特に捨てきれないほど積もった時は顕著だ。

魔法に余裕があれば吹き飛ばしたり、溶かす事が出来るが大半は捨て場に困る。

普段は人が行き交う大広場に雪を集め、小山を築く。その山で子供達が遊んだりする。

あまり巨大にならないように普段であれば馬車に乗せてオラリオの外に捨てる。街中で処分する必要は無いが手間がとてもかかる。

街中の問題に迅速に対応できるのは【ガネーシャ・ファミリア】の強みである。

その日の午後、雪深い街並みになっても居酒屋は冒険者で賑わった。ダンジョンの中は階層ごとに特色があるので外の季節は関係ない。

この日はポランも夜間の手伝いに奔走していた。

受け答えに難があるのは周知されていたので、それほど混乱は起きず、注文を受けていく。

「大声で騒ぐ店内だからポーラは寧ろ大人しくても違和感ないな」

ほぼ筆談だ。声だけの注文より正確にミアに届けられる。その利点を生かした動きは主人のみならず客の冒険者も感心するほど。

ただ、客としてくる神には相変わらず距離を取られる。その場合、神が来たら対応は別の者に当たらせることになっている。

距離的に人一人分以上離れていれば大丈夫なのは分かっている。不快感はかなり近くに迫らないと発動しないのはヘスティアやガネーシャで確認済みだ。

感じ方は神であってもバラバラで、三人分ほどの距離でも嫌だと感じる者も居るが――だいたい三Mが最大と算定されている。

†

鍛練とは別にアイズは冒険者依頼（クエスト）を受けるようにした。この日も【ミアハ・ファミリア】に顔を出し、素材採集の一覧表を受け取った。

眷族であるナァーザ・エリスイスの努力を紙ミアハが台無しにするので【ファミリア】の運営はずっと火の車だとか。

一番の問題は商品の回復薬（ポーション）を無償提供すること。

「……でも、【剣姫】のお陰で、ある程度の儲けは出るようになったよ。一八階層以下に行ってくれる冒険者が中々見つからなくてね」

「……そうですか」

間延びした喋り方のナァーザと声の小さいアイズだが会話はお互い支障なく交わせている。

今日もいつものことのように依頼を受け、その足で【ディアンケヒト・ファミリア】にも顔を出す。

こちらも素材採集だが、ナァーザの依頼より深い階層が多い。単身では許可が出ないので【ミアハ・ファミリア】は彼女にとって都合が良かった。

「モンスターの体液を取り込んだからとて恩恵が得られるわけではないようです。あと、毒性はありません」

今まで判明したことを伝えるアミッド・テアサナーレ。

店番している時は気づかないが彼女は小柄な人間（ヒューマン）である。いつも台の上に乗っている。

優秀な回復師（ヒーラー）でレベル2でもあるが滅多にダンジョンには潜らない。向かう場合は非番の日である事と目的がある時だけ。

眷族の全てが戦闘に特化しているわけではないが、それなりに修羅場は潜ってきている猛者（もさ）たちであった。

「……今のままだとポランさんの自我が塗りつぶされる恐れがある。二つの意識を同時に存在させられるとは思えませんし……」

「……そう」

「薬品や魔法による解決はほぼ無理……。けれども、そのまま放置も出来ない。シャクティさんのように飼い馴らす事は有益かと存じますが……。それはそれでポランさんの存在が危ぶまれます」

救う方法は現時点では見つからず。遠からず、どちらかの消滅を

待って判断するしかない。それがアミッドの結論であった。
総合的にポランを救う都合の良い方法は無い。それが分かった瞬間、言い知れない怒りがアイズの中に渦巻く。それは弱い自分へのものか、それとも無謀な真似をしたポランへのものか。

†

更に時が過ぎ、雪が解けて春が到来する。
そこに外部から一人の神が到来した。名を『ヴェーラ』という。
青く長い髪の毛。花を頭り飾り付け、目つきは鋭く。その目の下に模様があり、素行の悪そうな印象を与える風貌。
小麦色の肌で胸は大きく黒い外套を羽織っている女神。
護衛もつけずに現れた女神ヴェーラは目的もなく店を散策し、一つの店で立ち止まる。
「おー、景気の悪そうな店だな」
がらの悪いチンピラと大差のない女神ヴェーラは店主を見て悪戯っ子のように笑う。
小さな店とはいえオラリオで有名なジャガ丸くんを売っている中では割合知名度が高い方だ。
なにせ、神ヘスティアが商売しているのだから。
「ヴェーラじゃないか。薄気味悪い恰好は相変わらずだな」
「これが私の正装だ。お前ほど破廉恥じゃないんだよ」
「な、なにを～」
舌を出しながら馬鹿にしてくるヴェーラに対し、揚げ物を作っている最中なので迂闊に店から離れられない。そのもどかしさで顔を赤くする。もちろん、怒りで。
女神らしからぬ口の悪さでヘスティアを茶化す。
他の神もそうだが、話し方はそれぞれ違い、清楚な神も居れば乱暴な口調の女神も居る。
特にヴェーラは顕著である。
「君は観光に来たのかい？」
「ああ？　んー、半々かな。どっちでもねーとも言えるし、特に決まってねーな。断言は出来ない」

質問に対して曖昧な事はヴェーラにとって珍しい、とヘスティアは驚いた。

もちろん、神にも分からない事はあるのでヴェーラでも答えられない事があっても不思議では無いけれど。

この女神の特性から言えば疑問を覚えるほどに珍しい事だった。

「あー、そうだ。折角君が来たんだから教えておくれよ」

「その言い方だと答えにくいぞ。だが、質問だな？」

「ああそうさ。ある眷族がモンスターと融合……みたいなことになった。それを解消する方法はあるかい？　出来ればアイテムとか魔法で」

ジャガ丸くんの品揃えを眺めつつ女神ヴェーラは唸る。

あまりにも突飛な質問だったから。

「食われた、の間違いじゃないのか？」

「そこら辺は分からないんだ。眷族でありモンスターの特性を持つ。この場合はどういっていいのか……。もちろん、モンスターが眷族っていうオチじゃないぞ。たまたま偶然そうなってしまった事故みたいなものなんだ」

「……よく分からない言い方しやがって……。いくらアタシでも……。だが、言える範囲で答えるならば……。殺す以外に方法は無い。五体満足なんかありえない」

想定内の答えにヘスティアは唸る。希望が見えるかと期待したがヴェーラでさえも『殺す』と言った。そうなればもう二の句が継げない。

目の前でがっかりするヘスティアに驚きつつ、何が美味いんだ、と尋ねる。

どれでも、と素っ気無く言うかつての友神（ゆうじん）に呆れてしまった。

予想は出来るがヴェーラとて知っている事しか答えられないので他に方法があるとしても質問に対する答えは今ので限界だ。それ以上は新たな情報を得ない限りありえない。

「お前の周りでは愉快な事になっているようだな。その眷族、見せてくれよ」

「殺すしか言わない君に見せても……」
「質問に答えたんだ。それに文句を言われても困る」
そう言いながらヴェーラは『ジャガ丸くん抹茶クリーム味』を指さした。
見た目で判断したのでどんな味かは知らない。
二〇ヴァリス払って購入し、一口食べたヴェーラの感想は『甘味の無駄遣い』であり、とても不評だった。

†

時が過ぎ、ベートは久方ぶりに街中でポランと出会った。最近の彼女はモンスターとの境が無いほどごく普通に過ごしている。当初の攻撃的なドレッドノートが消滅したかのように。
しかし、それはありえない。
神の目でみれば未だに右目から黒い靄が出続けている。その違和感も健在だ。
「時間があるなら付き合え」
急にそう言われたポランは戸惑う。この後、酒場で手伝う予定だったので。
折角の誘いだが許可が必要だと筆談で答えた。
ちなみにモンスター側の発声もしわがれたものなので周りが静かになっていないと聞き取れない。
ポランは酒場に向かい、ミアに事情を説明する。一度、ベートを睨みつけるような視線を送ったが仕事を休む事を許した。
一見平和そうな日常を送っているポランは様々な事を考え、様々な覚悟を模索していた。その一つは当然『死』だ。
自分一人では解決しない問題に延々と悩み続け、このところめまいを感じていた。仕事も失敗が目立つようになった。だからこそ、ミアはベートの要望を呑んだと言える。
ベートは既に色々と準備を整え、武装をポランに与える。
「お前は俺のサポーターだ。聞かれたらそう言え。……言えなくていいが……。黙ってついてこい」
「……」

身体を覆う外套をまとい、ベートの荷物を持ったポランが向かうのはオラリオ中央にあるギルドだ。

多くの冒険者が止め処も無く出入りしている場所。

ダンジョンに潜るのに入念な身体検査は無く、基本的に出入りは簡単にできる。だが、ポランは駆け出しなのでアドバイザーの意見を聞いてから潜る事にしていた。だからこそ入り口で止められる。

無視しようと思えば出来る。だが、ポランはそれをしなかった。

今日、初めてギルドの規定を破って潜る事になる。その心境は複雑だ。

（……居場所がなくなる前……。私が私で居られる時間……。彼は引導を渡す気？）

思考がとぎれとぎれになりつつも自分の身の振り方をギリギリまで考え続けた。

日が経つにつれ、意識が朦朧とする機会が増えてきた。それは気絶が多くなってきた事が原因だと思われる。

仕事の合間に調査を続け、結果が出ない事に周りが苛々する。それらを毎日のように見ているとポランの心も荒んでくる。

そんな毎日だった。

気丈に振舞えるのも時間の問題――

ダンジョンに降りる階段に足をかけた時、ポランの全身に言い知れない嫌悪感が襲う。

異物が全身にまとわりつく。

「……」

ベートの後を追うように黙って降りていく。途中のモンスターは攻撃一回で散らされ、落ちた魔石はポランが黙って回収する。

そうして辿り着いた場所は一〇階層。ここからポランにモンスターを倒させる。出来れば一〇〇匹以上という要望だった。

【経験値（エクセリア）】がだいぶ減った筈なのに問題なくモンスターを倒せている。それは数値の上では何も変わっていない、と言えないか。

自身の【ステイタス】はとっくに〇（ぜろ）だと思っていた。であればこの階層のモンスターを倒すのはとても難しい筈だ。

「……数字は減っても身体の感覚はそのままか。……まあ、予想通りだな」

地上に居た時の険悪さから打って変わって安心した様な顔でポランを見た。

今回の出来事は【ロキ・ファミリア】の団長達が命令した事だ。責任は全て引き受けるという事でベートがまず取り掛かる事になった。

後ろからギルド職員の追跡も無く、治安維持の【ガネーシャ・ファミリア】からの追っ手も無い。

（駆け出しのままなら苦戦するモンスターの筈だが……。本当にしっかり戦えている。戦闘の勘って奴はすげぇな）

長期間戦闘から離れると身体が鈍ると思っていた。だからこそそうならないようにベートは日頃から鍛錬は欠かさない。

そこで失態を思い出す。

戦わせる前に準備運動をさせていなかった。急な運動は身体に悪影響だ。すぐに戦闘をやめさせ、休息を交えて無理のない戦闘に切り替えさせる。

ここでポランを潰すとアイズが激怒するので。いや、それだけなら寧ろ望むところだが後ろに控えるリヴェリアが憤怒の形相になるのは確実だ。

次の一一階層に降りてモンスターと戦わせる。

「倒せば倒すごとに【ステイタス】が上がるんだったな。下がってねぇならどうなっているんだか……」

「……ってる……しょうね」

【ステイタス】を確認する方法は神に委ねるしかない。

こうして戦闘中に体感する事はほぼ出来ない。

いくつかの能力値は既に九〇〇の大台に乗っている。その限界に近くまでは行っている筈だが、どこまで伸びるのか少し興味があった。

†

モンスターを倒して一二階層。そして、一三階層に降り立つ。

ポランにとっていわくつきの階層だが入る前に感じた嫌悪感は既

に無い。今は懐かしさだ。
火を噴く犬型のモンスター『ヘルハウンド』が徘徊する階層だが、ここでも討伐はポランの役目となる。
敏捷も問題なく発揮し、攻撃を受ける前に次々と倒していく。これでレベル2前の駆け出しという者は居ないと思わせるほど。
（数えてねぇが……。一〇〇は超えたか？　キラーアントのところを早めに抜けたのが勿体なかったかもしれねぇな）
そんなことを考えつつベートは自身の装備を確認する。
整備を終えた武具の万全は整っている。元より低階層で苦戦するとは思っていないが油断はしない。
粗方モンスターを討伐し終え、魔石の改修が済んだ。頭を見回しながら近寄ってくるポランの不意を突く形で一撃、拳を彼女の頭部目掛けて入れる。
一回で気絶してくれることを願いながら。駄目なら何度も繰り返すだけだ。
今回は――上手くいったようだ。
（確認の意味でも必要な措置とはいえ……。俺の流儀に反するが仕方が無い。悪く思うなよ）
手加減した一撃の筈だが強すぎれば殺してしまう。
殺意は乗せていないので死んではいない筈だが細かい力加減は得意ではない。
一度倒れて数分が経過した。それで身動きが無いので気絶させたことには成功したようだ。――問題はこの後だ。
唐突に起き上がったポランはすぐに臨戦態勢取る。それは普段の態勢ではなく猫が威嚇するような構え。そして、唸り声をあげる。
（これも想定内だ）
状況に満足したベートは敵に対するように身構える。
手合わせを想定しているので殺意は乗せていない。これも初めての試みなので調子自体は少し狂っている。
考え事をしながらの戦闘なので。
「俺達の言葉が分かるんだったか？　なら、かかってこい。試してや

る。ここはダンジョンだ。てめぇの土俵でもある」
「……ぎぃぃ」
歯を剥き出しにして威嚇するポラン。
一歩進もうとした彼女はすぐに立ち止まり、視点を下に向ける。その次に身体を捻りつつ腰を見ようとする。
この行為は自身の身体の調子を見るようなものだ。それが終わってベートを見て小首をかしげる。
どうして戦闘しなければならないのか、と言いたそうな疑惑の様子だ。
モンスターであれば疑問を抱かずに冒険者に襲い掛かるものだ。知恵を付けたせいで迂闊な行動を取らず、平和的な対応になってしまった。というよりそれが出来るようになったことにベートは驚いた。
「お前がどうやって出てくるか分からねぇから、ポランを気絶させただけだ。いいからかかってこい。強いのか弱いのか試してやるから」
元々の身体であれば期待したところだが絶対防御の象徴である外殻を失ったモンスターだ。弱いに決まっている。
相手の方はしばし逡巡していた。構えを解き真下に腕を伸ばすポラン。それから腰に下げていた小剣を抜き、体勢を低める。
冒険者家業を休止していたポランとは違う――何者かの態勢（戦い方）を真似たのか、人間らしい戦闘形態に見えた。
一度構えた後――何かに気づいたのか――何故か構えを解いた。
ベートが待ち構えているにもかかわらず、いやに落ち着いた様子で頭を擦る。どうやら眼帯をしている事に気づいて取ろうとしているらしい。それが遠目からも理解できた。
しばらく会わない内にかなり賢いモンスターと化したな、と苦笑する。そのまま反応があるまで好きにさせる事にした。
今回の目的はモンスターの様子を探る事だ。殺す事ではない。
用意が整ったらしく、改めて体勢を低めるポラン。そこから何の迷いもなくすぐに駆け出してきた。
その速度は下級冒険者の中では早い方だがベートから見れば遅い。

取り立てて慌てる事も無く最初の一撃を膝で受けた。もちろん、防具で。

（重くも軽くもない。これはポランの『力』か）

「……グゥ？　イィィ」

手の感触でベートが硬いと認識したポランは強引に武器を押し込む。

安物の小剣では彼の防具は突破できないが知識の無いモンスターは無心に行動を取る。

不意に脚を引けば前のめりに倒れる、筈だったがモンスターはすぐに対応してきた。その事にベートは感心した。

（反応が早い。これはモンスターだな）

拳を出せば避けようとする。迎撃する速度が出せない事を瞬時に理解した為だ。

今の自分は身体の大きな人間（ヒューマン）。自由が利いた小型モンスターではない。更に今の自分ではベートに勝てない事も。

対するベートは前面の攻撃が無敵だった時と動きが割っている事に気づいて少し戸惑っていた。

受け止めなくなった。即ち、自身の防御能力が無くなった事を理解している証拠だ。

落胆こそすれ自分の弱さを理解しているところは感心する。

（……動きが鈍い。モンスターの能力の大部分を失っていると見て間違いねぇな。……ちっ）

ベートは軽くため息をついた後、戦闘の中止を宣言する。そうすると戸惑いつつモンスターポランは武器を落とした。

そう教わったのかもしれないが、えらく従順な様子に改めて調子が狂う。

#1―21　肉塊

灰色のボサボサ髪を軽くかきつつ狼人（ウェアウルフ）の少年ベート・ローガは相手の土俵（ダンジョン）にて強さの程を確認した。その結果は想定内の弱さだった。――いや、強さだ。

落胆半分――もう半分は言葉にするには適切な表現が浮かばなかった。だが、良い表現ではない気がした。

モンスター『ドレッドノート』は身体を変えても強さが変わらない、というのは幻想だったというのは理解した。

害があるか無いかで言えば無い方がいい。しかし、害がある方が処分しやすい。気持ちの面でも。

（……元々のモンスターであれば俺はもっと非情になれる。何のことは無い。敵は倒すだけ……、確かにその通りだ）

姿はポラン・ブーニディッカだが半分はモンスター。だが、それも昔の話しだ、と言わんばかりに弱体化してしまった。敵としては味気ない。

戦う意思の薄れたものは【ガネーシャ・ファミリア】が使役するモンスターとあまり変わり映えがしない。

ベートが求めるのは本気の殺意を持つ敵だ。モンスターだけではなく冒険者でもいい。

それが無い者は敵と見做（みな）せない。

（俺が戦いたいのはこんな雑魚じゃねぇ）

荷物をまとめてポランについてこいと指示する。今はドレッドノートと化しているが言葉は理解できたようだ。落とした剣を鞘に納めてベートに近づいてきた。

本当に言葉を理解している姿に驚きつつ――

下の階に進むとポランでは戦う機会の無かった牛頭のモンスター『ミノタウロス』が現れる。

黒い右目がモンスターを見据えると威嚇し始めた。それだけ見ると気概のある冒険者に見える。

試しに戦わせるとあっさりと倒して見せた。本来の彼女であれば初見のモンスターなのに。

（……んっ？　待て……。なんであっさりと倒せる？　レベル２（ツー）にカテゴライズされるモンスターだぞ。レベル１（ワン）から見れば【ランクアップ】しなきゃ倒せないんじゃなかったのか？）

指示した自分が悪いのは重々承知した上での驚きだ。

その後も普通に倒していく。いや、動きを完全に把握し、的確な攻撃を加えている。

レベル３（スリー）のベートから見れば凄さが理解できないのだが各下から見れば――おそらく凄さが分かる筈だ。

彼に分かるのは『どうして倒せるのか、分からない』事だけ。

力押しのベートは殴ったり蹴ったりするだけでミノタウロスを倒せる。しかし、ボランは彼と同じ戦い方は出来ない。では、どうやって倒しているのか。

肉体の脆い部分を的確に剣で突き刺している。ただそれだけだ。

ミノタウロスは肉体的に強靭で刀剣類でのダメージが入りにくい。人型なので長引けば分が悪い事と多数で攻めてくる場合もある。

†

都合七体ほど倒したボランはモンスター化している筈なのに魔石を拾って袋に入れる。普段からそうするように指示されていたかのように。

【ガネーシャ・ファミリア】でボラン共々教育を受けた事が窺える。

その後、更に下の階層に降りていき一七階層目に到達する。疲労した事を自覚したのか、ベートに回復薬（ポーション）を強請（ねだ）ってきた。

言葉を覚えたといっても満足な会話はまだ無理なようで、片言で断片的な文字の羅列が多く、理解する事が難しい。

「回復薬（ポーション）が欲しいのか？」

そう言うと何度も頷かれた。

サポーター要員として連れてきたのだから自分の荷物の中にある筈だが――

ドレッドノートは自分が背負っている荷物に気づいていない。ま

たは人から貰う物だと思い込んでいるか、だ。
かなりの数のモンスターを倒したし、ポランであれば飲んでいてもおかしくないほど疲れているし、ケガもしている。――先の戦闘も加味して。
（……おかしい。俺の側にはモンスターが居るはずなのに……。何なんだ、ドレッドノートって奴は）
ベートの知るドレッドノートは小さくて強いモンスターだ。素直な態度の弱者ではない。まして冒険者でもない。
黙って見下ろす様に眺めているとイライラしたのか彼の身体を叩いてきた。更に時間が経つと蹴ってくる。気性の荒さが微笑ましく思える。けれども目の前に居るのはモンスター化した冒険者だ。それを忘れてはいけない。
彼女の額を軽く指ではじいて追い払い、回復薬（ポーション）を取り出す。大してケガもなく運動程度で使うには勿体ないが【ロキ・ファミリア】からすれば安価で大量消費したところで財布が痛まないものだ。だが、それでも数を多く持てるわけでは無いので無駄遣いは基本的にしない。
（そうだモンスター。てめぇはそれでいいんだ。敵を前にして媚びるんじゃねぇ）
ベートはアイズ・ヴァレンシュタインと違ってモンスターに復讐したいほど憎んでいるわけではない。ただただ弱い自分が許せないだけだ。それは相手にも強要するところがある。
孤高の冒険者。仲間とつるむのは自分より強い者に負けたから。そうでなければ自分の我を貫く。
だからといって弱者を屈服させたい気持ちは無い。それは卑劣なものがする事だ。
肯定と否定を繰り返し、己を鍛える。時には自分の発言が正しかろうと間違っていようと反省する時は素直に認める。彼らしくいえば認めさせろ、だ。

†

ポランに対する評価はもちろん低い。けれども同レベル帯の冒険者に比べれば高い。

単なる力だけではない何かが高評価になっている。それはベート自身には思いつかないのが腹立たしいところだが。

苛々しつつ階層主の部屋の前まで移動する。その間、機嫌を損ねたポランから執拗に攻撃を受けたが全くダメージを受けなかった。

今の彼女は――モンスターはベートに決定打を与えられなくなってしまった。それが彼にとってはとても――残念でならない。

怒りを燻らせながら階層主の部屋に入った。そこは何もない空間が広がっている。奥行きは一〇〇M（メドル）。天井までの高さ約二〇M（メドル）。壁は継ぎ目のない巨大な『嘆きの大壁』と呼ばれるものがあるだけ。

ある意味ではたった一体のモンスターと戦う為だけに用意された場所だともいえる。

ダンジョンにはこういう場所がいくつもある。そして、多くの冒険者が立ち向かう分岐点の一つで避けては通れない。

階層主は討伐されると一定期間出現しない。その頻度は数週間とも数か月とも言われる。

この一七階層の階層主は身長七M（メドル）程もある『ゴライアス』という巨大な巨人型モンスターだ。今は討伐された後なのか、現れる気配はない。

モンスターは居ないが先客が居た。

一人は金髪金眼の女冒険者であるアイズ・ヴァレンシュタイン。もう一人は翡翠色の長い髪に横に長い特徴的な耳を持つ王族（ハイエルフ）のリヴェリア・リヨス・アールヴ。

「無事にここまで来たか」

玲瓏な響きの声が無人の部屋に木霊（こだま）する。

ベート達を確認した後、リヴェリアは出口に向かい、そのまま姿を消した。

残ったのは――今日この日の為に準備を整え、完全武装した――アイズのみ。

「……てんて駄目だ。拍子抜けもいいところだった。……俺の感想としてはこんなところだ」

「……ありがとう……ございます」

ベートは軽く悪態をついた後、部屋の中央付近に位置する壁に寄り掛かり小休止に入った。

残ったアイズはモンスター化したポランを厳しい目で見つめる。

眼帯を取った黒い右目がアイズを捉える。

（お互い満身……そうい？　なのに……。なんだかあっちの方は冒険者らしい……）

対するアイズは私怨の塊でこの場所に居る。それが酷く冒険者らしくないと思えた。

未知を探求する者が一般的な冒険者の定義だ。決して私怨でモンスターを殺すものを表すものではない。

だが、それでもアイズは強くなるために冒険者になった。それが近道だった事は否定しない。

「……ここは『迷宮の孤王（モンスターレックス）』が現れる部屋、だよ」

「……」

ドレッドノートはここより上の階で生まれた。今日、初めて足を踏み入れる未知の領域である。

彼女（ポラン）は興味深そうに部屋全体を眺めた。

「……君の仲間をここで呼ぶ事は……出来る？　壁を壊して魔石を入れたりして……」

「……ナ？　キ、ギィ……」

『壁』という単語は理解したようで拳を軽く壁に打ち付ける。今のポランの拳では破壊する程の力は――辛うじてあるかもしれない、という程度だ。

アイズとてここではモンスターを倒す以外の事はしない。だからこそ試しに思いつく事など――今まで無かったし、これからも無い筈だった。

ダンジョンのボスモンスターが現れる部屋で危険な冒険をする者は基本的に居ない。いや、そういう発想を持つ者が居ない。

ギルドの規定にも無いし、過去を遡（さかのぼ）っても記載が見つかることは無いかもしれない。

アイズは自前の杭と金槌を用意しており、それを巨大な一枚岩（嘆きの大壁）に打

ち付けた。
かつてポランが指示した時のように。
小さい四角形になるように。奥に魔石を入れても零れない形を思い浮かべながら。
ベートはポランに背負わせている大型のバックパックを下ろさせた。説明が何度も必要だが理解度が早いモンスターは最後には言う通りにする。
まだ物の名前や形などが理解できないようだ。細かい説明が下手なベートにとっても難題だったが。
今回は種類別に魔石を仕分けしていない。――それらを入れた袋を取り出し、アイズに渡す。
戦闘以外の事は全く頓着しない狼人（ウェアウルフ）に任せたのは間違いだと思いつつ諦めるアイズ。その顔は明らかに失望の色が強かった。

†

大きな魔石と小さな物を分けて、魔石を作った穴に放り込む。
この部屋の壁の修復度は早いわけではないが遅くもない。元々長い時間をかけて階層主を生む場所だ。すぐに結果が出るとは思っていない。
これでドレッドノートより凶悪なモンスターが現れたらリヴェリアに助けを請う予定だ。今の自分達の強さでは敵（かな）わない敵が深層にはまだまだたくさん居る。
修復が始まるまで暇なのでアイズはポランの側に寄る。相手側は以前の敵意は見せず、大人しくしていた。
片方の目が白いままなのでポラン本体は未だに気絶したまま。それが少し不思議に見えた。
黒い右目はしっかりとアイズを捉えている。今の彼女はドレッドノートの意識に満たされた存在と言える。
（いずれは身体を乗っ取られるのかな。意識の切り替えは本人の意志では出来ないんだっけ。というか気絶している時の事は覚えてないから仕方ないか）
覚えていたら色々と教えてくれる。ポランはそういう子だ。そん

な子が懸命に足掻いている。モンスターを憎まず、現状を打破する為だけに意識を割いている。それは立派に強いと言える。

対するアイズはモンスターを倒す事ばかり。

そして今――

（お互いが同じ土俵に立っているのに戦闘に入らない。仲良くしている。……仲がいいのはポランの方だけど……）

「キィイ！」

壁に寄り掛かるように座ったまま唐突に叫ぶポラン。

その声にアイズとベートは驚いた。興味深そうに辺りを見回す。どうやら部屋全体に轟かせてどのように反響するのか確認しているようだ。表情に特段の変化が無かったので。

黙っていると余った魔石を眺めたり、他の荷物を転がしたりしている。まるで子供だ。

――子供であることは事実だが。

（……色々考えても……、私はやっぱり……。モンスターを殺す。これは譲れない）

アイズの中にあるのは復讐という言葉の他にポランを救う方法が無い事への悔しさだ。それが時間を追うごとに増えていき、彼女の機嫌は加速度的に悪くなる。

剣の鞘で地面を突く速度が上がっていく。そんな苛々しているアイズを最近の【ロキ・ファミリア】ではよく見かけるようになった。

弱い自分に苛つく葛藤のようにも見える。けれどもベートはアイズとは違うと強く思っている。

何がと問われれば即答できるほどの答えは持っていないが、とにかくムカつく。

「!?」

アイズの剣の突きではなく壁の修復による魔石の破壊音に驚いたポランが四足動物の様な体勢で壁際から飛びのいた。その動きは猫人（キャットピープル）のようにアイズ達には見えた。

ある程度離れた後で壁に向かって威嚇する。

（……凄い俊敏性……。【ステイタス】が下がったはずじゃあ？）

首を傾げるアイズがベートにどういう事か尋ねる。
数字では下がっていても身に着いた能力は下がっていない可能性があると伝えた。
どういう原理かはベートにも分からない。見た感じでしか答えられない。
「過去に聞いた話しじゃあ、恩恵（ファルナ）を失った眷族は酷く弱体化する。速度も当然下がる。だから、ポランもそうだと思ったんだが……。条件が違うのか、大して減っている感じには見えなかった」
そもそも主神であるヘスティアは未だに健在だ。
ベートが聞いたのは【ファミリア】の主神が天界に送還された後の眷族の情報である。
前例のない事態が続いているので未確認情報が多くて困る、と愚痴をこぼす。
「……神様との繋がりが保たれている間は……、【ステイタス】の数字が下がっても平気ってこと？」
「見かけ上の数字って意味かもしれねえ。……それは自分で確認（てめえ）するしかないだろうな。……元より他人の言葉なんざ当てになるかよ」
二人が話している間にも魔石を砕くように壁が元の磨き抜かれた一枚岩へと戻っていく。
異音に驚きこそすれポランはしばらく壁を見つめた後、安全だと分かればその場に蹲（うずくま）る。
傍目には赤毛の猫だ。

†

投入した魔石が全て――異音を奏でながら――潰れて壁は元の形に修復される。
特に階層主の部屋で馬鹿な実験を試みる冒険者など――おそらく――類を見ない。
――しかしながら何事にも通例通りとは行かないものだ。そうでなければドレッドノートというモンスターは現れなかった。
アイズは持ってきた剣の一振りをポランに向かって投げた。それは今回の為に用意した少し丈夫な剣だ。

自身が持つ細身の剣（デスペレート）ほどではないが安物だとあっさりと壊れてしまうので。いや、壊す、というのが正確か。

「それ……、使っていいよ」

元々の攻撃方法からは鎌の方が似合っていそうだ。

ベートは互いの荷物をひとまとめにし、安全圏と思われる場所に移動する。それといつでも出口に逃げ込めるように。

何事にも不足自体は起きるものだ。ベートとて逃走経路の確認はする。

放り投げられた武器をしばらく眺め、器用に拾い上げる。モンスターとしては確かに器用ではあるが身体はポランのものだ。

身体の動かし方は既に学んでいる。それゆえに武器を握り込むことも今は造作もない。

本来の武装を失ったドレッドノートは人間達が作った武器を持って振り回すことで戦うすべを身に着けた。

思考までは分からないがアイズは相手の出方を注意深く観察する。

「……オウ。ウ……」

物の持ち方や使い方はある程度【ガネーシャ・ファミリア】で特訓してきた。それゆうに一通りの武具も扱える。

――けれどもモンスターには理解できない事がある。

道具を使う理由だ。

そもそも一般常識が無い。元々備わっていたのは冒険者を殺す事だけ。それ以外に興味を覚える事は――通常であれば――無い。

その通例を何度も覆したのが今のドレッドノートであり、ポラン・ブーニディッカだ。

まず、地面に転がった剣を拾い、鞘から刀身を引き抜く。それを握り込むのだが、ポランであれば不揃いの指では満足な力は籠められない。しかし、ドレッドノートはそんなことは構わずに力を籠める。

痛みは共有しているのでモンスターと言えどケガの痛みは伝わっている。

「フゥフゥ」

何度か上下に振りながら調子を試していく。その後で自分の武器

も持って二刀流となる。
乱雑な動きをしながらも自身を傷つけないように剣を振る姿は駆け出しの冒険者のようだ。

†

武器を持つドレッドノートを眺めていると先ほど魔石を取り込んだ壁に亀裂が走る。
前回の様な悪寒は無いものの何が起きるのか、一応は警戒する。何も起きなければそれはそれで良しとする。
アイズにとっては前者も後者も受け入れる所存であった。
ある程度の武器を振り回していたポランが動きを止め、壁に顔を向ける。それから少しずつ後退していく。
（……成功？　……それとも）
仮に階層主が現れる事になっても構わなかった。ゴライアスは何度か討伐経験がある。
自身の【ランクアップ】も近い。更に厄介な敵だった場合は確認次第、リヴェリアと合流する。それくらいは想定している。
今回投入した魔石は上層に現れるモンスターだけ。内容はアイズは把握していないが現れるモンスターは知っている。
壁の奥からモンスターの唸り声がしたような気がした。警戒しつつアイズ達は壁から離れる。
（モンスターが出るのか、それとも何も起きないのか。例のモンスター以外か……）
ベートにしても中層域を攻略する冒険者である。そこらのモンスターに負ける気は無いが警戒は強めた。
「!?」
一段と強い力を感じたアイズ達は更に後方に飛び退る。するとすぐに壁が爆発するようにはじけ飛んだ。それと部屋全体に罅（ひび）を入れるほど。
相当な破壊音だったようで耳鳴りが酷い。ベートは獣耳なので一段と強く影響を受けた。
（鼓膜がいかれたか？　すげぇ音がしたな）

（音の波動……。発生源はやっぱり壁……。天井は少しだけ危ないけれど崩落ってほどじゃないね）

アイズとベートは冷静に対処したがポランは土煙で姿が見えなくなった。

探す余裕もなく、異常事態に対処しなければならないアイズ達は音の発生源から目が離せない。

まず最初に何が起きたのか。壁が壊れただけなのか、それとも未知のモンスターが出現したのか。

「ウォオオ！」

聞き覚えのある咆哮。これはゴライアスのもので間違いない。しかし、それにしては威容が見当たらない。

巨人型モンスターなのに片鱗が無いのはどういうことなのか。声だけということはまだ壁に埋まったままか、と。

アイズは剣を強く振り、土煙を吹き飛ばす。それでも足りない時は魔法も使用する。その結果――

嘆きの大壁を破壊した者の正体が判明する。

それは一言で言えば『肉塊』だ。そして、それを確認する間もなく武器で攻撃するポランに気づく。

彼女はろくな確認作業もせずに戦闘を始めていた。モンスターとしての本能かもしれないが無謀な、とアイズは言いそうになった。

（身体が出来る前のゴライアス？　とても気持ち悪い姿だけど……）

その肉塊ゴライアスには口があった。――正しくは肉塊に口だけ付いていて、それ以外の器官は見当たらない。。

先ほどの咆哮（ハウル）はそれが原因なのは理解した。

中途半端な状態のモンスターには覚えのないアイズ達は攻撃していいのか躊躇いを覚える。全くの未経験な事態だったので。

――それでもモンスターであれば戦わなければならない。

「ウォオオ！」

「!?」

攻撃に向かおうとしたアイズとベートは立ち止まった。ポランは全く躊躇（ちゅうちょ）せずに攻撃を繰り出している。

彼女の【ステイタス】ではゴライアスに決定打が与えられそうにない。元よりアイズ達も攻撃が通じるのか未確認だった。

二度目の咆哮の後、壁に異変が起きた。それは端的に言えばもう一つの肉塊が転がり出た。いや、二つではなく、更にもう一つ。

咆哮が上がる度に巨大な肉塊ゴライアスが湧き出てくる。

（このままだと部屋を覆いつくすかもしれない）

「……ベートさん」

声をかけるもののベートは聞こえていないのか、敵性体に蹴りを繰り出していた。

先程の咆哮の影響か、ベートの獣耳から血が垂れているのが見えた。

急遽彼の身体を引き留めて攻撃を止めさせる。その後で何か喋ってみて自身の耳が使い物になっていない事を分からせた。

「クソ。聴覚が駄目になったのか」

アイズは身振り手振りで出口を指し示す。それだけで意図を汲んでくれたようで、荷物を持って出口に向かってくれた。

ベートが助けを呼ぶまでこの奇怪なモンスターをどうにかしなければならない。悩んでいる間にも肉塊の数は増えていく。

投入した魔石の数はそれほど多くなかった筈だ。それなのに魔石の合計数より多くのモンスターが出ている気がする。

大きさは一つ五M（メドル）。このまま増えていくとダンジョンの部屋は確実に崩壊するし、それでも止まらなければ次の階層に雪崩れ込む恐れがある。

（……どうしよう。こんなことになるなんて。全部倒せるかな）

運がいい事は敵は身動きが取れない。転がる事と咆哮しか出来ない。

転がると言っても自分の意志ではなく慣性に任せたものだ。ここから人型に復活でもすればそれはそれで脅威である。だが、その兆候は見られない。

塊のままで完成品とでもいうように。

「ウオオオ！」

「ウオオオ！」
「ウオオオ！」
塊（かたまり）が増えれば咆哮も増える。今度はアイズの耳に激痛が襲う。
それ後で激しい耳鳴りと共に周りから音を拾えなくなった。分かるのは自身に関係する音のみ。

†

耳は封じられたが目は健在だ。
アイズは辺りを見渡すもポランの姿は見えなかった。けれども戦いながら避難しているかもしれない。このモンスターはただ壁から転がり落ちているだけ。意志を持って動き回っているわけではない。
元々のゴライアス同様に異常に高い『耐久力』を持ち、なかなか剣を深く刺すことが出来ない。
魔石を直接狙えば楽だが、ドレッドノートのように魔石を持たない場合はひたすら苦戦する。いや、時間がかかる。
あまり時間をかければ地上に帰れなくなる。
「……やるしかない。「……【目覚（テンペスト）めよ。エアリエル】」」
風の付与魔法（エンチャント）を纏い、増え続けるモンスターに突っ込む。
現在のレベルとモンスターの攻略レベルはほぼ同等。普段であれば一対一なら負けることは無い。
『耐久』が特段増えているわけではない。今の自分は指が欠けている。その分、力を入れにくい。
掛け声を上げながら肉団子と化しているゴライアスを突き崩す。
（手間取ればどんどん部屋が埋まってしまう。……まさか無限に出てこないよね？）
多くの冒険者に助けを乞（こ）えば殲滅は難しくないと思う。アイズの目的はポランとの戦闘だ。目の前のモンスターを一人で倒す気は無い。——全部倒したいけれど、今回の目的は別だ。
細身の剣での攻撃は巨大なモンスターを倒すには些（いささ）か決定打に乏しい。魔石さえ破壊できれば肉塊も物の数ではないのだが——
アイズを以（もっ）てしても増え続け、咆哮を上げ続ける未知のモンスターは難敵だった。既に音は聞こえない。誰かが来てても分からない程

かもしれない。
　再生力は無く、定期的に咆哮があちこちから上がる事を除けば絶望には至らない。
「……くっ」
　深層域ではゴライアスよりも強いモンスターはたくさん居る。一体に苦戦していては攻略どころではない。
　焦る気持ちが怒りを増大させる。
　夥(おびただ)しい斬撃を当ててもモンスターの中心部に到達するのは数分を要する。出来れば魔法による支援が欲しい。それと――魔石が無い場合は事態の深刻さが頭に浮かび、集中力を削られてしまう。
「ウォォォ！」
　遠くから更なる追加分が咆哮する。その響きでアイズは関知する。
　姿の見えなくなったボランは何をしているのか、それも考えなければならない。

†

　数分ごとに肉塊ゴライアスは壁から生まれる。大きな罅(ひび)を作りながら部屋を破壊していく。
　一見動いているように見えるゴライアスだが、それは新たに生まれる肉塊に押されているだけ。このモンスターは生物的に蠢くことはあっても飛び跳ねたりはしない。
【……悉(ことごと)くを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを。焼き尽くせ、スルトの剣……我が名はアールヴ】！」
　玲瓏(れいろう)な音声の魔法詠唱が室内に木霊する。しかし、中に居るアイズには――耳を負傷しているので――聞き取れなかった。
　不意に浮かび上がる魔法陣に気づいた彼女は一旦飛び退った。これは見覚えのある攻撃だと理解したからだ。
　何度も見てきた仲間の援護――
【レア・ラーヴァテイン】！」
　無数に展開された魔法陣から一斉に天井に届くほどの炎の柱が立ち上る。
　転がるゴライアス達が苦悶の呻きを漏らした。その中で何体かは

滅んだ。主に魔石を露出した者やアイズがダメージを与えていた者が――

魔法が発動しても詠唱の声が聞こえなかったアイズは回復薬を使おうか迷った。

咆哮の嵐に晒されれば耳はまた使い物にならなくなる。今の自分はまだ弱い。しかし、アイテムを無駄遣いしたくなかった。

「お前達、【経験値】稼ぎの為に存分に働け」

魔法を唱えたのは翡翠色の髪の王族リヴェリアだ。背後に大勢の冒険者を従え、敵性体ゴライアスに杖を突きつけて命令を下す。

彼女も部屋の様子を見て驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻す。

ダンジョンで異常事態が起きるのは珍しくない。寧ろ、悪意の塊たるダンジョンで真っ当な冒険など出来はしない。

「野郎共！　なんかよく分かんねえモンスターが居るがやっちまえ～！」

後から部屋に侵入するのは一八階層に住み着いている冒険者達だ。

モンスターが現れない安全領域たる階層で辿り着いた冒険者に商品や宿を提供する。その相場はかなり高い。

危険と隣り合わせのダンジョン攻略において、安全を確保する事は至難の業だ。

†

新たな冒険者はだいたいレベル2超えが多い。それでも単独で階層主を討伐できるほどの実力者は少ない。いや、居ない。

弱点をカバーする為に仲間達が数の暴力でゴライアスを仕留めていく。

「……まさかこんな事態になっているとはな。……アイズも耳をやられたか……」

耳から血は出ていたがケガはそれほど見当たらない。

手持ちのアイテムでアイズを癒し、事情を聴く。本当は聞かない約束なのだがゴライアスが大量に出てきたのは想定外だった。攻略の為に尋ねる事にした。

（例によって魔石を使ったか。今度は奇怪なゴライアスが出る事にな

るとは……。攻撃は咆哮だけ。聴覚を封じられる以外は止めどもなく出てくる、と……。倒せるならば楽な相手か？　いや、階層を数の暴力で粉砕されればリヴェラの街が危ないな）

　咎めるのは後でも出来る。今は目の前のモンスターを倒しきるのが先決だ。

　しかし、リヴェリアは疑問を抱いた。

　魔石を壁に入れれば異常事態（イレギュラー）が起きる、という確証は全くない。現に自分達は何度も試した。その結果は何も起きなかった。

　アイズやポランが行（おこな）ったから起きたのか、それともまた別の条件か、と。

（件（くだん）のポランは何処に行った？　モンスターに潰されたか？）

　既にモンスター化しているならば易々と倒されていない筈だが自分の魔法で吹き飛ばしてしまった可能性も――一応留意した。

　ベートも加わりコライアス達は確実に殲滅されている。その様子を見て魔石のあるモンスターだと確信する。であれば一点突破で倒すことは容易いとアイズは試算した。

「人為的にモンスターを生み出せるなら……、これは確実に非合法なものだ。だが、ダンジョンがそんな甘い事を許すとは思えん」

「……うん。このモンスターは魔石を落とせない……んだと思う。リヴェリアくらいじゃないと無理って意味で」

　魔石はあるが、それを残すような倒し方が出来ない。または難しい。

　確実に砕かないと弱い冒険者には歯が立たない。そして、今のところドロップアイテムも確認できない。

　ゴライアスのドロップアイテムは皮膚が多い。強靭なモンスターの皮膜は良い防具の材料になる。

「……そうだな。だが、【経験値（エクセリア）】稼ぎは出来るのではないか？」

「あのモンスターより強い人ならありえそう……。ポランの場合は倒さないと駄目ってことだったと思う。だから、倒せないモンスターと長く戦っても意味が無い」

（……結果がそうであるなら実に勿体ないな。……しかし、なるほど。

そういう事もあるか）

倒した分だけ【ステイタス】が増える、という事は倒せなければ増えないという意味にも取れる。

早々都合の良い事態は起きない、という意味でなら安心出来る。いや、安心してはいけない。

弱いモンスターを大量討伐して増える場合はとんでもないことになる。

よその【ファミリア】の眷族なので確認するにはヘスティアの許可が必要だ。

残念ながら【ロキ・ファミリア】は【ヘスティア・ファミリア】とは敵同士という関係になっている。主（おも）に主神同士の仲が悪い。

ロキに内緒でなら許可が貰えるかもしれない。少なくともヘスティアは眷族（こども）には優しい――それは【ファミリア】問わず――神様だ。それにアイズにジャガ丸くんを売らない、というような嫌がらせをしなかった。

†

咆哮に気を付ければ肉塊ゴライアスは物の数ではない。そう思っていたが数による物量が思いのほか大勢の冒険者を苦しめる。

今のところ倒しにくいゴライアスは今も生まれ続けている。

投入した魔石の数より多いのは確実だ。

（毒性のモンスターではない事が救いか）

「……それ以前にこれだけの階層主が現れるとは。私も記憶に無いぞ。フィン達を連れてくればよかったか」

団長以下が総手で出張る事になると大事（おおごと）にしかならない。――既に手遅れだが。

リヴェリアは奇妙な光景を独占している事に苦笑を覚える。帰ってフィン達に言えば悔しがることは必至。

「おい！　【九魔姫（ナイン・ヘル）】！　暢気に見物していないで魔法の援護を！」

「……いいのか？　折角楽に倒せる階層主だというのに」

「レベル　6（シックス）は言う事が違うね～」

「簡単に倒せる相手じゃねぇんだよ」

そう言っている冒険者の横では頭の耳を完全にペタンと伏せたベートが果敢に戦っていた。

周りの雑音ごと遮断し、文句を言わずに突き進む。

本来はアイズとポランの決戦の為に用意した舞台なのだが、とリヴェリアは残念に思いつつも赤毛の少女を探した。

同じ部屋に居るのか、それとも十七階層を引き返して大人しくしているのか。今の彼女は放っておいても害が無い。それくらい大人しいと聞いている。

モンスターなのに害が無い、というのがいまいち理解できなかったけれど。

「……しかし、本当にキリが無いな。もう少助っ人を呼ぶべきか」

「出来るならそうしてぇところだが……」

リヴェラの街を取り仕切る『ボールス』という冒険者が疲れを見せながらやってきた。

彼女の命令で冒険者をかき集めたのはいいが思いのほか苦戦している。咆哮しかしないモンスターに。

尋常ではない『耐久』に手間取っている為だ。長期化すればするほど体力を奪われる。尚且つ、定期的に無数の咆哮（ハウル）が襲い掛かってくる。これは余波だけでも厄介極まりない。

「アイズ。もはや緊急事態だ。……応援を呼ぶぞ」

「……うん」

その返答に少し意外だと感じつつも上への通路を確保する為、即座に魔法詠唱を始める王族（ハイエルフ）。

モンスターの出現頻度はそれほど早くはないが討伐速度は明らかに遅すぎる。それだけ倒しにくい証拠でもある。

†

ダンジョンは過度な破壊行為をしても後々自然に修復される。しかし、部屋全体の崩壊は上層階に居る冒険者にとってはお目にかからない程の珍事であり大事（おおごと）だ。

混乱を宥めつつ事態の収拾に務めなければ余計な被害が広がるばかりだ。

リヴェリアの魔法によって空いた通路を何人かの冒険者が駆け抜けていく。

転がるばかりのゴライアスが彼らを狙って追うことは無いが新たな出現で通路が塞がれるのは時間の問題だった。

（子供の興味から生まれたことがこんな事態を招くとは……。しかし、それを可能にするダンジョンにも問題があるのではないか？　一概にアイズ達を責める事は出来ない）

「……しかし。何なんだ、この状況は」

初めて見る現象に改めてリヴェリアは驚いていた。

緊急時とはいえ大規模な魔法で一掃した。しかし、それでもモンスターの誕生は止まらない。

元々耐久力のあるモンスターだ。そこらの雑魚のように蹴散らせないところがある。

勇敢なる軍隊（アーミー・ドッレドノート）。

不意に肉塊の奥から木霊した。それは聴覚に優れた亜人種（デミ・ヒューマン）や王族（ハイエルフ）の耳に届いた。

そして、すぐに膨大な量ともいえる邪悪な気配が唐突に生まれた。

（な、に……）

部屋を覆いつくさんとするように発生した黒い靄――それを冒険者達は目撃した。正（まさ）しく見えた、という表現そのままに。

両手が刃物状になった黒い蟷螂（マンティス）のような形状。それらが眼下に広がる肉塊を――根こそぎにするように切り裂いていく。

不思議な事に冒険者には当たっていない。――驚いた者達の叫びはあるものの見えている範囲で被害は確認できない。

一斉に灰に還る肉塊ゴライアス。その消滅速度はリヴェリアの魔法を凌駕していた。

「……肉塊だけじゃないな。部屋全体まで切り裂かれているようだ。お前達！　一旦避難しろ！　崩れるかもしれん！」

彼女の怒声に突っ込んでいた冒険者達はリヴェラの街方面に一斉に駆け出していく。

壁ごと切り裂く謎の斬撃に恐れ戦（おのの）き、避難を選択させた。

「……声の感じは俺にも聞こえた」
耳を閉じている筈のベートは――今は片耳だけ上に上げて状況把握に努める。
声の主は多少の差異はあるもののポランで間違いない。しかし、潰れた音声が実に痛々しいものであった。
（あの子が何かしたのか。魔法？　それなら詠唱がある筈……。無詠唱か？）
攻め込んでいたアイズもリヴェリアの側に戻ってきた。
ほぼ壊滅状態のゴライアスであったが新たな肉塊が生まれようとしている姿は確認できた。つまり、まだ全滅したわけではない。
それから程なく天井の崩落が始まる。するとその天井からも肉塊が落ちてきた。
ある程度、予想していた事とはいえ――これでは落下による攻撃で冒険者が潰されてしまう。無理に突入するのは悪手と判断する。
だが――
落下してくる肉塊は巨大な漆黒の刃物のようなもので切り裂かれ、地面に到達する前に灰になった。
階層主を一撃で倒す謎の存在。いや、それよりもそんなことが可能なのか、と。
「あの強さではレベル7すらもただでは済むまい」
今はモンスターに向けられているが冒険者であれば現行の防具でも防ぎ切れない。それこそ『不壊属性』を付与した武具を持ってこない限りは厳しい。
強大な力を冒険者が発する場合、それは決して小さくない代償が必要だ。少なくとも魔法を放つのでさえ労力が居るし、精神を消費する。
ポランはどのような攻撃をしたのか、とても興味があった。

†

部屋ごと切り裂く謎の攻撃により殆どの肉塊は灰へと還っていく。
しかし、崩落も始まり、現場に居ることが難しくなってきた。
肉塊の個数が大幅に減った所で赤毛の少女の姿が見えた。

右目から巨大な腕の様なものを生やしている。あまりにも規格外の巨大さでリヴェリアのみならずアイズも息をのむ。

「あれが奴の隠し玉か？」

度重なる咆哮（ハウル）を受けている為か、服が防具ごとボロボロで全身は血で汚れていた。

駆け出しからすれば衝撃波を伴うゴライアスの攻略はとても難しい。無傷でいる事など不可能なほどに。

「リヴェリア。高等回復薬（ハイ・ポーション）をちょうだい」

アイズのケガは軽微だ。であれば誰に使うのかは自明の理。

どういう考えがあるのか疑問だが今回は彼女のやりたいようにさせることが目的だ。だから、リヴェリアは黙って要望されたアイテムを手渡す。

見ている間にも巨大な黒い影は小さくなっていく。おそらく時限式の魔法。または特殊技術（スキル）。

元々レベル1（ワン）の駆け出し冒険者だ。身の丈に合わない能力を行使すれば肉体が無事でいる事などあり得ない。少なくとも即死はしないとしても――

視認できた黒い煙りは瞬く間に消え去り、疲労が襲ってきたのか、ポランはその場に蹲（うずくま）るように崩れ落ちた。そこへアイズが彼女の身体に高等回復薬（ハイ・ポーション）を半分ほど振りかけ、残りは飲ませた。

外傷が瞬く間に塞がっていく。

（背中が酷い火傷にあったよう……。今の魔法のようなものを使ったから？）

元々傷だらけだった背中は【ステイタス】が判別できない程に焼け爛（ただ）れていた。しかし、それは今使った高等回復薬（ハイ・ポーション）で回復しつつある。治る前に見えた惨状だったようで安堵する事が出来た。

もし、呪（カース）いであれば目も当てられない。

一旦リヴェラに避難することを決め、アイズはポランを抱き起す。ドレッドノートは軽く呻くが抵抗はしなかった。

天井の崩落と共に新たな肉塊が生まれつつあるのも確認出来たが無視する事にした。

#1―22　片翼剣姫

階層主の部屋から脱出したもののゴライアスの誕生を阻止しなければ下の階層に多大な迷惑がかかる。先ほどのドレッドノートによる攻撃でも殲滅までには至っていないのは確認した。

避難所でアイズ・ヴァレンシュタインと向き合うリヴェリア・リヨス・アールヴは頭を痛めていた。

壊れた部屋はいずれ修復される。それがどんな規模だろうと。しかし、終わりの見えない戦いは想定外だ。

「……崩壊が始まったようだな。部屋を壊し過ぎた」

それ以前に部屋全体がひび割れていた。ポラン・ブーニディッカがやらなくてもいずれは崩落していた。だから、それを責める気は無い。

大量発生したゴライアスの大部分は殲滅した。同程度現れると仮定しても今しばらくの猶予がある。ある筈だ。

初めて見る技ではあったが制御まで想定されているとは思えない。モンスターの攻撃でもあるのだから。

それよりも元々の肉体の持ち主の影響か、ポランは先ほどから呻いている。

（無数の咆哮（ハウル）を受けて半死半生といったところか。これでは今しばらく戦闘は無理そうだな）

リヴェリアの目から見ても絶対安静が必要だと思った。

先程回復薬（ポーション）を飲ませたのでアイズに彼女を木陰に休ませておけ、と命令する。

今の段階で止めを刺すかは分からなかったが、様子を見る分にはアイズは戦闘を再開する気が無いようだった。

（……さて、問題は階層主の部屋だが……。どうしたものか）

第一級冒険者はこの場にはリヴェリア一人。事態の鎮静化を図るならば助っ人が欲しくてたまらない。

――それにしても予想外の事態が起きるとは。いや、そういう光景

を目撃したことは運がいいのか、と疑問に思う。
王族（ハイエルフ）であるリヴェリアは杖を持ち、ゴライアスがどうなっているのか安全な位置を確認しつつ様子を見てみようと思った。
歩いている途中から土煙が一八階層に流れ込む。本格的な崩落が始まったようだ。
あまりに規模が大きいと笑うしかなくなる。

†

何体か――何個かの肉の塊が転がり出たので魔法でいくつか焼いてみる。
それぞれの強さに差異は無さそうだった。だが、それにしても見れば見るほど気持ち悪い姿だ。肉塊のゴライアスというものは、と。
「……ふむ。口を地面に着けたら……咆哮（ハウル）の反動で動くか……。それが無数にいればより動きが読みにくくなるな」
ただ、倒せないわけではない。これで無敵ならもはや迷宮都市オラリオは終わりだ。
それだけではなく地上世界も遠からず浸食する可能性がある。――無限に湧き続けたら、という話しだが。
分析していたリヴェリアの下にこの階層で生活している冒険者が数人近寄ってきた。
「単体であればお前達でも対応できよう。今のうちに倒しておけ」
「おう」
「それより、こいつらはいつまで出てくるんだ？」
「それは私が知りたい。とにかく、駆除しない限り地上へは戻れん」
冒険者は応援を呼んで転がり出てきた肉塊を討伐していく。
肉塊を観察していたら、一つが反動でリヴェリアに向かって飛んできた。彼女は慌てずに手を添えるように当てて事なきを得る。これが近くに居る者であれば吹き飛ばされているところだ。
レベル６（シックス）の【ステイタス】であるリヴェリアは見た目からは想像できない程に『力』がある。
「……な、【九魔姫（ナイン・ヘル）】。武器を貸そうか？　魔法より負担が小さい気がするぞ」

「人を何だと思っている。……同族の前ではしたない戦い方が出来るか」

（そんなことを言っている場合かっ！）

多くの冒険者は心の中で抗議した。

涼しい顔の王族はどんな状況でも高貴さを失わないよう――同族の前では野蛮な戦い方は控えていた。しかし、それはあくまで他の【ファミリア】の者が居る前でだけだ。

【ロキ・ファミリア】だけならば多少の荒事も平然とこなす、可能性がある。

だが、周りの抗議めいた視線を受けて、さすがのリヴェリアもばつが悪そうに適当な武器をよこせと命令した。すると森妖精の冒険者が恭しく様々な武器を持ち寄ってきた。

王族であるリヴェリアは殆どの森妖精の冒険者から慕われており、それは最強と名高い【フレイヤ・ファミリア】に所属する同族でさえも首を垂れる。

集まった武器を手に取り、一つずつ肉塊に突き刺していく。

彼女はいとも簡単に行っているが一般の冒険者はゴライアスの強固な肉体に武器を突き刺すのに苦労する。

『力』の差が圧倒的に違うために起きる現象である。

「……よくこの巨大な肉塊に突き刺せるもんだ。見た目は細い手をしているのに」

「これでも苦労しているぞ」

そう言いながら涼しい顔で――握力を確かめるように――手を振る王族。実際には僅かな疲労しか感じていない。

少しよそ見をしたところにゴライアスの口が眼前に迫り、咆哮を喰らうも翡翠色の長い髪が激しく揺れただけでケガや武具がボロボロになったりはしなかった。だが、近くに居た冒険者の何人かは吹き飛ばされた。

「……確かにうるさいな。見ろ、折角整えた髪の毛が乱れてしまった」

（……そういう問題じゃねぇんだよ）

（第一級冒険者の身体はどうなってやがる!?）

他の冒険者と楽しげに触れ合っている様子を遠目から見ていたアイズはゴライアスに対してリヴェリアならば特に問題が無いと判断し、赤毛の少女ポランの様子を窺う。

多少うなされているが疲労により、今は眠っている。

†

肉塊ゴライアスの数は加速度的に増えているわけではないが気が付くと数十個になっている。あまりのんびりとしていると手に負えなくなるのは確かだ。

倒しても倒してもまだまだ転がる出るモンスター。それも階層主というのは初めてではないかとベートは少しずつ疲れてきた。戦闘を再開したアイズも同様に。

倒すのに時間がかかる事も疲労の原因の一つだ。

だが、それらとは無縁の戦いを繰り広げているのが王族（ハイエルフ）であるリヴェリアだった。

彼女にかかれば屈強な階層主も単なる厄介な肉団子だ。今もプスプスと武器を突き刺して簡単に倒す方法を模索していた。

「やはりひとまとめに魔法で燃やした方が……」

「それだと俺達も一緒に焼かれるんですがね」

肉塊ゴライアスの発生以外で異常事態は起こらず、新しいモンスターの出現も無かった。

それからしばらくはリヴェリア達に任せ、アイズはポランを持ち上げて場所を変える事にした。

身体を洗う水辺があるところに。そこでなら誰にも邪魔されない。まして、女性陣が水浴びするところでもある。男性の多くは来ない筈だ。来たら撃退すればいい。

そうして眠るポランの面倒を見ながら一時間が経つ。数が多い冒険者と狼人（ウェアウルフ）のベート・ローガとリヴェリアが居れば余程の事が無い限り平和を保てるはずだとアイズは思った。

痛みと疲労が蓄積していたのか、しばらく起きなかったポランが目覚めたのは辺りがすっかり暗くなる頃であった。

この『迷宮の楽園（アンダーリゾート）』とも呼ばれる一八階層の天井には水晶が散りば

められている。それは地上の時間に合わせて輝きが変わる。当然のように夜間は辺りが真っ暗になる。――だが、ここは地下のダンジョンだ。太陽の光りも届かない深い場所である。

「……う」

右目の黒さは変わらないが左目は元の碧玉を取り戻していた。

ずっと黒い目が印象にあったので彼女の本来の瞳の色が意識から抜け落ちていた。しかも今は薄暗い。白か黒くらいしか今の時間帯では認識できないほど。

（……野営地に行った方がいいよね。モンスター化も解けているようだし）

声掛けして現在地を認識させた後、アイズはポランを抱き上げる格好で運び込んだ。

前もって自分達の寝床の用意はしていたが一八階層には宿もある。ただし、宿泊料は地上の何倍、何十倍も高い。

【ロキ・ファミリア】のみならず、深層域で活動する冒険者はだいたい自前の野営地を設営する。資金に余裕がある者か特別な用事でもない限り宿泊施設を利用することは無い。

まず他の冒険者に死者が居ない事を告げる。気絶している間にその冒険者を殺めていると知れば途方もなく落胆し、最悪その場で舌でも噛み切ってしまうかもしれない。ポランは基本的に大人しくて優しい女の子だ。アイズとは違い諍いを望まない平和主義なところがある。

「……外が騒がしいのは階層が崩落したから。今、みんなで対策を練っている」

「……うです……」

「……でも、休んでいる暇はない。……だけれど……」

迷いつつアイズはポランを抱き起し、真面目な顔で――言葉が拙いながら真の目的を告げていく。

あまりに端的な言葉で『ポランを殺す』になってしまった。すぐに言い直そうと必死に頭を働かせる。

間違っているけれど表現としては合っていない。詳しく言いたい

けれどうまく言葉が出せない。
（……ごめん。……戦うしか能がない【姫剣】で……）
そんなアイズの苦悩をよそにポランは彼女の言いたいことは理解していた。
目的は右目に寄生するドレッドノートの討伐。それこそが本来の目的だ。個人的にはポランを殺す理由は元より無い。いくら敵対【ファミリア】だとしても。
そうでなければ気絶している間に殺している。
アイズよりも頭が回るポランは大体の事を忖度する。それに――彼女自身も覚悟を持ってダンジョンに潜る事を決心した。

†

どれくらい眠っていたかはポランには分からない。借りた剣も自分の武器も見当たらない。おそらく階層主の部屋に落としてきたのだと――
そんな様子に気づいたアイズは新たな剣をポランに渡した。壊れる事を想定して何本も用意していた。もちろん、アイズが直接購入したものだ。
休んでいる間も他の冒険者は湧き出る肉塊ゴライアスの討伐に奔走していた。
アイズは目がモンスターに向いている間にポランに剣を握らせて野営地を出る。
「……これからポランに戦い方を教える。……それと同時に貴女と戦う。そのモンスターを殺すために」
「……い」
自身の小剣『デスペレート』を構えた。その作法は我流である。
お互い向かい合わせとなり、ポランに動きを真似るように指示する。
鏡では無いので右手で武器を持った場合、相手は左手に持たないと分かりにくい。その齟齬をアイズなりに試行錯誤して解消する。
（横並びだと少し体勢が崩れる。やっぱり向かい合わせじゃないと）
多少なりともポランの賢さに任せ、動きに集中する。

剣と剣を合わせるようにアイズが先導し、数度の打ち合わせが奇妙な音楽のように響いていく。
月の速度を上げていけばいくらポランとて追いつけなくなる。その手前まで誘導する。
「……貴女はもっと強くなるべき。……ここで失うのは勿体ない」
将来の敵を作るかもしれない。けれども強い敵が居た方がアイズ自身の増強になる気がした。それに知りたかった事もある。
モンスターを倒すごとに増える【ステイタス】の秘密などを。
打算だと言われるかもしれないが、それを否定する気は無い。
「……出来るだけ私の動きを真似て。……よく見ることが……、大事、だよ」
「……は……」
身体の動きを真似ても【ステイタス】の差は歴然。教えた程度で同レベルになることはない。
だが――勤勉なポランであれば後々実力を付けて――
夢を見ることは悪い事か、とアイズは様々な思いに駆られる。この行為も無駄だと言われれば否定しきれない。
（……これでいい。私は武器を振るうしか出来ない。……上段、中段、下段。これに体術も合わせる。……やはり彼女本来の『力』は私に当く及ばない）
劇的な変化が無いのは自身に受ける感覚で理解する。
剣を打ち合わせる速度を上げ、時には蹴りをお見舞いする。
アイズにとっては鍛錬程度だがポランにとってはまだ重労働だったようで見る見る汗まみれになっていく。
それを毎日のように繰り返せば実力の上昇を体感する事が出来る。
だが、僅かな時間では実感を伴うほどの成果はあげられない。それが一般的だ。

†

周りが騒然としている最中、アイズとポランは暢気に剣の稽古を始めている事に異論が出ないわけではない。それらは保護者を自称するリヴェリアが周りを黙らせていた。

どの道、アイズが参加しても肉塊ゴライアスの討伐はそれほど捗らない。これは手を負傷しているからだ。

今の彼女は本来の力の一〇分の一も出せない。であれば無理に参加させるより目的を達成させた方がいい。ある程度の責任を負う事も辞さない、と王族（ハイエルフ）は決意を固めていた。

数時間にわたる剣戟の末、疲労困憊でありながらポランはアイズの動きを必死に追った。

合間に打ち据えられる声劇で口から血を垂らす程、内臓を痛めつけられていても――

ただひたすらにアイズの教えを守り続けた。

「……【目覚（テンペスト）めよ。エアリエル】」

「……て、んぺ……」

風の付与魔法（エンチャント）の余波で身体がよろめくも必死に体勢を維持しようとする。それを見たアイズは口元をほころばせる。

身体に風をまとわせたアイズはそのまま鍛練を続行する。

吹き荒れる風によって思うように身体が維持できないが、アイズはそれでも剣を構えるように言いつけた。

体力の限界であろうと無駄な時間は無い。

いや、これはアイズ自身の為だ。時間が無いも全て。

今日を以（も）ってポランを、ドレッドノートを殺すために。

言わずとも剣を構え、同じ動きが取れるようになった後は実際に身体を突くように命令する。

今のポランでは当てることは出来ても深く刺すのは難しいし、あっさりと刺し込むことを許さない。

――それでも軽く頬を切って血を出してしまうが軽傷の内は無視する。

それを体感的に一時間、続けた。

最後の仕上げとして互いの剣が届く位置に立ち、相手の隙を突くように剣で切ったり刺したりを繰り返す。アイズは手加減するがポランは本気で攻めように、と。

離れた位置から見れば見合ったまま子供同士が剣で切り合う凄惨

な現場に見える筈だ。
アイズは自分の身をほぼ守らない。痛みを知り、逃げずに突き進むために。
（……不思議。……ポランは私の要望に応えてくれる。こんな斬り合いに……）
（……）
ポランはただ無心で教えを守る。無駄な思考をしないせいで攻撃が時間を追うごとに洗練されていく。だが、それでもレベル差があるのでアイズを追い詰める事にはならない。
胸の中心を突いた筈なのに硬い皮膚で弾かれるような、理解できない事態が起きる。
斬撃も力を入れている筈なのに薄くしか切れない。
同年代の女の子の筈なのに。
あと安心したせいか、気が緩んだ為か——突き出した右腕の半ばまで刃を受けてしまった。それは今まで感じた事の無い重い斬撃だった。
切断こそ免れたが思わずアイズは相手を凝視する。すると朦朧とした、目の焦点が合っていない顔のポランが血だらけのまま動いているのが分かった。
急に自由が利かなくなった腕に驚きつつも蹴りにて距離を離す。それで鍛練を終わりにした。
（……怖い。この子は不意に想像を超える。……それが彼女の強みかもしれない）
地面に転がり、激しく呼吸を繰り返すポランを眺めつつ回復薬（ポーション）で傷を塞ぐ。腕に問題が無い事を確かめた後はポランの全身に回復薬（ポーション）を振りかける。
満身創痍のまま戦闘する気は無かった。

†

鍛錬は終わった。これ以上は無粋——いや、もう満足しなければならない。
ここより先は修羅に徹する。

まずポランのケガをある程度直しておく。弱り切った相手を嬲(なぶ)るのはアイズにとって気が引けたし、彼女に申し訳が立たない。これは友達というか仲間というか、言葉にするのが難しい感覚だった。

（……不意の攻撃……、当たり所が違っていれば私はここで死んでいた。彼女はそれが出来る冒険者だ）

曲げ伸ばしをしながら右腕の調子を確かめる。

傷が治ったポランに申し訳ない気持ちを抱きつつ立ってもらった。

一定距離にお互いが経ち、もう一度鍛錬すると嘘をついて。

一度背中を向け、そのまま回し蹴りを繰り出すアイズ。不意には不意で応える。

レベル3(スリー)の身体能力を以(も)ってポランの意識を狩る。失敗しても成功するまで。

今の彼女では駄目だ。だから、多少乱暴な方法を取る。

ドレッドノートは報復するモンスターだ。それにかけて実行する。

「せぇい！」

ロングブーツの一撃は武器を構えようとしたポランでは対処できなかった。ゆえに派手に吹き飛ばされて沈黙する。

最悪、首の骨が折れてしまうかもしれないと思いつつ。

彼女の『耐久』がもし減っていなければ即死は免れる筈だ。そこまで力は込めていない。だが、変な手加減ではただ痛みを与えただけで終わってしまう。

しばらく反応が無かったポランがゆっくりと上体を起こした。

「……ウゥアァ……」

「武器を持って。構えて、モンスター」

アイズの言葉に辺りを見回して武器を探す。剣を見つけて掴むと首を傾げた。

ポランの意識は無事に飛んだ事に安心しつつ気を引き締める。ここからが本当の戦いだ。

頭部を蹴りつけたので戦闘を拒否するかもしれないと思ったアイズはすぐに新たな回復薬(ポーション)を取り出し、ポランに振りかける。

回復したかは確認せずにデスペレートでポランを打ち据えて攻撃

を促す。
　威嚇したことに安心し、態勢を整える。
「……あなたはここで倒す。……鍛錬はポランの為、あなたの為じゃない」
「……イズ……。……グゥウ」
　アイズが剣を手元に引き寄せ、天井に剣先を向ける構えになる。
　ポランは少しだけ逡巡したのち、アイズと同じ格好になる。
　意識はモンスターであるはずなのに先ほど教えた事を実践してくるところから、ドレッドノートは先ほどまで意識があった事になる。だが、それを確認するすべは無いので憶測にすぎない。
　ポランの意識を横取った結果かもしれない。
「……【目覚めよ（テンペスト）】」
「……テンペスト」
「……それでいい」
　身体に風の魔法をまとわせたアイズは一気呵成に攻め込んだ。
　掛け値なしの本気の突きを繰り出す。するとポランでは到底反応できない速度に対応してきた。それでその速度はモンスター由来だと判断する。
　ポランとドレッドノートは互いにある程度の能力を共有している、と予想する。実際にはモンスター側の一方的な搾取かもしれない。
　突きを剣の腹で受け流され、がら空きになっている腹に左の拳が撃ち込まれるも魔法の障壁に阻まれた。だが、僅かばかりの衝撃が伝わってきた。
　激痛ではないが僅かな嫌悪感があった。
（反応が早い!?　やっぱりそんなに弱いわけじゃないんだ）
　身体を捻って繰り出した回し蹴りも、きちんと見てから避ける。
　先ほどまでレベル1（ワン）の駆け出し冒険者だった存在が急激に強くなったとしか言いようがない。
　剣速も半分以上を見切られた。これは少し予想外だった。いや、ポランの姿だから無意識に手加減しているのかとさえ思ったほど。
　そんな筈は無い、とアイズは自分に言い聞かせる。

それからはポランとの鍛練と違う戦いの筈なのに延長戦の様な有様となった。

優位に立てた時と違い、今は同じレベルの冒険者が研鑽を積む状態に匹敵する。一進一退。互いに少しずつケガを増やす。

アイズは既に手加減はしていない。本気である。それなのに圧倒的に優位性を確保できない。

これではまるで――

先の戦闘のよう。

初めてドレッドノートと出くわした光景が脳裏によみがえる。そして、胸の内に高まるのは怒りだ。

指を落とされた事に対する憎しみではない。単純なモンスターへの殺意だ。

私怨をもって冒険者となったアイズ本来の黒い感情。それが剣を振る度に大きくなる。

（……殺す、殺す、殺してやる。避けるな、モンスターのクセに）

少しずつ大振りになるもののすぐに修正して小技を絡める。だが、それでも早い段階からドレッドノートも学習して対処してくる。

体術には体術で返す。

頭に血が上っていたことに気づいたのは随分と後だ。その時にはお互い武具はボロボロ。全身は傷によって血だらけ。それでも致命傷というほどのケガは負っていない。

ポランが構えればアイズも条件反射のように構える。

（……殆ど裸同然なのに全く怯まないなんて。まるで……女戦士（アマゾネス）みたい）

そう評するアイズも裸同然になっていた。

辺りが暗くなっているお陰もあるし、夜目に慣れている為、それほど戦闘に支障を感じない。

普段は沈着冷静、または冷酷な殺戮人形と言われる程、アイズの表情は一定している。けれども実際はモンスターを前にすると怒りに染まる。特に強敵を前にした時は顕著な変化が見られる。――そして、それは今現在そうなっている。

袖もブーツもボロボロ。それにも関わらず、剣を握って敵と相対している。対するポランは感情そのものが抜け落ちているのか、喜怒哀楽が感じられない。いや、多少は怒りを見せている。人間的な表現が難しいだけだ。

暗い中で時折光るのは剣と剣がぶつかった証拠。激しい剣戟の音はリヴェラの街に置いてアイズ達だけのものとなっている。

明るい内は仲睦まじい共だった。それが僅かな時間で殺し合う関係に発展している。

（……こちらの攻撃が通じにくい。……モンスターとしての意識があったせい？）

自身のクセを読まれている気分に驚きつつ、納得する事もある。

いくら鍛練したからといってすぐに身につくほど技術というのは容易くない。だが、充分な下地があれば可能となる事もある。

ドレッドノートは元々学習能力が高く、戦闘技術も高い。だからこそ出来る芸当ともいえる。

（……そう、それでいい。手心を加えなくて済む）

これが他の冒険者であれば窮地に陥って慌てるところ。しかし、アイズは元々の目的の一つに強敵の戦闘が含まれている。寧ろ歓迎する事態だ。

大振りの攻撃に移ろうと腕を引いたところに袈裟懸けの斬撃が飛んできた。それを紙一重で避ける。ただでさえ辺りが暗いので長引けば不利になる。

避けたつもりであったアイズは距離感が狂い始めていた事を悟りつつ自身の身体の状況に驚く。

前面を薄く切り込まれ、一気に戦闘衣や内着が垂れ下がる。いや、殆ど地面に落ちた。だが、相手も手負いだ。左胸に剣を突き刺せたものの逃げられてしまった。

（……お互い下の下着くらいしか無事なところが無い。勝負を付けたいけれど……、なかなか手強いな）

怒りは疲労によって和らぎ、呼吸が荒いがまだ戦える。

対するポランはモンスター化しているせいか余裕そうに見える。

しかし、そんなことは無い筈だ。ケガの度合いはアイズ以上に酷い。
内股から血が垂れているので血尿が出ている、ように見える。身体機能も無理矢理に高められている為か、異常に呼吸が荒い。
放っておいても死にそうだが、それではモンスターを倒したことにならない。
アイズは剣を構え直し、決死の攻撃に移る事にした。
（……戦いを終わらせる。この一撃をもってドレッドノートを殺し尽くす！）
暗闇の中にあってアイズの金色の瞳が輝いた。
全身から立ち上るのは闇と同化する憤怒のオーラ。普段、緑色に近い風属性のものとは趣(おもむき)が違う。
「……覚悟、して。……【起動(テンペスト)】……【復讐姫(アヴェンジャー)】」
静かに唱えられるのはリヴェリアより使用を禁じられたアイズの隠された能力。
不確かなオーラはよりはっきりとした負の色を強くする。
ただひたすらにモンスターを殺す彼女の内面が現れたそれは純粋な殺意。
十二、いや十三歳の少女が抱くにはあまりにも凶悪な想いである。
だが――
対する相手も只者ではない。低階層のモンスターですら恐れ戦くほどの強い力の威圧にも決して怯まない。それどころか挑発するように笑ってさえいないだろうか。
強敵に相まみえた者が見せる狂喜。
（……それでいい。あなた(モンスター)はその顔がお似合い）
ボランもまたアイズを倣(なら)って剣を構える。いや、掲げる。決戦が近い事を悟ったように。
会話は今に至っては不用のもの。無粋な説得を試みる者も居ない。
見た目は幼い両社だが共に冒険者であり、殺し殺される事を良しとする戦士である。いや、狂戦士(バーサーカー)。
「……テンペスト……」
生憎ボランは技の名前だけ。何の効力も発揮しない。元より彼女

に特殊技術（スキル）は備わっていないのだから当たり前だ。
先程見せた技は確かにドレッドノートの一面ではあるが――本質というものでもない。それにかのモンスター（ドレッドノート）の真の名は――

†

スキルを発動させたアイズの金の瞳は憎悪に染められたように黒く変化する。
内面から溢れ出る力を今は解放した。しかし、本格的に運用するのはほんの僅かだけ。長くは使えないし、自身の戦闘練度はまだまだ足りない。
――それでも一撃か二撃くらいは持つはずだ、と。
「……君（ポラン）にはもっと強くなってほしい。それは間違いようのない私の気持ち……。それにはお前（ドレッドノート）が邪魔だっ！【暴れ吼えろ（ニゼル）】！」
「刻み殺せ（ガラ）」
アイズの威圧に対応する程の漆黒の波動が迎え撃つ。
既に裸足となったアイズが脚力によって地面を抉り飛ばし、疾走する。対するポランは少しだけ身体を屈めた。
人間からモンスターだった時のか前に似た前傾姿勢の必殺へ。
【剣姫】と違ってポランは魔法もスキルも持っていない。モンスターであるドレッドノートは先の戦いで疲弊しきっていて満足な能力が発揮できない。
しかし、この一撃だけは違った。
無理矢理の行使によって背中が弾け飛び、鮮血が吹き出す。
小手先の動きはお互い取らない。アイズの突進に対し、ポランは避けずに相対する。
「しっ！」
「サァ！」
二人の少女の短い絶叫。そして、互いに地面を踏み抜くような強烈な一歩を――
アイズが狙うのはポランの右目。ただその一点のみにデスペレートを突き出した。
膨大な能力の反動で全身がねじ切れそうになり、あちこちから皮膚

が裂けて鮮血が吹き出るも構わず前に進み続けた。
単なる一突きに対しては過剰戦力ではあるのだが、それは【剣姫】としての矜持によるもの。
自身が認める冒険者への敬意とも。
誰よりも速い神速に至る突きは驚くほどあっさりと――何の抵抗もないほどに彼女（ポラン）の右目に深く刺さり、沈んでいく。
勢いがついてそのまま頭部を貫通したがアイズの視界からは分かりにくい状況となった。だが、深く刺せたのは手応えからも間違いない。
（……これで……終わった、はず……）
高速戦闘による思考の速度は早まっていたが、拍子抜けするほどあっさりと終わった気がして嫌な気持ちになる。
つい数瞬前まであった負の感情はどこへ行ったのかと疑問を覚えるほど。
だが――その慢心は油断を生む。相手から離れて確認し、それで動きが無ければ勝利である。そうでない場合は――
アイズの突きを深く受けたポランが黙っているわけがない。彼女の意識外で動かされた腕の動きは【剣姫】並み。
それもそのはず、本来ポランはレベル1（ワン）の駆け出しだが、意識の無い間はレベル3（スリー）に匹敵する【ステイタス】を持つモンスターだ。
速度の乖離がアイズを惑わせる。
ポランであれば出来ない動きであってもドレッドノートならば出来る。出来てしまう。
――とはいえ、殆ど死（し）に体（たい）であるモンスターに出来るのは一度きりの攻撃くらい。その一度がアイズに戦慄を与える。
迎え撃つ形でアイズの剣を受けたポランは腕を軽く振った。風切り音――それが戦闘後に彼女の耳に届いた。
暴風に晒されている筈なのに、やけによく聞こえた耳慣れた音。いや、それは自分が良く知る斬撃のものではなかったか。
相手が油断している時こそ最大に警戒しなければならない。
勝ったと思ってはいけない。少なくともアイズは可能な限り警戒

していた。それなのに――

何故、ポランは動ける。そんな疑問が膨らんでいく。

相手は既に死に体の筈だ。いや、そうじゃない。ポランは確かに行動不能だ。だが、モンスターは違っていた。

宿主がどうなろうと関係なく、ドレッドノートは滅びる瞬間まで戦う意思を持っていた。そうでなければ納得できない。

†

下から振り上げられるように剣を持つ腕が見えた。そして、反動がついたまま後方へ倒れ込んでいく。

頭部に深くデスペレートを突き刺されたままのポランが。

剣にはしっかりとアイズの手が握り込まれている。だが――当のアイズは不可思議な光景を目にしていた。

戦闘が終わり、一息つこうとしたのか。それとも目の前の光景が信じられないのか。ただただ立ち尽くしていた。

赤毛の女の子の頭部に突き刺され、顔の一部の皮膚やら筋肉などがめくれ上がる凄惨な光景と共に自分の意思とは関係なく――彼女と共に倒れ込もうとする己の腕を。

それはもう自分の意志で戻ってこない。

「……ぎぃ！　……うぅあぁ！」

激しい激痛は遅れてやってきた。

通常の切り傷よりも痛く、甚大な喪失感が全身を駆け巡る。それはとても耐えられない嫌悪感の権化。

一気に意識が遠のきそうになるほど気持ち悪くなった。

指を落とされた時よりも甚大なケガなのは理解できる。だが、認めたくない。どうしてこんな事になったのか、と自問自答しつつ必死に痛みに耐える。

止血をしようにも肩口から切断されたようで何処を押さえればいいのか分からない。

大きな部位を失った事で重心が狂い、立っていられない。歯を食いしばり、痛みに懸命に耐えつつ倒れていくポランを見つめる。

起死回生の一手を打つ様子は――見られない。だが、これだけの攻

撃で本当にモンスターを倒しきれたのか、アイズは分からなかった。
自信も今は無い。
（こ、殺した。ポランを殺した……。だけど、モンスターはどうなったの？　灰にならない？）
肩口から血が溢れ出る。それを止める手段はもはやない。
互いに全力を出し合った。その結果がどんなものであろうとも勝者となった者は立っていなければならない。
過剰な失血により意識障害が始まる。それに懸命に耐えつつ震える脚に力を込めて。
アイズは前に進んだ。
それから先の事を【剣姫】はよく覚えていない。慌てたベート。怒りとも落胆とも知れぬ顔をするリヴェリア。
血まみれのアイズを見て驚く他の冒険者。そして、死体同然となった赤毛の少女の――主（アイズ）を失った右腕はデスペレートを強く握ったまま墓標のように――顔面に突き刺さっていた。

†

湧き出るゴライアスがどうなったのか。ポランがどうなったのか。
地上に運ばれるアイズ自身は思考を放棄した。
敵に勝利したのに何か大きなものを失った気がした。それは腕なのか友達なのか、それとも好敵手だったのか。
本拠（ホーム）に戻った後のことは記憶に無いが全身包帯まみれになった姿に気づいたのは何日も後になってから。
切断された腕はしっかりと保存液に入れられて守られているという。対外的にも罰が必要だと団長のフィン・ディムナにより不自由な身体で過ごす事になった。
――これはギルドのみならず【ヘスティア・ファミリア】への謝罪が込められていた。
かの神は怒鳴り込んでくることは無かったがアイズに少なからずの悪感情が芽生えてしまった。だが、客として来た場合は拒否はしないと涙ながらに言っていた。
「アイズ、聞こえているかい？」

「……はい」
食事も喉を取らない日々が続いて傍目からもげっそりとしているアイズにフィンは優しく声をかけた。
激闘の疲れとケガが大きかった事への弊害か、何日も寝込んでいたアイズはフィンの執務室にて少しずつ食事を食べる。今は食堂よりも少人数で話し合う場所の方が気が休まるのでは、と判断した。
「レベル4にランクアップ出来るそうだよ。僕は君を応援する立場だ。今回の戦いも色々と根回した僕にも少なからずの責任がある。だから、というわけじゃないけれど……。早く立ち直る事だ」
それから、と言葉を続けたフィンは箱をアイズの前に置く。
神ヘスティアが用意したアイズの好物だという。
「今はまだ怒っている、という事になっているから来店するのを躊躇うんじゃないかってね。元気になってからでいいから礼を言っておくんだよ」
「……ヘスティア様はどうして……」
「さあね。確認したければ元気になって直接聞くといい。それよりも僕らはギルド受付に投げつけたヴァリスによる後始末の方が大変だったよ。後、矢鱈と増殖したゴライアス……。あれ、かなり多くの冒険者に討伐してもらったから、もう大丈夫だ」
アイズ達を地上に上げた後も数日は出て続けたらしい。最終的にどれくらい現れたのかはみんな疲れて数えるのを諦めた。近くに居たリヴェリアは元から数えていなかった。
――その説明で更に疲れる事になった、とか。
「……」
様々な事後報告を受けたが一番聞きたかったことはただ一つ。
ポランがどうなったか、だ。
正直聞きたいとは思わない。けれども聞かなければならない。
（……ポランを殺した事に誰も怒ってない？　そんな筈は……）
敵対【ファミリア】との抗争において人死にが出るのは情報として知っている。闇組織も迷宮都市オラリオには存在する。
だからといって殺人が合法であるわけではない。過度な殺戮行為

は冒険者の資格を剥奪されるおそれがある。
かの【フレイヤ・ファミリア】でさえ無闇な殺人は犯さない。
「……お姫様が知りたいのは……、やっぱり彼女（ポラン）の事かい？」
「……うん」
「そうか。……そうか。隠し事をするわけじゃないけれど……、君は自分が手にかけた眷族を心配するのかい？」
「……彼女自身に罪は無い。……罰は共に受ける……。私の目的はモンスターだけ」
フィンは折角目覚めたアイズに嫌な気持ちを抱いてほしくない。けれども言わずにいることは出来ない。
もし、聞きたくないと言ってくれれば――それがどれほど楽だったか、と。
苦笑気味にアイズの顔をしばらく眺めた。

†

ダンジョンから戻ってきたアイズのボロボロになった姿を見て、まず信じられなかった。そして、驚いた。
どんな強敵と戦ったのか、思わず自身の得物である槍（フォルティア・スピア）を探した。
沈着冷静で頭脳担当と言われている【勇者（ブレイバー）】がこの時はとても慌てた。
（年甲斐もなく『敵は何処だ！』と叫んだのは久しぶりだ。当分は話しの種にされそうだけれど……）
利き腕を落とされた【剣姫】――
冒険者が様々なケガをするのは珍しい事ではない。その中でも自身の強みを奪われる事は――確かに少ない。
そんな偉業を成したのが件（くだん）の冒険者ポランであり、怨敵ドレッドノートというモンスター。
アイズの惨状に【ロキ・ファミリア】は騒然となった。それは間違いない。
彼女を背負ってきたベートと地下に残っているリヴェリアは殆ど教えてくれなかった。今はだいぶ喋ってくれているけれど。

（……片腕を無くした【剣姫】か……。ランクアップで予想される新たな二つ名が【片翼剣姫】だとか。だが、アイズはおそらく享受しそうだ。それだけはロキに阻止してもらいたいな……）

不慣れな左腕だけでの生活。指を無くした以上に困難が予想される。それなのに今のところアイズ自身から腕についての弱音は出ていない。

腕よりもポランを気にしているような気配があった。

彼女にとって掛買いの無い存在、というところまで来ていたのかもしれない。

「……あっ」

ここにきてアイズは重大な事を思い出した。自身の腕よりも気になる事を。

急に表情を青ざめさせるアイズにフィンは何事かと心配になった。

「……受けた依頼……忘れてきちゃった」

「……うん。それは、それで大変だね」

詳しく聞けば素材採集の依頼だとか。それも最近懇意にするようになった【ミアハ・ファミリア】のもの。

特別期限は設けられていないが長期療養が必要になったアイズの事を伝えなければならない。場合によれば他の眷族に依頼を託すことも出来る。

団長としては今しばらくダンジョンに潜ってほしくない。ただ、依頼不履行にするより手柄を他の者に譲る形でいいかアイズに尋ねた。

「……フィンの言う通りにする」

「随分と素直になったね。……今は食事療法や再生について話し合った方がいい。……それにしても」

（しおらしくなった。激高も少し予想していたけれど……。とにかく、【剣姫（お姫様）】には今しばらく開店休業してもらわないと）

話しを切り上げ、折角もらったジャガ丸くん抹茶クリーム味をフィン手ずから食べさせる。

甘いもの以外も食べるように、と言い添えて。

†

アイズ・ヴァレンシュタインとの凄絶な戦いを終えたポラン・ブーニディッカという赤毛の少女。健全で誰からも好かれ、誰からも拒否された元冒険者。

【剣姫】を打倒した噂は瞬く間に広がり、駆け出しに倒せる筈のない凄腕冒険者を再起不能にした、などの流言飛語は日を経るごとに悪化していく。

更に眉唾ではないのはアイズの変わり果てた姿が真実であった事を証明した。

（せっかくレベル4になったっていうのに）

（どうすれば【剣姫】をあそこまで追いつめられる？　オッタルくらいしか浮かばないぞ）

噂の下である【ヘスティア・ファミリア】の主神は黙して語らず。というより詳細についての情報をほとんど持っていないので答えられないだけ。

神はダンジョンに潜ってはいけない規則（ルール）がある。状況説明は全て【ロキ・ファミリア】に聞くように、と押し寄せる質問者に言い放った。

当事者の一人である狼人（ウェアウルフ）のベート・ローガは近づく者達を威嚇して追い払う。それと答える気が全く無いし、アイズとポランの戦闘に関しては見物していないので詳細は知らない。

彼自身は色々と知りたい欲求があったが戦いに水を差したくない気持ちを優先させて肉塊ゴライアスの討伐に勤しんだ。

それから数日、数週間と時間が経ち、冒険者達が『豊穣の女主人』にて下火になりつつある噂についての考察を始めた。とはいえ、当事者が口を閉ざしているので推測しか出来ない。

「……しゃいま……」

注文を貰いに小柄な店員がやってきた。歳のころは十二歳ほど。

常連はしばらく休んでいた『ポーラ』という女性店員の変わり果てた姿に驚き、新規の客は違う意味で驚いた。

他の店員は見目麗しい女性ばかりなのにポーラだけは包帯を顔中に撒いている有様。お盆を持つ手も何重にも撒かれた包帯で包まれている。

他の店員にしごかれたのか、と危ぶむが主人である偉丈夫のドワーフ『ミア・グランド』は否定する。なにより彼女が最も可愛がっている店員だ。そんな不届き者は潰している、と豪語する。

「そ、そう……」

「いいから注文しな。あんたらが飲み食いに金を落とせばそれだけこの子の治療費の足しになるんだ。たくさん食べてたくさん稼ぎなよ」

「おう」

ミアは新規の客に『彼女（ポーラ）はあまり重い物は運べない。時間はかかるがそれはご愛敬』と告げて料理を作り始める。

ポーラという女性店員は左側が赤毛で右側が白い変わった頭髪になっていた。

右目は眼帯で隠されているが見えている右の眉毛も白い。それと言葉が拙（つた）いのは喉が潰れている為だと他の店員が言った。

元冒険者で死にかけるほどのケガを負った弊害で記憶喪失気味になっている。だから、どんな冒険者なのか本人は覚えていない。

分かるのは『ポーラ・ニーカ』という名前だけ。

「どこの【ファミリア】かも分からない？　背中を見ればいいんじゃないのか？」

「……すみません。そういう個人的な質問は規則違反ですよ、お客様」

流暢に喋るのは長く働いている店員の一人だ。

彼女達や常連は知っていて黙っている。ポーラが何者かを。ただ、彼女（ポーラ）自身は本当に過去を思い出せない。分かるのは断片的な事だけ。

腰に下げた小剣が誰に借り受けたのかは覚えている。しかし、それらを含めても朧気にしか思い出せない。

（……普通に考えてポランというのが私の事なんだよね。……でも、知らない振りをしろって言われているし……。神様が来たら看破されると思うんだけど……、ミア母さんはどうするんだろう）

言葉が拙（つたな）いお陰で説明する手間は省けている。けれども、ポーラ――ポラン・ブーニディッカ――は自分の状況をよく理解していた。とても記憶喪失とは思えないくらいに。だが、それでも思い出せない事はある。

何の為に迷宮都市オラリオに来てどこの【ファミリア】に所属して誰（何）と戦いズタボロになって今に至るのかを。

噂を集めていけば神ヘスティアに行くつく。しかし、そこに本当に所属していた、という実感がまるで無い。――だからこそ記憶喪失ということにしている。

仮に記憶が戻った場合、様々なところで迷惑をかけている今、かの【ファミリア】に戻るのはとても危険だ。特に主神が危うい立場になる。それだけは避けなければならない、という強い想いがある。だから、今のまま（記憶喪失）でいい。

もうポランは冒険者に未練は無かった。ここから新たな出発をすることが大切である、と今は思い前を向く。

『＃1―0Z　エピローグ』へ

ユーカリン・ナナツタエ
＃2―0Ａ　プロローグ

遭遇

【片翼剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』の次なる標的は奇しくも因縁のある【ヘスティア・ファミリア】の団員であった。

冒険者としての『殺し』の技術が冴え渡る。――というのは些か皮肉めいていて、笑えない。

最初から敵意をぶつけてくるからこそ――ある意味では――ためらいを必要としなくていい。

外面だけでもそういう事にしておかなければ冒険者として続けていられないから。

強敵と認めた『ポラン・ブーニディッカ』は既に居ない。悪夢は去った筈だ。

あのモンスター共々――

それなのに――悪夢の再来か、と。

彼女（ポラン）との戦闘は互いの主神の了承――了解の上で執り行われた。

それを逆恨みされるとは想定していなかった。

無視する事もできない。しかし、主神たる『ヘスティア』もお手上げのようだった。

ならば迎撃するしかない。

向こうが勝手に敵だと判断して襲ってきても今のアイズが本気を出すわけにはいかない。

その辺りが実にもどかしい。

本気は出せないが振りとして相手をする。

こちらは手負いだ。――それと次の【ランクアップ】が控えている。

「……君は……何なのかな」

口を尖らせ古傷を気にしつつ相手を睨みつける。

大人であれば怯むかもしれないが、アイズはまだ十二歳になったば

かり――

敵性クリーチャーこと――名前は確か『ユーカリン』といった――

冒険者になりたての歳若い少女が仲間の敵討ちとは殊勝である、と。

――しかし、冒険者というよりは駆け出しの暗殺者のような姿は何なのか。しかも凄く目立つ色合い――

極東系とも違うようだが――

「……いい加減にしないと……殺し合いになるよ」

不壊属性（デュランダル）の細身の剣（デスペレート）を抜き放つ。

片腕だと引き抜きも不恰好だが――

顔の傷はまだ癒えていない。

剣を持つ指もまだ揃っていない。

不完全な状態でも負ける要素は感じられないが――さて、どう戦えばいいのかと思案する。

「……でも、敗北を知っておいた方がいいかもね」

駆け出しとの力の差を見せ付ければある程度は抑止力となる。

そう思って体勢を低くする。

敵の獲物は二本の小剣。ポランとは違う戦闘スタイルは気持ち的にも――少しだけ安心した。

彼女（ポラン）はとても弱く、とても強かった。

願わくば――真っ当な戦闘が出来れば――もっと良かったのに、と今でも思う。

ユーカリンも同じ道を辿るとは思えないが――

例外がそう何度も起きては困る。

「……【目覚め（テンペスト）よ。エアリエル】」

『風』の付与魔法（エンチャント）にて一気に勝負をつけるアイズ。

駆け出しに奥の手があるとは思えない。けれども絶対に無いとも言い切れない。

頭の片隅に僅かな警戒を置きつつ突進する。

これで終わりだといいのだけれど――というアイズの願いは果たして――

『#2—01　ある少女の死』へ

＃2―0Z　エピローグ

決着

仲間の敵討ちを理由にして戦うも全戦全敗。
掛け値なしで強い【片翼剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』――
元の【剣姫】であればもっと強かった筈だ。
手負いに負けて悔しくないのかと聞かれれば半々――
それよりも手合わせしていただいた事に深く感謝していた。
――それにアイズを屠る事が目的ではない。それはまた別の話しだ。
迷宮都市『オラリオ』にて冒険者となり、結局のところ冒険者らしい仕事は殆どしてこなかったような気がする。
実際、何にもしていないようなものだ。
それと神『ヘスティア』に多大な迷惑をかけておいて恩返しもままならないとは――
ついでに神『ロキ』にも、だ。
「……ヤバイ。とにかくヤバイ……」
ダンジョンの存在価値がほとんど無いではないか、と。
合間に潜ってはいたが目的がほぼアイズばかり。
――別に彼女が最終目標ではなかったのだが――
何処で何を間違えたのか。
命あっての物種とはこの事か。
だが、短期で強化するにはアイズに挑戦するのが早道だと――
唸る挑戦者にして駆け出しの冒険者――人間（ヒューマン）の少女『ユーカリン・ナナツタエ』はアドバイス元が働いている酒場『豊穣の女主人』に向かった。
行き着けというほど通い詰めてはいない。それに自分はまだ十二歳のか弱き少女である。
店が目的ではなく、そこで働く従業員に用があっただけだ。
当然、酒も嗜んでいないし、この店の料理を食べられるほどに稼い

でもいない。
「ありゃ～、また負けたのニャ？」
猫耳と尻尾を持つ亜人（デミ・ヒューマン）『猫人（キャットピープル）』の従業員『アーニャ・フローメル』が苦笑した。
オラリオに来て色々と親切にしてもらった恩があるので、なんとか頑張って知名度を上げ、そこそこ稼いでいい所を見せたかった。――現時点で全て裏目に出ているという結果。
「こてんぱんです。殺すつもりで突っ込んでいるんですけどね」
【剣姫】を相手にするならそれぐらいの気概は必要ニャ。……だけど、何度も挑戦して生き残っているところは中々に見所があるかもニャ」
嫌らしい笑みで報告を聞くアーニャ。
店内は満席ではないものの結構客が注文を待っている状態だった。
――彼女はそれを全力で無視している形だ。
当然――
「なに、サボってんだい、バカ猫！」
店の奥から姿を見せるのは『豊穣の女主人』の主で偉丈夫のドワーフ。
――『ミア・グランド』という女性だ。
怒りのミアはお盆を投げつけたが、アーニャはそれを辛うじて避け――当然の事ながら延長線上に居たユーカリンの顔に直撃する。
この一撃だけで駆け出しのユーカリンは鼻血を出して気絶。
倒れた少女を手馴れた動きで店の奥に運び込むのはアーニャ以外の従業員達だった。
――放置すると客の邪魔になるので、大抵は店の奥に放り込んで裏手から投げ捨てる。
「……なに避けてんだい？」
ズシン、ズシンと地響きがするような足取りで近付くミアに対し、アーニャは震え上がってその場に座り込んだ。
尻尾は既に爆発寸前に総毛立ち、頭から突き出ている猫耳は力なく萎れていた。

「……ひっ。か、母ちゃん。今……大事な仲間との……」
「この店では仲間よりも客を優先しな！」
恫喝と共にアーニャの頭上に落ちてくるミアの拳骨。
頭蓋骨が砕けたかのような音が店内に響き渡り、静かになる。
――これはこの店ではよく見られる光景で数分も経てば賑やかさが戻る。
気絶した同僚は邪魔なので奥の部屋に放り込む事になっている。
その後で別の従業員を呼びつけて、アーニャの代理を命令する。
「ポーラ。しっかり働きな」
「……ミア母さん。……ポーラは先日……」
という従業員の声でミアは忘れていた事を思い出す。
ポーラという従業員は先日、死んだばかりだということを。
いつもならば豪快さで有名なミアも今の瞬間だけは優しい女主人に相応しいしおらしさを醸し出した。
言葉足らずだけど素直で働き者の従業員の事を自分はまだ覚えていた。その事を少しだけ意外と思いつつも店の奥に引っ込み、無言のまま料理を作り始める。
話しに出たポーラとは最近入った新人で『ポーラ・ニーカ』という名前の少女だ。
年の頃はユーカリンと同じくらいの人間（ヒューマン）。
しかし――彼女の右目（右目）――瞳は真っ白。その瞳は視力を失っていて――いつも危なっかしい動きで――手探りで移動していた。――ついでに右耳も欠損していた。
白いのは瞳だけではない。まつ毛と髪の毛――一部だけ――も右側だけが色素が抜け落ちたようになっていた。
歳若い娘の筈だが、よく見れば顔の大部分が何者かに切り刻まれたような傷跡がいくつも残されていて痛々しかった。――それと両手は手袋を着用している。
彼女の存在が認知され始めてくる頃、客も色々と心得たように――その少女の為に――ぶつからないように避けたりするようになった。
ポーラはミアが――珍しく――可愛がっている従業員なので意地

悪をするような命知らずが居なかったせいもある。ただし、他の従業員には彼女のような優しさは見せない――というか見せる余裕が無い。

新しく来た客はポーラの存在に最初は疑問を抱くが、詮索しないのが迷宮都市オラリオならではの暗黙のルール――

可愛い従業員の登場に客達は安堵しつつ見た目が奇異の彼女（ポーラ）に注目していった。

それがつい先日の事だと誰が予想できたか――

彼女（ポーラ）の【眷属（ファミリア・ミィス）の物語】を知る者は本当に極限られている。それこそ――神のみぞ知るほどに――

そしてそれは新たに紡がれる事無く――失われてしまった。

『終幕』

＃2―01　ある少女の死

凄絶なる死闘から数か月が経過した。

人々は変わり果てた【剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』と主神『ヘスティア』の異様に言葉を無くしていたが、それも時と共に落ち着いてくる。

しかし、さすがに――いったいどのような事があれば【剣姫】を半殺しにできるのだという噂は中々収まらなかった。

真実は他の冒険者には伝わらず、ギルドも詳細を伏せていた。――だからこそ数多の憶測が生まれる結果となってしまった。

ただ、確実に分かっている事はアイズが重傷を負う事件の中で一人の冒険者が死んだこと。

無名の駆け出し冒険者の死。

『二つ名』を持っていれば他の神々も黙ってはいられないが、何故か情報が出て来ない。

アイズという生き証人が居るにもかかわらず。

彼女の本拠（ホーム）でもお通夜のような有様で静まり返っていた。

主神である『ロキ』は――いつもならば明るく振舞い、情報集めに奔走しているところだ。その彼女が今回の事件に対して緘口令を敷いている。

前代未聞といってもいい。

「……うちに言えることなんてな～んにもないわ。これは子供たちの問題やから」

と、普段通りの調子で言いつつも心中は穏やかではない。

稼ぎ頭の一柱がズタボロになっているのだから。

原因を取り除くべく、【ファミリア】の団員総出で仕返ししていてもおかしくない。現にロキは気性の荒さで有名な神だった。

彼女（ロキ）の機嫌を損ねて潰された【ファミリア】は数知れず――

だが、全身包帯まみれのアイズ本人は復讐を望んでいない。

「……うちかて空気くらい読める。……それでアイズたん。どないす

る？　……正直に言えばあのドチビ（ヘスティア）に当たるのは……気が引けるんやけど」

「……普段通りで……」

いつもの調子でアイズが言うと軽く息をついたロキは苦笑をにじませる。

余計なお節介をすればきっとアイズは怒る。それが感じ取れた。

――最悪、顔面にフォークがねじ込まれる可能性も――

滅多に人を頼らないアイズが頭を下げる案件ともなれば、いかな神（ロキ）とて聞かないわけにはいかない。

「……分かった。フィンもガレスもリヴェリアたんも同じ意見か？」

同席している【ファミリア】の団長と副団長達に声をかけると一様に頷かれた。

総意は出た、とロキは判断し、手を叩く。

これで手打ちにする、という意味で。

†

当人はそれで納得しても周りの者達もすぐに落ち着くとは限らない。

街中では様々な噂が今も飛び交っている。その火消しは【ロキ・ファミリア】でも難しい。

それから更に日が経ち、廃墟同然の教会を本拠（ホーム）にしている【ヘスティア・ファミリア】の主神『ヘスティア』はうな垂れていた。

長い黒髪をいつもならツインテールにまとめているところだが、今は結ばずに放置していた。他の神々から幼い体型を指摘されたりする身体が今は病的なまでに痩せ衰えている――ような雰囲気を醸し出していた。

青い瞳も生気が無い。

いつもならば明るい団員が側に居たのに――今は自分以外の存在が感じられない。

つい先日まで一人は確実に居た筈なのに、と。

「……おかしい。先日まで平和だった筈なのに……」

貧乏でも明るく元気に過ごす事をもっとうとしていた【ファミリ

ア】がどういう理由で苦境に立たされているのか。
壊れかけたテーブルの上にはかつて居た団員の所持品が乗せられていた。その中には今まで稼いだ資金が入った皮袋が何個も――ただし、その殆どが返り血を浴びたように赤かったけれど。
――まるで遺品だ。
ヘスティアは誰とも無しに呟いた。
当面の生活費はこの資金を使えば問題は無い。けれども今は使いたくなかった。
元々は団員である子供の持ち物だ。主を失ったからとてすぐに手が出せるほどヘスティアは守銭奴ではない、と自負している。
だが、それでも腹は減る。
数日ほど何も口にしていない事を音で思い出した。
今の自分の顔はきっと酷くやつれていることだろう、と。
明日からまたアルバイトでもして団員募集して頑張ろうと思いつつも、なかなか外に出ようとする気分が湧かなかった。

†

そんな中、酔狂としか言いようの無い客がやってきた。
無気力にうな垂れ、今にも死にそうな状態のヘスティアに会いに来る者は殆ど居ない――筈だ。
筈だった、と過去形にすべきか。
「……なんだい、なんだい。借金取りかい？　それとも【ヘファイストス・ファミリア】の子かい？」
ヨロヨロと朽ちかけたベッドから身を起こすヘスティア。
部屋の内装品は以前からボロく――正しくは新調するのを忘れていただけだが。
「……あ、あのぅ……。ここを本拠（ホーム）にしている神様に会いに来たんですが？」
「ボクがそうだよ。よく地下への入り口が分かったね。関係者以外は滅多に入ってこないところなんだ」
弱々しくも来訪者に告げる。
気難しい性格ではないヘスティアは明るく振舞う事で有名な神で

はあったが、今は面影無く沈んでいた。
元気になるにはまだ時間が必要な時に――来訪者には悪いと思いつつ追い払うこと無く出迎える。
元々が零細【ファミリア】なので、拒む理由が無かっただけだ。
「前に所属していた【ファミリア】が入って三日で潰されてしまいまして……。改宗（コンバージョン）しに……。ここを勧められたのですが……」
「それはまあ……、お気の毒様だね……。へー、三日で潰されたと……。ボクはここしばらく外界の情報を入れてなくてね……」
「私も入ったばかりなんで詳しくは……。裏家業には人気のところだった、というのは存じております」
「……へー。……ボクのところは裏家業とは縁の無いところだよ。……念のために言っておくけど……」
不穏な単語につい一歩下がってしまったヘスティア。
何やら怪しい存在に巻き込まれそうな予感がする。――面会に来た存在は――見た感じでは小人族（パルゥム）か人間（ヒューマン）の女の子に見えた。歳若いと区別が難しい。
言葉尻からは悪い存在とは思えない。ただ、服装が実に怪しい。
暗い色合いのローブのようなもので身体を隠している。――顔はちゃんと出しているけれど。
「私としても危険な仕事よりかは普通の冒険者になりたいのですが……。得意分野がちょっと……物騒っていうだけです」
「……君、ギルドの要注意人物一覧（ブラックリスト）に載ってたりはしないだろうね？」
「それは大丈夫だと思いますよ。登録してまだ三日ですから」
それはつまり冒険者となって実質三日しか経たずに何故か【ファミリア】が潰されて路頭に迷う事になった、ということになる。
――見た目は既に歴戦の犯罪者のような雰囲気なのだが――嘘を言っていない事は理解した。

†

【ヘスティア・ファミリア】に所属したいと飛び込みでやって来たのは――人間（ヒューマン）の女の子で名は『ユーカリン・ナナツタエ』という。
極東風の名前に聞こえるが見た目は茶髪に青い瞳。色白の肌を持

つ迷宮都市オラリオに多く居る住人と大差が無い。
彼女が親から聞いた話しでは他国を練り歩く旅人の血筋が影響しているとか。
ユーカリンは己の出自を殆ど知らない。――というよりは何世代も前のことなので両親も元々の故郷が何処だったか知らなかったらしい。
そんな親も父親が流行り病で死に。母親はどこぞの強盗に殺された。
――そして、独り身になった――
「……随分と暗い過去のようだね。……言いにくいことなら……、別に無理して言わなくてもいいよ」
「そうですか？」
明るく話すユーカリンはヘスティアから見て変わった子だ、と感じさせた。
不幸を不幸と思っていない。ただ、悲しみはちゃんと理解している。――そう感じただけだが――
「その……ナナツタエというのは独特の文字で書くんじゃないのかい？」
「どうなんでしょうか。気にした事がありませんでしたので」
仮にヘスティアが言う文字で書いたとしても彼女の知識に引っ掛かりを覚えるものはない。――というより詳しくないので。
知り合いに尋ねる以外に興味は湧かなかった。
極東の事なら詳しい友神（ゆうじん）を知ってはいるが、こちらも無理に聞き出すのは無粋と思った。
「……それでボクの【ファミリア】に入りたいと……。……もしかして誰かからの紹介とか？」
「え、ええ、まあ……。裏家業を営む【ファミリア】出身でしたので……、なかなか頼る手立てが見つからず……。先日、回復薬の下見に入った店で運良く色々と……」
回復薬を扱ってて何者にも親切な者はヘスティアには一人しか浮かばなかった。

商業系の【ファミリア】を営み、自分と同じく零細【ファミリア】として有名な『ミアハ』だ。

あの神ならばどんな出自だろうと快く誰彼構わず手助けしようとする。特にユーカリンのような駆け出しならば尚更――

†

盛大な溜息をつきつつ――それでも折角来てくれたユーカリンを無下にする事は出来ない。

入って三日なら深刻な状態ではない筈だ。

物騒を承知で仕事内容を軽く尋ねてみた。すると冒険者ギルドに登録してアドバイザーの講義を受けた程度だという。

今の格好は【ファミリア】に入った時に渡されたもので今は餞別となってしまった。

本格的な冒険というものはこれから、というところで彼女の【ファミリア】としての活動が序盤で終わってしまった。

だからこそまだ綺麗な存在と言える。

聞き終えた後、ひどく睡魔に襲われたヘスティアはユーカリンに先に寝ると言って早々に眠ってしまった。

その間、ユーカリンは健気にもヘスティアの身体に毛布をかけ、周りの掃除を始める。

前の【ファミリア】でも新人は掃除が基本と教わった。――というかそれだけで終わってしまった。

結局、自分が居た【ファミリア】がどんな組織だったのか――裏家業を営む以外、分からずじまいとなってしまった。

良いも悪いも関係なく、受け入れてくれたところには恩返ししなければならない。だが、既にメンバーの殆どは散り散りになり、主神も天界に送還されている。

突然の放置。路頭に迷う事態になってしまって前途多難だ、と他人事のように現実逃避も試みた。しかし、黙っていても腹は空く。

そして、現在に至る。

（他の団員の姿が無いようだけど……。私一人かな。他にも居たら挨拶しておけばいいか）

既に寝息を立てているヘスティアを見て、可愛いと思いつつ掃除の続きを始める。

†

ヘスティアが次に目覚めといい匂いに気付いて一気に覚醒した。

廃墟同然の本拠（ホーム）は外からの匂いがよく入る。それだけボロいという証拠だ。

「お目覚めですか、神様」

聞きなれない声に驚きつつ、それは前に居た団員（ポラン）のものではないと気付いた。

「誰だい……って、ナナツタエ君か……。まだ居たんだね、君は」

そう言いながら彼女の目的も思い出す。

起きたばかりのヘスティアはまだ少し思考が定まっていないようだ。

目蓋を擦りつつ上体を起こす。

「あらかた掃除しておきました。それと朝食です。……ずっとお腹が鳴っていたようでしたが……。食事はずっとされていなかったのですか？」

「食欲がなかっただけだよ。それよりこの匂いは……、ジャガ丸くんかい？」

「はい。安くて腹持ちの良いジャガ丸くんです」

手際よくテーブルの上に皿を並べ、問題のジャガ丸くんを配膳していく。

出来立て――揚げたて――ほやほやの美味しそうな匂いにつられてヘスティアは力の入らない身体に鞭打ちように移動を開始する。

「そうじゃなくて……。お金はどうしたんだい？　ここにあったものを使ったんじゃないだろうね？」

「死んだ両親から生活費を貰っていたので……。一年分くらいの生活費はありますよ」

この迷宮都市（オラリオ）に来たのもごく最近だとユーカリンは告げた。

街の詳細はまだ把握していないけれど――

ヘスティアは念のためにユーカリンを見据える。そして、嘘を言っ

ていない事を確認した。
話術に優れていようとも神に嘘はつけない。それがこの世界のルールの一つだ。
「……顔色が優れないようですが……、大丈夫ですか？」
「色々とあってね」
度重なる心痛によってヘスティアの顔は日に日に酷くなっていた。
目元に隈ができて病的とも言える。
それでも朝の内はしっかりと顔を洗ったりするのだが、まだ日が浅い為にすぐに悪化してしまう。
食欲減退。睡眠不足が彼女（ヘスティア）の心に暗い影を落とす。
天真爛漫を絵に描いたような神ヘスティアは自分でも不思議なほど他人に対する愚痴を言い始めた。
それは性格が素直な明るい雰囲気を持つ女の子が姿勢正しく座っていたから――
おそらく理由はそんな程度だった。
見た目にそぐわぬ真っ当な子供。
「……ヴァレン何某（なにがし）がボクの眷属（子）に手をかけたんだよ。いくら仕方がなかったとはいえ……、あんな良い子を……」
「……すみません。前半が聞き取れなかったのですが……。後……場面が飛びすぎだと思います」
いきなり号泣し、鼻水を垂らしながら喋るようになってしまって聞き取るのが難しくなってきた。
ユーカリンは手拭いで何度もヘスティアの顔を拭いた。
相当嫌な事があったのだけは理解した。それと度々出てくる『ヴァレン何某（なにがし）』は噂でも聞いた事がある【ロキ・ファミリア】所属のレベル４の冒険者『アイズ・ヴァレンシュタイン』であることも。
情報戦において多少の心得はあるユーカリン。といっても人の噂程度しか把握していない。
有名人なら嫌でも耳に入ってくる。
「うぶあぶあぶぅ」
後半は解読不能に陥り、泣き疲れて眠ってしまう。

ベッドに何とかヘスティアを乗せて、掃除の続きを始めるユーカリン。

そういえば街で買ってきたジャガ丸くんを食べずに寝てしまったな、と残念に思いつつ、また街に繰り出す。

ヘスティアには休息と食事が必要なのは分かった。とにかく、落ち着くまでは本拠（ホーム）と往復しなければならない。

ユーカリンは早いうちに【ファミリア】の手続きが終わるものだと思っていた。それぞれに色んな事情があるものだな、としみじみ思いつつ――

†

次の日、雲が立ちこんで天気は荒れ模様となった。

一時間後には雨が降り始めて地面を濡らしていく。

廃墟の教会が本拠（ホーム）となっている【ヘスティア・ファミリア】から顔を覗かせて雨足を確認するユーカリンは外出を控えようと思い、地下へと戻った。

通りを歩く者達は傘を差したり、人の往来はまばらだが無人ではなかった。

多くの冒険者達が集う酒場も昼からの開店準備に追われ、雨だからと閉店する様子は見せなかった。

買出しに出かける従業員。

ダンジョンに向かう者と引き返す者――

それ以外の労働者達が交差していく。

『豊穣の女主人』で働く人間（ヒューマン）の少女は路地裏にゴミ捨てに出ていた。

――右側の一部が白いが大部分は赤毛――髪が僅かな水分によって濡れている。

酒場の従業員である証しの若葉色の制服と白いエプロンも足元から跳ねた泥水などによって濡れたり汚れたりしてきた。

それは偏（ひとえ）に傘を差す手にあまり力が入らないため――ということも考えられる。

「……」

頬に感じる風はまだ弱い。
もう少し強ければ傘を飛ばされてしまう事もありえる。
今の調子では開店時間にはもっと酷い雨足になりそうだと予想しつつ奥へと進む。
店の裏手には空き地と倉庫があり、食材の在庫を移動させる上でよく利用していた。
盗みに入るような不届き者が居るとは思えない。しかし、新人従業員である少女にはまだ窺い知れない事だった。
このオラリオにある酒場『豊穣の女主人』は知る人ぞ知る名店であると同時に畏怖の対象でもあった。
その代表格が店の主人である偉丈夫の女ドワーフ『ミア・グランド』だ。
ミアの存在を知る者は決して酒場で騒ぎを起こさない。――早死にしたくないから。
殺されないとしても片腕だけで持ち上げられ、店から放り出されるか、その場で拳骨による制裁を受けるか――
並みの冒険者では歯が立たない。――ましてレベル４程度までは。
そんな彼女の恩恵があるから――というわけではないが、ついでの見回りを済ませて店に戻ろうとした時、何処からともなく『殺気』を感じた。
酒場の従業員の多くは元冒険者で構成されている。――見回りをしている赤毛の少女もその一人だ。
背中に嫌な気配をひしひしと感じる。しかし、発生元が雨によって感知出来ない。とにかく、何となくこの場に居てはいけない気がした。
護身用に腰から下げている長さ３０Ｃ（セルチ）ほどの小剣が納まっている鞘に触れる。――いつでも引き抜けるように。
右側の視力が無いので索敵に難があるが、細かく動いて辺りを探る。
仮に敵だとしても無理に相手をせず、逃走を選ぶ。戦闘は最低限を心がけている。それでもどうにもならない場合は対応を許可されて

いた。
（……賊？　……気配は多くないから……。なんでしょうか……）
雨の音で周りからの情報が手に入りにくい。
地面もぬかるんでいる。
それでも敵意は今も感じ取れていた。
オラリオ内にモンスターが居るとは思えない。というか基本的にモンスターはダンジョンから出ないと冒険者ギルドのアドバイザーから教わった。
仮に飛び出すような事があればすぐさま対処に向かう手筈である事も――

†

出来るだけ広い通りに向かうように足を進める。
建物の上から襲い掛かってくる場合も考慮しつつ時間をかけて店に向かう。
視界の大部分が失われているので一般の者より移動が困難な少女は焦る心を懸命に静める。
「!?」
だが、運悪く左側の目（無事な方）に水滴が入り込み、足取りが乱れた。
視界の利かない状況では無闇に動く事は悪手である。しかし、殺気をぶつけてくる相手から逃げなければならない。
自然と息苦しさが襲ってきて、頭が混乱してくる。
大声を上げようにも今の自分の声量はかなり減退している。更に雨の音が大きいので声を出しても無駄だと思われる。
――せいぜい帰りが遅い事を気にして仲間が様子見にでも来てくれれば――
見えない中をゆっくりと移動しているものの帰り道が合っているのか分からない。
黙って止まっているのも不味いと思ったからだが――
壁のようなものにぶつかりつつ懸命に殺気から逃げる努力をする。
無理に迎撃したいとは思っていない。
自分を追う者は――覚えがあるのは一人くらい。その者はしつこ

く追ってきたりはしない。むしろ自分が追う方だった。
では、誰が殺気を振り撒いているのか。
確証がある――または予想できる人物は他には思い浮かばない。
恨みを買っている、という意味で言えば該当者は多数に昇るけれど――

その中の一人であればどうしようもない。
（こんな雨の中……、だからこそ狙い目という事でしょうか？）
言葉はつたなくなったが思考は普通だ。
赤毛の少女はびしょ濡れになりながら逃避行を試みる。
焦りの為に方向感覚が狂っているようだが、とにかく現場から少しでも離れなければ、という思いだけで足を懸命に動かした。
その場で黙っているのは――危険だと思ったから。だが、この選択が間違っている事も充分にありえる。

†

数分。更に数分。
時間経過と共に感じるのは『敵』からの殺気のみ。近付く気配は感じない。
一定距離を保っているのか――
視界が利かない状態なのは見ていて分かっている筈だ。どうして一気に来ないのか、というのも疑問だ。
――もしかして自分の杞憂か、と。
このところの疲れが出て判断力を失い、見えない敵を生み出したとでもいうのか。
（……充分ありえるのですが……。でも、何らかの警告は今も感じる。……ただの恐怖心とも……）
『豊穣の女主人』には屈強な同僚が何人も居る。それらよりも怖い存在など居るものか。
居るとしても自分には一人、または――
後から湧いて出る該当者たちが脳裏を過ぎっていく。
敵が急に増えた、と。
寒さの為に身体が震えてきた。一向に止まない雨も不安を増徴さ

せる。
助けを呼びたくても――赤毛の少女の喉は半分切り裂かれたままだ。まだ安静にしなければならないと言われている。
（……寒い。……手が震えてきた。……体力が……体温があまり下がるのは……）
悪夢の再来を意味する。
少女はとにかく移動し続けた。今のところ他の音は聞こえない。
誰かの叫びも。
それどころか街を歩いている筈の住人たちの声さえも。
路地裏に迷い込んでしまったのか、と。
自分が進んでいる場所が把握できない為、より一層の不安が襲う。
「!?」
何かにぶつかり前のめりに倒れこむ。
冷たい水の感触があった。
誰か助けて、と声無き叫びを上げる。
その時になって漸くはっきりとした気配が現われた。
†
見えないながらも分かる憎悪の気配――
確かに何者かが近くに居る。――それは最近感じた事のあるものに似ているようで違うような――。だが、それは赤毛の少女にとっては充分過ぎるほどの力の塊であった。
強者の覇気、とでもいうような――
死線を潜り抜けてきたような暴力の権化とも形容出来るもの。
（……まるで……!?）
何かに例えようとした時、腹部に一撃が加えられる。
それはとても強烈で骨が軋む音が聞こえた。
確実に攻撃によるものだ。
見えないゆえに避けようのない攻撃に対し、どうする事もできない。
壁や地面にぶつかりながら気配を必死に読もうと試みる。だが、方向感覚が狂っているし、闇の中の戦闘は不得意だった。

「……貴女から血の匂いがしますよ」
地の底から噴出してくる敵意の塊。それが容赦なく少女を打ちのめすように――それは確かに『敵』だと思わせた。
どういうつもりか分からないけれど、確実な攻撃を受けた。ゆえに逃走は絶望的だ。
迎撃するにも視界が利かない。
「……何のつもりか知りませんが……、私はまだ……。……生に縋っても仕方が無いのかもしれませんが……」
雨の降りしきる中でも聞こえる凛とした相手の声。
その声に全く聞き覚えは無いけれど、敵意と一緒に高潔さが混じっているような気がした。
ごく最近、それと似たような感覚を味わったばかり――
敵は冒険者。それも――彼女に匹敵するレベルの――
体感的なものだから当てになるかは不明。それでも強敵であろうと予測する。
そうでなければ今の一撃はもう少し軽くなければ納得できない。
何度も受けた攻撃をそうそう早くには忘れない。

†

進む先に敵が居る。そう思ったのは二度ほど吹き飛ばされてから理解した。
しかしながら逆方向に進もうにも何処を向いているのか分からない。更に反論を述べようにも相手にまず声が届かない。
喉の都合もあり、雨足が強くて万全であったとしても届かせるのは難しい。
一方的に攻撃を受ける謂れは無いのだが、黙ってやられても解決するとは思えない。
かといって一日いっぱい雨に打たれながら地に這いつくばっていれば体温が低下してより身動きが取れなくなり、最悪死んでしまう。
（……寒い、寒い、寒い。あと、痛い……。誰か応援に来て……。助けて誰か）
呼吸するのも辛い状況の最中、必死に耐え続けるしかできないのは

もどかしい。けれどもどうすることもできない。
このままでは死ぬ。命の危険は確実に感じていた。
いや――
もっと最悪の事態が起きるかもしれない。
今もか――既に事件は解決した筈ではないのか、と疑問が湧いて来る――
もし、このまま嬲り殺しに遭えば悪夢の再来が起きても不思議は無い。根拠は無いけれど――少女はより一層、怯え始める。
事態を打開する一手と同時に多くのものを失う諸刃の剣。
（助けて、神様！　もう一度、あと少し……。）
見えない中、濡れた手袋に包まれた手を必死に神の下へと伸ばすも、それは途中で遮られた。
ボキリと――はっきりと聞こえた――骨が折れる音と痛み。
伸ばした手は無情に打ち払われてしまった。
「!?」
声無き悲鳴を上げる少女。
こんな時でも声は何も出て来ない。ただ、空気が抜けたような掠れたものだけ。
「何をしようとしても……無駄です」
冷徹で玲瓏で雨よりもなお冷たい声。
あらゆる可能性を駆逐せんばかりの敵意の塊。
それに温かみなど存在しない。
あるのは端的な敵意のみ。
近くに居るであろうと存在は紛う事無き『敵』である。
『敵』は倒さなければならない。
黙って死ぬつもりは微塵も無い。
激痛と共に無情無慈悲なる意識が膨れ上がる。それは今の少女をいとも簡単に包み込んでしまうほど強大な力を得てしまった。
元々はダンジョンを過度に破壊する不届きな冒険者を殲滅する為の抗体。その幼体――かどうかは不明だが――を宿してしまった、と言われている。

ただし、原因となる大元は既に徹底的に破壊され、残滓のみがあるだけ――他にも原因があって憶測が膨らみ、真実は闇の中――

ただ、何かが何かのきっかけで覚醒するおそれがあり、対処できる人間の近くに保護という名目で置かれていた。――それが悪天候によって破られようとしている。

力と引き換えに【ステイタス】は意味を成さなくなり、神の力（アルカナム）を持ってしても正確な数値を表さない。

ギルドの公式記録として記載された彼女のレベルは０である。当然【ステイタス】も全て０――正確には数値で表す事が出来なくなった為、それを隠蔽する為の必要処置だった――

今までの努力が無になった、という意味も込められている。

『二つ名』も『スキル』も手に入れる事は叶わなかったけれど――

†

激痛と体温低下などによる生命危機などの要因により、身体の主導権をあっさりと奪われた。それと同時に身体の不調はたちどころに――とまではいかないが視力がまずは回復した。

身体のケガには変化無し。

雨足の強い環境の中でも少女の視界を妨げる要因は皆無。そして、未知なる『敵』の姿がはっきりと見えた。

それは幽鬼（敵）のように揺らめきつつ少女を狙っていた。

背丈は赤毛の少女より高く、声質や身体つきから女性である事が窺える。

華奢な身体を緑色のローブで頭からまとっているので表情は窺い知れない。

全身に浴びた返り血が雨にも流されずに残っている。

おそらくは殺戮者――または暗殺者だ。

腰には二振りの刀剣と思われる武器と一本の木刀が――左右――それぞれ提げられていた。

「……雰囲気が……変わりましたね。……本気を出した、ということですか？　それとも今までのは演技だと？」

頭を振りつつ脱力させた体勢から一気に加速する謎の敵。

木刀を繰り出すも少女は折れた方の腕で受け止める。
今更更に折れても問題は無い、とでもいうように。
骨の折れる音はしなかったが、手首がブランと気持ち悪い動きを見せ、それに気づいた襲撃者は一歩飛び退った。
手の感触から先ほどよりも硬い物に当てたような――不気味なものを感じた。
相手が驚いている間、少女は無事な手で腰に差してある武器に触れ、鞘から引き抜く。
護身用の小剣であるそれは特別な材質も技法も用いられておらず、一般的な武器屋で購入することが出来る。
値段は二万ヴァリス。
それが唯一少女の命を助けるもの――最後の砦――
得物を逆手に持ち水平に構え、体勢を低くする。
表情の消えた少女は相手と同じく一人の殺戮者と成り果てる。
己を害するものは敵である。
一つの信念を闘志に変換し、相手と対峙する。
そこには邪悪な想念は存在せず。ただ純粋なる攻撃衝動のみが突き動かす。
それゆえに戦い慣れた冒険者ほど驚きをあらわにする。
無に近い純粋な戦士を敵として認める事が果たして出来るのか、と。
既に戦闘は始まっている。だから、止まる理由はもう無い。
「……『目覚め(テンペスト)よ』……」
つたなくもはっきりと言える数少ない単語――それでも実際の言葉よりかは遅くなってしまった。
少女はかつて相対した『敵』の超短文詠唱の魔法を口ずさむ。しかし、魔力も魔法も覚えていないので発現するわけがない。
――けれども、それは確かに魔法に匹敵する効果を発揮した。

†

かの魔法は『風』の付与魔法(エンチャント)。
それは術者に様々な効果を現してくれる。攻撃を補助し、防衛し、

速度を上げてくれる――本来ならば。
言葉を紡いでも少女には何の恩恵も与えない。そもそも魔法ではなく、ただの言葉だから。
「……『エアリエル』」
確かめるように――確実に発声した単語を言い切る。――喉が改めて潰れても構わない、という意思表示でもある。
言い終わると同時に駆け出し、それと同時に小剣を相手に向かって思い切り振り抜く。
その行動だけでゴオォという音が確かに聞こえ、次いで風が襲ってきた。更に雨粒のオマケつき。
緊張が支配する現場において、未知の攻撃は驚異である。それゆえに相手は酷く驚いた。
もちろん、一撃で終わったりはしない。
先の先制攻撃と同時に既に駆け出し、怯んでいる一瞬の内に相手に迫り、蹴りをお見舞いする。
十二歳ほどの少女の体型ではかなり接近しなければ出来ない芸当だが、それを苦も無くやり遂げる。
小さな少女の攻撃は本来ならば大人ほどの背丈を持つ敵には大したダメージにはならない。その筈なのだが――
異常な事が起きた。単純にいえばそうなる。
駆け出し程度には後れを取らないと自負する敵が赤毛の少女を本当に見失い、攻撃を受けてしまっていた。
「……ぐぅ……、こ、この……」
と、木刀を振り抜くも標的の姿は既に無く、空を切る結果となった。
速度において自信のある敵が驚愕した。
いかに身体が小さくとも見失ったりするものか、と。
それに――この悪天候でも充分に戦えるだけの技量を持っている、と自負しているのにも関わらず。
先ほどの魔法の影響かと混乱する。
すぐさま気配を読もうとするも感知出来ない。
逃亡したのか、と思いはすれど駆ける音だけは聞き取れた。背後に

居ると予想するも振り向く頃には相手も移動して視界から逃れている有様だ。

（捉え切れないだと!?　この私が後れを取るとは……）

怒り心頭になる敵は自身も駆け出して相手を補足する速度を得ようと試みる。

しかし、それも束の間――足を払われて転ばされた。

体型の低さを利用した攻撃のようで油断してしまった。

すぐさま地面に手をついて強引に飛び起きる。その時、目の前に小剣が迫っている事を感じ取り、歯噛みしつつも木刀で懸命に迎撃する。

実際には木刀が長すぎるので、投げつける事で対処した。

「……くっ」

（対処が早い!?　そんなバカな……）

思考と身体の動きが追いつかない。襲撃者の敵である赤毛の少女は既に次の攻撃に移っていた。

無音、無言の攻防――

冷静な動きは怒りに染まった敵にとって充分驚異だった。

†

襲撃者はレベル４の元第二級冒険者。

対する少女も同等――またはそれ以上の実力を見せている――ように感じられる。しかし、最初の戦闘の手ごたえから決して自分と同じくらいだとは思えなかった。それがどうして急減に強くなったのか――

（速度が速いというよりは……相手の死角に回り込む能力に長けている？　またはこちらの動きを予測する観察眼？）

混乱しつつも分析しながら攻撃を捌く。何故か、先ほどから防御一辺倒を強いられている。

片腕の攻撃しかしていないのに――だからこそ、無駄の無い動きなのか、と――

（……攻撃の重さは大した事がない。『力』は私以下だ。おそらく『敏捷』も……。だが、何故、追いつけない？）

いや、姿を捉えられないのだ、と。
追えない敵に対して諦める選択は無い。ならば、と襲撃者は『視覚』に頼る事をやめる。
いかな冒険者とて全てを無にする事は出来ない。
濡れた地面を駆ける『音』はちゃんと届いている。そして、自分はそれを探知する事に長けた――
のんびりと思考する暇を敵は与えてくれない。
目蓋を閉じる必要は無く、ただ己の耳を信用すればいい。
（……歩幅が……大きい？　いや、こちらが目蓋を閉じたことで意図的に歩みを止めている箇所がある。……不味い……頭の動きを読んでいる……）
どういう技術なのか不明だが、小柄な体型に似合わず姑息な戦法を取っている。
それとも音すら把握した上での行動なのかと驚きつつ――分析を続ける。
途中途中に聞こえる風斬り音だけが頼りだ。
少なくとも武器を振るう以上はギリギリのところで捉える事が出来ている。
いかに不可思議な技術とて――敵に攻撃を当てなければ倒せないのだから。
そう判断した襲撃者は長い得物である木刀を捨て、小回りの利く小太刀の一本を抜き放つ。
かつて所属していた【ファミリア】の仲間の遺品でもある。
それを私闘に使うのは正直に言えば躊躇われた。けれども今は殺すか殺されるかの問題になっている。
死を覚悟した筈なのに生に縋るのはきっと――自分はとても卑しい存在だから――
未知なる強敵に対して喜びを覚えているとも言える。
これこそが冒険者としての醍醐味だ、と言わんばかりではないか。

†

歯噛みしつつも未知なる強敵に歓喜する襲撃者。

小技を絡めてくる姿勢は好感すら持てるのでは――

この『敵』はきっと――よき冒険者を師に持ったに違いない。

自然と笑みがこぼれてくる襲撃者は己が相手にする存在に敬意を抱く。それと同時に私闘を吹っかけたことを酷く後悔し始めた。

この者（赤毛の少女）は己が屠るべき『敵』ではなかった。

だが、悲しいかな。この戦いを止める術が分からない。

雨足が強くて相手の呼吸音や言葉が聞こえない。――いかに聴覚に優れていようとも周りが煩すぎる。

それと今は明確な殺意が宿っている。攻撃し過ぎた為だと思われる。

（……無関係の冒険者に私はなんという事を……。ならば……黙って攻撃を受けるか？　それで止まるのか？）

迫り来る攻撃を耳だけを頼りに防御する。

身体は戦いを止める気が無いようだ。見えない空間に蹴りを放っている。

気持ちとは裏腹に戦闘を楽しむもう一人の自分が居るかのように。

（やはり、どちらかが地面に倒れ伏すまでは……。ならば、せいぜい私を楽しませてください。……あなたを……利用させていただきます）

襲撃者は笑みをこぼし、雑念を振り払う。

本気で相手をする代わりにハンデを己に課す。

目蓋は決して開けず、魔法も使わない。

勝利条件は――相手が動かなくなるまで。

「……行きます」

音が途絶えた一瞬、襲撃者も攻撃予想地点に向かって跳躍する。

小柄な体型だとしても透明な存在ではない。

確実に迫り来る攻撃があるならば大元が存在する。そこを狙えばいい。

――実際にはそんな単純な事になるほど戦闘は甘くないのだが――

「とっ！」

攻撃を捉えた、と思った。しかし――

「『目覚め(テンペスト)よ。……エアリエル』」
嫌にはっきりと聞こえた相手の声――それと同時に背筋に悪寒が走る。
唸り声のように迫りつつ死の一線を辛うじて感じ取り、小太刀で迎撃すると力負ける。
「!?」
先ほどとは立場が逆転し、襲撃者が驚愕することになった。
『力』で押し負けた、という事は【ステイタス】が途中で変わったのか、と。
そんな筈は無いと思いつつも――
(手加減していたわけではあるまい。それとも最初は騙欺(ブラフ)だったとでも……)
確実に片手は潰した。あの動きが折れていないわけはない筈だ。
いや、と――
(……仮に義手だろうと使い物には……。もう一つ用意していた?)
見えない中では予測しか出来ない。
戦闘スタイル自体に変化は無く、単調な攻撃が続いている。
軽く息をついたところを狙い済ましたように鋭い一撃が飛んできた。今度は今までよりも更に速度が乗っていて反撃する暇が無かった。
(重い!? 早い!? これは……何が起きている!?)
予想を素早く終わらせて攻撃を予測しようとしても音が捉え難くなっていて的(まと)が定まらない。
これではまるで――
レベル5並みの冒険者と対峙しているような――
いや、まだ自分と同等ほどの筈だと言い聞かせる。
未だに決定的な一撃を受けていない。
それにしても相手は何者なのか、と疑問が湧き起こる。
見た目にも幼いし、それでいて強者となると小人族(パルゥム)の冒険者の可能性がある。
自分の知らない第一級冒険者となれば苦戦は必死。

「……こんなところに……」
隠れた才能が居るとは驚きだ。それは比喩抜きで感じた。
だからこそ自分は勿体ない事をしたと――
苦笑するもほんの一瞬――殺意の塊が迫る。
見えないながらも感じ取れた感覚。それを同じく感覚のみで避ける。だが――
ゴッ。
避けた方向から斬撃とは違う塊のような一撃を身体に受けた。――おそらく脇腹を。
これは拳か、壁か、石などの投擲物かと。
考えるより先に次の殺意が迫る。
鋭い一撃は一つだけ。それと同時期に別の攻撃が飛んで来る。
刀剣と殴打武器。つまりは拳か蹴りだ。
いやに柔軟な攻め手ではないかと感心すらした。
（……いや、誘導されている。なかなか侮れない）
盲点を突く攻撃。
しかし、この悪天候の最中、自分は既に視界を放棄している。ならば相手も同じではないのかと疑問を抱く。
雨粒を遮っているとしても――未だに身体に打ち付けているので天候はまだ回復していない。
騒音による消音と雨粒による盲目効果。
相手が何らかの『スキル』を使用している可能性もあるけれど、それにしては動きが妙だ。
時が経つごとに洗練されていっているように――
短期決戦で勝負をつけなければ確実な敗北が待っている、かもしれない。そう思うと自然と焦りが生まれてしまう。
（……そういえば、戦闘続きで忘れていました）
自分は満身創痍だった事を。
興味が優先して痛みを忘れ、快楽が自分を突き動かしているかのようだ。
さすがにそこまで戦闘狂だったとは思いたくないが、それでも身体

はまだ動いてくれる。
「……出来る事なら……、晴れた日で正々堂々と……」
戦いたかった。
それは紛れも無い事実だ。

†

長引く戦闘も終わらせなければ逃走用の体力が無くなってしまう。
――いや、このまま倒れ伏して死ぬのも悪くないかもしれない。
けれどもやはり――死にたくないな、と――
そうは思っても自分で始めた戦闘だ。次の攻撃が来たので迎撃する。
段々と対処が追いつかない。――というより【ステイタス】的に開きが生まれ始めてはいないかと――
見えないながらも気配を懸命に読んで対処している。それが一番の原因だが。
しかし、相手とて馬鹿げた『敏捷』に跳ね上がっているわけではない。ギリギリの攻防が洗練していっているだけだ。
それがむしろ恐ろしいといえる。
（また当たらない……。このままでは不味い）
目深にかぶっていたローブを利用して素早く顔を拭う。
一回の攻撃手段を犠牲にするのは死闘において一番の弱点になりえる。けれども、あえて行(おこな)った。
全身びしょ濡れは相手も同じ。
目蓋を開ければ薄暗い世界が戻ってくる。
（相手はまだ……健在のようですね。義手だと思っていましたが……自前でしたか……）
雨で分かりにくいが出血しているようだ。
手負いなのは確実。それなのに果敢に攻めて来る相手は自分よりも幼い存在。
見た目では分からない【ステイタス】の恩恵が目測を狂わせる。
（私も相手も疲労困憊。出来れば……いえ、始めたのはこちらの方です。しかも、勝手な理由で）

だからこそ止め時を見失ってしまった。
互いに矛を収めるにはどちらかが倒れるか。襲撃者である自分が相手を倒しきるしかない。
武器が無くとも肉体武器がある。
手数の多い相手は実に厄介だと襲撃者は嘆息する。
ならば魔法で吹き飛ばすのはどうか――
そう考えて、顔がほんの一瞬だけ相手から逸れた瞬間、泥水を浴びせられた。
折角回復した視界がまた塞がれてしまった。
舌打ちしつつも見えない戦闘に慣れた今は特段の障害とはなりえない。
落ち着きつつ詠唱を試みる。
通常の魔法は詠唱に集中する為、動かないのが基本だ。しかし、こと戦闘中ともなれば術者は良い的(まと)となる。
ならば動きながら詠唱すれば良い。――簡単に言える事でも実際には難しいものだ。
魔法の詠唱は集中が途切れてしまえば不発に終わる。それを持続させる事は並大抵ではない。
襲撃者はその中で移動しながら魔法を詠唱する『平行詠唱』を行使する事が出来る。
――ただし、途中で集中を乱されると『魔力暴発(イグニス・ファトウス)』という自爆じみた現象を引き起こしてしまう。
だが、その危険性を顧みず、詠唱を始めた。
「【今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤(ちりば)む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火(せいか)の加護を】」
気配を読み、相手の攻撃を予測、回避、そして――詠唱。
それらを途切れさせずに行(おこな)う事は並大抵の集中力では出来ない。
まして、襲撃者の魔力は中々に強大だ。その制御も一つ狂えば取り返しが付かなくなる。
それに対する少女の攻防も怯む事無く激しさを増していく。
単調な斬撃と足技を駆使し、少しずつ当たる回数が増えていく。

小剣による攻撃は避けられているけれど――それも時間の問題だ。
（……相手も相手だ。実に冷静に……。そうさせたのは私だが……）
余計な雑念が入ったが、すぐに修正する。
腕の一本も犠牲にする事も覚悟しつつ、詠唱を続ける。
「【汝を見捨てし者に光の慈悲を。来れ、さすらう風、流浪の旅人（ともがら）。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾（と）く走れ。星屑の光を宿し敵を討て】」
詠唱は完成した。だが、腹部への一撃で呼吸が乱れる。――それを強引に押し留める。
暗闇の中での長時間戦闘は何度もやりたくないと思いつつ、最後の一押しを決行する。
「……!?」
最後の言葉を言いかける寸前――顔の真横でゾリッと怖気が走るような音が聞こえ、次いで嫌な感覚が襲ってきた。
だが、いまさら止まる事は出来ない。
震え始める身体を強引に押しとどめて最後の一呼吸を吐き出す。
「【ルミノス・ウィンド】！」
目標が定まらないが、この魔法はある程度の範囲を吹き飛ばす。
完成した魔法により目の前に緑風をまとう大光玉が発生し、襲撃者の感覚によって敵のだいたいの位置目掛けて放たれた。

†

自爆せずに無事、魔法が機能したことだけでも御の字だ。しかし、向上する敵の能力がついに自分を捕らえてしまったのは痛い。もちろん、物理的にも――
感覚的にだが右耳をごっそりと抉り取られた気がする。
目や口元までは達していないとしても自分の特徴を狙われたのは面白くない。
聞き取れた音の調子から標的に当たったとは考えられない。――どこかの壁には当たった。
避けられたか、それとも見当違いだったか。
（それでも爆風などで距離は離せたはずだ）
気配からも接近は確認出来ない。しかし、最後の最後で接近を許し

てしまうとは――

終わった事を悔いても仕方が無い。ケガの度合いも酷いものだろうけれど、今は無視する。

改めて気配を読み直せば少し離れた位置にて息遣いを感知する。

連続戦闘を続けて漸(ようや)くにして疲労が襲ってきたようだ。

無理も無い。

自分でも疲れを感じている。まして相手は止血せずに連続戦闘を続けてきた。これ以上は命に関わる筈だ。

(……もう止まってください。これ以上は……無意味だ)

動きが無い内に顔を拭う。今度はすぐに動きが現われなかった。

回復させた視界によって現場の惨状が見えてきた。

やはり、見当違いの壁を大破させていた。標的は破壊によって発生した破片によるケガを負ったようだ。先ほどよりもズタボロになっていた。

それと近くの地面に見慣れた肉片が落ちていた。

(……改めて見ると気持ちの良いものではありませんね。……まして……自分のものとなると)

慌てふためくところだが、今は幾分か冷静に見る事が出来る。

特徴的な形の我が耳を、と――おそらく戦闘による緊張感が恐怖心を上回っているからだと――

視線を移動させた一瞬を相手が見逃すわけもなく――猛烈な速度を伴なって襲撃者の敵は飛んできた。

まさに比喩抜きで。

†

頭が嫌に冷静だった為か、研ぎ澄まされた戦闘の感覚ゆえか。

襲撃者は無意識の内に体勢を屈め、小太刀を持つ手に力を篭める。

それはほんの一瞬の出来事に過ぎないけれど――迫りつつある脅威に大して身体は見事に防衛本能を発揮した。

己(襲撃者)から離れ落ちた耳に相手の手が触れたのは偶然か――それ(耳)を起点に更に跳躍してくる。

だが、落ちているもの(耳)に構っている余裕はなかった。

ただ、本能に身を任せ身体を動かす事だけ。

「……」

（……）

相手が振り抜く小剣に――逆手に持った――自分の小太刀を合わせる。

かの武器は状態から推察するに一般のもののようだ――既にかなりボロボロになっていた。対して、こちらは大切な仲間が長年愛用した第二等級武装。

力比べで勝つのは火を見るより明らか。

斬撃の途中で相手の武器を持つ手に己の耳が挟まっていた――ような気がしたのは果たして気のせいだったのか――

そこから先はあまり意識できなかった。一瞬の油断が命取りだと身体全体が警告を発していたので――

力いっぱいに腕を振り抜いた。

そこから後は音が消えた。次に雨の音が戻る。その間には――今まで戦った敵たる少女の身体が地面に落ちる音、だったと思う。――確実にそうなのだが現実味が全くなかった。

敵意も殺意もお互いから消失し、戻ってきたものは襲撃者の痛みだけ。

空を見上げようとして顔に盛大に雨粒を受けてしまった。

（……勝った。……おそらく勝てたんだと思う）

ヨロヨロと震えつつ辺りを見回そうとしたが目蓋が開かない。

両手は随分と濡れている。それは雨水か、それとも相手の血か。

途中、地面に落ちている何かの塊にぶつかる。

魔法によって出来た瓦礫だと思うけれど、それらを足の感覚だけでどかしたり、避けられるか確認したりしながら壁を目指す。

（……耳を見つけなければ……。確か相手の手に……）

激しい攻防や魔法での破壊活動でそろそろ確認の為に人間（ヒューマン）や亜人（デミ・ヒューマン）達が来てしまう。

黙っていれば拘束されて尋問を受けるかもしれない。

そんな事を考えつつ、ひとまず視力の回復できそうな場所を探す。

それと先ほど投げ捨てた木刀も拾っておかなければならない。
（気配が消えましたが……、相手はどうなったのでしょうか）
見えない中での戦闘は相手の状況が全く把握できない。
気絶なのか、それとも――
どの道、見えない今は何を予測しても徒労だ。
（……物凄い手練でしたが……何者だったのでしょうか。あのような相手ともっと早く出会えていれば……）
余計な考えばかり浮かんで笑えて来た。
たった今まで殺し合いを行ってきたのに。

†

日が暮れるころ、辺りから騒々しい怒声が響き渡る。そして――少し離れた廃墟同然の教会の地下からは一人の神の叫び声がこだましたとかしないとか。
翌朝、天気が少し回復したものの雨はまだ小降りだった。
【ヘスティア・ファミリア】の本拠（ホーム）にて主神の世話をしていたユーカリンは酷く困惑していた。
夕方に突如として泣き喚いたかと思えば一層顔色を悪くして寝込む始末。
雨が長引いているし、薄着の神様なので風邪でもひいたのかなと心配になった。実際に熱は多少あった。
これが病気なのか、怒りによる発熱なのかは判断できなかったけれど。
「……な、なんでもないよ。……驚かせてすまないね」
弱々しく呟く少女神ヘスティアは側に控える新しい団員に苦笑を見せる。
何も知らない彼女に要らぬ心配をかけてはいけない、という気持ちが強く出た為だ。
他人を気遣う気持ちがあるからこそ自分は平静で居られる、ような気がしたが内心では怒りと悲しくがない交ぜとなり、今にも叫びだしそうな勢いを懸命に抑えている最中だった。
あの子が死んだ。今度は本当の意味で。

ヘスティアは契約を結んだ眷属の様子は手に取るように把握している。と、いっても行動パターンなどではない。
生きているのか、死んでいるのか、という大きな範囲だ。
後、頑張れば感情まで読み取れる。ただし、大雑把なものだが――
（いきなりだ。あの子は平穏な暮らしを手に入れた筈だ。……まさかヴァレン何某君が!?　でも、他には病気とか事故死とか……）
一体何事があって眷属の契約が切れたのか。
後で確認しなければならない。
神としての責務として。

#2―02　ヴァレン何某

普段は活気に満ちた通りの一角――この日は特に顕著に暗く沈んでいた。

大勢の通行人や住人たちが詰め掛けているわけではない。居るのはごく少数の顔なじみばかり――

それでもそれだけの少数でも――暗黒空間のごとき場を作り出すのに成功しているのは不可思議としかいいようがない。

現場は『豊穣の女主人』の裏手の空き地。

小雨が止まない悪天候にも関わらず、十数人ほどの地元人が立ち尽くしていた。

その中でもひときわ目立つのが偉丈夫のドワーフ『ミア・グランド』の存在感だろうか――巨漢ではある。

居合わせた者達の中で泣いているものはごく少数――

殆どが元は冒険者だったり裏家業出身の者達――他人の死に慣れ過ぎているほどの猛者達が揃っていた。

「たかがゴミ捨て一つ頼んだだけなのに……。どこをどうすればこんな惨状が出来上がるっていうんだい」

大きく残念な気持ちを吐露しつつ息をつくミア。それに答えられる者は居らず、けれども単なる独り言にしては大きな声だった。

†

現場は破壊の痕跡が今も残る廃墟寸前の有様。

倉庫は無事だが辺りの家屋は崩壊が激しい。

戦闘に巻き込まれては堪らない、と思った住人は耐えるか、早々に逃げ出す。

『迷宮都市オラリオ』は一見平和そうだが、派閥抗争や犯罪者が跋扈する意外と物騒な一面がある。――当然のように貧民街があったりする。

惨状を作り上げたのは鋭利な刀剣によるものではなく、鉄塊や無骨な武器でも使われたような――乱暴な得物による仕業としか言いよ

うがない様子だった。
「単なる賊ってわけではないみたいニャ。……ポーラを相手に随分と苦戦を強いられたって感じニャ」
亜人の猫（デミ・ヒューマンキャットピープル）『アーニャ・フローメル』は冷静に現場を観察し、一通り調査を終えた後で報告する。
普段は酒場で従業員として働いているが、今回はミアの命令でギルドの調査が入る前に現場検証を行（おこな）った。
それと――不都合な証拠隠滅も兼ねて。
「あの子はレベル0だったんじゃないのかい？」
「それが本当だったら【剣姫】が【片翼剣姫】になってないニャ」
その『二つ名』は正式なものではなく、暫定的――または限定的な呼称となっている。
当の本人（アイズ・ヴァレンシュタイン）は【片翼剣姫】という――本来ならば不名誉極まりない――『二つ名』を意外にも気に入っていたようだ。
【ランクアップ】前のレベル3冒険者を駆け出しが半殺しにする。
――普通に考えれば夢物語もいい所――
どういう方法を取れば可能となるのか――
ミアたち赤の他人には窺い知れない事だが。
「……で、頭は……見つからなかったのかい？」
流石に遺体まで隠蔽する事は出来ない。現場を保存する事は最低限度の規則に入っているし、ミア達もそれを遵守する気持ちがあった。その上で問題の『頭』とは言葉通りの意味だ。
「排水溝にでも落ちたのかも……。あちこち穴だらけだし……。先日の大雨で大量の水が流れ込んでいるところから……」
「……ああ、分かったよ。しかし、困ったね～。……本当に……」
頭が無くとも居なくなった従業員が誰かくらいはすぐに分かった。
幼い子供の体型で使いに出したのは一人だけだから。
背中の傷の具合からも当人で間違いない。
「これだけの惨状だから相手も手負いの筈……。母ちゃん、命令してくれれば下手人を探してくるニャ」
ただし、と付け加える。

大雨により匂いでの探索は絶望的だと告げる。
足跡は論外。
であればどう探すのか。
ミアの手には『証拠品』がある。だが――彼女は迷っていた。
単なる怨恨なのか、と。

†

沈黙が現場を支配した後、その後の調査や周辺への被害状況は専門機関に委ねる事にして、それぞれに黙祷を捧げさせた。
花など綺麗なものは凄惨な歴史を持つ迷宮都市には似合わない。
冒険者はいつ死ぬか分からない仕事だ。時にはギルドの抗争で殺し合いも起きる。
それが当たり前の大都市において一人の少女の死にどれだけの価値があるものか――
神が実在する世界において、その神自身の見解は実に淡白なものだ。
死んだら魂を天界に送り届けるだけ。
事務的な手続きを除けば下界の問題に彼らも深く干渉しないし、出来ない。
神自身が取り決めた規則（ルール）だから。
それから天候が回復したある日、未だに包帯が取れない【片翼剣姫】が一人で『豊穣の女主人』の裏手の空き地に訪れた。
団員の報告を聞いて行くかどうか迷ったけれど――それでも行くことを決めた。
この手で確実に葬ると誓った相手は自分以外の相手に敗れ去った。
「……君は……解放されたの？」
何の恩恵ももらえなかったごく普通の冒険者だった少女。
自分と同年代の女友達、だった子。
仲良く遊ぶよりも死闘の時間の方が長かったような気がするけれど――
それでも一時（いっとき）の好敵手になりえた存在だ。
（……教えた技はちゃんと使えた？　……ただで負けるような君じゃ

ないと思うけれど……）

単なる武器同士であればレベル2程度までは抵抗できる。しかし、魔法も扱う冒険者ともなれば話しが随分と変わってくる。

現場の破壊程度からも推察できる。

確実に敵は少女を強敵と認識した筈だ。たかが小さな女の子を仕留めるのに派手な攻撃を取るのは素人くらいだ。――だから敵はある程度戦える者に限られる。

（……だけど、もし君が『反転』する事態に陥っていれば……。その上で、この現状ならば……相手はレベル4くらい？　そんな敵と戦ってたの？）

もし仮に強盗の類で元レベル4の冒険者ともなればギルドが黙っているわけはないし、そこまでの手練であれば『豊穣の女主人』の従業員に手出しなどするものなのか、疑問に思う。

アイズでもミアにケンカを売る度胸は無い。それほどの傑物だ。

仲間の『ベート・ローガ』も――

団長の『フィン・ディムナ』は性格的にも無理だ。というか賊に相応しくない。

いくらベートでも私怨での戦いは取らない。

性格は荒くれ者だが弱い者を率先して狙ったりはしない。相手がモンスターなら話しは変わるか、と少しだけ残念に思う。だが、それでも蹴りを主体にするベートは犯人足り得ない。

少なくとも彼を犯人に仮定すると死体は綺麗に残らない、と推測する。

色々と予想してみてもまともな答えは出て来ない。というか仲間以外の仮想敵が浮かばなかったのは気に病む事態だ。――後で他の団員達も夢想してみた。

軽く溜息をついた後、かつて存在した好敵手に哀悼の意を表す。

†

静かな時が流れ、一時荒れた神『ヘスティア』も体力回復に努め始めていた。側に居る新しい団員『ユーカリン・ナナツタエ』の献身的な介護――のようなものを受けたお陰と言える。けれども気持ちの

整理はすぐにはつかない。
彼女（ユーカリン）には詳細は未だに言えていないが、かつて居た大切な団員との契約が途絶した事は多いに混乱を生じさせた。
初めて出来た眷属でもあるのだから当たり前だ、と声無き絶叫を上げる神ヘスティア。
そのせいもあってか、ここ数日の彼女の顔つきは険悪であった。
ユーカリンは食欲不振による苛立ちではないかと思っている。
茶髪碧眼の少女は甲斐甲斐しく神（ヘスティア）の艶やかな黒髪を整え、形の良いツインテールを作り上げる。
「そういえば、ナナツタエ君はダンジョンに潜っているのかい？　このところ聞きそびれていたけれど……」
「神様が心配で三日に一度というペースです。日々の食事代しか稼げてません」
苦笑しつつ報告する。
そこに嘘は無く、見た目の怪しさからついつい勘ぐってしまうのだがユーカリンは前の団員並みに素直で良い子のようだ、とヘスティアは感じた。
生まれた環境の違いで見た目の印象は随分と違うものだと感心する。
それ以前に彼女のような怪しい暗殺者っぽい冒険者を普通に出迎える冒険者ギルドも結構すごいのでは、と。
効率の良いモンスターの殺し方講座とか普通にしてそうで怖い。
（冒険者ギルドのアドバイザーも充分物騒じゃないか。よくよく考えたら凄い世界だよ、地上というのは……）
退屈を持て余す天界とはえらい違いだ、と嘆息するヘスティア。
安心したら嘔吐感に襲われた。
ここ数日、精神的に疲弊していたこともあり、胃液が逆流しやすくなっていた。
ユーカリンが素早くお腹に優しい飲み物と食べ物を用意する。実に手馴れた動きで感心する。それと気遣いが今はとてもありがたかった。

――そうでなければ今頃部屋中悪臭まみれだ。
掃除が好きなのか、隙あらば部屋を片付けている。
（……そういえば折角来てくれたのにボクはこの子の事をちゃんと見てなかったな）
ヘスティアの【ファミリア】に入団する奴は物好きくらいだ、と揶揄されていた日々が思い出される。
失敬な、ボクだって魅力くらいあるぞ、と喚き散らしたい気持ちでいっぱいだった。だが、現実は残酷だ。
何故か今まで団員になろうという殊勝な子が全然現れてくれず、殆どが【ロキ・ファミリア】などの大手に取られてしまった。
零細友達の【ミアハ・ファミリア】は事情がまた違うようだが――

†

天候不順と様々な不幸な要因で本拠（ホーム）に引きこもっていたヘスティアはアルバイトに専念しようと決意する。
団員が一人だけだし。また、何のスキルも発現していない普通の冒険者――見た目は除く。
戦闘経験が少ないので【ステイタス】の伸びは悪いけれど、前の眷属（ポラン）より振り幅が大きいのが良い事かな、と。
ユーカリンは『器用』と『敏捷』が伸び易い。それ以外は微増――
（……問題はナナツタエ君が真っ当な冒険者でいてくれるところかな）
裏家業出身者は子供も同じ道を辿るもの。けれども彼女に悪の道に進んでほしくないと個人的には願っている。
どんな子にも道を選ぶ権利があり、神にも善悪が存在する。
天界を荒らし回ったロキがいい例だ。
（苦情を受けるような仕事にだけは手を出さないでおくれよ）
怒られるのは主神たるヘスティアなので。最悪、退屈な天界に強制送還されてしまう。
のんびりと地上を満喫したいので荒事は勘弁してほしいところだ。
色々と考えていたら眠くなってきた。
このところ体力が無くて浅い睡眠を繰り返していた。それも少し

ずつは改善しているけれど、まだ本調子とは言えない。
神とて病気を患う。何故かは不明。
酒を飲みすぎれば二日酔いになる。
（ナナツタエ君の用意してくれるお粥とかのお陰で改善に向かっているとはいえ……、実に情けない）
唸りつつも眠気に身を任せる。
折角整えてもらった髪形もすぐに台無しになるが、すでに寝息を立て始めるヘスティアだった。
神が眠ったところで身支度を整えていたユーカリンが甲斐甲斐しく眠る神の身体に毛布を乗せる。
「……雨が長引いたせいかな。私も少し風邪気味のような……」
身体が資本の冒険者家業なので無理をしない事にした。
一日いっぱいを掃除に費やしても良かったけれど、折角晴れたので街の様子を頭に入れる事にする。
オラリオに来てまだまだ知らない地域が残っていたから。

†

ヘスティアの様子を気遣いつつ身の回りの世話に重きを置いていたユーカリンも疲労には勝てず、道端で嘔吐する事態に陥った。
稼ぎも少なく、毎日同じものばかり食べてきた為、栄養が偏ってしまったらしい。
装備類はギルドから借りられるとしても現状を打破しなければ長期戦闘には耐えられそうにない。
そんな中、いつものように定期的に浅い眠りについているヘスティアの様子をうかがいつつ、今日の献立を考えている時、珍しく魘（うな）される神に気付いた。
熱は無いが定期的に悶えるので、相当過去に辛いことでもあったのだな、と思い乱れる毛布を直しつつ噴き出た汗を拭う。
「……ぐうぅ……、ヴァレン何某（なにがし）め……」
憎き仇敵としてよく出る名前だ。他には誰か居るのかと思いつつ待っていても出て来ない。
現状では一人だけ。

寝言で他人の名前が出るのはよっぽどの事が無い限り――

そうは思っても恨み言はいつまでも溜め込むものではない。ユーカリンとしてはそう思っていた。

拘りは戦闘スタイルだけで標的に対する憎しみなどは視野狭窄に陥ると先輩冒険者から教わった。――その次の日にギルドが壊滅したわけだが――

裏家業は意外と淡白で、私怨で働くものは少ない。

(折角改宗(コンバージョン)したのにギルドから狙われては私だって困る。……でも優しい神様で良かった)

病弱だけど――

貧乏だけど性格は明るいと教わった。それなのに寝込む日が多くて驚いた。

それぞれ【ファミリア】には『顔』と呼べる特色がある。

ダンジョン攻略の探索系。

アイテム販売の商業系。

武具製作の鍛冶系。

作物育成の農業系――などなど多岐に渡る。その中でも犯罪に手を染める犯罪系も含まれるが――

【ヘスティア・ファミリア】は探索系に属するらしい。

活動期間が短くて系統が定まっていないようだが、運営方針としてはダンジョン攻略に重きをおいている。

それに対してユーカリンは文句は無かった。

他の冒険者の事は知らないけれど、私怨による目的は無く、一日を楽しく過ごせたら満足する。

目下の楽しみは神様の世話だ。

親を早くに亡くしたせいもあり、ヘスティアを親代わりとしてもいいかな、と。

今後の活動内容が物騒にならない事を祈りつつ、廃墟の建て直しを計画する。

天候次第で本拠(ホーム)が異状に過ごし難くなるので。健康面からも改善は必須だと思った。

†

神様が行動不能に陥っている間、短期間だけダンジョンに潜るもヘスティアのことばかり考えてしまい戦闘に集中できない。

そんな中、二階層目で『魔石』を回収していると灰色のボサボサ髪の狼人（ウェアウルフ）の冒険者にぶつかった。

ぶつけられた、というよりは軽い貧血でよろめいた拍子の事故だ。

「……ちっ」

不機嫌な顔で舌打ちする狼人（ウェアウルフ）の男性。

すぐさま飛び退るも視界が急にグルグルと回りだして体勢が安定しない。

思いのほか、モンスター討伐に手間取って体力を失ったか、と。

「……そんなんでモンスターと戦ってたのか……。このところ貧弱な奴等ばかり潜ってねぇか？」

独り言を割りと大きな声で呟く狼人（ウェアウルフ）。元々の声量が大きいからだと思われる。

その後、ぶちぶち文句を言いつつ何所かに去って行った。

――弱い者イジメに遭わなくて良かったとユーカリンは安堵する。

冒険者の中には駆け出しをいびる輩（やから）が多分に存在する。元居た【ファミリア】もその傾向にあり、だからこそ攻め滅ぼされたのでは、と。

遅かれ早か犯罪系【ファミリア】は他の【ファミリア】との抗争は避けられないし、討伐対象にされてもおかしくない。

それでも何かしらの信念を持って行動していた筈だ。そして、そんな【ファミリア】を造った主神はクズの見本のような神様だった。

（といっても会ったのは三回ほどですけど）

眷属になる儀式の時と【ステイタス】更新の時――それと【ファミリア】を退団する時だ。

基本的に一度眷族となる契約を交わすと自分で契約を解く事が出来ない。必ず契約した神自身の手によって退団の儀式を受けて成功を修めなければならない。

自分は運が良かったのか、まだ年若い子供だったからなのかは分か

らないが、あっさりと退団できた。
（退団できないと改宗（コンバージョン）は出来ませんからね）
【ファミリア】を潰されても【ステイタス】が自動的に消滅するわけではない。
しかし、とユーカリンは疑問に思う。
前の【ファミリア】は結局のところどんなところで、誰に滅ぼされたのか、と。

†

定期的に【ステイタス】の更新を行（おこな）っていたところ、一日四百ヴァリスの稼ぎになり、体調も順調に良くなった、ような気がした。
『力』の伸びは今ひとつだが『耐久』が急に増え、それ以外は――『魔力』を除けば――順調と言える。
他は目ぼしい報告も無く――
それとヘスティアの体調も幾分か良くなってきて、一週間に一度のペースでアルバイトを始める事に決めたらしい。――決めただけでまだ外に出ていない。
――本来、神は本拠（ホーム）にいつまでも引きこもっている、ような存在で、眷属たちの活躍を心待ちにするのが一般的だ。だから、神自ら稼ぎに出る事は稀（まれ）だと言われている。――と言ってもその前提は決定事項ではなく、実際はどの神も何らかの仕事に従事しているものだとヘスティアは言った。
知り合いの殆どは働いているので。
「……そういえばナナツタエ君のような若い冒険者って珍しいんだよね。大抵は十代後半から……。ギルドに大人たちがたくさん居ただろう？」
「はい」
「一般的な冒険者は何年も仕事に従事するものだから……。若ければいいってものでもない。ロキんとこに居る団長達は古株だし、他も大体はいい歳だよ。それゆえに人生経験によって長生きし易い。反面、想定外の事に対処しにくいところがあるんだ」
眷属なって今まで出来なかった冒険者としての心構えや対話を試

みた。
ずっと介護生活が続いたせいで、申し訳ないと思っていた。
格好を除けばユーカリンはとても良い子。
知り合いの神からの噂話にも悪いものは聞かれない。仮にあれば何らかの苦情がギルドから来る筈だ。――来ても困るけれど。
「ボクは眷属を束縛する気は無い。……本当はいやだけど、退団する時は言ってくれ。何か課題を出したりするような事はしないと約束する」
「ありがとうございます」
「……束縛しないからって何してもいいって意味じゃないよ。ボクの【ファミリア】は健全をもっとうとしているからね。……団員が一人だけだから大きな声で言うのは恥ずかしいけれど……」
それでも自分の【ファミリア】を選んでくれた事には深く感謝している。それとお世話を今まで続けてくれてありがとう、と。

†

その夜、仲良く就寝しているとヘスティアが例によって魘され、何者かに対する恨み節を披露する。これは朝になると綺麗さっぱりに忘れるらしい。しかし、聞かされるユーカリンはその時だけは目が冴えて寝不足に陥る。
裏家業は就寝時が一番狙われやすい、という教訓が身体に染み付いているせいだ。
それもこれも生まれ育った環境が悪い。
ある日の事、思い切って度々言及される『ヴァレン何某』とは何なのか尋ねてみた。このままではまた体調不良に陥ってしまうので。それと正体についてはすでに調査済みだったけれど、あえて質問してみた。話題づくりの一環として。
「……まだボク、そんな寝言を言っていたのかい？　……ごめんよ」
「蟠（わだかま）りは早いうちに解消すべき、と前の神様が言っておられました」
又聞きですけど、と。
十二歳の子供なのに難しい言葉を良く知っているな、とヘスティアは感心する。

そういえばユーカリンは幼いながら色々と気がつくし、疑問点を指摘してくる事が殆ど無い。――せいぜい冒険者の仕事くらいではないかと。

生活において一人暮らしが出来るほどの技術を既に持ち合わせている。それは彼女の手料理からも想像が付く。

元々土台が出来ている子なんだな、と少し羨ましそうな目で見つめた。

コホンと呼吸を整え、ボロいソファの上でヘスティアは姿勢を正す。

「あんまり人様の悪口を言うのは良くないけれど……。件（くだん）の『ヴァレン何某』とは君も冒険者なら名前くらいは聞いた事は無いかい？【ロキ・ファミリア】に所属している【剣姫】のことさ」

今は【片翼剣姫】と呼ばれている期待の第二級冒険者。

このところ活動を控えていて冒険者ギルドでもあまり噂話は聞いていない。

ユーカリンもギルドの中で噂話として名前は聞いていた、と言ってこっそり相槌を打っておく。へー、その人がヴァレンなんとかさんだったんですね、と。

ヘスティアに気持ちよく喋ってもらう為に――色々と――決して否定の言葉は――知ってましたよ、とか――言わない。

ユーカリンはヘスティアの話しに『知りませんでした』と言っていないので嘘をついている、と見透かされる事が無かった。それゆえに感心する彼女につい口が滑る。

「……その『アイズ・ヴァレンシュタイン』とうちの元団員が何か因縁があると？」

一気に話しを進めたユーカリンに対してヘスティアは目を見張って驚いた。

色々と聞かなければならない質問を通り過ぎなかったかい、と。

例えば最初は正式な名前から、とか。次に所属の【ファミリア】の詳細とか。

逆に唖然としてしまった。

寝言で他にも喋っていたようだと反省しなければならない。

「ま、まあそうなんだよ。……元団員……ね。君の前に一人居たんだけど……。訳あって退団する事になったんだ。その原因を作ったのがヴァレン何某さ」

原因というか、本当ならば礼を言わなければならないのだが、どうにも恨み言しか出て来ない。

あんな良い子をこてんぱんにしたんだから、と。――もちろん、やられっ放しにはならず、かの【剣姫】を半死半生まで追い詰めたのだから大したものだ、と思ったところで表情が綻んだ。

けれども、そんな心境を新しく入ってくれたユーカリンに言うのはさすがに抵抗があった。

†

どちらが悪いかと言えば大部分で自分達側だ。それは認めなければならない。けれども、ヘスティアは素直に悔しかった。

零細貧乏【ファミリア】としてバカにされてきた今までの鬱憤が一気に晴れた――のは紛れも無い事実――と、同時に戦いを了承してくれた【ロキ・ファミリア】にも借りが出来てしまった。

「ボクとしてはいつまでも恨みがましく言うつもりは無かったんだけどね。……夢でまだ文句を言っているのは申し訳ないな」

「……神様が命じてくれれば……、アイズ・ヴァレンシュタインを始末してきますよ」

と、あっさりと言ったユーカリン。

それに対してヘスティアは『へっ？』と、気の抜けた顔で言った。

この子は今何と言った、と。

「いやいやいや。物騒な事は無しだよ、ナナツタエ君。復讐とか暗殺とかやっちゃ駄目だから。あとうちの【ファミリア】としても不味いし」

下界に降りた神として日が浅く、早々に退屈な天界に送還されたくない。

貧乏ながらも下界の暮らしはそれなりに有意義だと思っているので。

「もちろん今の自分に第二級冒険者は屠れません。けれども、恨みだろうと何かを目標にする事は正しいと思います」
「……正しさが危ない方向だよ。それだといずれ【ファミリア】同士の抗争に発展しちゃうじゃないか」
と言っても【ヘスティア・ファミリア】の団員は現在一名。これで抗争を起こすのはきっとバカだ。ヘスティアですらそう思うほどに。
【フレイヤ・ファミリア】じゃないぞ、うちは、と叫びたい気持ちになった。
「原因を取り除かないといつまでも恨み言は続きますよ、神様」
それはそれで困るけれど、物騒な思想も困る。
正直に言えば私怨は嫌いな方だ。
だが、寝言で愚痴を言って迷惑をかけているからこんな話しになってしまっている。
「……仮に原因を取り除くとして、寝言は止まるものかい？　余計に厄介ごとが増えると思うんだけど……」
恨み言を肯定するとして、原因を解決しても元団員の『あの子』は帰ってこない。もう二度と――
少なくとも寝言の根本原因であるアイズ・ヴァレンシュタインは良くも悪くも『あの子』の剣の師匠でもある。よその【ファミリア】の団員だからといって仲良くする事を止める権利は自分（ヘスティア）には無かった。いや、してはいけないと思った。

†

ユーカリンに正しさを説いたとしても根本原因が解消されたわけではない。――というより自分が原因だ。
今のままではいつまでも夜中に煩い寝言で彼女を寝不足にさせてしまう。
そうなれば暗い感情がどんどん渦巻くに違いない。まさに先日までの自分のように。――今でもまだ本調子とは言えないけれど。
「……命じるといっても駆け出しの君に倒せるような相手じゃないと思うんだけど……」
「倒すべき敵を目標として頑張ればもっと強くなれるのでは？　むし

ろ戦いを挑んだほうが【ステイタス】の伸びが良くなると思いますが……」

「なら素直にヴァレン何某に挑戦したい、でいいじゃないか。びっくりしたよ」

どういう教育を受けて育ったのか、聞くのが怖くなってきた。

少なくとも自分の【ファミリア】から要注意人物一覧（ブラックリスト）に載る様な眷族を出したくない。

「挑戦するのは良いのですか？」

「【ファミリア】の抗争に発展しない範囲では……。まあ……、いいんじゃないかな。軽く揉まれる程度なら……」

どのような方法でならば相手をしてくれるのか、ヘスティアには分からない。

こちら側がのこのこ行っても大手は大抵相手にしないものだ。

元団員はその点では偶然の出会いがあったからこそ親しくする事が出来た。そうでなければ普通に敵だ。――たぶん。いや、商売敵かな、と。色々と表現を模索する。

「君の場合は命じたら殺してきそうで怖いよ。そういう物騒な案件は無しで頼むよ」

試しに命じて暗殺でもしようものなら別の意味で魘される。

性格は真面目で明るいと思っていたのに――

意外な欠点を見つけてとても残念だと思った。

「とにかくだ。純粋に強くなる為の戦いであるならばボクは無理に止めたりはしない。命のやりとりはまた別問題だ。いいね？」

「はい」

返事は素直なのに――

ユーカリンの本質は神でもよく理解出来なかった。

嘘はついていないし、これはどういうことかな、と疑問ばかり浮かぶ。

正直な暗殺者ということか、と。

「……でも、敵討ちとまでは言わないけれど……。ヴァレン何某を倒せるくらい強くなってみなよ。あと、いきなり暗殺とかは無しだよ」

「はい。頑張って強くなります」
「それから、ダンジョン攻略も頑張るように。ボクも団員を増やすために頑張るからさ。一人で無理はしないこと。危なくなったら逃げてもいいんだから」
本来はダンジョン攻略の為の言葉なのだが、どうにも対人戦も含まれているような気がしてならない。
冒険者はよその【ファミリア】を潰すのが目的ではない。それはまた別の話しだ。
次の日、早速喧嘩を売りに行くのでは、と気になって眠れなくなったヘスティアと寝言が無くなった事で久方ぶりに安心して熟睡する事が出来たユーカリン。

†

安眠の為にヴァレン何某との決着方法を考えつつ大事な眷族の為に奮闘する事を新たに決意する。
さしあたってアルバイトだが、健康面も気にしなければならない。出来るだけユーカリンにはダンジョン攻略に集中してほしかった。曇り空の外の世界に出たヘスティアは大きく深呼吸する。いつまでも薄暗い地下生活は身体に悪い。
（飲食店か露天商か……。それより本拠（ホーム）を留守にするのは不味いかな？）
元団員が残した資金が隠されているので。
装備品はどうでもいい。市販品だから。
大手【ファミリア】のように留守番が居ると助かるが――
出掛けるより前に資金の管理をギルドに相談する方が先だ。貸金庫とか。
大金を持ち歩くのに慣れていないヘスティアにとって賊などに狙われるとあっさり奪われてしまうおそれがある。
そんな事を考えていると見覚えのある灰色のボサボサ髪をした狼人（ウェアウルフ）の少年を見つけた。
この際、助っ人は多いに越した事はない、という気持ちで声をかける。すると相手側は突然の事に驚いたようだ。

「【ヘスティア・ファミリア】の神様じゃねぇか」
「やあやあ、狼人君（ウェアウルフ）。今、暇かい？」
見た目は凶暴でも冒険者の殆どは神に手を出さない。または危害を加えない。そして、その逆に冒険者が恐れおののく対象も神は――割り合い――平然と接してくる。
貧相でも天界から降りてきた超越存在（デウスデア）だ。一般的には敬っている。――扱いについてはそれぞれ【ファミリア】によって違うけれど。
ヘスティアが声をかけた相手は【ロキ・ファミリア】の団員『ベート・ローガ』で、現在色々と情報収集の為に辺りを散策していた。
「それなりに忙しいんだけど……」
気安く話しかけてきたヘスティアを煩わしそうに一瞥しつつ一応の挨拶をする。
これが自分のところの主神でも態度に大差は無い。
「１０ヴァリスあげるから護衛を頼まれてくれないかな？」
ニコニコと――それでも目に隈が残っていたり、顔色が多少悪い状態だったが――微笑みかけつつ頼みごとを試みた。
護衛に１０ヴァリスは少なすぎる、とはさすがに言わないが内容にベートは驚いた。
いきなり捕まえておいて護衛とは何だ、と。
（おいおい……。神様ってのはどいつもこいつも理解できねぇ）
ベートの目的は半分ヘスティアに関するものだったので断る選択も出来たが、後悔しそうな気持ちもまたあったので、口元を歪めつつ呆れて、困惑する。
先日の殺しの件で護衛が必要な案件が増え、判断が鈍ってしまった。
「そんなはした金なら要らねぇよ」
「そうかい？　お金は大事だよ。ギルドまで片道でいいんだけどさ。物取りに襲われると困るから、ちょっとの距離の護衛だけど頼まれてくれないかな。帰りは自分の足で戻るから」
「団員は……居ないのか？」
と、言った後で、しまった、と顔をしかめるベート。

この話題はヘスティアにとっては繊細な問題だったのでは、と思うも当の神は特に変化を示さなかった。――最悪、突然泣き出すかもと危惧した。

「早朝からダンジョンに行っててね。かといってあの子に頼むのも申し訳なくってさ。ほら、駆け出しだから狙われる原因は少ない方がいいだろう？」

平然とした態度と団員が今も居る事に驚いた。つまりもう既に新しい団員を迎え入れた、ということなのかと思い呻く狼人（ウェアウルフ）。

次に出た言葉にも今日一番聞きたくない不穏な言葉が混じっていた。

先日までの事柄が無ければ断る確率が高かったのに、と残念な気持ちに捉われる。

†

不請不請（ふしょうぶしょう）、溜息もつきつつ神ヘスティアの頼みを聞く事にした。面倒ごとはさっさと終わらせるに限る。それと少しでも恩を売っておけば後々面倒ごとを回避する理由作りも出来ると思って。

――さすがに大金をふんだくれるような相手ではないので無料奉仕だ。

（貧乏【ファミリア】といつも聞かされているしな。……だからヴァリスなんだろうけれど……）

子供のお使い並みに酷い報酬ではあったが、神ヘスティアの場合は本気なんだろうと――

ジャガ丸くんだった場合はアイズなら即効で受ける絵が浮かんだ。それも、手負いの今でも断りはしない自信がある。

「片道でいいんだな？」

「引き受けてくれるのかい？　ありがとう」

笑顔で喜ぶヘスティア。しかし、ベートにはそれがとても痛々しく見えた。

どう見ても無理をしているようにしか見えない。誰が見ても同じ感想に行き着く。

猛烈な罪悪感が襲ってきたが懸命に受け流した。

「前の子の蓄えを預けようと思ってね。しかも我が【ファミリア】にとっては大金だ。ボクは物取りに対して無力だから」

（俺がその物取りっていう考えは無いのか？　信頼されているのは悪い気がしねぇけど……）

神の笑顔は不思議な力がある。

能力を封じられているとはいえ神はやはり下界の者達にとって畏怖すべき対象――

いつもふざけた調子のロキ相手でさえ自分は力でねじ伏せるような事はしなかった――いや、出来なかった。

暴力が通用しないわけではない。

つかみどころがない。

それゆえか、相手にするのが面倒だと思わせるし、調子が狂ってしまう。

何故かは分からない。神の力（アルカナム）とやらかもしれない。

そんな事をふと考えていると重そうに運んできた皮袋を一つずつベートの足元に置いて行く。

非力なヘスティアは一度に一袋が限界だった。――それを合計で三つほど。

「貨幣も随分と重いもんだね。君らは普段、どういう支払いをしているのか疑問だよ」

大手【ファミリア】ともなれば買い物に使われる金額は膨大だ。数百万から数千万ヴァリスは当たり前。――しかし、それをどうやって支払うのか。

皮袋であれば相当な重量になる。

実際、十万ヴァリス分の貨幣を詰め込んだ皮袋は本拠（ホーム）にあるボロい机を簡単に壊すほど。

床が抜けるのでは、と本気で心配した。

――そんな袋をベートは片手で平然と持ち上げる。手の感触で一つ十五万ヴァリスは入っていると予想する。合計――多く見積もっても――五十万ヴァリス。

†

無駄に問いかけるのも野暮だと判断したベートは三つの皮袋を背負おうとした。だが、ヘスティアが丁寧に扱ってほしそうな顔で見つめてきたので抱える事に変更する。

よその団員だからか、信用度が低いのは仕方が無いとしても今にも泣きそうな顔で見つめられるのは苛々する。

ちゃんと運びます、と言うのも気恥ずかしいので無言を貫く。

抱え終わると安心したのか、太陽が照ったような明るい笑顔を向けてきた。思わずまぶしさで顔を逸らしたほどだ。

（……この神様の神の力（アルカナム）か？）

自分達の主神（ロキ）が同じ事をしたら実に胡散臭そうな顔に見える自信がある。

同じ神なのにえらい違いだ、と。

「受付までお願いするよ。後は向こうの職員に助けてもらうからさ」

「……おう」

仲間だったら『けっ』か『ふん』という返事になる。

神相手だといつもの調子が出ない。それがいい事なのかは分からないけれど。

世間話しをする気が無かったので道中はヘスティアの鼻歌を聞いているだけで済んだ。

自分の事や【ファミリア】のことを質問してくることもなく。

前方を意気揚々と歩くヘスティアの身の安全だけは気にしておいた。――そうして何事も無くあっさりと現場に到着する。

ヘスティアは勝手知ったる風のまま受付まで行ったので、実質ベートの仕事は終わったも同然。ただ、ヘスティアが帰る時も気にした方がいいのか迷った。護衛は行きだけで帰りは想定していなかったので。

それとベートには本来与えられた仕事が別にある。そちらも疎かにはできない。

「そうそう、お礼の１０ヴァリスだよ。それと帰りはこっちでなんとかするからもう戻って良いよ」

普通に皮袋から本当に１０ヴァリス分の金貨を出してベートに差

し出してきた。
満面の笑みと共に。本心からお礼だよ、と言っているようにしか聞こえなかった。
その無垢なる笑顔にベートは改めて怯む。
「金は要らねぇって言っただろう。それじゃあ……まあ……その、失礼するぜ」
「狼人君（ウェアウルフ）、ここまで案内してくれてありがとう」
つい、神への言葉に『ふん』と鼻を鳴らしてしまった。すぐに気付くも相手はギルド職員と話し込み始めたので訂正する暇が無かった。
小さな失態だが、次で挽回すればいいと判断し、待合室のソファに座り込む。
ベートとしてはすぐにギルド本部から出ても良かったのだが、一度請けた仕事は最後まで責任を持ちたかった。それと与えられた仕事はベート一人だけのものではない。
下級冒険者（レベル2以下）数人と手分けして行（おこな）っていた。
（本当に金を受け取っていたら守銭奴みてぇじゃねぇか。……そうじゃねぇな。10ヴァリスを受け取る事が恥ずかしいのか？）
小さな子供の小遣いみてぇ、と。
確かに傍目には恥ずかしい絵面には違いない。仲間に見られたらいい笑いものだ。――確実に自分は笑いものにしそうだ。だから余計に恥ずかしく感じてしまう。

†

迷宮都市オラリオは平和な大都市ではない。
天界から降りてきた神の中にはヘスティアのような害のなさそうな者から悪に特化した者まで多岐に渡る。
それぞれの性格を反映した【ファミリア】は都市全体に混乱を引き起こしていた。
表向きには平和そうなオラリオはそこかしこで凄惨な殺し合いが行（おこな）われている。
自分達の【ファミリア】の力を誇示したり大きくしたりする為に。
我欲に忠実であれ。

闘争を好む神であれば尚更だ。
逆に都市の平和を守る【ファミリア】も存在する。
基本的に面白おかしく過ごせればなんであり――それが神の本質。
その中には様々な解釈が含まれてしまう。
中には自分の趣味に没頭して他人との接点を断つ神も――
「……狼人（ウェアウルフ）君はまだ残っているのかい？」
「うぁ!?」
物思いに耽っていたので気配を読み損ねたようだ。
首を傾げるヘスティアの顔が凄く近い位置にあった。
資金の預け入れの手続きに時間がかかる、とのことでひとまず待合室のソファに座って待つ事にした。――丁度、ベートが腕を組んで瞑想しているようだったので、隣りに座らせてもらった。――護衛の意味で。
「……言い忘れていたんだけど……。これはとても言い難い事なんだけれど……」
と、天井を見上げながらヘスティアは言った。
疑問を感じたがベートはなんとはなしに黙っていた。
相手が勝手に喋ることを無理に遮る理由が今は無かったので。
「新しい団員の子が君んとこに居るヴァレン何某君と戦うかもしれない。物騒な事は無しだよ、と念は押しておいたけれど……。君達の【ファミリア】に迷惑がかかるかもしれないから、先に謝っておくよ」
「……なに？」
迷惑、という部分がベートにとって不穏に聞こえた。
それと新しい団員という言葉――
「アイズのことを言っているのか？」
「そうだよ。あの子はまだ……万全じゃないんだろう？　それはそれで構わないんだけど、駆け出しの冒険者だから大事は無いと思うけれど……。なんなら狼人（ウェアウルフ）君でもいいや。軽い手合わせでもしてくれるとありがたい」
よその【ファミリア】の団員の面倒まで見る気は無い。しかし、襲ってくる敵とは戦う。

それらを考慮すれば適当にあしらう程度には相手をしても構わないし、力の差を見せ付けて二度と立ち向かってこないようにする事も出来る。

神の手前で申し訳ないが、殺さない限りにおいて手加減や手心を与える気は無い、とはっきり伝えた。

それに対してヘスティアは困惑しつつもそれはそれで構わない、と苦笑を浮かべながら言った。

†

おかしな事態を押し付けられた気分になったベートはギルド本部から早々に立ち去る事にした。

しかし、気になる発言が頭にこびりつく。

（また厄介な事態にならなきゃいいけどな）

さすがに同じ事件は起きないと思うが、と。

神ヘスティアには申し訳ないと思いつつも現場に居合わせた経験を持つベートを持ってしても安心はできない、と言わしめる――。

かといって問題の団員の詳細を教えろ、とヘスティアに尋ねるのは冒険者の規則に抵触する気がする。

基本的によその【ファミリア】の【ステイタス】は秘匿事項だ。よほどの案件でもない限り暴いてはいけないし、大抵は神による『錠（ロック）』が施されている。――その錠（ロック）を解除する方法は無くはない。

基本情報は【神聖文字（ヒエログリフ）】で書かれているので例え【ステイタス】を見る機会があったとしてもベートには解読できない。

（敵討ち？　そっちであれば楽か……）

アイズを標的にしているところから【ファミリア】全体を敵視しているわけではないと分かる。それに――神ヘスティアが謝罪してきたのだから怒りをぶつける相手は別に居る。

神に迷惑をかける団員――まるで自分の事のようで腹立たしい。

多少の自覚はベートにもある――

何にせよ、生きの良い挑戦者だと思えば迎え撃ってやらなければ――

―

ただ、駆け出しなら自分の出番はあまり無さそうだ。弱い者だと分

かっている相手を率先して狙っても面白くない。
その後、襲撃者とヘスティアの団員の姿は確認できず、仲間と合流し本拠（ホーム）『黄昏の館』に戻る。
一日の調査で判明する事は少ないが平穏無事でいる事もまた大事な事だった。
外出を控えていた【片翼剣姫】にヘスティアの事を話そうかと思いつつも言い出しにくい。それは単にベートが話すのが下手だから仕方が無い。かといって仲間は詳細を知らない。
（余計なお世話だろうし、相手が勝手に来るなら嫌でも分かんだろ。……うっかり殺す事はないと思うが……）
現われた時に考える事にして自室に戻る事にした。
今日の内に襲撃に来たら大したものだと思いつつ。

†

ベートが戻ってすぐ【ロキ・ファミリア】が誇る人海戦術の結果、目的の頭部が――多少腐りかけていたが――無事に見つかり、それはすぐに神ヘスティアと『豊穣の女主人』の元に報告が齎された。その後は厳かに茶毘に付させる事が出来た。
その後、血気盛んな【ファミリア】であれば冒険者ギルドにて犯人の捜索、または討伐の冒険者依頼（クエスト）を発注するのが自然な流れだ。だが、ヘスティアは血生臭い事を嫌った。
それを揶揄するのは従業員仲間の猫人（キャットピープル）達だ。
だが、復讐したところで気が晴れるわけでも眷族が復活するわけでもない。かといって泣き寝入りする気も無い。
「……少なくともケンカを売られたからには最低限捕まえさせてもらうよ」
偉丈夫の女主人『ミア・グランド』の言葉にヘスティアは黙って頷いた。
時と場合によれば冒険者の誰もが加害者になり、被害者になりえる世界だ。
死者への祈りが終わった後、目下の気がかりは新しく入った団員の動向だった。今は大人しくしているけれど、あの子もまた危険な気配

を漂わせている一人である。
それぞれが解散した後、曇天が辺りを暗くする。
誰も居なくなった後、とある冒険者が墓標に花を沿え、すぐに立ち去って行った。

＃2―03　地に堕ちる剣姫

前代未聞の珍事は秘密裏に調査が始められ、時と共に話題になるのは【片翼剣姫】の動向だった。

相変わらず半死半生のような痛々しい姿は変わらないが、それでも熱心にダンジョンに潜り続けている。

諦めない姿勢が駆け出しに夢を与える。それが『二つ名』を持つ冒険者の定め。

当の本人は世間の噂など気にせず、いつも通りの感覚で十二階層にて他の仲間との連携を模索していた。

【剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』は不自由な身を不幸とは思わず、これも一つの鍛錬だと自分に言い聞かせていた。

（指にかかる力がバラバラ……。これはそろそろ治した方がいいよね。再戦の約束は反故になっちゃったし……）

いつまでも重傷者でいる必要性はない。けれども、折角の機会なのでギリギリまで今の自分のまま戦い続けてみる事に決めた。

【ステイタス】も極端な乱高下は起きていないし、と。

（……常に万全とはいかないよね）

回復アイテムを使わず、どこまで戦闘が続けられるかも分かるので、色々と便利だと前向きな発想が出来る自分に驚いたものだ。

そんなアイズを離れた位置から見守っているのは副団長『リヴェリア・リヨス・アールヴ』で、今は黙って彼女の動きを観察していた。

高貴なエルフの女性であるリヴェリアは件（くだん）の女友達の消失に少なからず、心を痛めていた。

アイズにとっては珍しいくらい長期間のダンジョン断ちは結果的にどうなったのか、分からず仕舞いだった。

見た目には全く変化らしいものが見えないので。

精神的に成長したな、とか言いたかったが、いざダンジョンに潜らせてみると大して変わっていない戦闘スタイルにがっかりした。

（……普段通りである事が成長なのか？　ロキの話しとは随分と違う

ような……）

お調子者の主神の言葉を真に受ける自分もどうかしていると思わないでもない。

軽い頭痛を覚えつつ、次の階層に移行しようか思案する。

現行のアイズであれば十七階層までは問題は無いように見えた。

もちろん、仲間との連携は必要だが、と。

†

戦闘は続けているが【ステイタス】アップや【ランクアップ】には言及せず――

焦りも今は見せていない。

元よりアイズが何を考えているのか分からない事もあるけれど。

それでも周りが見えていない事は無かった。

少なくともリヴェリアはそう感じている。

「お前の好敵手が居なくなったわけだが……。そろそろそのケガも治さなければな」

「……まだ少し色々と試したいから」

「……そうか」

アイズを完全復活させるのに必要なアイテム類は既に用意が出来ている。後は――出来るだけ早めに――決断してもらうだけだ。

前回の戦いから随分と日にちが過ぎている。――そう長くは待てない。けれども、それを急かす事もまたリヴェリアには出来なかった。

（……【片翼剣姫】か……。アイズをここまで追い詰めるモンスターとは……。このところ闇派閥（イヴィルス）の噂を聞かないのが……）

件（くだん）の女友達と何があって何が起きたのだ、と本当は聞くべきところだが――

過保護に扱う事もまた憚（はばか）られた。

少し前の血に飢えた獣であればもっと干渉していた。しかし、今は仲間を大切に思う心がある。その上で自分で決断したのだから尊重するのがリヴェリアの立場。

何とも複雑な事情でもどかしいことこの上ない。

「……リヴェリア。……考え事してると危ないよ」
「心配するな。その辺りは心得ているさ」
上層のおいてレベル6の冒険者であるリヴェリアにこの辺りのモンスターは驚異となりえない。
余所見をしていても軽くあしらう自信がある。
冒険者の【ステイタス】の恩恵は絶大で、今のアイズでもリヴェリアを倒すには死力を尽くすほどの努力が要る。
近付くモンスターも片目をつぶったままいつものように対処している。
高貴さを醸し出す『王族（ハイエルフ）』ではあるが歴戦の冒険者。野蛮な戦闘もお手の物。
アイズと同じく散歩がてら下の階層に移動していく。
駆け出しの冒険者達が見ればアイズ達が平然と軽装で降りて行くさまは奇異に映る。
親（リヴェリア）に連れられている娘（アイズ）と変わらないのだから。
他の冒険者の羨望などを無視しつつ十五階層まで難なく降りて、さっそくこの階層から現われる『ミノタウロス』に取り囲まれる。
「八体か……。行けるか、アイズ？」
「……うん」
返事のすぐ後で駆け出すアイズ。
細身の剣（デスペレート）で的確にモンスターの核である『魔石』を砕いていく。
瞬く間に屠られるミノタウロスの様子に満足するリヴェリア。
手負いでもミノタウロス相手に息一つ乱さないところは問題なし、と見ていいだろうと。
九匹目のミノタウロスがリヴェリアの背後に迫っていたが、手に持つ魔杖『マグナ・アルヴス』で打ち払う。
魔法を主体にする冒険者だが、彼らに使うほどの驚異はなかった。

†

見える範囲に居たモンスターを全て倒した後『ドロップアイテム』の有無を確認してから一息つく。
戦闘を終えた後、アイズは壁伝いに移動しつつ辺りを何となく眺め

る。
　地下空間にしては天井が高く、見晴らしがいい。十二階層以降の特色と言ってもいい。
　時間によっては下の階層に繋がる穴が空いている事がある。
「……この辺りか……。例のモンスターと遭遇した、と言っていた場所は……」
「……ううん。それは……もう過ぎた」
「そうだったか」
　元々は周りに迷惑がかからない事を確認してから壁を破壊し、時間経過によって戻る様子を眺める、という子供らしい好奇心がきっかけだった。
　ダンジョンを攻略するだけが仕事の冒険者にとっては無駄としか言いようのない行為――
　しかし、自分達は何も知らずに侵入し、無限に湧いて来るモンスターを倒し続けている。
　何の疑問も抱かずに。
　それが当たり前だと思い込んで。
（『魔石』を稼ぐならもっと効率のいい方法を行(おこな)えばいい。でも、それを誰もやらなかったのは何故……、という疑問から……）
　発見したモンスターは未発見の新種で、後で特徴を尋ねても誰も答えられず、また資料にも記載されていなかった。
　硬くて素早く、恐ろしいほど手強い。――しかし、とても小さな身体だったので、それほど驚異とは――最初は――思わなかった。
　最終的には――踏み潰して倒したり――油断を誘ったりして撃破した。いや、それしか出来なかった。
　硬い部分は前脚のところだけで胴体部分は比較的弱かった。実際、細身の剣(デスペレート)を前脚で受け止められた時、硬いと思ってしまったから。
（……上層域で出現したから倒せた、ということも……。もっと下の階層で現れたらどうなっていたのか……。さすがにそれを試したいとは……）
　それと他にも類似のモンスターが居ないとも限らない、というとこ

ろが恐ろしい。
ダンジョンにはまだ知られていないモンスターが存在する。
今でも滅多に現れない希少種（レアモンスター）発見の報告が届くほどだ。
「実際に目にするには多くの仲間が必要か」
「……犠牲が増えそうだから。……あまりオススメしないよ」
アイズの警告に苦笑しつつ相槌を打つ。
レベル6を三人揃えていれば何も問題は無い、という考えはきっと――傲慢なのだろうと――
けれども、実際に珍しいモンスターを一度は確認してみたい気持ちもある。
その好奇心が深刻な事態を招く引き金になっては困るけれど。
――リヴェリアとて無茶をする気はないが、アイズを重傷に追い込んだ原因にはとても興味があった。

†

物騒な話題をしている合間に厄介な事態が生まれては困るので、昼食を取った後はさっさと地上に戻る事にした。それにアイズも了承した。
ケガのお陰か、いやに素直な彼女が冒険者ではなく、歳相応の女の子に見えるのだから不思議だ。
何事も無く無事に【ロキ・ファミリア】の本拠（ホーム）である『黄昏の館』に戻ると、アイズはほっと胸を撫で下ろす。
先日までの緊張感は偏（ひとえ）に未知との遭遇だ。それが未だに拭えていないのはきっとまだ弱いからだと思っている。
そんな彼女をリヴェリアは自室に連れて行き、包帯を替える。
「……『耐久』が低いとしても『敏捷』でも勝てないとは……。やはり興味があったな、そのモンスターには……」
「……素早いのは確かだけど……。……私より多分……遅めだよ？」
「そうなのか？」
掌に載る程度の大きさで蟻や蜘蛛に似ている。それが三匹現われた。
素早く動き、力が強い。

同階層にミノタウロスが居ればあっさりと蹂躙され、食い破られても驚かない。

アイズの見立ては誤算に終わった。

「……実際、勝てないとは思わなかった」

当時レベル3だった自分の敵ではない、と。

そこから先は死闘の連続なので割愛することにし、リヴェリアも何が起きたか予想できたので詮索はしなかった。

後から増援を呼ぶような事は無く、一匹は早期に討伐できた。

残り一匹を仕留めるのに思いのほか時間がかかったのが運の尽きだったが――

「改めて詳細を聞こうか。感触から、どれほどの強さだと推測する？」

「……攻撃だけならレベル3から……レベル4……可能性で言えば、それ以上も……」

現われた当初、一匹はすぐ倒せた。二匹目から急に様子が変わった。様子というか動きが。

数によってモンスターの強さが変化するのか、と危惧したがそうではなかった。

「……とにかく一定じゃない。……あれは見つけたらすぐ倒さなきゃ駄目」

今までの発見例や被害報告は未発見の為か、情報はアイズ達のみ。

そこから見ても希少種（レアモンスター）である事は間違いなく、一定の条件を満たさなければ現われない。そして、それが大量に発生するおそれは現段階では無い、としか言いようがない。

もし、それらが覆るようであれば迷宮都市オラリオの危機となる。

ただ、そんな化け物と最強の冒険者と誉れ高い【フレイヤ・ファミリア】の団員達とがぶつかったらどうなるのか、興味が湧いてきた。

周りの被害を考慮すれば不謹慎な興味だ。

「……それと、そのモンスターは確実に冒険者を狙ってた。……だから、すぐ逃げたりするような感じじゃなかった」

「それは良い情報だ。すぐに逃げてしまうようでは被害が増える一方だな」

そのモンスターが現れる条件は不明――不明になった――だが、単に壁を壊した程度では出て来ない、らしい。

その一回が特別だったのか、他にも何らかの条件が必要なのか――一階層から念のために十個近くの壁を破壊してみたものの脅威を感じるモンスターの気配は今日まで無かった。

アイズに聞いた通りに団長の『フィン・ディムナ』が団員を連れて三十階層まで試してみたが、こちらも不発に終わっている。たまたま起きた奇跡――と今は思っている。

ただ、そう思っているだけで知らない場所に発生している事も――

「とにかく、新たな脅威が無い内に怪我を治さなければ……。そろそろ【剣姫】として復活してくれないと……」

「……そうだね」

待ち人はもう来ないと知った。

であれば――いつまでも待っている必要はもう――

立ち止まっている暇が無いことを思い出し、完全回復の為の準備を整えるようにリヴェリアに頼んだ。

†

失った部位の再生は気軽に出来るほど簡単ではない。というより結構な覚悟が本人に要求される。

子供のアイズとてケガをしたくないし、痛いのは怖いし、嫌だった。それでも我慢しなければならない事は分かっている。

今までケガをした事が無い訳ではないけれど――

即日に対処するのは酷かなと思ったリヴェリアは一週間ほどの自由時間を与えた。

その間に決められなければ強引な手に出る、と通達する。

そうして自由な時間を得たアイズはまたダンジョンに潜ろうとはせず、行き着けの露天に向かった。

不自由ながらも買い物にも慣れ、金貨を取り出す動作も上手くなった。

かといってずっと片腕というわけにはいかない。

購入したジャガ丸くんを食べる為に中央広場（セントラルパーク）に赴く。

今は歩きながら食べるほどには器用に出来なかったので。
座れる場所見つけて一時の休息とする。
（……片手だと食べかけをしまう事もできない）
そう思いつつ行き交う人々を眺める。
人間（ヒューマン）と多くの亜人間（デミ・ヒューマン）。冒険者に地元で働く住民達。
天気がいい日は特に賑やかな様子だ。
その下では冒険者達がモンスターと戦っていたり、深層に潜っていたりしているのに。
地上はとても平和に見える。
先日までの暗い気持ちも少しずつ晴れてきたとはいえ、死闘をすぐに忘れられるほどには日が経っていない。
もし、同じ条件が揃ったら自分は無傷で勝利できるのか、と自問する。
早期決着であれば難しくない。
問題は手間取る事だ。――それと他の冒険者が居ないこと。
一人でダンジョン攻略すればいいのか、といえば話しが変わってくるので何とも言えない。
「!?」
物思いに耽りつつもジャガ丸くんを堪能した正にその時、真後ろから突如として殺気が生まれる。
咄嗟に――振り向いて防御をしようとしてみたものの片腕を失っているので意識が定まらず、混乱した。
普段から慣れ親しんだ動きが咄嗟の時に働かなかった。それは偏（ひとえ）に地下のダンジョンではなく、平和である筈の地上だったから。
とにかく、防御に失敗したアイズは体勢を崩し、暴漢から一撃を頭に受ける結果になった。
ゴッ。
それがもし硬い石であれば相当痛いところ――
拳であっても痛い。
急な事に何で打たれたのか分からないまま痛いと小さく呟く。
「……隙あり」

「!?」

何らかの攻撃を加えてから言葉をかけてきたのは自分と同じくらいの背丈を持つ何者か。

わけも分からず一歩で大きく飛びのき、襲撃者を見据えるアイズ。

刺さったり、切れたりするような事が無かったので、刀剣類ではないと予想する。

安堵はしたが痛かった。

完全に虚を突かれた事に驚きを感じた。

「……何？　……敵？」

万全であれば防げない筈はなく、今の失態に対して少しずつ驚愕していく。

手に持っているのは小剣――によく似た木刀。それを確認し、安心するべきか、それとも武器は武器として身構えるかを素早く選択する。

反撃の態勢は取れなかった。攻撃を受ける事に慣れていなかったので。いや、正確には【ロキ・ファミリア】の人間以外から――攻撃を受けた事が殆ど無かったから。

相手は一撃では満足せず、昼間にもかかわらず闇夜に溶け込むような漆黒の服装、ではなく派手な色合いのローブを身にまとっていた。

それも花柄の――

かなり派手なものにもかかわらず、アイズは気付かなかった。おそらく周りに行き交う者達も――

不審に思う暇も無く、追撃してくる相手を細身の剣（デスペレート）で受け止める。

†

小剣程度の二振りの木刀が襲い掛かる。それを片腕しか無いアイズが捌いていく。

最初こそ驚いたが、戦闘を開始して一分も経たずに落ち着きを取り戻し、冷静に敵の強さを把握する。

自分と同等、またはそれ以上であれば驚異だったのだが、感覚的には駆け出し。力が全然乗っていない。

【ステイタス】の『力』としてみれば１００未満は確実――もっと低

い可能性もある。
それでも木刀で頭を打(ぶ)たれれば痛いものだ。不意打ちだった事もあり、血が少し出た。
「……君は何なのかな？」
口を尖らせてケガをさせてきた相手に尋ねた。
ローブから覗く顔は仮面などで隠しているわけではなく、可愛らしい表情が窺えた。
性別は分からないが、茶髪に青い瞳。それと初対面――全く見覚えが無い。
もはや相手の技量は把握した。二撃目は許さない。
――それでも不意打ちとはいえ見事だった、とガレス辺りなら誉めそうだが、アイズは十二歳の女の子。普通に不機嫌になった。
人がゆっくりジャガ丸くんを食べて満足していたところに水を差すような真似をしたのだから――
「……ヴァレン何某(なにがし)の首を貰い受けにきた」
「……木刀じゃあ……無理じゃないかな……」
カンコンカンコン、小気味良い音を響かせて受身で対応するアイズ。
攻撃しても良かったが、相手(襲撃者)があまりにも弱そうだったので、様子見に転じていた。
それに殺気で驚いたのは最初だけ。――その時の殺気はきっと自分の心の弱さが増大させたものだと解釈する。
どう見繕っても相手から驚異と呼べるようなものは感じない。
ド素人の暗殺者が関の山だ。――そのド素人に不意打ちされたわけだが――
得物が木刀ではなく刀剣であれば命は無かった、可能がある。
『耐久』によってある程度は軽減されるかもしれないけれど、それでも場所によれば充分致命傷に値する。
油断は命取りになる。
それを実際に体験するのは久方ぶりだ。だが、それとは別にこの事を【ファミリア】の団員達に――特にリヴェリア――知られたら説教

が待っている。――ベートだと笑いものかな、と。
考えれば考えるほどに不機嫌になっていくアイズ。
雑念に囚われつつも相手の攻撃は全て捌き切っている。
レベルや【ステイタス】の差が不可思議な現象を生み出していた。

†

最初の一撃以外は問題なく対処できている。
それ以外は――どう倒すか、だ。
街中での戦闘とはいえ、木刀で挑んでいる。これが真っ当な武器であれば止めに入らなければならない事態――いや、その木刀が特別な武器であれば、だ。
しかし、手に掛かる感触から普通の木刀のようだ。
不壊属性（デュランダル）の細身の剣（デスペレート）に特別な力が襲ってくるような事もなかった。
見た目が暗殺者のような格好だが、それにしては弱すぎる。
戦闘によって周りから受ける視線が多くなってきた。だが、軽い手合わせ程度にしか見えていないと思うので騒ぎになる――というよりアイズ・ヴァレンシュタインに戦いを挑んでいる時点で騒ぎは必至――

「……」
十二歳の女の子――もうすぐ十三歳になる――とはいえ『二つ名』を持ち、有名【ファミリア】に所属する期待の冒険者だ。
その注目度はアイズが思っているより高かった。
ものの数刻も経たずに見物客がどんどん増えていく。
「……その木刀は……特別な武器？」
「手作りの木刀です。店で買えるほどの資金は持ち合わせていなくて」
と、にこやかに答える襲撃者。
出来の程はよく分からないが素直に答えてくるとは思わず、驚いてしまった。
（……意外と正直者なんだ……）
その言葉が真実かは置いといて、尋ねた事に対して答えた部分が意外だと思った。

不意打ちするような相手だから――

戦闘技術はそれなりにある。しかし、レベルや【ステイタス】の差が如実に現れてしまうのが残酷な現実と言える。

片や手負いのアイズとて駆け出しに後れを取るほどではない。

（……それが木刀じゃなきゃ……君は勝っていたかもね。……その後他の冒険者に倒されると思うんだけど……、後の事……全然考えてなさそう……）

初手で自分（アイズ）は敗北した。それは間違いようもない事実だ。

武器に救われたと果たして言えるのか。

攻撃の手を止めない所から、地面に倒れ伏さないと納得しないのかなと疑問に思う。

しかしそれでも――なんだか気持ち悪い。

（……この子は人を殺そうとしているのに平然としていたり、笑っている……）

駆け出しにしては感情の変化がおかしい。

かつて自分も駆け出しであった頃は色々と言われたような気がするけれど、この子もまた似たような境遇の持ち主なのかな、と。

いや自分はもっと品が良かった、と訂正などをしつつ動きを観察する。

アイズから見ればまだまだ『敏捷』が足りないが磨けば化けそうな気配を感じさせた。

――駆け出しだと思っているのは自分（アイズ）だけで実際はレベル2だったりすることも――という雑念が湧いてきた。

そもそもでいえば相手の事を全く知らない。

†

戦闘中にも関わらず、呼吸を整えて動きをよく観察すれば目で追えない事はない。驚かされたのは事実だが。

それから言動と行動に差異がある。

まだまだ技術的には拙いところが多いけれど、そんなに動きは悪くない。

――ただ、どうして命を狙っているのかは分からない。有名な

【ファミリア】だから――という理由かもしれないけれど。
それにしても真昼間から目立つような場所で戦いを挑んでくる度胸は大したものだ。
（……戦い難い。それもまた戦略だとすれば……）
口を硬く結んで不満の表情を露にするアイズ。
相手のペースに乗せられてしまったことに不機嫌となってきた。
その辺りがまだ歳相応であると言える。
襲撃者の年格好は自分と同等の人間（ヒューマン）か小人族（パルゥム）。年齢までは窺えないが何処の【ファミリア】なのか。
冒険者に喧嘩を売る場合、どこにも属していない人間であれば力量差というものがはっきりと現れる。
特にアイズはオラリオでは有名人だ。その事を知らずに襲い掛かる場合があるのか、逆に疑問である。
二振りの木刀を繰り出す冒険者の事がそろそろ疎ましくなってきた。
武器を強く握れないアイズの今の戦闘方法は決定打を犠牲にするもの。それはつまり襲撃者を殺すつもりで戦うことが出来ない。しなくていいに越したことは無いけれど。
（……あっ）
先ほど打たれた額から血が垂れてきた。
木刀とはいえ打ちどころによっては額を切るか、と少し驚くアイズ。
『耐久』が高くても皮膚が硬化するわけではない。それは筋肉が強固になるだけで武器が通らなくなるわけではない、筈である。
その辺りを深く考えたことが無いので上手く言葉に出来ない。
「……ぶっ!?」
襲撃者の木刀がアイズの頬に直撃した。
意識が散漫なった瞬間を狙われた。首が強く揺さぶられ、焦りを覚える。
片手――左腕――だけでは捌ききれない。見た目以上に剣術の才能があるようだ。

（こ、この……）

表情を険しく変化させ、攻勢に転じようとした。

一歩目の踏み出しに対し、相手はそれを見計らって膝頭を踏みつけてきた。

なんて器用な身体捌き、と思いつつ体勢が崩れる。

手負いとはいえレベル４が駆け出しに後れを取る。その事実を受け入れるに事は【剣姫】と呼ばれたアイズには出来ない。

しかし、崩れる体勢を相手は戻るのを悠長に待たず、顔面に膝蹴りを食らわせてきた。

防御担当の腕は今は攻撃に回している。それゆえに通常の戦法が悉く潰されていく。

「す、すげぇ……」

「【剣姫】が打ちのめされている」

反撃しようにも脳が揺らされた事で体勢維持もままならない。

ここで魔法を使うのは自身の信念を曲げる行いだ。だから、この戦いにおいて、それは出来ない。

「今日で貴女の伝説は終わりです。我が安眠の為に礎とかになってください」

攻撃側にしてみれば安眠を得るための戦いだ。不眠は不健康の代名詞。生活を送る上で死活問題であった為、少し狂気が孕んでいた。

段々と本気を出していく。

しかし、アイズとてレベル４の冒険者。こんなところで負けている暇はない。

無理矢理自身の身体を地面に叩きつけ、意識を覚醒に導きすばやく飛び退る。密着状態では分が悪い。

距離を無理矢理離された事で襲撃者は驚きつつも追いすがる。それは彼女にとっても逃がしてはいけないものだと思ったようだ。

（……追撃。彼女は……戦える人。……だけど、……だけど、これは何かが違う）

アイズはわざと膝を崩して攻撃がまだ効いている、という姿を演出。すると攻め手側が好機と判断。

まんまと罠にかかった。いや、そうならざるを得ない精神状態だと見抜いた結果だ。

妄執に囚われた敵は好機を逃さない。だからアイズはそれを利用した。そして、読み勝った。

油断を誘いつつ身体をかなり低くし、突進してくる彼女の頭部を狙って蹴りを打ち上げる。

高い『敏捷』をもって行う攻撃は分かってても避けられるものではない。

傍目には足払いの要領で低い体勢のまま身体を回転させて蹴り上げに入る姿に見えた筈だ。

†

上手く誘導されたと分かったのは顎に一撃を受けた瞬間だ。

寝不足に悩まされていなければ決して油断しなかった。そんな強がりも言えたかもしれない。そして――

敵に一撃を加えたアイズは足に嫌な感触を覚える。咄嗟の事とはいえ力の加減が出来なかった。

（……なんか首を折ったような）

焦りを感じつつ相手を見据えると空を向いたまま近づいてくる。

いや、倒れ込んでくるところだった。

襲撃者の意識は既にない。口から血を溢れさせながら地面に向かって落ちてくる。

正当防衛とはいえやり過ぎてしまったような気がするも、戦闘自体はわりと理に適っていた、ともいえるような――

動かなくなった襲撃者を放っておくわけにもいかず、途方に暮れる。

（このままだと死んじゃうよね。……えーと、こういう時は……）

まず周りに応援を要請。

焦る気持ちを押し殺し、今すべき事を必死に考える。

どんなに苦境に立たされても冒険者は慌ててはいけない。下準備は常に怠らない。

（……そうなんだけど……。いつも荷物をたくさん持ち歩かないから

……。そのせいで回復薬（ポーション）の持ち合わせが……）

最低限の襲撃に備えるのが【ロキ・ファミリア】の団員としての心構えではなかったのか。

アイズは気のゆるみに自信を無くす。しかも数度とはいえ攻撃を受けてしまった。

レベル4なのに。第二級冒険者

他の冒険者に借金する形で回復薬（ポーション）を譲り受け、応急措置を施す。その後、複数人によって摩天楼（バベル）の治療院へと運んでもらう。

途中、身ぐるみをはがされないように見張りをしながら。そして、命に別条が無い事を確認してから立ち去る。

（……なんか、疲れた）

唐突な不意打ちから不慣れな戦闘へ。通常のアイズであれば考えられない苦難だ。

本拠（ホーム）に戻った瞬間、気が抜けたのか、それとも出血による貧血の為か眠るように倒れ込んだ。

次に気が付くと夜中だった。そして、お腹が鳴る音が聞こえてくる。

「起きたか？」

怜悧な声が傍から聞こえた。

緑色の長髪に緑色の瞳を輝かせる王族（ハイエルフ）のリヴェリアだった。

†

昼間の事を話しつつ晩御飯を左腕を動かして食べるアイズ。

ケガをした場所は既に包帯が巻かれている。眠っている間に色々と処置が施されていたようだ。それにも全く気が付かず眠り続けていたことに驚きはあったものの今は平静を保てている。

「お前に襲撃をかけてケガを負わせるとは……。なかなか見込みのある手練のようだ」

「……笑いごとじゃない」

楽しそうに言う王族（ハイエルフ）に口を尖らせつつ、しかし今は食事に専念する。

今日も無事に生き延び、食事が与えられる。

先の戦闘がもし――そう思わずにはいられない。
もし、打ちどころが悪ければ、自分はここに居ない。
「そういえばお前は聞いていないと思うが……。例の【ファミリア】に新しい団員が来たそうだぞ。ベートがなにやら言われたようだが……」
「……例の？」
「ああ。【ヘスティア・ファミリア】だ」
その単語を聞いた瞬間に背筋に冷たいものが落ちる。
世間話としてリヴェリアは語る。といっても狼人（ウェアウルフ）の少年からの説明なので正確性に欠く。
どういうわけかアイズの命を狙っている。それを適当にあしらってくれ、と主神ヘスティアからの要望だ。
（……意味が分からない）
しかし、今日の襲撃の事が無ければ無視する案件だ。
敵はおそらく派手なローブを身に着けた襲撃者で間違いない。それを適当にあしらう、という部分はどうすればいいのか。
「かの主神も手を焼く冒険者のようだ。駆け出しという事だから大事は……、と……。今日の相手はまさにその冒険者のようだな」
楽しそうに言うリヴェリア。だが――どういう理由があるにせよ――軽々しく襲われてはたまらない。
やはりいつまでも手負いのままではいけない時期に来ているのかも、と新たな決意を抱く。
「さて、どうする【片翼剣姫】？　やられっぱなしで終わるわけはないだろう？」
「……もちろん。……でも、あの子にも理由があるんだとしたら……、話しが変わる」
赤い髪の少女とは違い、不意打ちからの接触。単なる怨恨なら神（ヘスティア）がベートと話をするわけがない。
独断専行の冒険者として間違いない。そういう場合は【ファミリア】の抗争とは違う気がした。
†

打撲程度とはいえ流血沙汰になった。一般的には数日の休憩が必要だが癒しの魔法や回復薬（ポーション）があれば傷は意外と早く治る。それに第二級冒険者の【ステイタス】

恩恵も加わればもっと早くなる。

聞いた話しでは団員は一名のみ。複数での待ち伏せは無い。主神は扱いに困っている。

翌朝、鍛錬をする為の中庭にて剣を握りながら対策を練る。

直接本拠（ホーム）に行く案もあったけれど、襲撃対策の為に時間をかける事にした。

「アイズー。あたしたちが手伝える事ってある？」

女戦士（アマゾネス）のティオナ・ヒリュテが建物の窓から声をかけて来た。

大勢の団員を擁する【ロキ・ファミリア】を動員すれば解決できない事は無い。けれども大掛かりな襲撃はアイズとて望まない。

ここは一人で向かうべきだが、助言までは受けないつもりは無い。

「……周りへの被害対策、くらいかな」

「ダンジョンの中なら手伝うよ」

「……たぶん、外の問題……。だから、面倒ごとが多いと思う」

ダンジョンに出てくる厄介なモンスターであればいいのだが、敵は冒険者だ。それも単なる名声を求める者ではない。ガラの悪いごろつきでもない。【ファミリア】と敵対している者でもない。

言葉にするのが難しい駆け出しの襲撃者だ。

（でも、ヘスティア様に理由を聞いておかないと駄目だよね。怨恨であった場合は……話しが違ってくると思うし）

もし、怨恨であったとしてもそれは色々と面倒な事態に発展する。

アイズは直接手を下したわけではない。けれども、否定しきれない事があったのは事実だ。

様々な事を考えていると剣の振り方が雑になってきた。

いや、そもそも武器を振るのが不毛に思えた。

自分の剣はモンスターに振るべきだ、と。

＃2―04　アルテミス

【片翼剣姫】への不意打ちはともかく、手痛い一撃を受けて昏倒したユーカリン・ナナツタエは誰もが首を傾げるほど見事な死に顔を見せていた。

――まだ死んではいない。しかし、この世に何の未練もない、と思わせるほどの寝顔だった。

茶髪碧眼の少女は人ごみに紛れれば目立たない程平凡な顔ではあるが、身に着けているものが派手だった。

花柄のローブ。それは何処に売っていたのか、と。

「【片翼剣姫】に襲撃をかけるとは、どこの【ファミリア】だ？」

「しかし、見事な戦いだったぜ」

「【片翼剣姫】は手負いだ。だからこそ戦えていただけだ。そうでなけりゃ、秒殺だったさ」

病室の外では様々な噂が飛び交っていたが当の本人は夢の中。

首の骨はなんとか早い処置で大事には至らないが、しばらくダンジョン攻略は無理だと担当医は結論を出した。

それから数日後に目を覚ましたユーカリンは見舞いに来た主神ヘスティアと共に退院し、ギルド本部で盛大にお叱りを受けたりと散々だったが【ロキ・ファミリア】からは特に抗議は無かった。

ユーカリンにしてみれば漸く安眠できたせいか、いやに清々しい顔になっていた。

不眠に陥らせたのはヘスティアなので、またアイズ・ヴァレンシュタインに特攻しないように気を付けなければならない。これはいわばヘスティアが招いた事件である。

そうでなければユーカリンはアイズへの不意打ちはしなかった。

（……なんでボクが眷族の代わりに頭を下げなきゃならないんだい。……【ファミリア】の主神だからさ。……だよねー）

団員が働いて主神の為に色々と尽くしてくれるとばかり思っていたが、現実は厳しかった。

天界では好き放題出来ていたのに下界は色々と面倒ごとが多くて大変。

一日いっぱいだらけることも出来ない。

（……ポランは素直でいい眷族だったのに。どうして今回の眷族は物騒なんだろう）

どんな眷族が来るのかはヘスティアには窺い知れない。ならば眷族にしなければいい。

それはそうなんだが――黙っていても蓄えは増えない。それに一人は寂しい。

下手をすれば何年も一人で過ごす事になっていたかもしれない。だからこそ、それほど日数も経たずに来てくれたユーカリンを追い返す考えはヘスティアには無かった。

ぐうたらする事が何よりも優先されたので。それがそもそも間違いの元だが。

†

【片翼剣姫】の襲撃から数日が経過した。

ヘスティアの寝言が無くなった為か、ユーカリンはしっかりと睡眠がとれるようになり精神的に余裕が生まれた。

気分が良いうちにダンジョンに潜り、魔石を回収していく。それだけ見れば普通の冒険者だ。

二刀の小太刀を操る若き冒険者。ダンジョン内で他の冒険者に挑むような事は無く、せっせと資金稼ぎに邁進していた。

（……普通）

（定時に出勤して定時に帰るギルド職員みたい）

冒険者ギルドの中でのユーカリンの評価である。問題行動を危惧して気にするようにしてみたものの普通の働きしか見たことが無い。

担当アドバイザーから見ても素直な冒険者という印象しか受けない。

朝の挨拶から帰りの挨拶まで毎日が一緒ではないかとさえ思うほど。

（同じ一日を繰り返している!?）

持ってくる魔石まで一緒であったら、確かにそう勘違いしてもおかしくない。それほど規則正しい冒険者だった。

おそらく、きちんとした生活態度であれば何の問題も起きなかった。

それから更に日にちが過ぎるころ、ギルドに女性冒険者の集団が訪れた。

「あれは【アルテミス・ファミリア】じゃないか？」

「外で活動する【ファミリア】だっけ？　確か主神がえらく美人だという……」

「美人で強いと評判の処女神アルテミス。この目で拝める日が来るとは……」

周りの喧騒をよそに戦闘を歩くのは透き通った青色の長い髪を持つ姿勢の美しい女性。

色白の肌は一点の曇りもなく、碧い瞳は男どもの接近を許すまいと地柄強く輝いている。そして、後ろで一本に束ねられた髪は殆ど動きを見せない。

団員は全員女性。その数は二〇――

迷宮都市オラリオの外で長期間『狩猟』を行（おこな）っていた。数か月に一度、装備品の整備と新調。団員達の健康管理。仕事の報告のため訪れる。

団長レトゥーサの指示に従い、一糸乱れず行動する女性団員達。しかし、中には挙動不審な者が居る。

「ねえねえ、団長。私たち注目されてますよ。こんなに大人数で来る必要があるんですか？」

「これから治療院に行くんだから仕方がない。……それと勝手に列を乱すな、ランテ」

咎められたランテという団員はすぐさま整列する。しかし、主神アルテミスは何も言わない。団員教育は団長に任せているから。

事実、団員に指示を飛ばすのはレトゥーサだけ。だからといって団員達と口を聞かないわけではない。

二〇人の女性たちの中で一人だけ包帯姿の痛々しい姿を晒してい

る者にギルドに来ている冒険者達は気づいた。
その団員は顔色が悪く、足取りも遅い。一人だけ重症なところも異常と言える。なにせ、他の団員達はケガらしいものを負っていない。
ギルド本部の一角にて団員達が立ち止まるとアルテミスはレトゥーサに重傷の団員を治療院に連れていくよう命令する。
「……メンテ。お前は先に行け」
「……はい」
「では、残りの者はそれぞれ待機。その後、検診に向かう」
「はい！」
全員の返事に満足したアルテミスは荷物運び数人と共に受付に向かう。残りは検診に行ったり待合室で待機することになった。
主神の姿が見えなくなった途端に女性団員達は喋り出す。
先程までの形式ばった堅苦しさを崩し、実に賑やかに――
「やっと、オラリオに帰れたぁ」
「……ここのところ狩り続きだったもんね～」
「皆さん、だらけるの早すぎますよ」
ランテと呼ばれた団員が呆れた顔で言った。
規則の厳しい【ファミリア】ではあるが、それは主神が生真面目なだけで団員は比較的、自由な性格をしている。いわゆる憧れによって。
完全に緩いわけでもなく、それぞれ外のモンスターとの死闘を繰り広げたベテランといってもいい冒険者達だ。
「……あー、男がいっぱい」
「出会いを求めるなっていうのは無理がなくない？」
【アルテミス・ファミリア】は男女交際を禁止されている。主神が処女神ということもあり、いつの間にか作られた規則だ。しかし、それを全員が律儀に守っているか、というと些か疑問がある。
特にランテは男性冒険者を見る目が輝いてしまう。とても男嫌いという雰囲気ではない。
「ランテはコロっと騙されるタイプよね」
「メンテほどじゃないけど」

「団員の悪口はやめる。はい、そろそろアルテミス様が戻ってくるかもしれないよ」
手を叩いて場を制する。そうしてメンテを治療院に送り届けた団長と換金を終えた主神達が戻ってきて、改めて団員達は整列する。
この後は摩天楼（バベル）の上層にある武具の販売店に向かい、それぞれの装備を整えることになっている。
「まず武装を整えなさい。それからしばらくダンジョンに潜り、資金を調達します。……正直、外での稼ぎだけでは心許ありませんからね」
「ですが、主神様はダンジョンに潜れませんよ」
神は基本的にダンジョンに潜れない。これはオラリオが定める規則でもある。
ダンジョンに神が入ると異変が起きる、という。
これは神フレイヤ、神ロキも守っていた。
「そうなんですよね……。貴女達だけでモンスターを倒さなければなりません。とても不安です」
「……というか主神様が強すぎるんですよ」
外での狩りはアルテミス自身も行（おこな）う。
弓を主体に遠距離攻撃するアルテミスは冒険者並みの強さを持っていた。半分以上の団員より強いと評判である。
その事で団長レトゥーサにとっては頭痛の種となっていた。

†

いくつかの言伝の後、団員をレトゥーサに任せ、アルテミスは友神（ゆうじん）の本拠（ホーム）に向かうことにした。
彼女達が滞在する拠点は既に確保されており、オラリオにしばらく逗留する事になっている。
ただ、一人の女神が歩き回るだけで周りが騒然となるのが気になっていた。
（……久しぶりに来ると街並みが新鮮に映る。冒険者の顔も知らない者ばかりだ）
一年の大半を外で過ごす【アルテミス・ファミリア】とて交流が無

いわけではない。
農業を司る【デメテル・ファミリア】や漁業を司る【ニョルズ・ファミリア】とはよく会っている。
狩猟だけでは食べていけないのでそれぞれの【ファミリア】と協力することも。
「確かこの辺りに……」
アルテミスのお目当てはオラリオの名物『ジャガ丸くん』だ。これだけは外でもなかなか手に入らない。無い事もないが本場の味というものは大いに気になっていた。
そして――
（おお。あれなるは見覚えのある我が友……）
天界では見知った神々も下界では出会う機会が失われている。
更にアルテミスは目がかなり良い。
気になる気配を感じ取れば数百M（メドル）離れていようと察知できる。
（……なにやら意気消沈気味。何があった、ヘスティア）
焦る気持ちを押し殺し、露店の一つに向かう。その歩みに迷いなし。
声に覇気は無いが客寄せを続けていたヘスティア。このところ色々と気苦労が一気に押し寄せ、精神的にも摩耗気味だった。
「……へーい。いらっしゃ～い。おいしいジャガ丸くんだよー」
普段はぐうたらするのが日課だった神が毎日のように働きに出なければならないのは――ひとえに自業自得。
こうしている間も眷族のユーカリンはダンジョンに潜って上層域のモンスターを狩り続けていた。それだけなら真っ当な冒険者だ。
ただ、毎日同じ光景にヘスティアは退屈を覚えていた。
（同じ階層で同じモンスターを同じ数だけ倒して帰ってくる。……何かの嫌がらせかい？　それとも寝言への無言の抗議かい？　張り合いのない毎日はキツイよ全く）
平坦な日常で構わない筈なのに何故か心労が積み重なっていく。
新手の暗殺術か何かかと疑ったくらいだ。
「……相当、重症のようだな、店主」

「あ、いらっしゃい。何にしますかー」
客に顔を向けずに対応するヘスティア。その下を向いた顔を鷲掴みにする客。
咄嗟の事に驚きつつも力が強くて抵抗できない。
「こら。何をするか」
「何をするか、ではない。ろくに覇気も無く商売をしおって。どうしたのだ、ヘスティア」
「その上から威圧するような声はアルテミスかい？」
「……そなたにそういう風に言われたくはないな。うむ、久しいなヘスティア。息災とは無縁そうだが……」
さっきまで闇のオーラに包まれていた様なヘスティアが光に包まれた。
アルテミスもつい手で顔を覆うほどの変化っぷりにたじろぐ。

†

プレーン（素揚げ）のジャガ丸くんを注文し、他の店から借りた椅子を持ち寄って談笑を始める。
ヘスティアには慣れた住民もアルテミスの存在には目を留めるようで客足が増えてきた。
「そなた、眷族はどうした？　まだ居ないのか？」
「居るよ。一人だけど……」
「そうか。ヘスティアも眷族を持つようになったか。……【ファミリア】の運営は……良いとは言えないようだが……」
運営がうまくいっていれば露店で働くわけがない。
アルテミスの記憶にも主神は基本的に本拠（ホーム）に構えていて数か月に一度だけ外出するような存在だ。
外で活躍する眷族達の邪魔にならないように。
（真面目に働いて……いるようには見えないが……。元気のないヘスティアは初めて見る）
笑って騒いでいる印象しかなかったので。
それが今は気苦労に囚われた姿にしか見えない。下界で何があったというのか。大いに気になってしまう。

「眷族が働かず、神が働くとはどういう事なのだ?」
「眷族は眷族でダンジョンにこもって頑張っているよ。一人だけだから資金的にも苦しくてね。武器、防具、アイテムが高いから……」
「そうか。……私にはどうする事も出来ない問題のようだ。しかし、だからといって顔色が悪すぎるぞ」
「……色々あったんだよ。【ファミリア】経営がこんなに大変だとは思っても見なかった。アルテミスのところはどうなんだい？　噂らしいのが全然聞かないけど」
「オラリオの外で狩猟をしているからな。滅多に中には来ない。私の眷族達は皆、働き者だ。それぞれ頑張っている。……一人問題児が居るが……」
苦笑するアルテミス。
天界ではありふれた神々の交流も下界では滅多にできない。
それぞれ遠い存在のように感じられた。
ヘスティアから見るアルテミスは昔のまま。声の質にも変わりがない。それはそれで安心した。
「……うむ。眷族が一人だけでは心細いのであれば……。私の眷族（子）を貸そうか?」
「仲間が増えるのはありがたいけれど……。いいのかい?」
いいわけではないが、アルテミス側にも事情があった。
その眷族はアルテミスにとって手を焼く問題児であり、何より仲間意識が欠如している。
モンスター討伐もろくに出来ず、男の尻ばかり追いかけている。
元は闇派閥（イヴィルス）から――半ば強引に――眷族に仕立て上げた経緯がある。そのせいか、現在の主神アルテミスの言う事をまともに聞かない。尚且つよくケガを負う。
名前が似ているランテすらも匙を投げるほど。
「……待て待て。聞いている限りだと相当な眷族（子）じゃないか。問題児が二人になるだけだと思うけれど」
「いやいや。互いに何か通じるものがあれば落ち着くかもしれんぞ」
「……そうは思わないんだけどね。でも、ありがとう。気遣ってくれ

てさ」

天界では様々な神と交流があるヘスティア。下界では単なるロリ巨乳と揶揄されているが知名度は神々の中ではかなり高い。

対するアルテミスは下界の事に疎く、眷族によく心配される。美人であることを除けば知名度はかなり低い。

分け隔てなく振舞えるヘスティアの姿は彼女にとって輝いて見えた。

「よし。もう一人付けよう」

「……そんなに簡単に決めていいのかい？　しかも君は処女神じゃあないか。全員女性だと仲違いとかしそうな気がするけど……」

「女しか居ないのだから当たり前であろう。問題児を除けばそれなりに実力がある。生活費を稼ぐため、私はしばらく暇になるしな」

姿勢の良い青い髪の女神は胸を張って言った。しかし、勝手に決められていくことに団員は従うはずもなく――

午後に引き上げてきた団員達と共にヘスティアの本拠（ホーム）に向かい、外観に唖然としつつ話しを告げると不満が沸き起こった。

†

当事者は治療院に入院が決定し、ついでとばかりに追加される予定の団員は不満を漏らした。

団長は頭を押さえて呆れるばかり。

それとは別に廃墟同然の本拠（ホーム）で生活したくないという意見が多かった。

ダンジョン攻略から戻っていたユーカリンは急に大人数で押し掛けてきた【アルテミス・ファミリア】の団員達に飲み物を振舞う。

「外に行くまでの間だ。どうして不満を言う？　改宗（コンバージョン）しろとは言っていないであろう」

「……あのですね、主神様。相談も無しに決められる事が問題なのです。いくらご友神（ゆうじん）だとしても、です」

「困っている友を助けるのに理由が要るのか？」

「……アルテミス。ボクは別に助けてって言ってないぜ。それは君が勝手に言い出した事だ。助かるとは言ったかもしれないが……。そ

れにみんなの顔を見てごらんよ。冥界の神も逃げ出すぜ」
うんうんと団長レトゥーサがヘスティアの意見に頷く。
しかし、団員達の不満顔など全く気にならないアルテミスは逆に睨み返した。しかし、可愛い顔立ちなので畏怖の効果は薄い。更に見慣れた顔だ。
「仕方ない。ランテ」
「嫌です」
「……まだ何も言ってないであろう」
「言わなくても分かりますよ。お前に【ヘスティア・ファミリア】を救う任を与えるって事でしょう？」
そう言われて驚くアルテミス。何故分かった、読心術か。と、言いだしそうな顔だった。
他の団員に言っても同じ反応が返ってくるはずだ。それくらい主神の真意を理解していた。
「しかも、入院中のメンテも勝手に巻き込んで……。あの子、ますますヤバくなりますよ」
「……んー。頼める団員がお主たちくらいだから仕方あるまい。それにメンテは私でも扱いが分からぬ」
「……眷族に加えたのはアルテミス様です。今更無責任なこと言わないでください」
正論を言われて気丈なアルテミスも小さく縮こまる。それに団員達に否定されているのだから尚更意気消沈した。
誰か一人でも理解者が居ればいいのに、とヘスティアは思うものの同情はしたくなかった。
多くの団員達に説教される神というのもかっこ悪いものではあるが、精神的にキツイなと思った。

†

もしヘスティアならば苦境に立たされれば眷族の意見を尊重し諦める。けれどもアルテミスは違う。
神――主神としての強権を使い実行に移す。ある意味、有言実行に移りやすい性格であった。

天界での彼女も他の男神（おがみ）相手に一切の妥協をしなかった。荒ぶる憤怒を司る女神かと思うほどに。

「いいや、決めた。それに狩猟ばかりではお前達も辛かろう。男神や男共と付き合えとは言わん。一年か数年ほど……」

「長すぎますし、我がままを言わないでください」

（一年ということは……、その間に男と付き合ってもバレなくない？）

（……それともアルテミス様、分かってないで言ってるのかな。どうなのかなー）

それぞれ疑問を抱いたり、激高したり賑やかになってきた。

ここで問題なのは約一名。人知れず運命を決められてしまった事だ。ヘスティアはその眷族に同情を禁じ得ない。

一年も預けられる眷族からすればたまったものではないが、見方を変えれば好機と捉える者が居る。何しろ主神の目を盗めるのだから。

彼女達は決して狩猟が嫌いなわけではない。仕事に対して誇りを持っている。けれど、禁欲的な暮らしが足を引っ張っている事も自覚していた。

主神とは別に眷族達まで男性に興味が無かったり、嫌っているわけではない。これは主神の美しさ、強さに惹かれただけだ。

「……メンテは確定として……、もう一人……。ランテ」

「ひぇっ」

「……メンテの説明役として残れ。そうでもしなければ主神様が半数以上をこの【ファミリア】に置いていくことになるぞ。そして、アルテミス様」

団長レトゥーサが鋭い視線を主神に送る。

妥協案を提示しなければ全て主神の言いつけ通りに進んでしまう。

それは少し困ると判断した。

「なんだ？」

「メンテの改宗（コンバージョン）だけは認めますが……。後は駄目です。それと賃貸期間を設けてください。出来ればちゃんと……。急な仲間の脱退は困りますので」

「分かっておる。そう怖い顔を近づけるな」

「んっ？　一人だけ改宗（コンバージョン）ってどういうことだい？」
話しの流れ的に聞き流しそうだったが、改宗（コンバージョン）と聞いては黙っているわけにはいかない。
【ファミリア】と共同でダンジョンに潜ったり、共闘する事に違法性は無い。しかし、改宗（コンバージョン）は完全に他の【ファミリア】のものにする。
【ステイタス】の更新は契約した神にしか変更できない。もし、なんらかの事情で別の【ファミリア】の眷族になりたい場合は主神の手で改宗（コンバージョン）の手続きをする必要がある。
単に仲間を貸す、という簡単なものではない。
「メンテは……様々な【ファミリア】を渡り歩く眷族なのだ。……当初は面倒を見る自信があったのだが……」
「それについては後で説明いたします」
「とにかく、彼女は冒険者としては壊れておる。私でも治せなかった。……ヘスティアでも駄目かもしれないが……、お主の持ち前の明るさで変えてやってほしい」
「……そこまで言われても今はちょっとねー……」
少し前までなら任せておくれよ、と言う自信があった。けれども今は前の眷族を失ってからまだ日が浅い。そう簡単に切り替えられるほどヘスティアは器用ではなかった。更に側に居るユーカリンにも手を焼かされている。
当人はボケーっとした顔でアルテミス達を見つめていた。興味でもあるのか、聞きたいことは自由に聞いてみるように言いつけておいた。

†

その後、詰めの協議ということはなかったが問題児は本当に問題児らしく、ヘスティアも【ファミリア】に加入させるのに抵抗を覚えた。
誰でもいいわけではない。そこは意外とわがままな神様だった。
それにしても女性しか居ない現場になった。可愛い男の子を所望したくなる。そんな気持ちがヘスティアに芽生えた。
新規加入の件はひとまず保留にしてもらい、ユーカリンの仲間として一人借り受ける事には合意した。もちろん、【ファミリア】からの脱

退は無しだ。
「主神様の命により、ランテ……。しばらくヘスティア様の手伝いをしろ」
「……えー。私だけ？」
「多過ぎてはヘスティアの眷族の意思が働かぬ。同数が望ましい」
団長レトゥーサとしてはオラリオに滞在する間、貴重な戦力を割くのは望ましくないが神助けとなれば話しは変わる。
次の狩猟時期までであれば貸与を認める事にした。それと問題児であるメンテも同様に。
ランテはあくまでメンテが退院するまでの間の説明役と次の狩猟期間までの繋ぎ要因であると仲間達に伝えた。
尊い犠牲を払う事で主神の機嫌を操ろうと団長は画策している、と他の眷族たちは思った。
「ここに居る間、男に現（うつつ）を抜かすようであれば改宗（コンバージョン）の刑に処す」
（刑罰のつもりだったのかい!?）
「オーボーだぁ！」
「諦めろ、ランテ。……アルテミス様はそういう神様だ。それとヘスティア様。ランテとメンテをよろしくお願いします。ランテは……見た目通り野性的ではありますが……」
（決断早っ！）
驚くヘスティアは流されるままに決まっていく事柄に抗えなかった。
ここには居ないメンテの事は置いといて、ランテという眷族に顔を向ける。
軽装で背中に大きな弓を背負っている。褐色気味の肌ではあるが服装的には女戦士（アマゾネス）というよりダークエルフに近い。
耳は猫型のものだがどちら猫か虎なのか判断が付かなかった。
背は——ヘスティアより——高いが高身長というわけでもない印象を受けた。
主神が決めたことに文句を言いつつも涙目で諦める眷族ランテはヘスティアに向かって頭を下げた。よろしくお願いします、と恨みが

ましく。
「ま、まあ。一時的なものだから。アルテミス。いきなり改宗（コンバージョン）は無しだぜ」
「うむ。私としてもランテを失うのは困るからな。拾った時から面倒を見てきた眷族をそう簡単に見捨てたりはしない」
ランテは天涯孤独の眷族である。しかし、その詳細を語る事はせず、端的に話題は打ち切られた。
軽く凄い事を聞いたヘスティアも詳しく聞こうという思いは抱けなかった。

†

メンテは退院するまでは来られないとして、新たな仲間としてランテが加わる事になった。
彼女のレベルは2（ツー）である。最近、ランクアップしたばかりだ。
無茶な論理で【ヘスティア・ファミリア】に――強引に――加入させられたランテは涙ながらに主神を恨んだ。そんな彼女にヘスティアも同情した。
アルテミスは眷族と共に宿で居を構える予定で、それから長期滞在できる場所を決めていくという。
ダンジョン内で獲得したものはランテの裁量で自由にして良いと団長から言いつかる。せめてもの詫びとして。これには主神（アルテミス）も反対しなかった。
【アルテミス・ファミリア】が引き上げていく後ろ姿をランテが血の涙を流さんばかりの形相で見つめていたことは全力で無視した。あまりにも怖かったので。
それからユーカリンは部屋の後片付けを淡々とこなしていく。
彼女は物事に動じない鋼の心でも持っているのか、新しい眷族に対して何も言わなかった。ヘスティアからすれば何も言わない事が逆に怖く感じてしまった。
本当に何を考えているのか分からない。それくらい表情が読み取れなかった。
（そう思っているのはボクだけで、実は物凄く同様とかしているのか

な？　ずっと表情に変化が無いのが怖いんだけど……）

逆にランテは不平不満を早速表してくる。表情がコロコロと変わるので、こちらの方が親近感がわく。

まずは仲間が追加されたことを喜び、それからランテを気遣う。

期間限定だとしても急な話だ。食事で気分を落ち着けようと進言する。すると意気消沈したままではあったが頷いてくれた。

「……ところで君は猫人（キャットピープル）かい？　肌が浅黒いから女戦士（アマゾネス）とのハーフにも見えるんだけど……」

「肌は単なる日焼けです。地上で活動する事が多いので」

（そういえば……。ダンジョンは地下だもんな。日の光りを浴びない眷族はみんな不健康そうだ）

本人は少し女戦士（アマゾネス）かも、と思った事はあった。しかし、元々は色白だった。【ファミリア】で活動を始めていたら――日焼けの影響か分からないけれど――褐色気味の肌になっていた。

種族は虎人（ワータイガー）。

荒々しい毛並みにより獅子とも評される金色の髪の毛は首元までしかない。これは狩りの邪魔になる、と自分の事を棚に上げたアルテミスが育ての親としての権利を行使して切ったためだ。

放っておけば腰まで伸びるが本人は長さに拘っていなかったので定期的に髪形を整えられるようになった。それも主神自らの手で。

出自を知る仲間から羨ましがられる事が多かったが恨まれることは無かった。

ランテはユーカリンに話しかけた。すると無視するかと思いきや、淡々と受け答えを始めた。

機嫌がいいのか、悪いのか分からないがアルテミスはランテに任せてみる事にした。

翌日、早速身支度を整えたランテと共にダンジョンに行くように頼むと素直にユーカリンは応じた。

今は一つずつ確認するようにしないと不安で仕方がない。どうしてか、そう思ってしまう。

元々は寝言が酷くて不眠症に陥らせた自分が悪いのだが――

†

初めてパーティを組むことになったユーカリンは始終大人しかった。ランテから見てもそう思うほど。

手続きは難なく済んだが違う【ファミリア】と行動を共にするとは思っても見なかった。

ため息をつきつつユーカリンの実力を確認するため、上層でモンスターを狩る事にした。

ランテの実力であれば十八階層よりも下に挑戦できるが、いきなり下層に行くのはさすがに躊躇われた。

（ユーカリン・ナナツタエ。近接戦を得意とし、魔法は使えない）

対するランテは遠距離攻撃を得意とする。しかし、今回は近接専用の武器を用意した。

基本的に状況に応じて戦い方を変える。特筆すべきは高い『敏捷』を生かした戦術である。

上層では効果を発揮することは無いが、逃げ足には自信がある。

（へー。二刀流……。防御は捨ててるのか）

ユーカリンの様子を見ながらモンスターを倒し、魔石やドロップアイテムを回収する。

見ている限りだと問題があるようには見えない。

戦い方も普通だ。

仕事の時はまともに見えるだけ、ということも考えられる。

対するランテは武器の他に肉弾戦も得意としていて、蹴り技も披露する。後はモンスターの頭を掴んで壁に叩きつける荒々しい戦法も行う。

野生児と言われるだけあり、戦法に拘らず、あらゆる状況下でモンスターを倒す事を目的としていた。さすがにアルテミスも同じような戦法を取る事は無い。

【ランクアップ】した時に神々から賜れたランテの二つ名は【猪獅】という。

「この階層は大丈夫そうね。十階層まで降りられそう？」

「……はい」

欠伸(あくび)をしながら答えるユーカリン。少し眠そうだった。
不眠症の影響が抜けきらず、眠くなりやすくなっていた。しかし、ちゃんと熟睡も出来ない。そのせいで戦闘に際し、意識が散漫になりやすくなっていた。だからこそ、早めにダンジョン攻略を切り上げて神が『あるばいと』に言っている間に眠りにつく。
ユーカリンが日中、何の感情も見せないのは眠る事ばかり考えていた為でヘスティアに対して恨みがましい気持ちは薄かった。

#2―05　オネイロス

昼間に眠ると夜間目が冴えるものだ。

【アルテミス・ファミリア】から――強引に――出向してきた虎人（されてしまったワータイガー）【猪獅（カリュドン）】ランテと共にダンジョン攻略に勤しむユーカリン・ナナツタエ。

七層以降は戦闘をせず、ランテの補佐に回っていた。これは単に実力が足りないからで、ギルドのアドバイザーからも階層制限を受けていた。

（降りられるけれど戦えるわけではない……。うん、間違ってないけど……）

仲間としてはどうなのかな、とランテは疑問を抱かないわけではなかった。

見ず知らずの眷族と共に冒険することになったのだから仕方がない。

ランテは資金稼ぎに邁進し、ユーカリンは安眠を得るための努力をした。

人知れず眠りにつく頃、目が冴えたユーカリンは明るい街中に向かう。明け方近くなると人影も少なくなるが、今の時刻は様々な冒険者達で賑わっていた。

飲食店のみならず、娼館が立ち並ぶ南方の区画も――

歳若い女の子であるユーカリンは南方に用はなく、適当に開いている店を回った。

本来なら性質の悪い冒険者が大勢行き交い、時には乱闘。時には闇討ちも起きるような治安が決していいとはいえ時刻だ。その中を平然と進めるのは幼き日に両親が夜の仕事に従事する時、抱きかかえられていたことが――多少は――関係していた。

夜の喧騒は彼女にとって懐かしいものである。決して嫌なものではなかった。

闇派閥（イヴィルス）の知識は全くないがロクデモないところというのは感じて

いた。

（……両親が死んでからようやく働きに出られると思った矢先に【ファミリア】が潰された）

出先を挫(くじ)かれたユーカリンにとってお先真っ暗な状況だった。その時、優しい主神によって今の【ファミリア】を紹介された。

今から思えば前の主神はそんなに悪い神様には見えなかった。

どんな【ファミリア】でどんな神様で、誰に滅ぼされたのか。そして、自分はその復讐をするべきなのか。

ユーカリンは暇つぶし程度でそんなことを考えていた。

（……オネイロス様……）

言葉を交わした数こそ少ないが印象としては優しい神様だった。悪いのはきっと――眷族の方だ。

事実、様々な神は率先して眷族をけしかけたりせず、本拠(ホーム)にどっしりと構えている事が多いという。――ユーカリンの知る限りの情報では。

神達の目的は『娯楽』を得ること。善も悪も共通して娯楽を得る為に争い続けている。

ユーカリンが最初に仕えた神も何かをしろとは命令しなかった。自分が知らないだけかもしれないけれど。

†

零細【ファミリア】だったのかは覚えが無いが、犯罪を主としている事はなんとなく理解していた。そんな【オネイロス・ファミリア】に居た両親はどういう人達だったのか。

善悪の分別がつかないまま育ったユーカリンには窺い知れない。

物心ついた時には多くの人達に囲まれ、様々な知識と技術を教わっていた。

（……お腹が空いた。ここしばらく食が細かったっけ……。少しは食べないと力も出ないか……）

とある酒場を見つめながらユーカリンはお腹をさする。

まだ閉店するには余裕があるようで数人の冒険者が飲み食いしていた。

手持ちの資金を確認し、入店を決意。
「いらっしゃいませー」
愛想の良い猫人（キャットピープル）の店員が出迎えてくれた。
広い店内にはテーブル席とカウンター席があるが、朝方ともなると客足が少ない。その中でカウンター席を選ぶ。
酒場の名は『豊穣の女主人』という。
メニューを確認し、軽めの定食を注文する。
（値段は少し高めか……。今の時間帯なら開いている店も限られているし、仕方ないか）
他の店があくまで数時間はかかる。それを律儀に待っている精神的余裕は無かった。
気持ち的に早く何か食べたい。それだけだった。
一人で外食するのは初めてではないが朝方は夜間とは違った雰囲気を感じる。
打ち水こそないが泥酔した客があちこちで眠っていたり、商品を届けに商人達が行き交ったりしている。
「お待たせいたしましたニャー」
「どうも」
お腹に優しめのパンを主体にした総菜の数々。肉類などの胃に重く来るものは避けた。それと温かいスープ。
それらを料理しているのが巨漢の女ドワーフ『ミア・グランド』だ。
「店主、店はまだやっているか？」
ユーカリンの隣に座した人物が玲瓏な声で尋ねる。
青く瑞々しい長い髪を靡かせる神アルテミスであった。
狩猟を生業（なりわい）とする【ファミリア】の主神は朝早くから自己鍛錬の為、早起きであった。
神は鍛錬するような存在ではなく、仕事は全て眷族が行（おこな）う。それなのに暇を持て余しているせいで、一般人と同じように身体を動かすことを良しとする。
「もうすぐ閉めるよ。食べるなら早く注文してくれ」
「うむ」

「……おはようございます」
会話が終わるのを見計らいユーカリンは挨拶した。するとアルテミスは見知った顔に気づいて返礼する。
不変ではあるが飲食しないわけではない。神とて下界の食物には興味があった。
話しかけられるかと思っていたがアルテミスは始終黙っていた。そして、料理が来た後も黙々と食事を続けた。
話題も無いのでユーカリンもゆっくりと味わった。その後にアルテミスの隣に座るのはガタイの良いドワーフの冒険者だった。
「その身体で椅子が良く壊れないな」
アルテミスの言葉に訝し気にドワーフは眉根を寄せたが何処かの神だと分かると急に恐縮しだす。しかしこれはドワーフに限った話ではない。
下界に住む冒険者や住人の多くは神に対して畏敬の念を抱く。それゆえに手を出そうとする者は――例え荒くれ者であっても――滅多にいない。それが【ロキ・ファミリア】や【フレイヤ・ファミリア】であっても。
「どこの神かは存じませんが、この店の椅子は結構丈夫なんじゃ。儂も長く通っておるが座った程度で壊れた試しがない」
「そうか」
「ご注文を承りますニャ」
早速猫人の店員が話しかけてきた。
ドワーフの見た目はダンジョン帰りの汚らしい格好だがアルテミスは黙っていた。むしろ、食事に意識が向いていた。
いちいち細かい事を気にしない性格かもしれない。

†

客が集まれば会話が弾むものだがユーカリンの周りは凪の様に静かだった。聞こえるのは咀嚼音くらいだ。
食が細いせいで少しずつしか食べられないユーカリンと違い、アルテミスとドワーフは割合しっかりと食べていた。特にドワーフの分量はアルテミスの三倍近くある。それを巻き散らすような荒々しさ

を出さずに丁寧に食べる様子は――周りにとって――意外に見える。
アルテミスは処女神ではあるが男に触れられないわけではないし、近くに居てはいけない規則も設けていない。交際を禁じているだけだ。だから口を利かない事も無い。
食事が静かなのは外敵に悟らせない為に身についたもの。
（……一人で食事をすることになってしまった。つい小腹が空いてしまったとはいえ、後で怒られてしまうな）
そう思ったが隣にヘスティアの眷族が居るので大丈夫か、とアルテミスは軽く思った。
神が単独で歩く回る事を団長のレトゥーサは快く思っていない。寧ろ心配する。
普段であれば三人も集まれば会話が発生し、賑やかになるものだが――黙って食べ続ける景色に店員たちは驚いていた。
無理に喋らなければならない規則は無い。それでも神を交えての食事が無言というのは経験が無かった為に奇異に映っていた。
「……冒険者なのにこうも食事に違いを見せるか」
ふとアルテミスが言葉を漏らした。
ユーカリンとドワーフの食事量と食べ方をちらりと見た感想だった。
「お主は倹約でもしているのか？」
「……いえ。あまりたくさんは食べられないだけで……」
隣のドワーフのようにたくさん食べろと言いたい気持ちがあったがユーカリンの身体は小柄だ。小人族ではなく人間の少女なので無理強いは出来ない。
自分の団員の事を思い浮かべると毎日狩った獲物で飢えを凌いでいる姿を思い出し、ついもっとたくさん食べてほしいという気持ちが湧いてしまう。それならオラリオ内で食事をすればいい。
（オラリオの内と外を行き来する手続きが大変だから頻繁には利用できない、という話しだったな）
アルテミスはドワーフの方に顔を向ける。
健康的で実に羨ましい。肉体的にもがっしりしていて強そうだっ

た。

【ファミリア】を表すエンブレムが何処かに無いか、つい探した。それはすぐ相手方（ドワーフ）が訝しむのに気づいた為に苦笑を見せて食事に戻った。

（……私は何をやっているのだ。男どもが居る中で……）

（見たことない神だが……。敵対【ファミリア】か？）

「アルテミス様～、アルテミス様～」

自分を呼ぶ声に気づき、アルテミスは初期の目的を思い出す。つい食欲に負けてしまったが元々は団員達に何も言わずに散歩に出ていた。

急いで料理を平らげ、会計を済ませた後は駆け足で戻った。その素早さにユーカリンは驚いた。

（あれが狩猟を司るアルテミス様とは……）

と、ドワーフの冒険者ガレス・ランドロックは感心しながら食事に意識を戻す。

対するユーカリンは大急ぎで食べる神の姿に呆気に取られていたが、すぐに意識を現実に戻すと席に置き去りにされた武具に気づく。

それはアルテミス愛用の弓だった。ドワーフに取られように自分の側に移動させて食事を続ける。

†

食事を終え、会計を済ませたユーカリンは忘れ物を届けようと思う頃にはアルテミスの姿は無く、何処に行く予定だったのかも知らない。

今は彼女の眷族と共に行動しているので後で聞いておく事にする。

それらを黙って考えて弓を背中に背負おうとすると食事中だった筈のドワーフに腕を掴まれた。

「神の武具に手を出すとは……、お主はあの神の眷族か？」

「違いますけど。眷族の方とは知り合いなので届けようかと」

物取りと間違えられたのであれば仕方がない。それを伝えても信じてくれなければ逃げるしかないし、逃げると後々厄介な事態になる。

ただ、真っ当な冒険者であればそれで済むがガレスの事を知らないユーカリンは相手が怪しい冒険者であった場合は力ずくで逃走を選ぶしかなくなる。

神の武具を先に手に取ったのは自分だから。しかし、振り払おうとしたのだが、全く動かない。

相当な力を持つドワーフだと判断する。

「何ニャ？　ケンカかニャ？」

「単なる言いがかりです。……離してくれませんか？」

ガレスとしても自分が届けると言って預かろうとすれば今度は自分が物取りと見做される。つい腕を掴んでしまった事を後悔しつつも離してよいのか、と迷ってしまった。そこに店員の指摘で引くに引けなくなった。

はたから見れば孫の玩具を取り上げようとするお爺ちゃんに見えなくもない。それだけ両者の間に歳の差を感じさせる。

ドワーフは見た目では分からないが若いうちから年寄り臭い。この見た目で十代だという事もある。

「ここはミャーが預かるからケンカはやめるニャ。……ミア母ちゃんにどやされるニャよ」

店員のアーニャが二人の仲裁に加わる。

ガレスも彼女なら任せてもいいと思ったがユーカリンは機嫌を損ねたのか、武器を離そうとしない。少し意固地になっているようだ。

口を尖らせるユーカリンにアーニャは頭を撫でたりして宥めにかかる。そうしないとミアの怒りが降り注ぐので。

（幼いながら敵愾心は一人前じゃな。儂を前にしてその態度……。嫌いではないぞ）

大人気なくユーカリンを睨みつけると相手も睨み返してきた。

それに満足したガレスが笑うところに忘れ物をしたアルテミスが大急ぎで走ってきたのがユーカリンの視界に映った。

それも怒りの形相で。

「そこのドワーフ！　幼子（おさなご）相手になにをやっておるのか！」

確かに自分は幼い子供だ、とユーカリンは納得した。

冒険者としての矜持は特段に持っていないので年齢を指摘されても気にならない。
「神の武具を盗ろうとしておったから掴み合いになっている所じゃ」
「そやつは私の知り合いだ。……そんな武具で諍いを起こすな」
怒りから優し気な声色に変わるアルテミス。
ガレスとユーカリンが強く掴み合う手を撫でて離そうとした。
アルテミスが扱う武具は眷族が用意したものが殆どである。神本来の武器を安易に持ち歩いたりはしない。それに――彼女の武器は市中に持ち歩ける程小さくない。

†

最後まで手を離さなかったのはユーカリンだった。元よりガレスに渡す気が無かったので。
幼いとはいえ冒険者に譲るのも癪ではあったが神の手前で大暴れするわけにもいかないし、この『豊穣の女主人』で暴れるのは【ロキ・ファミリア】の幹部であっても不味いと思うほど。
だからこそ引き下がれた。別の場所では――おそらく最後まで抗っている可能性がある、と自分自身が思った。
「すまんな、ナナツタエ」
「……いいえ。神様が忘れ物をすると若手はああいう強者に搾取されます。そうなれば……、お詫びの仕様もありません」
「……う、うむ。そうであるな。神として謝罪する」
正論を言われて反論できなくなったアルテミスは素直に頭を下げた。
大事に至らなかったとはいえユーカリンも冷や汗をかいていた。最悪、殺される程痛めつけられるので、と。
カウンターに戻った後、気が付くとドワーフの姿が無かった。どうやら帰ったようだと後になって気づくほど興奮状態にあったらしい。
（……あー、怖かった～！　なにあのドワーフ……。あれで盗賊だったら勝てないじゃん）
「ニャッハハ。【ロキ・ファミリア】の幹部相手によく頑張ったニャ。冷たい飲み物をどうぞ。ミア母ちゃんからのサービスニャ」

「……えっ？　ありがとう、ございます」
「……あれがロキの眷族（子）だというのか……。なかなか……」
武具を受け取ったアルテミスは店員にも騒動の原因として謝罪し、どこかに行ってしまった。そして、残ったユーカリンは客足が少なくなるのを眺めつつ時間を潰した。
小さな女の子が一人くらい残っていてもいいとミアからの許可が出て、ユーカリンは気持ち的に落ち着くまで店にいいことになった。
夕方からの開店に合わせて仮眠を取ったり買い出しに出かける者を眺めつつ、今日の予定を考えるユーカリン。
しばらく目的は無く、資金稼ぎ以外は平常通り。助っ人として来たランテについては特に気にしていない。
（……折角冒険者になったのに目的が無い。……アイズ・ヴァレンシュタインには当分勝てそうにないし……。ここのところは安眠も出来ている。気持ちよく眠れれば【剣姫】と戦わなくてもいいんだけどね）
レベル的にも勝てる見込みは無いけれど――
思い悩むユーカリンに近づくのは店員の猫人（キャットピープル）アーニャであった。
「もし暇なら戦い方を教えてやるニャよ。確かおミャーは駆け出しだったはず」
「そうですよ、すみませんね、無名で」
「まあまあ、卑屈になるニャ、なるニャ。折角この店で飲み食いする客ニャんだから長生きしてくれないと給金が増えないニャ。だからもっと強くニャらニャいと……」
アーニャとしてはサボる理由が欲しいだけだが、何となく気になってしまった。
無謀な冒険者が時折見せる輝きの様なものを。
（なにより、神様を謝らせたのは凄いニャ。……大抵の神様は我がままだし、絶対に非を認めない……。たまたまあの神様が素直なだけだったってこともあるニャけど……）
理由はどうあれ、珍しい光景を見せてもらった。そのお礼を兼ねて

声をかけてみた。
それと――【ヘスティア・ファミリア】の眷族とは浅からぬ付き合いがある。それもまたアーニャの行動の原因とも――

†

酒場の店員なのに戦い方を教えると言った事にユーカリンは特段の疑問は抱かない。元冒険者であれば腕に自信がある者の一人や二人いてもおかしくないし、見た目から強弱を判断するのは不可能に近い。
金がかからないなら教授の剣を受けてもいいかな、と。それに安眠確保が目的で資金稼ぎはついでのような暮らしが続いていた。
特段の目的が存在しない。
冒険者になった後のはなってから決める。そして、それを果たした今は真っ白だった。
安眠目的でアイズ・ヴァレンシュタインを襲撃したものの事態が解決すればそれで良し。そんな気楽なものだった。元より殺害など出来るとは思っていなかったし、そこまで相手を憎むに至っていない。
――居なくなればそれはそれで良い、という程度。
【オネイロス・ファミリア】に居た頃、人生の楽しみは冒険者となる以外の事は殆ど知らないし、教えてもらった事もない。なにより様々な事を知る前に全てが消えてしまった。自分達の居た【ファミリア】が悪の組織だったというだけで。
ユーカリンにとっては生まれた場所以上の意味は無い。
唐突に全てを奪われた形だが、それすら自覚できずに今に至る。
（……あの人も私に物事を教えようとして消える人かな……。そうだとすると【ヘスティア・ファミリア】は犯罪組織になってしまう）
眷族が自分一人の【ファミリア】のようだから唐突に潰されることは無い筈だと思いつつも【ロキ・ファミリア】に因縁をつけた形なので潰される確率は――やはり――高い。
そんなことを考えて唸っていると共に冒険するようになった虎人（ワータイガー）のランテが不思議そうな顔つきで見つめてきた。
「……どうしました？」

「難しい事を考えてしそうな雰囲気があった。君ってお気楽な眷族だと思ってた」

「それは心外です。私だってものを考える人間（ヒューマン）ですよ」

今日も今日とてダンジョンでモンスターを倒して日銭稼ぎ。

毎日の日課のように潜っていたけれど何が楽しいのか理解できないまま過ごしていた。今回はランテという仲間を得て一人では大変そうな下層を目指す。

彼女はレベル2（ツー）なので楽が出来るが、だからといって見物だけしているわけにはいかない。自身も今は冒険者。モンスターをたくさん倒して【経験値（エクセリア）】を得なければより深くには潜れない。

深く潜れると魔石の価値が上がり、換金が楽しみになる。

お金が増えれば良いアイテムと武具を購入できる。

（手製の外套など無いも同然。でも、私以上に薄着の人も居るんだけど寒くないのか疑問だ）

女戦士（アマゾネス）ならいざ知らず、どう見ても人間（ヒューマン）にしか見えない冒険者がほぼ半裸装備でダンジョン探索をしているのを見て驚いた。

中にはボロボロの戦闘衣（バトル・クロス）のまま。あれはいったいどういう意味があるのか、と。

単なる貧乏とも思えない。いや、貧乏なだけというのもあるかもしれないけれど。

「ランテさんは防具にこだわりはありますか？」

「んっ？　丈夫で動き易ければ……。弓兵（アーチャー）は基本、重武装しないからね。身軽な方が戦いやすい」

肉弾戦をする弓兵（アーチャー）なのに、と疑問を呈しそうになった。

確かにランテは弓を使うが弱いモンスター相手であれば肉弾戦だけで事足りるし、矢の節約になる。

元々神アルテミスから戦い方を教わった眷族だ。その実力は他の団員が妬むほどに高い。――というよりアルテミスが母親代わりとして育てた事も関係する。

話しながら三階層まで降りてモンスターを倒す。

戦闘自体は地味に進める。魔石の回収を終えたら次の階層へ。そ

の単純作業のような事が日々の生活の糧となる。

†

【アルテミス・ファミリア】の他の団員は二〇階層より下に降りて活動する。それが出来る実力者揃いだ。

それに対してランテは上層に居る。これについては楽が出来るから今は気にならないと宣った。

ダンジョン攻略より市井巡りが目下の目的であり、ランテは女性として出会いを求めていた。神の目も今は無いので。しかも、そう考えているのは彼女だけでは無かった。

折角迷宮都市オラリオに来たのだから、と浮かれている眷族が約半数。意外と多い事に団長のレトゥーサも頭を痛めている。

「いつ死ぬか分からない冒険家業より普通の幸せを味わえる人生も良いではないか、と思うのよね。別にダンジョン攻略は義務じゃないし。アルテミス様も無理強いは求めていない」

最低限の規律として男女の交流――主に恋愛――を禁止にしているだけ。

男嫌いというわけではない。不届きな男が嫌いなのは事実だが。

しかし、会話している場所がモンスターの蔓延るダンジョンだ。ここに色気は介在しない。

聞けば大体の事を答えるランテだが自身の【ファミリア】の事は小出しにする。そこはきちんとしているな、とユーカリンは感心していた。

あまりベラベラと喋るようでは重要任務は任せられない。

二人はそうして攻略を進めていくと何組かの冒険者の姿を見かける。仲が良かったり、事務的だったり――

その中でも明らかにがらの悪そうな冒険者がよく目につく。

全ての【ファミリア】が健全なところではない。中には非合法な【ファミリア】もあるし、ギルドに危険人物として目を付けられている冒険者も居る。

規則の裏を掻い潜った方法も中にはあり、自分の仲間を奴隷のように扱う事も。

「……あれは【ソーマ・ファミリア】だね。酒の為なら何でもする。弱い者いじめが多いけれどギルドとして取り締まる事が出来ない手合いだと聞いている」

「……私はそんなことを知っているランテさんに驚きます」

身を隠した二人はそんなことを話していた。

ダンジョン攻略する上で他の【ファミリア】に見つかるのは意外と危険で弱小はだいたい隠れていた方がいいと神から教わる。だが、ヘスティアはそういう冒険者としての基本常識を知らない神様だった。

ユーカリンは既に色々と教わっていたので特に重要視する事も驚きも無かった。

事務的にダンジョン攻略できる知識と実力はヘスティアの想像を何倍も上回っている。――でも、まだ駆け出しなのは嘘偽りのない事実だ。

†

本日の稼ぎについてユーカリンは特に制限を設けていない。あえてあるとしても安全にモンスターを狩るという一点くらい。

ランテという協力者がいる今はもう少し無茶な行軍も視野に入れてもいいかな、という思いはある。

一人で潜ると討伐と回収と逃避を一度に考えなければならない。仲間が居る場合はある程度の分担が出来る。手間を一つ減らすだけでも身体的にも精神的にも負担のかかり方が違う。

（……それにしても弓兵なのに荒々しい戦い方をする人だな）

ランテは背中に弓と矢筒を背負っているけれど、ほぼ肉弾戦。それが出来るように手甲を両手に装備している。

虎人だからなのか、獣じみた威嚇からの攻撃は仲間でなければ逃げ出したくなるほど怖かった。

戦闘は荒々しいが警戒感も人並み以上に持っている。特に他の冒険者に見つからないように潜伏する回数はかなり多く、臆病者のようにさえ思われる。けれども、諍いを起こさない為の必要な措置だと神から教わり、それを実践しているだけだった。

「私らも敵が多いからね。……あえて言えば【アポロン・ファミリア】

とか【アレス・ファミリア】とか」
「……【アポロン・ファミリア】……。アルテミス様と似たような紋章（エンブレム）ではありませんでしたか？」
盗賊系【ファミリア】だった【オネイロス・ファミリア】では敵対する【ファミリア】の紋章（エンブレム）は必ず確認するように、と主神から団員へ徹底された指示を受けていた。幼かったユーカリンも興味本位で見せてもらった事がある。
特に有名どころは忘れないように、と。
（【ヘスティア・ファミリア】は竈（かまど）に関連したもの。【アルテミス・ファミリア】は月と弓矢でしたよね。【アポロン・ファミリア】も確か月と弓矢だった筈……）
「そうらしいね。しかも仲が悪い。私らも好きな【ファミリア】じゃないんで敵で構わないんだけど……。その辺りの事は主神様に直接尋ねな。他の冒険者が来る前に移動するよ」
「はい」
姉後肌なのか、ランテは率先してユーカリンを導いていく。それに文句を言わずについていくユーカリン。
負担の少ない戦いが出来れば彼女（ユーカリン）は特に文句は無かった。

†

ユーカリン達が冒険者として活動を始めている頃、【ミアハ・ファミリア】が経営する『青の薬舗』において、ある冒険者が眷族ナァーザ・エリスイスの介護を受けていた。
雨が降りしきる日に行き倒れていたケガ人。困っている者を見ると放っておけない主神ミアハによって運ばれ、世話をすることになった。
その者がどんな素性なのか関係なく、神はただひたすらに下界の者を歓迎する。ただ、それが眷族であるナァーザにとって物凄い負担になっている事にも気づかないのが玉に瑕。
（あれから随分と経つ……。少しずつだけど食事をとるようになった。……どうして真っ黒な冒険者（ブラックリスト）なのに面倒を……）
犬人（シアンスロープ）のナァーザは屋根裏に用意した部屋に居る者に定期的に食

事の用意と包帯の取り換えをしていた。正直に言えば厄介な客人だ。早く出て行ってほしい。そういう気持ちが日に日に強くなる。

生気を失ったような冒険者は言葉を発さず、呻くような声しか出さない。喉が潰れているのかもしれないけれど暴れ出すことは無かった。

（やっぱり、例の事件の犯人としか思えない。……仕方なく世話をしている私の身にもなってほしい）

身体のところどころを包帯で巻いているが一番ひどいところは手と顔だ。それ以外は軽傷だった。

何者かと戦い。負けたのか、それとも――

とにかく命からがら逃げ伸びた印象が強い。だが、彼女は駆け出しとは思えない。その理由は所持していた武具が業物だったからだ。推定レベルは3か4ではないかと。

レベル2であるナァーザにとって彼女が暴れたらどうしようもない。押さえつける自信も無い。

客人はエルフの女性。しかし、特徴的な長く尖った耳は片方が無かった。取り落とされたばかりのようで出血していた。後々、彼女を見付けた現場辺りをくまなく捜索してみたものの耳は見つからなかった。

そして、もう一つは千切れかけた右の手首。これは暴れ出すのを防ぐためにあえて切り離して保存してある。何かあっても武器を持って暴れ出したり、逃げ出されてもいいように。

もちろん、その手首は別の場所に隠してある。

（……こういう保身のためにも使える。あの子は先見の明があったかも）

接合や再生は【剣姫】の例があるので問題は無い。残る問題は彼女自身ということになる。

暗殺者なのか、単なる怨恨か。正直に言えば関わり合いたくない、と。

ポーラ――いや、ポラン・ブーニディッカを殺害したのは間違いなくこのエルフだ。確信と言ってもいい。

どういう理由か聞くべきか、それとも他人事として無視するか。その判断は今もって決まっていない。

――お得意様を殺すような冒険者は特に嫌いではあるが――主神が助けよ、と言ったから面倒を見ている。

ナァーザ自身も私怨で手を汚したくなかったので仕方なく――今に至る。

ヴェルゼッタ・オリンピア
#3―0A　プロローグ

遭遇

ラキア王国の進軍により小国が滅びた。――住民が皆殺しに遭ったわけではないが地図の上では消滅した。

国家系【ファミリア】の主神アレスによる蹂躙。

強力な兵を持たない国は無力である。敗北の原因となる代表格が【神の恩恵（ファルナ）】を授かった眷族達で構成された軍隊の存在だ。

何の恩恵を持たない人間にとって抗えない敵――

もう一つは彼らが持つ武器『魔剣』である。

一振りだけでも街を焼き払う力を持ち、王国（ラキア）はそれらを持って数多の国々を支配下に置いていった。

――とはいえ、魔剣は役目を終えると砕け散る。その生産もここしばらく出来ない状態だという。

頼りは屈強な冒険者だけ。

周りの国々に対し、大きな顔をしてきた王国（ラキア）も未だに攻められない都市がある。

世界の中心と謳われている『迷宮都市オラリオ』だ。

人外魔境と揶揄されている都市の攻略こそが軍神アレスの悲願である。だが――

アレスは猪突猛進の男神（おがみ）であった。

それと学習能力が欠如している――と揶揄される程にバカであった。

獅子を彷彿とさせる金髪に精悍逞しい肉体を持つアレスはここしばらくオラリオに敗北を喫していた。既に年中行事のように。

多くの兵士達（眷族）もやめた方がいいとさえ思うほどの負けっぷり。

しかし、こんな国に敗戦の憂き目を見た者は起死回生の一手――または復讐などを胸に秘め、オラリオを目指していた。

平和に暮らしていた小国の姫として暮らしていただけなのに、唐突な蹂躙劇。

全てを奪われた彼女は虜囚となる事を否定し、一人無謀な旅路を敢行する。

元々気が強く、負けず嫌いであった。街を焼いていったラキアに復讐してやると豪語するも遠大な旅路に今は後悔を覚えていた。

奇麗な身なりは既に無く、道端の草を食べては腹を壊す。獣に追われたせいで髪の毛はボロボロ。ケガも酷い。

途中で見つけた森に身をやつすも空腹と疲労で何度も死にかけた。

もっと効率的に事を進めればいいのに、という後悔の念は浮かぶのだが自分に負けたくない一心で払い除けてきた。

それからどれくらい経ったのか覚えが無くなった彼女はある集落にたどり着く。

そこは王国（ラキア）の目から逃れた森の妖精『エルフ』の隠れ里――

照り付ける太陽や極度の脱水で視力が弱まり、周りはほとんど見えていなかったが何者かの気配は感じた。

それからしばらくどう過ごしていたのか分からない。ただ、とても温かな時間を過ごした事だけは覚えている。

「オラリオに向かうのですか？」

「……どうしてか……そこに行かないと……」

ある日、側に控える従者らしき人物に彼女は答えた。

胸に秘めるのは燃え盛る復讐心。ただし、それが何処に向けられてのものなのかは忘れてしまった。

大きな力に抗うためだったような――

とにかく、復讐を果たすためにはオラリオに行かなければならない。そして、そこで――

何をすればいいのか。

誰に復讐するのか、分からなくなった。もしかして、長い旅路に対する気持ちだったのかもしれない。

衰弱する彼女は淡々と言った。

「……私……負けるのが嫌なのですわ」

「……そう、ですか。しかし、そのお身体では……」
「この私に諦めの文字はありませんわ」
気丈に振舞おうとしてみても身体は既に限界であった。
あるのは強い意志と復讐心のみ。
それを無くせば自分は自分を保てないと自覚している。
「惨めになろうとも祖国を愛する気持ちは無くせない。そうですわ。私には取り戻さなければならない国が……。国が……」
振り上げる手は途中で止まる。
気が付いてしまった。
彼女は長い意識障害によって自分が何処から来たのか思い出せなくなっている事を。
覚えているのは自分の名前と強い決意。それ以外はあやふやで油断すると消えてしまう儚いものとなっていた。
（……愛する国……、そんなものが私にあったのかしら。ある筈よね……。そうでなければ誰に復讐しようとしているのかしら）
側仕えの従者は混乱した。
何処から来たのか覚えていない事とそれ（忘却）を告げた彼女の慰め方に。
暴れ出すことは無かったけれど、酷く落ち込んだことは理解した。
ある日、長い闘病生活で完治した視力を確認する為、隠れ里を案内してもらうことにした。
足腰は酷く弱っていたが手厚い看病に感謝の意を表す。元王族とはいえ今は零落した身だ。頭を下げる事に抵抗は無かった。
どこの馬の骨とも分からない自分を受け入れてくれた同胞（エルフ）に恩を返したい。けれども――
自分はそれを覚えていられない。
理由は単純で会いに来てくれる殆どの同胞の顔と名前はあくる日には忘却してしまうのだから。
「……ケガのせいか……、そういう呪いか……。いずれは自分の名前も忘れてしまいそう……」
「私達が覚えておきます」
「……ありがとう。この呪いに打ち勝てたらお礼に来たいけれど

……。自信が無いわ。これほどの不安も……、覚えている事はきっと……無いんでしょうね」

記憶に残るのは強い意志だけ。

もし、復讐を果たしたら何もかも失う気がした。故郷も自分も何もかも。

旅の目的すらも。

「どうしてオラリオに行こうと思ったのかしら？」

既に忘却の浸食は始まっている。早く目的地に行かなければここで朽ちてしまう。

旅の目的まで失えば生きている事自体が無駄になる。

従者は危機感を抱き、仲間を募って彼女の為に様々な物事を紙に記すことにした。覚えていること。聞いたことを。

目的地であるオラリオの事と冒険者と神の存在を。

「……そうですわ。私には倒さなければならない神が居ましたわ……。名前は……なんでしたっけ？　物凄く派手な奴だったような……」

「ここらだと軍神アレスではないかと」

「……あれす？　そう、あれす……。それが私の敵なのね」

名前を聞いても姿形が出てこない。印象すらも。

思い出そうとしてみたが無理だった。

そのアレスがどうして敵なのか、思い出せない。ロクでもない奴だと認識しておく。

（神アレス……。我らの同法の大切な想いを奪うとは……）

（なんとおいたわしや。……ここまでの執念を無くされたらこの方の全てが無意味になってしまう）

（……しかし、ここからオラリオまでは相当な距離があります。誰ぞ、馬車の手配を）

記憶を欠落しつつある彼女の為に側仕えの従者は忙しく走り回る。

そうと知らない深窓の令嬢の如き客人は奇麗な風景を見て回った。

それから一ヶ月は過ぎただろうか、親切なエルフの森の住人達によりオラリオ近くまで馬車で移動する事になり、多くの荷物を手渡され

た。
言葉少なく旅立ち、そしてすぐに彼らとの交流は霧散していく。
（……多くの親切な人たちが居た筈……、それらの事も私はもう忘れてしまっている）
途中まで突いてきてくれるエルフだけが唯一の友人のように。
記憶からは抜け落ちているが多くの出会いを記した手帳だけは無くさないようにしなければならない。ここには集落の全てが記されている。
旅に必要な事と目的がある。もし、思い出せない時は開くように、と毎日のように教えられた。
軍神アレスを倒すためにオラリオで冒険者となり、名声を上げる。そうすればいつかは復讐が遂げられる。
それとかの都市（オラリオ）には王族（ハイエルフ）の有名な冒険者が居るという。困ったことがあれば頼るべし、と手帳には書かれている。
残念ながら彼女の記憶には無い他人ではあったが――
『#3―01　ホワイトエルフ』へ

#3―0Z　エピローグ

決着

誰に復讐する為に冒険者になったのか、今ではどうでもいい問題だ。

自分にあるのは目の前の敵を倒す事だけ。

それすらも――

「貴女は誰ですか？」

剣を向けておいて誰も何もない。自分でもそう思うが質問しないわけにはいかない。

今まさに殺そうとしている相手、の筈なのだから。

だが、思い出せない。

記憶には自信がある筈なのだが――

「……アイズ。貴女が剣を向ける相手……」

首を二度、三度傾げさせて漸く思い出す。

アイズ・ヴァレンシュタインが殺す相手だ。いや、まて、と。

混乱する頭を振りつつ正しい答えを導き出す。

アイズは友達だ。

友達がどうして殺す相手なのだ、と疑問を覚える。

それに彼女は神ではない。眷族だ。そう、その筈だ。

「……はて？　私はどうして貴女に剣を向けているのかしら？」

「……鍛錬」

「鍛錬？　お稽古の事ですわね。……それにしては……、周りが土砂降りなのはどうして？」

曇天の空模様でどうして自分はこんなところに居るのか。

雷鳴が轟く中で全身を濡らして。

記憶が鮮明になるごとに不安と寒気が襲ってくる。

温かな日差しが立ち込める日は何処に行ったのか、と。

「良くわかりませんが……。帰りましょう」

「……うん。帰る場所は……分かる？」

「……ん？　んー、どこでしょう？　それよりも……私はいろんなことを忘れていますわね。……アイズ、アイズ、アイズ……」

友達の名前は憶えている。ならば、それを連呼して色々と思い出さなければならない。

剣を持っている。外は雨。今いる場所は何処なのか。

天気が悪いので人通りは無い。店はほぼ閉まっているところから商店街のどこか、というのは分かった。

数歩歩いてアイズに振り返る。するとそこには顔の分からない何者かが居た。

金髪である。身体つきは女性。武器は細身の剣。

ただ、顔は薄暗いせいか判別できない。

（……何者でしょう……。武器？　私の敵？）

軽く飛びのき、手に持つ武器を構える。

いや、どうして武器など持っているのか、と疑問を抱く。

自分は――

自分はどうしてここに居るのか思い出せない。

相手は何者で、こんな天気の悪い外に居るのは何故なのか。

（……こういう時は何かを読むのでしたわね。それにしても雨が激しいですわ。……寒い）

激しく地面に打ち付けられる雨の音。

目に雨水が入り、視界が閉ざされる。

何処かに行けばいいのだが、自分は今どこに居て、何をしようとし

――

自分は何者なのか。

頭の中が白く満たされる。

景色も音も消えていく。

少し前まで様々な色が混ざり合っていた筈なのに――

どうして今は――居心地が良いのだろうか。

（……幼き日の幸せな時間とはきっと……）

手から零れ落ちる武器――だったもの。既にそれが何だったのかは覚えていない。

白に満たされる最後の瞬間、確かに見た。見えた。
時間が巻き戻るように様々な景色が。
アイズと鍛錬を積み、様々な冒険を経験し、【ファミリア】の一員となって――
復讐の理由を思い出し、神（ヘスティア）と出会い、迷宮都市オラリオに到着し、様々なものに襲われ、馬車で移動し、親切な同胞に囲まれ、復讐を胸に秘め、誓い、祖国から脱出し、両親に謝罪し、戦争に敗北し、戦端が開かれ、宣戦布告を受け、そして――
幸せな家庭。両親の顔。自分の顔。様々な事柄を一気に思い出し、それと同時に消えていく。
轟音と共に。
気高く貴い種族の子として生を受けた彼女の一生は幕を閉じた。
己の旅の目的を思い出す事と引き換えに。
目の前で起きた光景を鍛錬相手である【剣姫】『アイズ・ヴァレンシュタイン』は理解できなかった。
驚きはあった。ただそれだけだ。見る事など不可能――
身体の前面部が焼け焦げた彼女（アイズ）に詳細を語る事など出来はしない。
声を上げて叫ぶことも無理だ。
あるのは事実としての事象のみ。
一人の冒険者が死んだ。アイズの目の前で。唐突に。
激しい轟音を聞きつけた住民たちはすぐさま応援を呼んだ。
この日を境にオラリオに住む多くのエルフ達の慟哭が続いたという。
忘却の【眷属の物語（ファミリア・ミイス）】は雷鳴と共に永遠に失われた。
『終幕』

#3―01　ホワイトエルフ

迷宮都市オラリオへの道は長くて険しい。馬車での移動途中に魔物や盗賊に襲われる事が多かった。

乗り継ぎを利用したとしても不安でたまらない金髪碧眼の少女は同胞（エルフ）の里から持たされた肩掛けのカバンを心の支えとし、必死に迫りくる災厄に耐えた。

無力極まりない事は百も承知だ。それでも目的地に行かなければ自分はここで終わってしまう。

後戻りはもうできない。後など既に記憶から消えている。

帰り道のない一方通行。

（もうすぐ。もうすぐオラリオ。その筈です。私はここに行かなければならない）

強い意志を胸に秘めるも不安の方が未だに大きい。

救いの手をいくつ失ったと思っているのか。記憶に残らないとしても実感はある。

自分のせいで多くの者が傷ついている事を。それらの恩義を忘れてしまう自分が憎くなる。

「こ、こんな私の為に……。ありがとう。……必ずオラリオに向かいます」

二つの馬車を潰し――その後、無事に逃げ延びている事を願いつつ――彼女は歩き続けた。

目的地であるオラリオまで道なりに進むだけ。ただ、何にかはかかる距離である。

証人の馬車を捕まえれば早いのだが、厄介な人員では目的地にたどり着く確率は減ってしまう、と。

知らない種族の馬車には乗るな、と強く厳命された。

（食料はモンスターを誘（おび）き寄せるから持てなかったけれど……。お腹が空いてきましたわ。せめて水だけでも……）

その水も途中で紛失した。大慌てで逃げ出したために。

あるのは書物が入ったカバン一つ。金目のものは無い。
何も持たなければ盗賊も深追いはしないと見ているが、最悪人身売買の業者に捕まる事を覚悟して。
（娼婦でもなんでもいいから目的地にさえ着けば……。私は強い子です。復讐の為なら何だってできるんですから）
意志だけ強く持ち、前を進む。
ケガを負っても諦めずに。
それが同族（エルフ）に報いる唯一の方法だと信じて。

†

それからしばらく飢えと戦いつつ歩き続けたが気力と体力に限界が来てしまう。
腹痛が酷い。幻覚も何度か見ている。
前に進んでいるのか、戻っているのかが分からない。
途中で血の跡に気づき、引き返すことも十を超えた。
通りかかる馬車をモンスターと勘違いして逃げ出してしまうほど彼女は恐怖と戦っていた。
（……オラリオは何処ですか）
何日か過ぎたころ、手持ちの書物を読む。定期的に読まないと自分は何のために生きているのか分からなくなるから。
ここには全てが書かれていた、筈だ。空腹により字も読みにくくなってきた。元より視力が安定しない。
頭を使わないと何もかも忘れてしまう。それだけが強く残っている。
ある時は空腹に負けて自分の腕を食べようとした。足も一本だけ残せばいいかなと思考もおかしくなっている。
這いずるように移動していると服は既に無くなっている事に気づいた。天気がいいし、モンスターも通らない。
大事なのはカバンと書物だけ。
いつしか草原に気が付いた。夢中で草花を食べていると思考力が戻り、酷く惨めな気分になる。
それと川を見つけた。何日ぶりに水浴びを下だろうか、と。

しかしそれも空腹と腹痛と眩暈でのたうち回る事、更に数日。

「……」

（……）

何らかの建物。大きな城壁のようなものが見えた。

それが何なのか、少女には理解できない。けれども、そこに行けば何かがあると思った。

高揚する気分とは裏腹に身体は限界を迎えていて少しずつしか進めない。

モンスターの姿は無いし、行き交う馬車を横目にただひたすらに進み続けた。

城門前に来るのに二日かかった。彼女があまりに異様なので誰も手助けできなかったらしい。

近づく事を躊躇わせるような悪臭が酷かった。

周りの様子がおかしい事に気づくも少女にはどうすることも出来ない。前にも後にも進めない。

夕方近くになり、城門前で力尽きていると何人かの人が近づいてきた。

「……ここまで這ってきたのか」

藍色の髪の麗人がズタボロの少女を見下ろす。

身体の一部が腐りかけていて無事な手にはボロボロのカバンが一つ。既に肩にかけられないほど痛んでいた。

彼らはギルドから派遣された警備隊で行き倒れを助けるような慈善事業は行（おこな）っていない。けれども、このまま放置することも出来ない。

（一体どこから来たんだ、こいつは……。このままだとあと数日の命というところか）

このまま放置して死ぬのを待つか。という薄情な気持ちは麗人には持ち合わせていない。

何らかの目的をもって迷宮都市オラリオに来たのだとすれば願いを叶えてやらなければならない。

見たところ日焼けの具合から女戦士（アマゾネス）という感じはしない。

亜人種（デミ・ヒューマン）の特徴である獣耳と尻尾は無い。
残るは小人族（パルウム）か人間（ヒューマン）。
髭は無いからドワーフは除外。
（両耳は獣に食われたのか。残るはエルフくらいだな……。それにしても酷い姿だ）
耳は奇麗に無くなっていた。這っている時に削れて無くなったか、食べられたのだと判断する。
性別は女性の筈だが痩せすぎて骨が浮き出ている。背中に模様は無かった。
「この紙の束を持ってろ。ボロボロになり過ぎて飛び散るおそれがある」
「そいつを入れるんですか？」
「まだ生きている。我が主神なら助けろと言っているところだ。ここまで来たものを拒んでは……」
寝覚めが悪くなる。
そう、麗人こと『シャクティ・ヴァルマ』は思った。

†

自身の責任をもって治療に当たらせ、持ち物を調べておく。
彼女が持っていた紙の束は既に限界を迎えていた。いくつかは失われてしまったが概ね格言が書かれている事は分かった。それと彼女の名前と他人に知らせる為の情報が。
何処から来たのかは分からないがオラリオが目的地である事は分かった。
「記憶障害……。なら、ここまで来たことも目的も覚えているかも怪しいな」
目的は復讐。神アレスにまつわるもの。それ以外は書かれていない。
本人に尋ねても覚えていないと言われる可能性が高い。
多くの助力があった筈だ。それらを失いつつオラリオにたどり着いたのは執念と言うべきか。
このまま死なせるのは偲（しの）びない。主神ガネーシャもそう言ってい

た。
（このオラリオには多くの商人がやってくる。それらに頼れない所から来たのか。そうでもなければ大体は相乗りするはずだ）
それが出来ない事態があり、彼女は一人で這い続けた。
並大抵の精神力ではできない。復讐とあるように執念を糧に生にしがみ付いてきた。そんな人間を放置し、黙って死なせていいものか。
冒険者に仕立て上げれば良い働きをするかもしれないし、別の道に進む可能性もある。
（……死なせるには惜しいな）
シャクティはそう思い、決断する。
読み取れる文面の中には『彼女を救ってほしい』と書かれていた。
誰かが彼女の為に言葉を紡いだ。肌身離さず諦めなかった者を見殺しに出来るほどシャクティは現実主義な冒険者ではない。
生きる事を諦めなかった冒険者はそれだけで勝者だ。
治療院の手を借りつつ養子にでもしようか考えてみたが、失う悲しさを思い出してしまうので諦める。
その代わり一つわかった事があった。
彼女の種族はエルフだ。――それだけなら良かったと後々気づくことになるが、命をつなぎ留められたことに今は安堵する【ガネーシャ・ファミリア】団長であった。

†

ケガが完治した頃には季節も移り変わり、肌寒さが気になる。
大勢の眷族を擁する【ガネーシャ・ファミリア】の助けを借りて命を吹き返した少女は団長シャクティと共にオラリオの中を見物していた。
見た目は歳若いのだがエルフは長命である。凡(おおよ)そでは五十歳と言われても驚かない。
実際のところ歳は覚えていないらしいが書かれている情報が確かなら十四歳だ。それからどれだけの月日が経過したかは分からないけれど。

人間（ヒューマン）であるシャクティはエルフの生態に詳しいわけではない。団員からの情報と総合して判断しているに過ぎない。

それでも不確かなのは彼女の存在にある。

金髪碧眼で色白の肌を持つエルフ。それ自体はオラリオでも珍しくない。

記憶障害のせいで物覚えが悪く、相手の顔や名前をすぐに忘れてしまう。それでも失わないのは言葉だった。日常会話に今のところ支障はない。

杖を突きながら危なっかしい足取りで向かうのは事前に面会の許可を申請した他派閥の【ファミリア】だ。

多くの【ファミリア】は基本的に競い合う敵同士。またはそれに近い付き合いだ。

もちろん、合同でダンジョン探索も行（おこな）うけれど。基本的にはなれ合いはしない。皆『らいばる』という事になっている。

「人がたくさん居るんですのね」

「たくさん居るぞ。それより足はまだ痛むのか？」

「そうですわね。……歩くと痛みますわ。どうしてでしょうか？　身体中が痛いと言っております」

疑問に思っていても彼女の顔は不思議そうな、無邪気な子供の様な明るさがある。

飢えに負けて食い千切った個所があるところから、身体の多くの傷は自身が付けたものだと推測している。

今はモンスターに襲われた、という事で誤魔化しているが、そうではない気がした。

事実、今のように出歩けるまでに自分の腕に噛み付く事が何度もあった。それも寝ている時に多い。

二の腕の一部が腐って骨が露出していた、というのは自分で噛み千切った為に出来た傷に他ならない。

今はシャクティの配慮で多くの傷は塞がっているが、もし――

（……いや、推測は止めよう。彼女は強い精神力をもってオラリオに来た。今更事実を突きつけるのは不毛だ）

それに回復した今は死に損なっていた時が嘘だと思える程に明るい。
自身のケガもしっかりと受け止めている。これ以上がっかりさせる事も無い。
シャクティの見てきた印象では不思議な人だと思った。

†

彼女を外に出すにあたりフードを被ってもらった。おそらくとても目立つから。
耳が復活したとはいえ、非常に美しい顔は騒ぎの元だと判断した。
エルフ自体は珍しくない。ただ、何となくそうしなければならない気がした。
「ここが目的の【ファミリア】だ」
「……まあ、お城みたいですわ」
ニコリと微笑む彼女。
シャクティは早速門番を務めている団員に声をかける。
ここはダンジョン探索系において有名な【ロキ・ファミリア】の本拠（ホーム）『黄昏の館』である。
通常であれば他派閥の【ファミリア】を通すことはしない。これは大手に見られる傾向だ。
【ガネーシャ・ファミリア】は冒険者ギルドの要請で色々と仕事を受け持つことがあり、他派閥だろうと時には検問に赴く。さすがに叩き潰せるほど強力な存在ではない。
手続きを終えて館に入ると多くの団員達が出迎えた。その光景に目を輝かせる少女。
まるでお城みたいと感想を述べたばかりではあるが改めて言葉が真実であったと確信する。ただ、周りの人々の顔は険しかった。
歓迎というよりは敵意に満ちているような、嫌な気持ちにさせられる。
（な、なんですの？　嫌な客が来たみたいな顔をして。身なりが悪いのでしょうか？　それとも身だしなみに問題が？）
先日風呂で身体を洗ったばかりだから臭くはない筈だと戸惑う。

当初ほど腐臭はしない筈だ。今日も顔は何度も丁寧に洗ってきた。
それとも戦闘を歩く冒険者が原因なのか、と思って匂いを嗅ぐ。多少、汗臭いかもしれないが周りに居る者達よりは奇麗に見えた。
寧ろ小汚いのは貴方達の方だ、と言い返してやろうかと思った。
「……ここはいつも物々しいんですの？」
「そうかもな。いつも来ているわけじゃないから詳しいところは分からん」
睨みつけてくる相手はそれぞれ武器を持ち、警戒している。
客人を招く姿勢ではないことは理解した。
建物は素晴らしくても使用者が悪いければ品位は落ちる。
彼女にとっては品位こそ大事なものだと思った。

†

シャクティの案内により辿り着いたのは広い応接室だった。
言われるがまま来てしまったが、今回の目的は何なのか少女には窺い知れない。
外出用の正装でもなく簡素な衣類。化粧もほとんどしていない。
本来ならば長い時間をかけて自分を磨くものではなかったのか、と薄っすら思う。以前の自分は他人との面会に随分と気を使っていた気がした。
どういう理由かまでは思い出せないが、相手に失礼な振る舞いはしなかったのではないかと。
外出できるようになったとはいえ、杖が無ければまともに歩けない。傷が深すぎて治療に時間がかかってしまったためだ。それでも今日の外出を決めたのはシャクティである。
戸惑いつつも命の恩人の要望に逆らえるわけも無く――
（……久しぶりのお散歩で少々具合が悪くなってきましたわ。内と外では空気が違うのかしら？）
何度か胸を摩りながら一人掛けのソファーに座る。
豪華絢爛とは程遠い質素な室内に何故だか失望を覚える。しかし、他人の住居に文句を言っても仕方がない。そうは思うが――以前はもっと派手な場所に居た気がしてならなかった。

「……ヴァルマさん。このフードはまだ被ったままなのですか？」
「そうした方がいい。暑苦しくて済まないとは思っている」
実際、暑苦しい。熱がこもり、汗で顔は濡れていた。
今日は一段と気温が高い。通りを歩く女戦士（アマゾネス）が羨ましいとさえ思った。
自分が覚えている感覚では今日のような日は外に出ず、薄着で過ごす。
肌の露出を極力控える種族ではあるが程度がある。
（こういう日は建物より森の中がいいですわ）
故郷の事をすっかり忘れているけれど過ごしやすい場所の知識は残っていた。
オラリオに来るまでいくつかの森の中で暑さと獣から逃れてきた。
そこでの暮らしは決して悪いものではなかった。
――その筈なのだが、どこの森にどれだけ居たのかが思い出せない。同胞との触れ合いもあった筈だ。
しかし、今日はその同胞から厳しい視線を向けられてしまった。明らかに敵を見る目だ。
少女は水筒を取ろうと身体を探るが見当たらない。きっと最初から持っていなかったのだと諦める。
側に居たシャクティは彼女が水筒を探そうとしている事に気づいた。そう思うのは何度も同じ行動を取っていたからだ。
記憶障害。
最初はよく分からなかったが物忘れが激しい事だと理解していた。
だが、程度が想像を超えていた。
自分達にはなじみが無いが主神や他の神々の言葉からも信じられないのだが――
つい先ごろまで自分が何をしていたのか忘れてしまう。それも何度も起きる。
人の名前や顔さえも覚えていない。
何度も教えていれば身につくものだとばかり思っていたシャクティもお手上げだった。

同じことを質問されれば腹が立つものだ。他の眷族たちも彼女の質問に嫌気がさしている。けれども、彼女自身は本当に覚えられなくて困っているという。

こういう場合、どうすればいいのか分からない。

†

彼女の行動について自分一人ではどうする事も出来ないので知恵者の意見を色々と貰っているが、解決策が浮かばない。かといって放り出すことも出来ない。

その一環として【ロキ・ファミリア】に連れてきた。ギルドにも連れて行きたかったが、色々と思うところがあり断念した。

戸惑う少女を眺めていると扉が開いた。

一人は耳が横に長いエルフの眷族。その後で目的の人物『リヴェリア・リヨス・アールヴ』が入室してきた。

腰まで長い緑色の髪に碧玉の瞳。氷の如き冷たさを感じさせる顔は色白の肌を一掃と際立たせている。それと外が暑いにも関わらず肌の露出の少ない魔術師風の衣装を着ていた。

エルフは基本的に季節問わず肌の露出を極力控えたものにしている。これは種族全体が潔癖症だと言われる由縁である。

女戦士（アマゾネス）の対極の格好ではあるが肌を見せてはならない掟（おきて）は無い。

「待たせたな」

「いや……」

リヴァリアは立ち上がろうとしたシャクティを制し、エルフの眷族は来客の目の前にアルヴの清水の入ったコップを置いていく。

霊峰『アルヴ山脈』に流れるエルフ達が好む水である。

「そこの貴女」

フードを被った少女が眷族に声をかけた。するとエルフの眷族は声を聞いただけで全身に緊張が走って背筋をまっすぐに伸ばした。

何故かそうしなければならない気がした。

「は、はい？」

「毒味をしなさい」

「はっ？」

唐突な少女の命令。
側に居たシャクティと眷族の少女が同時に疑問を口にする。だが、眷族の方は言い知れない畏敬の念を感じ、自分が運んできた清水を一口飲んだ。
清く冷たい水が実に美味である、と小さく呟いた。
「お客に出す水に毒なんか入れませんよ」
通常であれば飲まずに言う台詞だ。しかし、今回はどうしてか飲んでから言ってしまった。別に喉は乾いていないのに。
どうしてかそうしなければならない。それはまるで――と思ったところで思考が中断する。その後の文言が出てこなかった。
相手の様子に満足したのか少女は出されたコップに口を付け、一口清水を飲む。
暑い気温には心地よい冷たさで満足気だった。

†

シャクティ達の対面のソファーに座したリヴェリアは片目だけ開けて様子を窺っていた。先の少女の言葉には僅かばかり眉根が動いたのみだ。
エルフの眷族の動揺に興味を覚えた彼女（リヴェリア）はシャクティの思惑の凡（おおよ）その見当がついた。
「今日の目的はその娘か」
「ああ。今のはよく分からんが……」
シャクティの言葉と同時にリヴェリアは眷族に部屋から出るように言いつける。それとしばらく誰も入れないように、と。
困惑する眷族が姿を消してからリヴェリアとシャクティは同時に軽くため息をついた。
息苦しい雰囲気になった事にお互い苦笑を滲ませる。
「もうフードを取っていいぞ」
「はい」
汗にまみれた顔の少女はようやく解放された事に安堵した。
フードから現れる容貌は白く美しく、エルフ特有の横に長い耳が現れる。

金髪碧眼の年若い少女はもう一口清水を飲んだ。
「……エルフ……、それも白妖精（ホワイトエルフ）か……」
通常のエルフよりも少しばかり肌の白さが分かる程度。リヴェリアも白妖精（ホワイトエルフ）に属する。
身体的特徴に大きな変化はない。
「……残念だが私は彼女に覚えがない」
リヴェリアは冷淡に告げたものの興味を無くしたわけでは無かった。
エルフの中でも希少な白妖精（ホワイトエルフ）は高貴な存在と扱われる。先ほどのエルフの眷族のように声をかけられただけで奴隷根性が蘇るような、命令に抗えなくなってしまう。
リヴェリアが他のエルフに出会えば大体は騒ぎになる。特に彼女は顕著である。
「見た目から想像しか出来ないが……、私と同じく王族（ハイエルフ）かもしれない」
事前にある程度の情報を得ていたとはいえ、目の前で見せられれば信じるしかない。
【ロキ・ファミリア】の冒険者であるリヴェリアは元々は多くのエルフを従える存在であった。戦乱によって故郷を追われ、オラリオに流れ着いた。
ただ、目の前の少女はシャクティに言ったように覚えが無い。
自分の里の者であれば大体は把握している。
ここで問題なのはシャクティから聞いた記憶障害についてだ。
何処から来たのか尋ねようとも本人は覚えていない。帰るべき故郷が無い。ただ、ヒントが無いわけではない。
彼女が復讐心に囚われている原因となったのが軍神アレスだ。この神に尋ねれば正体が判明する。
（……王国（ラキア）関連となると厄介だな……。しかし、一人でオラリオに来たそうだが……、何があったのか……）
他人の人生を詮索するべきではないが王族（ハイエルフ）となると話しが変わってくる。

他のエルフに影響を及ぼす存在である為、安易に見捨てる事が出来ない。かといって協力することも出来ない。――これは内容によるものだが。

「やはり王族（ハイエルフ）か……。見つけた時は酷い姿だったが……。我々【ファミリア】としては確認のために来ただけでリヴェリアに押し付ける気は無い。……出来れば助言は貰いたいな」

「うむ。私も同胞を見捨てる気は無いのだが……。正直、驚いている。彼女は私の知らない里の王族（ハイエルフ）のようだ。しかも王国（ラキア）が関わっているとなると……、見過ごすことも出来ん」

件（くだん）の王国（ラキア）は年に一回はオラリオに攻め込んでくる。そのたびに【ロキ・ファミリア】率いる最強の【ファミリア】で迎え撃っていた。今のところ全戦全勝だ。

国家系【ファミリア】は数が多いだけで質は低い。それと主神はバカである。

「……良く分かりませんが……。私は王族（ハイエルフ）で、とても偉いのですね？」

今まで大人しく聞き耳を立てていた少女が言った。

それに対してどう答えたものか、とシャクティは戸惑う。

全ての白妖精（ホワイトエルフ）が偉いわけではないし、リヴェリアとて偉そうに振舞っているわけでもない。

ギルドに行けばどんな種族の冒険者も等しく平等だ。ただし、王族（ハイエルフ）は高貴さから対応が変わってしまう事もなくはない。それとて人間（ヒューマン）や亜人種（デミ・ヒューマン）からすれば関係の無い事だが。

「オラリオに限って言えば……、偉くは無い。ただの王族（ハイエルフ）だ。うちに居る多くの眷族からみれば雑兵と大差はないぞ」

「……そ、そうなのですか。少し残念ですわ」

水を飲んで気分的に落ち着いた筈なのに頭はまだ熱い。目の前のリヴェリアという人物が色々と教えてくれている事に興味が湧いているが、どうにも意識が集中できない。

逆にリヴェリア側からは緊張の為の冷や汗のように見えていた。顔色も悪いので。

そのすぐ後で少女の景色は歪んだ。それに驚いて持っていたコップを取り落とし、拾うおうとするも上手く掴めない。
「どうした？　具合が悪いのか？」
慌てたシャクティが少女の額に触れると熱かった。
自分の体温と比べても圧倒的に熱い事に漸く気づいた。
（朝方確認した時は平熱だったのに……。ここに来て緊張が解けたとか？　それとも逆か）
（……目が泳いでいるな。熱中症か。早く休ませなければ……）
それぞれ対応の為立ち上がる。
シャクティは冷たい水か、タオルを。
リヴェリアは部屋の外で待機している筈の眷族を呼びつける。しかし、それらが整え前に少女は具合悪さから嘔吐した。その後は意識が朦朧として動かなくなる。

†

エルフの扱いが良く分からないシャクティをよそにリヴェリアが甲斐甲斐しく身の回りの世話を始めた。
少女をリヴェリアに託すかどうか決めあぐねていた為に【ガネーシャ・ファミリア】の眷族として迎えなかった。
場合によれば【ロキ・ファミリア】に預けてもよいと主神ガネーシャの許可を得ている。
「私の予想が当たった場合、リヴェリアとの付き合いが変わるのでは、と危惧してな」
「余計なお世話だ。……だが、相手が相手だ。世間的にも体面が悪かろう」
現場の清掃作業を眺めつつ横長のソファに横たえられた少女。
慣れない環境の為に心身ともに疲弊したのでは、と予想する。元より過酷な毎日を過ごしてきたと聞いている。
今しばらくは身体の不調が続くと二人は思った。
（故郷を追われた王族（ハイエルフ）か……。私の娘というわけではないし、アイズ一人でも手を焼いている状況だ。だが……、このまま帰せば色々と騒動が起きそうだな）

立ち居振る舞いから王族の関係者であることは何となく予想できる。しかし、冒険者として迎え入れる事とは別問題だ。

国元に戻せば今までの苦労は水泡と化し、相当に恨まれてしまう。かといって面倒見るのは違うと思った。

王族（ハイエルフ）と気づいた者達が増えれば必然的に関わりを強制されるし、何かしらの事態に利用されてしまう。

「そちらの眷族に迎えないのであれば預かってもいい、と思っていいのか？」

「ああ。手荷物はカバンとボロボロの書物だけだ。本当に身一つで遥か遠くから来たようだからな」

エルフが頼れるのは同胞だけだ。人間（ヒューマン）のシャクティでは同情こそ感じても最後まで面倒を見る事は――おそらく――出来ない。

他にも多くの眷族を抱えている。この点はリヴェリアも同じだが

――

それから少女を来客用の部屋にあるベッドに寝かせる。これは大勢の眷族を引き入れるために用意した寝台である。

リヴェリアは他のエルフの眷族と共に環境を整備し、居心地を良くさせる。それとシャクティから荷物を取り寄せてボロボロの手記を読み込んだ。

立ち寄った隠れ里で世話になった者達の名前や様々な風俗が記されているのが殆どで大層なものは見当たらない。

忘れていく彼女の為に用意されたことは明らかだ。それと彼女の故郷が書かれていないのは失ったか、既に記憶から消えていたものと判断する。

（過酷な環境が彼女の大事な記憶を奪ったか……。多くのエルフは恐怖をその身に抱いているが、それと似たようなもの……かは分からないが）

これを書いた者は少女に生きてほしいと願っている。復讐を糧にしてでも。

だが、リヴェリアは彼女の気持ちを理解してあげることは出来ない。例え同族だとしても。

本人も同情を目的としてオラリオに来たわけではない筈だ。

†

治癒術（ヒーラー）を呼んで一日いっぱい面倒を見た後、熱が下がったのは翌朝になってから。

最初に見かけたリヴェリアに対して、初めましてと言い出した。

共に来た者の事を尋ねると数分かけてシャクティの名前を出す。

おそらく忘れかけているからすぐには出てこなかったと判断する。

（この短期間の事もあやふやなのか。それでは故郷の事や手記の事も里の事も覚えてはいまい）

一応、手帳のようにまとめられた手記を見せると笑顔が焦りに変わり、リヴェリアから奪い取る。

記憶には無いが失ってはいけないものだと本能では覚えていたようだ。

手記を失えばもう彼女は何も無くなってしまう。

（罪深い事をしてくれたな、神アレス……）

「これは大事なものなんです。……大事な想いが……たぶん詰まっている……。守らないと……」

「……ああ。取り上げたりしない。あまりにボロボロだったから装丁を整えさせてもらった。それとカバンはどうする？」

手記の中身を確認しつつカバンという単語が分からなかったのか、首を傾げた。

大事なのは中身であって他はもう忘却したのか、と。

シャクティも手記以外は入っていなかったと言っていた。

「後で清書してやろう。このまま朽ちてしまえば読めなくなる」

「……そ、そうですね。字が判然としませんし……。同族の方々に深い感謝を……」

手記を大事に抱え、お礼の言葉を口にした後、静かに涙を流す。だからといってすぐに手記を手放すことはしなかった。

これはリヴェリアを完全に信用していない証しだ。

本能の強さは冒険者に勝るとも劣らない。そう思わせる意志の強さを垣間見た気分だった。

「改めて名乗っておこう。私はリヴェリアだ。冒険者に身をやつしている」

真剣な顔を崩し、アイズ達に向けるような柔らかさで名乗る。

これに対し、少女は戸惑いを見せる。何度か口を動かしつつ必死に記憶を探っているような――

自分の名前すらすぐに出てこないほど症状が悪化しているのかもしれないと思いつつ。

「私は……ヴェルゼッタ・オリンピア。そうヴェルゼッタですわ。高貴なる……どこかの……。……ただのエルフ。そうですわ。ええ、そうです。間違いありません……」

単語を一つずつ思い出し、確かめるように少女ヴェルゼッタは言った。

思い出せない事が多くて不安そうな顔だが自分の内に秘める思いを信じて。

「同胞の手を借り、オラリオまで来ました。……ここで私が何をすればいいのか忘れてしまったようですが……。恩義は忘れない……。必ず思い出してみせますわ」

「……無理をするな。その強がりは元々の個性か？」

気丈な振る舞いから高貴な存在らしいのは分かったが、それは性格からなのか、掴みどころのないのは記憶の欠損だとしても不憫である事には変わらない。

このまま追い出してしまうと確実に路頭に迷う。少なからず旅の目的も失ってしまう。

それと名乗りで出た名前には全く覚えが無かった。余程の田舎か、偽名か。

王国（ラキア）に関係するとすれば分からない筈はないのだが、とリヴェリアは首を傾げた。

ゼゼナ・シャフラー
＃4―0A　プロローグ

遭遇

生まれた時から彼女は忌避されていた。
神によって失望された存在として――
けれども、物心つかない少女は――あらゆることが分からなかった。当然、知識を得なければ無垢な赤子と変わらない。
新しい命は祝福される。それが世の常であり、一般常識。だが、彼女の世界はそうではなかった。
「……おうおう、こいつはすげーな。見事な失敗作だ。何の役にも立ちゃしねー」
赤子を上から覗き込むように眺める神は珍しい生き物を見るように。取り立てて面白くもつまらなくもない――かといって好奇心が刺激されるでもない。
あるのはただ空虚な失望感だけ。それでも体裁というのは大事だ。周りの大人達の羨望を集めている立場でもある。
とある小さな村落にある【ヴェーラ・ファミリア】が起源だと言われている曰くつきの赤子はその誕生から人生が詰んでいた。
村の生命線を守護する巫女となる為だけに待望された赤子であるというのに。
その子は見た目は人間であり小人族ともいえるほど小さい。どう成長するかは神ヴェーラでも分からない。
夜色の外套を寝間着のように羽織り、群青色の様な長い髪の頭部には花飾りをあしらっている。
顔に三角などの模様を施した褐色肌の女神。その表情は常に人を小莫迦にするような悪戯っ子を思わせる。
この神の特徴は『質問』を受ければどのような形であれ真実を『答え』る。――自分の知識に無いものまでは答えられないけれど。聞く

人によっては聞きたくない事まで聞かされる事になるので、神の界隈では嫌われ者として扱われていた。

「……失敗、ですか……」

「紛うことなき大失敗だ。こりゃあ参ったね。また新しく作るとしても手間暇がどれくらいかかるのやら」

目的の赤子を用意するのに何十人もの女性。三〇種近い亜人種（デミ・ヒューマン）の協力が必要だというのに――神はただ一言失敗と言った。

村の住民からすれば軽く流されては困る。だが、他に頼れる存在は居ない。

「まあまあ、そう悲観するな。アタシは神だ。安易にお前らを見捨てたりはしねー。……だが、これは困ったな……。思い通りに行かないっていうのは」

言葉は悪いがヴェーラとて敬ってくれる村民に何の感情も抱いていないわけではない。

救ってほしいというから提案を出した。それが今回は失敗してしまった。話しとしてはただそれだけだ。

あまりに面白くないからつい口が滑った。

（……アタシは嫌われ者の神だから気にしないけれど……。しかし、どうしよう。前回は成功したから今回も特に問題も無く進められたのに……。誤算だ、誤算。……文字通りの『誤産』……）

失敗作として生を受けてしまった女の子は神と村民によって育てられる事になった。さすがに安易にごみ箱に捨ててこい、とは言えなかった。

――今から思えばそれが出来ればとっくにやっている、と神ヴェーラは独り言ちる。

人々の期待を一気に失望させた女の子は緑色の植物に因んで『メンテ・シャフラー』と名付けられた。

当初は確かに薄緑色の奇麗な髪と瞳だった。それが時を経るごとに濁っていくことになるとは――

村民の冷たい視線にさらされながら数年が経過した。神がメンテを側に置いているので滅多なことはなかったが会話する相手の殆ど

はヴェーラだった。
　当初はあまりにも村八分なやり方に嗤ってしまったが――長く触れ合えば愛情が湧くというもの。それは神でも起こりうる感情だ。しかし、ヴェーラはどこかで線引きをしているので見捨てる事もしばしば。
（一〇年ほど世話をしたが人間（ヒューマン）の特徴以外に見られねーのは何でだ？　いつもならあらゆる種族的要素が発現する筈なのに）
　血統の配合に間違いは無かった。メンテの場合は通常の作法から外れた『奇形』に分類される。
　身体的（しんたい）なパーツに欠損があるとすれば配合した種族的要素くらい。
（お前はよく分かんねー生き物になっちまったな。……成長はしている。眷族にするの怖いけど【ステイタス】はどうなるんだ？　増えるのか、まさか……）
　素っ裸にしたメンテをくるくる回したり逆さまにしたり、とにかく研究だけは続けた。
　彼女（メンテ）の性格は穏やかな標準型。知識を与えれば言葉を喋る。痴呆のまま置いとくと部屋が臭くなるからやむを得ずの措置だった。
　知能で言えば中くらい。特別、天才という事もない。育てているヴェーラからすれば少し落胆するところだ。
　自分が育てているのに頭が悪い子になるのは対外的にも羞恥を覚える。
　失敗作のメンテで挫折している場合ではなく、彼女が生まれた五年後には代替品たる成功例が生まれ、今も村民たちによって大切に育てられている。
　成功例は今までの経験に基づいた結果なので、こちらはこちらで珍しいわけではない。だが、村人の感謝の強さは段違いだ。
　その赤子こそが村にとっての救世主なのだから。
「……おめでとう」
　メンテは喜ぶ村民を眺めながら言葉を紡ぐ。何がそんなに目出たいのか理解していないのに。
　だが、それでも愛そうとヴェーラはメンテを側に置いて可愛がっ

た。主神であり下界の住民は全て自分の子供も同然。当然、その愛情はメンテにも適応される。

扱いの違う子供達を眺めつつヴェーラは日がな一日寝ているか研究に没頭する。

本物の神が住んでいるというだけで下界の人間は畏れ敬ってくれる。時には養ってくれることも。

それに対して神が施すのは知識や『恩恵（ファルナ）』だ。天界の規則（ルール）に縛られている範囲での行使だが。

メンテが十二歳になる頃、他の住民と触れわせた。すると彼らはすぐに彼女を厄介者として扱い、汚れた存在のように排斥する。

神の寵愛を受けているメンテとはいえ、ヴェーラは彼らに遠慮は無用と言ってある。だから、きつく当たる事も然程時間はかからなかった。

「元々はお前らが生んだ子だ。殴るも殺すもお前らの自由。これがアタシの『答え』だ」

神は傷つくメンテと傷付ける人々を見ながら満足そうに言い放つ。

邪神ではないが人によってはそう見えてしまうのは本人も自覚している。けれどもそれを隠す気も無い。

多くの友神（ゆうじん）には嫌われているが何人か酔狂な友は居た。もし、その者達が居れば正義感によってやめさせるだろう。

子供達の戯れは本能の赴くままにやらせるべきだ。だから、ヴェーラは止めない。その理由もない。

（……うわっ、すっげー血ぃ出てんじゃん。棒で叩くのは無しだぜ。放っておくとどんどく酷くなるな。このまま何もしなかったら……、あいつ死ぬかな）

生死については神として様々な考え方がある。ヴェーラは運命は受け入れろ派だ。

失敗作として生まれた己を恨め、と。

時が過ぎ、普遍の神であるヴェーラは新しい顔にすげ変わる住民たちを眺めつつ今も慎ましやかな生活を続けていた。

今年で四〇は超えている筈のメンテは――今も若さを保ち生き続

けている。見た目は相当ひどい有様だが――
何が酷いって年中村人にボコボコに痛めつけられているのだから顔形が元々なんであったか思い出せないくらいだ。
小さくてかわいい赤子は居ない。ここには度重なる打撃によって歪んだ顔しかない。
極端な変形は無いものの印象は当初とは別人位に違っていた。
「……お前はそういう……生き物なのか……。もっと早く気づいてやれれば良かったな。……どの道、失敗作だし、そんなこと分かるわけねーか」
「……お戯れを」
「おいおい、アタシはこっちだぜ。目が見えていないんじゃないのか？」
例え潰れても一週間ほどで完治する。その肉体的回復力は『恩恵（ファルナ）』を与えていないのに発揮する。
以前は指を落とされたのに再生した。だからといって急激な変化は起こさないから気づくのが遅れた。
肉体の再生力が強くても身体中に刻まれた傷跡までは消えない。これはどういう基準か今もって分からないが、ある特定の攻撃を受けた場合、傷跡が残ったままになる。
その影響であちこちの皮膚が引っ張られて風貌が変わってしまったわけだ。
（……あまりにのんびりし過ぎてこいつの事を見てなかったのかもな。こんな疫病神の世話を長年続けるなんてよ。嬉しくて涙が出そうだ）
本当に泣くかは分からない。心にもない事ばかり言う自分に涙は似合わないとも思っている。
だが、しかし困ったとヴェーラは本心から思った。
そして、更に時は過ぎた。
世代交代が続く村での暮らしも安定期に差し掛かり、当初ほどメンテへの風当たりも無くなってきた。ある意味、神の代わりに疫病神と言われる始末だが。

その当事者は二十歳程の妙齢の女性で成長が止まっている。見た感じなので幾分かは若いかもしれないけれど。

「懲りねーな、おめーも。神と同等の存在と化しやがって……」

「あなたのお世話をするのが私の役目でございます」

確かにそういう取り決めをしたのは事実だ。今更覆せるのか――神だから出来る。

かといって他の者だと寿命で死んでしまう。不死性を持つメンテはその点では優秀だった。

しかし、問題が無いわけではない。神と同等の存在が居るというのは天界の神々からすれば無視できない。

神は下界に神を作らない。神は天上世界のみ君臨する『超越者（デウスデア）』だ。

（あわよくば撲殺で死んでくれりゃー良かったのに。無事でやんの）

それともうすぐ人の寿命の限界に差し掛かる。もし、エルフなどであればまだ猶予はあった。神の目も誤魔化せる。ヴェーラ自身がそう思っているので間違いは無い。

それに――もう潮時ではないかと。

だから、数年後言い渡した。

お前、死ねよ。

神から直接の死亡通知。

長年甲斐甲斐しく世話をしてきた者に対する仕打ちとしては最悪極まりない。けれども、他に言いようがない。

どの道、嫌われ者のヴェーラだ。悪意の正直者である。

充分な知識を持つに至るメンテはそれでも笑っていた。いや、苦笑かもしれないし、絶望した時に見せる笑いかもしれない。

「んっ？　聞こえなかったか？　死ね。とにかく、死ね。明日でも今日でも今すぐにでもいいから死んでしまえ、この……失敗作が。……ったく、もういい加減にしてくれねーかな。アタシはピチピチの二十歳気分を味わいてーんだ。老人介護はもうたくさんなんだよ」

（……我ながら胸糞悪くなる言葉だ。言ってて虚しくなるぜ）

唐突に言ったものだから歯止めが聞かない。死ね、を五〇個ほど並べたところで数えるのをやめた。

数が問題じゃない、と。

それからどれくらい経っただろうか。その間、暇を見つけてはメンテに死ねと言っている気がするし、自分でも口癖のようになってきた。

だからといって果敢に死ぬわけがないのは重々承知している。けれども、そうしなければ――今までのメンテの努力や苦労が『無かった』事にされる。それだけは嫌だった。

ヴェーラにとって下界の民は万民問わず愛すべき存在である。当然、失敗作だろうとも愛するつもりだ。

（そうだ。それが真実だ。メンテ……、お前が選択すべきはアタシじゃない）

だが、さすがに傷ついたのか、メンテの言葉は目に見えて少なくなった。それと同時に全身から死臭が漂うような生気を失った姿になっていった。本当に肉体が腐っているわけではないが、絶望感いっぱいなのは確か。

頼れる者はヴェーラのみ。口が悪くても良いなら、という条件で共同生活は続いている。

正直に言えばヴェーラは手詰まりだった。他の案が提示できない。

そんなある日、他の街から来た行商人から様々な情報を得た。

遠く離れた地に神々が集まって広大な地下ダンジョンを攻略していると。それも眷族（下界の子供）を率いて。

その都市の名は迷宮都市オラリオという。

（……なんだ。アタシを辺鄙なところに左遷してて（神々）めーらだけいい思いをしてやがるのか。……ムカつくなー。邪魔したいなー。……あー、でも。向こうにフレイヤとか居そう。ロキもセトもディオニュソスもデメテルもバステトもフォボスもアストレアも……。皆、気に食わねー）

イライラが募り、メンテに言葉での暴力を加える。

かといって村を放棄する事は――彼らは遠くに移動できないし、新しい土地での暮らしも知らない。

自分が大切に見守ってやらなければならない。これは己に課した

神としての責務でもある。
いかに傍若無人なヴェーラとて子供達を見捨てる事は出来ない。
死ね死ね毎日言われる日々を送りながらメンテは精神的に耐えられなくなったのか、それとも気がふれたのか何の脈絡も無く叫んだり、泣き出したりするようになった。
壁に頭を打ち付けた後は自分が何をしていたのか思い出せず、首を傾げている。
追い詰め過ぎておかしくなったか、長寿の弊害かとヴェーラは思った。
（……うるさくなったな。どうせ厄介払いするならオラリオに行ってもらおうか。どういう理由がいいか……。アタシは他人の質問には答えるが自分の疑問に答えてくれるアタシは居ない。……はぁー、難儀な神様だ）
気の触れた介添え人たるメンテ・シャフラーを手放す理由作り。これにかけた時間はおよそ五年――
ヴェーラはさすがに自分の頭の悪さ加減に絶望した。だから、こいつのような失敗作が出来上がる、と自分を責める事も少なくなかった。
正直者であるからゆえに慰めの言葉など出てこないのだから仕方がない。
（……お前は可愛いよ、愛すべき失敗作だ。……だからこそ、だ。責任……、ちゃんと取ってやらねーとな）
生を受けて一〇〇年か、一五〇年か――はたまた三〇〇年か。
あらゆる災厄を一身に受け続けた世話係を――
「お前の愛は何処にある？　無ければ探せ。アタシに出来る事は道筋を付けてやるくらいだ。なんてこたぁーない。死んでほしい相手に墓標を用意してやるくらい簡単な事さ。アタシは神様だからな」
「愛は……神から与えられるもの」
「それはもう賞味期限切れだ。新しいのを探しな。アタシの愛は寿命を持つ者にしか適応されねー」
（例外があるなら死者だ。それは嘘じゃねーよ。それが例えお前でも

天界で愛でてやるさ。送還されるまで待てたら会えるかもしれねーが）

ヴェーラはメンテに新しい愛を探すよう命じる。そうすれば神の命令を絶対だと信じて疑わなければ二つ返事で首を垂れる筈だ。

気の触れたメンテにまともな解答は望んでいないが心からの返答は分かる。

ヴェーラが示すのは迷宮都市オラリオ。

愛を求める相手は神、または異性。変わり種として同性も認めてやらないわけでもない、と。

とにかく、愛を知り、そこで死ね。知らなくても死ね。そう言いつけた。

「条件は神を殺してはならない事だけ。それは絶対遵守だ。後はどうしようがお前の勝手だ。住民全てを殺しても構わない。失敗作のお前を殺せる奴がいるなら見てみたいが……、アタシはしばらくこの村から出られないからな。達者で暮らせよ」

神からの一方的な通告。それに対し、血の涙を流しつつメンテは声なき嗚咽を漏らす。その顔を見たヴェーラは大層気味悪がった。

（……うわっ。キモっ！　……あー、もう駄目だな、こいつ）

その後、彼女は村人から一斉に投石を受けて追い出されるように生まれ故郷を去る事になった。その後は無理に追い立てられる事無く、オラリオに向かう事だけを念頭に歩き続けた。

見送った側であるヴェーラとしては厄介者を追い出せた重責から解放されたわけだが――心は全く晴れなかった。いや、自分がどうあがいてもメンテを救えない事は分かっていた。

（……あんな化け物（メンテ・シャフラー）を殺せる存在が居るなら……、見てみたいもんだ。それで本当に死んだら祝福してやる。アタシは嘘がつけない正直者のヴェーラだ。神の名に誓ってやるよ）

まずは真っ当にオラリオにたどり着けるか、だが。まっすぐ歩いていれば一〇〇〇年くらいかければ着くだろう、と気楽に考え村に目を向ける。

新たな巫女を作る用意を始める時期に入ったので。

ゼゼナ・シャフラーの『【眷属の物語（ファミリア・ミイス）】』は天界の規定に則り記録から抹消されました。
詳細は当事者の記憶にのみ保管を認めます。
口外秘を徹底してください。

＃4―0Z　エピローグ

決着

無敵の冒険者『ゼゼナ・シャフラー』はただひたすらに愛に生き、愛に死す目的以外に何も持っていなかった。

迷宮都市オラリオで最初に入ったのは【ハデス・ファミリア】だったと言われている。闇組織の【ファミリア】では情報が得られにくい。それゆえに彼女は謎の多い冒険者とも言われている。

種族は人間（ヒューマン）と冒険者ギルドでは記載されているが――それにしては若々しい姿をしていた。

古参のギルド役員でも疑問を抱くところ。これが長寿のエルフであれば何の問題も無い。

「アルテミス。君はあの冒険者……ゼゼナだかメンテだかの正体には気づいていたんだろう？」

貸し切りにした酒場にて友神（ゆうじん）を交えて今まで知りたかったことを尋ねた。

自分の眷族にしていたアルテミスも実のところはよく理解していない。入りたければ入れ、と言ったら入団した。

言葉だけ聞くとヘスティアにとっては羨ましい限りなのだが――

「元は闇派閥（イヴィルス）に所属していた、と私は思っていたが……。ギルドの公式記録はもっと古いものがあった」

「はっ？　どど、どういうことだい？」

身を乗り出そうとするヘスティアに対し、アルテミスは隣に座って茶を飲んでいる女神ヴェーラに顔を向ける。

必要なとき以外は何も答えない、と誓いを立てているので今は何を尋ねても答えてくれない状態だ。

反対側に座る女神アストレアは今回の危機に対して恩赦として召集された。事が住めばまたオラリオから追放されてしまうが、ヘスティアの為に指示に従ってくれた形だ。

正義を司る女神だが、今は引退したおばあちゃんのような暮らしを

しているとか。その女神は胡桃色の髪をいじりつつ遠い過去の扉を開けようと――

「あれはもう五〇〇年くらい前かしら？　ゼウスとヘラが居なくなって暗黒期と呼ばれた時代……よりももっと古い頃からだから……」

「ちょいまち。そんなに古い情報から説明はじめるんか、自分ら」

眷族を率いて話しを聞くことにしたロキは慌てた。しかし、他の女神達は――一部は――危機意識が欠如したように暢気だった。

男女比率で言えば女神が圧倒的に多い。男性代表は無口のソーマくらい。実のところ一〇〇人近い神と関係を持っている。そのうちの半数以上は既に天界に送還されていた。

有名無名問わず節操無しと見るか、どうしてそれだけの【ファミリア】を渡り歩いて怪しまれなかったか。それぞれの神々の中で受け取り方は千差万別だった。

冒険者になれば何故か長生きする、という事を逆手に取り長くオラリオに潜伏していた謎の冒険者ゼゼナ・シャフラー。

古参の冒険者ですら聞き覚えが無いのは単純にダンジョンで活躍してこなかったからだ。それが【アルテミス・ファミリア】と【ヘスティア・ファミリア】によって明るみに出た。それを悪いとはヴェーラも言わない。

「……アタシが何を言おうと、どう受け止めようと今更どうでもいい。それよりも【剣姫】……」

「……はい」

神ヴェーラは万全の態勢になっている金髪金眼の少女アイズ・ヴァレンシュタインに問いかける。

あの化け物を殺せるのか、と。

「……元は貴女の……眷族だったのでは？」

「眷族じゃないさ。実験動物で失敗したから捨てた。あれはその成れの果ての様なもんだ」

無敵の冒険者というのは予想していなかった。

神々の『恩恵（ファルナ）』を授かった冒険者達が太刀打ちできない、というのは本当に想定外だ。

物言いは悪いが嘘ではない、とヴェーラは自嘲気味に言った。
「お前、あいつを殺せるのか？　……自分から質問するのは不慣れなんだが……」
「……わかりません。何度か切り付けてみたけど……再生力が高いというか……、魔石の無いモンスターみたいで戦いにくいです」
こうしている間にもゼゼナは冒険者や住民を食い殺している――筈だ。必要以上の容量を取り込めないところから常識の範囲内というところが納得できないけれど。
大量殺人に向かない厄介さともいえる。
（ゼゼナは無差別に殺しはしない。特定の条件を設けている。……あれは長く培った知識を有した賢い化け物だ。……反面、武闘派ではない。そこが狙い目……だったはずなんだが……。見込みが甘かった……）
「でもさ、神を愛する事と殺す事がどうして繋がるんだい？　ボクとしてはもっと平和的に事を収めたいんだけど」
「……無理だ」
「急に喋るなよ、ヴェーラ。君、質問されないと答えないんじゃなかったのかい？」
「……自分に都合の悪いことは言いたくない。だから、さっきの誓いだ。ゼゼナに平和的な解決なんて無い。出来る事はきちっと殺してやることだ。アタシはあいつにとても死んでほしいと……、それはもう一〇〇〇回以上は言い続けてきた。そんなアタシが嘘をつくわけにはいかないだろう」
ヘスティアの胸ぐらをつかもうとしたが服の表面積が少なすぎたので断念し、代わりに隣りに居たアルテミスの胸ぐらをつかむ。
それに対して他の神から異論が出なかったので話しは続けられた。
（おー、悪いなーアルテミス。あの破廉恥の服は掴んだら破れそーでよー）
（それは私も思っていた。あの貧相な服しか無いのか、と。【ファミリア】の収入では服を購入する余裕も無いほど、そこまで火の車だったのだな）

ここに居る中であまり事情を知らない神達はどうして神会（デナトウス）で相談しないのか、と囁き合っていた。それに対する答えは大枠で共通している。

アポロン（変態）が居るから。

神の寵愛を求めるゼゼナですら拒否する神。もし、神会（デナトウス）で会議を開こうものならやる気（殺意）を出してしまう。

少なくとも彼女はヴェーラが課した条件を今も守り続けている。

（神を殺してはならない……だったか……。だからこそヘスティアが無事なのも頷ける）

「……神様自ら、彼女の殺害を許可する……のですか？」

手を上げつつアイズは言った。

現場にいる中で一番の実力者――とは言わない。けれどもアイズだけしかゼゼナは殺せない。神の寵愛を受ける意味でも拒否する意味でも適任者は限られてくる。

ヘスティアからすれば既に三人も死なれている。

「アタシは許可するぜ。遠慮なく殺せ。しっかりとな」

「……何故……。そんなにあの子に……」

「死んでほしいからに決まっている。ああ、もちろん本心からさ。アタシは正直者なんだ。ゼゼナに死んでほしくてたまらないから毎日のように頼んだ事さえある。……今となっては手遅れなんだが……。あいつは生きていちゃいけないんだ」

神自ら生を否定する。否定される側の気持ちは計り知れないくらい悲しいものではないのか、とアイズは自身の胸に手を当てる。

もし、ゼゼナであれば胸が張り裂けそうなほどつらいのではないか。

（胸が痛いか。その通りだ、【剣姫】……。生まれた時から神に遅かれ早かれ否定される存在だ。今まで見逃してやったのはアタシの愛だ）

愛ゆえに地上を混乱に陥れる。それはそれで結構な事だ、と神ならば言う。破滅願望こそ無いが最善だと思うからこその言葉だ。それ以外に適切な言葉を当時は知らなかった。

無責任に生きろ、だなんて嘘を言えるわけがない。

何度か手合わせして実感するのは恐怖――【剣姫】にとっては駆け出しにここまで後れを取るのは異常事態である。

種を明かせばなんということもない。元よりゼゼナは常識外のモンスターだった。

それも悲しいモンスター。

忌み嫌われて過ごした日常はもちろん理解できないし、彼女（ゼゼナ）もそれは望んでいない。

「これは神々に祝福されし冒険者と神どころか全てから忌み嫌われた厄介者との戦いだ。どちらを応援するかは目に見えて明らか」

「……愛するという観点で言えばゼゼナも全くダメな眷族（子）というわけではあるまい。私のところに来た時は……最初は素直だったのだが……」

「そうねー。でも、【ファミリア】の趣旨はすべて無視してたわ」

「バーカ。あいつは神の愛に飢えているモンスターだ。それ以外は眼中にねーよ」

神々の中で一番ゼゼナを理解しているのはヴェーラ。その彼女が元々は追い出した。

無責任極まるとしか言いようがない。そんな彼女がどういう風の吹き回しかゼゼナを殺せと吹聴しまくっている。

愛に飢えているのは神も同様ではないのか、とヘスティアは呆れ果てる。

過去ゼゼナとメンテを受け入れた【ファミリア】は総じて良い印象を受けていない。けれども、素直さで言えば純粋ではあった。それがあまりにも――

純度が濃すぎる。

命を投げ出しても構わない献身ぶりは事情を知らない者にとっては脅威でしかない。だからこそ排斥をいずれは敢行する事になる。

仲間意識持たず、ひたすら神の寵愛を求める。気がふれているのは元からである事はヴェーラの説明で明らかだ。

「……殺すしかないか」

現場に居る神々の半数はそう結論付けた。それに――庇い立てす

る理由が無い。
　存在そのものが今や天界にとっては脅威であるからだ。だからこそヴェーラは忌避した。その時が来るまで自由に生きろ、とはそういうことだ。
　諦めムードの神々にヘスティアはもちろんのこと。アイズも驚いていた。
　何故、神々は眷族を見捨てようとするのか。今まで自分達に教えてきたのは『自分の眷族だけは信じる』ではなかったのか、と。
（……ヴェーラ。君はとても罪深い神だ。それがよーく分かったよ）
（……今更か。アタシは正直にしか生きられないのさ。文句を言われる筋合いは無い。……偶々（たまたま）失敗しちまっただけじゃねーか）
（それが原因でオラリオは大ピンチなんですけどー）
「そこ！　こそこそ話すな、気持ち悪い」
　目つきを鋭くしたアルテミスが神々を叱責する。
　ここに居る神の中で荒々しくしなければならないのは正義を司るアストレアだと思っていたが、彼女は暢気そうに様子を窺っていた。
　理念とは裏腹に当事者は大人しい女神であった。優秀な眷族に恵まれたことも幸いし、神として本拠（ホーム）にどっしりと構える日々が多かったせいもある。
　いまさら言うのもなんだけど、とヘスティアは表に居るゼゼナの事が気にかかった。
　何も知らずに【ファミリア】に入れたものの確かに彼女は危険な存在だ。ある意味では厄介事を押し付けられたとしか言いようがない。
　それでも皆から嫌われていると聞かされれば見捨てるのは可哀相と思ってしまう。
　ゼゼナはただ神からの寵愛さえ貰えればいいのでは、と言ってみた。頭を撫でるなり、褒めるなり――
「それは危険だ。なぜなら、それしかしなくなる。それも厄介な事態になるまでただひたすらにな」
　団員にした経験のあるアストレアやアルテミスはその異常性を恐れた。

ある時から褒める事を止め、仕事も与えなくなった。――いや、仲間の邪魔だけはするな、と言いつけはしなかったか。

（……神なのになんと無力な事か）

「経験談は語るって奴だ。ヘスティア。覚悟を決めろよ。今、あいつは形の残る悪だ。そのまま退治した方がいい」

「……他にどうしようもないのかい？　神が眷族を見捨てるような真似は到底受け入れられない」

「方法を聞いているならアタシはこう答える。殺せ。それこそが最善である、とな」

何の迷いもなく言い放つヴェーラ。

本来はもっと嫌味に聞こえる言い方をする。それなのにここしばらくの彼女は心底困ったような、感情を揺さぶられているような不安定さがあった。

それが元の眷族ゼゼナが原因だった、のかもしれない。

「……あ」

神々が議論を交わしている中でアイズは脳内に打開策のひらめきが起きた。

通常の攻撃では物理、魔法共に通用しない無敵性に唯一対抗出来そうな方法が。

だが、それでは彼女を救う事に繋がらない。

もうできないのだとしても最後まで救える方法を模索したい。アイズとて無闇に他人と戦いたいわけじゃない。戦うのは好きだが。

（……私の剣はモンスターを殺すため……。それ以外の方法が無い。あの子は誰にも救えない。方法が無い。大勢の神様達から死を望まれている）

真っ当なモンスターであればアイズとて否定はしない。けれども、浮かぶのは他の方法がないか、だ。

――元より救いようが無いほどゼゼナの心は壊れている。それを短期間で修復したり、どうにかするのは確かに無茶であり、無謀極まりない。

『超越者（デウスデア）』の神々さえお手上げなのだ。下界の者にどうこうできる

わけがない。
（……この大混乱はアタシの求めていた娯楽に近い。だが、面白くねー。……愛着を持ち過ぎた弊害かもな）
（今まさにディオニュソスが言っていた『狂乱（オルギア）』って奴が起こっているぜ。この事態を遠くで眺めている他の神は笑っているのかな）
（クソ！　クソクソ！　ふざけんなちゅーねん。ウチの【ファミリア】はまだまだこれからやっちゅーのに。ここで台無しにされてたまるか、アホ）
（……折角、アリーゼ達を復活させられると思ったのに……。でも、いつかはゼゼナちゃんみたくなるんなら困っちゃうわね。ゼウス、ヘラ。あなた達の功罪は甚大よ）
　結論ありきの議論は無駄。そうヘスティアは宣言して打ち切った。
　それは唐突だった。
　自分が我慢すればすべて丸く収まるなら、それに従う事も吝（やぶさ）かではない。しかし、神ヘスティアはとても我儘な神様だ。
　人並みに感情に富んでいて泣きもする。
「おい、ヴェーラ！　最後の質問だ。最後にする。こんな議論は無駄でしかない」
「腹をくくったか？　悪くないな。それで……『質問』だな。……『答え』は同じだと思うが言ってみろ」
「……ゼ、メンテ君は……君にとって掛買いの無い眷族（子供）だったかい？」
「眷族じゃねーが……。そうだな……」
　人から改めて言われるとこそばゆいものを感じる。それは随分と久しく感じなかった昔日の思い出。それが薄っすらと蘇る。
　しかし、神は感傷に浸らない。意外と淡白で現実主義者が多いものだ。
「……だからこそ、だ。掛買いの無い哀れなあの子だからこそ、神（親）として何か残したくなるじゃねーか。その為の墓標（オラリオ）だ。ここにあいつを埋める。燦然と輝く日の下にな」
（元々は自分で埋まってこい、と言ったつもりだったが……。ちょいと大事になり過ぎたな。……はは、これはこれで面白かったぜ）

ここに来てまで神を楽しませる。それだけは認めてやらなければ可哀想だ。

その神のせいでオラリオは危機に瀕している。だが、ヴェーラとて多少の責任を感じているからこそ遥か遠くの田舎から出て来たのではないか。

単なる興味本位ということもある、と他の神々は推察する。

（……根本的に救う方法が無いのか。ヴァレン何某君……。君だけが彼女を救えるのかい？　どういう理屈だ。ボクは納得できないぞ）

「……ウチのアイズたんに何させる気や。反則級の眷族（子供）はっ……」

と、ロキは途中で言葉を切った。そして、理解した。

アイズと戦う事ではなく、ヴェーラがどうしてゼゼナを殺せと言い続けたのかを。

もし、その仮説が正しいならば神々の誰もゼゼナに対して有効な言葉を失う。手段ではなく、手を取り合う言葉を失う。だからこそ、死ねと言ったのかもしれない。

神は我がままな存在である。それは神自身も認める。

掴みどころがなく、善悪関係なく愛する特性を持つ神々にも許せないものがある。いや、天界と言った方が正しいか。

簡単に言えば神に匹敵する存在は一切認めない。それが天界の絶対の規則（ルール）でもあるかのように。

不老不死を認めず、神と同等の存在の作成を認めず、神に反抗する者を認めず。

敵と判断されれば存在そのものを『無かった』事にされる。それは過去から未来にかけての歴史から。

それが出来るのが天界である。

「……充分に生きたんだ。後腐れの無いように殺してやるのが手向（たむ）けって奴だろう？」

足跡を残すのが目的だとしても相手は不死の存在だ。どうやって殺せばいいのか、となる。

幸せになる方法が無いというのも可哀そうなものだが手段がない。神ですら妙案が出せない。手づまりであった。

「俺達は自分の本拠（ホーム）の様子を見てくるよ」
そう言って立ち去る神が出始める。
議論は出し尽くされた。全く方法が無い、として。
最善はゼゼナの心を癒すことだ。それ以外はもはや眼中にない。
それがたとえどのような方法であろうとも。
「……ロキ。ヘスティア様、私に……任せてください」
ロキは任せたくないが充分な装備を持つように言った。どの道、ゼゼナはアイズの前に現れる。神に愛された眷族は全て殺すと断言し、一人ずつ実際に殺しているのだから。
対抗していた筈の【フレイヤ・ファミリア】も全滅とは言わないがかなりの深手を負わされて治療中だ。
規格外のモンスター。その実力は手放しで喜べない程の脅威だ。
「……私のやり方で……。後始末は他の【ファミリア】の方達にも協力してほしいので……。後方支援をお願い、出来ますか？」
他人を頼る【剣姫】に対し、アルテミスはいわずもがな。
集まってくれた武闘派【ファミリア】は快く引き受けた。
ヘスティア（彼女）からの言葉は無かった。
準備を終えて地上に顔を出せば街中に血だまりの現場がそこかしこに見受けられる。
無謀にも戦いを挑んで重傷を負ったもの。巻き添えでケガした住民が多数に上る。
最後に確認した神（ヘスティア）によって測定した時の【ステイタス】の各項目は約三〇〇前後足らず。それがどうやれば凄惨な現場を作り上げられるのか。
当人（ゼゼナ）は返り血を中央広場（セントラルパーク）にある噴水で洗っていた。
作業のように淡々と。特段の感情も見せずに目に付く生き物は皆殺しに、とでもいうように。
「……ゼゼナ。ダンジョン、行こ。ここに居るのは……」
声を掛けられた途端に尋常ではない速度を発揮し、人間的な動きを止めているような、まとわりつく動き方でアイズのすぐそばに来た。

アイズの【ステイタス】の遥か先に居るらしい彼女の雰囲気に思わず背筋に冷たいものが洪水のように流れ落ちる。
生理的に受け付けない。いや、生物的嫌悪に等しい。
ゼゼナは生きとし生ける全ての天敵。そんな存在であるかのよう。
「それはそれは神様の言伝？　言伝なのですよね？」
異常な速度で捲くし立てられる言葉。アイズの聴覚でも聞き取れない。だから、何となく頷いておいた。
異常な能力値になっているせいで全てが常識外だ。いったいレベルはいくつなんだろうと疑問を覚えるほどに。
どす黒く染まった髪の毛を振り回すだけで薄っすらとアイズの顔が切り裂かれる。
今のゼゼナは全身が武器と化していた。
大声を出されると鼓膜は速攻で破られる。それゆえに両耳を塞いでおく。それだけで賢いゼゼナは理解し、声を潜めてくれる。
今はまだ友達だと思っているようだ。
（……わざと食い散らかす様に……。でも、それも終わりにしなきゃ）
迂闊に彼女と手を繋げば匹途切れてしまう。それほどに現在の能力値は高い筈だと警戒しながらゼゼナをギルド本部に連れていく。
正直者の下で育てられた彼女は嘘に対して過敏に嫌悪する。だが、表情が曇るだけで人の世はそういうものだとも理解している。
長い年月を忌み嫌われて過ごした彼女は何を思って惨劇を繰り返すのか。だが、これは復讐ではないと思っている。
では、何だと聞かれるとアイズも首を傾げる。
「……」
今日は矢鱈と天気がいい。そんな日なのにオラリオは凄惨な現場だ。それはとてもよくない。
アイズは脇に控えている多くのサポーター達を招き寄せる。迂闊に隠しておくはかえって危ない。
ゼゼナに隠し事はとても危険だ。特に今は――
「彼らはサポーター要員だから攻撃しないで」
「いいわねいいわね冒険者っぽくて」

嬉しそうに笑うゼゼナ。
つい先日まで死相が見えるほど絶望感一杯だった女性とは思えない程の変わりようだ。
――それほど神ヴェーラに会えてうれしかったのか。だが――
（あの神様は久しぶりに会ったゼゼナに死を宣告した。二人はとても仲良しのはずなのに……。なんでこんな事に）
そう思っても部外者には窺い知れない事情がある。頭では理解している。もし、自分の立場なら他人に踏み込んでこない事の一つや二つあるものだ。
アイズの人生はまだ一〇代と少し。レベルも4（フォー）になって一年くらいしか経っていない。
対するゼゼナは数百年も生きる謎の人間（ヒューマン）。その正体は神に失敗作というだけで見捨てられた存在だという。
その心の内は自分と同質の闇か、それよりも深く濃い物なのか。
二人で冒険が出来る事に気を良くしたのか、ゼゼナは大人しくアイズの後を追った。
合間に出てくるモンスターはアイズよりもゼゼナに恐れをなして逃げていく。それは控えている冒険者が仕留める。モンスターは基本的に生まれ出たら殲滅しておくのが鉄則だから。
そうして二人の間に戦闘は起こらずに最初の階層主の部屋に到着した。しかし、ここは既にゴライアスが討伐済みだった為に、そのまま素通りする。
アイズの目的地は三〇階層より下。
遠征でもない限り他の冒険者に邪魔されにくい、という理由である。
道中はとにかく楽。ゼゼナはモンスターすらも恐れさせる。それだけの【ステイタス】を内包していると思われる。
彼女が生まれたのは偶然の産物だ。それはヴェーラも認めている。
（……神が奇跡を祝福しない。それがゼゼナ……、メンテ・シャフラーという存在）
彼女の人生に同情する気は無いが――どこか自分に通じるものは

ある。

ついこの間まで同じ空間に居たような錯覚を覚える。そう、それは例えるならば郷愁ともいうべきもの。

黒龍による謎の現象によって未来に飛ばされた、という仮説をするならば納得してしまいそうになるが――少なくともゼゼナはそんな現象に関係なく時を過ごしているのは間違いない。

（……もし、ポランが居なければ……。事態はもっと悪化していた。……もし、私にもっと力があれば……）

単なる【ランクアップ】でゼゼナを打倒できるのか。相手は推定レベル１０（テン）。もしくはそれ以上の化け物だ。

――無理だ。アイズをしてそう思わせる。

実力がどうこうという話しではない。神と同等の『超越者（デウスデア）』と化している為だ。

様々な事を考え続けて下降を続ける。その間、ゼゼナは無謀にも襲い掛かってきたモンスターを指先一つで灰へと変える。ついでに発生した衝撃波によって巻き添えで吹き飛ばされるモンスターも多数に上る。そして、それはダンションの壁面すら粉々にするほど。

武器も防具も意味をなさない。動くたびに脱げていくと予想していたので随行者は女性限定にした。だが、不届き者は何処にでも現れる。それらについては無視する事にする。それに――ゼゼナは変態を嫌う。

数時間かけて目的地の三七階層。つまり『迷宮の孤王（モンスターレックス）』が現れる部屋。

ここより下はアイズ一人でも心許ない。現状、仲間と共に気軽に来れそうな場所の心当たりはここくらいしかない。

レベル４だから言えるがアイズの実力であれば決して不可能でも無理でもない。

何もない広大な『ルーム』と呼ばれる場所。ここに現れるのは漆黒の骨格を持つアンデッドモンスター『ウダイオス』――しかし、今は現れる気配はない。

次に出てくるまでに二ヶ月ほどの猶予がある。それを分かった上

でやってきた。
「……ゼゼナ。ここを貴女の墓標にする」
初めて見る景色に一喜一憂していたゼゼナは動きを止めた。
アイズへと振り向き、首を傾げる。
「ここは……神様に見守られているダンジョンでもある。……確か神ウラノスが……」
「神様に見守られている？　それはとても神聖な事ですね。ですが、ダンジョンをどうやって神様が？」
捲くし立てる彼女の言葉をある程度予想し、返答するアイズ。はっきりいってゼゼナの言葉は今もって全く聞き取れない。
だが、相手方はちゃんと聞き取っているようだ。何度も頷き、反芻するように小声で喋る。
問題は地面に埋めるか、壁に埋めるか、だ。
異常事態が起きない事を祈りつつ適切な場所は何処がいいのか考える。
「……ゼゼナ。もう……貴女は……眠っていいんだよ」
愛に飢えた冒険者ゼゼナはアイズの言葉にただ微笑む。
喋りつつもアイズは壁を何度も確かめ、一人で納得する仕草を続ける。
言葉は理解している筈だ。それがどういう意味であるかも。
もし、拒否するのであれば戦うしかない。これほどの強敵を失うのは迷宮都市オラリオにとってかなりの痛手ではあるが――既に多大な犠牲が発生した。利益を考える事はできない。
「……アイズ。貴女は優しい冒険者です。ふむふむ、なるほど。神の言葉はこういう解釈に取れますか。であれば……私は随分と無駄な事をしてきた。あははは！」
唐突に笑い出すゼゼナ。その声の音だけで部屋の壁に大きな亀裂が走った。
周りに控えていた冒険者達とアイズもすかさず耳を塞ぐものの余りにも身体に響くので痛みが襲ってきた。
もはや存在するだけで災害を起こす。それを改めて見せつけられ

た。
「へーい！」
「!?」
徐に声をかけられたサポーターの一人の頭が爆ぜ飛んだ。
仲間の唐突な死に悲鳴が沸き上がる。
声をかけた当人はサポーターの死に対し、思っていたのと違った事に驚き、舌を出して謝った。しかし、そこに心からの謝罪は見受けられず、軽い感じだった事から敵意を呼び込んだ。
そうであってもゼゼナに対抗できないので我慢するしかない。
「……ごめん、みんな。荷物を置いて……離れて」
「……アイズさん。役に立てなくて申し訳ありません。入り口で待機してますから」
「うん」
仲間の死体を引きずって下がっていく者達を見届けた後、残されたバックパックをゼゼナに渡す。
連れてきた冒険者の多くはレベル3並み。それをあっさりと殺してのけられると武器を持つ手にも自然と力が入る。
出来る事なら切りかかりたい。だが、それは悪手だと自身の身体が、心が警鐘を鳴らしている。
アイズは愛用品と化した金属製の杭と金槌を取り出し、壁に棺に見立てる為の穴を掘る。それを彼女に見様見真似でやらせる。こちらの言葉は理解しているのですぐに行動に移した。
ゼゼナの場合は素手でも出来そうだが折角作るのだから奇麗な長方形がいいと提案すると嬉しそうに頷いた。
もちろん、入るのはゼゼナだと正直に告げておく。嘘かどうかは生物的本能で見抜いてくるので無駄な足掻きはしない。
「これが神から託された命題。私はここで死ぬんです。死ねるんです。愛に包まれて。人々からの称賛よりも神こそが私にとっての最上」
ゼゼナは既に殉教者であった。もはや生に縛られない。肉体からの解放を心の底から喜んでいる。

それはアイズにとっては受け入れられない感覚ではあったが、他に方法があるわけでも無く。
（失敗しても怒らないでね）
そう思いつつ金槌を振り居続けた。
驚異的な『力』を持つゼゼナによって一〇分もかからずに希望の穴が出来た。多少のひび割れは無視する。
今回は魔石ではなくゼゼナそのものを入れる。その後でどうなるかは分からない。
ユーカリンの事が急に思い出されたが、あの時とは事情が違う。
（穴の中でリル・ラファーガを使ったら壁が壊れそう。ここは余計な事はしない方がいいよね）
アイズが物思いに耽っているとゼゼナ自ら穴に飛び込んだ。
その後、更に奥を掘り進め、状態を確認する。
「アイズアイズ。ここまでありがとう。本当にありがとう。私はここで死ぬからじゃあねー。早く帰りなよ」
「……う、うん」
「皆の為に早く死ななきゃ。どういう風に？　圧死かな？　みんな喜んでくれるかなー。今まで生きててごめんなさい。本当に駄目な子で、生きている価値もないのに長生きして」
こちらの言葉はもう届かない。そんな雰囲気を感じた。
ゼゼナは理解している。ここで自分が死んだ方がいいと望まれていることに。そして、それを受け入れた。
アイズに出来る事は見守るか、早く立ち去るかの二つだけ。
その後、彼女は何事かを早口で喋っていたが全く聞き取れなかった。周りの音は聞こえるので鼓膜は正常だ。
ゆっくりと修復を始めた壁を確認し、立ち去る事を選ぶ。
ゼゼナはアイズを見ていない。彼女が見るべきは神だけだ。だが、最後に挨拶だけはしないと、と。
「……お幸せに」
「アイズもねー」
壁の修復と同時に何かが潰れる音が響く。驚異的な『耐久』でもあ

る彼女が本当に潰されるのか疑問だが、長居しても仕方がない。
時折聞こえる笑い声が今まで聞いた事が無いくらい嬉しそうに聞こえたのは幻聴ではない筈だ。
仲間と共に地上を目指すアイズ。経過を見ていないので階層主の部屋がどういう事態になっていくのか不安を抱きつつ――
もし、ゼゼナの安否が分かるとすれば『恩恵（ファルナ）』を授けた最後の主神ヘスティアのみ。いや、改宗（コンバージョン）に関わった神も多少は分かるという話しだった。
二〇階層より上に行く辺りでダンジョン全体が震えるような物凄い震動が発生した。いや、それは誰かの哄笑の様な響きがあった。
（……彼女、喜んでいる？）
その後、一〇階層にたどり着くと今度は更に大きな震動が発生し、アイズ達は立てなくなって地面に伏せる。ところどころから崩落が始まったり、壁に大きな亀裂が走ったり、とにかく滅茶苦茶な状態になった。これは当然、地上にも影響があると思われる。
まさか巨大なゼゼナが現れたのでは、と冷や汗が出た。
「み、みんな大丈夫？」
「はい。崩落のケガはありますが……」
「こちらも無事です」
「ア、アイズさん！　ダンジョンのあちこちが光ってます」
普段とは違う光りがあちこちから灯り始めた。それは淡い緑色。見ているだけで安心するような優しい色合いだった。
それはしばらく灯り続けていた。
気が付けば震動は止み、地上への行軍を再開する。
地上に戻ったアイズはまず安心した。だが、それは次の光景によって更なる驚きが齎される。
ゼゼナの行進によって荒れ晴れたオラリオの市街地は緑色の草で覆われていた。
それは足首程の高さの植物でいい匂いがした。
（……これ、料理に入っている奴だ）
ただ、その植物の名前がアイズには出てこなかった。代わりに『調

合』のアビリティを持つ冒険者はすぐにわかった。
この植物は『ミント』である、と。鼻孔を擽る良い匂いが漂い、辺りの血臭が気にならなくなっていく。
いくつか採集し、神々が待つ本拠に戻るとロキが涙ながらに出迎えてきた。
普段であれば躱すところだが、今回は特別に抱き締められる事にした。
慌ただしい一日は終わった。
オラリオ全土に鬱蒼と茂ったミントは数日で全て枯れて、消滅するように消えた。
採集した分も枯れてはいるが消滅は免れた。
「……」
「……」
「……」
経過を報告を受ける為、神々は【ロキ・ファミリア】の本拠に――
敵対以外――集合し、ほぼ半数以上が項垂れていた。見る者が見ればお通夜だと言いそうな暗い雰囲気だ。
ヘスティア、アルテミス、アストレア。ここには居ない闇派閥の生き残りなども同様の現象になっている可能性もある。
「……朝方に反応が消えたよ」
「……漸くおっ死んだか。随分と長生きしたもんだ」
ヴェーラは深夜から起きていた疲れか、眠そうにしていた。
元は自分が蒔いた種だというのに、と責める神はヘスティアくらい。
「……アストレアは秘密裏にオラリオから出て行ってもらうとして……。おいドチビ。連続的に災難やったな」
「……それを言うならロキこそ。今回の戦いでたくさんの眷族を失ったんだろ」
護衛につかせただけなのに死んで戻ってきた眷族にロキも慌てたが、覚悟はしていた。だが、いい気分ではない。
それぞれの【ファミリア】も少なくない犠牲者が出た。

今回の騒動で冒険者だけで二〇〇人近く死傷し、一般市民も多数の犠牲が出た。その責任の所在で冒険者ギルドでは会議が続けられている。

事は一柱の神の送還で済まされない。場合によれば一〇柱くらいは必要なほど。

「人のせいにするなよ。アタシは神は殺すなと命じた。それ以外は知ったこっちゃねーが。元々は人の欲が生んだ結果だ。アタシはただ手助けしただけだ。……それが例え失敗作だとしてもよ」

「けれども、君が側に置いておけば今回の事態は起きなかったんじゃなかったのかい？」

「どうだかな。数百年も経つとあいつも支離滅裂な状態になってきたから。……希望的観察に過ぎねーぜ、それは」

だが、今度はちゃんと責任が持てると言い切った。

人々の願い――ゼゼナの死――は成った。そして、かの者（メンテ・シャフラー）は永遠（とわ）に神の愛を享受できる。その資格を得た。

これで二日後に復活してきたら驚きだ。ヴェーラとてまだ少し疑っているところがあるけれど。

（メンテを殺せる方法は村には無かった。だから、アタシは答えられなかった。……随分と苦労掛けちなったな。……天界で聞かされるテメーの恋愛体験談……すごそーだな。ちょっと怖くなってきたよ）

軽く聞いただけでかなり破天荒な冒険をしてきたらしいので今から寒気が止まらない。だが、一時期とはいえ面倒を見た責任は感じている。

その時（天界への送還）が来たら諦める。ヴェーラは神生（じんせい）にも嘘はつかない女神だ。

騒動が治まってから約一ヶ月、眷族を失ったヘスティアの下にアイズが訪れる。

最初の出会いより続いた神（ヘスティア）の災難に対し、何らかの罰を求める為もあり、ジャガ丸くんを購入する理由もあった。

神としては罰を与えるつもりは無く、お互い災難続きの思い出に少しだけ耽る事にした。

「……表向きは君に対する敵意を持つ……。それだけでいいのかい

？」

「……対外的にもそれがいいって、ロキが……。それに今回は犠牲者が多過ぎました」

ギルド本部に呼び出されても説明できる自信は無いし、行きたくなかった。

誰も知らない眷族の秘密。それを事細かく把握して団員に向かえたりはしない。神の目をもってしてもゼゼナ・シャフラーは捉えられなかった。いや――もはやあれはそういう次元の存在ではなかった。

「三〇階層まで確認されている情報だと……、ほぼ全ての階層が破壊されたような状態だそうです。一八階層も壁のヒビはあったようですが……、こちらは人的被害は少なかったとか」

「相当揺れたからね。その影響で得体の知れないモンスターとか現れていたりしないかな。……昔、ウラノスがなんか言ってた気がするんだけど」

「どうなんでしょうか。……ただ、修復が遅いらしいです」

眷族の居なくなった本拠（ホーム）に寂しく佇むヘスティア。

別の部屋には各眷族たちが用意した荷物などが残されている。

外見的には廃墟同然だが熱心に修繕してきたおかげで夏は快適に。冬は暖かく過ごせる。寝床もトイレも。

風呂が無いのが減点要素だ。

「ちわーッス。神様生きてるー？」

暗い雰囲気をぶち壊す明るい挨拶をしてきたのは【アルテミス・ファミリア】の団員ランテであった。そういえば、とヘスティアは思い出す。

彼女の借り受け期間が残っていたことに。

「ら、ランテ君!?　もう【ファミリア】に戻ってしまったと思ってたよ」

「それどころじゃないでしょう。主神（アルテミス）様より手伝ってこいという新たな使命を帯びてきました。一人だけになって寂しいヘスティアが今も泣いているのではないか、と余計なお節介を全開させて」

アルテミスの声真似をしながら二人の側に駆け寄る虎人（ワータイガー）の女冒険者。

アイズとは面識があるが敵対関係というわけではなく、にこやかに挨拶を交わした。

【剣姫】と【猪獅(カリュドン)】はレベルこそ違うがここ最近では情報のやり取りもしている。主に食べ物の好みや戦い方など。

「先日までは泣いてたけどね。さすがに一ヶ月も経てば新しい団員募集しなきゃって思うよ。新人が無理なら誰か改宗(コンバージョン)してくれそうな子はいないかな。出来れば今度は男の子が良いんだけど。もちろん、大人しくて可愛くて……、決して物騒な事態に巻き込まれない普通の子でいいから……」

「男ならこっちが欲しいくらいですよ。今は天気もいいから外から旅人とか来るかもしれないですね。ジャガ丸くんの店を検問付近に出来ないっすか？」

「そういうところは競争率が激しくてね。……検討はしたんだよ。【剣姫】は移動されたら困るだろう？」

「……あー、そう……ですね。でも、場所が分かれば通ってもいいですよ」

その後は新たな眷族募集の為の相談を始めた。

賑やかな【ファミリア】こそが当初の夢だった。だが、それは思いのほか難しい。

ヘスティアの様子に安心したアイズは自分の武器(デスペレート)に手を添える。それは振るうべき相手にこそふさわしく、安易に抜くべきではないと改めて思った。

誰も助けられなかったアイズの決意とは裏腹に時は過ぎていく。

そして、アイズが十六歳の少女に成長し、レベル５(ファイブ)へ至る頃――迷宮都市オラリオにたくさんの冒険者や英雄に憧れを持つ者達がやってきた。

つい数年前まで未曽有の大災害が起き、数多の冒険者や住人が命を落とした事件など知る由もない。そんな未知を求めにやってきた中に白髪で赤い瞳(ルベライト)が印象的な少年の姿が――

『終幕』

ゲッテルデメルング
＃5―01　ベル・クラネル

その少年は『英雄』に憧れていた。育ての親たる祖父と死に別れ、一念発起して生まれ故郷を出立し、昔から聞かされてきた『迷宮都市オラリオ』へと目指した。

ここには世界の全てがある。数多（あまた）の冒険者が先の見えない深きダンジョンに挑戦する。

そこは世界中から挑戦者が集まり、巨大な都市を形成していた。

歴史は一〇〇〇年ほどと古く、今もって地中のダンジョンは未攻略であった。

（ここがオラリオ。冒険者がたくさんいる都市……）

初心な少年は期待に胸を膨らませ、検問所に向かう。

冒険者は少年の様な人間（ヒューマン）だけではなく獣人などの亜人（デミ・ヒューマン）、長寿で耳が長いエルフ、低身長の小人族（パルゥム）にドワーフ。様々な人種が居た。

基本的に手続きさえ済めば人種問わずに冒険者に慣れる。

――例外があるとすれば神。

この世界には地上に降りてきた神様が居る。『超越者（デウスデア）』である彼らは天界での規則に則り、能力の殆どを封印した状態で下界に降りる。

無闇に下界の者に能力を行使してはならないという。

その規則を破れば天界へ強制送還の刑に処される。神様が。

送還された神は二度と下界に戻れない。

「この都市に来た目的は？」

多くの旅人は検問所で同じ質問を受ける。自由な往来は許されておらず、厳しい審査があるようだと少年は内心で怖がった。

もっと気軽には入れるものと思っていたので。

オラリオは様々な分野で独占している物がある。それを狙う不届き者が居ないとも限らない。

それと――少年はまだ知らないがオラリオは世界有数の暴力装置

でもある。その気になればあらゆる国を滅ぼせる。それだけの潜在能力がある。

少年の番が来て同じ質問を受ける。当然、答えは決まっている。

「冒険者になる為に来ました」

「……そう。頑張ってね」

受け取った側は至極あっさりとしたものだ。同じ答えを聞かされれば対応も淡白になるのも致し方ないけれど。

その後、背中を見せろと言われたりしつつも長時間拘束されるような事は無く、無事に入国を果たせた。

小さな村から来た少年は視界一杯に広がる都市の光景に目を輝かせる。

白い髪に赤い瞳（ルベライト）の少年の名は『ベル・クラネル』という人間（ヒューマン）だ。

†

意気揚々と都市に入ったもののあまりに広大な為、何処に行けばいいのか分からなかった。

まずは宿か、それとも冒険者登録か。

それとは別に露店商で何を売っているのか確認もしたい、など好奇心旺盛に辺りを見回す。

それと通りを行き交う通行人の多さにも驚いた。半分以上はダンジョン攻略の冒険者。それぞれ様々な服装と武器が目立つ。

少年は大層な武器を持っていないので早く冒険者になりたい気持ちが膨らんだ。だが、手持ちの資金は心許ない。

あまり考えなしに来てしまったので。

とりあえず、様々な人に声をかけて情報を集める。――見た目的（めてき）に優しそうな人に。

意外と親切な人が多く、建物や場所は早期に特定できた。

オラリオの中心地にある『摩天楼（バベル）』の一階部分が冒険者ギルド。

中心地を八等分し、それぞれの区画に商業施設、娯楽に様々な分野が固まっている。

道案内の看板があるけれど想像以上の広さに驚き、少し道を外しただけで迷いそうな地上の迷路ともいうべき様相があった。

ベルはギルドに真っすぐ向かい、受け付けで質問をぶつけた。
冒険者になるにはまず最初にどこかの【ファミリア】に入り、そこで主神から『恩恵（ファルナ）』を受けなければならない。それから改めて受け付けまで来てくださいと言われた。
（……てことは……、ここに居る冒険者はどこかしらの【ファミリア】に所属しているってこと？）
相当数の冒険者が居ると予想しているが今から自分が入る余裕があるのか、不安になってきた。
親切な受け付けは依頼書を見るように勧めてきた。
新人冒険者になる近道は団員募集を利用するのが良い、という。ギルドの規則では入団に口出しは出来ないからご自由にどうぞ、と。
「……えっと」
【デメテル・ファミリア】ではオラリオの外での農業従事者を募集。
【ニョルズ・ファミリア】は漁師希望者。
【カーリー・ファミリア】は勇敢な女戦士（アマゾネス）限定。
【ミアハ・ファミリア】は団員募集は他と一緒だが。男性のみに限定されている。
【ハルモニア・ファミリア】は行事全般のお手伝い。
【ブリギッド・ファミリア】は山間部でのモンスター討伐。
【セクメト・ファミリア】はみんなで悪いことしようぜ、と書かれていたがギルド職員の手によるものか赤い字で『不採用』と塗り潰されていた。
その他に【ディア・ファミリア】、【エニュオ・ファミリア】、【イズン・ファミリア】、【メジェド・ファミリア】――
その中でダンジョン攻略に関する【ファミリア】は少なく、治安維持や商業系が多い印象を受けた。
みんな考え事が一緒なら飽和状態になるのは仕方がない。
（……【エニュオ・ファミリア】ではみんなで楽しく【ファミリア】生活を送ろうって書いてあるけど……。ダンジョンの攻略はしないのかな）
文字が他の依頼書より丸く、内容は年若い女性が書いた感じだっ

た。

その隣辺りにあった【ヘスティア・ファミリア】は簡潔な文章だ。

団員募集、男の子希望。これと同じものが等間隔で一〇枚は張られていた。

それを一枚持って受付に行く。それと興味があったので【ファミリア】について尋ねた。

「大手は優秀な人材を確保しているから新人審査は特に厳しいよ。それで挫折する人も居るくらい。こっちに貼ってあるのは商業系や治安維持。君が持っている依頼書の【ファミリア】は色々と問題があるから大抵の人は入りたがらない」

「ええっ？」

問題があるからと言ってギルドが拒否する権限は無く、入団を決めるのは君だ、と告げた。

件（くだん）の【ヘスティア・ファミリア】は問題行動が多く、罰金（ペナルティ）も何度も受けている問題児を抱えている。よその【ファミリア】との抗争は何度も起こしている、とか。

曖昧なのは『今の受け付け』が来る前の話しで、今はどうかは知らない。そういう噂があるのは事実と言った。

最近は大人しいから大丈夫かもしれないけれど、と言いおいてやめた方がいいとベルに小声で告げた。

手続きさえ取れば犯罪系だろうと依頼書に貼る。ただし、目に余る場合は赤い字で警告しておく。依頼を受けないのは完全に真っ黒な組織だ。

ギルドも詳細が把握できない【ファミリア】は通称『闇派閥（イヴィルス）』と呼ばれ、過去に何度も騒乱を巻き起こした。

†

不穏な話しを聞いたベルに受け付けの職員は真面目な顔で安易な甘言に乗るような冒険者はならない方がいいと告げた。

冒険者は決して華やかな職業ではない。弱き者は去れ、勇気の無い者は必要ない。

（……つまりそれくらいの気概が無いとやっていけないってことか。

……僕、まだ覚悟が出来てないからな……）

「実際に冒険者になってダンジョンに潜れば嫌でも分かるようになる。それは君の自由だよ。ゆっくり考えるといい」

「……はい。ありがとうございました」

どの道、いきなりダンジョンには潜れない。ベルがまずすべきことは地上に居る神に入団の許しを貰うこと。

神は大抵本拠（ホーム）と呼ばれる拠点に居る。中には一般人のように歩き回ったり、店で働いていたりする。

神かどうかは見るだけで分かる。原理は不明だが『なんとなく』神々しい力を発散させている。

ベルもここに来るまで何人かの神を見つけていた。

姿形だけで言えば一般人との区別が難しいほど凡庸とした人間（ヒューマン）と大差がない。しかし、天界から来た『超越者（デウスデア）』は言葉にするのが難しいくらい魅力があった。

（まずは神様を探すところからか。大手は難しそうだよな）

気軽には入れるなら団員も大勢いる筈だ。その中で目立つのはとても難しい事も理解できる。

自分にとっての基準は優しい神様でいいかな、と軽く考えていた。

気弱なところがあるから――そんな理由で冒険者になっても大して活躍は見込めそうにないし、呆れられて退団を言い渡されたら諦めるしかない。

まず依頼書の中から【エニュオ・ファミリア】と【ヘスティア・ファミリア】のチラシを取ってきた。

それぞれ正反対の位置に本拠（ホーム）がある。

右か左か。

人生を左右するなら丁度いい判断基準だ。

ベルは丸文字につられてエニュオの下に足を向けた。男ならハーレムを目指せ、と死んだ祖父の言葉もあったので。

にやけ面のまま書かれた住所に向かう。

「……ここら辺のはず……。……これかな？」

人通り少ない薄暗い路地裏の奥に該当する建物があった。

見た印象ではボロい集合住宅。とても豪邸には見えなかった。そして、扉にかけられた木札には『エニュオ』と書かれていた。

【ファミリア】を表す紋章（エンブレム）らしき模様は見当たらない。それと扉が朽ちていた。

（丸文字のイメージがまるで無い。廃墟じゃ……ないよね？）

募集期間は永遠ではなく一定期間が経つと撤収される。ゆえに【エニュオ・ファミリア】は定期的に募集を駆けている事になる。

少なくとも既にもぬけの殻、というわけではない筈だ。あっても留守だ。

ベルはドアを叩こうとしたが壊れそうなので諦め、声を掛けつつ中に入る。とりあえず、どういうところか確かめてから判断しても遅くはない、と。

†

【エニュオ・ファミリア】と思われる本拠（ホーム）は黴（かび）臭い印象があったが中はわりと小奇麗だった。朽ちた家具が散乱しているわけでもなく、生活感は確かにあるので無人ということは無さそうだった。

「……ごめんください」

そう言いながら奥へと進む。

掃除が行き届いているのか、床に埃は積もっておらず足跡も確認できない。

玄関と思われる空間は何もなく、上への階段は見当たらない。ただ、矢印で入団希望者控室という案内書きを見つけた。

その案内に従い、奥へと進む。いくつかの扉を見つけたが殆ど開かなかった。

薄暗いので奥へと行くと不安が増大する。ここで引き返すことも出来るし、勇気を振り絞る時でもある。

冒険者になる為には【ファミリア】の主神に会わなければならない。団員の許可だけでは意味がない。

（……最初に比べて奥の方がより奇麗だ。生活感があるというか……。それにしても扉が多い）

多いと言っても一〇〇もない。二〇ほどといったところだ。

途中で階段を見つけて上へと上る。矢印も上を差していた。
外から見た限りでは三階建てだ。
ギルドの受け付けから注意点は特になかったけれど、どんな神様なのか緊張で先程から心臓の鼓動が激しい。
古い家屋らしく木造の階段は一歩進む毎に軋み音を響かせる。しかし、扉とは違いしっかりとした感触があった。
不安を抱きつつ先に進むと目的地の扉を矢印が指し示した。
「……ごめんください」
ベルはドアをノックして改めて声をかけた。しかし、待てども待てども返事はない。
勝手に開けるべからず、などの注意書きは見当たらない。矢印には共通語で『うえるかむ』としか書かれていなかった。
五分ほど待ってみたものの返事が無かったので勇気を振り絞り、ドアノブを捻る。すると鍵がかかってなかったようであっさりと開いた。
木造のドアは開いた瞬間に壊れる事も無く――
目的地の部屋は薄暗いが人の気配がまるでない。留守かと思ったら奥で小さな音が鳴った。
ゆっくりと何かが動く、そんな感じの音。それは一定間隔で奏でられており激しい破砕音などではなかった。
何度も声をかけても返事が無いのでベルは奥へと進むことにした。
今年で十四になる少年は冒険者に憧れている為か、とても好奇心旺盛だった。もちろん、臆病なところもあるけれど。

†

部屋の際奥と思われる扉を開ける。気分は空き巣だ。しかし、自分は物取りに来たわけではないし、神様に会いに来ただけだ。
何度も声掛けしても――とはいえ実際の声は小さくて部屋全体に響き渡らせたわけではない。
扉の向こうにはありふれた部屋の景色があり、豪華絢爛な仕様では無かった。まして常識外の広大な空間でもなく。
慎ましやかで家庭的な印象を受ける様子がそこにはあった。そし

て、窓際に先ほどから聞こえていた音の正体があった。
それは一定間隔で揺れる椅子。脚の部分が曲線的になっていて赤子や年寄りが良く利用するもの。
その椅子に何者かが座っていた。そして、寝ているようだった。
見た印象から気持ちよさそうに木漏れ日を浴びながら――
だが、見た瞬間に理解した。その者こそが神様である、と。生物的な本能が告げたと言っても過言ではない。
どうみてもお年寄りが寝ているようにしか見えない。それなのに神々しい雰囲気を醸し出している。
うっすらと寝息を立てているその神物（じんぶつ）は仮面をかぶっていた。薄絹を羽織っているので性別は分かりにくい。ただ、丸文字を使っていたので女神ではないかと予想していた。
（こんなところに神様一人だけで……）
部屋の様子から団員希望者がここしばらく来ていない事は分かる。部屋の片隅には多くの洗濯物を詰め込んだ籠があり、他の場所には衣服が何着も壁にかけられていた。
人を招く部屋ならもう少し片付けている筈だ。
いつ来るか分からないのであれば片づけが疎かになるのも仕方がない。窓が開いたままになっているところに気づいたり、ベルは今までの緊張が少しずつ解けてきた。
だが、いつまでも寝かせているわけにはいかない。自分は冒険者になりに来たのだから。
そう言い聞かせて、神様に声をかけた。時には揺らしてもみた。
「……あ、ああ？」
完全に熟睡していた神と思われる者は身体を揺らしつつ仮面の上から顔を擦る。乱れていた胡桃色の髪を軽く手で撫でつけて。
まだ寝足りないのか、それとも団員でも帰ってきたと思ったのか、洗濯物を片付けておいて、と言いおいて眠り始めた。
ベルは慌てて神様を揺すり、起きるように迫る。
「……なんですか……、人が気持ちよく眠っているというのに……」
「すみません。あの、僕……冒険者になりたいんですけど……」

「……なればいいでしょう。……誰か居ないの？　ねえー」
「留守のようですよ、神様」
寝起きの為に頭がまだ覚醒していないのか、頗る機嫌が悪い神様は人を呼ぼうとしていた。そのうちに意識が少しずつはっきりしていき、異変に気付く。
部屋に見知らぬ気配がある事に。
（……んー。あー、やっと来たの、団員希望者……。半年も経過してたら……、そりゃあ待ちくたびれるわ。他の団員達が居ないってことは……、ダンジョンに行っているのか。留守番も置かない程……）
神と違い団員は忙しい。しかし、留守を置かない程とは思わなかった。
椅子に根を委ねたまま伸びをする仮面の神。
改めて侵入者に顔を向ける。すると白い髪の毛に目を奪われる。
（……白髪……あまりいい印象は無いけれど……。少年か……。しかも可愛い。他の眷族（子供）と取り合いになりそう。危険。うん、この子を入れるのは危険ね）
そう言いながらも希望すれば入団させてもいいと神は思った。
それには神が勝手に決めるより、実際に団員に面通しさせる方がいい。混乱は一度で済ませた方が経済的である。

†

仮面をかぶる神『エニュオ』はベルから見て優しそうな印象を受けた。
とある事情で顔を隠している、仮面以外の疑問はだいたい答えてくれた。
女神であり、秘密工作を専門とする。表向きは探索系【ファミリア】だと。
「探索もちゃんとするわ。あと、工作などは任意だから強制力は無いの。君が探索だけしたいっていうならそれでいいし。名を上げても構わない。裏の顔さえ黙っててくれれば……」
「神の前では嘘は付けないのでは？」
これは迷宮都市オラリオではありふれた情報だ。

どんな者も神の前で嘘をつくと押すことが出来ない。そういう特性があるという。

だが、神が嘘をつく場合はとても厄介な事態になる。ベルはそこまで踏み込んだ情報は持っていなかった。

「そうね。でも、工作と言っても治安維持に関連するものだから悪事を働く類ではないわ。……大きなところだと敵対【ファミリア】を潰す程度よ」

「……大事（おおごと）ですね」

椅子に揺られながら話す内容は決して笑いごとではない。まして入団していない少年に言う事かと。

今の話しは大丈夫なのか尋ねると、他でも似たようなことしているから平気と言って苦笑するエニュオ。

オラリオでは敵対【ファミリア】と抗争し、日夜どこかで激しい戦いが起きる、というのは珍しくないという。

協力関係もあるけれど【ファミリア】の規模が大きくなると他が邪魔をするようになる。冒険者は誰よりも強くなり、名声を得ようとする。馴れ合いなどしていては上には上（あ）がれない。

「私達の【ファミリア】はそんな中で火事場泥棒のように暗躍して悪さする者を撃退する。世の中には悪い人が多いからね。結構需要があるのよ、うちの【ファミリア】でも」

そして、それで――と仮面の女神は少年に声をかける。

君は何しに来たのか、と。

当然、入団する為だとベルは答えた。

正直に言えば怪しすぎる。自分達こそが悪者ではないと言えるのか。

子供であれば騙せる問答だが、ベル相手に通じるとは相手も思っていない筈だ。

「入団や退団に色々と条件を付ける【ファミリア】はあるけれど、うちは割りと零細でね。今はまだウエルカムよ。……それでどうするの？　怪しいと思ったら回れ右するといいわ。私は君を追いかけない。どうぞ、好きに選ぶといい」

怪しいと感じたら帰ればいい。しかし、それではどこにも入れない事にならないか、とベルは不安に陥る。

自分の目的は冒険者になること。

『英雄』に憧れて――

その為には苦難を乗り越えなければならない。楽して上に行けるなら『英雄』はそこら中に居る。

他の【ファミリア】で同様の問答を受けた場合、その度々に引き返していては前になんか到底進めない。であれば――

決意を決めるベルにエニュオは思い出したように言った。

「そうそう。一度入団すると退団するのに色々と条件が付く。更に改宗（コンバージョン）は一年の縛りが付くから」

「えっ？」

「……こういう事はちゃんと勉強しておいた方がいいわよ。気楽な冒険者家業だと思って入る人は大抵、これで挫折するから。何にって……冒険者という仕事に対してよ。甘い言葉に惑わされる若い人ほど騙される」

入団すれば何とかなる、と思っていたベルは退団などは考えていなかった。元よりは要ったらずっと頑張るものだと――

もし、そこが自分の意に沿わない【ファミリア】であったなら、逃げ出すのはもちろん困難だとしても『条件』までは思い至らなかった。

エニュオの言によれば単なる逃走で別の【ファミリア】に入る事は出来ないという。

「一度、【ファミリア】に入り、そこの主神から『神の恩恵（ファルナ）』を貰ったら、その主神が許可しない限り、別の『神の恩恵（ファルナ）』を受けることは出来ない。もし、いけ好かない神で何らかの事情で天界に送還でもされれば……、機会（チャンス）はあるけれど。……でもね、下界の者達は神に手を出すことは基本的に出来ない。無理ではないと思うけれど……、我々『超越者（デウスデア）』に武器を向けるというのは途方もない事なの。都市最強と謳われる冒険者でも難しいと言えるわね」

あとね、とエニュオは続ける。

この神様はかなり親切だと感じた。声といい仕草といい。好感が

持てる。
「大手の一例で言うと退団の条件に無理難題を押し付けられる。それを突破（クリア）すれば当然、ちゃんと退団の手続きを取ってくれるわ。一般的なのは高額な資金の要求よ。八桁くらいは覚悟した方がいいわね」
「……は、八桁……。一、千万……一億!?　一億ヴァリスということですか？」
「一じゃないかもよ。ちなみにうちは退団希望者を出したことが無いから条件を考えたことは無いわ。都市やダンジョンの治安維持のために働く事に、みんな誇りを持っているから。……それでも止めたい場合は……、私は何も条件を出さないつもりよ。……弱小【ファミリア】は特にそういう感じだから入りやすいけど……」
「そう、ですか。ありがとうございます」
「変わり種として……【アルテミス・ファミリア】は女性以外は入団禁止。処女神は特に顕著だから、下調べする事も大事よ。私の【ファミリア】は女性ばかりだけど男性も受け付けているわ。……でも、うちの団員はかなり厳しいから気を付けてね。……そうそう、それ大事な事だけど……」
詳細に説明してくれるエニュオの印象がどんどん明るくなっていく。しかし、そんな神（人）がどうしてボロい本拠（ホーム）に居るのか疑問にも思う。
見た目で判断してはいけないのかもしれないし、実はとんでもない悪党の【ファミリア】かもしれない。

†

エニュオの説明によれば口約束だけで入団が決まることは無い、という。
入るのは何処も簡単だ。神が認めればいい。零細であればより入りやすいのも事実。
弱小【ファミリア】の弱点は言わずもがな資金力と名声だ。
「当たり前だけど団員が優秀でなければ【ファミリア】は育たない。神に出来る事は何もないの。ただひたすらに団員達の無事を祈り、彼らが積み上げた【ステイタス】の更新をする事くらい。探索系だと団員

が強くならないと……、【ファミリア】の格はずっと上がらない」

ベルが入団しただけで【ファミリア】は有名にならない。その為には団員が努力を積み重ねなければならない。

憧れだけでは到底不可能だ。

端的に強くなるとしても技術がなければ――

（武器を持ってモンスターを倒す。それで強くなれるかは僕次第……）

それしかないけれどオラリオのダンジョンは序盤からきついという。当たり前だが入りたての団員は無力に等しい。そこから上を目指す気概と努力は絶対に必須である。

コツコツ資金を貯めて武具を揃えるのも一苦労だが、多くは自己責任だ。神は何もできないから。

「肉体を鍛えるのとは違う【ステイタス】というものがあるから冒険者は強くなれる。単なる数値の上昇だけではより高みは目指せないけれど……。……それでうちの【ファミリア】に入る決心はついたかしら？　ちなみに治安維持は団員の決まりごとの様なもので探索もするわよ。探索だけしたいなら……、他を当たった方がいい」

言葉だけ聞くとダンジョンでモンスターと遊びたいならそちらへ行け、と。

聞きようによっては厳しい意見だ。ベルも正直、都市の治安までは考えていない。

ダンジョンに潜ってモンスターを倒し、いずれは英雄に――

だが、その英雄は都市を守る気が無くモンスター討伐ばかり。

（優しい言葉ばかりじゃないのは分かった。要所要所で心に刺さる。これがオラリオ、なのかな）

本当は団員に来てほしい筈ではないのか、と疑問を覚える。だが、エニュオが欲しいのは志（こころざし）の高い者のようだ。ここで引き返す者が多いから団員募集がいつまでも張られる事態に陥る。

他も同様であればベルも覚悟を決める以外に道はない。

「ちなみに……お試しに入る……、なんて気軽な気持ちはどの【ファミリア】にも持ってはいけないわ。一度『恩恵（ファルナ）』を与えてしまったら君

達の人生はガラリと変わるから。神が与えるものだからね。そんなにポンポンと変わってもらっても困るし」

「……はい」

「今日はこのまま帰った方がいいわね。ギルドでまずは【ファミリア】の事をしっかりと勉強するように。改めて決心が付いたら……ここに来なさい。……他に行ってしまうかもしれないけれど……。ついでに探索系以外も見てきたらいい。商業系や制作系の【ファミリア】もあるから。彼らも必要に駆られればダンジョンに潜るけどね。……あ、どの【ファミリア】の団員も基本的にダンジョンに潜ってはいけない、という決まりはないから。ギルドから禁止されていない限り……」

決心が付いたり付かなかったり、心が何度も揺さぶられたベルはエニュオの言う通り、一度引き下がり【ファミリア】について勉強すると言って引き下がる事にした。

帰り際、引き留められることは無く温かく送り出された。それが少し申し訳ない気持ちを抱かせる。

こんなに親切にしてもらったのに、優柔不断な自分が情けない、と。

†

白髪の少年の姿が消えてから一時間ほど経った頃に団員が帰宅した。

何人かはダンジョンへ。何人かは都市の情勢を観察しに。残り数人は食料の買い出しだ。

ほぼ全員が女性。これは別にこだわりがあったわけではない。自然とそうなってしまった。

二人が女性なら三人目も女性になる。そうすると男性が入りにくくなる。そういう理由で女性団員ばかりになってしまった。

処女神ではないので男性団員を入れてはいけない規則は今も設けていない。だが、今更男性団員を迎えると居心地が悪くなる。

先ほど入団希望者が来たことを告げると三者三様に困惑した。

「あー、取り逃がしましたね」

「いや、今更男子が来たら【ファミリア】の治安が致命的に悪くなる。

しかも、その子、可愛いんでしょ?」
「いいじゃねーか。男子を入れてはいけない規則が無いんだから」
「私は入れてもいいと思うけれど……。あの子はダンジョンがあるからオラリオに来たんじゃないかしら。いきなり対人戦闘は無理だと思うから説明はしてあげたわ」
椅子を揺らしつつエニュオが言うと団長と思われる女性が恭しく首を垂れた。
本当なら共に説明すべきなのに今日に限って全員が出払う事態に陥った。
【エニュオ・ファミリア】は細々としたことも含めて意外と忙しい。
見張り要員も置いていたけれど――
「……でも、女の子が多いから顔合わせで逃げ出すかもしれないわね」
「それはちょっと……、傷つくなー」
(本音を言えば……、あの子が入ってくれたら楽しくなりそう)
仮面の中でエニュオは口元を歪める。
神の目的は娯楽である。それはオラリオ全土に降り立った神々の共通認識でもある。その点だけは膳も悪も関係ない。
変わり映えのしない生活を嫌い、日々何かしらの騒動を求める。それは深層域の攻略であったり、他派閥の【ファミリア】を潰したり、共闘したり。
暇つぶしに国を挙げて他国に侵攻したり――
(それだと【ファミリア】の理念が揺らぎますか……。むー、個人的には入ってほしい)
理念の前にエニュオも一人の女性――いや、女神である。処女神と違い、男子は頗る好物であった。
それとなくエニュオは自身の願望を団長に告げると苦笑を滲ませた。まるで無理難題を吹っ掛けられたかのように。
単純に呆れただけかもしれない。
そして、赤く長い髪を後頭部でひとまとめにした――第二級冒険者――団長『アリーゼ・ローヴェル』はただ一言、善処しますと神にだけ聞こえるように言った。

＃5―02　森の妖精の試験

白く輝く白銀の如き髪に深紅（ルベライト）の瞳の少年は早速ギルドにて改めて【ファミリア】とは何か。そこで何をするのかを職員に質問しながら学んだ。

宿代の都合もあり、長い時間は取れないが出来るだけ多くの情報を得る。

公開されている【ファミリア】の情報によって先に向かった【エニュオ・ファミリア】がどういうところか、ある程度は分かった。

大手である【フレイヤ・ファミリア】、【ロキ・ファミリア】、【イシュタル・ファミリア】、【アポロン・ファミリア】――

名だたる【ファミリア】の活動記録。探索系以外の情報も。とにかく、手当たり次第に。

（僕はやっぱり探索系かな。商業系や鍛冶系はちょっと想像つかないな）

『英雄』に憧れる少年がどうして鍛冶師にならなければならないのか。

安直ではあるが探索系に絞る事にした。だが、次の問題はどの【ファミリア】に入るか、だ。大手は飽和状態。しかも入団条件が厳しい。

有名だからといって無謀に突貫して後悔するより堅実なところから実績を積む方がいいのではないか、と。

安全志向は悪くない、とギルド職員も言っている。

「後は……運命の出会いに期待するしかない。これは意外とばかにならないものですよ」

なにせ、相手は神様だ。と職員は苦笑しながら言った。

もし、何らかの特筆すべき点があれば神自ら勧誘に来ることもありえないことはない。ただし、善悪どちらに当たるかは運次第。

どちらにせよ、ダンジョンに今は潜れない。

（……あと三日くらいで【ファミリア】を見付けないと……）

職員に大手に入る方法を試しに聞いてみた。
まず、無理と即答された。
これは実際に行って身をもって確かめるといい、という容赦ない様子が窺えた。
何処の馬の骨とも分からない田舎者が有名な【ファミリア】に行って入団させてください、と言えばどうなるか。それが予想できないベルではない。
万が一にかけるのもやめた方がいいと言われてしまった。
――同じ思考を持つベルと同じ田舎の若者がどれだけ居ると思っている、と言われれば閉口するしかない。反論できない。確かにその通りだ。
「君のような子は弱小、零細【ファミリア】から始めるのが無難だ。大手に入ってもいいことはないよ。内部で命を削り合って研鑽を積んだりするからね。特に【フレイヤ・ファミリア】は団員同士で殺し合いに近い鍛練をしていると聞く。それに耐えられるのかい？　死んでもギルドは保証なんか出来ないよ」
「……こ、殺し合い」
「胡坐（あぐら）をかいている暇はない。それだけ彼らは常日頃から努力をかかさないんだ。単なる勢いだけでは続けられないよ。特に上を目指している者ならね。……で、君はどういう冒険者になりたい？」
ここで『英雄』になりたい、だなんて言えない。まだそのとっかかりすら始めていないのだから。
期日までに【ファミリア】に入れなければオラリオから去るか、浮浪者になるしかない。それはそれでとても惨めだ。何の為にオラリオに来たのか、と。

†

夕暮れに差し掛かり、宿に向けてベルは帰宅する事にした。その途中でたくさんの露店に目が行き、手持ちの資金を確認しながら安い食べ物を探した。
その中で神様と思われる女神が声を上げて商品を売り込んでいた。
それはオラリオでは定番にして人気商品『ジャガ丸くん』だ。安く

て腹持ちが良く、味付けが豊富な揚げ物。
「美味しいジャガ丸くんだよー」
「……えーと、種類がたくさんあるんですねー。どれがいいんだろう」
それ程期待はしていなかったが想像以上に種類が多くて驚いた。
塩味から奇抜なものまで。ただ、どう見ても真っ黒な物が一つだけ端に寄せられていた。しかもお試しということで無料という。
それを指さそうとすると女神が絶対にやめた方がいい。後悔するよ、と凄んできた。商品なのに売りたがらないとはどういうことなのか。
「これはモンスターに食べさせて倒すアイテムとして使うものだよ。とても君みたいな人間（ヒューマン）には手に負えないよ。うん、食べたら死ぬね、絶対、間違いなく」
「なんでそんな危険なものを並べているんですか!?」
「……いやー、なんというか。おばちゃんの押しに負けたから、かな……」
苦笑を浮かべる女神はジャガ丸くんのイメージアップの為か、触覚の様なものを生やし、先端に丸いジャガ丸くんが付いた額当てを付けていた。
服装は前掛け以外は薄着で。大きな胸を青い紐が両肩を通して支えていた。しかし、ベルは彼女の服装に一切頓着しなかった。神様の服装だから、という意識が働いているのかもしれない。
「それよりも女神様……ですよね？」
「そうだよー。日々の生活費を稼ぐために神も働くんだ。別にボクだけじゃないぜ」
「……商業系の【ファミリア】なんですか？」
「いいや、探索系さ。……うちは問題児が多いからねー。あんまり稼ぎが良くないのさ」
ベルは普通（プレーン）の味のジャガ丸くんを注文した。
手慣れた様子で紙袋に入れた揚げたてのジャガ丸くんをベルに渡す。
商売をしている時は神らしい雰囲気はなく、注意しなければ気づか

なかったかもしれない。それくらい現場に馴染んでいた。
「君は冒険者じゃないのかい？」
「ええ、まあ、はい……。入れそうな【ファミリア】を探している所です」
「……はっきり言うけど、そんな気軽な気持ちじゃあどこも入れてくれないぜ。少なくとも【ファミリア】の眷族になるにはそれぞれの神と家族になるんだ。自分の眷族（子供）にした神はあらゆる手段をもって守ろうとする。……中にはひねくれものも居るけれど……。人生を預けるに足る意思を見せなきゃ……。君にはあるかい？　誰にも負けない強い意志って奴が」
　可愛らしい風貌の幼い女神がこの時だけは有無を言わせぬ正真正銘の『超越者（デウスデア）』と化した。
　下界に居る時は『神の力（アルカナム）』を封じて一般人に紛れているが、どこかで神を思わせる瞬間がある。ベルも思わず息をのんだ。
（……この人もやっぱり……、神様なんだ）
「ボクのところも団員募集はしているけれど……。だいたい他も一緒だ。家族になるって事は君が思うほど軽くはないぜ」
「はい」
「……仮にだよ。君がボクの【ファミリア】に入りたいとする……。それで君は後悔しないかい？　はっきり言うけど、君がどう感じるかは神であるボクでさえ保証できない。君がどう感じるか、どう後悔するか。神に全てを委ねるのは危険だ。その辺りを忘れないように」
　決めるのはベルであり、神はただ勧誘するのみ。
　強引な神様も中には居るかもしれないけれど、目の前にいる幼い女神は微笑みだけで話しを終わらせた。

†

　露店から離れて勝ったばかりのジャガ丸くんを食べる。熱々でサクサクの触感がとても気に入った。だが、やはり――黒いジャガ丸くんの衝撃が残っている。あれはいったいどうするのか、と。
（あの神様も無理に入れとは言わなかった。それくらい眷族になる事は大変なんだな。……眷族にならないと冒険者として認められなく

てダンジョンに潜れない。ただの一般人では駄目だとギルド職員は明言していた）

焦る気持ちが湧くがだからと言って闇雲に【ファミリア】に入ってしまえば後悔するのは目に見えて明らかだ。

冒険者になる覚悟が自分にはまだ足りない。それは何となく理解できた。

（行き交う人の殆どが冒険者……。彼らの数だけ冒険があり、物語がある……。僕はそれに憧れていた筈だ。あの人たちのようになろうと）

なりたいではなくなるんだ、と強く思えたら――強く覚悟などを決められたらいいのに、と。

何度かため息をつくと隣りに誰かか座った。

中央広場にはたくさんの椅子がある。多くの冒険者や住民が利用するのだから別におかしなところはない。

気が付いたので顔を向けてみると物凄い美人の姿が見えた。見えたというか隣りに座っている人だった。

人――正確には耳が長い種族。おそらく森の妖精と謳われる『エルフ』だ。

透き通るほどの白い肌。長い金髪に発色の良い碧玉の瞳。目元は柔らかく、鼻筋が奇麗な女性。

――ただ、全裸だった。より正しく言うなれば殆ど脱げている状態だった。

「おわっ!?」

形の良い胸を惜しげもなくさらけ出し、無事なのは下半身の下着くらい。つい目が言ったが彼女は下の下着だけしか着ていないような状態だった。

それなりに何故、周りは騒がないのか、と辺りを見ていると気が付いた人たちも驚愕の為に言葉を失っていた。だから静かだったのだと理解する。

「ふ、服が脱げていますよ」

顔を真っ赤にしながら言うものの声が上ずってしまい、かすれ気味

になった。それでも相手には届いたようで自身の姿を見る。
　指摘されれば驚いたり騒ぐところの筈だが、エルフの彼女は軽く驚きの声を上げた後、すみませんと言いながら服を身に着ける。まるで服が脱げたことに今気が付いたように。
　ベルの知識にあるエルフはとても高貴な存在で肌の露出を控える性質がある。現に冒険者のエルフも頭以外はかなり着込んでいた。
「天下の往来で失礼いたしました」
「い、いえ……。でも、殆ど下着同然の様な……」
　エルフにしては薄着だ。下着ではなく正装であるならば女戦士（アマゾネス）と同じだ。だが、彼女はそうではないはず――
　もう少し着込んでください、と言うとまだ足りませんか、と何でもない事のように聞き返してきたのでベルは更に困惑する。
（……エルフの特徴である横に長く尖った耳……。間違いない筈なんだけど……。それにしても奇麗な人だ）
　冒険者のエルフ以上に光り輝いているような清潔感があった。住民とも思えない。というより背中に何か模様のようなものがあったような――
　今は薄絹で隠れてしまったが、もしかして、と。
（冒険者？　いや、それならどうして……、こんなところで裸になるんだろう）
　しばらく見惚れていたが彼女は不意に何かに気づいたように両手を合わせる。
　仕草の一つ一つが美しい。それは女性というよりエルフという存在に対しての美を感じた。
「私……、どうしてここに居るのでしょう？　それと何だか寒いのです。明日は雪が降りそうな……」
「……雪は降らないと思いますが……。迷子、でしょうか。僕もオラリオに来たばかりでどこに何があるか……」
　と、言っている時に大きな放屁の音が聞こえた。もちろん、ベルではない。
　あまりにもはっきりとした音なので犯人はエルフの女性――年齢

は分からないが見た目の印象からはベルの四倍から五倍くらい年上――だと思った。

当人（エルフ）はにこやかなままで音に気づいていないようだった。

（……こんなに近くで他人のオナラの音を聞くとは……。それよりも着たはずの服が脱げかけていますよ）

胸から目を逸らすと足元には彼女の裸足が見えた。

女性の白い素足もまた美しい。というか靴は履いていなかったのか、と驚いた。

踊り子というわけでもなさそうだし、と疑問に思いつつ辺りに何か落ちていないかベルは探った。だが、近くには見当たらない。

「あ、あのー、冒険者の方ですか？」

「あー、はい。あまりダンジョンには行っておりませんが……」

「ご自分の所属している【ファミリア】は分かりますか？」

聞きようによっては記憶喪失の相手に問いかけるようなものだった。実際、自分の身の回りについて何もわかってい無さそうだった。

ベルは親切で話しかけているので突然、変態とか叫び出さないか気が気ではなかった。

まして相手はエルフだ。高潔な種族として知られている彼らは田舎者に対して敵意を向けないとも限らない。

「もちろん。私は【ヘスティア・ファミリア】に所属しておりますの。……あー、そうでした。ヘスティア様のお手伝いに向かう途中でしたわ。……でも、どうしましょう。私、どんな手伝いをするのか忘れてしまいましたわ。しかも靴とか服が……無くなって……。あらら、私の荷物は何処へ行ったのでしょうか」

今更自分の身の回りに気づくエルフ。それによってベルは事態が深刻であると受け取った。

彼女は物忘れが激しい。それと記憶喪失と言われる程の。

天然とは言わない。あまりにも異常だ。この寒空の下で鳥肌を立てながら笑顔で佇むなど。

通りを行き交う冒険者のみならず一般の住人ですら長袖だというのに。

例外があるとすれば女戦士（アマゾネス）だ。
ベルは確かに田舎者である。そんな彼でも自分の理解している範囲で言えばエルフの女性はおかしいと思う。
「あっ！」
「ど、どうしました？」
エルフの女性が突然、声を上げて先ほどまでの笑顔から焦りの表情へと変えた。
服が脱げても構わないという勢いで何かを探し始める。ベルも一度地面を見たが何かが落ちていそうな気配はない。
「何を探しているのですか？　僕も手伝いますよ」
「ありがとうございます。黒い手帳なのです。あれは一番大事なもの……。どうして……見つからないのでしょう……」
「……最初から持っていないようでしたよ。途中で落としたか本拠（ホーム）に置いてあるのでは？」
「そ、そうですか？　おかしいですね……。肌身離さず持っていなくてはならないものなのに……。どうしましょう……」
本当に困っているようで、【ファミリア】の入団方法より困っている人を優先する事にした。
彼女がもし本拠（ホーム）を忘れても【ファミリア】名は聞いたので他の人に尋ねれば詳細が分かるのではないか、と。

†

慌てて今にも泣きだしそうなエルフの女性を宥めつつ手帳の捜索をしながら【ヘスティア・ファミリア】の本拠（ホーム）に向かった。
道中、彼女は裸足なので痛くはないのか疑問に思ったが顔を見る分には平気そうだ。あと、道に血が付くこともなかった。実に慣れた様子なので心配しているベルは驚きっぱなしだ。
かの【ファミリア】は有名であるため、捜索はそれほど困難ではなかった。代わりに手帳は一向に見つからない。
やはり本拠（ホーム）にあるみて間違いなさそうだ。彼女の様子からも大事なものをそう易々と落とすのか疑問に思ったので。
【ヘスティア・ファミリア】の本拠（ホーム）は廃墟と化した教会である。その

場所もよく知られていたので見つけるのは簡単だった。
彼女を本拠（ホーム）に遅れ届けてすぐに喜びの声が聞こえてきた。
「ありました。ありがとうございます」
と、上半身裸のエルフの女性が胸を揺らしながら礼を言ってきたので慌てて顔を逸らす。
見目麗しい彼女は全身が白くて美しいが歳若い娘と大差が無いのでしっかりと服は着てほしかった。しかし、それを口にする勇気はない。
とにかく服を着てください、と大きな声で言って立ち去ろうと思った。しかし、彼女は表に用がある筈なので半裸のまま出てきそうな気がした。
ここまで大らかなエルフは初めてで、どう接すればいいのか。
（恥ずかしくないのか。それとも服を着ていないって気づいていないのか）
とにかく、あまり関わるのは自分にも彼女にも良くない気がした。
特にベルを見る周りの視線がとても痛い。羨ましい奴め、とか。
「服を着てください」
何とか相手に理解してもらうよう努力する。それしか自分が生き残る道はない、とでもいうように。
ベルの言葉が聞こえている筈なのにエルフの女性は理解できていないのか、一つ一つを確認する有様だ。そうして一時間近くかけて外に出ても大丈夫な服装に仕上がった。
普段はどういう生活をしているのか、全く想像できなかった。
それとも深刻な障害を抱えている元冒険者ということもある。
「……君はとてもいい人のようですね。紳士的ではあるけれど……、冒険者としては甘いですわ」
完璧な服装で表に出たエルフは先ほどまでの天然さが消え失せ、何もかも見透かすような超然とした態度でベルを見据えた。
今までの行動が全て演技であったとでもいうように。いや、そんな筈はない、とベルは自分に言い聞かせる。

†

白昼夢を見せられたのかと訝しむベルをよそに完璧な身なりに満足するエルフ。

その様子だけ見るとやはり演技であったと思うしかなくなる。だが、本当にそうだろうかと疑う気持ちもある。

騙されやすいと言われた事があるベルはそれなら別に構わないと言える。相手が納得したり、満足するならばそれでいい。怒りは湧かない。

(手帳を無くした時の彼女の顔は本当に困っていた。僕にはそう見えたし、見つかった時の喜びは本物のように感じた)

真実が何であれ、済んだ事だ。次にすべきは【ファミリア】の入団だ。

試しに入団できそうな【ファミリア】の当てを表に出てきたエルフの女性に尋ねてみた。

「……うちくらいではないでしょうか。でも……団員に余裕があるとも思えませんが……。寝室がいっぱいだからという意味で」

「……そうですか……」

「貴方は冒険者になりたいのですか?」

「はい。一応、そういう方向で……」

「女性の裸で取り乱すような若者では先が思いやられますわよ。それにモンスターはとても凶暴ですし、時には命を落とします。それを分かっておられるのですか?」

最初の裸の下りで顔がまた赤くなったが、他の事柄対しては想像は出来る。だが、それらは実際に実感しなければなんともいえない。

モンスターに関しては田舎でもいくつか出てきて襲われた経験がある。

あの程度と同等とは思わないが武器や戦い方を教われがなんとかなるのでは、と。

(さっきの人と雰囲気が変わったような……。妙に通る声のせいかな)

「私が入団試験をするとしたら受けますか? つまり推薦を一票手に入れる、という意味で」

「……入団許可は神様がするんじゃあ……」
「私達が抗議すれば覆すことは可能ですよ。我が【ファミリア】の団員は私を含めて四人です。多数決を取れば……三人棄権する筈なので君は入団できなくなりますね」
三人棄権の根拠は分からないが、危険が反対と同義ならば結局無理という事になる。
それともエルフの一票がとても大きいのか。
ベルには後がない。このまま滞在日数を費やして入団できなければオラリオから去らなければならない。であれば藁にも縋る思いで何でもするしかなくなる。
何でもといっても犯罪は勘弁願いたかった。そこだけば間違えてはいけない問題だと強く意識する。
「ここで勇気を見せるのが男というものです。君はこのオラリオに入った時点で多くの神々に注目されています。臆病者は黙って去りなさい。それが長生きの秘訣ですわ」
嫋やかなエルフから高貴な雰囲気が立ち上る。
すらりと真っすぐにのばされた脚。両手は腰に当てられて、柔和から得物を見定める表情へと変わっていた。
ここで逃げ出せば終わりだと言わんばかり。
「う、受けたいです。……内容にも……よりますが」
「えり好みしている内は何処にも入れませんよ。……それとも対策系ではなく制作や商業が良いのでしたら他を当たって下さいませ」
ベルの希望は探索系だ。鍛冶師などは専用のアビリティなどを既に持っていないと門前払いになる傾向がある。
多くの冒険者は【ファミリア】に入る前から何かしらの才能を得ており、一番の凡人は人間と小人族だと言われている。
回復薬を作るには『調合』が必要で、鍛冶師は『鍛冶』が必須。
探索系はこれといって必要なアビリティは無いがあった方が攻略は楽になる。無い者は無い者なりに努力しなければならない。

†

エルフの試験に合格したからといって入団が決まるわけではない。

ただ、味方が増えるだけだ。
戦闘が得意ではないベルに出来る事は殆どない。
相手は華奢な姿だが神から『恩恵(ファルナ)』を授かった冒険者の筈だ。どんな能力を持っているか分からない。
冒険者は【ステイタス】によって強化されている。見た目から強さを判断するのは悪手である。
「よろしくお願いします」
「いい返事です。先ほどは意見した限り……、紳士な君に相応しい方法はこれくらいでしょうか？　そこに立っていて下さい。一歩たりとも動かないように。……私が押したら、とか意地悪はいたしませんよ」
「はい」
どんな試験か分からないので緊張により心臓の鼓動が手を触れずとも分かるくらい激しくなっている。
エルフから細かい立ち方を指導された。腕を伸ばしても身体が傾かないように、とか。
（この状態で足を払われたら転ぶよな）
ベルの周りを回りつつ安定を見せたと判断したエルフは満足した。
それから武器による戦闘は無し、と告げられた。
「……私が女戦士(アマゾネス)であればこの後、口づけとかするのでしょうけれど……、それは致しません。ですが、世の中には悪い人がたくさん居るものです。例えば既に君の持ち物を奪っていったりとか」
「ええっ!?」
「何も知らない若者は格好の獲物ですから。そういう事もあり得るんですよ。君はどうやらお人好しのようですね。人としては大変好ましいのですけれど……、冒険者としては危機意識の欠如と言わざるを得ません。この先、苦労致しますから、駆け引きくらいは出来るようにならないと……」
ベルの周りをゆっくりと回りながらエルフは彼の白い髪や耳、肩を揉んだりする。
時より近づくエルフ特有の耳が鼻先をかすめそうになる。実際に

は充分離れていたけれど。
　間近で見る美しい女性の――しかもエルフの彫りの深い顔に身体がぐらついて仕方がない。だが、これが試験であるならば動いてはいけない。そう思って耐えた。
　彼女は条件として逃げ出さないこと。瞬きしてもいいけれど、顔を逸らしてはいけないこと。
「はい」
「それほど意地悪な命令はしません。例えば……自害しろ、などは……。ですが、君にとって無理難題であることは覚悟するように。……私と結婚してください、と言ったらどうします？」
「こ、困ります」
「素直でよろしい」
　微笑みつつベルの目の前で立ち止まるエルフ。その距離は四〇Ｃ（セルチ）ほど。
　決して密着せず、離れすぎず。互いの息遣いが辛うじて分かる程度。
「仮にそうなると……、我が同胞が目を血走らせて君を八つ裂きにしようとするかもしれません。それでも条件だから守ると息巻くと……、もっと事態は悪化するでしょうね。そういうことになると思うので私も婚姻などは条件に出しません」
　愛の告白だと色々と問題があるのは理解できる。だが、エルフの同胞が襲い掛かるほど、というのが想像できなかった。出来ないけれど酷い状況になるのは理解できた。
　苦笑を終えたエルフは改めてベルを真っ向から見据えて微笑む。
　穏やかな印象を持つ碧眼は獲物を決して離さない、とでもいうのように。

†

　エルフの冒険者は至って真面目である。決してやましい気持ちはなく、ましてベルに恋心を抱いたわけではない。――可愛い男の子である印象は認めるところだ。
　時々、自分の記憶が飛んでしまう事態があるが今ははっきりと意識

できる。
（……白髪の人間（ヒューマン）と共に居るところを同胞が見たら襲ってきそうですわね。ですが、邪魔はしないでくださいませ。これでも私は冒険者なのです。……頼りないのは自覚しておりますが……）
無垢な顔をしている彼は知らない。自分が冒険者（エルフ）になった理由を。
見た目は優しそうな印象を受けたかもしれない。けれども内面は血が滾（たぎ）るほど、野蛮で愚かな復讐心に囚われている。
目的の為ならば――自分の身など戦場に投げ捨ててしまえるくらいに。
「……試験を始めます。今より私の言葉は絶対厳守……。それを破るならばたちどころにオラリオから去りなさい。良いですね、人間（ヒューマン）の少年」
「が、頑張ります」
ベルの言葉を聞いた後、隠し持っていた小刀を顔の近くに持っていく。
言葉に偽りあれば首を掻き切りますよ、とニコリと微笑んで告げた。それに対してベルは恐怖心一杯で首肯を何度もした。
武器はいったん仕舞って、辺りを軽く見渡し、誰か駆け寄ってくる者が居ないか確認した。居ない事を確認してエルフは軽く息をつく。
「冒険者家業というのは楽ではありません。まして君が想像している程度の辛さでもありません。ダンジョンは我々を殺しに来ます。常に死と隣り合わせなんです。……ですから、君がここで逃げ出すようでは話しにもなりませんよ。はい、ここから君は余計な口を利かないように。呼吸はしていいですけれど……」
ベルが無言で首肯したのを確認してからエルフは上半身に身に着けていた衣服を脱いでいく。それに思わず声が出そうになったベルの顔をチラチラと確認する。
叫んでは駄目だし、目を逸らしても駄目。ただ、その場に立ち尽くすように、と。
上半身が裸になったところで腰に手を当てて下は脱ぎません、と宣言する。

「どうして目を逸らすのです？　いいですか、これは試験ですよ。世の中には裸同然の女戦士（アマゾネス）が……っしゅん。あー……。えと、あ、アマ……。女戦士（アマゾネス）が君のような少年に色目や身体を使って誘惑しようとしてきます。ですが、それが敵対【ファミリア】の手段であることもしばしあると聞きます。その時、今のようにっくしゅん。うー、寒っ……」

ただでさえ白い肌がより青白くなり、露出している腕はベルの位置からでも分かるくらい鳥肌が立っていた。それと鼻水が垂れている。

彼女も野外で裸になるのは辛いのだと理解した。しかし、それでも目を背けたくなる。なにせ、丁度いい位置に美乳がある。しかも、先ほどから揺れ続けている。

「おしっこが出ない内に終わりたいです。なんです、急に寒くなりませんでした？　全く今日に限って……。えっと、女戦士（アマゾネス）がなんでしたっけ。敵対ですか。彼女達は素っ裸で襲い掛かってきます。その時、君は目を逸らしているつもりですか？　死にますよ。いいんですか？　これは言わば免疫です。今のうちに慣れておいた方がいい。特に私達の【ファミリア】は女性ばかりです。いちいち胸が当たったからといって叫ばれてはうるさくて堪りません。だから、今のうちにしっかり見ておきなさい」

ほらほらと自分の身体を揺らして挑発する。目を逸らそうものなら手に持っている護身用の小刀がベルの首元に飛んでくる。

言い分は理解できる。それに慣れるのは難しい。

何か喋りたくても即座に口を閉じさせられる。見た目によらず強引な手法に驚いた。

いや、彼女は冒険者だ。あらゆる事態を想定し、ベルを試している。それは理解できるが刺激が強すぎる。それともこの程度はまだ序の口なのか、と。

確かに序の口である。それは次の行動で劇的にベルを貶める。

端的に言えばベルの腕を掴んで胸を触らせた。

（うわっ、柔らかっ。めっちゃ柔らかい）

「目線を上げて。私の顔を見る。美しいエルフの顔をこんなに近くで

拝める君は『幸運』の持ち主ですよ」
「ん……」
「仲間の中で私が一番裸になりやすい。だから、早く慣れないと駄目なのです。単なる興味で君にこんなことをさせているわけではありません。試験と言いましたでしょう？」
そう聞かれれば納得する。しかし、方法が過激だ。他に方法はないのか、とベルは独自に考えてみた。
結果は良い妙案は浮かばなかった。これくらい過激であればこそ有効的かもしれないと納得しそうになる。
可愛い女子の多い【ファミリア】であれば逃げ場はない。そんな中で冒険者として働くには彼女の言葉はとても重いと言える。
手に伝わるのは感触の他に外気で冷えた肌の冷たさだ。
可愛い顔なのに鼻水が口元を伝って触っていない方のおっぱいに落ちた。それをつい見てしまったがエルフは何も指摘しなかった。
鼻をすすりながらベルの顔をしっかりと見据えている。
「……本当なら一ヶ月くらいかけたいところですが……。今回は免疫をつける前段階程度に留めましょう。この後、抱き締めて接吻、まではしませんのでご安心を。今のところ逃げ出さないという事は見事ですわ。逃げるようではこの先冒険者としてやっていくことはやめた方がいい」
「……」
（この人……、本気なんだ。寒さに震えている所を除けば……）
「白髪の少年……。私の顔を見つめたまま数分ほど……。私が納得するまで胸を揉みなさい。いいですか、私が納得するやり方で揉むんですよ」
「!?」
そんなことできる訳が、と言いたいところだが不意に頬を小刀で切りつけられた。
微笑むエルフは至って真面目なようだ。
言い訳は許さない、という意思表示と受け取り、震える手を動かす。
それだけで充分ではないか、と思えるのだがエルフは全く納得しな

い。
「エルフには『大木の心』という心構えがあります。どんな状況でも決して慌てない。冷静に物事を考える……。今の君は支離滅裂な心持でしょう。それではダンジョンに潜っても深いところにはいけませんよ。さあ……」
そう言いながら胸を掴んでいるベルの手に自分の手を乗せてやり方を実演する。
その間も顔はベルを見据えたまま。全く視線を動かさない。
「女性の胸は柔らかいでしょう。今までこんなに触った事も無い筈です。しかも美しいエルフの胸など……。自分で言うのも恥ずかしいですが……。私とて羞恥心はありますよ。しかし、大事の前では小事に過ぎないだけです。大事なことは君が【ファミリア】に入る為の試験を受けていて、私はその為に応援しているのです。入ってしまえばその後はどうとでもなる、と思ってもらっては困ります」
動かされるまま彼女の胸を揉みつつベルは全身が発火する程の羞恥心と戦っていた。
もし、小ぶりな胸であればどれ程よかったか。
巨乳というほど大振りでもない。手に収まる丁度いい大きさの胸が心臓を跳ね上げる。
(こ、こんなに……。柔らかいおっぱいをこんなに激しく揉まないと駄目なの？　まだ終わらないの!?)
焦れば焦るほど彼女は時間を引き延ばす。条件は彼女が納得する揉み方で数分間続ける事だからだ。
ベルが甘い内は全く時間は進まない。下手をすれば夜中に差し掛かったり、大勢の通行人に見られる事態もありえてしまう。
おそらくそれでも彼女はやめようとはしない。一度、逃げ出せば容赦なく首を掻き切って来る。
†
羨ましい場面であると同時に命の危機にも立たされている。
なにより彼女は微笑みながら一切の躊躇いを見せていない。
何か喋ろうとすれば頬を切ってくる。顔をずっと見られているの

で兆候が読まれているようだ。
（わ、分かりました。後で文句を言わないでください）
両手で揉んでいるわけではないけれど長時間持ち上げたままだとだるくなる。おそらくそうなった場合はもう片方の腕で揉めと言ってくると予想する。
理解が及んだところで彼女はまたくしゃみをした。今度は長い金髪が靡いて顔にかかり鼻水が絡んでしまった。
風も少しあるので見ている内に美貌がどんどん崩れていく。それでもめげずに続けるエルフは凄いと思った。
ベルは手に力を籠めようとした時、彼女の顔がのぼせたように変化した。
少し驚いたものの胸を揉んでみる。すると薄っすらと微笑んだ。
「……あー、ようやくやる気になりましたか。良いですよ、その調子……。本格的に風邪を引いたようです。君がもたもたするから……」
顔をベルに向けたまま腰に装着してあった回復薬瓶を取り出し、器用に片手で栓を開けて飲み始めた。
風対策の薬だと言ったので、寒さ対策は一応準備していたのかと感心した。だが、上半身は鼻水で汚れまくっていた。
ベルはほぼ無心の境地で美乳をこねるように揉み続けた。一度始めれば後は惰性でなんとかなった。それが免疫なのか、と。
問題は彼女が納得するやり方でどれだけ続けるか、だ。
完全に風邪をひいて判断力が衰えていたら目も当てられない。
（少年に胸を揉まれる。悪い気はしませんが……。寒くて感覚が鈍ってきましたね。……下々の者が求めてやまない女体の神秘……。これで民が喜ぶのであれば……私は平気ですわ。我が肉体は国の礎……。それが彼らには理解できない。意識の乖離の埋め方は実に難しい）
感覚的に気持ちがいいかと問われればどうということもない。
他人の手の感触がくすぐったい、とは思うけれど寒さが今は勝っているので今以上の表現のしようがなかった。
無心になっているのは理解した。それでいい。しかし、それを常日

頃から発揮できればもっといい。
【ヘスティア・ファミリア】で共同生活をするならば彼にとって羞恥心との戦いが殆どになるからだ。嫌なら今のうちに逃げ出すべきだ。胸を揉んだ時点で見逃すつもりではあったので。

†

少年に恥じらいの試験をそろそろ終わらせようかと思った。顔は既に血だらけだし、出血量の都合で意識障害に陥っては困るので。
軽く彼の胸を押す。すると胸を掴む手に力がこもり引っ張られた。
「……おー」
すぐに手を払おうかと思ったが最後まで見定めることにした。
乳房を滑るように少年の指が移動し、乳頭に差し掛かったところで離すまいと摘まれた。それが割と痛かった。
彼は無心で揉み過ぎて絶対に離すもんか、という意思が強く働いているようだった。
一度、指が完全に離れ、美乳がプルンと大きく揺れたもののベルはそれを再度掴んだ。
その心意気やよし、と思わずエルフの女性が微笑みからより口元を歪めて笑顔を形作る。
(そんなに私のおっぱいが気に入りましたか。好きなだけ揉みなさい……、と言いたいところだけど制限時間は過ぎましたわ)
合格者には褒美を与えなければならない。
寒空の下。唐突に半裸の女性のおっぱいを揉ませたのだから礼を尽くすのが王族の務め。
いや、元が付くか、と。
エルフの女性はベルを抱き寄せて頭を撫でた。よしよし、と。
「試験は合格と致します。……もし【ヘスティア・ファミリア】に入りたい場合は私が味方になってあげます。仲間内の発言権はそれほど高くないのですが……。約束は約束です」
「……あ、ありがとうございます」
頭を撫でられた時に飛びかけた意識が戻ってきた。その影響で一度は手放した彼女のおっぱいに掴みかかった事を思い出し、顔が赤く

なる。しかも今も手は勝手に動いている。
お互いが離れようとする時もベルの手は胸を掴んだまま。
「大胸筋を掴んでいると思えば平気ですよ。これから好き放題揉めますしね」
「……胸を揉むために【ファミリア】に入りたいわけじゃないんですけど」
分かっています、と言いながらエルフの女性はベルの手を擦(さす)り、胸から離した。
意外とあっさりとした仕草で行(おこな)われたので驚いた。まるでいつものことのように手慣れているような――

†

人通りが多くなる夕方に差し掛かり、ベルを解放した。もちろん、顔の傷は回復薬(ポーション)で治した。
滞在期間いっぱいかけて他の【ファミリア】を探し、そちらに定住してもよいし、見つからなければもう一度、この本拠(ホーム)を尋ねるように伝えた。
白い髪の少年を見送った後、エルフの少女は持参していたタオルで鼻水などの汚れを取り、服を着る。そして――
空に向かって両手を掲げた。
「タダで見学しようとは思わない事ですわ。私達は零細【ファミリア】なのです。いくらかのお恵みを期待します」
そう言い放つと何処からともなく革袋が飛んできた。それもあちこちから。
何者の仕業かは聞かず、異変が終わった後は一つずつ革袋を拾っていく。その中に入っているのはいくらかのヴァリス金貨だ。中にはモンスターのドロップ品もあった。
「ありがとうございます。……ですが、私とて羞恥心がございます。皆様のご期待にいつでも応える事は出来ませんのであしからず」
そう言って深く頭を下げると周りにあった気配は唐突に消えた。
それから程なく物陰から自身の身長ほどもある杖を持つ人物が姿見せた。

腰にかかるほど長い翡翠色の髪と瞳の同族の女性だった。
「……奴ら(変態共)を喜ばせても良いことは無いぞ」
冷徹な物言いでエルフの少女を咎める。けれども、いつものことのようにひらりを躱す。
そうだとしても、と言いおいて。
「喜んでくれるのであればしばらくは大人しくなるでしょう。寧ろ……後々酷くなる方が性質(たち)が悪いですわ」
「……この問答は不毛だな。それより寒空の下で裸になって身体の芯から冷えただろう？　うちの【ファミリア】の風呂場を使うといい。……後で何人かの神々にはロキ自ら締め上げてもらう」
「……ロキ様も私の胸を狙っておいでなら……締め上げますかね？」
この指摘に長身のエルフは唸った。
寧(むし)ろ一緒になって騒ぐ方だ、と思い出したからだ。
本人が良ければ、とは立場的にも言いたくない。けれども、事態を混乱に陥れるのは本意ではない。
鬩(せめ)ぎ合う葛藤の中で先の少年を立てる意味で引き下がる事を選んだ。だが、納得はしないと言明する。
彼女の答えに金髪のエルフは微笑みながら礼を述べた。

＃5―03　ファミリア

意外な、または驚愕の試験内容を終えた白髪の少年は人目に付かない路地裏で荒い呼吸を整えるのに必死になった。

未だに手には柔らかい感触が残っている。

言い分は確かに理解できるが――いや、今後を見据えればもっと不味い状況が起こりえた時、自分はかなり取り乱す。そうなれば【ファミリア】の雰囲気を壊してしまうかもしれない。

それでも――深紅（ルベライト）の瞳を夕暮れの空に向けて。

（……冒険者、やめようかな）

せっかく期待を胸に秘めてここまで来たのだから、それはあり得ないのだが――それでも考えてしまう。

女性たちを前にしても冒険者でいられる自信があるのか、と。

さすがに同じ展開は無いと思いたいが不慮の事故という想定ならありえる。その時、慌てるだけならば相手の言いなりになるし、泰然とすればいいのか、というと――

（言い訳が出来なくなる。……言い訳をしないように振舞うことは大事なんだろうけれど……。今の僕には出来そうにないな）

ダンジョンの探索は男性ばかりではない。半裸な女戦士（アマゾネス）も参加する。

そこで恥ずかしいだ何だと我がままを言っている余裕はおそらく無い。

まだ冒険者でもないのに既に満身創痍の若者ベル・クラネルは拠点とする宿にどうにか逃げ帰った。そして、そのまま薄い生地の掛布どんを頭から被って煩悩と必死に戦った。

次の日になり――前日は大して寝付けなかったけれど――【ファミリア】探索に向かう事にした。どの道、のんびりしている余裕は資金的にも無いので。

今回は最初から【ヘスティア・ファミリア】に行くべきか悩んだ。

候補はヘスティアとエニュオだ。

エニュオは『楽しい【ファミリア】生活をしよう』を募集要項に書いてあった筈なのに真面目な意見を貰ってしまった。ある意味では騙された。

いや、実際は何処も本質は同じなのかもしれない。

判断するのは入団志望者だ。

優柔不断のうちはきっと何処にも入れない。

†

多くの冒険者が集まりそうな場所で聞けるだけ尋ねてみた。ある意味では度胸が付いたお陰ともいえる。

今のところ胸を揉んだ噂は聞かないが――いがれは何処かで出るかもしれない。

冒険者の多くは入る前に自己鍛錬などを済ませ、冒険者に必要なアビリティなどを得ている人が多い。

特に獣人の亜人（デミ・ヒューマン）は人気がある。才能が乏しい人間（ヒューマン）はベルでなくても不人気で何処の大手も取りたがらない。

何らかの事情で眷族を集めているところはあるにはあるが、そういうところはえてして怪しい。あるいは犯罪系。

さすがにベルも冒険者になる為に犯罪者にはなりたくない。

【ファミリア】に入ったら基本的に自己責任だ。装備もアイテムも。主神や団員達が養ってくれると思わない方がいいな」

「それを当てにしてる奴は大抵、三日と経たずにオラリオを去る事になる」

自分から売り込むにしても実力が無ければ駄目だし、将来に期待するほどの魅力を示す方法もあてがなければ無理だ。

特に田舎から冒険者に必要ものを一切持たずに来るような間抜けが欲しい主神は居ないに等しい。

一見馬鹿にしている冒険者達も修羅場を潜り抜けて今の地位に居る。彼らは彼らで日々、鎬（しのぎ）を削って生きてきた。

（単なる憧れだけでは難しいのは分かっているけれど……。想像以上に難しい事は理解した）

女の人の胸で慌てているようでは冒険者は夢のままで終わってし

まう。
活動資金も底をつきかけている。早く決心しなければ田舎に帰るどころか、オラリオの路地裏で野垂れ死んでしまう。
通りを歩いている途中で人生に諦めた人間（ヒューマン）や小人族（パルゥム）を何人も見かけた。あの中に自分もいずれは混ざってしまう。
冒険者は皆が仲良く活動する場ではない。他人を蹴落としてでも上を目指す場だ。
ある意味では弱肉強食。だからこそ冒険者の面構えは一般人とは違う。

†

滞在最終日。情報を集めて色々と当たってみたものの予想通りの結果に終わってしまった。
どの人も事前に下準備を整えてから【ファミリア】に臨んでいる。それで駄目な時は諍いが起きて眷族に返り討ちに合う。そういう現場を何度か見掛けてしまった。
入団希望者と眷族では顔つきが段違いに違う。覚悟もおそらく違う。どうしてかは分からない。
それらを見てしまうと勇気が揺らいでしまう。
やはり自分はここに来るべきでは無かった、と。
（いずれは入団できるかもしれない。……その前に活動資金が底をつく。なりふり構わない方法も神の前では無力だ。彼らはそういう所をきちんと見抜く、と聞いているから）
朝方、中央広場（セントラルパーク）を通り、露店の立ち並ぶ通りに行き、格安のジャガ丸くんを販売している店に向かった。
開店準備をしている店員であり神を見つけた。
（やっぱり居た。本拠（ホーム）が無い、わけはないよな）
大抵の神は【ファミリア】の本拠（ホーム）に居る事が多く、外に出歩くことは少ないと聞いていた。人目に付いてはいけない、という規則は無いので会おうと思えば会える。
ベルは何となく神の様子を眺めた。
彼女も自分の眷族を持ち、冒険者を育成しているのか、と。

「んー、そこの人間（ヒューマン）の少年。開店を待ってくれているのかい？」
「そういうわけじゃないんですけど……。皆しっかり働いているんだなって」
「……そう言われるとこそばゆいけれど。皆ってわけでもないぜ。だけど……、確かに眷族（子供）達は働き者さ。命を懸けている事を除けば頼もしい存在でもある」
「神様は僕らが冒険者になる事に期待とかしているんですか？」
「難しい事を聞くね、君。そりゃあ、期待もしているさ。しないと眷族（子供）達が寂しがるだろう。何の為に冒険者になると思っているんだ。それぞれの野望を叶えるためじゃないか」
作業の手を止めて女神はベルの側にやってきた。
少しくらい開店が遅れてもいいや、と。
人生に迷っている子供のように見えたなら、それに助言くらいは神としてくれてもバチは当たらない筈、と思いながら。
「ボクの【ファミリア】は割合い自由だ。女ばかりだけど……。他の眷族程高尚な望みがあるわけでもない。日々、健やかに暮らせればいい。……だけどね、ギルドの規定はそれを許さない。定期的に上納金を収めなければならないんだ。知ってるかい？【ファミリア】にはランク付けがされていてね。上に行けば行くほど収める額も増える。そうそうのんびりも出来ないんだ。内は更に問題児が作った借金がべらぼうにあってね。無理してでもダンジョンに潜って稼いでもらわないといけない。ボクも暢気に本拠（ホーム）で寝ていることは出来なくなってしまった」
つい聞き手に回ったが、思いのほか聞いてはいけない事まで聞くはめになった。
女神の【ファミリア】には借金がある。――聞かなければ良かったことかもしれないけれど。
自分が冒険者になれるかどうか、とは別にギルドの規則を守らなければならない事も控えていたとは思いもよらなかった。
常に働き続けないと【ファミリア】が維持できない、という意味なら多くの冒険者の顔も険しくなるはずだ。何となくだが、そう理解し

た。

ボクの【ファミリア】に入らないかい？

にこやかに微笑む神は唐突に言った。

濡れ羽色の黒髪に水色の瞳。小柄な体型にも拘わらず大きな胸の神様が。

ベルにとっては大変ありがたい申し出だ。神自ら勧誘してきたのだから。だが、気掛かりな事がある。

女神の【ファミリア】は女性ばかりだと聞いたので。

「ボクは処女神の一柱（ひとはしら）だけど男性眷族を入れない規則はないよ。探索系でランクも底辺だけど。それで良ければ歓迎するよ」

「……いえ、なんか……その……」

言葉が見つからないが申し訳ない気持ちになってきた。

何処でもいいから【ファミリア】に入って冒険者になる、という安易な考えしか持っていなかった。所来の展望も無く、ただ英雄に憧れているだけの存在――

そんな自分を受けてくれるのであれば全力で応えたいと思わなくもない。

†

活動資金も底をつきかけている。下手をすれば故郷に帰る資金も足りない程だ。

単なる仕事であれば冒険者でなくても何処か働けるかもしれないが、それは考えていなかった。

もはや退路は断たれたと考えた方がいいのかもしれない、とベルは思う。

（その前に確かめないといけない事が……）

神の前で嘘は付けない。誤魔化したままでは後々の禍根に繋がる。

ベルは眷族の事をまず尋ねた。エルフが居て、その人はどういう人柄かを。――案の定、出会った特徴のエルフがまさに団員として存在していた。

彼女と出会い、胸を揉んだことを正直に告げた。

言っている内に神の顔が険しくなったり、顔を赤くする場面があっ

たが激高することなくひたすら唸って話しを最後まで聞いた。
途中で怒られる事は覚悟していたけれど、ベルは嘘をついたままで居る事に耐えられない。
「……随分と生々しいやりとりがあったんだね」
「……逃げると切られますから。実際に頬を何度も切られてしまいました」
女神は大体の状況が想像出来たようでベルを見る目が哀れみに近いものになった。
もちろん、おっぱいを揉んだら入団が認められる、などという条件は存在しない。まして男子にふしだら事をさせる気も無い。
（……この人間（ヒューマン）は可愛いかもしれないけれど……。……ああ、それで小金が稼げたって言ってたのか。……自分の裸を売り物にしないでほしいよ、全く……）
周りに人が居る。それもたくさん。
そんな中で少年は何を思って正直に告げたのか。もちろん、嘘をついていない事は分かった。
女性団員しか居ないから問題が起きる可能性はとても高い。そんな中でエルフノ団員は特に対外的にも良からぬ噂が立っては困る眷族だ。そんな団員が最初に彼と接触したのは僥倖かもしれない。
胸を触らせた後の彼女の顔は意外と嬉しそうであった。何があったかは聞かなかったが、新しい団員希望者との面談をしていたのだと理解した。
（……とても面談とは思えないんだけど……。エルフはエルフでも、君は最も高貴な……）
大きくため息をつく女神。
持ち帰った資金からも秘密裏、というわけでもない。それはそれで実に腹立たしい。
この怒りはベルに対してではない。
「……状況は理解した。ようこそ我が【ファミリア】へ。ボクは君を歓迎しよう」
「ええっ!?　男の僕でもいいんですか？」

「いいよ。……そうしないとあの子が恥をかいたままになってしまうじゃないか。君がもし黙ったまま去るようだったら、後で事情を知ったボクは暗殺者（ナナツタエ）を差し向けていたかもしれない。君は運がいいよ、全くね」

今は言葉だけだが制式に参加させてもいいと女神ヘスティアは思った。それから仕事があるのでベルには一旦、宿を引き払ってもらったり、本拠（ホーム）の場所を覚えてもらう事にした。

罰則については仕事に身が入らなくなるので保留――後でどうせ忘れる。

こうして暫定的にベルは冒険者への切符を手に入れる事になった。

†

神との口約束だけで眷族になれるわけではない。【ファミリア】の団員になるには儀式の様な事をしなければならない。

その代表格が『神の恩恵（ファルナ）』の授与だ。これを一度受ければ死ぬまで効果が継続する。

一般的に知られている範囲であればギルドでも教えてもらえる。

時間まで散歩するより【ファミリア】の位置と団員についての情報を集める事にした。

（……そういえば、あの神様は【ヘスティア・ファミリア】だからヘスティア様か……。団員が四名だったはず）

知られている名簿が確かなら四名だ。全員女性。

先に向かった【エニュオ・ファミリア】も眷族は全員女性で十人以上在籍している。

男性の冒険者の多くは大手に居るので無名に近いほど女性が多くなる傾向にある。ただ、種族はまばらだ。

【ヘスティア・ファミリア】の活動はダンジョン探索が主だが色々と問題を起こす事で公開されない情報が多い事に驚く。

（優しそうな神様なのに……）

神に問題があるわけではない。それはギルド職員も認めている。

ここ最近は大人しくしているので目立たないだけ、と教えてもらった。最初期のころはもっと荒れていた、とか。

何にしてもベルが決定した事にギルドは止める権利は無い。それが例え犯罪者の【ファミリア】だとしても。

ある程度の助言を受けた後、ベルは神(ヘスティア)の仕事が終わる頃に【ヘスティア・ファミリア】の本拠(ホーム)に向かった。

かの【ファミリア】の本拠(ホーム)は廃墟同然の教会。外見はボロいが中は眷族たちによって改装されている、とのこと。この点は【エニュオ・ファミリア】も同様だった。

半裸のエルフが出入りした場所でもあるので迷うことは無かった。

(……外から見ると小さい建物なのに五人も共同生活しているようには……。地下でもあるのかな)

恐る恐る建物に入るとまず朽ちた教会らしい佇まいが見えた。今は来ない信者たちの為に用意された長椅子がそこかしこにあり、奥にある何らかの神の像もボロボロだ。

石造りの為か、床は丈夫そうだった。

辺りを確認すると矢印で入団希望者はここから入るように、という指示書きを見つけた。ほぼ隠し扉のような形なので指示が無ければ見つけるのが難しい様相になっていた。

扉を開けると地下への入り口になっており、そこを降りていく。

一階層分を下ると明るい光りが漏れているのに気づく。人の気配があり、おそらく団員か神が居るものと思われた。

†

下まで降りると扉が無い事に気づく。すぐに部屋に入れるようになっているようだ。

冬場は風通しがいいから寒そうな気がした。実際、地下の為か、肌寒く感じる。決して悪寒ではないのは分かった。

ベルは部屋に顔を出すと何人かの眷族らしき人物と談笑している神の姿を見つけた。

「す、すみませーん。今、いいですか?」

声をかけると二人ほどの眷族が黒髪の神に指さしで伝えた。

現場には女性だけで他の来客や自分と同じ入団希望者がたくさん来ているような雰囲気は無かった。

「早速来たねー。入って入って」
「は、はい。よろしくお願いします」
気さくな神様の言葉に従い、部屋の中へと入る。
部屋には女神ヘスティアの他に見慣れない女性が二人いるだけ。
エルフの姿は無かった。
一人は右目を眼帯で隠した赤髪でもう一人は茶髪。共に人間（ヒューマン）だった。
残り二人の姿は軽く確認したかぎりでは無かった。
地下の部屋の内装は天井を除けば明るい色調の化粧板などで装飾され、調度品も新調されているようで埃臭さは感じない。
部屋の間取りは大人数が生活するには狭いが他の部屋へと繋ぐ扉があったので、思っている以上に広いのかもしれない。
空いている場所に腰掛けたベルに赤髪――左側だけ。右側は白髪だった――の女性はにこやかな顔を。もう一人は特に表情らしいものは表さない。ある意味では何の興味も抱いていないようにも見える。
「この子が新しい団員候補さ。どうかな、団長君」
「……気弱な田舎の少年って感じですね」
（……実際、その通りです）
「……」
団長と言われて言葉を発したのは赤髪の女性で茶髪の方は無言のままだ。
神ヘスティアは嬉しそうに、楽しそうにベルの事を話すが入団についてはまだだった。
緊張するベルは自己紹介から始めた。
「初めまして、ベル・クラネルといいます。英雄に憧れてオラリオに来ました」
「……そう。頑張ってね」
「……」
「二人共、新しい団員候補に言う事はそれだけかい？」
「……特に言うことは無いです。まだ本決定でもない相手ですし

……」

確かにね、とヘスティアは言って団員の顔色を窺う。

男子ということで毛嫌いするのかと予想していたが団長は特に発言してこなかったので彼女は問題なし、と判断した。隣に居る団員も無反応なので問題無し、と。

残る二人の内エルフとは既に面識があるし、こちらも問題無し。であれば必然的に加入に問題は無いと判断するしかない。

ヘスティア自身もベルの受け入れに忌避は無い。寧ろ、漸く来た男の子だ。歓迎しない理由はない。

†

【ヘスティア・ファミリア】の実質的な団長は半分だけ赤く、残りが白い髪の女性である。ベルは彼女によろしくお願いします、と改めて頭を下げて挨拶した。

握手をしようと手を出すも彼女は両手を手袋に包んだままだった。緊張していて気づかなかったベルは団長の女性の姿に驚いた。

歴戦の戦士の様な傷だらけであることに。見た目は強そうな感じはしないのだが――

「それより神様。一人は奥に居ますが連れてきますか？」

「そのままでいいんじゃないかい？　それより入団の儀式をしないと」

「……随分とあっさりしていような気がしますが……。僕は何をすればいいんでしょうか？」

入団に伴う強さの確認とか血判状とか契約書とか危惧していた。それについて団長は噂にめげずに来た時点で特に確認するようなことは無いと言った。あえて寝室をどうするか、が残っている、と。

女性団員しか居ないので一つの部屋で雑魚寝する。ベルは当面は今いる場所で寝てもらう事になる。

「ボクはみんなと仲良くしてくれればいいよ。それと寝室か……。それとベル君。眷族になったらギルド本部がある『摩天楼』に行くように。冒険者専用のシャワー室を借りられるから。この本拠には風呂場は無いからね」

「分かりました」
使用料はかからないが冬場は移動するだけで湯冷めしやすい。
その後、淡々と説明を受けるが無言の団員は最後まで大人しくしていた。聞けば普段から大人しいという。
思っていたよりあっさりと事が進むので何か条件は無いのか、と尋ねてみた。
「あるとしても【ファミリア】の借金くらいだよ。だいたい二千万ヴァリスくらいあるから。どんどん強くなって下層に潜って稼いできておくれよ」
「に、二千万っ!?」
「これでもかなり減らした方さ。うちの団員は色々と……、下層まで潜れないんだ。出来なくはないんだよ。初期から受けているギルドの制限に引っかかるから。君ならきっと何の条件も課せられないと思うけれど……」
「……この【ファミリア】はいったい何をしたんですか？」
「えー、そりゃあ、色々だよ。聞かなかったかい？【ヘスティア・ファミリア】には問題児が居るって。その影響さ」
神が言うと団長は苦笑したがもう一人は無関係だ、と言わんばかりに無反応だった。
動いているので人形の類(たぐい)ではないのは理解した。――その彼女は客人であるベルに水や食べ物などを用意していた。黙って見ている分だと大人しい給仕だ。

†

眷族の儀式は簡単に済むが問題はその後だとヘスティアは告げる。
ここには居ないエルフの団員の胸を揉んだ事だ。もし、話しが広まっていれば同族の眷族達に嫌がらせを受ける事を覚悟するように、と。
「あの子はただのエルフじゃないからね。何もなければそれに越したことはないんだけど……。全く、困った眷族(子供)だ」
苦笑しつつ儀式の為に場を整備する団長達を眺める。
世間的な噂はベルの耳には入っていないし、ギルドでも聞かなかっ

た。それについては神だけが胸に秘めている可能性を示唆する。
「少なくとも君は他の神に弱みを握られた。それは間違いないよ。その上で冒険者として働かないといけない。……結構、大変な毎日が始まるけど……。改めて聞くよ。冒険者になる事に後悔はしないかい？　このまま黙って故郷に帰る事も選択の一つだ」
「……いえ、折角の厚意に甘えさせてもらいます。冒険者になりたくてオラリオに来ましたから」
「そうかい？　なら……、ボクから言うことは無い。後でエルフ君に会うといい。儀式は君の背中にボクが『神の恩恵（ファルナ）』を注ぎ込むだけ。そして、君は冒険者として【ステイタス】を得る。今までの人生が劇的に変わる。でもね、才能は君自身が伸ばさなくてはならない。ボクに出来る事は【ステイタス】の更新と新たに発現する『アビリティ』の選択くらいかな。あまり期待しないように。これは他の神も同様だけどね」
　説明を終え、部屋に神とベルの二人だけになった。
　ヘスティアはベルに上半身裸になるように言った。肌に直に触れる必要があるので。
　【ステイタス】は背中で操作する。
「……そうそう。武具はギルドから借りられるから。最初はアドバイザーを付けるように。説明はギルドで聞いてくれよ」
「分かりました」
「じゃあ……、やろうか。君が冒険者としての第一歩を踏み出すきっかけを……」
「よ、よろしくお願いします」
　服を脱ぎ終わったベルは長椅子にうつ伏せになる。その背中にヘスティアは乗り、軽く彼の背中を擦る。
　待望の男の子だ。普段よりも大事にしたい。その気持ちを押し込めて儀式に意識を向ける。
　どの眷族も特別扱いはしなかったが、ベルはどんな冒険者になるのか、期待に胸が膨らむ。
（出来れば問題行動を起こさない方がいいんだけど……。ボクの

【ファミリア】は騒動に祝福されているらしいね、全く。実にありがたくない）

白い素肌の背中を眺めてからヘスティアは用意した針で指先を刺す。致命的なケガを負うと天界の規則（ルール）に抵触し、強制送還されてしまう。

軽度なものであれば問題は無い。

そうして指先から血を一滴ベルの背中に垂らす。その後、神にしか理解できない記号を描く。

すると背中に光りの波紋が生じ、朱色の文字【神聖文字（ヒエログリフ）】が刻まれていく。

それぞれの神を象徴する紋章（エンブレム）の下に眷族独自の【ステイタス】が表示されるが基本的に本人には見えない。それらは彼らに理解できる共通語（コイネー）に翻訳して伝えられる。

「一度刻まれた【ステイタス】は君が生きている限り有効だ。勝手に他の神に改竄される事もない。……けれども、改宗（コンバージョン）したい時は早めに言ってくれ。出来るだけ善処するよ」

「はい」

「登録としてはこれで終わりだ。君の【ステイタス】は初期値だからいきなり強くなった、とかにはならない。誰でも最初はレベル1（ワン）から始まるものだからね」

念の為に紙に写した【ステイタス】をベルに渡す。

その紙は不用意に見せびらかしてはいけない、とヘスティアは厳命する。

想像を絶するような大仰な儀式はなく、あっさりと正式な眷族になったのだがベルには実感が湧かない。しかし、他の【ファミリア】も同様の登録方法だから誰に聞いても同じ答えが返ってくるよ、と彼に伝える。

あくまで団員になっただけで強くなるのはこれからだ。早速、団長を呼びつけギルドに向かうように指示する。

「今日はギルドへの報告だけで本格的なダンジョン攻略は明日からにしなよ。折角入団したのにいきなり初日で死んでもらっては困るか

ら」
「そ、そうですね。武器もありませんし」
「君がギルドに行っている間に寝床の整備をしておくよ。あと、ポラン君。食料の買い出しや冒険に必要なあれこれを教えてあげてくれ」
「分かりました。では、……クラネル君。行きましょうか」
紅白の髪の団長『ポラン・ブーニディッカ』の言葉によろしくお願いします、と応じる五人目の眷族ベル・クラネル。
二人が本拠（ホーム）から出て行った後、ヘスティアは彼の【ステイタス】の写しを改めて眺める。
「……どんな成長をするのか……」
（……それよりもエルフ達に因縁を付けられないか心配だな……。今まで女所帯だったし。あの子はきっと苦労する。……それに負けなければ化けそうな予感はするけれど……。どうなるんだろう）
心配事はたくさん控えているが未知への興味はそれ以上にある。
他の団員達もそうだった。だから、ベルもそうである、と。
神に出来るのは自分の眷族（子供）を信じる事だけ。少なくともそれだけでも彼らにとっては心の安らぎとなる。
――四人目の眷族のように。

＃５―０４　エイナ・チュール

晴れて【ヘスティア・ファミリア】の団員になった白髪の少年ベル・クラネルは赤毛の女性団員と共に迷宮都市オラリオの中心にある『摩天楼（バベル）』に向かった。

多くの冒険者が向かう冒険者ギルドがあり、その地下には広大なダンジョンが存在している。

眷族になりたての者はまずギルドに報告し、今後の予定などを組んでもらう。特に駆け出しはアドバイザーを付けた方がいいと言われている。

荒くれ者は聞く耳を持たず、勇猛果敢にダンジョンに挑戦したりするが大抵は早期に挫折するか早死にする。

「今日は手続きだけ。後はシャワー室などの確認かな」

「分かりました」

団長ポラン・ブーニディッカから簡単な説明を受け、冒険者として登録と約束事などの講習を受ける事になった。

アドバイザーはそれぞれの冒険者が自分の希望で選べる仕組みになっている。絶対に希望通りになるわけではないが、かなりの部分は叶えてもらえる。

（エルフの女性でもいいって話しだけど……。獣人の人も居るんだよね？）

ポランからは特に指令の様なものは出なかった。あくまで見守る役に徹している。

分からない事は質問してもいい、とは言われていた。

「私は待合室に居るから。君は色々と聞いておくといい」

「はい」

ベルと別れたポランは受け付けの近くにある長椅子に座った。

手続きは書面の記入が殆どで実技などは行（おこな）わない。一番の難関は冒険に赴く為の規則についてだ。

長々とした説明が続く。罰則の厳しさや命の保証の無いこと、など

など。

――担当アドバイザーはほぼ希望通りになったのが嬉しかった。

「彼女が君の担当アドバイザーだ。質問などは彼女に聞くように」

同僚の獣人の女性から紹介されたのはハーフエルフで眼鏡をかけた女性だ。

端正な顔立ちで見た目は穏やかそうな印象を受ける。エルフは総じて気難しい、という思い込みがあったが彼女はどことなく親しみやすいとベルは思った。

まずは挨拶から始めて、今後の方針などを淡々と告げていく。

「エイナ・チュールです。それでは、ベル・クラネル氏。いくつか質問しますので正直にお答えください」

「は、はい。よろしくお願いします」

所属【ファミリア】から答えられる個人情報を色々と伝えた。その間、エイナは無表情のまま仕事を忠実にこなしていく。

【ヘスティア・ファミリア】が問題行動の多いところだと知った上で。

エイナ自身は特に偏見なく新たな団員の様子を窺っていた。印象としては無鉄砲な若者だ。何も知らない少年が武器を持ってこれから危険なダンジョンに挑もうとしている。

彼女は注意は出来るが止めることは出来ないし、権利もない。かの団員のようなギルド本部の意志が働くような条件でも満たさない限り。

†

ベルの印象では武器を渡された後、すぐにダンジョンに潜れると思っていた。しかし、実際は様々な制約がある『仕事』と化していた。

ダンジョン内で得た魔石やモンスターからのドロップアイテムの換金方法。または取得方法。初心者にもわかりやすくエイナは説明する。

何も知らないベルからすればアドバイザーはとてもありがたい存在だった。

（……もし、アドバイザーさんが居なければ僕は無謀に突っ込んで危

険な目に遭っていたかも）

時にそれは有効かもしれない。だとしても、いきなり命を投げ出したいとは思っていない。

丁寧に説明してくれるアドバイザーの言葉を真剣に聞き入った。

モンスターの種類や傾向と対策については別途資料を持ってきて指導までしてくれる。さすがに戦い方までは教われない。

「強くなる方法や戦い方はそれぞれの冒険者が見つけ出すもので我々ギルドの管轄ではありません。それが出来るならばギルド自らモンスターを狩りますよ」

「そ、そうですか」

「私は貴方の担当となりましたが……、安易に死なせる気はありません。生きて帰ってきてくれなければ……。それで……、方針ですが……。何かご予定はお決まりですか？」

「いえ、特には……。他の団員と相談しながらになると思います」

まだ【ファミリア】に入ったばかりでポラン以下の団員の事は全く知らない。

その辺りも含めて時間をかけるつもりであることを伝える。

「……団長であるブーニディッカ氏は噂を除けばとても信頼のおける方です。おそらくダンジョン以外では……。しっかりと準備を整えてから冒険に臨んでください」

「はい。ありがとうございます」

（いい笑顔……。でも、それがいつまで続くのか。クラネル氏は半年持つのか、それともその前に脱落するのか）

冒険者は短命である。特に駆け出しは顕著だとエイナは知っている。

【ランクアップ】出来ない彼らはいずれ焦り、無謀な行動に出る。時にそれが自分の意に沿わない事があったとしても。

生気の無い小人族（パルゥム）達が街の片隅に居る事をエイナは知っている。夢破れて障害者と成り果てた冒険者をエイナは知っている。

ベルもそんな彼らの仲間入りをするかもしれない。それならば最初から冒険をしない方が彼の為だ、とも思える。しかし、ギルドとし

て彼の行動を止める権利は無い。
何があろうと自己責任だ。それが分かっていてもやはり――冒険者には生きて帰ってきてほしいし、笑顔をまた見たいとも思っている。
彼女が担当した冒険者の半数以上は生きて帰らなかった。だからといって説明が無駄だと思った事は無い。
常に真摯に向き合う。それがエイナの身上であり、エルフとしての矜持だと思っている。
（……いや、エルフは関係ないか……）
説明を終えてベルを見送った後、どっと疲れが襲ってきたエイナは軽く眼鏡の位置を直す。
アドバイザーが受け持つ冒険者は多い。その殆どは言う事を聞かない。素直なのは最初だけ、というのもある。
ベルは素直な方だ。それが今後どうなるのか――期待半分、不安半分だ。

†

エイナからの説明は今後も続く予定だと理解したベルは待っているポランの下に行き、説明できるだけのことを伝えた。
アドバイザーの言葉はポランもある程度知っているので分からない点は無かった。
その後、ベルを連れて摩天楼（バベル）の上層に向かう。
「この上は武具を売る商店や飲食、冒険者の為の様々な施設がある。ダンジョンに挑戦する前に色々と見ておくといい」
「はい」
移動する時は魔石の力を用いた昇降機を使う。階段に比べて労力がほとんどかからないので楽だった。
仮眠室やシャワー室の位置を覚え、飲み食いできる店。武具の店を一通り回った。
更なる上はとある【ファミリア】が貸し切りにしているので一般の冒険者は立ち入りできない。間違って行こうものなら殺されても文句が言えない事を伝えられる。

「そういう場所もある。上におわすのは下界を一望したい神様だ、と言われている。上層階は殆ど神様の為の施設が多いって話しだから、どの道、我々は立ち入り禁止だよ。神様専用の風呂場や会議室なんかもあるらしい」

実際に行っている神から聞いた話しだけど、と。

店を回り終えた後は地上で食料と身の回りに必要な道具の買い出し。

借金はあるが活動費用は別に保管している。

「クラネル君には五〇〇〇〇ヴァリスを渡しておこう。これで満足な武器は買えないけれど……。まずは寝泊りするのに必要な物を買いなさい」

「ありがとうございます」

買い物の仕方や値段の見方をポランは丁寧に説明する。

必要な物資は時に一人で買わなければならないし、時と場合によれば値段はすぐに変動する。交渉術を身に着ける事も冒険者には必須の技術（スキル）である。

食料も【ファミリア】が出すのでベルはしばらくギルドに行ってダンジョンの勉強をする。その後、ポラン達団員と共にダンジョンに入り、戦闘を始める。そういう予定でいいか、とベルに尋ねた。

「最初から一人でやれとは言わない。強さに応じて潜れる階層はある程度決められている。指針という奴で。無視したところで罰則は無いけれどアドバイザーに叱られる。これから君は危険な場所に挑戦するわけだが……、後悔するならやめてもいい。眷族になったからって嫌な事をするべきじゃないからね」

「はい」

店を回りながら最初にしなければならない事は寝室について。

女所帯なので一部屋丸ごと使っての雑魚寝だった。今回新たに男子であるベルが参加する。対外的にも一緒の寝床と言うわけにはいかない。

部屋に仕切り壁を設けても意味が無さそうなので余っている部屋を改造するしかない。

†

買い物を終えて【ヘスティア・ファミリア】の本拠（ホーム）に戻る。

一日目から何かが変わるわけでもなく、ダンジョンに挑戦するのはまだ少し先だというのは感じた。

地下の広間に向かうと見慣れない女性が二人居た。それとエルフの女性も。

「ただいま」

「団長、お帰りなさいませ。……白髪の男子……、無事入団を果たせたのですね」

現場に場違いな高貴な光りが満ちたような気がした。

先日出会ったエルフ――服はちゃんと着ていたので安心した――が出迎えてくれた。

胸を揉んだ光景が急に思い出され、ベルの顔は真っ赤になる。

「ついに異性が参加するのか。女の園（その）も卒業か……」

そう言ったのは虎人（ワータイガー）の女性だった。見た目から猫人（キャットピープル）と見分けが難しいが、ポランが説明してくれた。

ランテという彼女は【アルテミス・ファミリア】から借り受けた協力者で、共にダンジョン攻略する仲間でもある。

普段は対抗関係にある【ファミリア】も協力する事がある。

そして――最後の一人――

黒ずんだ緑色の長い髪がおどろおどろしい印象を与える。一目見たベルは真っ赤になった顔を一気に青ざめさせる。それくらい『怖い』人だと感じた。

例えようのない負の側面を内包した様な危険人物。それが第一印象だった。

「クラネル君。我が【ファミリア】の団員が揃ったよ。改めて自己紹介をしようか」

「は、はい」

ポランはベルを全員に見える位置に立たせて紹介した。その後、自分でも簡単な自己紹介をする。

【ヘスティア・ファミリア】の団長ポラン・ブーニディッカ。レベル

0（ゼロ）。
　ほぼ無表情で大人しい女性はユーカリン・ナナツタエ。
　エルフの女性はヴェルゼッタ・オリンピア。
　危険人物に見えたのはゼゼナ・シャフラーという。この女性だけポランは何も言わなかった。
　助っ人はランテ。唯一の実力者という。
「……唯一？」
「自由に行動出来て金を稼げるって意味で。探索系なのにまともに下層に挑戦しない【ファミリア】だったからね。クラネル君は私達より下に行ってもいいんだよ」
（その前に団長さんがレベル0ってどういうことだろう。レベルは最初1（ワン）からじゃあ……）
　多くの疑問符が浮かんでいるが、まず気にかけなければならないのはエルフのヴェルゼッタだ。興味深そうな顔でベルに近づく。
　にこやかな表情ではあるが何をしてくるか分からない怖さがある。
「私、ヴェルゼッタと言いますが……。同じ愛称では混乱すると思いますので、オリンピアとお呼び下さいませ」
「は、はい。そうですね」
「恐縮しなくてもこのエルフのおっぱいを揉んだことはみんな知ってるから」
　と、ランテがとんでもないことを言い出す。しかし、事実なので否定できない。
　全員が知っているなら言い訳のしようは無いのだが――その事について彼女達はどう思っているのか気になってしまう。今後の付き合い方とか変わるかもしれない。と、ベルは一人で苦悩の深みにはまる。
「元々露出癖があるからいつかはやるんじゃないかと思ってたけど……。いい男を釣ったな。でかしたぞ、ヴェル」
「その愛称だとクラネル君と被ってしまいますわ」
　ランテは普段、ヴェルゼッタを呼ぶ時『ヴェル』であった。
　ベルの加入により今後は混乱する可能性がある。かといって急に

変更するのは難しい。
今のところ男性であるベルの印象は――おっぱいの件を知って尚――悪くないようだ。
（……ナナツタエさんやシャフラーさんはどう思っているんだろうか。二人共……対照的な無表情って感じなんだけど）
ナナツタエは一言もしゃべらない。ゼゼナも同様だが、こちらは喋っている相手に顔を向けてばかりだ。自発的に言葉を発する場面はまだ見ていない。
ランテという女性は健康的な肌を持ち、荒々しい印象を受ける。良く言えば快活な女性だ。
「とにかく、新しい団員をよろしく。明日からの行動だが……、今まで通りだ。クラネル君がダンジョンに挑戦するのはもう少し後だと思う」
「血気盛んな若者ならすぐに突撃して撃沈しそうだものね」
「折角入ってくれた男子を早期に潰しては勿体ない。彼にも強くなってもらわないと……」
女性陣が会話している間、既にエルフの胸の問題は通り過ぎていた。それはそれでベルにとっては驚きだ。

†

【ヘスティア・ファミリア】は探索系だが殆ど活動実績が無い。皆無ではないけれど。
団長は既にギルドから色々と制限を付けられ、普段は居酒屋で働いている。
ユーカリンは見た目から何を考えているのか分からないが、暇を見つけてはダンジョン攻略に向かうものの上層域を少し過ごしたら戻ってしまう。
ヴェルゼッタは滅多にダンジョンに潜らない。多くのエルフ達から止める事が多かったから、とも言われている。
ランテはこの中で一番深い階層を攻略できるので稼ぎ頭ではある。
最後のゼゼナは活動そのものを制限された眷族で単独でダンジョンに潜ろうものなら大騒ぎになるとか。

（……何なんだ、この【ファミリア】……。聞いているだけで不安になってきた）

まともにダンジョン攻略をしない探索系。それだけで理解が追いつかない。

【エニュオ・ファミリア】にした方が良かったかな、と後悔し始めてきた。しかし、神へスティアからも言われた通り、それを織り込んで加入した。今更、引き返せない。

団長にダンジョンに潜る時の条件を尋ねてみた。なにやら自分も何らかの制限を付けられるのでは、と思ったので。

「アドバイザーの言う事を聞いた上でならダンジョンに挑戦していいよ。私らは自己責任だから。連帯責任で制限を付けられたわけじゃない。そこは安心していいよ」

「そ、そうですか」

「揃いもそろって問題児ばかり。これは神の人望のなせる業かな」

ランテの言葉にポランは苦笑し、ヴェルゼッタは微笑んだまま。残りは無表情だ。

表情の豊かさならベルが一番豊富かもしれない。

指針としてベルはダンジョン攻略に向けた講習をギルドで受けなければならない。本格的な活動はその後となる。

【ファミリア】としての目標というものは無いが迷宮都市オラリオにある全【ファミリア】に共通した目標は存在する。

「ダンジョンに挑戦する時は私達も一緒に行くから。一人で寂しい思いはさせないよ」

「えっ？　制限はどうなるんですか？」

「上層なら特に問題は無いよ」

話しを終えた後はベルの寝室造りについて議論が交わされる。

荷物置き場や着替えに必要な箪笥類の調達など。そんな中でもユーカリンとゼゼナは黙って佇んでいた。仲間外れ、というより仲間の輪に入りたそうな雰囲気が感じられない。

ランテも特に言及していないけれどベルはとても気になって仕方がない。

「必要な物資はユーカリンに買ってもらおうか。クラネル君と一緒に選んできなさい」
「……分かった。行くよ、ベル」
無表情のままユーカリンは言った。初めて声を聞いたような気がした。
二人が居なくなる頃、ポランは今まで大人しくしていたゼゼナに顔を向ける。
何か気になる事があるのか尋ねると首を横に振った。それだけで納得したらしいポランは部屋の間取りの策定に入る。

†

二日ほどかけてベル専用の寝室が出来上がる。確認に来たヘスティアも出来栄えに満足した。部屋が出来る間、ベルはギルドに通っていた。
寝泊りも摩天楼（バベル）にある仮眠室を使わせてもらった。どうにもヴェルゼッタと一緒に居るのが恥ずかしくて仕方が無かったようだ。
「そういえば、ランテさんはいつまでこの【ファミリア】に居るんですか？」
「早く出て行ってほしそうな質問だねー」
「い、いえ。そういうわけではないんですけど……」
慌てて否定するものの他に言いようがなかった。
どういう経緯で手伝いに来ているのかベルは知らなかったので興味があった。
「いつまでだろうねー。うちの主神であるアルテミス様が謹慎処分を食らっているから実質【アルテミス・ファミリア】は開店休業状態なのよね。団長のレトゥーサさんや他のみんなも懇意にしている【ファミリア】に行ったり、店で働いたりしている」
（こっちも色々と問題があったのか）
「あれはボクも驚いた。【アポロン・ファミリア】の本拠（ホーム）を半壊させたからねー」
「ええっ!?　神様が本拠（ホーム）を壊したんですか？」
「そう聞いているよ。ランテ君たちは止めたそうだけどね」

「激怒したアルテミス様を止められる団員が居なかった。……いやー、景気よく破壊する様をお見せ出来ないのが残念でなりませんよ」

と、嬉しそうに、楽しそうにランテは言った。

聞けば今も【アポロン・ファミリア】の本拠（ホーム）は修復中で年内の完成は絶望的だとか。謹慎中のアルテミスは暴れ出さないように全身を拘束されて独居房に放り込まれたとか。

何をどうしたらそうなるのか。ベルには全く想像できなかった。

五人の女性の中に男子が一人。神ヘスティアから見れば充分『ハーレム』だが、世の中そう甘くないものだ。

（ゼゼナ君がおとなしくしていれば良し。……後はサポーターや鍛冶師（スミス）なんかが入ってくれれば安定するけれど……。本拠（ホーム）が手狭だからな……。引っ越しもそろそろ考えないと）

賑やかで楽しいだけでは【ファミリア】として運営できない。神が降臨したからとて自由気ままに振舞えないのはヘスティアにとっては計算外であった。

下界はとにかく世知辛い。その一言に尽きるほどに。

†

翌日からベルはギルドに行き、担当アドバイザーであるエイナからダンジョンについて。階層ごとのモンスターについての講義を受ける事になった。

全くの無知であれば彼女達の教えはとても有効である、とヘスティアからも言われた。

いきなりタンジョンに潜っていきなりモンスターに殺されては困る。それはギルドにとっても神にとっても。

モンスターを倒すと魔石が落ちる。戦闘の仕方によっては魔石を砕く事でも仕留める事が出来るが魔石は手に入らなくなる。

単にモンスターを締めたいだけならば気にしなくていい事だ。ちなみに魔石の位置は分かっている範囲はギルドの資料に記されている。それを参考に戦闘を楽に進める事も戦略の内である、とエイナは説明する。

稀にモンスター特有のドロップアイテムが落ちる場合がある。それは地上で高値で取引されたり、アイテムの材料になる。
「いいですか、クラネル氏。モンスターは基本的に倒すと灰になります。それまで戦闘は継続中であることを忘れないでください。油断は命取りですから」
「はい」
「【ステイタス】の更新は最初の内はマメに確認した方がいいです。数値が増えていれば強くなった証拠ですよ」
資料を交えての講義は夕方まで続いた。
最初の内は覚えなければならないことが多い。今まで他の担当になったとしてもエイナは同じように指導してきた。
ベルの他に何人も担当している冒険者が居る。
(素直なところは冒険者として危ういけど……。何事も経験を積まない事には……)
いずれベルの前に現れる敵はモンスターばかりとは限らない。それはまた別の機会に教える事にした。
まずは基本から。この時点で挫折したり面倒がったりする冒険者が多数に上る。ベルの場合はしっかりと聞く人物のようで安心した。
エイナは戦闘方法は教えられない。あくまで知識のみだ。
「クラネル氏は来週からダンジョンに潜ってもらいますが……。貸与される武器にご希望はありますか?」
「……僕にはどんな武器が合うんでしょうか?」
本格的な武器というものは持ったことが無い。漠然とした思いだけでオラリオに来てしまったので。
ギルドが用意出来るのは基本武装のみ。質もそれほど良くない。
刀剣類に始まり、杖や盾。大体の種類は網羅できる。
ベルは基本の剣を所望した。しかし、剣と言ってもナイフから大きな剣と様々だ。
「冒険者の皆さんは使っていくうちに自分に合った戦い方を身に着けていきますから、焦らず試行錯誤してください」
「はい。ありがとうございました」

その後、ダンジョンに潜るまでの間にエイナから基本を叩きこまれることになった。
初日に潜れる階層はやはり一階層目。調子に乗れば痛い目に遭う。更に助けはほぼ来ないと思え、と厳しい意見もあった。
ギルドは指針は示せるが残りは自己責任。それのみと言っても過言ではない。

†

武装について気になったので時間のある時に武器屋に行くと良い武器の値段が途方もない事に絶望する。
手持ちの金では到底買えない。更に手入れ費用も掛かる。
大抵は借金して良い武器を買い、余裕が出来たら自腹で購入する。そこまで出来ればほぼ一人前と言われる程強くなっている。
「私らの武装も実費で購入したものだよ。君も自分の武器を手に入れるまで長い道のりかもしれないけれど……、頑張りなさい」
眼帯を付けたポランからそう言われた。
【ファミリア】として武器を貸与する予定はなく、最初は資金を稼いで購入する事を目的とするように、と。
ここで甘えてしまうと【ステイタス】の伸びが悪くなるらしい。
モンスターを倒したりすることで得られる【経験値(エクセリア)】というものは楽して得られるものではなく、困難に打ち勝つことで多く貰える。
極端な例だと雑魚モンスターだけを倒し続けていると【経験値(エクセリア)】が全く増えなくなる。
「だから、世の冒険者の多くは楽して強くなった人は誰も居ない。君も例外じゃないと思うよ」
「はい」
(どうやったら強くなれるか、なんて聞くのは愚問だよな。みんな努力しているから強いんであって……)
才能も関係するかもしれない。しかし、その前に努力しない者に結果は与えられない。
ベルは来週から始められる戦闘に大いに期待した。
それとは別に【ファミリア】での生活は色んな意味で大変だった。

近くに女性が神を含めて六人居る。
共同生活する事になって最初に驚くのはやはりエルフのヴェルゼッタだ。
ほぼ裸でウロウロする。他は薄着になる事は合っても下着はきちんと履いている。
「そういうクラネル君も上半身裸のようだけど？」
「……」
ポランの言葉にベルは言葉に詰まる。それとユーカリンはずっと無言、無表情だ。
共同生活するにあたって女の裸に慣れること。ポラン以外からも言いつけられた。
ベル一人の為に急に生活態度は変えられない、という理由で。
（オリンピアさんがニヤニヤしているのはこういう時の為か。早くなれないと【ファミリア】で生活するのが辛くなるから……）
最初の出会いこそ驚いたが、以降は積極的に近づいてきたりしない。たまに騒ぎ出すことはあるが持病の様なものとポランは説明する。
獣人であるランテは半裸ではあるがきちんと身体を守っているので気にならない。というか引き締まった筋肉につい目が行ってしまった。
見られて困る身体ではないので筋肉や頭の獣耳と尻尾は存分に見ても構わないと言ってきた。
「特別に耳と尻尾は触ってもいいよ。人間（ヒューマン）はこういうの興味あるでしょ？　仲間からもよく触られたから」
「い、いいです。そんな……。それ目当てに入ったみたいに言われるので」
「世間はそうは思ってくれないよ。ならいっそ先に触っておきな。記念だと思ってさ。虎人（ワータイガー）だからって尻尾に触られたからって威嚇はしないよ。君みたいな可愛い男の子なら大歓迎さ」
（アルテミス様が居ないお陰です）
尻尾が駄目なら頭の耳だけでもどうぞ、と頭を近づけてきた。

獣人の耳はよく見かけるが触りたいほど興味があるかと言われると首を傾げる。

当たり前のように見てきたせいもある。しかし、触れ合いたい気持ちは理解したので彼女の耳を軽く撫でるように触れると喉を鳴らす様に喜んだ。

「そういえば、こうして耳を撫でられるのは久しぶりだわ。……アルテミス様、元気かな。全身拘束されたままだと思うけれど……」

神は不変である。それゆえにトイレに長時間行かなくても平気、という謎理論がある。

ついでに風呂に長期間入らなくても臭くならないとか。――さすがに下水に浸れば臭くなる。

†

朝方は女性にとって戦場である。その代表例が一つしかないトイレの争奪戦だ。

直接下水に流せなくもないが――解放感がある分、勇気が必要になる。それ専用の砂場もしっかり用意されている。そこから彼女達による涙ぐましい努力により本拠（ホーム）は清潔を保てているのが分かる。

緊急の場合はご近所に借りる。これは既に【ヘスティア・ファミリア】の風物詩となっていた。

「行動する時は余裕を持つんだ」

神ヘスティアは眷族たちにそう言った。

ベルは【ファミリア】として何か出来る事は無いか尋ねた。答えは特に無し、だった。

探索系は基本的にダンジョンの攻略。それ以外は個人の自由時間となっている。

ヘスティアが神として細かな命令をすることは無い。目的のある【ファミアリ】であればまた違った様相になるのかもしれないけれど。

「自由といっても悪い事は駄目だよ。ボクの【ファミリア】は犯罪系ではないから」

ベルの目下の目的はダンジョンに潜り、モンスターと戦うこと。最初はそこからだ。

食料などはポラン達が用意するのでベルの仕事はほぼ無いに等しい。ベル以外にヴェルゼッタとゼゼナも仕事らしいことはしていないけれど。

――というか全員、どんなことをしているのかまだ知らなかった。

「ポラン君は酒場の給仕や……、まあ、何でも屋みたいなことをしているよ。ナナツタエ君も夜間に仕事をしているようだよ。で、オリンピア君は特殊でね。多くのエルフ達から血生臭い事はさせないようにと……、それはもう大事にされている。彼女は主に各地に挨拶回りをしているそうだ」

「……挨拶回り？　それも冒険者の仕事なんですか？」

「仕事は仕事だよ、ベル君。……お土産とか持って帰るんだから。最後のゼゼナ君は……何もしない事が仕事みたいなもんだよ。彼女が単身でダンジョンに赴こうものならギルドを含めて大騒ぎになるんじゃないかな。今もかは分からないけれど」

ベルは四人の女性達を改めて確認する。それぞれ特に問題を起こしそうな人には見えないし、危険な香りも――ゼゼナ以外――しない。

それなのにまともに冒険者として行動できないのはやはり理解できなかった。

助っ人であるランテが一番まともだ、というのは本当に間違いのない事実なのかもしれない。全く理解できないけれど。

（【ファミリア】ごとに特色がある、みたいなことは聞いたけれど……。僕、ここでやっていけるかな）

犯罪系ではない、という所が唯一の救いの様な気がした。

新人であるベルは本拠（ホーム）の掃除とか覚悟していたが当面はギルドでの講習。それ以外は未定。

女性の部屋を勝手に掃除するのも気が引けるのでどうしようもないのが現実だった。

†

何日にも渡る講習を終えた後は武器の選定。ここでベルは小剣を選んだ。

最初は長剣を持って振り回したが上層階の通路は狭いので取り回しの観点から中くらいの剣か小剣がいいと勧められた。

他の冒険者の真似事をしたくなる年頃かもしれないけれど身の丈に合わない装備は危険だと真剣に言われてしまった。

「いきなりダンジョンに挑戦するより他の団員と一緒に行った方がいいね。無理な冒険は命を縮める。……いいですか、クラネル氏。ダンジョンで冒険者が死ぬのは日常茶判事です。何の保証もされません。有名になりたいだとか甘い考えは捨ててください」

「は、はい」

「貴方がどれほどの熱意を持とうがダンジョンに通じなければ無意味と同義です。では、それを踏まえて……ダンジョンに挑戦してください。危ないと判断したらすぐ戻っても構いません。探索の時間に制限はありませんが……。最初は一時間くらいを目安にしてください。あと、モンスターに囲まれないように位置取りはしっかりと把握すること」

長い注意を受けた後、いよいよダンジョンに向かう許可が出た、と思った。

やはり単独探索が気になるのか他の団員と一緒に行くように強く命令された。

年上の言葉に断れず、ベルは一旦本拠（ホーム）に戻る事になった。ついでに武器も一旦返却した。

冒険者が単独（ソロ）で活動するにはそれなりの技量が必要だと言われている。ベルは完全に初心者だ。迂闊に突貫しても返り討ちになるのは目の見えて明らか。

モンスターとの戦闘は田舎でも経験はあるが――

ギルドからの帰り道、一緒に探索する相手を考えながら酒場に差し掛かると見知った女性を見つけた。

給仕の格好で空いたテーブルを雑巾で拭いたり、掃除しながら開店準備に勤しむ赤毛の女性。

見た目が痛々しいので健気に働いているように見えた。

（ここで働いているのか。他の団員の姿は無いようだけど）

忙しいのであれば誘うのは躊躇われる。でも、冒険者なのにダンジョンに行かないのはどうしてなのか、そこは気になってしまう。

客が居ない店内をしばらく眺めていると他の給仕（メイド）がやってきて仲良く談笑し始めた。それだけ見ると問題行動を起こす人物には到底思えない。

その後、仕事の邪魔をしては悪いと思い本拠（ホーム）に帰った。

講習が終わった事を神へスティアに伝えようとしたが不在で、大人しいゼゼナと無表情のユーカリンの二人だけ居た。

ユーカリンはよく出かけるがゼゼナは殆ど居間と寝室を往復するだけ。本当によく分からない女性だった。

＃５―０５　アリーゼ・ローヴェル

無表情で大人しいと言ってもベル・クラネルを拒否しているわけではない。挨拶すれば一言だけだが喋ってくれる。対するゼゼナ・シャフラーは聞いているのかいないのか、全く相手にしてくれない。ただし、顔は向けてくる。

【ヘスティア・ファミリア】に入って良く会話するのは団長であるポラン・ブーニディッカと助っ人のランテ。それと神ヘスティアの三人だ。意外とエルフのヴェルゼッタ・オリンピアとは会話が少ない。

何度か挨拶をゼゼナに試みるも無視されるように返答が返ってこない。言葉を理解しているのか怪しいが、団長が言うには普段から意思疎通が難しい眷族であるという。ベルだけ特別避けているわけではない、と聞いた。

「……えーと、何か話しませんか？」

せっかく仲間になったのだから、と。しかし、ゼゼナは上の空のようだ。

トイレに行っていたユーカリン・ナナツタエが戻り、会話を試みる。こちらは挨拶を返してきた。

彼女も団長の説明によれば夜型なので昼間は眠そうにしている事が多い。本格的に話しをするならば夜間がいいという。

ヴェルゼッタに関しては本拠（ホーム）に居る時は特に条件は無いが寝室に行かないように、と注意を受けた。寝る時は基本的に全裸になっている事が多いので。

ランテはこの中で一番の常識人だが、寝込みを襲えば殺されても文句は言えない、と。

（ブーニディッカさんは働きに出かけている事が多いけど、あの人も何かあるんだろうか）

ユーカリンに神様が何処に居るか尋ねると露店に働きに出かけていると答えてくれた。

それで『ジャガ丸くん』の販売員になっている事を思い出す。

その後、ダンジョンに潜る時やモンスターとの戦い方を尋ねてみた。すると素っ気無い返答が返ってくる。

武器を持って倒せばいい、という大雑把なものだ。

（……僕、冒険者としてやっていけるかな。何度もやめようとか考えそう）

前途多難な雰囲気に早くも疲れを覚える。

【ヘスティア・ファミリア】は眷族全員での探索に経験がない。それは他の仕事によくかち合う為だという。

特にポランとヴェルゼッタは意外と多忙だとか。

「ヴェルはエルフの会合によく連れていかれる。団長は『あるばいと』が多い。昔、ギルドが課した制限が今もあって深い階層に挑戦させてくれない為らしいよ」

「制限……。僕はダンジョンに入ってもいいでしょうか？」

「いいんじゃない？　悪さしていない限りは……。私は今日夜の仕事があるから夕方までしか一緒にいられないから」

ユーカリンは聞けば答えてくれる。

それ以外は全く無反応という有様だった。この状態に慣れるのは時間がかかりそうな予感がした。

†

ポランが帰宅した時にギルドの講習が終わった事を告げる。ついでにダンジョンに挑戦する事に【ファミリア】として何か条件があるのか尋ねてみた。

すると条件は無いと即答された。

「我々の制限は個人に課せられている。【ファミリア】全体の問題ではないよ。じゃあ、ランテさんと一緒に潜ってきてもらおうか」

「いいんですか？」

「いいよ。最初なら三階層までだね。じっくりモンスターとの戦い方やドロップアイテムの扱いとか教えてもらうといい。後、魔石の換金方法とか」

「はい。頑張ります」

団長はすんなりと会話が成立し、思いのほか労力がかからなかっ

た。

変に気にし過ぎていたのかもしれない。そうベルは思った。

ギルドから武器の貸与を受けたり、ランテと共にダンジョンに向かうにあたっての注意事項などを話し合う。

本当ならば団長が供にしなければならないところだが、店が繁盛期に入っているらしく、しばらく手が空かない。

ユーカリンは上層階で待つのが嫌だ、と言い出して拒否。

（オリンピアさんは急に全裸になる事に僕が我慢できればダンジョンに潜れるそうだけど……。他のエルフから襲撃を受けやすくなるっていうのが……）

女性の裸で言えばランテ達も同程度の筈だが――何故かヴェルゼッタは他とは違う扱いになっている。

ベルから見ても美しい女性ではある。しかし、ギルドからも高名な人物だとは聞いていない。

その事を尋ねると本人から聞くのがいいとポランは言った。

「志（こころざし）は高いけれど人間（ヒューマン）だからという差別はしない。その辺りも含めて挑戦するといい。それもまた君の冒険かもしれないし」

「分かりました」

「団長の私から言える事は……、ダンジョン攻略において大事な事は生きて帰ること。あまり深く考えず、頑張ってきなさい。ちゃんと魔石は回収するように。荷物の確認は必須だよ」

「はい」

ゼゼナを除けば団員はそれぞれ忙しい時期に差し掛かっており、新人教育に割ける時間が作れなかった。

意思疎通のできない相手とダンジョンに入るのは危険なのでやめた方がいいとポランが言うのでベルは従う事にした。

無理に時間をかけてしまうとダンジョン攻略に向かうのに数か月以上も先延ばしになってしまうので。

†

翌日、ランテと共にギルドに向かい、武器を借り受ける。

取り回しの良い武器がいいというランテとアドバイザーの意見を

取り入れる事にした。
　初回は防具無し。身の危険がある時はランテが手を出すことになっている。
「まずは一階層目から。一〇匹ほどを目標に頑張ってみようか」
「はい」
　ランテの実力はレベル2。二〇階層以降に潜れるほど。いきなり一〇階層まではいかないとしても低い階層で大事（だいじ）は起きないと予想している。
　ベルと共に多くの冒険者が下へ続く巨大な螺旋階段を降りていく。
　上に戻る者と下へ降りる者。そのどれもが立派な武装だった。もちろん、軽装の者も居るけれど。ベルの目から見ればほぼ全員が強そうな存在だった。
　ランテはベルと同じく軽装だが深く潜らないので無駄な武装を外しているだけだ。本来はもう少し厚めにする。
　彼女は縞模様の尻尾を振りながらベルにあまり離れないように、と小声で話しかけた。
　数十M（メドル）も下ればダンジョン内部だ。
　薄暗い洞窟の様な狭い通路が迷路状に広がっている。下方に行けばより広い様相になる。
「最初の階層は初心者向けの弱いモンスターしか出てこない。まずはここで武器の扱い方を覚える。簡単に言ってしまえば適当に振りながら身体で覚えていくしかない。ある程度、慣れたら修正していく」
「分かりました」
　他の冒険者の邪魔にならないところまで移動した後、ランテは手荷物から折り畳みの椅子を取り出して待機する。
　ひとまずモンスターが現れるまで小休止する事にした。待っている間、ダンジョン内のモンスターの出現方法を教えていく。
　頻繁に現れるわけでもなく、かといって二度と出てこないわけでもない。
　ダンジョンに生息する多くのモンスターは壁から生まれ出る。時には地面からも。

階層毎に出現するモンスターは決まっているが未発見のものが居ないとも限らない。

「魔石の事は考えなくていいよ。どんどん倒していっていいから。ほら、早速壁から出てきた」

構えて、とベルに伝える。

小剣を構えたベルは壁から生まれ出るモンスターに見入った。

彼らは冒険者を探知してから現れる傾向にある。それゆえに止めどもなく湧いて地上に溢れることはない、と言われている。

そうでなければベルたちが帰宅した後も湧き続け、オラリオはちょっとした騒動に陥ってしまう。

「相手からダメージを受ける事で『耐久』が増える事がある。痛みを恐れずに突っ込むように。最初の階層から強敵が出る事は無いよ。……異常事態（イレギュラー）が無いとは言わないけれど」

椅子に座りつつランテは指示を飛ばす。

上層に出てくるのは主にゴブリンやコボルトだ。それでも複数体を相手にするのは駆け出しにはきつい。

ここで逃げ出すかどうかの別れ道となる。

†

ベルは武器を構え、敵に突貫する。

それほど賢いモンスターではないので大振りであっても当たる。ただ、当てるだけでは倒した事にはならない。しっかりと致命傷を作らなければ――

ランテが的確に武器の使い方を指示し、ベルは可能な限り行動する。

初回は確かに凶暴なモンスターの顔に恐れたが巨大生物ではないのですぐに落ち着きを取り戻した。

（一匹に対して六度ほどの攻撃。でも、一度に三匹はまだ……無理か……）

自己分析しつつ武器を構える。

適度に後退する事も大事な戦略である。ランテも逃げるなとは言わなかった。

的確に魔石を狙えば一撃で倒す事も可能だが、それだと稼ぎにはならない。しかし、今は倒す事が目的なので遠慮は無用と指示する。
「魔石を落とす倒し方もあるから。今は君が思う通りに武器を振るうといい。最初は誰でも数匹のモンスターで限界が来るものさ」
「はい。分かりました」
「それと技術は一日で上達はしない。これから時間をかけて研鑽していくんだから、今から上手くできた、とか喜ばないように」
と、言いながらも的確に指示を飛ばすランテ。
油断しないように。大怪我しないように気を付けながら。
ゴブリン相手にいきなり死ぬ冒険者にランテは心当たりはない。痛みに驚いて逃げ出す者は居るかもしれないが、辛いのは最初だけだ。
ランテも冒険者として戦い始めた頃は既に戦場だった。主に神アルテミスの活躍が多く、後を追うのに必死で努力した。それでもまだレベル2止まり。ランクアップの条件である【ステイタス】のどれかが五〇〇を超える、というのは達成済みだ。後は偉業と言える戦闘経験を積むだけ。
主神が謹慎処分を受けてしまった今はのんびりと生活させてもらっている。生き急いで強くなる必要は感じられなかった。それらはアルテミスあってのものだと思っているので。
だからといって日ごろの鍛錬は怠っていない。
「低階層の魔石は君の稼ぎにしていいけど、後で飯を奢るように」
「はい」
【ヘスティア・ファミリア】に来た新しい男の子は素直でかわいい。しかし、強さにあこがれているランテにも好みがある。
一つは足が速いこと。もう一つは自分より強いこと。
戦闘民族たるランテは強い男性が好みだった。主神が居る間は妄想だけしていたが自分より強い男性はかなり多くいるのは知っている。
種族に関しては特に制限は設けていない。
亜人（デミ・ヒューマン）だからか、それとも獣人特有の習性か。

白髪の少年を見ていると股間がむず痒くなる。いわゆる発情のような感じだ。長く禁欲的な生活を続けてきたので異性に飢えた本能が刺激されているようだ。

（……でも、それほど好みでもないんだけどな……。無差別なのは嫌だな。私も努力しないとダメなようだ）

そんなことを考えている内に戦闘を終えたベルを労う。

最初の戦闘にしてはしっかりと戦えていた。モンスターとの戦闘はこのまま継続しても支障はなさそうだと判断する。

初めての戦闘では大抵、モンスターの凶暴性に恐れを抱くものだ。ベルはその点でいえば合格点を与えられる。

「武器の確認や魔石の回収は？」

「しました」

「よろしい。今日はこのまま帰ろうか。無茶な行軍は命を縮める。冒険者は強(したた)かな方が長生きするからね」

まだ戦いたそうにしているベルに対しランテは撤退を選んだ。

そういう思い切りの判断も時には必要だ。何にしても無理は良くないので。

†

まだ戦いたそうにしているベルを引っ張る形で地上に向かう。その後、換金方法を伝えて彼の背中を押す。

今日の収入は決して多くない。けれどもベルが冒険者として初めて稼いだお金である。

ギルドに提出した魔石は電灯の材料に使われる。その技術はオラリオの独占状態であった。

「今日の戦闘はこれで終わり。帰ったらヘスティア様に報告しなさい」

「はい。今日はご指導ありがとうございました」

「今日だけじゃないよ。しばらく君の指導をするからね。まずは【ステイタス】のどれかが一〇〇を超えるまで」

それと、と呟きベルに背中を向ける。そして、尻尾を左右に振りながら触り給え、と命令する。

元気よく振られる尻尾につい目が行ったがどうして触るのか尋ねると発情を抑えるためだと告げた。それも人が行き交うギルドの中で。

裸になるわけじゃないし、尻を丸出しにしているわけではないから、とランテは助言する。

「ここで私に恥をかかせる気かい？　君に愛の告白をしたわけでもないのに」

「い、いえ。獣人の方は尻尾を触られるのは苦手なんじゃ……、と思って」

「私がいいって言っているから大丈夫。アルテミス様も付き合うのは駄目だけど触るところは特に……。もちろん、恥ずかしくないところだよ」

そう言いながらも尻を向けている女をどうにかしないのかい、と。

尻尾よりも胸がいいのか、と止めを刺すとベルは顔を真っ赤にしながら分かりました、と降参する。

（可愛い！　愛玩動物として欲しいくらい。……でも、最後まで面倒見る自信が無いからアルテミス様に叱られちゃうなー）

尻尾を撫でるように触られている間、ランテの顔は緩んでいた。対するベルは恥ずかしさで顔を赤くする。

僅かな時間、少年の手の感触を楽しんだ彼女はすぐに真剣な顔になる。

「……言っておくけど……、毎回尻尾を触らせる気は無いからね」

「は、はい」

ベルにとって意外な事があったけれど、その後はいつも通りだった。

寄り道せずに本拠（ホーム）に戻るとヘスティアが嬉しそうな顔で出迎えた。

今日の出来事の内、ランテに関する事を気にしつつダンジョンでの戦闘内容を告げる。

†

翌日、ベルはランテと共にモンスター討伐に向かった。およそ一週間を予定し、戦い方を少しでも学ぶためだ。

初日に増えた【ステイタス】は僅かばかり。
数匹程度のモンスターを倒した程度で爆発的に増えるわけではない。その事を主神から告げられた。
（……数値が増えているという事はちゃんと戦闘経験が反映されているということ）
ただ、レベル2であるランテも相当戦闘経験を積んでいる筈だと予想する。それなのにレベルアップしないのは何故なのか、という事に気付いた。
よくよく考えればモンスターを多く倒せば強くなる。その理屈から言えば相当な人数の冒険者がかなり上位に居なければならない。
そこには【ランクアップ】する為の厳しい条件があるのだと感じる。
「強くなる方法に近道はない。もしあったとしても冒険者の為にならないよ」
「……そういうものですよね」
一定数のモンスターを倒した後でベルは疑問をぶつけた。
ランテは気難しい女性ではなく、大体の事を教えてくれた。
彼女とて何でも知っているわけではないけれど頼りがいのある人だという事は理解した。
誰も見ていないからと言って裸になって迫ってきたりもしない。
「私の場合……次の段階に行くにはもっと下層に挑まなければならないんだけど……。無理して死地に行く程でもないかな、と……。強くなる理由は人それぞれだし、私は仲間や神様の役に立てればいい」
個人的に強さに憧れがあるわけではない。そうランテは言った。
アルテミスに育てられた彼女は半ば強制的に修羅の道に参加させられ、物心つく頃には冒険者となっていた事に気付かなかったほどだ。だからといって今すぐ辞めたいとは思わない。
彼女にとってすでに生活の一部になっていたからだ。
「私と君の冒険は違う。いやならやめていい」
「はい」
素直な返事に真面目な雰囲気が揺らいでしまう。
ランテとしてはベルを安易に死なせるつもりはない。けれども、若

者特有の無鉄砲さが見えて心配になる。そして――自分はあまり厳しく指導できない。
可愛いが意見だから、というのもあるけれど――

†

三日目は団長であるポランが指導役となった。
人が変わってもモンスターとの戦闘に大きな違いは無かった。ベルの戦い方を離れた位置で見守るだけ。――それ以前にベルはポランの姿が気になって仕方がない様子だ。
眼帯を付けていて常に痛々しい雰囲気をまとわせていたから。
「私の事が気になるようだね」
「……すみません」
「私も色々あって今に至る。君もいずれは経験するかもしれない。……ただそれだけのことだよ」
相手を気遣ってもどうにか出来る訳ではない。ベルの目的は洞窟内に湧き出るモンスターを討伐することだけ。
ポラン以外の眷族に目立った外傷はない。それを団員として聞くべきなのか、借金についても同様に気になっていた。
ベルが戦闘に集中できない様子にポランも気付いていたが、気軽に話せるほどの仲になったわけではない。
(聞きたそうにしているな……。いずれ分かる事だし、今はモンスターに集中してほしいけれど……。この子はお人好しなのかな?)
ポランも階層制限を受けているといっても浅いところは問題ない。それに戦闘しない限りにおいて二〇階層程の探索も出来る。
昔は色々とあった。それは事実だ。それが今も続いている厳しいものかと言われると答えに詰まる。
「よそ見しながらでもモンスターを倒せるようになったのかな?」
「い、いいえ。すみません」
「謝ってばかりだね、君は」
団長であるポランの歳はベルより二つ上。
彼女というよりは【ヘスティア・ファミリア】の眷族全員についての情報は無く、ただ問題児が居る事しかベルは知らない。

膨大な借金の原因もまだ調べていない。それを聞くべきか彼は迷っていた。

（……眷族同士の仲だから何でも話せる、というわけではないけれど……。大人しい彼の方から質問をさせるのは難しいか）

自己紹介以外の詳細は聞かれれば答えてもいいかな、という認識だったが――日の浅いベルに不必要な情報を伝えて不安を増やす事もない、とも思った。

主神であるヘスティアも見守る立場を取っている。

「……じゃあ、【ステイタス】のどれかが一〇〇を超えるたびに質問に一つずつ答えてあげよう。冒険者らしく、結果を示してくれ」

にこやかにポランが告げるとベルは唸った。しかし、同時に都合も良かった。

話すきっかけが欲しいと思っていたので。

何の見返りも無くただただ質問だけするのは確かに卑怯である。彼女達とて言いたくない事の一つや二つあるものだ。その事に思い至ったから納得できた。

「が、頑張ります」

「……だからといって無茶な行動は駄目だよ。ヘスティア様が心配するからね」

「はい」

「……あー、あと……、私はそれほど大層な技を持ってないから技術に関して教えられないな。……でも、かなり頑張ってくれたらその辺りの事も考えておいてあげよう」

闇雲にな努力より見返りがあった方が張り合いがあるのでは、とポランは思った。そして、その言葉を受けたベルの顔が輝くのを見逃さない。

次々と現れるモンスターに対し、恐れる事く武器を振るえる彼は確かに見込みがある。だが、ただそれだけということもあるので過度な期待はしない。

†

戦闘を始めて一週間が過ぎた。しかし、ベルの【ステイタス】は本

人が想定していたほど増えていなかった。
レベルが曖昧な眷族で構成されている【ヘスティア・ファミリア】の中で特別浮いた存在ではない、と頭では思っていても。しかし、男として自慢したい気持ちがあるベルとしては由々しき問題であった。
「上層で弱いモンスターしか倒していないからね。【経験値（エクセリア）】もそれ相応といったところだと思うよ」
英雄に憧れても結果として現実を突きつけられる。どこか楽観的なところがあったのかもしれない。
自分以外にもそう思っている人間が居ないとも言えないし、その他大勢の中で自分は大した人間ではない、という意味にも受け取れる。
渡された【ステイタス】の情報をしばらく眺めながらベルはため息をつく。
（この【ファミリア】の方達は現実的ではあれ、僕を笑ったりしない。他の眷族達より優しいけれど、それに甘えちゃダメなんだろうな）
命を懸けて冒険者になりたい。なんて思ってもモンスターを得にすれば――やはり――怖いと思う。実際、よく武器を持って戦えたと自分を褒めてやりたいくらいだった。
もっと下層に行きたい、と言うのは簡単かもしれない。けれども――ダンジョンのモンスターは今以上に強いものが出て来るし、現状の武器が通じないほど硬い外角を持っているモンスターが居るとも聞く。
技だけで攻略できるなら誰もが一番だ。
「辛いかい？　休んだっていいんだぜ。毎日ダンジョンに行かなければいけない規則は無いんだ」
「……はい」
「焦ってもしょうがないんだけど……。やはりある程度の【ステイタス】にならないと危険なのは変わらない」
ヘスティアは新しい冒険者ベル・クラネルに優しく声をかけた。だが、だからといって気の利いた助言が出来ているとは思っていない。
神とはただ眷族を応援したり見守ったりしかできないのだから。
気に入ったからといって特別な能力を付与する事は勿論出来ない。

過度に期待されても無理なことがある。
（……ポラン君に言われたようにどれか一つでも一〇〇に到達する、という目標はベル君にとって良い目安となるとボクも思うよ）
ただ闇雲に応援するのも時には悪手だ。眷族に要らぬ期待を背負わせてしまう。
ベルの場合は未だによく分からない。彼に必要なものは何なのか、神であるヘスティアは掴み損ねていた。

†

モンスターのとの戦闘を一週間やり切った。しかし、特別な能力を手に入れたわけではない。
ただただ時間を費やしただけ。――はたから見ればそう思われても仕方がないくらい無為な時間だった、ともいえる。
しかし、凶暴なモンスターから逃げ出さずに立ち向かい続けたのは事実だ。
今の調子であれば一人で向かわせても問題が無い。ただし、上層付近での戦闘に限られる。これは普段、ユーカリン・ナナツタエが行（おこな）っている日課と変わらない。
「……君、割りと度胸があるんだね」
「ありがとうございます」
団長（ボラン）から意外そうな言葉を掛けられたがベルは素直に受け取り礼を言った。本人は褒められていると思っているようだ。
彼女以外は特に反応を示していない。たかが一週間、上層でモンスターを倒していただけだから。
素直な性格なのは見ていて分かっていたが、相当純真であるところまでは読めなかった。
（……そんな子にオリンピアが裸で迫ったわけだ。彼の中では未だに大きな衝撃として残っていそう）
ベルの成長も気になるが本当の試練はまだまだ残っている。特に【ヘスティア・ファミリア】は他の【ファミリア】とは違う特色を兼ね備えていた。
男子でもあるベルにとってはより一層の苦難が予想される。

「たーのもー！」

本拠（ホーム）の居間でベル達が歓談している所に大きな声が轟いた。

廃墟同然の教会なので気密性に薄く、外からの音はいつも地下にまで届いていた。だが、近くを通る騒音の類が少なく、睡眠に支障は——ベルが加入してから——意外と無い。

（あの声はアリーゼさん。会う予定は無かったはず……）

ポランは首を傾げつつ階段を上り、訪問者を出迎える。

主神であるヘスティアの顔は広く、その伝手（つて）のお陰か様々な神や眷族が来ることがある。

おもてなしにいつも苦慮するのだが——

地上階にてポランの姿を見た来客は顔を輝かせるような笑顔になった。

ポランと同じく赤い髪が印象的な人間（ヒューマン）の冒険者。

女性で構成された【エニュオ・ファミリア】の団長でり【紅の正花（スカーレット・ハーネル）】の『二つ名』を賜（たまわ）った『アリーゼ・ローヴェル』であった。

「ブーニ、まだ生きてたの？」

「……大きなお世話です。何しに来たんですか？」

遠慮しないアリーゼに辟易しつつ用件を述べるように促す。

彼女の性格は嫌いではないけれど言動が時々怪しい事に頭を痛める。

「もちろん、新しい眷族を見に。男の子が来たんでしょう？　うちのアスト……じゃなかった。エニュオ様が気にしてたから」

「クラネル君はそっちに行ってたんですか？」

「そうそう。それで神様が取り逃がしちゃってさ。気にしてたわけよ」

加入しようと向かったのはいいけれど即決せずに引き返し、その途中で——おそらくヴェルゼッタに捕まった。

もし、彼女が関わらなかったら——今頃、ベルは【エニュオ・ファミリア】に入っていたかもしれない。

ポランは運命のいたずらが働いたと感じた。

（……裸族（オリンピア）が居ない分、エニュオ様のところが良かったのかも……。

だけれど、これは運命だ。今更返せと言われても駄目だからね）
「もう『神の恩恵（ファルナ）』を貰っているから、そっちにあげられないよ」
「……あー、やっぱりかー」
あからさまにがっかりする赤髪のアリーゼ。入ったもののまだ迷っているのでは、と淡い期待を持っていた。
加入は言葉だけで『神の恩恵（ファルナ）』は別、という事も無くはない。
アリーゼは第二級冒険者（レベル4）ではあるが性格的に子供っぽいところがある。良い言い方をすれば純真な女性だ。
「あわよくば貸してもらおうかと……」
「……クラネル君は純真な眷族だから、そっちの女所帯に放り込んだら速攻で逃げ出すと思うよ」
「そうかなー？　そう簡単に逃げられると……」
「こらこら。オリンピアが大人しくしているから彼は今のところ冒険者をやれている。そっちは全員が元気だから不安しか感じない」
ポランは既に他所に譲る気が無く、アリーゼがどんな条件を付けようとも突っぱねる所存だった。話しぶりからも未練がある事は感じていたが彼と会わせるのは危険かもしれないと思い始めた。

†

ポランとアリーゼは対外的には友人であり、共に【ファミリア】の団長としての付き合いがある。だからといって何でも譲れるわけではない。
レベル的には開きがあるように思われるがポランは決して第二級冒険者に後れを取らない実力を持っている。もし、剣を抜く事態になっても一方的な敗北は無い。
レベル0（ゼロ）のポラン・ブーニディッカ――いや、ベルを除く【ヘスティア・ファミリア】四人全員が『二つ名』を賜っている事は伊達ではない。そして、その情報をアリーゼも承知していた。
「貸すにしても彼はまだ冒険を始めたばかりだ。いきなりそっちの本拠（ホーム）に放り込むわけにはいかないし、許可できない」
「おっ、見込みはあるわけだ。楽しみだなー」
嬉しそうにアリーゼは言った。だが、ポランは不安を覚える。

見た目にも可愛い白髪の少年だ。普通に仲間として使うとは思えない。

【エニュオ・ファミリア】は探索系ではあるが本業は治安維持だ。対人戦を主とする。――だからこそベルに行ってほしくないと思った。

少なくとも彼は正義の執行者になりたいわけではなく、広義的な英雄を望んでいる。

「彼を見世物にする気は無いです。それでも見たければギルドで待ち伏せでもするんですね」

「……うーん。意外と私達は忙しいからねー。団長権限で一目だけでも見せてくれないかなーと……」

「……貴女の理屈はいつも理解に苦しみます。……三人ほど団員を貸してくれませんか？」

「……合同は駄目？　そっち三人とこっち三人の六人パーティで」

どうしてもアリーゼはベルを諦められないようだ。というより興味が勝っていて帰るに帰れない、といったところに思えた。

アリーゼ個人だけではなく主神であるエニュオの命令も含まれている気がした。

何らかの理由をつけてでもベルを連れてきて改めてどういう人物か確認したい、というような――

そういう眷族の奪い合いは基本的に敵対行動と変わらないものだ。だから安易に許可は出せない。――普通ならば。

「シャフラーに膝枕する、という条件を呑めるのであれば……」

「……おう。それはちょっと難題ね」

（以前、しばらく身体の震えが止まらなくなったって言ってたし……。あの神様殺しめ）

そう思いつつも当時のゼゼナ・シャフラーの姿を思い出すアリーゼ。

かつて彼女はアリーゼ達の仲間だった。だが、脱退してからしばらく経つが今と昔が同一という保証はない。

少なくとも以前のままであればゼゼナとエニュオを面会させる、という危険な行為を団長として許可することは出来ないと断言してい

る所だ。
　――ゼゼナは神を殺すような危険な存在ではなく、別の意味で危険というだけだが。
（当時の私でも歯が立たなかったゼゼナ……。大人しいからって弱体化したわけじゃないでしょうし）
　正義の執行者たる【ファミリア】において彼女（ゼゼナ）は目的から逸脱した存在だった。それはおそらく今でも変わらない筈だ。
【●●●ラ●ー●恋一●】
　常人には正確に聞き取れない『二つ名』を持つゼゼナこと『メンテ・シャフラー』は今でもアリーゼを恐怖に陥れる。考えるだけで身体が震えてくる。
　一見すると弱小【ファミリア】なのにおかしい事実に混乱を覚える。
【ヘスティア・ファミリア】はどこかおかしい。違和感を抱かれる事において有名な【ファミリア】は他に類を見ない。
「……そ、それは持ち帰って検討させてもらうわ」
「どうぞごゆっくり。合同の件は保留にさせてもらう。今のところ皆忙しいし、オリンピアももうじき御呼ばれされると思うから」
「お呼ばれ？　……ああ、リヴェリア案件ね。……もうそんな時期なのね」
「打ち合わせに度々来てくれている。そちらのエルフは同道するの？」
「……んー？　そういう話しは聞いてないなー。……そっちに居るのが王族（ハイエルフ）だから遠慮しているとか？　んっ？　エルフ関連の行事は大体エルフ全体の問題よね？　なんで何も言わないのかしら、あの潔癖エルフは」
　アリーゼは仲間のエルフの姿を思い浮かべつつ首を傾げる。
　人間や亜人（ヒューマン　デミ・ヒューマン）よりも高貴な存在だと信じて疑わないエルフと揶揄されているが仲間としての付き合いはそれなりに長い。
　里が違うという事もあるし、ただ単に遠慮しているとも考えられる。
（顔とか手とか物凄い傷持ちだから黙っているって事もあるか……）

痛々しい姿を同族に晒したくない、というのが一番の解答のように思えた。

怪我の程度で言えば目の前に居るポランも負けていない。何しろ頭髪の半分の色素が抜けるような酷い目に遭ったと聞いているから。

彼女（ポラン）に関する詳細な情報は噂程度でしか聞いたことが無い。

どこまで真実なのか、それを直接問う事も躊躇われるが言いたくない事の一つや二つ、眷族の誰もが持っているものだ。だからアリーゼは遠慮なしに聞こうとはしなかった。

だが――嫌でも耳に入る情報というものがある。

【剣姫】の利き腕を切り落とした犯人こそがポランである。

どういう状況で、それがどこまで真実なのかアリーゼには分からない。だが、数年前に痛々しい姿の【剣姫】を見かけたことがあるので――噂が真実であったと思った事がある。

ポランと【剣姫】は友人同士だ。だからこそ信じられない、と思いつつも否定もまた出来ない事を知っている。

目の前に居る真面目なポランの本性というか影のような側面が隠れている事を――

＃5―06　団員として

探索系の大手と言われる【ロキ・ファミリア】に美しき【剣姫】と呼ばれる冒険者が居る。

歳は十六。金髪金眼の少女にして第一級冒険者（レベル5）の人間（ヒューマン）。

細身の身体からは想像できない苛烈な攻撃を繰り出す。

迷宮都市オラリオにおいて有名な女性が新作のジャガ丸くんの前で立ち往生していた。

「……こんなに種類が……」

冒険に向かう時は神ヘスティアの屋台を利用する。

【剣姫】こと『アイズ・ヴァレンシュタイン』にとって日課とも行事とも取れる行動の一つであった。

彼女の好物は『抹茶クリーム味』と『小豆クリーム味』である。それゆえにこの二種の在庫だけは切らさないように、と露店の責任者である『おばちゃん』は材料確保にかなり力を入れていた。

「付ける種類は多いけれど元となるジャガ丸くんは一緒だぜ。この人参の細切りを練り込んだ子供用のものも試してみるといい。甘いものばかり食べる君にぴったりだと思うよ」

「……でもこれ味があまりしない……」

「栄養に特化しているからね。最近はこのトマト味が流行っているよ。赤い見た目で敬遠されがちだけど野菜の甘味が好きな客には受けがいい。最初の緑色シリーズは……不評だったけれど」

いつも甘い味を好んでいたアイズも健康を考え、野菜味にも挑戦していた。

美容に良いものは女性客に大変受け、調子に乗るとすぐに不良在庫と化す。

新商品を作るのはヘスティアではなく責任者だ。店員たる神は用意された付けダレにジャガ丸を入れていくだけ。それと客から感想を貰うこと。

（朝方の客足の少ない時間帯にヴァレン何某（なにがし）と二人きりになる空間は

なんというか……、ほっこりするような……。普段は憎み合う敵同士っていう設定……、ボク自身にとって不健康だよな……）

軽くため息をつく。

違う【ファミリア】で敵対している、という事になっている。それでも今は店員と客という立場だ。敵対しているからと言って追い返す事は基本的に出来ない。おばちゃんに叱られてしまう。

ヘスティアの気持ち的にアイズの事を心底嫌っているわけではない。そうならざるを得ない事情があって仕方なく、といった体である。

「そういえば、君はたくさん食べるわけじゃないよね？　朝ごはんとか抜いてたりするのかい？」

「いいえ。ちゃんと食べます。……小食、と言われる事がありますけれど……」

「食べているのならいいよ。君、身体が細いから少し気になってたんだ」

人の少ない時間帯だからか、アイズの言葉に満足したヘスティアはにこりと微笑んだ。

アイズ自身は未だに決められない事に申し訳なさを感じた。

このやり取りも随分と長く続けてきた。

†

朝靄が晴れる頃には通りをたくさんの冒険者と住民で埋め尽くされる。

地下に広がるダンジョンへ向かうものが大半だ。

ヘスティアは屋台の他に『摩天楼』の上層にある店でも働いている。

多くの神は本拠で大人しくしている事が多いけれど、働いている者も居る。

目的は色々。資金稼ぎに暇つぶし。

不変の神にとって労働はあまり意味をなさない。けれども退屈を嫌う彼らは大人しくしている事もまた苦痛と感じる事がある。

【ヘスティア・ファミリア】に入団して半月が経とうとしている白髪の少年冒険者ベル・クラネルはユーカリン・ナナツタエと共にダン

ジョン攻略に向かっていた。
言葉数が少ないが決して喋らないわけではない女性冒険者。そして、ギルドから制限された事柄が少ない。それなのに深い攻略をしない。
ベルの力量からまだ気にするほどの事でもないけれど、謎の多い人だとは思っていた。
（……二刀流の軽戦士（フェンサー）だったっけ。戦う姿を殆ど見た事ないけれど……、この人強いのかな？）
ギルドのアドバイザーからも意見が貰えないほど。
謎に満ちている、ような雰囲気を感じさせる。
ダンジョンに向かう時は派手な外套（マント）を身に着ける。花柄だが本人は全く気にしていない。しかし、周りから注目されてしまうのでベルは自分の事でもないのに恥ずかしさを感じてしまう。
親の形見かと思ったが本人の手作りだと団長ポラン・ブーニディッカから教えられた。
元闇派閥（イヴィルス）系【オネイロス・ファミリア】出身のユーカリン・ナナツタエ。歳は団長と同じ。茶髪に碧眼で外見的特徴を持たない地味な印象を与える人間（ヒューマン）の女性。
実のところ本人はその事実を知らなかった、というか主神（オネイロス）もそうだと思っていなかった、という事実があるのだがギルドの資料には闇派閥（イヴィルス）の関係者だと記載されている。
主神の知らないところで闇派閥（イヴィルス）に認定され、大手【ファミリア】に取り潰されてしまった。ある意味では不幸な出来事である。
彼女にとって漸（ようや）く団員として働けると喜んだ矢先の手痛い仕打ち。
そのせいか、感情を失ってしまったような有様だ。
主神であるオネイロスは特段の悪さ（殺人など）をしたわけではないので天界への強制送還こそ免れているが彼女の事を影ながら心配し、支援を買って出ている。
オネイロスにとってユーカリンは亡き団員の忘れ形見であり、【ファミリア】総手で彼女の誕生を祝ったほど。その可愛がりは凄まじかった。――本人（ユーカリン）は全く記憶にない出来事だが。

（【ヘスティア・ファミリア】は弱小だけど色々な神様たちの支援を受けているって聞いたな。……シャフラーさんもそうだったらしいけれど）

今から思えば凄い事のように感じている。

ベルの知らないところで大きな動きがある。そんな感じであった。

「ベル君。今日も三階層までのモンスター退治でいい？」

無感動、無表情なるユーカリンの言葉。

聞くだけで緊張してしまう。それほど真剣みを帯びているように聞こえた。

「は、はい。まだ四階層に挑戦するのは早いとアドバイザーさんからも言われています」

「単に君が一人で戦うことを想定しているからだよ。仲間と一緒ならより深い階層に行ってもいい。……冒険者は一人で強くなる人も居ればパーティを組んで全体的に強くなる人も居る」

ベルは一人で強くなる想定で戦っていた。もちろん、それは無茶なことだと分かっている。

オラリオに来たのは英雄になる為だ。それは複数ではなく単独でなるもの。

実力不足であることを自覚しているので英雄というのは現時点では到達目標にすぎないし、一人でなければだめだとも思っていない。

ただそういうものだと思っているだけだ。

「強くなると言っても技術や【ステイタス】の問題で解釈が変わる。君の場合はどうなんだろうね」

「僕のイメージだとモンスターを簡単に倒して深い階層を攻略する感じです」

「……そんなことが簡単に出来たら皆英雄だ。残念ながら凶悪なモンスターは君のイメージより凶暴で防備が厚い。安物の武器が通じるのは上層まで。そして、技術が無い冒険者がいい武器を持っても駄目」

「……そういうものですよね」

現実的に無茶なことを言っている自覚はある。だが、強者が簡単に

深い階層に行くのは楽にモンスターを倒しているように感じてしまう。

その前段階の努力について全く知識として持っていないのも原因だ。

大勢の冒険者は深い改装に行くだけの努力と技術を身に着けているからこそ成し遂げている。

楽して気軽に向かえるほどオラリオのダンジョンは甘くない。アドバイザーもそう言う。

「強くなる指針を決めておくといい。優柔不断なままだと【ステイタス】も不安定なままだと思うよ」

棒読み気味に聞こえるユーカリンの言葉だがベルの心にはしっかりと響いた。

最近お世話になっている『青の薬舗』に居る犬人（シアンスロープ）の店員にちょっと似ている気がしてきた。

間延びした喋り方ではないけれど似た者同士のような――

†

ユーカリンと共にダンジョンに潜って一時間が経過した時に小休止に入った。

現れるモンスターを危なげに規定数倒したベルをまずは褒める。

感情がこもって無さそうな声だが本人は感心していた。

入団してからモンスターにひるまずしっかりと戦闘をこなせる者は意外と多くない。

ケガをして恐怖を覚える駆け出し冒険者というのは多いものだ。

大手【ファミリア】の団員の中にも戦闘に加わらず補佐だけしている者が居る。

全員が優秀で強者なわけではない。

（戦闘に慣れたとしても一度大きなけケガをしたら戦えなくなる事もある。ベルの場合はどうなんだろうか）

下層に居るミノタウロスは確実に強敵だ。調子に乗ったベルにぶつければ間違いなく恐怖する筈――逆にそれすらあっさり撃破するようであれば脅威だけれど。

その前に大量に現れるキラーアントやヘルハウンドの攻略もあった。
（着実に実力をつけさせるなら地道な攻略がいい。このまま戦闘を継続するか）
そう判断したユーカリンは二階層にベルを連れていく。
今日の目標は三階層までしっかりと戦うこと。それと魔石の回収だ。
戦闘一辺倒だけが冒険者の仕事ではない。いずれ素材採集の仕事も行うことになる。
周りに警戒しつつ地形を把握する事は冒険者にとって必須である。
「【ステイタス】の数値はこうして戦っていれば上がっていくんですよね？」
二階層のモンスターを倒した後でユーカリンに尋ねた。
確かに考え方としては間違っていない。戦闘せずに数値が勝手に上がるなど聞いたことが無い。
団長のポランはその中でも特殊だと聞いているが彼女を基準にするわけにはいかない。
「正確には自分にとって強敵となるモンスターと戦う事だよ。雑魚だと感じたモンスターならいくら倒しても数値は増えない。……または増えにくくなる」
もし、戦闘を続けるだけで数が増えるなら今頃多くの冒険者は第一級になっている。そうならないのは数値の増加が芳しくない場合が多い。
レベル2になるのに何年もかかる冒険者がたくさんいる。ベルも一年でどれだけ数値を伸ばせるのか、まだ分かっていない。
「下層に挑むためにはモンスターの事をしっかりと学ぶことだ。その中でも疲労は大敵。バックパックを持たないままどんどん降りていくのは自殺行為ともいえる」
「はい」
今回は浅い階層での鍛錬なので二人とも身軽だった。というよりは深い階層に行かない意思表示ともいえる。

後は――他の冒険者に襲われても何も取られないようにするため、というのもあった。

全ての冒険者がモンスターだけを倒すわけではない。

【ファミリア】同士の抗争や弱者いじめも起きる。中には犯罪者も。

（……攻撃をあまり受けていないところから彼の『耐久』は低い筈……。少し痛めつけるか）

程よく能力を増やす事も時には必要だが方法は人それぞれである。

ベルはユーカリンより弱い。このことから仲間同士で戦う事も【経験値（エクセリア）】を増やす方法の一つと考えられている。

一通りモンスターを駆逐した後、ユーカリンは武器を構えるようにベルに指示した。

冒険者は時には対人戦も経験する。

「黙って攻撃を受けるのは怖いだろうから……。適度に当てるけど、気を抜かないように」

「よ、よろしくお願いします」

「……君、痛めつけられることが怖いとかある？」

「故郷で小鬼（ゴブリン）に殺されそうになった事があります。全く無傷ということはありません」

「……そう。これから先、もっと痛い思いをするかもしれない。嫌なら早めに冒険者を止める事だ。命は大事だから」

そう言いおいて体勢を低くする。

対するベルもどんな攻撃が来てもいいように武器を身体に近い位置に置く。

†

ユーカリンはベルにいきなり本気を出さず、彼の身体の動きに合わせて攻撃を繰り出す事に終始した。

時には身体に当てるものの打撲程度で済ませている。

攻撃が当たるからと言って油断だ、とは言わない。今回の目的は『耐久』を増やす為だから当たらないと困る。

避けるだけだと『敏捷』が増える。

痛みから逃げるのはこの先の攻略において辛くなるだけ。

（……黙って受けるところから相手の動きに合わせていくまでが大変……）

（的確に身体に当ててくる。動きが見えるのに……。これが本来の冒険者としての動き？）

相対するユーカリンは涼しい顔のまま。呼吸をしていないのではないかと思わせるほど平坦な様子だった。

ベルは次第に額から汗が流れ始め、呼吸が苦しくなってきた。

襲ってくる攻撃に懸命に対処しようと頭を働かせた。

「身体全体を使って。剣だけで強くなろうとしない」

「……は、はい」

「もし君一人だけなら誰も助けてくれない。疲労は大敵だから……。その辺りの事を忘れては駄目だよ」

筋肉痛で動けない、と言ってもモンスターは平然と襲い掛かってくる。

動けるうちは懸命に考える。諦めるのは簡単だ、と言葉が飛んでくる。

（今回はアイテムを持ってきていない。その上で僕は生きて帰らないといけない。敵を倒す事ばかりじゃなくて生き残る事を……）

襲い掛かってくる二刀の小太刀を受けたり避けたりするベルにユーカリンは感心した。

かなり痛めつけている筈なのに弱音を吐かない事に。

人のよさそうな顔をしているベルはモンスターが怖いとか痛いから嫌だ、とか言わない。

上層だからまだ気持ちに余裕があるのかもしれない。だが、だからといっていきなり下層に放り込むのは早いし、アドバイザーに文句を言われる。それはユーカリンとして面白くない、と。

（劇的な増強にはならないけれど、ベルはよく動けている。それに意外と積極的だ）

英雄に憧れている、という言葉に嘘は無さそうだ。そうユーカリンは思い、武器を納めた。

一旦小休止しないと鍛錬としては長続きしないので。

常に死と隣り合わせのような鍛錬をする上位【ファミリア】から見れば甘いかもしれない。

（ベルに見合った戦い方というものがある。不向きな戦い方ばかりでは成長が見込めない）

戦闘スタイルというものが冒険者にはある。

魔法が得意な者。斥候のような探索が得意な者。戦わない荷物運びであるサポーターもまた大事な仕事だ。

ベルは軽戦士系だ。大きな武器を持つ重戦士には向かない。

攻撃を受け持つ防御型も似合わない。

「軽戦士は防御が薄い。だからこそ攻撃が当たってしまうと動けなくなる。攻撃にある程度の耐性があれば長く戦闘を続けられる」

「……えーと、体力はどうなんでしょうか？」

「継続戦闘の事？」

「たぶん……」

「ランクアップした冒険者は通常よりも長く戦闘が出来るようになれる。身体のつくりが変わるような感じかな。理屈までは分からないけれど」

普段は物静かなユーカリンだが質問には今のところ淀みなく応えてくれている。

全く喋らない寡黙な女性というわけではない事をベルは理解した。

表情の変化こそ目立たないが不機嫌になる様子を見せていないので嫌われているわけではない、と。

†

ユーカリンとの戦闘訓練の後、一日挟んだ次の日ゼゼナとの訓練に臨もうとベルは考えていた。団長はやめた方がいいと言っていたけれど、気になっていたので無理を通してみる事に挑戦した。――が、結果は相手にしてくれなくて断念せざるを得なかった。

雰囲気的にベルが存在していないかのような感じだった。話しかけていくと自然と恐怖が募ってきて、気が付くと言葉が止まっていた。

身体が彼女に関わるなと警告を発しているような感じになり、緊張

の為か身体が汗まみれになっていた事に遅れて気が付いた。
【ヘスティア・ファミリア】の一員となってからゼゼナに関わるな、とは言われなかった。しかしそれは関わるだけ無駄だ、という意味にも取れる。
団長も神ヘスティアも多くを語らない不思議な団員。人間（ヒューマン）でありながら謎の多い人物だ。
アドバイザーであるエイナ・チュールも苦笑を浮かべつつ言葉を濁していた。
「うーん。……シャフラー氏の事はギルドでもタブー扱いのよう……。というより詳しい情報が無くて……」
権限の問題でアドバイザーに開示できないだけで情報自体は存在するはずだとエイナは予想している。
現に【ヘスティア・ファミリア】の団員として登録されている人物だから。
「分かっていることは彼女は数多（あまた）の【ファミリア】を渡り歩いている……。神様なら色々とご存知かもしれないけれど……、ギルドとして情報を出すのは難しいようよ」
「そうですか」
直接聞いてみたがゼゼナは無視し続けた。だからこそエイナに尋ねているわけだ。
ヘスティアは中立を保ち、個人情報を教える気は無いと明言していた。
「罰則についてですが、これも非公開扱いになっているわ。余程の悪さをしたのか、それともギルドが何らかの弱みを握られているのか……。後者はあり得ないんですけどね」
彼女の罰則を制定したのが神の集会『神会（デナトゥス）』だということ。ただし、詳細はギルド職員に伝えられていない。しかし、ギルド長だけ承知している気がするとエイナは言った。
ちなみに罰則となっているが罰金ではなく、正式な手続きを踏めばダンジョンに潜れる。
「一階層につき一〇万ヴァリスの保証金を納める。武器の持ち込みは

数人のギルド職人の確認作業が必要……。活動報告の書類の提出などですね。一般の冒険者に対するものとしては厳重とも呼べる扱いとなっているみたいです」

（僕が普段ダンジョンに行くのにそんな手続きしない……）

聞いているだけでダンジョン攻略の意欲が減退してくる。おそらくそれは他の冒険者も同様の筈だ。

気の短そうな冒険者をたくさん見かけるので。

「例外として第一級冒険者数人の随行がありますね。こちらの方が可能性が高いです」

ベルの【ファミリア】に第一級冒険者は一人も居ない。

自分の団員なのに正体がまるで分からない。アドバイザーの言葉を受けてより一層不安になってきた。

――ただ、ゼゼナが【ヘスティア・ファミリア】に入団した経緯は分かっている。

前に入っていた【アルテミス・ファミリア】の主神が押し付けたからだ。

†

ゼゼナ・シャフラーは普段から本拠（ホーム）に居て、時々姿をくらませる。

彼女は大体神様の居る場所に向かう。ただ遠くから眺めるだけで近寄ったり話しかけたりしない。

そして――

神の命令に絶対服従する。

逆に言えば神以外の命令には絶対に従わない。

廃墟の教会である本拠（ホーム）に戻ったベルは居間に居たヘスティアからそう聞いた。

本当に絶対かは分からないけれど、と。

「あまり他人を詮索しない方がいいよ。彼女に関してはろくなことが無いからね。仲間だとしても……」

「そ、そういうものですか」

「あと、神様なら誰でもいいってわけじゃないよ。彼女にも好みがあるようだから。ちなみにボクの言う事に関してある程度聞いてくれ

るそうだよ。だから言ってやったのさ。みんなと仲良くするようにって」

その割に仲良くしてくれているようには思えない。

敵対しないだけマシともいえるけれど。

勝手に出かけた場合、問題が起きないか、という事について――

「たくさんの人というか神に監視されているし、外に出ても散歩しかしない。……例外があるとすれば【剣姫】を前にした時かな」

ベルも【剣姫】についての情報を聞いているので知っている。

探索系の大手と言われる【ロキ・ファミリア】の眷族でとても美人な人間（ヒューマン）であり金髪金眼の第一級冒険者（レベル5）だと。

街の噂の端々に出てくる人物でもあった。

（神に対して問題のある眷族（子）だからベル君に何かをしようというわけじゃないと思うけれど……）

仲間として色々と教えられないのは問題があるな、とヘスティアは苦笑しながら思った。

戦闘に関してしっかりと戦えているとランテとポランから聞いている。モンスターを前にしても臆せず、逃げ出す事もない。何より――今のところ――不平不満を漏らしたことが無い。

弱音を吐かないのはいい事だが上層階しか行った事が無いので心配は抜けていない。

ゼゼナの事を知るにはダンジョンに一緒に潜るのが早道だ。その為には金を稼がなければならない。

†

最後の眷族ヴェルゼッタについてベルはついでとばかりに尋ねてみた。

戦闘しない眷族だが謎が多い人物でもある。

色白の肌を持つ高貴なエルフの女性としか聞いていない。

「彼女は殆ど裏表のない眷族だよ。時たま体調を崩す以外は」

月に何度か高熱を発症し、人事不精に陥る。

戦闘経験が殆ど無いけれど【ステイタス】はベルに決して負けていない言われている。

加入する前に様々な出来事があり、身体的に虚弱で厄介な毒に侵されている。それは今もって治癒できない病気だという。

「都市最高の治療師（ヒーラー）でも完治は難しいとお墨付きをもらっている程さ。だから君が頑張ったところで徒労に終わると思うよ。エルフ特有の長寿のお陰か、今すぐ死ぬような不治の病ではなく慢性的な付き合いで少しずつ病状を和らげるのが一番だと言われている」

本当は戦闘経験を積んで病気に対する『アビリティ』を取得してほしいと思っていた。

ダンジョンに向かえば危険だと言われ、他の眷族のみならずエルフのギルド職員から止められてしまう。

その代わり【ロキ・ファミリア】に所属している本当に高貴なエルフである『リヴェリア・リヨス・アールヴ』には遠慮している。いや、声を掛けられない威厳を感じていた。

ある意味、ヴェルゼッタに対するものは彼ら（エルフ達）の本音だと理解した。

「それよりベル君。質問するからにはそれなりに【ステイタス】が増えたんだよね？」

ポランから聞かされた条件をすっかり忘れていたベルは盛大に脂汗を流した。

ついつい調子に乗って尋ねてしまった。しかも団長が仕事で不在の時に。

ヘスティアは神の特権として眷族の【ステイタス】の詳細を知っている。それこそ神にしか読めないとされる【神聖文字（ヒエログリフ）】で――

「ボクは出来る限り教えたいと思っているけれど……。後、君の【ステイタス】の伸びはいい方だよ。この調子で二か月くらい頑張れば充分なほどに」

上層の調子から二か月だと言った。

より下層なら期間が早まる可能性がある。

戦闘期間が短いにもかかわらず数字伸びは眷族一高くて速い。ポラン達の教育のお陰か、それともベルの潜在的な能力の影響か。

「数値が増えても戦闘の実感として分かるほどじゃあないと思うけれど……。これからも頑張れるかい？」

「上層は確かに苦にならなくなってきました。もうじき四階層以降にも挑戦したいです」

やる気に満ちているベルの顔を見てヘスティアはただ微笑んだ。

神として出来る事は多くない。ただひたすらに自分の眷族を信じて生きて帰ってくるように祈るだけ。

†

神に様々な質問をしてしまった負い目からダンジョンでの戦闘により一層真剣に取り組むことにしたベルはランテやポラン、ユーカリンと代わる代わる戦い続けた。

自分以外の【ステイタス】について秘匿されており、仲間だとしても安易に公開されない。それについてベルは文句が無かった。

今のところ分かっていることは四人の眷族に『二つ名』があること。それだけでレベル2以上は確実。

レベル0のポランが『二つ名』持ちなのが少し疑問だったけれど。

「オリンピアさんも【ランクアップ】してたんですね」

「……さあて、それはどうかな？」

木剣同士を打ち合わせつつ不敵な笑みを浮かべるポラン。

虚弱なエルフであるオリンピアについてまだ不明な点が多いのは認めるところ。ベルとしてもどうやって強くなったのか気になる。

それを教えてもらう為にはポランから課せられた条件を満たす必要があり、現在進行形で頑張っていた。

「君が質問ばかりすると脱退した時、こちらの情報がよそに流れてしまうから教えたくないな……。どうしてそんなに聞きたがるのか団長である私は君を疑わざるを得ない」

そう言われてベルは純粋な疑問だった言葉が実がとんでもないことに繋がると気づいて申し訳なくなった。

確かに【ファミリア】の情報は貴重で敵対者にとって宝とも言える。

ベルが一生ヘスティアに尽くす保証はない。だからこそ、情報を出し渋る気持ちを考えてこなかった。

「眷族としての仲間意識はどこもあまり無いものだよ。彼らが忠誠を誓うのは仲間ではなく神だ。それ以外は形だけ仲間であって、実際に

は敵同士と変わらない」
「……はい」
「クラネル君。知りたがる気持ちは分からなくもないけど……、他の【ファミリア】に対しても興味があるからといって質問攻めにしないように。間違いなく武器を向けられるから」
「はい」
もし、逆の立場なら確かに怪しむ。
的なのに聞きたがるものと友情を深めようと思う者は居ない。そして、それは当然だと理解する。
気さくに話したいだけ、という気持ちも時と場合がある。
ベルはまだ【ファミリア】や眷族について知らない事が多かった。
「下層域に向かう時、帰りも考えなければならない。片道だけで体力を使い切ってはいけないよ」
武器を振るいながらポランは様々なことを伝え、ベルは一つずつ理解しようと努力した。
【ヘスティア・ファミリア】の団長としてなのか、それとも頼りない男子だからなのか。
ベルから見てポランは頼れる人間（ヒューマン）なのは間違いない。

†

ギルドのアドバイザーから提示された【ステイタス】の規定数値に達したので、より下層に挑戦する資格を得た。ただし、これはあくまで彼ら（ギルド）の指針であって強制力は無い。
無視して深い階層に挑むこともできるが自己責任だ。何かあってもギルドが責任を負うことは無い。
「ブーニディッカ氏達の教訓を受けているお陰か、順調のようですね」
「とても親切にしていただいています」
ハーフエルフのエイナにベルは日頃の様子を伝え、良い返事をもらったところだった。
彼女（エイナ）は生傷が絶えないベルの様子に不思議と不安は無かった。それはただ単に上層域で仲間と共に訓練をしているだけだから、ともいえる。

少なくとも彼女（エイナ）は自分が担当している冒険者に死んでほしいとは思っていない。

職員の仕事をする上で冒険者の死は意外と身近だ。

「貸与している武具も取り換えが必要ですね。ここで思い切って新規の武具を購入するのも手ですよ」

「予算的に厳しいからちょっと……」

「ギルド職員が言う事ではありませんが……。時には借金をする事も未来の投資です。下層はモンスターの数も増えますし、収入も当然多くなります。まして、お一人で向かうわけではないでしょう？」

「一人になる事が多くなるかもしれません。他の方が繁盛期に入るらしくて」

暇そうなのはゼゼナを除けばユーカリンだけ。

神ヘスティアは言わずもがな。ポランはあちこちを掛け持ちしている。

ヴェルゼッタは都市外に出る予定があって、その準備を整えていた。

（ランテさんは主神の面会に度々行っているそうだし）

「……そうですねー。ブーニディッカ氏は……、そろそろ【ガネーシャ・ファミリア】の催しにお呼ばれする時期でもありましたね」

【ヘスティア・ファミリア】は探索系だが探索をほとんどしない【ファミリア】だと言われる所以（ゆえん）だ。

眷族総出で何かしらの仕事に駆り出されてしまう。

「今日は四階層から現れるモンスターについての講義を受けに来た……、という事でよろしいですね？」

「はい。多数のモンスターを相手にする方法などをご教授できれば……」

強くなる冒険者は大体アドバイザーの意見を無視しがちだ。ベルもいずれは勝手に攻略を進めるようになるかもしれない。

仮にそうであったとしてもエイナに止める権利は無いし、無謀に降りる冒険者に対して生きて帰ってくるように祈る事しかできない。

己の職務を全うするのがギルド職員としての責務である。

（ブーニディッカ氏も最初は真面目で素直な方だったそうですが……。何があってああなったのか……）

ポランの担当ではなかったエイナに知る由もない事ではあるが気にしていた。

ユーカリンも同様だ。こちらは更に謎に包まれている。

特段の悪さをしたわけではないのに不穏な気配が付きまとう。いや、証拠が無いだけで真っ黒な冒険者だと揶揄されている。

嘘を見抜く神ヘスティアが何度もギルドに呼び出されたのは記憶に新しい。――結局のところユーカリンが何らかの事件を起こした、という事実は今もって無いのが現状である。

†

四階層以降の攻略許可が下りた頃にはオラリオ全体が賑やかになっていた。

定期的に行われる催しで露店の数が増えたり、都市外からの客が殺到したり――普段以上に人口が増えたような錯覚を覚える。

迷宮都市は単に冒険者が地下のダンジョンに潜るだけではない。様々な【ファミリア】が多くの客を楽しませる。特に飲食店は稼ぎ時だ。

「外が随分と賑わっていますね」

ベルにとって初めての政だ。この喧騒に多少なりとも怖気づく。

普段は陰鬱な地下空間で戦闘ばかりしている冒険者たちも仕事を休んでバカ騒ぎに参加する。ただし、祭りには喧嘩が付きもので治安維持の【ファミリア】が総手で警備にあたっている。寧ろ、この時の為に彼らが存在しているといっても過言ではない。

「零細【ファミリア】たる我々にとっては稼ぎ時だよ、ベル君。ゆっくりとお祭りを楽しむ暇なんて無いのさ。でも、君は自由だから楽しんでくれたまえ」

「僕にも手伝えることがあるんじゃ……」

「担当する店がそれぞれ違うから無理だよ。それに……、【ファミリア】としての強制力も無い。それでも手伝いたいって言うんなら……。ポラン君と一緒に行ったらどうだい？　団長のお手伝いなら

参加させてもらえるかもしれないよ」
　ヘスティアの提案に喜色満面の笑みでベルは頷いた。
　ボランにそのことを伝えると苦笑された。やる気があっても実際の現場はとても厳しく大変である、と。
　ましてベルはまだレベル1の駆け出しだ。争いごとを鎮静化させる実力が無い。出来る事と言えばゴミ拾いや迷子の面倒だ。
「あー、後【ガネーシャ・ファミリア】の一員を示す象の仮面を付けなければならないよ」
「仮面ですか？」
　大勢が参加するうえで所属【ファミリア】が曖昧というのは治安的にも不味いと説明する。
　半裸になる必要は無いけれど隠れた場所で悪さするのを防ぐ意味があるとか。
　例年のボランの仕事は治安維持ではなくゴミ拾いなどだ。
「英雄に憧れる君の場合はダンジョンに挑んだ方がいいんじゃないか？　祭りの開催中も潜っていいんだし」
「何事も経験だと思います」
「対人戦も経験だ。……それでもかい？　冒険者は君が思うほど華やかじゃないよ。ついでに【ガネーシャ・ファミリア】の団員の格好はしなくていいけど、してはいけないわけじゃない」
「は、はい」
　思いもかけない言葉を掛けられ返事が上擦る。
　冒険者になって単調な返事しかしていない事にベルは戸惑いっぱなしであった。だが、いつも懇切丁寧に教えてくれるのでありがたいと言う気持ちが大きかった。

#5―07　伏字の冒険者

いくつもの仕事を掛け持ちする団長ポラン・ブーニディッカの仕事現場の一つに【ガネーシャ・ファミリア】がある。

新人冒険者たる白髪（はくはつ）の少年ベル・クラネルにとってその【ファミリア】の情報はまだなく、団長に詳細を教えてもらいながら向かっていた。

迷宮都市オラリオの中で眷族数を一番多く抱えており、治安維持は勿論年中行事を担当し、住民達に笑顔を振りまくことを生業（なりわい）としている。

規模の大きい【ファミリア】であるが探索系の中で一番というわけではない。

「主神であるガネーシャ様は人当たりの良い神様だから怖くないよ」

「……団長はどうしてそこで働いているんですか？」

聞かれるだろう事を予測していたポランは軽く唸りつつ咳払い後に語り出す。

昔、色々とやらかして冒険者の仕事を取り上げられた時に紹介を受けたことがきっかけだ、と。

度々聞く団長の失態は確かに聞くのが怖いくらい多岐に渡るらしい。ギルドのアドバイザーですら口を噤（つぐ）むほど。

見た目は優しそうで温和な女性なのに、とベルは疑問を抱く。

「受けた恩に報いるのも冒険者の務め。……私はその縁で機会がある時に顔を出すようにしている。団員達とも良くしてもらっているよ」

ベルにとって謎の多い人物となっているポランだが外を出歩けないような危険人物とは思えなかった。

普段の暮らしでも特段の異常性は確認できない。では、いったいどういう事なのか、少しずつ気になっているところだった。

†

ポランとベルが外出している間、留守番役となっている高貴なエルフことヴェルゼッタ・オリンピアは共同ベッドの上で唸っていた。―

―より正確に言うならば苦しんでいた。
助っ人のランテは定期的にダンジョンに潜ったり忙しく、ユーカリン・ナナツタエも日課と称して出掛けていた。
必然的に残っているのは謎多き眷族ゼゼナ・シャフラーと神ヘスティアとなる。
――だが、今回は本拠（ホーム）に来客を招いていた。
ベル達と入れ違いに訪れたのは腰まで長い翡翠の如き髪を持つ高貴なエルフの冒険者『リヴェリア・リヨス・アールヴ』だ。
「折角来てもらったのにオリンピア君の体調が悪くてね」
「……いいえ。時期的に不調だろうと予想していました」
ゼゼナはヘスティアの側に居るが来客の相手はしない。なので必然的に家主としてヘスティアが飲み物やお菓子をリヴェリアの前に置く。
このやり取りも長く続いているのでお互い勝手知ったる様子で佇んでいた。
（……相当苦しそう、という事だから。明日が山場……、といったところか）
「新しい眷族が来てからあの子（オリンピア）はどうなんでしょうか？」
と、リヴェリアがヘスティアに尋ねた。
定期的に訪れているとはいえエルフの感覚は人間と違い、少しの間が数か月も離れる事がよくある。
質問を受けた幼神（おさながみ）ヘスティアはヴェルゼッタの容態を正直に告げる。
エルフの体調はエルフが一番詳しい。そして、リヴェリアは半ば後見人のような存在である。
【ファミリア】こそ違うが同胞（エルフ）として助力を惜しまない事をヘスティアに誓ったほど。
（神ヘスティア以外が出払っているからか……。この眷族（ゼゼナ）が離れないのは）
敵を見るような虚ろな瞳でリヴェリアを見つめつつヘスティアの側を離れようとしない。

必要以上に近づこうものなら威嚇してくる。
神が居ない状態の時、一人で散歩するゼゼナであればリヴェリアが近づいても無視したり相手にしないような無関心さを見せるが身を寄せた神が近くに居るだけで随分と態度が変わる。
そんなゼゼナも命令を受ければヴェルゼッタの面倒を見る。
「必要以上にベル君に近づくことはないけれど……。あれは……きっとベル君が困っていたように見えたんだろうね。他にもたくさん眷族候補が居ただろうに……」
「最初に聞いた時は驚きましたが……。失われた記憶に近しい者として感じたのか……。三人居た、という従者の一人と重なったのかも……」
「それはどうだろう。君のとこの狼人（ウェアウルフ）君のように従者の名前で呼んだことないから」
ヴェルゼッタは時々、故郷で自分の従者だった者の名前を言う事がある。
三人共に亜人（デミ・ヒューマン）で、一人は狼人（ウェアウルフ）。名前は『リユカ・ロー』という。
残り二人の内、名前までは思い出せなかったが猪人（ボアズ）が居るところまでは判明した。
「白い兎っぽいとも言っていたから……。最後はおそらく兎人（ヒューマバニー）かもしれない。……あー、早くアレスが来ないかな。もし、来たらしっかりと聞いておくれよ。報酬は出せる限り頑張るからさ」
「その点は既に承知しております」
「それで……、今回の旅は長くなるのかい？　また違う里に行くそうじゃないか」
里を追われた多くのエルフ達は各地の森へ散り散りに逃げ延び、腰を落ち着けた場所を新たな里として今は平和的に暮らしている。その辺りの事情をヘスティアは詳しく知らないが過去に大きな戦乱があった歴史として承知していた。
リヴェリアはエルフの代表として度々慰問のような催しに呼ばれる。
多くのエルフたちの希望の星として。しかし、ヴェルゼッタの出現

により、取っつきにくそうなリヴェリアの代わりとして各地の里に住む多くの同胞から――最近は顕著に――招待を受けるようになった。

ダンジョン探索を休止し、オラリオの外に出かける事にヘスティアは最初戸惑ったが人助けなら協力したいと言ったヴェルゼッタの言葉を尊重することにした。――神は眷族を応援する立場なので断ることが出来なかった。

「半月を予定しています。……私よりも彼女のお世話が出来ると意気込んでいるエルフが多いので心配は無いかと」

「高貴な王族（ハイエルフ）が気難しいっていうのは君のせいじゃないのかい？それとも気さくなオリンピア君が特殊なのかい？」

「……どちらでしょうか」

リヴェリアは苦笑として答えを濁す。

雰囲気から自分が気難しいばかりにエルフの仲間達が怯えているのは知っていた。そこにとても優しい王族（ハイエルフ）が現れればそちらに流れるのは必然だと言える。

人気を取られるのは面白くないが必要以上に構われる事も好きではなかったので分かっていても利用してしまう。

「……なんにしてもあの眷族（子）をよろしく頼む」

神であっても頭を下げる。それが例え下界の住民でも。

ヘスティアの素直な礼にリヴェリアも丁寧に返礼する。

†

廃墟の本拠（ホーム）から出たリヴェリアは【ロキ・ファミリア】から連れてきたエルフ達に手を振る。

今回の面談はゼゼナが居るので眷族を下がらせていた。そうしないと要らぬ犠牲者が出ていたかもしれない。

殆どダンジョンに潜らず、【ステイタス】も不明な相手にリヴェリアは最大級の警戒をしていた。

（……この私が脂汗にまみれるとは……）

噂でしか聞いたことが無く、今は殆ど知る者が少なくなったがオラリオにて本当に脅威なのは意外と身近に居た。しかし、脅威ではあるが扱い方さえ誤らなければ――

今でこそ都市最強と言われる【猛者（オッタル）】という冒険者が居るがゼゼナは既存の冒険者を遥かに凌駕するという。

（あれでレベル2（ツー）というのは確かに詐欺だ。あまり相対したくないが……。【アストレア・ファミリア】や【アルテミス・ファミリア】に居た頃の奴はどうして大人しく出来たんだか……）

長く生きる王族（ハイエルフ）だからこそ知る情報であるので人間（ヒューマン）や若い世代には全く知る由もない。しかし、確かにそこに居る。

散歩気分でダンジョンに潜り、僅か一日で【ランクアップ】してきた化け物が。

あまりの速さにギルドが大混乱。勿論、神々の間でも。

ゼゼナが加入する当時のヘスティアは知らなかった。

一言命令しただけで目的を達してくる、などということを。

前に加入していた【ファミリア】の主神アルテミスは言った。

「こやつは命令すれば必ず達成してくる。試しに【ランクアップ】してこいと言おうものなら……」

と、ゼゼナことメンテを恐れていたアルテミスの言葉を全く信じなかったヘスティアはそれ（ランクアップ）を命令してみた。そして、戦慄し、後悔した。

通常【経験値（エクセリア）】は自分より強いモンスターや強敵と戦う事で増える。

それなのにゼゼナが取った方法は一足飛びで深層域まで突入し、視界に入ったモンスターを全て屠った。

どういう方法でそれが可能になったのか、ヘスティアは勿論知らなかったし、理解できなかった。――アルテミスも推測しかできなかった。

自分の眷族だった頃には一度も見せたことが無い彼女の『スキル』ではないか、と。

「……全アビリティ……表記不能……」

一通りモンスターを殲滅し終わり、全身血まみれのまま笑顔のゼゼナが戻ってきた事に――当たり前のように――最初は驚いた。だが、それだけで終わりではなかった。

戦闘を終えた彼女の【ステイタス】を確認した時、正（まさ）に天啓のよう

に眼をむき、神でありながら恐怖を覚えたものだ。
神生（じんせい）は下界の住民より長いと自負している神にも驚くことがたくさんある、と認識した瞬間であったかもしれない。
現在は【ランクアップ】したので『アビリティ』の数値はリセットされている。その後、彼女の【ステイタス】がどうなっているのか見るのが怖くなった。
それと彼女が掃討した影響からか、全階層のモンスターが数日間現れなかった珍事が起きた。――一週間ほどでモンスターが再度生まれるようになったけれど、彼ら（モンスター）が何だか怯えているようだった、との噂があったとかなかったとか。
前代未聞過ぎて恐怖を覚えたギルドはゼゼナの公式記録から様々なものを封印、または抹消する事態に――
ゆえに現時点でゼゼナは――暫定的に、だが――レベル2でありながら駆け出し冒険者であり、到達階層は一階のまま固定された。
「リヴェリア様、どうぞ」
ゼゼナの事を考えると第一級冒険者なのに駆け出しのような心境になってしまう。
沈着冷静でいようとすればするほど真の化け物に対して怖気づいてしまう。そして、自分に怖いものがあるのだと自覚し、生きている事に感謝する。
【ファミリア】の仲間からハンカチを受け取り、額の汗を拭（ぬぐ）う。
「神ヘスティアだから無事なのか？　あれは野心を持つ神には渡せないな」
「そんなに凄い眷族なのですか、ゼゼナという女性冒険者は」
レベルで言えば3（スリー）である第二級冒険者のエルフが首を傾げつつ尋ねてきた。
知らない相手からすればゼゼナの恐ろしさはいまいち伝わらない。
それもまた仕方のない事かもしれない、とリヴェリアは嘆息する。
「黙っている分には害は無いのだがな。神の命令に盲目的なまで従順だという。……しかし、神ならば誰でもいいわけではない」
「確か神アポロンの命令は聞かないんですよね？」

好き嫌いがあって助かった、と心の内でリヴェリアは思う。本当は好き嫌いは無い方がいい、と普段であれば言っているところだ。だが、ことゼゼナに関しては様相を異にしなければならない。

「神ヘスティアの側に居るあいつは私をいつでも殺そうと窺っている眼をしていた。今回加入した神を気に入っているようだから、迂闊なことを言えば……本当に殺されるかもしれない」

「レベル2の冒険者がリヴェリア様を!?」

「情報収集は大事だ。……それと聞いた情報によればゼゼナはオラリオの住人や【ファミリア】を潰そうとしないそうだ。襲ってくる敵ならば殺すかもしれんが……」

信憑性で言えば実のところ怪しんでいる。確認したことが無いから。

その情報の出所はゼゼナをオラリオに派遣した張本人であり、今も彼女(ゼゼナ)が慕う一柱(ひとはしら)の神だ。

その神は度々こっそりとゼゼナに会い、オラリオで大人しく暮らすように、と声をかけているらしい。物騒な事態に発展する事を望んでいないともいえる。

†

本拠(ホーム)に向かいながらリヴェリアは仲間に言える範囲を伝えた。特に新人は無鉄砲が多い。

王族(ハイエルフ)に危害を加える人間(ヒューマン)の存在を許せるはずが無い、と思っている節(ふし)があるからだ。

「神ウラノスの前で様々な誓約書を書いた、とも聞いている。単なる私怨でちょっかいをかけてはならない」

「……はい」

「神の命令があるとしても仲間との協調性について疑問が残る。【アルテミス・ファミリア】時代はよくケガをしていたと聞く」

言葉だけだと理解に苦しむ。しかし、真相を知れば納得する事がある。

ゼゼナは神の命令に絶対に従う、という確実性が実は無い。それが真(しん)だと証明されたわけではないから。

（神アルテミスが奴に下した命令……、というよりは会話が大事ではないかと私は思う）

つまり神アルテミスは『ダンジョンに潜って痛い目に遭ってこい』と事前に口走った為に怪我をした、とも考えられる。

それが真実かは確認していないのでリヴェリアの憶測にすぎない。

そんな思索に耽っているとエルフの冒険者たちが騒ぎ出した。どうした、と尋ねると話題のゼゼナが来たという。

臨戦態勢に入る眷族たちに武器を納めるように命令する。敵対【ファミリア】だとしても喧嘩を売りに行ったわけではないのだから、と。

途中まで来たゼゼナの表情はきつめだったがリヴェリアの顔を見て頭を深く下げた。そして、謝罪を終えた彼女はそのまま来た道を引き返す。

（威嚇などしたことを謝ってこい、とでも言われたのか。……命令だからなのか、素直なのか……。掴みどころのない奴だな）

ここ数年ゼゼナが問題行動を起こした噂を聞いたことが無い。特に【アストレア・ファミリア】からだったか、と記憶を探るがそれほど昔の事ではない筈だ、と。

暴風のような災厄が過ぎ去った後、物陰から顔を出す人物がリヴェリアを取り巻くエルフ達に声をかけてきた。

頭部に無数の花飾りを付け、黒いローブをまとった女神。その姿にリヴェリアは覚えがあった。

ゼゼナをオラリオに派遣した張本神（ちょうほんにん）『ヴェーラ』その神（ひと）であった。

†

【ヴェーラ・ファミリア】の主神は迷宮都市オラリオからかなり離れた小さな村で暮らしている。物資や資金稼ぎに度々オラリオに訪れる。

【ファミリア】の規模は下位に位置する。団員数もそれほど多くない。だが、過酷な環境で育った眷族のレベルはどれも第二級である。

「エルフ共、無事だったようだな」

女神を前に王族（ハイエルフ）が片膝をつく姿勢を取ったので取り巻きのエルフ

達もすぐさまそれに倣った。
悪戯っ子のような目をエルフ達に向けるヴェーラは少しバツが悪そうな態度であった。
「ご無沙汰しています、女神ヴェーラ」
「お忍びだから堅苦しい挨拶はいいよ。……それより、なんか悪かったな。うちの娘（メンテ）から嫌な事でも言われたか？　親（育ての親）として謝罪しとくぜ」
「いいえ。彼女とは何もありませんよ」
「アタシがここに居るのは内緒な。……他のエルフ共も……。色々と思うところがあるかもしれねーが……、眷族同士仲良くしてやってほしい。正直、ロキがどうなろうと知ったこっちゃねーが」
言いながらも挙動不審な態度を取るヴェーラ。
何やら言いたそうにしているものの上手く言葉に出来ないようだ、とリヴェリアは推測する。
郊外に存在する【ファミリア】は全てオラリオと敵対しているわけではない。その中で【ヴェーラ・ファミリア】は噂が届きにくいほど辺境に存在している。それこそギルドの古い情報を漁ってもなかなか出てこないくらいに。
「……神ヴェーラ。正直、あの眷族とどう付き合えばいいのか測り兼ねております。言える範囲でいいので、ご教授願えませんでしょうか？」
「そりゃあ……それはアタシが知りたいことだ。これが正しいと……言えない」
手振りで立つようにヴェーラが指示したのでリヴェリア達は臣下の礼を解く。
言える範囲でいいなら【ロキ・ファミリア】に案内してくれ、と言ってきたので了承する事にした。
女神を守護する眷族の存在が無いのが疑問だったが、先ほどの『お忍び』という言葉から勝手に来たのだと理解する。
リヴェリアの知るヴェーラは掴みどころのない点では他の神々と同列である。だが、今の彼女は娘の成長を見守る良き母親のような雰

囲気を持っていた。
自身もアイズの教育係として母親扱いされているので気苦労は大体共有出来るのではないかと考えた。

†

すぐ帰るから長居しない、とヴェーラは言いつつ【ロキ・ファミリア】の本拠（ホーム）『黄昏の館』に訪れた。それと彼女（ヴェーラ）がここに来るのは初めてではない。
門番はヴェーラの姿に驚きつつ警戒を緩める。
神が相手の場合は何処の眷族も強硬に出る事が難しい。
「お帰りなさいませ、リヴェリア様」
館の中で出迎えたのは留守番役のエルフ『レフィーヤ・ウィリディス』という少女であった。
ゼゼナとの接近により何も無かったのに強敵とまみえたような雰囲気を醸し出す御付きの眷族（エルフ）たちの様子にレフィーヤは首を傾げる。
「なんや、ヴェーラやないか」
二階に向かう階段から彼女達の主神ロキが姿を現す。
赤毛で少年のような細い肢体を持ち、ヘスティア達にいつも『無乳（むにゅう）』だの『絶壁』だのと揶揄されるほど胸が無い。それでも彼女はれっきとした女神だ。
糸目と称される細い目で来客たるヴェーラを見つけ、少しだけ警戒する。
「おー、ロキ。邪魔するぜ。エルフ達と単なる世間話しに来ただけだ。後、酒は要らねー。悪酔いしそうだからな」
「そういうわけだ、ロキ。神ヴェーラと少し話しをする事になった」
にこやかに手を振りつつ愛想を振りまくヴェーラに対し、気持ち悪いものを見るような目で唸るロキ。
度々ヴェーラの事で【ファミリア】が混乱に陥った経験を知るロキからすれば厄介な隣人であった。
（うわっ、気持ち悪い笑顔を見せおって。何企んでるん、自分）
（茶菓子くらい出るかな……）
ヴェーラはロキの懸念とは全く違う思考に囚われていた。

正直者として有名なヴェーラは友神（ゆうじん）として付き合うには厄介な性質を持っている。――だが、ここしばらくはとても大人しく過ごしており、素直な面を見せる機会が多かった。

ロキはそんな状況を全く把握していないので未だに苦手としていた。

†

客室に案内されたヴェーラは【ロキ・ファミリア】の眷族たちに囲まれる形となった。

エルフだけ集まるものとヴェーラとリヴェリアが想定していたがゼゼナの事に興味を持っていた眷族が意外と多い事に驚いた。

（どいつもこいつも第二級以上じゃねーか。……これでもまだフレイヤよりましなレベルなのか？　何人かくれねーかな）

と、本音を思いつつも辺境の暮らしは楽ではない。都市の利便性を考えれば脱退はあり得ないものだと思われる。それに――見返りを用意することが出来ない。

苦笑を浮かべていると幹部候補が姿を見てきたので周りの眷族たちが驚きに包まれる。既に入室しているリヴェリアを除けば大事（おおごと）になりつつある雰囲気だった。

「【剣姫】は居ないのか？」

ゼゼナの友人として長い付き合いがある眷族の『二つ名』を言った。すると即座に答えが返ってきた。

武器の資金稼ぎのためにダンジョンに潜っている、と。

「じゃあ、堅苦しい挨拶は抜きだ。ここではゼゼナと言われるあいつはアタシの命令を一番に優先する。度々呼び出されるんで色々と修正しているんだが……。初めての土地だからか、上手くいかねー。アタシの目的がまっとうに成功したためしがないから仕方ねーけど……」

ゼゼナは普通の人間（ヒューマン）ではない。まして亜人（デミ・ヒューマン）の枠組みにも入れられない。

多くの人々の願いが生んだ正真正銘の化け物だ、とヴェーラは告げる。ただし、これは既に語られているゼゼナの情報でもある。

神の言葉で簡単に言えば『人間サンドバック』だとか。
「強い冒険者が居るオラリオなら平気か、と思って放り出したんだが……。後の祭りだったようだ。元々大人しい性格だったんだ。だからこそ、アタシも驚いたよ。何とかしてくれと言われてもどうしようもない。アタシが教えてほしいくらいだ」
「では、元々は危険性について分かってなかった、という理解でいいのか？」
「化け物であることは変わりねー。それはそういうもんだとアタシは思ったし、その後の事までは知らなかった。アストレアとアルテミスも役に立たない眷族としてしか使ってなかったみたいだし、その前に所属していた【ファミリア】の神共もすぐに手放すくらいの役立たずだっていうのは理解していたはずだ」
ギルドの情報にあるゼゼナが所属していた【ファミリア】は分かっているだけで三〇を超える。
大半が一年で――改宗（コンバージョン）の条件が最低一年【ファミリア】に所属していなければならない――放り出されている。それくらい彼女（ゼゼナ）は何の役にも立たなかった、と思われ続けた。
サンドバックに使う以外に価値のないゴミとして捨てたのだから当然だ。
「なんだっけ、闇派閥（イヴィルス）？　そいつらすらゼゼナを使いこなせてねー。つまりその程度だった。何の脅威も無いゴミとしか認識できなかった」
「……」
表現が悪いのは今に始まった事ではないが聞いている新参の冒険者は身を乗り出そうとするところまで怒りを覚えた。
所属する神にゴミと判断される事に一言文句でも言わなければ気が済まない、とでもいうように。
古株の冒険者は苦笑したり、呆れるだけで何も言わない。
「エレボス、モロス、ケール、ヒュプノス、モーモス、アパテー、ピロテース……。名だたる邪神が居たらしいが半数はゼゼナに潰されたんだっけ？　その辺りは詳しく知らないんだけど」

「大量の闇派閥（イヴィルス）の眷族が倒されたのは知っていますが……。犯人が彼女だと断定されたわけではありません。あと、神の送還までには至っていないのでは？　彼女は邪神でも手にかけないのでしょう？」

……正確には神に手出ししない、とか」

「アタシの与（あずか）り知らぬところの惨劇について責任を押し付けられても困るが……。オラリオで皆殺しにしてこい、とか都市を潰してこい、とは言っていない。最初の命令は確か、そ　こ（オラリオとかいう都市）で死んで来い、だった筈だ。……だが、メンテは死ななかった。ここに来て何らかの命令を優先した、んだと思うが……。……その分岐点となる命令が何だったのか……」

　育ての親たるヴェーラの命令こそが至上である。――と言った当人（ヴェーラ）も思っていたほど。それなのに結果は違っていた。

　最新の主神はヘスティアだが、彼女の命令ではない事は確実だ。一周回ってヘスティアに来た、という事も予想されるけれど――

「あまりに化け物扱いし過ぎて付き合い方を考えてこなかった。……今は反省しているさ。陰ながらメンテの様子を見たりするようにしているし、ギルドの要請にも従っている。そして……、こうしてお前たちにも話せるようになるとは……。これも時代かねー」

　ヴェーラの知るメンテという眷族は不死性を持つ化け物で倒しようが無い存在だった。

　不死と言っても死なないだけでケガをしたり病気になる事がある。決して完全無敵の存在ではない。

　どうしてそんな眷族を生み出したのか、というのはヴェーラが面倒を見ている小さな村に原因があった。

　その原因を解消する為には恒久的に仕事をこなせる生贄が必要だった。不死性は偶々（たまたま）だが――

　この辺りについての事情はヘスティアにも伝えてある。問題は今現在の状況だ。

　ゼゼナは既にヴェーラの知る人間サンドバック――いや、単なる役に立たないゴミではなくなった。

　迂闊な命令一つで都市を滅ぼす爆弾のようなものと化している。

というかそういう認識をギルドに持たれてしまった。
「そうそう、忘れるところだった。メンテの前で神の悪口は言うな。特に所属している主神はちゃんと確認しておけ。神に危害を加えるな、という命令は今も有効の筈だからな」
「はい」
ゼゼナの居ないところでなら好き放題悪口を言ってもいい。
次にリヴェリアに対する威嚇について尋ねる。
質問に対してヴェーラは可能な限り答える。そこに嘘偽りは存在しない。
掴みどころのない神々が多く存在する中にあってロキも認める事実だ。
「ヘスティアを気に入っている証拠だ。本当なら話しはそれで終わりだが、あいつの眷族もまた凄いな。アタシは驚愕したね。どうしてメンテと普通に付き合えるんだ、と」
神として長く生きているが理解が追い付かない、と口に出すほどの感想を抱いた。
度々ゼゼナの様子を見ていたヴェーラにとって【ヘスティア・ファミリア】の団員は末恐ろしい存在に映っていた。最近入った少年（ベル・クラネル）については良く知らないけれど、と。
「大抵、メンテを前にすれば王族（ハイエルフ）のお前でも怖気ずく。それが普通の反応だ。未知の脅威を前にしているようなものだからな。なのにあっちは四……いや、三人だな。とにかく眷族全員がメンテを普通の仲間としてしか思っていない。ランテとかいうのは特殊だとしても、だ。……あれはアルテミスの眷族だから無視している気がするが……」
観察したり直接話しをしたこともある【ヘスティア・ファミリア】の団員達は総じて普通の少女としか言いようがない。一応、団長ポランが特殊なのは知っている。だが、それを踏まえても理解できない。
メンテを普通の人間としか見ていない事に。
【ロキ・ファミリア】の【剣姫】だけがそうなのかと最初は思っていた。だが、そうではなかった。

元々メンテを友人と思ってくれた最初の眷族はヴェーラの知る限り【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインただ一人だけ――

中々死なない特性を生かし、特訓相手として申し分ないのは人間サンドバックとして当然ともいえる。

攻撃を受けるだけではなく反撃もする。元々の特性から考えれば戦えないわけではない。

(アタシの側に居た頃はとても大人しかったのにな。野に放った途端に色々と問題が出やがる)

オラリオに来てからのメンテの動向について、ヴェーラにも分からない事がたくさんあった。それを踏まえて対処方法を伝えていく。――といっても大した方法は思い浮かばないけれど。

元々メンテは他人の悪意を受け止めるだけの存在に過ぎない。

育ての親たるヴェーラは彼女に期待したことなどなかった。それでも彼女は神の愛を求めた。

(……そして発現した『スキル』があれとは……。元々備わっていたのかもしれねーが……)

【ランクアップ】した事で色々と分かったことがある。化け物はやはり本物であった、と。

『スキル』については謎が多く、はっきりと理解したわけではない。というより神にも読めないものだったけれど、感覚として分かる事がある。

一目見ただけで大体のことが分かってしまうような感覚とでもいうのか――

†

ゼゼナが発現させた『スキル』は『愛●●●情(アフ・●●●・●・ラ●ラ)』という。

【ヘスティア・ファミリア】に所属する四人に共通した読めない文章となっていた。

『二つ名』ですら読めないのに『スキル』まで同様となれば『神会(デナトウス)』でも騒然となる。

途中までは誰もが発音できていた。だが、決定された途端に言えないもの――きちんと発音できなくなるし、文章に起こすと伏字に勝手

になる――と化してしまう。
（ヘスティアが何かしたとしてもあからさまだ。メンテについてはアタシの責任が多いが……。原因がアタシっぽいから知らないフリしてるけど……。なんかごめんなヘスティア）
名称は読めなくなったが効果は読める。それ（内容）まで『伏字』にされてはどうしようもない。
内容は大方の予想通り――恋愛に関するものとなっていた。
――助っ人のランテには全く影響が無かった事を思い出す。
（今まで加入した【ファミリア】の奴らは……、特に何も言ってないな。ヘスティアのとこだけ特別なのか？）
疑問が湧いたが今更調べても仕方が無い気もする。
効果としては何らおかしいところは無く、単なる能力値の上昇程度だと思っていた。しかし、実際はそんな生易しいものではなかった。
聞いたことが事実なら――いや、事実なのだが――
ヴェーラはメンテの【ステイタス】を独自に確認する事を今までしなかった。それは単に怖いと思ったからだ。そしてそれは最近現実のものとなってしまった。
レベルこそ低いのだが能力が驚異的過ぎた。数値と現実に大きすぎる齟齬があるといった方が適切か。それくらい乖離が激しい。神と人の差程の開きを誰が予想できるのか。
（測定不能と聞いた時は笑っちまった。……苦笑どころじゃねーな。あれは……恐怖で身体がおかしくなった時に出る笑いだ）
神同士でどうしてこうなった、と軽く喧嘩になったのも懐かしいと思えるほど。正直、現実逃避したくてたまらないと思ったのはあの時が初めてだった。
そんなわけで危険な冒険者と分かってしまったメンテはギルドの制約により探索を禁止されてしまった。ただし、前代未聞の事なので違約金のような罰金を払えばなんとか潜れる程度には緩和できた。
冒険者なのに一方的に束縛するのはギルド側としても都合が悪かったし、強者を欲しがるフレイヤの口利きがなければもっと騒動が大きくなっていた筈だ。

互いに零細【ファミリア】であるヴェーラにもヘスティアにもどうする事も出来ず、ただただ指示に従う事となった。

そんな罰金払えるかよ！

と、大きな声で叫びたくなったヴェーラだった。元より責任を負いたくないので今はひっそりと見守る立場になっている。

【ロキ・ファミリア】の面々は疲れ気味に話されるヴェーラに対し、それぞれ複雑な感情を抱いていた。

無責任だと言うのは簡単だが、そうなるきっかけが女神側にある事もまた事実である。

「そもそもあの冒険者（ゼゼナ・シャフラー）は……作られた、という理解でいいのですか？」

「村の巫女として、という意味ならそうだ。そうしないと村が滅ぶから私が奴ら（村民）に知恵を授けたわけだ。趣味で作ったわけじゃないぜ。アタシもそれなりに責任を感じている」

神の所業は時に非情である。それでも頼りたくなるのは人々の性（さが）

リヴェリアは特段、女神（ヴェーラ）を責める気は無かった。自分が冒険者をする事になったのも様々な覚悟を決めてのこと。誰しも何かしらの目的があるものだと理解を示す。

（……今のゼゼナには仲間が居る。だからこそ取り上げることが出来ず、見守る役に徹しておられるんだったか……。彼女にも親心のようなものがあるのか……）

そうでなければゼゼナの様子など見に来ないだろう。それも単身で。

正しい付き合い方については模索中で、それこそヴェーラ自身が知りたいことでもあった。

眷族に対する危害について。好戦的な性格ではなく、気に入らない事があっても内に溜める事が多いと伝えた。

「どんな責め苦に遭ってもメンテは仕返ししたりしなかった。それこそ村人全員の投石を受けても、だ。睨みに関して、数多（あまた）の暴力で顔形が随分と変わっちまったから険悪そうに見えるだけじゃねーか？最初はもっと柔和な顔だったんだがな……。早死にすると思って放

置したらとんでもないことに……」

リヴェリア以外の冒険者が総じて険悪な顔になった。なんて理不尽な女神様なんだろう、と。

――だが、それでも女神は村人の幸せの為にメンテを用意した。その結果が芳しくなかっただけだ。

「……えーと、あたし頭が悪くて、あんまり理解できなかったんだけど……。要するにあのゼゼナって子は冒険しちゃいけない冒険者ってこと？」

手を上げつつ発言したのは今まで聞き手役に甘んじていたアマゾネスの少女ティオナ・ヒリュテだった。

彼女の言葉にヴェーラは頷く。

「とんでもない能力が発覚したから危険人物として認定された。アタシの権限でどうにかするのは難しいな。フレイヤですら緩和が精々だった。それ以上は……敵対者として認定されてしまう」

本来であればそれで構わない事だったが――今のヴェーラはゼゼナに死んでほしいとは思っていない。ただ普通に、幸せに暮らしてくれれば、それで満足だと思えるようになった。

良き仲間（友人）が彼女の周りに現れてくれたおかげかもしれない。

そういえば、とヴェーラは思い出す。それはゼゼナに関係があるのかは分からないけれど――

（オネイロスってイケロスの兄貴分じゃなかったか？　……今更そんな事を思い出しても意味が無さそうだが）

ゼゼナの話題と全く関係なさそうでいて重要そうなことに首を傾げる女神ヴェーラ。

よその【ファミリア】ではあるがどこかが引っかかってしまった。

＃5―08　メジェド

【ガネーシャ・ファミリア】に職業体験に赴いたベル・クラネルは団長のボラン・ブーニディッカと共に慣れない作業に従事した。
何日にも渡る行事の裏方仕事とはいえ殆どが力仕事だった。
通常であれば無理そうな作業も【ステイタス】を持つ冒険者にとって比較的楽に進めることが出来る。だが――ベルはまだ『力』のアビリティの数値が低かった。
（細い身体のボランさんはどうして重いものを簡単に運べるんだろう）
モンスター用の餌が膨大に積載された猫車があるのだが団長ボランはいつもの作業のように笑顔でこなす。そして、それを変だと思わない【ガネーシャ・ファミリア】の団員。
レベルの高い冒険者ならではの光景がベルには異質に映っていた。
「この餌は奥の方に三つずつ置いてくれ」
「了解しました」
「おい新人。さっさと運べ！」
「はい！　すぐ行きます」
仕事量は圧倒的にボランが多いのにベルより楽に進んでいた。そして、返事の違いも顕著であった。
【ガネーシャ・ファミリア】はダンジョンで捕まえたモンスターを飼育している。それをギルドによって許可された唯一の【ファミリア】でもある。
団員の多くが『調教師（テイマー）』だ。
「クラネル君に危険なモンスターは当てないでくださいよ。まだ駆け出しなので」
「そうかい？　それじゃあ、担当を調整するか……」
そんなことを話していると姿勢が美しく整った長身の団員が取り巻きを連れて現れた。
青黒い短髪。両手には武骨なガントレットを装備し、いつでも実戦

に向かえる雰囲気を醸し出している。
凛々しい顔つきに引き締まった身体。
武闘派と言われてもおかしくない立ち居振る舞い。美しき麗人の女性冒険者『シャクティ・ヴァルマ』であった。
第一級(レベル5)にして【ガネーシャ・ファミリア】の団長でもある。
「お前たち、気を緩めるな。もうすぐ開催日だ。最後まで安全確認は怠らないように」
「はい！」
シャクティの言葉一つで団員達が一斉に気を引き締める。
団長である彼女の仕事は迷宮都市オラリオの治安維持だ。普段は検問所に就いている。
主神(ガネーシャ)の命があればどこにでも駆けつける。
「ん？　ポランも来ていたのか。いつも手伝いに来てくれてすまんな。……そっちの奴は……見ない顔だが……、お前は何者だ？」
【ガネーシャ・ファミリア】の団員の多くは象の仮面を付けている。分かりやすさを演出しているだけで装備品としての意味は無いらしい。
声を掛けられたベルは姿勢を正して自己紹介する。
「ポランの同郷(ファミリア)か。承知した。しっかり励んでくれ」
「はい。頑張ります」
一つ頷いたシャクティはすぐに違う場所に向かった。
始めて見る人間が多いベルにとって声を聞いただけで緊張が増した。
様々な思いも作業の方が優先されてしまい、ベルは結局一日中働き詰めとなった。

†

普段は午前中など半日で済む仕事だが繁盛期となる時期は【ガネーシャ・ファミリア】でなくとも忙しい。
幾許(いくばく)かの給金を貰ったベルはただただ疲労のため息を漏らす。
団長ポランはダンジョン探索以外、このような仕事についている。
「後は檻の修理や逃げ出したモンスターの殺処分なんかもする。午後

は『豊穣の女主人』で給仕の仕事。君の場合は皿洗いかな？」
「……それも冒険者の仕事なんですか？」
「眷族としての仕事だ。先ほどの人達もダンジョン探索に赴く冒険者でもある。ただ武器を振り回してモンスターと戦うだけじゃないんだ」
ベルの想像では立派な武器を以って凶悪なモンスターと戦うのが冒険者だと思っていた。決して催しの準備をする店員ではない。
このオラリオに住まう店員の多くは冒険者でもあった。その事実にベルは改めて驚く。
ポランと共に件（くだん）の居酒屋『豊穣の女主人』に向かった。仕事ではなく夜食を食べに。
「多くの冒険者が利用する飲食店だけど、君は利用したことがあったっけ？」
「いいえ。値段が気になったのと夜間に一人で来るのが……」
お酒を出す店に気軽に来る十四の少年は居ない。しかし、ベルより低身長の小人族（パルゥム）も利用するので見た目で経験するのは意味が無い、と団長に指摘される。
料金に関して団長が出すので好きに注文しても良いと言われた。
目的の店は夕暮れに開店する。仕事終わりの住民と冒険者でよく賑わう。
ベル達も早速入店すると給仕担当の女性に元気よく出迎えられた。
「おおっ、ポランが男を連れて来たニャ」
「今回は客として来ました。あまり彼をからかわないようにお願いします」
「何を言っているのニャ。新規の客を大切にしない店員は居ないのニャ」
語尾に『ニャ』と付けて話しかけてきたのは猫人（キャットピープル）の女性店員『アーニャ・フローメル』だ。
栗色の髪と尻尾を持ち、荒くれものが集まる中をものともせず笑顔を振りまく。
彼女はユーカリン・ナナツタエにとって戦闘技術の師匠の一人でも

あった。
ポランはベルにこの店のオススメを教えて注文を済ませる。
†
料理の大半を作るのは店主のミア・グランドという女性である。
奥の調理場に居る筈なのに近くに居るかのような錯覚を覚えさせる存在感を放っており、先ほどからベルは気にしていた。
二M（メドル）ほどの身長があるハーフドワーフで、熱気渦巻く中に見事に溶け込んでいるように見えた。
厳めしい顔をしている以外、何事にも真剣に取り組む姿勢にベルは自分が冒険者であることを忘れて、ただただ仕事ぶりを眺めた。
「ポーラちゃん、今日は仕事しないのか？」
別方向から声をかけてくるのは見知らぬ冒険者の一人だった。
ベルは首を傾げたがポランは素早く返答する。今日はお休みである、と。
ポランはこの店で働く時、ポーラ・ニーカという名前を使う。名付け親は店主のミアだ。
「それは立派なサボリだニャ」
「あんたが言うんじゃないよ」
働きつつ先ほどのアーニャが文句を言い、それを言い返したのはミアであった。
初めて訪れる店にてベルは身体を小さく縮めて嵐のような喧騒が過ぎ去るのをじっと耐えた。今の自分はまだ酒場の雰囲気に慣れない、と感じて。
少し経ってから大量の料理がベル達の前に置かれる。
「たくさん食って明日も頑張りな」
「ええっ!?　こんなにっ!?」
ベルの慌てる様子に苦笑しながらポランはしっかり食べるように命令する。
彼の場合は値段を心配したようだ。だが、団長は大人しく食べる、と強く指示して黙らせる。
「私も最初は驚いたけれど……。冒険者になると意外と食べられるも

のだよ。これも洗礼だと思って諦めるように」
「……はい。でも、とても驚きました」
「何を言っているんだい？　これからも驚きの連続が待っているんだから。……それがオラリオで冒険者になるって事でもあるんだし」
「坊主。金の心配をしているようじゃ、駆け出しから脱せないよ。よく食ってよく動きな。そうすりゃあ、こんな量なんかすぐに慣れちまうから」
ベルに声をかけたミアは豪快に笑いつつ料理を作り始める。
ポランも必要以上に追い詰めるような事をせず、彼を見守った。しかし、事ある毎にアーニャが接近してからかってくるのでポランの眉間が少しずつ寄ってきた。
この店の店員はアーニャの他にも何人か居るのだが白髪（はくはつ）の少年が珍しいのか、代わる代わる様子を窺ってくる。
あまりに構っているとミアからの怒号が飛んでくる。その度にベルが委縮する。

†

一人で入るには些（いささ）か料金が高い酒場ではあったがベルは何とか出された料理を完食した。――そうしないとミアから怒られそうな雰囲気を感じたので頑張った。
多少残しても料金さえ払えば怒ることは無いし、ポランが残りを片付けるつもりでもあった、と小声で告げた。
この酒場は言わば駆け出しに対する洗礼のような場所で、ここに通うことは冒険者の箔付けの一種だと教えた。
「明日から一人でダンジョンに挑戦してもらおうか。……我々がそれぞれ忙しくなる、というのもあるけれど……。自分なりに模索する事も勉強だ」
「はい」
「……みんなでダンジョンに潜れない【ファミリア】でごめんね、クラネル君。……君が良ければ【エニュオ・ファミリア】の団員と潜ってもいい。自己判断する事も勉強した方が君の為になると思う」
ベルは【エニュオ・ファミリア】の本拠（ホーム）を思い出す。主神以外の眷

族に会った事はないが協力してもいいなら考えてみようかな、と思った。

確かにベル以外はまともにダンジョンに潜ろうとしないので将来に不安を覚えていた。協力者が居るなら願ったりだ。

「君にとってまだ知らない事が多いと思うけれど……。目標に向かって頑張って下さい」

「はい。頑張ります」

ポランの言葉に元気よく返事する未来の英雄ベル・クラネル。

その後、廃墟の教会である本拠（ホーム）に戻ると苦しみ悶えるエルフの眷族に慌てふためいた。

外まで伝わる呻き声にベルはすぐさま駆け込み、全身汗にまみれ、ベッドの上を転がる様子と全裸であることに驚いた。

神ヘスティアは水を入れた桶を用意している最中だったが他の眷族の姿が見当たらない。

「おー、酷い事になっていますねー」

いつもの事のようにポランは応じたがベルは顔面を蒼白にさせていた。

色白のエルフであるヴェルゼッタ・オリンピアに何があったのか、と。

今までこんなに苦しむ様子を見たことが無かった。

「丁度いい。クラネル君。このタオルで彼女の身体を拭くように。それとヘスティア様は奥で休んでください」

「おいおい、このボクを邪険にする気かい？　……まあ、ベル君への試練も必要か……。……頼りがいのある団長が居てボクは幸せ者だな～」

そう言いながら肩をすくめたヘスティアは居間の方に引っ込んだ。

事態が切迫している筈なのにいやに落ち着いたやり取り。

ベルはただただ慌てふためく。

（団長としての責務はクラネル君の教育よりオリンピアの看病だ。……全く不甲斐ない）

ギルドからの制限が無ければ下層域攻略を本格的に進めている所

だ。それが出来ない現状にポランは納得などしたことが無い。
ゼゼナに命令すればおそらく【ファミリア】を取り潰される。
残っているユーカリンはそもそも無気力だ。彼女をやる気にさせる方法があればまだ希望があるのだが――どうしてか見つからない。
――いや、そうではない。ユーカリンには潜在的な敵がたくさん居る。自らを無価値な冒険者であると見せかける必要があるからこそ今の現状を受け入れていた。
やりたいことを犠牲に出来る胆力があるからこそ成り立つが、彼女自身の為になる訳が無い。
「クラネル君。女の裸を気にしている余裕はないよ。しっかり仕事をするように」
「で、でも……。い、いいんですか？　いや、苦しんでいるのは分かっていますけど」
「団長命令が聞こえないの？　やれと言っている」
「はい！」
少し威圧するように言い直した。
クネクネと動き回る身体を押さえつける必要もあるがベッドから落ちなければ問題は無い、と細かく指示する。
オリンピアは基本的に激しい頭痛に苛(さいな)まれている。それ以外の部分に痛みは無い。
初期のころは手足に痛みがあったそうだが――
「これから君一人で彼女の面倒を見なければならなくなる場面が来る。苦しむ女性を見殺しにするような冒険者になりたいのであれば……、それはそれで構わない」
言いながらも指示は続く。
汗を拭いたり、冷たい水を井戸から汲んできたり、通常であればかなりの重労働も【ステイタス】の『能力値(アビリティ)』が上昇しているお陰か、思っていたより楽に進んでいた。
暴れるオリンピアは見た目とは裏腹にかなり強く、ベルの力でも抑えきれない。
（……この人の『力』が僕より高いからか？）

「身体は汗を拭うだけでいい。頭部を冷やしてあげて。それと……今なら好き放題裸体を見物しようが構わないから、しっかりと抑え込みなさい。あまり顔を背けないこと。胸が気になるなら顔だけ見てもいい」

「はい」

返事しかできない。

何か意見でも言わなければ、とベルは思うものの的確なポランの方が上手だった。

元よりオリンピアとは長い付き合いがあるから当たり前かもしれない、と思いつつ。

†

呻くエルフは何事かを呟き続けた。それはベルの耳でも聞き取れないほど小さいが人名のようだった。

気にはなるが今は安定させるのが先なので大きく暴れないように彼女の身体に乗って押さえつけたり、濡らしたタオルを額に乗せたり、首筋を拭いたりした。

苦しんでいる為に嫌がっているように見えるが実際は激しい頭痛と戦っているとポランは告げる。

（これを僕一人で押さえつけなければならない。……自身が無いけれどやるしかない）

悲鳴を上げたり、呻いたり、とにかくオリンピアは人事不精のまま暴れた。

コロコロと容体が変わる中で敵を見るような威嚇を始めたり、噛み付こうとしたりもしてくる。

普段は温和な女性なのに凶暴な一面があるとは驚きだった。だが、それもポランにとって想定内の出来事だ。

「数か月に一度はこうなる。【ヘスティア・ファミリア】にとっての洗礼の一種だ。黙って逃げる事は許さないから」

「は、はい。頑張ります。……ところで……、この症状はどのくらい続くんですか？」

「ここまで悪化しているところから……だいたい一昼夜くらい。すぐ

終わる事もあれば部屋中転げ回って重体に陥る事もある。……今はそこまで酷くならないけれど……。あと数時間はこのままだと思う。それと彼女は変身しないから安心するように」

一部の亜人（デミ・ヒューマン）は特定の条件下で凶暴になったり、通常よりも高い潜在能力を発揮すると言われる。それをベルが思い出した。

先ほどから端的な説明をするポランだが、苦しむ仲間を見つめる視線は熱かった。

「はー！　はわぁ！　ああっ！」

白目を剥いたヴェルゼッタが頭を激しく動かしながら叫び出した。

今は一番痛くて辛い状態らしい、とポランは冷静に告げた。これが終われば静かになる、かもしれない、とも。

起き上がろうと抵抗するヴェルゼッタを懸命にベッドに押しとどめる。今まで一番の重労働にベルは驚きっ放しであった。

そして、最後の一声のように叫んだ後、力尽きたのかピクリとも動かなくなった。

やっと落ち着いたのか、と安心したのも束の間。ベルが見ている前で豪快な放尿が始まった。

「わあっ！」

「一気に身体から水分が無くなる。単なる生理現象だ。あまり驚いてあげないでほしい。……そこは女性として気を遣ってあげてくれ」

「そ、そうですね」

放尿はまだいい方で時折脱糞もするという。そして、それもベルが一人で対処しなければならない事になる。当然、逃げる事は許されない。

小刻みに動く裸体のヴェルゼッタを見るのは少年として恥ずかしい思いだが人命救助として意識を持ってくれと言われた。

「今回は早めに落ち着いたようだ。身体を拭いたらベッドの清掃だ。そこの化粧箪笥（タンス）に替えの敷物が入っているから」

「僕が勝手に開けていいんですか？」

念のために確認する。

寝室は男女別になっているが勝手に女性部屋に入る事を今まで遠

慮していたベルにとって未知の空間だった。
本来ならば咎められる事を今日はたくさん行(おこな)ってしまったように感じられる。
「大したものは入ってない。ユーカリンの外套と間違えないようにすればいいよ。ちなみに汚れたオリンピアを担いで外に運び、軽く水洗いする事も仕事の一つだ。少し暗い今なら外に放置しても大丈夫だから」
「外に放置!?　……確かにこの辺りは人通りが少ないですけど……」
ベルは知らないが、外には隠れた神や今日の為にやってきた見張り役のエルフが潜んでいる。
高貴な存在に危害を加える事は同胞として決して許されない。更に神の玩具(おもちゃ)にさせてなるものか、と見えない戦いが既に勃発している。
ヘスティアは既に知っていたがポラン達が知ったのは割と最近になってからだ。どうして分かったのか、と言えば同胞であるエルフ達が教えてくれたからだ。
この近辺での乱闘騒ぎは既に名物になっていた。
ちなみに王族(ハイエルフ)のリヴェリアの耳にも当然のように入るが頭を押さえるだけで介入しようとはしなかった。
頭痛から解放されると約二か月は安定する。早々頻発する症状でもないのは都市最高の『治療師(ヒーラー)』の見立てである。

†

ヴェルゼッタを言われるがまま外に用意された簡易的な小屋に置き、すぐさまベッドを整える。それが終わり次第、彼女の身体を水洗いしてしっかりと水気を取る。
着替えまでをベルが行(おこな)ってから元のベッドに乗せる。
女性に下着を穿かせるだけで一時間はかかったのではないか、と。
団長から『目を背けるな』という指示があり、それが出来るまでやり直しをさせられた。
「女性が多い【ファミリア】において慣れる事が大事だ。もし、【エニュオ・ファミリア】に行っていても同じ目に遭っていただろう。あそこ

は更に女性人口が多いから」
「そ、そうですね」
「今回の事をヘスティア様にしっかりと報告するように。疚しい事をしたわけではないから神様も女性の身体に触ったからって怒りはしないよ」
疚しい事をすればヘスティアも普通に怒る、と小さく告げる。
ベルは女性の裸体の映像を脳内から結構な時間をかけて追い出し、気持ち的に冷静さを取り戻してからヘスティアに自分が行ったことを説明した。
黒髪のヘスティアは多少唸ったものの最後まで説明を聞いた。
「……ボクはこう言ったね？　この【ファミリア】に入って後悔していないかい、と。今回の事で君の気持に変化が生まれた気がするけれど……、その辺りはどうなんだい？」
「確かに何度か冒険者を止めたいと思いましたし、後悔もしています。それでも皆さんが懸命に僕に色々と教えてくれる気持ちが伝わってきました」
嫌がらせのように追い出しにかかられる、と最初は確かに思ったし、感じた。
特にゼゼナが敵意を向けているようにしているので。
団長は積極的に勉学を。ユーカリンは普段は無関心だが戦闘は至って真面目だった。
ヴェルゼッタは最初の衝撃が大きかったものの特に何も言わずに見守るだけ。
「この【ファミリア】はまだ親切な部類なんだと……。それだけ僕が全然至らない冒険者って事ですけど……」
「そうだね。最初から飛ばしてくる冒険者なんか稀だよ。いや寧ろ困るレベルだ。だけど……、どんな冒険者になりたいかはベル君が決める事だ。団長やボクが指示する事じゃあない。今までのはあくまで基礎にすぎない。これからも頑張ってくれ給えよ」
「はい」
「ヘスティア様。衰弱したオリンピアの食事の用意をしてきます。側

に居てあげてください」
「了解したよ、団長君」
元気溌剌（はつらつ）とした笑顔をポランに見せる神ヘスティア。
取り残されるベルに団長は休んでいいと告げた。無理に付き合うと身体を壊すかもしれない、と言いおいて作業に向かった。
彼女が居なければ全ての判断と決断はベルがしなければならない。
それが自分に果たしてできるのか、と自問しつつ自室に向かった。

†

一日の労働量が多かったためか、あっさりと眠ってしまい気が付くと朝になっていた。
いや、時間的には昼近くだった。
ダンジョン攻略以外の仕事に付いていないベルにとって時間の制約は無いに等しい。それでも朝昼晩の日程を崩してはいけない、という強迫観念が働いてしまった。
【ヘスティア・ファミリア】には時間厳守の規則は無く、食事もバラバラである。
急いで着替えと洗顔を済ませて居間に向かうと三人の女性が食事の用意を整えていた。
「おはようございます」
「もうお昼ですよ」
優しく応えてくれたのは苦しみ悶えていたはずのヴェルゼッタだった。
薄着のまま笑顔で出迎える彼女は少し痩せているように見えたが元気そうだった。
団長は居らず、ゼゼナとユーカリンが居た。こちらはお互い無関心のような無表情ぶりで何の挨拶もしてこない。ただ、これはいつもの事だった。
「ランテさんは居ないんですね」
そういえば、とベルは気が付いた。
彼女の姿をここしばらく見ていない事に。
元々助っ人として来てくれた眷族で改宗（コンバージョン）の予定は全く聞いてい

ない。
「他の【ファミリア】で働いているよ」
素っ気無く答えたのはユーカリンだった。ダンジョン以外で喋ると新鮮で驚いてしまう。
更に尋ねるとランテは複数の【ファミリア】に行き、今も働いているという。合同パーティの一員として。これは他の【アルテミス・ファミリア】の眷族も同様だとか。
主神が居ない今、好き勝手出来ると口では言いつつも仕事は真面目に勤めていた。
活動資金稼ぎは眷族共通の目的となっていて、それぞれしっかりと稼いでいる最中だ。
「……足りないな。ベル、今日は各店舗に行って調味料や食材確保をするように」
と、団長のようにユーカリンが突如、ベルに指示する。するとすぐにヴェルゼッタが昨日たくさん働いたベルをこき使わないように、と釘を刺す。
するとユーカリンがヴェルゼッタに眉根を寄せた顔を向ける。
(……あれ？　いきなり険悪な雰囲気になった)
「ベル君には今日一日のお休みを与えるべきですよ。夜型のユーカリンが行くべきでは？」
「私には暇を潰す仕事がある。忙しさに使う時間など無い」
「……何を言っているのか私には理解できませんわ。夜な夜な【メジェド・ファミリア】のお手伝いに行っているのでしょう？」
(えーと【メジェド・ファミリア】は……道具制作系（アイテム・メイカー）？　だったかな)
迷宮都市オラリオには本当にたくさんの【ファミリア】が存在し、その全貌はベルにも把握しきれないほど。何より非登録の【ファミリア】もあると言われている。
【メジェド・ファミリア】は噂程度でしか聞いたことがないが主神（メジェド）に物凄い人気があるらしい。――それくらいしかベルは知らない。
制作系というのも噂の一つで信憑性については全く分からない。詳しく調べていないので当たり前なのだが。

眷族の居ない【ファミリア】もあれば一人しか居ない場合もある。
【ファミリア】は神様自身がギルドで登録して認定されるのが主である。その上で勝手に【ファミリア】を名乗るのは大抵ロクデモないところ、とも。
有名なものだと『闇派閥（イヴィルス）』だ。ベルも知識として聞きかじった。
話題に出た【メジェド・ファミリア】というのはユーカリンの元々の主神（オネイロス）が手を回して見つけた彼女の働き口の一つだ。
【ファミリア】は違えど店員として他所に行くのは別に悪い事ではない。事実、ヘスティアも様々な【ファミリア】が運営する店で店員として働いている。
冒険者だけが仕事ではない、という証拠でもある。

†

いがみ合う二人を眺めつつ今日は一人でダンジョンに挑戦しようと思ったベルは早速荷物をまとめる。
上層階ならば一人で探索する分には問題が無い。
【ステイタス】の伸びも良い、とのことなのでモンスター討伐を中心に余裕があれば露店での買い物に向かう。そうしないと仲間の機嫌がよくならない気がした。
（……そういえばエルフは他の種族に触れられることを嫌うって聞いたな。……指摘されなかったけれど、オリンピアさんは平気なのかな？　……後で尋ねてみよう）
【ヘスティア・ファミリア】に入ってしばらく経つがヴェルゼッタから何か言われたり行動を起こされたことは無い。ただ優しげに微笑んだり挨拶する程度だ。
昨日の苦しい状況から脱した彼女から小言を言われる事も無く、外出時に挨拶をくれた。
気にし過ぎなのかな、と思わないでもない。
ベルはギルド本部に向かい自分の担当アドバイザーであるエイナ・チュールに挨拶してからダンジョンに向かった。
いつものように大勢の冒険者の往来に揉まれながら下部に向かう。
上層に収穫物はほぼ無く、モンスターとの戦闘に慣れるのが駆け出

しの仕事になっている。
出てくるモンスターも情報通り。完全にランダムという事は無いが異常事態(イレギュラー)が発生する事が極たまにある、と教えられた。
小剣を構えて壁から湧きだしてきたモンスターを見据え、気持ちを引き締める。
ある程度増えた『能力値(アビリティ)』のお陰か、戦うごとに動きが楽になったり早くなったことを感じた。何より活動時間が伸びている事を実感できるほど。
(息切れしなくなった。力も強く出せる。これが神様の恩恵……)
今まで来分かったモンスターに対して恐れなくなり、武器をどう振るえば倒せるのか、今はよく分かるようになった。
適切な位置に武器を当てればモンスターは灰と化す。さすがにドロップアイテムの落とし方までは分からない。
下層に挑戦したい気持ちがあるが武器を変える必要がある。今のままだと壊れてしまうので。
(体術でも倒せるようになってきたけど、まだ実戦には向かない気がする。一人で戦う、という部分が僕にはまだ早いのかな)
試行錯誤しながら教文の戦闘を終える。そして、外に出ると夜空が広がっていた。
思いのほか時間が経っていたのは遅めの時間に潜っていた為だ。
駆け出しのベルは一昼夜ダンジョンに籠る術(すべ)を学んでいない。
あまり遅くなると仲間達が心配してしまう。そう思ったベルは大急ぎで帰ろうとしたが露店での買い物を思い出した。
夜間は昼間とは違い、酔った冒険者相手の店が多くなる。それに絡まれたくない店は早々に閉めてしまう。
(しまったな。また明日の朝来ようか)
いつもであれば仲間と共に帰宅するところだが今は一人。知らない眷族が行き交う中を通るのは明るいうちならば平気だったが今は少しずつ怖くなってきた。
数多(あまた)の【ファミリア】があり、多くの冒険者が集まっている。その全てが仲良く手を取り合っているわけではない。

基本的に【ファミリア】は敵同士。互いに争いつつ頂点を目指す。
仲が悪い【ファミリア】が出会うと喧嘩が発生する。それはこのオラリオにとって日常茶飯事な出来事だ。
「そこの白い髪の坊や。止まりなさい」
と、唐突に声を掛けられれば全身に緊張が走るのも道理――
今まで平穏無事だったのは単に『幸運』だったから、とはいえないか。
冒険者の中で白い髪はとても珍しく、更に坊やとくれば対象は限られてくる。というよりベル以外に思いつく者は居ないし、側に条件に合う人物も見かけない。
「我こそは正義の使徒……、アリーゼ・ローヴェル。生ける屍（しかばね）のアリーゼとは私の事よ！」
（……ごめんなさい。全く知りません。あと、酷い通り名を堂々と……）
「……その名乗りを恥ずかしげもなく言える団長、すげー。絶対に仲間だと思われたくねー……」
ベルの行く手を遮るように仁王立ちして名乗った人物の横から少しずつ距離を置く者が小さく呟いたがベルの耳にしっかりと届いた。
暗がりではっきりと姿を認識できたわけではないが女性らしい声色だった。
「フフーン。とにかく、そこの白い髪の坊や。……いえ、ベル・クラネル。立ち止まらないと捕まえるわよ」
「ええっ!?　どうしてそういう理屈になるんですか」
名前まで分かっていて呼び止めた相手だと察したベルは逃げに転じる算段を放棄した。おそらくここで逃げても本拠（ホーム）に別動隊が待機していれば意味が無い。――という事を即座に思い至ったので。
アリーゼと名乗る人物がベルに近づくと店頭の明かりで姿がはっきりと見えるようになった。
赤い髪を一つに束ね、軽戦士（フェンサー）風の装備をまとう冒険者であることが分かった。
そんな彼女の側に居た者も冒険者仲間と思われるが――こちらは

背丈が小さく小人族（パルゥム）だと思われる――こいつ（アリーゼ）とは全然関係ないよ、と
言いだけな不満顔を示していた。

#5―09　ライラ

夜半に現れた凛々しい女冒険者はアリーゼ・ローヴェルと名乗った。その時、擬音までご丁寧に表現した。即ち、ジャジャーン、と。

言動こそ幼いが正真正銘第二級冒険者であり、【紅の正花】の『二つ名』を神々から戴いている。

世間からは怪しまれているが――一応、または暫定的に――【エニュオ・ファミリア】に所属していることになっている。

主神エニュオ。その名が意味するのは『都市の破壊者』――とても正義の使徒とは縁遠い存在である。

迷宮都市オラリオに居を構える神々はそれぞれ己にまつわる逸話を持つ。

それによって正義と悪に分かれる事もあるし、単なる気まぐれでどちらともつかない事もある。

「決まっているわ。私が可憐で儚い美少女だからよ」

「……うん、少し黙っていような、団長。坊主がドン引きしてるから。……あと、アタシは今すぐ逃げ出したい……」

彼女の側に居る小柄な小人族も【エニュオ・ファミリア】の一員である。

桃色の髪に切れ長の瞳。彼女の名はライラという。

（……これって絡まれるやつかな？　逃げ出し……でも、エニュオって……。うちの【ファミリア】とどういう関係なんだろう？）

主神には会った。だが、眷族には会っていない。だからこそ目の前に居る女性達が本当に【エニュオ・ファミリア】の眷族なのか確証が得られない。――それに【ファミリア】を表す紋章をベルは見たことが無いし、ギルドのアドバイザーからも教えてもらっていない。

（……違う。【エニュオ・ファミリア】は非正規の【ファミリア】で紋章が無いんじゃなかったっけ？）

非正規だがギルドに認められた謎の【ファミリア】だ、と。

ギルドの上層部と何らかの取引をして存在を認められている、とエ

イナ・チュールは予想していた。そして、それ以上の詮索は難しそう、とも。

「おい、坊主。取って食おうってわけじゃねーー。未来の話しをしようや。そちらの団長と話しは通してある筈なんだが……」

（僕が彼らとダンジョンに潜るやつか？　……なら……、聞いた方がいいのか。とても怪しい人達だけど）

「ふふん。とても、とっても怪しんでいるわね。ええ、ええ、その気持ちはわかるわよ。気軽に挨拶した相手が真っ黒な【ファミリア】で後で皆に大目玉を食らう事になったのは記憶に新しいわ」

「見た目で真っ黒かどうか分かったら苦労しねーよ。大抵は人の良さそうな顔した眷族を放ってるはずだからな。……それにまんまと引っかかるのはお調子者くらいだよ」

ライラの理屈で言うとベルも今正（まさ）に怪しい【ファミリア】に引っかかりそうになっていることにならないか。

アリーゼは後でその【ファミリア】に大打撃を与えたらしい。ただ、それが真実かどうか、ベルには知る由もない。

†

もし、逆の立場なら人の良さそうな白髪の少年もまた怪しいのでは、とベルは思ったが黙っていた。

互いの立場でものを見るとそれぞれ違った風景に映る。それに気が付いたからだ。

あまり余計なことを言うのもお互いの為にならない気がした。

（神様の前では嘘を付けない。それを見越して言っているのか？　なら、捕まえて神の前に引っぱり出せば真実が現れる……。それはそれでとても恐ろしい方法だ）

【ヘスティア・ファミリア】に入って色々なことを学んだベルは自分が意外と思考していることに驚く。

以前であれば優しい言葉を掛けられただけで素直について行ってしまうところだ。ここで立ち止まれるのは経験のお陰だろうか、と。

ダンジョン帰りなので武器はまだ携帯している。しかし、撃退できる自身が無い。

「そこの店で話さねーか。料金はこっちで持つからよ」
ライラが指し示した店は先日お邪魔した『豊穣の女主人』だった。
――そして、団長ポラン・ブーニディッカが今正に給仕（まさウエイトレス）として働いている。
知らない店ならば逃走を選択する所だが、あの酒場ならば顔見知りが何人か居る。確かにそこならば都合がいいと判断し、頷いた。
本当ならばヴェルゼッタの様子を確認したかったが、素直に帰してくれそうにない雰囲気だったので考えを切り替える。これもまた冒険者にとって必要なことだと判断する。
向かった店は既に多くの冒険者でいっぱいで、夕方よりも一段と賑やかだった。
「いらっしゃいませー。壁際の席が空いていますので、そちらへどうぞー」
入れ替わり立ち代わりで挨拶に来る給仕の数は決して多くない。けれども忙しそうに動いていた。
紅白の髪を持つポランは奥の方に居た。
酒場の中は意外と広く、複数の【ファミリア】が宴会を開いていた。中には取っ組み合いの喧嘩もある。
基本的に酒場は酒と食事を楽しむところで喧嘩は許容していない。それらは気が付いた給仕が外に放り出していく。それもいとも簡単に。
「ンニャア！　白髪頭が女を連れ込んできたニャ」
（人聞きの悪いことを……）
離れた場所でも届くアーニャ・フローメルの言葉にベルは苦笑する。
店内に響き渡るほどはっきりした物言いをするので他の冒険者達が一斉に『白髪頭』を探そうとする。当然、それはポランの耳にも入る。
「大事な話しをするために来たのでしょう。余計な詮索はしないで頂きたい」
と、ポランの言葉に何人かは宴会の続行を敢行し、残りは興味半分

で捜索を継続する。
一瞬、彼女（ボラン）の視線を感じたベルは居心地悪そうに身体を縮めた。
ベル達は丸テーブルではなく四角い対面席に座った。最初はアリーゼが彼の隣りに座ろうとしたがライラが引き留めた。
「なに、しれっと隣りに座ろうとしてんだよ。余計勘違いすんだろ」
「知らない【ファミリア】でもないんだし、懇親会ということで……」
「……そんな言葉今まで出た事ねーけど……。とにかく、坊主。悪かったな、急に引き留めて。混乱してんだろう？」
「……はい」
ライラが給仕を呼んで三人分の飲み物を注文する。
飲み物が来る前にアリーゼ達は改めて自己紹介した。ベルもつられて名乗る。
この辺りで白髪頭というのは珍しいようで偽名を名乗ろうか迷ったが既に手遅れな気がしたので正直に言った。
あまり駆け引きについて学んでいないので自己嫌悪に陥る。
「仕事の話しをすべきなんだが……。時期的に無理そうだから。ここいらで互いの事を知っておいた方がいいかと思ってな」
「貴方は一度は我が【ファミリア】の門を叩いた。今後の事も考えて色々と交流を持つのもいいんじゃないかしら？　もちろん、改宗（コンバージョン）しろって話しじゃないわ。いつか合同探索出来ればいいな、くらいの事よ」
確かにアリーゼが所属する【エニュオ・ファミリア】に行った。それは事実だし、否定しない。
合同探索についてもなんとなくは聞いている。ただ、いきなり声を掛けられて驚いた。

†

飲み物と次に注文した料理をポランが運んできてテーブルに並べられる。この時の団長の機嫌が少し悪そうに感じた。
ベルは身を少しだけ引くと彼女が不敵に微笑んだように見えた。
「どうぞ、ごゆっくりー」
「ありがとう。とても美味しそうだわ」

アリーゼはそう言ったがライラもベルと同じものを感じたのか、身を何とは無しに引く。そして、ポランは空になったお盆をアリーゼの後頭部に打ち付ける。

前のめりになりつつも顔面を料理にぶつける事だけは避けられた。

「痛ったー！　何すんのよ！」

「夜道を一人で歩く少年をたぶらかす赤い女狐を退治しただけよ。貴女、唐突にクラネル君を攫おうとしたでしょう？」

ポランの言葉にライラは無言で頷いた。

第三者視点から見ても人攫いだと言われてもおかしくない状況だった、と認める。

ちゃんと声をかけたわよ、と反論するアリーゼの顔面を手袋で包まれた手で掴む。その時、金属音がベルの耳に小さく届いた。

「得体の知れない人物が声を掛けたら誰でも警戒する。貴女のようなお気楽な人とは違うんですよ」

この酒場では不届きものに給仕が暴力をふるう事を許可している。なので自己判断において店員に非が無ければ店主であるミア・グランドは止めに入らない。

ここは荒くれ者が多く集まる酒場である。この程度は日常茶飯事だ。

ため息をつきつつポランはベルにアリーゼから嫌なことを言われたりされたりしなかったか尋ねた。

「……確かに怖いと思いましたけれど……。ここに来られたので……」

「新人冒険者をたぶらかす【ファミリア】が実際にあるんだから。加入済みの眷族に声をかける時はもう少し気を配りなさい」

「……痛た……。反省……してまーす」

「そこらへんで勘弁してくれ。坊主も悪かったな、無理やり連れ回すようなことをしてさ」

ライラの言葉でポランはアリーゼを開放する。

自分の知らない団長の怒りにも驚いたが――同時に大事にされていることが分かり安心した。

不安が大きかった【ヘスティア・ファミリア】としての生活の中で漸く安心感を味わえた気がした。

†

こめかみを撫でつつ解放されたアリーゼは改めてベルに向き直る。

そして、直接的に合同探索を提示した。それはもう簡潔極まりないほどの清々しさで。

他の【ファミリア】の団員との共同探索はランテとの経験があるので無理ではないが階層数によっては難しい事を伝えた。

「我々の目的は早めにお近づきになる事であって、本格的に深層域に行くわけではないわ。君がまだ上層域での活動しかしていない事は承知しています」

「我が主神エニュオ様があれからどうなったか気にしていてな。ちゃんと他の【ファミリア】に出会えたのか、それとも悪いところに捕まってはいないかと……」

（……確かに僕から連絡はしなかったな。敵対関係、かもしれない【ファミリア】だから余計なことを言わない方がいいと思ってしまったし……。でも、団長の様子から親切にされたからといって気軽に情報を伝えるのも問題じゃないかな）

だからこそアリーゼ達は直接ベルに会いに来たのかもしれない。

連れてこれなくとも情報だけ持ち帰る為に。それに――団長と顔見知りなのは理解した。

「良い神様と巡り会えました。そちらの神様とは縁が無かった、ということで……」

「……そうか。それもまた運命であり縁でもある」

「折角男の子が入ると思ってたのに……」

（……確かに。よくよく考えるとどうしてだろう？）

疚しい気持ちだけで入団できないからか、とベルは予想する。これはおそらく真である。

正義の使徒と言い張っていた団長が所属する【ファミリア】だ。女の園に入りたいだけの男性冒険者など誰も取りたがらない筈だ。――中には奇特なところもあるかもしれないけれど。

「……あ。もしかして、そちらの【ファミリア】って治安維持系ですか？」

「一応、そうだよ。探索もするけど」

治安維持を担当する【ファミリア】に加入する場合、疚しい存在は当然のように排除される。更に犯罪者を取り締まる事で色々と恨みを買いやすい。

気持ちや実力に自信が無ければ入団などできない。仮に入ったとしても報復を恐れる毎日だ。弱い心では長続きするとも思えない。

彼女達はその中でも実力者なのだ、と。

可愛らしい外見に惑わされそうになるが【エニュオ・ファミリア】は猛者の集まりだとエイナからこっそりと教わった。この【ファミリア】の事はあまり大きな声で言えないらしいことも聞いている。

（敵が多いから、と聞いたっけ）

実力者揃いで敵の多い【ファミリア】に冒険者になりたい若者が気軽に入れるとは到底思えない。事前に情報を得て、更にかなりの覚悟を持たなければ眷族として認められることはない筈だ。

そんな【ファミリア】からベルは勧誘のようなものを受けている。本来は団員自ら選定するのが正しい方法なのかもしれない。

「今の僕に……【エニュオ・ファミリア】と共に冒険するだけの実力があるとは……思えないんですが……」

「……賢しい少年ね。でも、嫌いじゃないわ。何せ貴方はエニュオ様が気にされた男の子なのだから。何かあるに決まっているじゃない」

「……おいおい、それこそ何の根拠もない戯言だぞ。自分の事を冷静に見られるところはアタシも評価するけれど……。本音を言えば駆け出しを連れ回すのはよくねーよな。しかもよそ様の団員だ」

ライラはベルに食べていいんだぜ、と告げる。

そんな彼女をよそにアリーゼはまだ諦めていないのか、ベルに詰め寄ろうとした。――彼女が前のめりになると前方に置かれている料理に胸部が触れてしまう。ライラはすぐに団長の顔を押しのける。

この酒場では主人であるミア・グランドの料理を粗末にしてもつまみ出されてしまう。

先ほどポランが盆に乗った料理を全てテーブルに置いた上で凶行に走ったのはそういう意味も含まれる。

†

強引気味なアリーゼを気にしつつ食事を楽しむことにしたベル。用意された食事は何の気兼ねも要らない。そして、美味しい。

自分の金を使わなくていい、というのであれば遠慮する必要は無い。――とは思うものの人から奢られた経験が少ないので無視する事は出来なかった。

ライラは比較的大人しく、また理解のある女性だと感じた。

団長が側に居ると思うと心に余裕が出来たベルは気になる事を色々と尋ねてみた。――といっても他の【ファミリア】の活動内容程度だ。

【エニュオ・ファミリア】は団員数こそ【ヘスティア・ファミリア】より多いが零細【ファミリア】に数えられる。

以前聞いた『狩猟』を目的とした【アルテミス・ファミリア】と規模は大体同等。

（治安維持の為に日夜危険と隣り合わせであり、モンスターではなく対人戦を主とする）

ダンジョン探索に意識を向けているベルにとって人と戦うことに抵抗がある仕事を彼女達が行っている。そしてそれはとても大変なものであると感じていた。

オラリオの治安を維持する【ファミリア】はベルが知る限り、多くない。以前は多く存在していたが『暗黒期』と呼ばれる時代の戦いで数を減らされてしまった。

（……この人達の他には【ディケ・ファミリア】、【テミス・ファミリア】、【マアト・ファミリア】、【シャマシュ・ファミリア】、【フォルセティ・ファミリア】……。みんな集まったら過ごそう……）

知識の一環として様々な【ファミリア】を学んでいたが――自分の想像しているよりも多くの【ファミリア】が存在し、各地で活躍している事に驚いた。

そもそもどれだけの神がオラリオに居るのか正確な数は実のとこ

ろギルドでも把握しきれていない。
ある程度、天界に送還されてしまった神も居ると聞いているけれど、それでもまだ数としては膨大だというのが信じられない。
――そして、それらを内包する迷宮都市の規模もそれだけ大きいという事だ。
よくよく考えれば【エニュオ・ファミリア】の団員数だけで都市全体を見回ることなど物理的にも不可能である。何故なら最大の眷族数を誇る【ガネーシャ・ファミリア】ですら治安維持に成功しているとは言えないからだ。
「聞きたいことがあるのですが……」
「おう。何でも聞いてくれ。……【ファミリア】の秘密以外なら答えてやるぜ」
ライラの言葉にアリーゼが不満顔になった。常に笑顔を絶やさなかった彼女にもちゃんと喜怒哀楽があるようだとベルは安心する。
ユーカリンのように表情に変化のない眷族と付き合っている為か、歴戦の冒険者は何処か感情表現が乏しく、常に敵意を振りまいているようで息苦しい思いを感じていた。
もちろん、毎日楽しく冒険に行こう、という気分になれない事は分かっている。
「オラリオの暮らしは楽しいですか？」
この質問にライラは勿論、聞こえた一定範囲の冒険者の食事などの手が止まった。それと喧噪なども。
少し離れた冒険者は急な変化に驚きと不安を覚える。
「……こいつはすげーな。核心を突くようなことを……」
「フフン。さすが私が見初めた……」
「団長は飯食っててくれよ。余計酷くなるからさ」
口を尖らせ少しだけ涙目になるアリーゼ。出番を潰されたことに彼女なりに傷ついたようだ。
ベルの質問に深い意味が無いかもしれない。けれども聞き手である冒険者の多くは即答できない事を感じ、多少の怒りを覚える。
大半は何も知らない小僧のクセに、だ。

多くの冒険者は心の底から楽しいと思ったことが無い。
長く暮らしている冒険者ほど顕著ではないか、と。
ただ、楽しいと言える者は――少数だが――居る。感じ方は人それぞれだ。
「……お前さんが聞きたいのは『後悔していないのか』だと思うんだがよ。そうじゃねーのか？　……質問を質問で返すようで悪ーけど」
「それもありますが……。何に後悔しているのか分からないので……」
（漠然としているから当たり前だな。……坊主の言う楽しいって言葉の意味は広すぎる）
「こちとら命のやり取りをしてるんだぜ。軽はずみに楽しいって言えるわけねーだろ。……それが……きっと答えだ」
ライラの言葉に同調する者は頷き、自分は楽しいと思っているよ、と思うものは拳を強く握りしめる。
駆け出しのクセにと思いつつ一部は食事を再開し、賑やかさが蘇っていく。
「悪党を正義の名のもとにシバき倒せるのよ。楽しいに決まっているじゃない。全ては神様の為に。困っている人民の笑顔の為に。そして……自己満足の為に」
自信満々にアリーゼは言い切った。
ライラは知っている。彼女は正義を執行するようになって多くの悪党から様々なことを言われ続けた事を。
『正義』とは詰まるところ答えにくい概念だ。どうせ自己満足だろう、偽善だというのは人や神からも揶揄される。
己の主神ですら納得する答えを出すことが出来ない。
「神様との暮らしの事でも楽しいと私は言えるわ。だって見目麗しい女神を団員……いいえ、団長権限で弄り回せるのよ。頬擦りしてもいいし、一緒にお風呂にも入れる。何より『超越存在（デウスデア）』と直にお話が出来るのだから」
（……そうだ。神様ですもんね。気軽に話す事なんて……、普通の人には出来ない）

うんうんとベルは納得して頷きで同意を示した。――風呂云々はベルには出来そうにないけれど。

身近に神様が居る、という事はとてもすごい事だと改めて自覚する。

「あ、でも、女神じゃない神様はどうなるんですか？」

「!?」

そうベルが気軽に言うとアリーゼは軽く呻いた。想定していなかった、と言いそうな気まずい顔をしながら。擬音で表すとガーン、だ。

全ての神が尊敬に値するわけではない。邪神の類に散々苦しめられた経験を持つ【エニュオ・ファミリア】の面々からすれば憎たらしい存在だと言えるし、アリーゼも何度顔面を焼き払ってやろうかとさえ思ったほど憎んだ事もある。

外面のいいアリーゼにも怒りがあり、憎しみがある。

常に品行方正でいられるほど人間が出来ていない。

「……それはーあのー、うーん、それはとても難しい問題ね」

（……この坊主……。かなりヤベーんじゃねーか？　うちの団長を困らせるとは将来が楽しみだ。……あー、他の奴らに見せてー）

「アタシは坊主が気に入った。お前、どんどん食えよ。そして、どんどん強くなれ。簡単に死ぬんじゃねーぞ」

「はい」

先ほどまで困り顔の多かったライラに言われ、少し驚いたベル。

話してみてそんなに悪い人ではないと感じた。アリーゼに関しては調子に乗らせると手に負えない人、という印象を受けた。

†

本来は金の貸し借りをするべきではないし、その辺りの経験が無いベルは迷いつつも食事代を折半する事を辞退した。というかポランに任せた。

口だけで払わないとか。取引に応じなかったから無効とか言われるかと覚悟したが、そんなことは無かった。

アリーゼ達に礼を言い、ベルは周りに気を付けながら本拠に戻っ

た。
「……やはり強引だったと思うぜ」
「うー。何事も経験よ、経験。……でも、あの子はあの子なりの正義を執行してくれそう」
勘に関してアリーゼは根拠のない自信を持っていた。それは今までの冒険でも発揮している。
白髪（はくはつ）で深紅（ルベライト）のような色の純真な瞳を持つ少年に大いなる期待を持った。彼の瞳は少し自分の髪の色に近いかな、とも。
「駆け出しに声かけしても役に立つわけねーし」
「こういうのは早めにツバを付けておいた方がいいの」
（……汚い例えだな）
「その点ではエニュオ様の失態よね。懇切丁寧に冒険者の流儀を教えるなんて……。それギルドの仕事でしょうに」
「悪質な【ファミリア】に捕まらないようにっていう親切心が団長には伝わらなかったようだな」
アリーゼに呆れて新たに注文した飲み物を飲みながらライラは言った。
今は二人だけでこの程度で済んでいるが他の仲間を連れてきたら間違いなく乱闘に発展する事態だ。二人だけで今は良かったと思った。
「……あるいはブーニの教育のお陰かしら？」
「女の園に居てあの態度から察すれば……、そうかも、と言えなくもねーな。……あの化け物（ゼゼナ・シャフラー）が居るのに平然としている時点でスゲーんだけど……」
ベルの居なくなった空席にふと視線を向けるライラ。連れにつられるようにアリーゼも。
沢山の冒険者にベルと同じように声をかけ、その殆どは自分達の前から居なくなった。そして、今日も一人――
【ファミリア】の理念は今も昔も変わらないけれど冒険者はやはりダンジョンに潜るのがお似合いかもしれいな。それを阻んでいるアリーゼ達こそ悪ではないかと思わないでもない。

ただ――それは他の治安維持を担当する【ファミリア】も思っている事だ。

都市に住まう人々の笑顔を守る為に。ただ、それだけの目的を達成する為に。

（私も最初は駆け出しだった。正義だけでレベル４（フォー）になれないって知ってる）

美少女と正義というネタでの勧誘には失敗したが冒険者としての付き合いがまだ残っている。そしてなにより彼（ベル・クラネル）は人がいい。

――という不穏な事を団長（アリーゼ）が考えているんだろうな、とライラは飽きれつつ食事を口に運んでいく。

†

翌日の朝、昨日の出来事について改めて団長ポランとベルは話し合う事となった。

勧誘と言ってもアリーゼ達が言っていたように【ファミリア】を抜けろ、というものではなく合同探索の提案だ。これはポランも承知している。

改めてベルにその気があれば許可する、と伝える。

【ヘスティア・ファミリア】はギルドから様々な制限を付けられ、多額の借金を背負っている。それを団員だからとベルまで巻き込む気は無かった。

「サポーター要員として行くも良し。戦力としては考えられていないと思うけれど、どうするかは君が決めるといい」

「分かりました」

「……ちなみに私は【ファミリア】の団長だがサポーターでもある。あまり率先してモンスターに突入するのは得意ではなくてね。ユーカリンはやる気が無いし、残りはあてにならない」

言葉だけ聞くとどうして【ファミリア】に入ったのか、冒険者になったのか分からない。

彼女も最初は冒険者になりたいと思っていた筈だ、と。

「ユーカリンの例えで言えば……。上層でも魔石を集めれば食うに困らない。低ランクの【ファミリア】はギルドに収める税金が安いんだ。

借金については想定外だったようで……、ああいう感じに無気力になったのではないか、と私は思っている」

「な、なんとなく分かります」

「ゼゼナは他の【ファミリア】から押し付けられた。オリンピアもそれに似たようなものだが……、彼女の意志も少し入っている。頭痛さえ起こさなければもう少し活躍できたんだが……」

そう言っているポランは【ヘスティア・ファミリア】の古参の団員にして初めての眷族でもある。

堅実な冒険者として活動していたが下手を打って色々と酷い目に遭ってきた。その後も色々とあったと言葉を濁す。

そもそもポランは眼帯を付けており、常に両手は手袋に包まれている。

聞いてはいないがベルの見立てでは義手ではないか、と予想していた。

大怪我を負っても冒険者として活動するのは凄い事だと思うが、それを自分に当てはめると恐ろしいというか怖いという感情を覚える。

今は軽傷で済んでいるが重傷を負う可能性が冒険者家業には付きものだ。

「ユーカリンもそうだが一人でダンジョンに潜る時、荷物を持って行かないと苦労する。常に道具（アイテム）を補充し、帰還まで想定する……」

それはギルドのアドバイザーであるエイナ・チュールからも言われている。

重装備の冒険者はサポーターを引き連れる事が一般的だ。戦う一辺倒で踏破できるほどダンジョンは優しくない。時には装備品が足を引っ張る事もある。

軽装備のベルはただただ他人の装備に憧れているだけだが、実際には色々と問題がある。

武器はこまめに手入れをしなければ長く使えない。その技術もまだ習っている最中だ。

「よその【ファミリア】を信用するのは危険だ。信頼を積んでいないところは特に」

「はい」
「……アリーゼ達は……それなりに信頼できる。共に潜る事を許可する。ただし、実力に見合わない深い階層に向かわないこと。例え誰かが困っていたとしても。君に何かあれば我々が困るし、悲しむ。何より神様が心配する」
（綺麗ごとで冒険者は出来ない……。でも、僕はそこまでの覚悟が出来ていない）
「クラネル君。君は冒険者だ。殉教者ではない。何のためにダンジョンに潜るのか忘れてはいけないよ」
「はい」
英雄に顎かれて冒険者になった。偉業を成し遂げる為に死んでは意味が無い。
オラリオでは生きて帰る事も立派な仕事である。それが出来て初めて冒険者と認められる。決して素晴らしい功績を刻まれた墓石を作る為ではない。
「……あ。団長さん。エニュオ様ってどういう神様なんですか？」
「優しい神様だよ。ヘスティア様とも仲良しだ。零細【ファミリア】仲間というものがあってね。全員敵だ、という物騒なことは無いけれど、気になったら神様に尋ねること。自己判断は怖いから」
確かに神様の事は神様が一番詳しい筈だ。
冒険者から見たら神は全て尊い（とうと）存在で邪神すら崇めてしまう。そうなれば良い神か悪い神か判断できなくなってしまう。
それと忘れてはいけない事がある。
神は気まぐれで下界を騒がせる。それこそ――
このオラリオを気分次第で滅ぼそうとする。
昔のオラリオでは他派閥との抗争の他に『闇派閥（イヴィルス）』との戦いがあり、多くの一般人が巻き込まれる事件が良く発生していた。
ポランが冒険者になる前の事らしいので詳しい事は分からない、と言った。
「悪の組織みたいなのが今でもどこかに潜んでいるかもしれないし、これから発生するかもしれない。敵はモンスターだけではない。嫌

な話しだが……、冒険者は人とも争う仕事でもある」

「……」

「……基本的に冒険者の仕事はダンジョン攻略だ。そちらが本業というのは昔から変わっていない。……もし、後悔を覚えたのならやめてもいい。ここはそういうところだ」

何度も聞かされる『後悔』という言葉は色々な場面でこれからも使われる、とベルは理解した。そして、自分は何度も選択に迫られる。

団長の話しはそれだけで終わり、ベルは解放された。

＃5―10　ネーゼ・ランケット

後悔と挫折は若き冒険者ベル・クラネルにとって想定内の事態ではあるが楽観視しているところは認める。

常に気を張る生き方はとても息苦しい。だから、すぐに考えないようにしてしまう。

だが、実際には自分と同じ境遇の数多（あまた）の冒険者が次々と脱落している現実がある。

かつてのベル・クラネルであり、未来のベル・クラネル達でもある。

（後に引けない。僕は冒険者になったんだ。……という覚悟も現実では通じない）

頼りの神様は応援することくらいしかできないと言っている。

強い冒険者は神から授かった【ステイタス】の『能力値（アビリティ）』を増やし、何度かの【ランクアップ】を得たからこそ強者となりえた。そして、それは誰もが認めるところ。

身体をただ鍛えた人とは隔絶された圧倒的ともいえる強さを持つ。

レベル1（ワン）のベルはレベル2（ツー）の冒険者と戦えば十中八九負ける。――もし、それが覆ることがあれば偉業と認定される、かもしれない。

（焦るな、と言われれば言われる程焦ってしまう。周りを気にする僕はその影響をよく受ける。それを否定するな。認めろ。自分が弱い事を）

ダンジョンの上層階にてベルはモンスターと対峙し、改めて自己の内面と向き合う。

無限に等しく湧き出るモンスターを作業のように狩るだけが冒険者ではない。

下層域に魅力が無ければ誰も挑戦しようとはしない。

魔石やドロップアイテムを回収するだけが仕事ではない。そう言い聞かせて――

（第二級、第一級ともなれば目の前のモンスターすら物の数ではない。……でも、ただ強いだけでいいのか？　いや、そうなる為に戦い続け

なきゃ……）

治安維持のように悪と戦うわけではなく、生き物を殺すような事が本当に冒険者の仕事なのか、と疑問を抱く。

これはベルだけが思うわけではない、と思うけれど――かといってモンスターを倒さなくていい理由も浮かばない。

彼らとは意思疎通が出来ない。このオラリオが出来てから一貫して変わらなかった事実でもある。

襲ってくる敵は倒すべし。団長のポラン・ブーニディッカも言っていた。

「……ふぅ」

ダンジョンでの戦闘にだいぶ慣れた為か、三階層までの戦闘に疲労感をあまり感じなくなった。

閉塞感はあるものの発汗が酷くなるような事態は少なくなった。最初は緊張しっ放しで汗だくになる事が多かったのに、と。

汗をかけばそれだけ身体から水分が抜ける。脱水症状を起こせば立ち往生してしまう。

手持ちのアイテムを確認しろ、とはそういう意味も含まれる。

深い階層を攻略する場合、サポーターの存在は必要不可欠と言われる所以（ゆえん）でもある。

単独踏破がいかに無謀か、ダンジョンに潜る度に思い知らされる。（【ステイタス】がいかに高くても何もないところから水も食料も出てこない）

ちなみに下層域にまで行くのが難しいのでは、とアドバイザーに尋ねたところ、安全地帯（セーフティポイント）や水源のある階層があるので、そこを利用する、とのこと。

今のベルにそこまで行くことは出来ないけれど多くの冒険者は様々なものを利用して攻略を続けている、と聞いて安心したものだ。

†

精神統一や身体の動きを確認しつつ今日の分のモンスターを倒し終えたベルは魔石などの忘れ物が無いか通路を確認する。これは団長から癖をつけるように、と言われた作業だ。

冒険者はただ武器を振るだけの存在ではなく、ダンジョンの資源を持ち帰る任務を帯びている、と。

貧しさを知らぬ者は油断の脅威に恐れる、とも。

二度ほどの確認作業を終えるころ、通路に一人の冒険者と思われる人物の姿を見つける。

上層はとにかく多くの冒険者と行き交う場所でもある。誰も来ないわけがない。

第二級以上はさっきと通り過ぎるし、たまに休んでいく者も居る。

それらを踏まえても一階層はかなり広く、ベルの知る限り階層で混雑して通れなくなった経験は一度も無い。

ダンジョンは下層に行く程、空間が広くなる傾向にある。

「白い髪。ここに居たんだ」

（んっ？）

昨日の今日で白い髪という言葉からベルは自分が狙われているような気がした。だからといって何か悪いことをしたわけではないし、よその【ファミリア】との接点で言えば【エニュオ・ファミリア】か回復薬（ポーション）の購入に向かう【ミアハ・ファミリア】くらいしか出てこない。

若者で白い髪というとギルドのアドバイザーであるエイナ・チュールもベルくらいしか見当たらないと言った。特に人間（ヒューマン）の中では、と。

「あー、ごめんごめん。単なる見物人」

そう言ったのは灰色の髪に褐色肌の亜人（デミ・ヒューマン）の女性で、おそらく狼人（ウェアウルフ）。

肌の露出が激しくアマゾネスとのハーフのように見えた。

「【エニュオ・ファミリア】のネーゼ。よろしく。それとも人違いかな？」

「……多分合ってます」

相手はベルだと分かった上で接近してきたはずだ。

第二級の冒険者ともなると情報収集をしっかりするとアドバイザーから聞いていた。

命の危険が多くなる仕事が増えると自然と危機意識が強くなる冒険者になるという。だから、人違いするような間抜けは若手くらい

だ、と。
　この言葉に何の根拠も無いけれど説得力があったので信じてしまった。
　初めて会う冒険者なので警戒は怠らない。
「もしかして、もう戦闘は終わっちゃった？　君の動きを参考にしようと思ったんだけど……」
「モンスター討伐は終わり……、ましたね」
　明るく快活な女性が落胆しつつも苦笑を見せる。
　かの【ファミリア】の団員は全て女性だが、全員の内情を知っているわけではないし、ポランも教えてくれなかった。
　逆にベルの情報も相手に教えていないと言った。
「近接格闘系？」
「格闘には自信がありませんが、近接系と言えばそうなりますね」
「魔法は使える？」
「……？　い、いいえ」
　小さく『近接戦、魔法無し』と呟いていた。
　一緒に探索する参考にしようとしているらしい事を理解した。そうであれば色々と教えた方がいいのかな、と。
　それにこんな階層に居るのは大体駆け出しだ。第二級冒険者を相手にした場合、敵（かな）うはずもない。
「身体が慣れたって事はここいらのモンスターから【経験値（エクセリア）】を得るのが難しくなってきたはずだ。そろそろ下に挑戦しないとな」
「そうですね。……でも、アイテムの予備が無いんです」
「稼ぐだけなら……。なら余計に格闘を覚えた方がいい。肉体的損傷は休めば治る。特に打撲とか」
　武器の損耗で言えばネーゼという女性の言う通りだ。
　今のままでは武器の新調が課題になってくる。
　その後、何故かネーゼからダンジョンにおける講義を受ける事になり、断りにくいと思ったベルは素直に従う形となった。

†

　格闘戦闘は慣れなければ拳を痛めるだけ。だが、【ランクアップ】し

ても痛いものは変わらないという。
肉体的な強化は確かになされるけれど過信してはいけないと真面目に言われた。
彼女が地上に赴いて様々なアイテムを用意し、徹底的な特訓が勝手に始まってしまったけれど――
言葉と手が同時に出るような獣人らしい荒々しさで出てくるモンスターをなぎ倒していった。
「お前もやってみろ」
「はい！」
ほぼ脅迫じみた命令に従いつつゴブリンなどを殴り続ける。
慣れない戦闘だとしても冒険者はいずれ戦い方に身体が合ってくるという。
最初から剣術に秀でた駆け出しは居ない。それらはきっかけがあって成立する概念だと『ネーゼ・ランケット』は力説する。
どんな種族も冒険者として活動すればそれなりに強くなる。
華奢な体形のエルフですら武闘派に負けない冒険者に成長する事がある。
それは確かにベルにも理解できる。
武器をロクに扱った事が無い普通の証券が今は多くのモンスターを倒しているのだから、強ち間違っていない。
「闇雲に拳を突き出すな。足腰を低くしたり、工夫を忘れるな。怪我をするのは無駄な動きを取るからだ」
様々な言葉を飛ばしつつ一撃において苦痛が感じにくくなれば、それを更に工夫したり突き詰めろ、と。
痛いのは当たり前だ、と怒鳴られる。とにかく、熱血指導がしばらく続いた。
「いいか、坊主」
（いつの間にか坊主呼びに……）
「痛みの無い正義は無い。それはつまり犠牲の無い正義が無いのと一緒だ。誰も痛い思いをせず、全員を救う方法なんかありはしないんだ。理想を語る前に自分の姿を見ろ」

（……それ、おたくの【ファミリア】の信念ですよね？）

ただ、言いたいことは理解できる。

人助けを良しとするベルにとって誰もが笑顔になれればいい、と。だが、その裏では多くの痛みや血を流す結果がある。その現実に目を背けがちだ。

英雄になりたいからと言って今自分がしているのはモンスターの虐殺なのだから。

ネーゼは自分がしていることを忘れるな、と言いたいのだと理解した。

「救う事で笑顔になるのが正義なら、痛めつけて泣かす事が悪だ。モンスター側から見た我々は悪かもしれない。立場が決めるのであればそれはそういうものだ」

「はい」

「……おいおい、そう簡単に返事するなよ。断定なんかできないんだから」

（でも、返事はしないと……）

「正義の前に……我々は生きる為にモンスターを倒す。その糧をもって生かされている。食わずにいられないのが生き物ってもんだ。坊主はモンスターを倒さずに英雄になれると思うか？」

今までの事を考えれば不可能だと答える。

生き物を大切だと思うなら例えモンスターでも倒してはいけない筈だ。だが、現実はそうならなかった。いや、出来ないと理解してしまった。

ダンジョンに潜ってたくさんのモンスターを倒せば英雄になれると――

そんな事で英雄になれると信じ、それに憧れている自分を知った。

知ったならば冒険を止めるべきか――答えは否だ。分かり切っている。

闘争こそ冒険者の誉れだ。その頂点こそが英雄である、と。

「……」

熱血指導の内にベルも身体が熱くなってくる、かと思いきや現実は

全く違っていた。
ネーゼは荒々しく戦闘する女性だ。しかも露出度の激しい身なりである。更に豊満な胸を持つ。
肉弾戦を繰り出せば大きなおっぱいが激しく揺れ、いくら気にしないようにしようとも男の子であるベルはどうしても気になって顔が赤くなってしまう。
最後まで衣装が破けたり外れたりする事態には陥らなかったが――この手の軽装や薄着の衣服を身に着ける健康的な女性達はどう思っているのか疑問だった。
（……女性の人口が多いからかえって気にならないのかな？　アマゾネスで見慣れているから平気ということも）
とにかく長く冒険者をしている人達は総じて気が大きく、身なりを気にしない。――だからといって裸を見せるほどではないけれど。
少年としては目のやり場にいつも困ってしまう。

†

彼女の胸を気にしつつも拳での戦闘にかなりの時間が費やされた。
骨折こそしなかったが物が持てないほど痛くなった。それらはネーゼが用意した回復薬（ポーション）によってあっさりと治癒される。
痛みを覚えているので『耐久』が上がっているかもしれない。
戦闘方法は多岐に渡るが上昇する『能力値（アビリティ）』の変化はそれほど変わらない。
「戦闘の仕方によって身につく『スキル』が変わる事がある。得意な分野を見つけたら徹底的に鍛えろ。あまり優柔不断さを見せるな。成長の妨げになるからな」
「はい」
自分に何が向くか、それは人に聞くべきものではない。そして、一度決めたらそれだけに打ち込む方がいい、というのは納得できた。
根性論も意外と馬鹿に出来ないものだとアドバイザーも言っていた。
他人の装備に憧れているようでは自分の成長に繋がらない事も――

「魔法に関して知りたくなると思うが……。強く念じろ。そして、どんな魔法を使いたいか明確にな。……運が良ければ、習得できるかもしれない。大半は無理だが……。これぱかりはどうしようもない。才能が関わってくることもあるし、便利な魔道具によって身につくこともあるとか……」

興奮している為か、次々と教えてくれる。

それだけ気に入られた、という事かもしれない。ただ貰ってばかりでは申し訳ないので合同探索の件を伝えてみた。

すると彼女の熱が一気に冷めたのか、顔を赤く上気させて恥じらった。

今まで自分は何をしていたんだと責め始める。

元々単なる様子見できたのに気が付けば熱血指導になっていた。それは彼女にとって予定外の出来事だったようだ。

「私としたことが……。ついつい興が乗ってしまった。探索といっても資金稼ぎだ。それと君の成長の度合いも考えなければならない」

軽く息を整えた後、余裕のある日取りをベルに尋ねた。

他の眷族の死後のと日程も実のところ把握していないがベルは基本的にダンジョン攻略以外の仕事を持っていない。

稼ぎとしてはモンスター退治のみと言っても過言ではないくらいに。

「ほぼ……予定が空いています」

「少し危険に飛び込むつもりで下層に降りてみようか。こちらから後二人ほど連れて来る。だからといって君を一人で放り出しはしないけれど……。地道な鍛錬もいいが特には冒険も必要だ。……アドバイザーはいい顔をしないと思うけれどさ」

人の言う事だけ聞いて冒険するか、それとも自分の意志を表すか、という選択だと理解する。

前者のままだと成長は見込めない。けれども安全は確保される。

後者は命の保証が無いけれど自身の強化につながる、かもしれない。冒険者としての経験もしっかりと得られる。

無謀を許容する気は無いが下層域にはいずれ行く予定だった。そ

れに【ステイタス】もかなり増加している。
あまり過信さえしなければ一〇階層までとは言わないが七階層までなら、とネーゼに告げた。
「なら明日だ。熱意が冷めないうちに」
「わ、分かりました」
なし崩し的に決まってしまった、気がする。いや、安易に相手の要望を聞いてはいけない、のではなかったかと思ったが――もう取り返しがつかない気がした。それと色々とアイテムを使わせてしまったので。

†

ダンジョンから出ると夕暮れ時になっていた。相当長く鍛錬に勤しんでいたことに驚く。
帰り際、団長が働いている酒場『豊穣の女主人』に向かい、今日のあらましを伝えた。仕事中だったが終わるまで待っていると忘れそうだったから。
話しを聞いたポランは少し呆れていた。これはベルに対してではなく、積極的に接触を図ってきた【エニュオ・ファミリア】に対してだ。
「……おそらく向こうは君が可愛い男の子だから気になって仕方が無いんだと思う。本当にどうしようもない連中だ」
予想以上に可愛い、という感想を抱かれたのかもしれない。素直なところは確かにポランも認めるところ。しかし、冒険者としては褒められるものではない。
かくいうポランも彼と共に探索に加わりたいと思っている。可愛いという気持ちは確かにあるけれど、それ以上に【ファミリア】の一員として教育したい、という気持ちが大きい。
「ポーラも立派な団長になったもんだね」
料理を作りながらミア・グランドが言った。
立派かどうかは、と言葉を濁しつつポランは苦笑する。
「決めるのはクラネル君だ。……もし、向かうなら装備とアイテムをしっかり整えるように」

「はい」
待ち合わせ場所を決めるのを忘れたことに今気づいた。
【エニュオ・ファミリア】の本拠（ホーム）には一度行った事があるので覚えているが、もし誰も居なければダンジョンの入り口で待つしかない。
冒険者になってから急に忙しくなったような気がしたが、何もしないよりはましだ。
なんだかんだと団長は特別な制限を設けず自由行動を許していた。
そのことにまず感謝しなければならいのでは、とベルは思った。
そして、翌日。団長と仲間から引き留められる事が無かったので、そのままダンジョンへと向かった。
既に多くの冒険者が集まっていたり、中に突入したりしていた。その中に機能であった獣人のネーゼが腕組して待機している姿を見つけた。
「おはようございます」
「……ちゃんと来たな。来なくても本拠（ホーム）に行っていたところだが……」
身なりは昨日と同じく肌の露出が激しい薄着。これでいいのかとベルは疑問に思う。
探索に当たってネーゼは仲間を二人連れて来るはずだったが予定が合わず一人だけとなった、と言った。その一人は荷物の用意で少しだけ遅れるとのこと。
「三人パーティだが……、上層階の魔石は殆ど君に渡す事になっている。我々が欲しいのはより下層域だ。治安維持にも金がかかる。……全く世知辛（せちがら）い冒険者家業だよ」
「……確かに」
こちらの危惧を言う前に相手が報酬の事を言ったので少しだけ安心した。
大抵は上位者の取り分が多くなるものだが――どういうことなのか聞いた方がいいのか迷うところ。
ランテの言い分だと報酬をしっかりと取るのが基本だ。
「仲間はドワーフのアスタ。前衛だけど荷物持ちの代わりだ」

彼女達の仲間は一〇人足らず。その全てが第二級冒険者だ。
実力だけで言えば深層域に行けるほどだが慢性的な資金不足により攻略が芳しくない。それと取り締まる対象が多くて少人数の彼女達は常に疲弊していた。
肉体ではなく精神的に。
そこにベル・クラネルという新進気鋭の冒険者が現れ、癒しを求めて接触を図った。
主神が処女神で男性眷族との交流を禁止するような堅物でなかった事に団員達はかなり感謝したものだ。

†

合流時間に僅かばかり遅れたドワーフの『アスタ・ノックス』が自身の数倍はある大きな荷物を背負って現れた。
ドワーフといっても背はベルより僅かに低い程度。手足が太めだが全体的に可愛らしい女性だった。それと荷物の中に大きな斧や大剣が見えた。彼女達（ネーゼとアスタ）の得物にしては大きすぎる、と驚いた。
見た目では分からない実力が冒険者には多々ある、というのも教わったけれど――
探索期間は二日。泊まり込みを想定した。そう言ってくる相手にベルは驚く。
「君の団長は承知している筈だよ。初めての遠征だと思って頑張るように」
「……いえ、神様に泊まる事を伝えていないので」
「予定とは常に変わるもの。これも経験だ。子供のお使いじゃないんだ。いちいち一日の行動をきっちりと報告をしなければならない制約はない。不測の事態の連続こそが冒険者の正しい在り方だ。……ここに君の死体が加わらなければ何の問題も無い」
大きな胸を突き出し、自身満々に言い切るネーゼ。アスタも同意している所を見ると【エニュオ・ファミリア】ではいつもの日常のようだ。
ベルは納得するものの黙っているのも悪い気がした。いや、言い分は理解できる、と頭では思った。

「ちょっと夜を長く過ごしたと思えば……」
「ダンジョンは夜中になっても大して景色変わらないし」
「神様や仲間に心配かけたくないので」
一向に進もうとしない優柔不断男（ベル）にギルドに連絡だけしてすぐ来い、と苛立つように命令してきた。
確かに本拠（ホーム）に戻るよりギルドに居るアドバイザーに連絡する方が距離的にも時間的にも早い。
初回ということで見逃すが次は許さん、と今まで温和な顔だったネーゼが怒り顔に変貌する。
狼人（ウェアウルフ）の女性が怒ると人間（ヒューマン）より迫力が出る。
荒くれ者の冒険者の多くは短気が多い。決断力の遅い男はきっと嫌いなのかもしれない。
今以上に機嫌が悪くならない内にギルドに駆け込み、泊まり込みを報告する。その時、秘密の探索というわけではないので他の【ファミリア】との合同探索であることも伝えた。
ベルの担当であるエイナ・チュールは知らない【ファミリア】に騙されていないか、と尋ねてきたが団長の知り合いであると伝えた。
「頼まれたら断れなさそうなクラネル氏ですから……、あんまり信用できませんね。でも、ちゃんと帰って来てください。約束の日程が延びたら救援要請を出しますからね」
「は、はい。ちゃんと仕事を全うしてきます」
エイナに任せれば【ヘスティア・ファミリア】に連絡が行く筈だ。何かあってもきっと大丈夫、と。
彼女に挨拶してネーゼの下に駆け戻った。
獣のような唸り声を発しつつ行くぞ、と頭だけで表現してきた。
同道するアスタが苦笑しながら優しく声をかけてくれた。

†

今回の探索は一階層からじっくりとモンスターを倒さず一気に駆け降りる予定にしている。
取りこぼしは他の冒険者に丸投げする。
今日と明日はベルにとって未到達領域での戦いだ。一層下る度に

緊張が増す。
途中初見のモンスターが現れ、どういう対処をすればいいのかネーゼに聞こうかと思ったが機嫌が悪いままなのでアスタに聞いた。するとネーゼが姑息なことをしたベルに再度威嚇する。
「あれはウォーシャドウ。あっちはフロッグシューター。どちらも物理で倒せる」
「まあまあ。上層階のモンスターはきちんと身を守っていれば対処は難しくありません。一人の場合は囲まれないように常に移動すること」
「はい。……あと、すみません」
ネーゼとアスタが出会い頭に黒い影で出来た人型に似たモンスターと単眼の蛙を本当に物理的に蹴散らしていく。
じっくり観察する暇はなかったが、どちらのモンスターもベルと同等の大きさがあった。
毎回一匹のモンスターに時間をかける駆け出しとは戦闘の次元が違う、という事をまざまざと見せつける。
三人は現在、徒歩ではなく走って移動している。こうする事でモンスターの出現を抑えているとか。――あくまで気分的に、だが。
モンスターは壁と地面から湧き出てくる。何もない空中からは現れない。
「……あー、初見のモンスターと一応戦った方がいいか。なら、そこのウォーシャドウを倒してきな。ゴブリンより強烈で爪みたいなもので攻撃してくる」
「分かりました」
今までのモンスターより強いと言っても隔絶した強さではない、と言いおいて――
ベルは小剣を構える。本当はそんな暇があるなら駆けろ、と言われるがネーゼは黙った。
相手の動きをよく見ろ、といつも自分に言い聞かせている言葉で活を入れる。
ウォーシャドウは先に述べた通り、人影のような姿をしている。姿

こそ人型に近いが表情などは窺えない。
倒し方について特別な方法は必要無く、身体を切りつければダメージになる。
動きはゴブリンなどより早く鋭く、そして強い。
（強いけど、それだけだ。……エイナさんの説明だと集団で現れて囲もうとするから気を付けて、と……）
大半はネーゼ達が倒したので一対一の戦いになっている。本来は複数体と相手取るのが一般的だが、楽をさせてもらった。
パーティを組めばそういうこともある。単独走破するにはそれに見合った実力を付けなければならないし、ベルはそれを悔しいと思わない。
彼女達も死線を潜り抜けて今の強さを得た筈だから。
「でえい！」
武器を振りかぶる。相手が避けようとする。身体に武器が当たる。確かな感触があった。
影のように見えるがしっかりと当たった感触があるところから無理な相手ではないと感じた。
こちらの速度を上回る動きで回避してこない。つまり頑張れば倒せる。
攻撃されたことで激高したのか腕のようなものをベルに向かって振ってきた。それを受けるべきか回避すべきか。
瞬間的に判断して勝利を勝ち取らなければならない。
（一度は受けてみるべきだ）
『耐久』を上げる為に。
痛みに怯えては冒険出来ない。既にベルは多くの怪我を負ってきた。
軽傷とはいえ痛いものは痛い。長い時間戦闘すれば筋肉痛のようなものにも苦しめられる。
最初はもっと惨めな思いを感じていた。
ユーカリン・ナナツタエはほぼ無表情な女性だが攻撃は苛烈だ。容赦もしない。

（痛みを覚えるのは冒険者にとって避けては通れない恐怖と戦う為だ。対人戦ともなれば広域魔法を使う冒険者が居る。巻き添えで死ぬかもしれない。混雑するダンジョンではそういう事も起きる、と想定すべきだ）

とは彼女の言（げん）だが――真（しん）でもある。

モンスターの中には炎を吐く者が居る。他にも様々な能力を駆使してくるかもしれない。

避け切れないなら耐えるしかない。痛みを我慢して。

頭では分かっていても実戦は本当に辛い。だが、怖がっていては前に進めない。

ウォーシャドウの振りかぶられた腕の一撃を腕を交差して受け止める。結構な衝撃が伝わってきた。ゴブリンの何倍だ、と思わず考えた。

僅かな階層しか違わないのに強さが数倍化した様な衝撃に驚く。だが、それでも耐えられないほどではない。

今までが楽だっただけだ。そう思える程に弱いモンスターと戦い過ぎた。

（……熱いねー。雑魚戦なのに）

（駆け出しの頃を思い出してしまいます）

強くなった冒険者は気が大きくなる傾向にある。そして、辛かった時代は時と共に薄れる。

戦闘が楽になると意欲も総じて減ってくる。熱意が無いと『能力値（アビリティ）』の上昇も見込めない。

最初のころの【ステイタス】が勢いよく上がるのは冒険者としての熱意や希望が強いからだ、というのが通説だ。

（新人教育が大事ってこういう事なんだよな）

仲間内で平等に強くなってしまうと頭打ちになりやすい。格下は単なる足手まとい、と思っている内はきっと――

ネーゼはベルの戦いを見ている内に両手に力が入ってきた。

熱気を感じられる戦いこそが冒険者として求めるものではなかったのか、と。

多少の擦過傷を作りつつもウォーシャドウを撃破。ベルにとって初めての勝利が一つ増えた。

「……そいつで苦戦しているようじゃ駄目だよ。あれは次々と出てくるんだから」

「はい」

（……でも、いきなり五体はきついよな。三体にしとくか）

勝利を労うことなく移動を開始する。

また同じ敵が現れたが複数体を残してベルに戦わせる。

今日の目的はベルの強化ではない。だが、彼の戦闘経験を積んでおかないと不測の事態の時、いつの間にか死んでしまう事態も充分にあり得る。

普段の仲間とは勝手が違う探索は中々判断に迷う。

†

モンスターを倒し、魔石の回収もしっかりと行って下層を目指す。

殆どのモンスターはネーゼとアスタがあっさりと蹴散らすがベルは討伐に時間がどうしてもかかってしまう。

骨折こそしないが結構血が流れた。

故郷の村に居た時から結構ケガをしてきたが血が流れても平気な自分をあまり自覚しなくなった。それと痛い思いで泣くことも――気が付けば無くなったな、とベルは郷愁に似た感慨に耽る。

それにもましてネーゼ達が全く怪我をしない。ほぼ無傷と言ってもいいくらいに。

戦闘の数は二人が圧倒的に多いのだけれど――

防具に守られているわけでもなく、武器が凄いとも思えない。

（無駄な動きが無く、攻撃も受けない。当たり前だけど、それが出来るから無傷が成り立つんだ）

そこまでの境地にベルはまだなれそうにないが敵の動きをよく見て対処する事は大事だと教わっている。

あえて受けているから余計な怪我を負っているともいえるが――これは【ステイタス】の為だ。――『耐久』をどうしても増やしたいので。

「初めての階層でもしっかり戦えているじゃないか。数こそこなせないようだけど……。短時間なら大丈夫そうだな」
「……疲れたら休みますから無理しないでくださいね」
二人に言葉を掛けられて頷きで応える。
走り通しも意外と疲れる。彼女達もかなり走ってきたのに過呼吸になっていない。
心肺機能まで冒険者は強化されるようだ。
(僕よりひ弱そうな外見なのに……。【ランクアップ】すると身体がかなり強化されるのかな。凄いな冒険者って)
自分もその冒険者だけれど。
当初に比べればベルもかなり強くなっている。戦闘が楽になったと感じるほど。それに――七階層まで戦闘と走破をしているのに足腰はまだ僅かな震え程度で済んでいる。
距離に換算すれば相当な移動距離の筈だ。数十Kを戦闘しながら、話しながら移動するというのはあり得ない。
そもそも喋りながら走るのはかなり辛い事だ。
人間も亜人も呼吸する生き物である。心肺機能にも限界があって当たり前だ。
「お、お二人は普段、この辺りをどのくらいの時間で往復するんですか?」
「計った事ないから分からないな」
「……みんなでお喋りしてますから……。意識して来ませんでした……。……一時間もかかっていないんじゃないでしょうか?」
(……僕なら一日がかりだと思います)
半日かけて潜り、夜になる前に戻っていたのが三階層だから。今いる階層だと完全に深夜帯になってしまう。
今の時間はそれほど経過していない筈だ。ベルの感覚では三時間くらい。
ダンジョンの階層は深くなるごとに広大になる。それは現在判明している階層全てに適応されている。
それを僅かな時間で走破することなど一般人には考えられない。

「私らが本格的に探索するのは二〇階層より下だから気にした事ないな……」

「その辺りじゃないと稼ぎも良くないですからね。宿場街（リヴィラ）までは一気に走破するのが基本です」

安全地帯（セーフティポイント）の一つである宿場街（リヴィラ）があるのは一八階層である。それを気軽に行ける冒険者に自分はなれるのか（ベル）不安を募らせる。

何が不安なのかと問われれば二人の女性との実力差だ。明らかに圧倒的だ。

自分の想像の中の英雄よりも強そう、と。

ちなみに、と言いおいてネーゼはこっそりと言った。

【エニュオ・ファミリア】の最終到達階層は三五階層より下だ、と。

＃5―11　アスタ・ノックス

新人の冒険者ベル・クラネルを連れて八階層目に突入した【エニュオ・ファミリア】のネーゼ・ランケットとアスタ・ノックスは小休止の用意を始めた。

切りのいい一〇階層ではないのは少年（ベル）に合わせたからだ。

強化が目的ではないとしてもある程度の戦闘経験を積ませる事は決定事項である。それと無理をさせない、とも言われている。

既に疲れを見せているベルに今以上の加速を強要することは出来ないと判断した。

七階層から現れるキラーアントの集団は数匹を除いて殆どネーゼ達が討伐した。ここより先が駆け出しにとっての『死線（デッドライン）』だ。――既に一階層過ぎてしまったけれど、彼女達にとっては誤差にすぎない。

「数を稼ぐならこの辺りの階層に居た方がいい。ただし、単独はお勧めしない」

「囲まれやすいからですよ」

狼人（ウェアウルフ）のネーゼは熱く、ドワーフのアスタは優しく説明してくれる。

荒々しくもモンスターの倒し方を熟知している為に――ベルにとって――夥しい数が相手でも苦も無く撃破していった。もちろん、魔石も回収済みだ。

戦闘で回収しきれなくなることがあるのにどうして無理に回収するのか疑問だった。

今まで少数を相手にしてきたベルにとってかなりの手間暇がかかっている。

「取りこぼした魔石は他のモンスターが食べてしまうからさ。奴らは魔石を体内に取り込むと強くなる。冒険者が【経験値（エクセリア）】を増やすように」

「所謂（いわゆる）『強化種』になるんです。そうするとモンスターが爆発的に強くなって太刀打ちが難しくなります。そのせいで何人もの冒険者が犠牲になっています。ギルドでもその辺りを注意事項として設定して

いる筈ですよ」
　残念ながらベルはアドバイザーから『強化種』について学んでいない。ただ、魔石の回収を怠ってはいけない、とは聞いている。
　強化種と言っても数個程度の魔石では少し強くなる程度だが、一定数を取り込むと下層や深層域に匹敵するモンスターのように強くなってしまう。
　駆け出しが第二級冒険者に挑むのと同様に。
「私らがこまめにモンスターを倒しているから一般の冒険者は安全に探索が出来る。たくさんの冒険者が低層に溜まるから強いモンスターが現れにくいってのもある」
（……へー。勉強になります）
　感心していると額の角の生えた兎型モンスター『ニードルラビット』が数匹壁から出てきた。
　上層と比べてモンスターの数が格段に多くなったような印象を受ける。今のままだとあっという間に取り囲まれてしまう。
　単独で探索する場合、本当に実力を付けないと踏破が難しくなる事を実感した。

†

　ネーゼ達は数十体のモンスターに囲まれても平然と対処し、ベルは既にサポーターのような仕事に従事している。
　つまり魔石やドロップアイテムの回収だ。
　回収している側からキラーアントの集団が現れるので休む暇が無い。
「こういうところで【ランクアップ】する冒険者が多いと聞くけど、すぐにレベル2になってもいいこと無いからね」
「……どうしてですか？」
『能力値（アビリティ）』は【ランクアップ】するとリセットされますが消えたわけではありません。可能であれば限界まで数値を伸ばしてから【ランクアップ】した方がより強くなれます」
『能力値（アビリティ）』を数値で言う機会が多いのにも意味があるという。
　ベルはあまり実感が無かったけれど、数値は本当に意味があり自分

の強さにしっかりと直結している、と。
「冒険者の『能力値（アビリティ）』は累積する。数字は多い方がいい。とても分かりやすい理屈だ」
「同じレベル2でも累積する数字によって実力差が生まれます。強さを追い求めるなら全ての数値を上げる方がいいんですよ」
「分かりました」
ベルの【ステイタス】は知りうる限り『魔力』以外は満遍なく増えている。
『魔力』は他と違って才能や種族に偏りが出てしまうという話しだ。
彼だけ特別に『魔力』が上がらない、という理屈は存在しない。
人間（ヒューマン）やドワーフは『魔力』が増えにくく、エルフは総じて『魔力』が上がりやすい。
「魔法に関しては本当に『運』だな。だが、一度覚えてしまえば坊主でも『魔力』が上がっていく。その辺りもアドバイザーから聞いておけ」
「はい」
三人はモンスターを倒しながら通路を進み、少し開けた広場（ルーム）に到着した。
黙っていれば四方からキラーアントに囲まれる。それを分かってネーゼ達は居座ることを決めた。
キラーアントは痛めつけず、一息に倒すのが正しい。中途半端にしておくと仲間を呼ばれるからだ。
だからこそ、想定外の数に囲まれる事が無い。
普通にしていればモンスターも規定数以上を生み出す事は無い。
だが、絶対でもない。
（……ここに来る前に冒険者の死体のようなものを見かけたな。本当にダンジョンは死地なんだって思う）
死にたての生々しいものは無く、殆どが白骨化したものだ。
冒険者の死体であれば金目の装備品やアイテムがあるものだが――奪われたのか、見当たらなかった。
誰にも回収されず野ざらしなのは他の冒険者の荷物に余裕が無いから、ともいえる。

であれば自分達は余裕があるから回収すべきか、と自問する。今の自分達も絶対に安全と言えないので余計な荷物を増やすのは自殺行為だと答える、しかない。

そして、忘れてはいけないのは――

モンスターは冒険者を殺す存在だ。

鍛錬するために現れるわけではないし、意思疎通はもとより飼いならすなど通常は出来ない。

『調教師（テイマー）』でもモンスターを手懐けるのは容易ではないけれど。

まず一般的には敵として討伐するしかない。

モンスター一匹に感情移入している内に一〇〇人くらいの死体が転がると団長であるボラン・ブーニディッカが言った。

彼らと仲良くしようとするなら多大な犠牲と引き換えにしろ、と。

（……ダンジョンから飛び出したモンスターが地上で暮らしている事実もある。無理に押し込める必要があるのか？）

その事についても長く議論が交わされている。

ただ、ダンジョンから生まれたモンスターは神に敵意を持っているし、一般人を襲う。

遥か昔から人とモンスターは戦う運命にあった、と様々な物語にも書かれている程だし、ベルも多くの書物を読んでいるので知っている。

（モンスターは魔石を宿して生まれてくる。それがある限り倒すしかない）

原理は今もって不明だがダンジョンが生むモンスターは総じて生物として不可解な性質を持っている。

冒険者が来ない間は壁から生まれ難い、など。

侵入者に対する敵意こそが原動力とでもいうように。

†

探索を始めてどれくらい経っただろうか。ベルは地上の様子が気になってきた。

今まで一番長くダンジョンに潜ることになっているので。

他の冒険者達は長期探索する場合、どうしているのか実際に見た事

が無かった。作物も水も無いような無機質なダンジョンに長期で滞在する方法など――

仲間を募って絶えず物資を運んでいるのか、それとも地下にも生活圏があるのか、と。

「生活できるから深層域に行ける。多くは無機質な階層で構成されている」

「安全地帯（セーフティポイント）と呼ばれるところや一八階層以降に植物が生えている所があります。水について、湧き水が出るところがありますから、結構生活圏があるんですよ」

「へー」

「木材で言えば一〇階層以降にも出て来るけれど……。ダンジョンは謎がいっぱいだ。どうなっているのか未だにさっぱり分からない」

生活が出来るからと言って安全である保障は無い。

地下に住んだとしてもいずれは地上に戻らなければならない。

往復するすべを確保する事は冒険者として大事なことだ、と説明する。

「それにしても……。皆さん僕とそう歳が違わないのに経験豊富なんですね」

「んっ？　なに言ってる。ある程度【ランクアップ】した冒険者は若々しい外見を維持することが出来るんだ。見た目で歳を読むのは意味が無いぞ」

「えっ？」

ネーゼは冒険者の外見について解説する。

仕組みは未だに謎に包まれているが上位冒険者の多くはかなりの高齢である。――例外もあるけれど。

概ね最盛期の肉体年齢を維持したまま加齢が抑制される。

自称美少女冒険者アリーゼ・ローヴェルですら既に二十歳（はたち）を超えているのは周知の事実である。

「加齢が止まるってわけじゃないらしいが……。うちの団長（アリーゼ）の場合は一四歳のままって感じだ。そこまで【ランクアップ】するのに時間がかかればかかるほど老け顔になってしまう、とも言える」

元々長命な種族だと意味のない仕組みだが。
一言で言えば不老長寿のようなものだ。
その事実を知る者からすれば【ランクアップ】を死に物狂いで達成しようとする。
「古株の冒険者は大体ジジイババアが多い。坊主もいつまでも若いままでいられると思うな」
「渋い中年も嫌いではありませんが……」
ベルはふと想像する。
自分がいつまで冒険者でいられることかを。永久不変の存在ではない人間（ヒューマン）として生まれた自分は年寄りになる事を想定していない。
しかし、いつかは老いる。
神様のような『超越存在（デウスデア）』は例外としても。
（英雄も大事だけど老後も考えないと……。今考える事ではないんだけど……）
それでも酒場に居た冒険者の多くは何年も冒険者として働き、それぞれ草臥れた顔をしていた。
中年を過ぎている者がとても多い。いずれ自分もその仲間入りを果たす事だろう。
そういう人生を是（ぜ）とするか否（ひ）とするか。
「私らは短期間で熟練者になったわけじゃない。それなりに経験を積んできたってわけ」
「クラネル君も色々と勉強して多くの仲間を増やしていけば見えてくるものがあるかもしれません。諦めず、努力してくださいませ」
「が、頑張ります」
話しているとあちこちの地面や壁がひび割れてモンスターが姿を現す。
それらを害虫駆除するようにネーゼ達が始末する。この時、魔石を砕くような真似をした。
無理して魔石を回収するより壊した方が手間がかからない。回収しなければ資金にならないけれど――
面倒な場合は破壊した方が楽になる。特に強行軍の時などは。

それに――モンスターを倒す時、直接魔石を狙った方が楽に倒せる事がある。

「そういえば……。モンスターってそれぞれの階層ごとに出てくる種類が違いますけど、彼らは上や下の階に行ったりしないものですか？」

「現れた後なら移動する。生まれる階層だけが固定されているって感じだな。絶対にこの階層にしか居られないってわけじゃない。下層のモンスターが上層に来ると混乱が生まれるけれど……」

「分からない事はどんどん質問してー。答えるたびに君の賃貸期間が延びるけど……」

「……あ、そ、そうですよね。見返りも無く質問ばかりしてますもんね」

冒険者は無償の仕事を基本的にしない。

依頼があって動くのが正しい形だ。そうポラン達にも教わっている。

それなのに好奇心旺盛な若者よろしくベルは気軽に質問し過ぎた。後々団長から叱られる気がする。

†

あらかたモンスターを倒した後、仮眠と称してその場にアスタが寝転がった。

地面に敷物を引かずに。ネーゼが見張りをし、交代制で身体を休める。

多くの冒険者は通路で寝る事が多いという。常に安全な場所を確保できるわけではない、と説明して。

一度ダンジョンに入ればシャワーもトイレも利用できない。長期の遠征ともなれば衛生面の問題が出てくる。

トイレに関して、地面に穴を掘り、済ませた後に埋めるやり方が一般的だ。

（途中で食事を摂ったり水を飲んだりした後、地上まで我慢するわけがないよな）

特に深い階層に挑む女性は対戦だと思う。

そんなことを考えて居ると眠くなってきた。規則正しい生活を続けていると決まった時間眠りを欲する。

ベルはまだ駆け出しで規定階層しか攻略したことが無い。衛生面や寝泊まりについての知識はまだ未経験だった。

「眠そうだな。……もし、私達が怪しい冒険者なら眠った後で身ぐるみを剥がして逃げる。だからこそ付き合う相手はちゃんと選べ。そして、調べろ。人生は常に勉強だ」

「はい」

ネーゼも少し眠そうにしていたがアスタを守る為に頬を叩きながら眠気と戦っていた。

気が緩むのは危険と判断した彼女は立ち上がり、軽く運動を始めた。時より湧き出てくるモンスターと戦いつつ見張りを続ける。

どうしても無理そうだと判断すると荷物から匂いの強いアイテムを嗅いで眉根を寄せる。

狼人（ウェアウルフ）の彼女にとって匂いの強いものは意識がはっきりするきっかけになる。それと舌を刺激するものも使う。

そうして何時間か経過したころ、アスタが目を覚ましネーゼと交代する。

ダンジョンでは二時間ほど熟睡できれば充分である。

（少し迂闊。こんなに早く眠る予定じゃなかった。……今頃は『宿場街（リヴィラ）』に到着する頃か）

半分眠りかけているベルを眺めつつため息をつく。

いつものパーティであれば野営の準備をしている所だ。それなのに通路内に留まっている。

駆け出しに色々と学ばせて自分達が危機に晒されるのは本末転倒である。

「……地響き？　モンスターの発生音……じゃないよね？」

警戒を始めて三〇分ほど経過した時だった。

足元に僅かな微振動を感じた。大きな戦いがある時は近い階層に振動が伝わる事があるが一〇階層ほど離れている場合、振動は殆ど伝わらない。それゆえに怪しんだ。何かが起きたのではないか、と。

ダンジョンでは何が起きるか分からないものだ。決して楽観視してはいけない、とアスタは理解している。

†

ネーゼとベルが眠っている今、対処できるのはアスタのみ。ここで二人を叩き起こすべきか、それとも静かに様子見に徹するか。

もし――駆け出しの冒険者であれば後者を選択する。

では、前者を選択する者はどういう存在か。

無理に二人を叩き起こして事態を悪化させるだけではないのか、と。だが――本当にそうだろうか。

ドワーフのアスタは無言のままネーゼとベルの頭部を少し強く蹴り上げる。

呻くのはネーゼ。声を上げて痛がるのはベル。

「……荷物をまとめて下がれ」

優しげな少女然としたアスタが荒っぽい言葉を使う。それにすぐ反応したのは仲間であるネーゼ。

ベルは事態が飲み込めず、頭を擦る。そんな彼の行動などを無視してアスタは彼の襟首を掴む。そして、すぐに壁際に移動する。

「……ミノ？」

「……だといいが。……振動が強すぎる」

振動を強く上げるモンスターでこの界隈に出るモンスターと言えば――一一階層に現れるレア・モンスター『小竜（インファント・ドラゴン）』くらいしか思い浮かばない。

確実に飛行能力のある者ではない。そして、重量級である。

今までロクに武器を持たなかったネーゼに幅広の大剣を渡し、自身は柄の長い斧を持つ。

「……クラネル君。もし、私達がヤバイと言ったら君は地上へ逃げろ。この階層は八だ。……いいな、しっかり覚えろ」

「は、はい。貴女達は……」

「素人を守る盾になるに決まってるだろ。他の冒険者を見つけたら引っ張ってでも上へ行け。命令だ」

真面目な口調で言われたベルは言葉に詰まる。

言い返す言葉が出てこなかった。
これは迫力ではない。迫りくる危機に対する真剣な人の想いだ。
少し下がり気味に待機し、アスタの言葉を待つ。何もなければそれに越したことが無い。
（もう近いな。通路は四方……。どれだ？）
（……あー、確かにミノタウロスにしては重い音だ。……どうやって来たのか気になるけど……）
身体の大きな『ゴライアス』は考えられない。
この階層の天井の高さはかのモンスターより低い。地面の振動より壁などを削る音が聞こえるはずだ。
先行するネーゼは音の元凶の片鱗を見つけ、そして、呻いた。
「……げぇ！」
「はっ!?」
奇妙な呻きの後で素早く息を吸い込むネーゼ。
そして、なりふり構わず吐き出した。
「ヤベー！」
通路内に響き渡る程の絶叫を開けつつ踵を返す。その時、アスタの襟首を掴んだ。
振り返ることなく逃走を図る。それにベルは驚いた。
駆け出し冒険者を守ると言っていなかったか、と。
（……今の大声で全員に逃げるように指示したのか？）
「……ぶ、ブラックライノス!?　……なんであれがここにっ！」
ベルの耳に届いたのは聞いたことが無い名前だった。
今までアドバイザーから学んできたモンスター名の中に『ブラックライノス』など無かった。
訳も分からず走り出したが、ベルは恐る恐る尋ねた。本当はそんな暇が無い筈なのだが――
「深層に出るモンスターだ。……戦え……るのか？　今の武具じゃ心許ない。逃げた方がいい」
「し、深層!?」
「クラネル！　黙って逃げろ！　あれはマジでヤバイ！　っていうか

どっから湧いて出た!?」
アスタすら怒り顔で怒鳴り散らす。それほど危険なモンスターだというのは分かった。
ネーゼは逃げつつ何処かに居るかもしれない冒険者に聞こえるようにモンスター名を連呼して逃走する。
それに呼応したのか、背後から一段と大きな振動音――いや、追跡音が迫ってくる。それも先ほどのゆっくりしたものではなく、異常な速度で。
下層を超えた深層域のモンスターともなれば、いかにベルの『敏捷』でも逃げおおせるのは無理ではないか、と疑問に思ってしまった。
「牽制っ！」
「無理っ！」
アスタの言葉にネーゼが即答。
その間に小さな悲鳴が届いたような気がするが振り向けない。破壊音が大きくて、怖くて――
まさかと思いつつ振り向けば一瞬で殺されるかもしれない。それにアスタは振り向こうと画策するベルの頭を的確に防いでいる。それほどのモンスターだということだ。
上に向かう階段を見つけるころ、それで安心してはいけない、と的確な言葉が飛んできた。
何にかの冒険者が逃走に失敗したのか、転んでいる姿があった。それらを踏みつけるようにネーゼが移動し、ベルも倣おうかと思ったが人を踏み台にする事を――この時、躊躇ってしまった。
彼の行動を見てアスタは舌打ちした。しかし、仕方ない、という呟きが漏れる。
破壊音はずっと近くで鳴っていた。それはつまりモンスターの速度が一向に落ちることなくベル達を追撃していた事になる。振り向けばすぐにモンスターを見ることが出来るはずだ。
「転がってるやつを引っ張り上げろ。男ならやって見せろ」
大声を出し過ぎて声が嗄れたアスタの命令に頷き、ベルは手近な冒険の身体を引き起こす。

それぞれ口々に何なんだ、あのモンスターは、と言っていたが無視する。

早く早くと呟きつつベルは冒険者を上に押し出す。

既に戦闘を開始したアスタを気にかける余裕はない。耳に聞こえるのは硬質的な衝突音のみ。

金属的な音がどうして鳴るのか、疑問に思いつつ。

「あの子供……。攻撃が当たってるのに……」

「……ブラックライノスって深層に居る筈の……。硬質的な皮膚……どころじゃねーだろ、あれ……。あれじゃあ武器が壊れちまう」

「いいから上に行ってください。お願いします」

ベルの言葉に触発されたのか、余裕のできた冒険者は次々と身体を引っ張り合って上へ逃れ始める。

階段はベル達が居るところにしか無いわけではない。だからといって別の通路を使うことは出来ない。

「こっちだ、黒犀野郎っ！」

声を張り上げて意識を自分に向けさせるアスタ。

ここでベルは漸く彼女に対するモンスターの姿を見た。

「……」

その瞬間言葉を失った。

想像以上に自分達の近くに居た巨大な体躯のモンスターの存在感に。

寧ろ、このモンスターに今まで追われていたのかと信じられない気持ちだった。

人間の大人より少し大きいかと思える身長だが、狭い路地だと大きく見える。

名前の通り黒い犀のようなモンスターだが二息歩行している。

黒い外皮が硬質的な鎧のように身体を包んでいる。

アスタの攻撃に対し、尋常ではない反射神経で受け止め、時に避けている。直情的な様子は一切窺えない。

関節を狙っても全く武器が通じていないのは見ていて理解した。

†

ベルが恐怖したのはモンスターの動きだ。自分よりも動ける上位冒険者たるアスタの動きに全く怯んでいない。

どうやって出し抜けばいいのか。どうやって倒せるのか。全く勝利の道筋が見えなかった。

一部の冒険者は圧倒的なモンスターの存在感で身動きが取れなくなっていたようで、上に行った冒険者仲間が無理矢理引き上げている。それでもまだ数人は階段に倒れ込んだまま。

「……私はそれほど武闘派じゃないんだぞ。……きついなー」

ネーゼはおそらく地上に向かい、情報を伝達すべくかけている。

深層域にアスタも赴いたことはあるが真っ向勝負や一対一は得意としていない。常にパーティとして行動していたから。

文句を呟きつつ武器を振るうも硬すぎる外皮に嫌気がさす。

（……攻撃の速度はそうでもない。移動速度だけ異常なの？）

身体の動き全てが早ければ対処しきれないがブラックライノスの攻撃はしっかりと見えるし、避けられる。だが、それだけだ。

決定打が与えられない。

アスタの知識にあるブラックライノスはもう少し鈍重だ。身体の硬さには驚いたが――

冷静になってくると覚悟も決めやすい。

倒せそうにないが負けはしない。

牽制だけなら可能と判断。ネーゼが無理だと言うのは勢いに判断が狂っただめだ。同じ立場なら自分も無理だと言う自信がある。

それにしても深層域に居る筈のモンスターがどうして上層まで来られたのか。

しばらく攻防を続けているとベルから避難が終わったと知らせが来た。それと同時にこの階層の奥から雄叫びの様なものが聞こえた。

戦いつつ耳を澄ませると冒険者のものと分かった。

「……居たぞ、黒犀っ！」

（……この声、『凶狼（ヴァナルガンド）』か!?　ってことは【ロキ・ファミリア】の失態か!?）

驚いた瞬間を突かれたか、ブラックライノスの薙ぎ払いを腕に受け

てしまった。
避け切れないと判断し、咄嗟に当たると予想した腕に力を込めたもののあまりの衝撃に顔を顰める。痛みの程度から脱臼と判断。
私の関節モンスターに負けたチクショーと思いつつ――骨折を避けただけでも自分をほめてやりたい、とアスタは思う。どちらにせよ左腕は使い物にならなくなった。
（……痛い。だが、力は思ったよりも低いな。……といっても深層域のモンスターの中では中程度、だと思うけれど……）
巨体による突進を得意とするモンスター特有の迫力で力量が図りにくいが、何度かの工房で大体の強さは分かった。
このブラッククライノスは硬くて速い。それ以外は負ける要素が無い。
（……負けないけど……勝てない。私一人じゃあ……）
散々驚かされて無駄に体力を消耗した事に怒りを覚える。
ドワーフとしての矜持か、それとも冒険者としての意地か。
対格差が三倍くらいの差があるが戦意では負けていない。

†

反撃したいのはやまやまだが、とにかく相手の外皮が硬すぎる、とアスタは愚痴をこぼす。戦闘中にもかかわらず言葉が出るのはもはや自棄に等しい。
牽制になっているのかさえ分からず犠牲者を出さない事に意識を切り替えた。
上層に生かせない事には成功しているがいつまでも一人で相手取るには限界を感じる。
（……あー、腕が痛い。ったく、こいつ動きだけは早い）
中途半端な強さなのにジリジリと攻め込んでくる。
『力』が少ないアスタにとっていやらしい敵と言える。
「誰か回復薬くれよ」
背後の階段に向かって言ってみた。誰が居れば今の言葉が聞こえるはずだ、と信じて。
駆け出しにとって脅威のモンスターが近くに居るので迂闊に出て

こない事も覚悟した。しかし――威勢のいい若者の『分かりました』という声が耳に届いて自然と笑みがこぼれる。

声の主はベル・クラネル。黒いモンスターに怖気づかない――わけはない。というより先ほどの『凶狼（ヴァナルガンド）』の声が聞こえてからだいぶ経っている筈だ。どうして助けに来ない、と疑問を覚える。

（……あ、これ走馬灯という奴か？　何だか景色がはっきりと見えない……）

それとも――モンスターの攻撃を受けた時からすでに意識が曖昧になった、とか。

ぶつぶつと呟くアスタ。

もし、これが事実ならば現実の戦闘はどうなっているのか。

カン、カンと甲高い金属音のぶつかる音が耳に小さく届く。戦闘はまだ続いているようだ。だが、誰が戦っている、と疑問に思う。いや、そうではない。

誰が戦っているのか。自分は戦闘中だった筈だ、と。

（……やっぱり私は脱落していたか……）

「……おい、生きてるかー？」

（おお、その声は正しく『凶狼（ヴァナルガンド）』……）

「……うわ言を呟いている？」

「頭を打っているようだな。だが、奴はもう片付けた」

そう言われると戦闘音が止んでいる事に気付いた。ほんの一瞬前まで聞こえていたはずなのに、と。

だが、思うように返事が出来ないところからアスタは自分が思いのほか重症である事を知る。

いったいいつからこうなったのか。

乱戦時の昏倒はいつだって現状を把握難くする。そんなことは慣れっこの筈なのに。

†

突如出現した深層域のモンスターとの死闘は呆気ないほど早く終わった。

ギリギリまで粘ったアスタのお陰で多くの冒険者は救われた。だ

が、上層を目指したブラックライノスに跳ね飛ばされて死亡した冒険者も数多く居ると後で知ることになる。

腕の脱臼程度と思っていたアスタの真の容体は全身打撲による意識障害。それでも夢遊病のようにモンスターに立ち向かって行ったと目撃者は語る。

（生きてて良かったー。後、私すげー）

生き残ったことに感謝し、自分を賛辞する。

後で駆け付けた仲間達から治療を受け、回復する頃に事件の詳細を聞くことが出来た。

ついでにベルが無事である事にも安心して――

予定を切り上げ、ギルド本部にて全身包帯姿のアスタは目の前に鎮座する【ロキ・ファミリア】の面々を睥睨するように睨みつけながら事情を聴くことになった。

「……で、私達を死地に追いやったあなた達が太々(ふてぶて)しいのは今更だけど、謝罪の一つも欲しいわね」

「……俺達は悪くねえ」

実際には【ロキ・ファミリア】の責任ともいえない。

様々な言い訳が出ると予想するがドワーフでなければ死んでいたぞ、とまずは言っておく。勿論、根拠は無いけれど。

「ギルドは今回の事件を異常事態(イレギュラー)と処理しますが……、とにかくご無事で何よりです」

労(ねぎら)ってくれたのはギルドの職員たちだった。

アスタとしても正直、聞き違いであっても欲しいと一瞬だけ思った。だが、無理だった。

何処の世界に五〇階層に生息するモンスターが上層に逃げてくると予想できるのか。

怒るに怒れないのはアスタも理解しているが怒りをどこにぶつけたらいい、もちろん目の前に居る【ロキ・ファミリア】だ。

「……クソ狼。逆の立場だったら何て言うつもりだ？　言い訳すんじゃねえよ、か？　ああっ？」

「……くっ」

温和なアスタが今回ばかりは本気で怒っている。これに仲間は口を挟めず、同席しているベルもお互い無事でよかったじゃないですか、なんて言えなかった。

下手をすれば全滅してもおかしくなかった。それを防ぎ切ったのはアスタの犠牲のお陰だ。そうでなければベルは今頃死んでいたに違いない。

説教をグチグチとするものだと思っていたがアスタは言葉少なくただ目の前に正座している【ロキ・ファミリア】の面々を割と長い時間睨み続けた。

空白時間が長いのも意外ときついものだとベルは我がことのように感じた。

†

それからしばらくして【ロキ・ファミリア】の幹部連中が現れ、今後の賠償手続きなどを改めて協議する事になった。

異常事態（イレギュラー）だから仕方ない、など本当に言い訳にしかならない。

アスタ自身、大事（おおごと）にしたくない気持ちがあったが犠牲者が出ている以上は引き下がれない。これは立場の問題もある。

正義を標榜する【ファミリア】の理念を貫くために。

後々、ネーゼからベルに今回の事で君ならどうする、と聞かれた。

「笑って済ますか、それともアスタのように徹底的に責任追及するか、という意味で」

何も知らなければ無事であることを喜び、笑って済ますところだ。

――その裏でたくさんの死人を出している事実に気付かずに。

犠牲者が出ている以上、穏便に済むとは思えない。だが、今の自分に責任問題を糾弾するほどの意志の強さは無い。

――おそらく人任せになる。

「言うべき時は言わなければならない。泣き寝入りする必要は無い」

「……はい」

「ダンジョンで人死にが出るのは珍しくない。助かったからいいや、と安易に思ってもいけないけれど……。それを引きずるようでは冒険者としてやっていけない」

そう言われて神へスティアの言葉が脳裏によみがえる。
君は後悔していないかい、と。
選択に迫られる事もまた冒険者にはつきものだ。
予定を切り上げたとはいえすでに日付は変わっている。現在時刻は朝靄けむる早朝――
多くの住民、各【ファミリア】はまだ眠りについている。そんな中で酒場『豊穣の女主人』はベル達の為に開店してくれた。
実際は閉店の為に掃除や片づけをしている最中だった。
「あんたたち災難だったねー」
アスタは『摩天楼（バベル）』の上層にある医療室に入院する事になった。
ネーゼとベルは緊張から解放され、再度の眠気が襲っていた、が――それらを無視して【エニュオ・ファミリア】の団長アリーゼが彼らの話しを聞く名目で酒場に連れ込んだ。
急な来客にもかかわらず、事情を察したミア・グランドは苦笑しながら彼らを受け入れた。
「深層域のモンスターですよ。災難で済むんですかね？」
生きた心地がしない、とネーゼは自身を抱きしめつつ愚痴る。
命の危機に瀕する場面に多く遭遇してきた経験を持つがやはり怖いものは怖い、と。
「アスタが部屋中を跳ね飛ばされたって聞いたけど本当？」
「……いや、そういう動きで翻弄したんでしょ？　決定打が与えられないんだから足止めの方法なんか限られてくるし」
ドワーフの冒険者の多くは高い『耐久』を生かした前衛防御が基本だ。アスタも例にもれず大きな盾を持って仲間を守ることが出来る。しかし、今回はその手の武具を持って行っていない。
無くても上層ならば大きな斧で皆を守れるからだ。その自身もあった。
「それにしてもクラネル君。よく生き残った。しかも救助活動もしっかりとこなしたって聞いたよ。偉い偉い」
アリーゼは白い髪の毛があまり乱れないように撫でた。
駆け出しにすぎないベルが今回、大きなけがも無く生き残っただけ

でも偉いと言えるけれど、一目散に逃げたりせず、救助に奔走した、と言うのはとてもすごい事だと評価している。

見た事も無い凶悪なモンスターが近くに居るのに、だ。それは中々できる事ではない。

逆に立ち向かっていった、という場合は無謀だと叱りつけている自身がある。それはアリーゼだとしても怒る。

ベルの面倒を見る団長ポランはそんな【エニュオ・ファミリア】を冷たいまなざしで睥睨するように見ていた。

ベルは背筋に悪寒を走らせたが彼女達は平然としていた。

（……あ、あれー。さっきのアスタさんと同じ場面に似てるなー……。気のせいかな？）

アスタが『凶狼（ヴァナルガンド）』ことベート・ローガ達を見る目とポランがアリーゼ達を見る目が重なる。

こちらはこちらで何か言いたげだったが無言である事が重圧となってベルは我がことのように額から汗を流す。

あと、ポランはベルに顔を向け、そして力を抜いて嘆息する。

「……君が無謀な行動に出なくて安心した。よく無事で帰って来たね」

「……は、はい。お世話をかけて……」

「すぐ謝らない。君は自分の行動に自信が無いの？　悪いのはこいつらでしょ？」

口調から怒りが収まっていない事を理解した。

仕方がないから仲良くしましょう、という発想は彼女達には無いらしい。ベルは自身の甘さを痛感する。

アリーゼと睨み合いの喧嘩に発展はしなかったものの団長ポランの機嫌は悪いままだった。

#5―12　冒険者の辞め方

白髪（はくはつ）の少年ベル・クラネルが冒険者になって一か月も経たないうちに色々なことが起きた。

他派閥の【ファミリア】との接触。突発的な異常事態（イレギュラー）。

エルフの裸族が急接近してきた事が一番の衝撃だった気もすれけれど、と。

英雄に憧れて迷宮都市オラリオに来たのに何度も冒険者を止めようと思ったことか。

本末転倒で優柔不断な自分が一番悪いのだが――

「クラネル氏が遭遇したブラックライノスというモンスターですが……。あれは深層域に生息するもので今の君に対処する事は絶対に不可能です。ギルドですら対処方法が確立していない、というか情報が集まっていないものですから」

「そう……なんですね」

「深層攻略する【ロキ・ファミリア】が度々倒しているそうですけれど……。どうして上層に来てしまったのか……」

アスタ・ノックスのお見舞いのついでにアドバイザーから意見を貰おうとベルはエイナ・チュールに尋ねてみた。

深層五〇階層から現れる様々なモンスターの情報はまだ殆どが未確定だった。

一定数の名前と姿、大体の倒し方は伝わっている。だが、それだけだ。

それらのモンスターと対峙する【ファミリア】が圧倒的に少ない事も情報不足の原因でもある。

「黒い犀（さい）のような姿で二足歩行し、並みの武器では歯が立たない程硬質的な外皮を持つ……。大きさは約二Ｍ（メドル）程。ギルドが定める攻略レベルはおそらく４（フォー）……」

牛頭のモンスター『ミノタウロス』はレベル２（ツー）から討伐対象となっている。

低いレベルの冒険者に易々と倒されないモンスターに対し、ギルドは強さをランク分けして冒険者に伝える。

最初に出会う階層主『ゴライアス』はレベル3（スリー）となっているが、あくまで単独討伐する基準にすぎない。

「【ランクアップ】するには自分よりレベルが上のモンスターを倒すのが良いとされていますが……。勝てなければ命を落とします。不可能に挑戦するようなものですからね。ギルド側としてはお勧めしません、が……。止める権利を有していないのもまた事実です」

自分より強ければすぐ【ランクアップ】するというわけではない。

一定条件を満たした上で神々が定める『試練』を乗り越えなければ【ランクアップ】はいつまでも認められることは無い。

試練の内容は曖昧でヘスティアにも答えられないものだという。

「ブラックライノスは鈍重そうな体格にも関わらず突進力があるそうです。今回のモンスターはその突進力……『敏捷』に特化した『強化種』のようです。そんなのに追われて無事だったのは不幸中の幸いです。……本当に。無謀にも立ち向かうんじゃないかと……」

「ええ、まあ……。多くの冒険者を逃がすのが先だと判断したので、戦うのはちょっと……。僕も一目だけですが……、見た瞬間に怖くなりました。あんなモンスターも居るんですね」

モンスターを見て平気だ、と言える冒険者は凄いかというとそうではないとエイナは言う。

アスタやネーゼ・ランケットも怖くないモンスターなんか居るもんか、とも言っていた。

恐れを知り、それを乗り越えるのが冒険者だ。

（かっこいい事を言うかもしれないけれど、死んでしまったら意味が無い……、とも言ってましたね。確かにその通りなんですけれど）

「恐れを知ることは大事です。そんなのは弱いからだ、甘いからだ、とかいう人が居ますが……。ダンジョンをなめてはいけません。怖くない人ばかりならとっくにダンジョンは制覇されていますし、安全な施設として運営していますよ」

（ですよねー）

今回、ネーゼ達と潜って感じたことは自分が足手まといになっていないか、ということ。

戦闘に際して色々と教えてもらったからこそ戦いやすかった。本当はそれらを一人で全部こなさなければならないところなのに。

楽をさせてもらっていることを忘れてはいけない。でなければ大量に現れるキラーアントの群れの前で死んでいた可能性だってあった。

たくさんの冒険者が難攻不落のダンジョンに挑み、様々な情報を持て帰っているからこそ後から向かう冒険者の生存率が高くなっている。

『初見攻略（ファーストアタック）』する数多（あまた）の冒険者の犠牲のもとに。

楽をすればそれだけ【ランクアップ】が遠のく。それを目的とせず、日々の生活だけ出来ればいい冒険者も居る。その者達にとって安全に仕事ができるのであればそれに越したことはない。

全員が英雄を望んでいるわけではない。

命を捨てる覚悟など誰もがしたいわけじゃない。命は大切だ。ベルも安易に死にたくないし、死ぬためにダンジョンに挑んでいるわけではない。

「……」

改めて考えれば冒険者は常に危険と隣り合わせだ。そんな中で英雄に憧れているだけの少年が立ち向かうのはお門違いもいいところだ、と思った。

覚悟を決めても後悔が襲う。ここはそういう場所だ。何度でも冒険者を試すように危機に陥れる。

「……冒険者をやめる方法って……、どうすればいいんですか？」

彼の意外な言葉にエイナは驚いた。

未来に憧れる少年が早々そんな言葉を言わないものだ。彼女が担当した冒険者の中に早々に諦めの言葉を発した者がどれだけ居たか思い出せないくらいに。

だが、今回の事でたくさん怖い思いをしたのだから仕方が無い、と言えなくもない。

「本人が辞めたい、と思った時ですよ。ギルドとして何らかの契約解除の書類など作成したりはしません。……精々登録抹消というものがありますが……。それは違反した者に課せられるものです。神から【神の恩恵（ファルナ）】を貰った者は神自身の手でしか解除できません。それがある限り……、冒険者であるともいえますね」

やるやらないは本人次第。そこに強制力は無い、と。

登録の解除のようものの多くは冒険者の死亡が確認された時に行（おこな）われる。自主的なものは少ない。

やめるのは本当に簡単な事だった。ベルは改めて驚いた。

神は眷族に無理強（じ）いはしない。だが、やるからには様々な制約に従ってもらう、とエイナは続ける。

「オラリオの危機に対する強制命令のようなものがあります。従わない場合はある程度の罰則がありますが……。これは滅多に起きるものではないし、起きてほしいとも思いません」

この罰則も冒険者が遠出をしている場合、あるいはとっくに眷族が全滅している、などの時は適応されない。さすがにそこまで無茶な事は言わないし、実際に外で働く【ファミリア】が居るので条件の改定を何度か行（おこな）っている。

前途ある少年が色々と悩んでいる様子にエイナがかけられる言葉はとても少ない。

ここで辞めるのも一つの結末である。

今まで彼女が担当した冒険者は全て死亡している。だからこそ彼に死んでほしいとは思っていないし、心配もする。

†

冒険者をやめるかどうかは置いといて、ダンジョン探索を休止して英気を養ってはどうか、と提案された。

目まぐるしい展開が続いた為に落ち着いて物事を考える事もまた冒険者にとって大事なことだ、と。

ベルは何も言えず、ただ頷き、トボトボとギルド会館を後にした。

彼の姿が見えなくなった後、手に入れた今回の事件の資料に目を落とす。

（……規格外のモンスターに襲われて生き残っただけでも凄いけれど……。クラネル氏もとんだ災難だったわね）

直接ブラックライノスを見たわけではないが、犠牲者の数だけ見ればとんでもなかった。

その殆どが突進によって弾き飛ばされた事による。冒険者どころかモンスターまで。

深層から逃げたのではなく、どうしてかミノタウロスの群れの中に潜んでいたらしい。

いつからそこに居たのか知らないが、【ロキ・ファミリア】に発見された途端に逃げ出して現在に至る。

（ローガ氏の速力を振り切る『敏捷』持ちって何なのかしら。そして、それをアスタ氏が満足な防具無しに引き留めたのでしょう？　聞いているだけでとんでもない事の連続じゃない）

様々な憶測が浮かぶがベル・クラネルに教えるものではない。

まだ上層攻略しか出来ない駆け出しに深層の情報を教えるのは意味が無いからだ。

じゃあ、明日から深層に挑戦してきまーす、など言おうものなら頭をひっぱたく自信がある。

「……レベル1（ワン）がレベル４（フォー）に挑むようなものよね……」

モンスターにもそれぞれ攻略対象レベルというものが――暫定的に――設定されている。

冒険者の大半はそれ情報を参考にする。――基本的に後発組が対象となる。

先行する攻略組は未知のモンスターと相対する運命にある。強さも不明なことが多い。

多くの犠牲を払って今がある事を忘れてはいけない。

そして――ベルのお陰で助かった冒険者が居る事も。

本人は現在、力不足を嘆いているようだけれど、彼の行（おこな）いはエイナから見て誇れるものである。

なにより怖がった、と本人は言うがしっかりと身体が動いていたとネーゼや現場に居た冒険者が証言していた。今にも泣きそうな面

だったが、とも言われていたけれど。
（泣きそう、であって泣いた、ではないのね。とても怖かった筈なのに）
雰囲気からしてアスタが大怪我をした責任を感じているようだった。モンスターを倒せなかった事ではなく――
意外と度胸があるのかしら、と。
それと大量に出てくるキラーアントもある程度倒していた、とも聞いた。
「……ん？」
（……気弱な少年……なのよね？　いくら上位冒険者に連れられているとはいえ……結構モンスターを倒していない？　ギルドが貸与した武器だけで……）
彼が冒険者になってまだ一か月ほどしか経っていない筈だ。講習期間が半分以上占めるので感覚が狂いがちだが。
順調に『能力値（アビリティ）』を増やしている結果かもしれない。
エイナが思っているよりも少年の成長速度は速く、確実に実力を付けている。いつまでも子ども扱いするわけにはいかないのではないか、と。
個人主義が多い冒険者の中で多くの出会いで強くなるのは良い傾向だ。出来る事ならこのまま進んでほしいと思う。――しかし、時には引き返す事も大事だ。

†

本拠（ホーム）に帰宅したベルはヘスティアから【ステイタス】の更新を受けていた。
事件のあらましは一応聞いていたが他と同様に災難だった、としか言われなかった。それしか言えない、ともいえる。
「そういう事もあるさ。困難の一つや二つで挫折してたらオラリオから冒険者なんかすぐに居なくなっているよ」
「……ですよねー」
神の言葉を聞くと安心する。
困難のない冒険など存在しない。それはとても胸が躍らないし、魅

力的でもない。
ただの炭鉱夫、という言葉が浮かんでベルは苦笑する。
現在、彼は上半身裸の上、ベッドでうつ伏せになっていた。神ヘスティアはそんな彼の背に乗って背中に【神の血（イコル）】を垂らし、彼の隠された【ステイタス】を詳（つまび）らかにしている最中だった。
（……数値がすげー増えてる。各項目のいくつかは二〇〇を超えてる……。ちょっと増えすぎじゃないかい？　それだけの危機に遭ったってことかな）
『魔力』以外の項目の内『敏捷』が一番多く、次が『器用』だった。『力』と『耐久』も大幅に増えているけれど極端に増加したとは思えなかった。
駆け出し冒険者にしては増加量が多いのは事実だ。それもこの短期間で。
だが、それでもブラックライノスに対抗できるほどか、と言われれば無理としか言えない。
レベル1のままでは到底無理だ。神の見解からもそう言わざるを得ない。
可愛いベルだとしても甘い言葉で大丈夫、君ならあんなモンスターすぐに倒せるさ、などとは言えない。
深層域の攻略経験がある【エニュオ・ファミリア】の団員にモンスターの強さを聞いておいたが、並みの武器では歯が立たず、根性論を加味してもレベル1がどう頑張っても討伐するのは不可能、と言い切られた。
――ただ、起死回生の魔法でもあれば話しは別だが、と。
（……ベル君にそんな凄い魔法は発現していないから無理って話しなんだけれど……）
何度確認しても魔法の欄は空白のまま。
仮にあっても詠唱しなければならないし、運よく短文詠唱を覚えていても威力が無ければ無理だ。
一番の問題は駆け出し（レベル1）であるということ。
「君が出会ったモンスターが何匹も上層に居るとは思えないけれど

……、命と引き換えにするような戦い方は……、ボクは嫌いだよ。他の団員にだってやってほしくない」

浮き上がっていた全項目をベルの背中に押し込む。これで【ステイタス】の更新は終了だ。

【ランクアップ】の条件にはまだ届かないが少しずつ前に進んでいる、という事を告げた。

「……それに、君は無謀な戦いをせず、人命救助に動いたと聞いた。恐ろしいモンスターが側に居るのに……。逃げ出してもいいはずなのに。それには何か意味があったのかい？」

「階段が詰まっていたので……。後から逃げる人の邪魔になっては犠牲が増えるだけだと……」

「理由はどうあれ、君の行動であの階に居た多くの冒険者は死なずに済んだ。アスタ君は重症だけど命に別状はなかった。結果オーライで結構じゃないか」

「……そうでしょうか？」

「そうだよ。自分の力不足を嘆いて何もしないよりましな程にね。君は木の棒一本で竜（ドラゴン）を倒せるほどの英雄かい？　そうじゃないだろう。君は冒険を始めたばかりの卵じゃないか。当たって砕ける前の……。英雄は最初から英雄として生まれてきたわけじゃない。そうだろ？」

「……」

ベルにも赤子の時代があった。その時すでに物凄い才能に恵まれてあらゆるモンスターを倒せるほどの強さを持っていたのか、と言われれば否だ。

単なるひ弱な人間（ヒューマン）に過ぎない。強くなる為の冒険者になったばかりだ。

「出来ない事を嘆くなら今頃冒険者なんていう危険な仕事をしようとする者なんか居ないさ。理想を持つのは構わないけれど高すぎる理想は単なる障害でしかない。君のやりたいことはなんだい、ベル君」

やりたいことは分からない。

英雄に憧れた少年は答えを持っていなかった。だから、神の質問に答えられない。

困っている人を助けたい、ではない。――ではなかった。
「……これからそれを見つけに行ってもいいでしょうか？」
「もちろんだよ」
優しく微笑みながらヘスティアはベルの頭を撫でた。
全知零能の神に出来る事は眷族を信じて応援することくらいだ。

†

日を改めて団長の許可を取り、大怪我したアスタのお見舞いに【エニュオ・ファミリア】の本拠に向かった。
集合住宅の様な威厳の彼らも感じない古臭い建物を前にし、懐かしさを覚える。
同じく零細【ファミリア】である【ミアハ・ファミリア】の本拠もかなり年季の入った建物であった。
活動資金の乏しい【ファミリア】は総じて家賃が少なく済むボロい建物に居を構えがちだ。ある意味では建物を見るだけで【ファミリア】のランクが分かる。
ベルは入り口を通り、階段を上る。門番が居らず、扉も朽ちかけているので声掛けか、中に入っていくしかない。
以前は神様だけだったが今回は階段の途中から眷族の女性が対応してくれた。
「あー、いらっしゃい。ようこそようこそ、我らの本拠へ」
愛想良く出迎えてくれたのは白銀の髪に褐色肌が印象的だった狼人のネーゼだった。
【エニュオ・ファミリア】の団員数は一一人。これはギルドに記された公式記録である。
ベルが出会ったのは四人。残りはまだ顔も名前も知らないし、教えてもらうには【ステイタス】を規定値に増やす必要があった。――というより他派閥の情報を根掘り葉掘り聞くのは申し訳ない、という気持ちが湧いて尋ねるのを断念しただけだ。
何しろ指導してくれたり助けてくれた相手だから。悪い印象を与えたくなかった。
外はボロいが中は階層を続けている為か、比較的綺麗である。これ

は最近補修したような目新しさだった。
神が居るのは二階。一階部分は半数が団員の部屋。それと風呂とトイレ。武器庫と備蓄用の倉庫。
団員達が話し合う広めの今に通されたベルは知らない顔ぶれに挨拶していく。
全員が居るわけではなく、神とネーゼを含めて六人。
（四人共知らない人だ）
アスタは自室で休んでいるので現在本拠（ホーム）に居る眷族は六人。
相手の事よりまずベルは挨拶した。あまり他所の派閥（ファミリア）に名前を教えるのはよくないと団長とアドバイザーから言われていたが――
「ご丁寧にどうも」
それぞれやはり、というかすぐに名乗らない。それでも二人はすぐ名前を言ってくれた。
まずアスタの容態を尋ねてみた。するとすぐ怪我を治して自己鍛錬に入っていると教えてくれた。
その後で彼女達の主神エニュオが挨拶してくる。
仮面を付けた女神。椅子に深く身を沈ませた格好でベルを見る。
胡桃色の長い髪の毛を持つ女神の声はとても柔らかい印象を受ける。
「態々（わざわざ）お見舞いに来るなんて、なんて殊勝な心掛けなのでしょう。男子の冒険者は勝気な方が多い印象を受けるのだけれど……」
「アスタさんとネーゼさんにお世話になったものですから」
「優しい心を持っているのね。……冒険者としては苦労するわよ。……もうしているか……」
温和な性格だとしてもエニュオは【超越存在（デウスデア）】である。言葉一つとってもベルの身体や心に深く突き刺さってくる。
それは見つめられるだけで心を見透かされ、考えを読まれてしまうようなもの。
前回会った時も言い知れない緊張を感じたが今もやはり、それは変わらなかった。
「……それにしてもブラックライノスに襲われたって聞いた時は……

本当に驚いたわ。よく無事だったわね」
「運が良かった、と色んな人に言われましたし、僕もそう思いました」
（私だったら……おしっこチビりそうって言ってしまいそう）
「ダンジョンでは何が起きるか分からない。……だとしても、あれは私も酷いと思ったわ。えっと……クラネル君」
「はい」
「うちの眷族（子供）達と仲良くしてあげてね。ヘスティアのところとはこれからも仲良くしたいし。……頑張ってね」
そう言いおいて主神は部屋から去った。
神様の姿が見えなくなると眷族である女性達が一歩前に進む。

†

探索と治安維持が主な活動である【エニュオ・ファミリア】は全員が第二級冒険者（レベル3とレベル4）。
見た目からは想像できない実力者揃いである。
団長アリーゼ・ローヴェル擁する【ファミリア】は正義を掲げていた。
基本的な説明を終えた後は女性陣による質問攻めだがネーゼが代表として止めていく。
「あまり質問攻めにすると向こうの団長（ボラン）が御冠（おかんむり）になる。程々に」
「……それもそうねー」
ネーゼはアスタを呼びに行ってすぐに連れて来た。かなり近いところに自室があった。
女性団員の間取りを聞くのは失礼かと思ったのでベルは大人しくしていたが、そもそもそういう所だと分かって来るのも失礼に当たるような気がした。
女性だけの【ファミリア】に男子が一人だけだから。
「はーい、クラネル君。私は元気ですよー」
そう言いながら微笑みながら挨拶してきたのはドワーフのアスタ。
まだ手足に包帯が巻かれているが快方に向かってるのは間違いないという。
屈強なモンスターに跳ね飛ばされたのに数日で元気な顔を見せる

ところから冒険者って凄いなと改めて思った。
【ロキ・ファミリア】と対峙していた時は人が変わったように険悪な表情と言葉だった彼女の変わり身に改めて驚かされる。
他の眷族も時と場合で表情が変わるのかも、と。それだけたくさんの修羅場を潜(くぐ)ってきた、ともいえる。
「ちょ～っと油断したけど、いずれ倒す相手だし、前哨戦としては充分かな」
「防備は大事だけど、あれは無いわー」
深層域のモンスターと聞いてベルならば今の彼女達のように笑い合えるのか。何人も犠牲者が出るほどの事件だったのに。
おそらくずっと気にしてふさぎ込むこともあり得た。
それを感じさせないのは経験がなせる業だ。
(皆さん凄いな)
「……それで、君はまた冒険する気がある？　あるなら同じ予定で潜りたいけど……」
と、ケガ人のアスタは言った。
これに対しベルは驚いたものの挑戦したいと述べた。
強くなる可能性があるのなら、努力すべきだ。その果てに強大なモンスターを倒せばいい。どの道、今の自分では成すすべがない。
いや、他の方法が思いつかない。

†

アスタの元気な顔を見て安心したベルはその後、眷族にもまれることなく【ヘスティア・ファミリア】の本拠(ホーム)である廃墟の教会に戻ることが出来た。
拘束されてしまう事も考えていたけれど、無理強いされる事も意地悪を言われる事も無かったのが意外だと思った。
噂に聞く【ファミリア】同士のやり取りは大体が喧嘩腰だった。
「お帰りなさいませ」
と、丁寧に出迎える高貴な妖精(エルフ)ヴェルゼッタ。いつもの薄着に目のやり場に困ってしまうけれど、こちらも可愛らしい笑顔だった。
本来、エルフは肌の露出を嫌う。今まで見かけたエルフの殆どが薄

着であった試しが無い。
彼女に薄着で平気なのかと聞けば平気ですよ、と即答される。
「私にとって大事なのは『手帳』だけですから。それ以外はどうでも良いのです」
その『手帳』は見たことがあるが勝手な持ち出しは厳禁だと真剣に言われた事がある。
普段温和なヴェルゼッタが真剣になるのは手帳絡みだけ、かもしれない。
中身に関して日記帳と大差が無いと教えてもらった。それでも彼女にとって命の次に大切なものだと何度も言われてしまった。
「手帳とおっぱい。どちらが大事かと言われれば手帳と言えるほどに」
「……」
深く聞いてはいけないような気がしたので話題を変えたくなってきた。
彼女のダンジョン攻略はベルにとって謎に包まれていたが他の【ファミリア】のエルフを伴って少しずつ挑戦している。
魔石などの稼ぎが少ないけれど他の仕事で色々な物資を調達してくる。
「クラネル君からすれば【ファミリア】の団員総手でダンジョンに潜った方がいいのでしょうね」
「普通は……そういうものだと思っていました」
「人には得手不得手があります。私の場合は外交……。たくさんの同胞との交流が主な仕事です。地下世界（ダンジョン）に興味はありません」
金髪碧眼の見目麗しいエルフは言った。
冒険者であるならばダンジョンに挑戦すべきだ、というのがベルの想像している世界だ。しかし彼女はそれに逆行するような存在であった。
それに対して非難するのか、と言われれば否だ。多くの【ファミリア】の全てが一様にダンジョンに挑戦しているわけではない。
（……いいえ、私もダンジョンに挑む理由があった。……だからこそ

何度か挑んできたのでしたね……）

ヴェルゼッタは英雄になる為に迷宮都市オラリオに来たわけではない。だが、時を経る毎に本来の目的が思い出せなくなっていった。

手帳に書かれている真の目的――それはもう過去の遺物。ヴェルゼッタの今は多くのエルフ達の笑顔を見守る事だ。そう自分に言い聞かせていた。

とても大切な事があった。それを成し遂げる為に命を賭して生き足掻いてきた。――そんな過去の醜い自分を手帳に封じ込めて。

†

長い説教を新人冒険者であるベルにしても仕方が無いし、冒険者としての心構えの教授は団長に任せている。

団員としていくつかの助言が出来れば満足である、と。

ヴェルゼッタは一歩引いた立ち位置を維持する。

「……ザングレーはいつも心配性なのですね。……確かに年端もいかぬエルフではありますが……」

と、壁に顔を向け、焦点の会わない瞳で何事かを呟いた。ただ、それは側に居るユーカリンの聴覚をもってしても聞き取れない――解読できない出鱈目な単語の羅列だった。

唐突に意識が飛ぶのは今に始まった事ではない。

（兎はザングレーというのか。三人の近衛兵の一人で……、ベルと性格が似ている？　言葉尻から……、頼りない一面があると見た）

何事も無かったかのように振舞いつつユーカリンはいつものように懐から紙とペンを取り出し、ヴェルゼッタの言葉を書いていく。

普段、暇そうにしている彼女はこうして仲間の事を気遣っていた。ちなみに書いた内容はその日の内に【ロキ・ファミリア】のエルフに届けられる。

ヴェルゼッタが所有する『手帳』の改定はリヴェリア・リヨス・アールヴの手によって行われる。

この時ばかりは【ファミリア】としてではなくエルフの同胞として、後見人として振舞う。

「……ベル君。君は黙ってダンジョンに向かいたまえ。高貴なエルフ

様は大事な瞑想状態に入った。……静かに退出するように」

「……え？　……はい」

手で追い払うようにユーカリンは指示した。

突如何事か呟き始めたことに驚きつつも言われた通り、自分の部屋に向かう。

【ヘスティア・ファミリア】に入って何度不思議な光景に立ち会っただろうか、とベルは不安を覚えた。

個人的な問題の場合、他人である自分が積極的にかかわる視覚があるのか迷うところ。団長も過度に関わらないし、興味本位であるならばやめた方がいいとさえ言ってくる。

（……僕に出来る事は【ステイタス】を伸ばす事……。確かにその通りなんだけど……）

仲間として活動したい気持ちが少しずつ強くなってきたベルにとって彼女達に本当の意味で仲間と認められたいと思った。

その為にはやはり強くなった方がいい。そう判断し、ダンジョンに向かう。

†

少し深い階層に挑戦した後だから三階層までは難なく攻略できるようになった。ここから先はモンスターの数が増えてくるので倒せるとしても油断はできない。

そんな彼の近くを多くの冒険者が通り過ぎる。

ダンジョンに潜る冒険者は膨大である。駆け出しも多い。そこかしこから威勢の良い声が木霊（こだま）する。

集団（パーティ）であったり単独（ソロ）であったり――

良い装備を持つ冒険者はさっさと下層に降りていく。彼らの多くは一〇階層より下で活動する事が多い。

（今日も人が多いな。重そうな装備で往復するのが大変そうに見えるけれど、彼らも寝泊まりするのかな？）

日帰りが多いベルにとってダンジョン内での寝泊まりはまだ一度しか経験が無い。

黙っていればモンスターが現れる。そんな中を眠るなんて危険以

外の何者でもない。だからこそパーティが必要になってくる。
ソロ活動の人はどうしているのか、ずっと疑問だった。様子を見させてください、とも言えないので。
（そういえばパーティってどうやったら作れるんだろう。やっぱり他の【ファミリア】に行って頼むのかな？）
【エニュオ・ファミリア】は団長と顔見知りだから一緒になってくれた印象がある。そうではない場合はどうやって頼むのか。後でアドバイザーに聞こうと思った。
多くのモンスターが蔓延るダンジョンにおいてベル単独踏破の難しさを思い知る。
その後、四階、五階と降りた。
（やっぱり一人で戦うには大変だ。……疲れが溜まってきた）
討伐に時間がかかれば次のモンスターが壁から出てきてしまう。それゆえに囲まれやすい。
無駄な攻撃をすればするほど焦ってくる。
ネーゼ達の言葉を借りれば魔石を諦めて砕くことに集中すべし、だ。
体内にある魔石の位置は概ね一緒だ。そこを狙えば一撃で灰に還す事が出来る。これは階層主と呼ばれる大型モンスターも同様である。
資金稼ぎか【ステイタス】向上か。
（……あっ、ヤバイ。武器がそろそろ限界だ）
調子に乗って戦っていたがギルドから貸与された武器が目に見えてボロボロになっていたことに気が付く。
もし、壊れても体術で倒せばいいのだが――先達の冒険者の意見は重要だと改めて思い知った。
その後、予定を切り上げて上層に向かう。回収できそうにない魔石はその場で踏み砕く。これは『強化種』を生ませない処置だ。
ブラックライノスの二の舞はさすがに御免だった。